Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

井上英語講義錄

東洋一の英語學校

Welcome!

昭和五年春學期

新入學生募集

萬物冬眠より醒る春、有爲青少年の英語準備は急務。英語は既に現代の常識、之れなくして成功は難し。英語獨學は易し。本校十餘萬校友が之を證明する。

ABCから專門程度迄

執筆者井上十吉先生多年英語普及の功績天聽に達し

銀杯御下賜

記念特典あり

英語は日々の力★英語は生涯の力★

IECS

◇口の動かし方は寫眞で。初學者もABCから樂々と

◇教室以上の名講義家庭教師以上の添削は本校の特色

五大附錄贈呈

◇三年程度よりは更に受驗講座添附。

◇檢定合格率最高。全國二百餘校の教授參考書に採用

◇學費一ヶ月一圓廿錢。毎月の懸賞奬學金の規定あり

校則見本進呈

ハガキで申込まれよ

東京・麹町・富士見町

井上通信英語學校

振替東京三〇二八八番



◎内容いよいよ
充實！完備！

速成 中學 講義

青少年諸君の爲に

遠藤博士が直接指導に依るこの講義録で
一ケ年撓まず勉強して御覧なさい

一年後の諸君には立派な學力がつきます!!!

讀み易く、覺え易いとの定評ある。この中學講義録の內容見本は！今スグに「キング」で見た見本入用とハガキで東京市神田區三崎町＝帝國中學會へ申込めば詳細なる內容見本を無代にて送呈します。目下種々特典もあり！入會の絶好期です。

合理的で
興味の深い

ペン字速成上達法

近頃では事實あらゆる方面でペンを使ふ方が多いのでペン字の練習はいよいよ急務となつてきたが。今評判の透寫式練習法とは最も合理的な新法にして短日月で日本字英字數字等すべてのペン字に熟達し得る通信教授である。詳細は今スグ「キング」で見たとハガキで東京市神田區三崎町ペン習字研究會へ申込めば說明見本無代にて送呈す。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

チー▷
▽無代進呈●●●
檢定試驗總覽つき
獨學成功案内

會長 前文部大臣 正三位 尾崎行雄
女學部監學 前愛國婦人會々長 從三位 下田歌子

◎一ケ年卒業 ◎月二回發行 ◎會費一ケ月五拾錢

▽此際の入會者へ大特典提供△


講義錄見本 則
—申込次第進呈す—
いつ入會しても講義錄は第一號から毎月順序よく發送する。

藍綬褒章拜受
創立廿八週年

東京駿河臺
大日本國民中學會
電話神田 一一一一番 一一一二番 一一一三番 振替東京四二〇〇番

天下一品
萬
キッコーマン醤油
日本一
万上
マンジョウ味淋
資本金三千萬圓
釀造高五十萬石
野田醤油株式會社





ワシントン

（世界史上の華繪巻　その十五）――裏面参照

藤島武二筆

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



25

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

痼疾の難症程キヽメの早い

ぜんそくと

百日せきの最良藥を
無料でお敎へ致します

私は永年ガンコな喘息で死ぬほど苦しみましてあらゆる藥は言ふ迄もなく危險な注射まで試みましたがなんの効もなく十餘年來勤めた警察署も病の爲に辭めなければならない樣な不幸な身になりましたが

或る先輩に天保年間の偉人で有名な高野長英先生の遺方になる妙藥を教はりましたので早速服藥した處其の日から息切れも止まりタンも樂になりさしもの難症も不思議に僅かの間にケロリとなほりました

あんまりよく効く藥なので同病の知人や子供の百日咳にも試しました處早いのは二三日これはと思ふ難症でも二十日前後で皆全快致しまして皆樣からお禮の言葉を澤山頂いて居ります。氣候不順の今日此頃私が惱んだ時を思出し此の病氣でお困りの方に全治の悦びをお分ちしたいので廣告を出したのです。同病でお苦しみの方はスグ容態書を手紙でお送り下さい私のなほつた妙藥や養生法を無料でお知らせ致します。

東京市外日暮里谷中本九九七

森本作市

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

痼疾の難症程キヽメの早い

ぜんそくと

百日せきの最良藥を

無料でお敎へ致します

私は永年ガンコな喘息で死ぬほど苦しみましてあらゆる藥は言ふ迄もなく危險な注射まで試みましたがなんの効もなく十餘年來勤めた會社も病の爲に辭めなければならない憐な不幸な身になりましたが

或る先輩に天保年間の偉人で有名な高野長英先生の遺方になる妙藥を敎はりましたので早速服藥した處其の日から息切れも止まりタンも樂になりさしもの難症も不思議に僅かの間にケロリとなほりました

あんまりよく効く藥なので同病の知人や子供の百日咳にも試しました處早いのは二三日これはと思ふ難症でも二十日前後で皆全快致しましたから皆様からお禮の言葉を澤山頂いて居ります。氣候不順の今日此頃私が惱んだ時を思出し此の病氣でお困りの方に全治の悦びをお分ちしたいので廣告を出したのです。同病でお苦しみの方はスグ容態書を手紙でお送り下さい私のなほつた妙藥や養生法を無料でお知らせ致します。

東京市外日暮里谷中本九九七

森本作市

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

小說 母



（松竹川田芳子孃の扮せる主人公朝子）

急遽三百八十版

驚くべし、この大賣行！

何處まで賣れる？全く底止する所を知らず

何處へ行つても本書の噂、大評判！

これ程好評を博せる小說日本に未だ曾てなし

本書は單なる小說ではない、鶴見先生が世界に誇るべき日本婦人への贈り物として、一字一句渾身の熱情を傾けた血涙の結晶！而も若く美しき未亡人朝子の生涯に托して現代人の行手を示す感激の大名著である。

清く美しき戀愛――濃い愛情――强き信念――涙ぐましき母性愛――全篇に感激みちあふれ

讀む者悉く感泣させられる

親は子の爲に、子は親の爲に、靑春の男女は近き將來の準備の爲に凡そ現代人たる者一人殘らず御一讀下さい。これこそ

良人教育、花嫁教育、愛兒教育の大國民讀本！

鶴見祐輔先生熱血熱涙の大名著！！

定價貳圓（四六判新型美裝 送料十二錢）　東京本鄉 大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

無學は男の恥

◇◇自宅實習僅か一ケ年で卒業が出來る

最高速度式

農業實習講義
商業實習講義

▲新知識を吸收して時代に遲れるな▲講師は專門の博士學士▲講義最も平易で親切▲學費一番低廉です

此際の入學者に限 **中學講義錄** 無代添附

詳細の內容見本つき 規則 農商別記入ハガキ申込次第 進呈

東京小石川表町六十七 國民實科大學院

◇無學は女の恥

お嫁に行つて赤い顏をせぬやう

裁縫料理禮儀作法を始め洗濯生花に至る迄何れも一流の大家が親切叮嚀に述べた本校講義錄を見れば、どんな無學の方でも女一通りの知識が得られます。ハガキで申込次第見本一冊無代進呈。

東京小石川表町六十七 大日本通信家政女學校



未來の菊池寛久米正雄出でよ

▼一躍文壇に名を成さんと欲する諸君は來れ!!▼其他文學研究者新聞雜誌記者著作家編輯員等文筆業は今後益々多望なり

日本文學講義錄

▼入學案內書は葉書で申込次第即時送呈
▼東京市小石川表町七〇 日本文學通信學校

今や鐵道界は諸君の來るを待ちて

生存競爭激甚な社會に於て青少年自活の途は唯一鐵道界あるのみ！鐵道界は立身成功迅速で又不景氣なく就職は更になし

鉄道員養成講義

▼入學案內書はハガキで御申込次第進呈
▼東京市小石川表町七〇 帝國鐵道敎育會

青年よいつまでも親の脛を嚙らず獨立獨歩せよ

人民保護の榮職で社會の尊敬を受け警部警視と昇進し加俸恩給の特典あり且努力次第でドシ〳〵出世の出來る警官になれ

巡査養成講義錄

▼巡査と記入ハガキ御申込次第見本進呈
▼東京市小石川表町七〇 國民實科大學院

惡筆と惡文は一生を棒に振る

能筆能文は一生の德だ、タツタ一本の手紙で易々と就職し僅かに一回の文通で出世の道が開けた例は澤山あるではないか

手紙習字講義

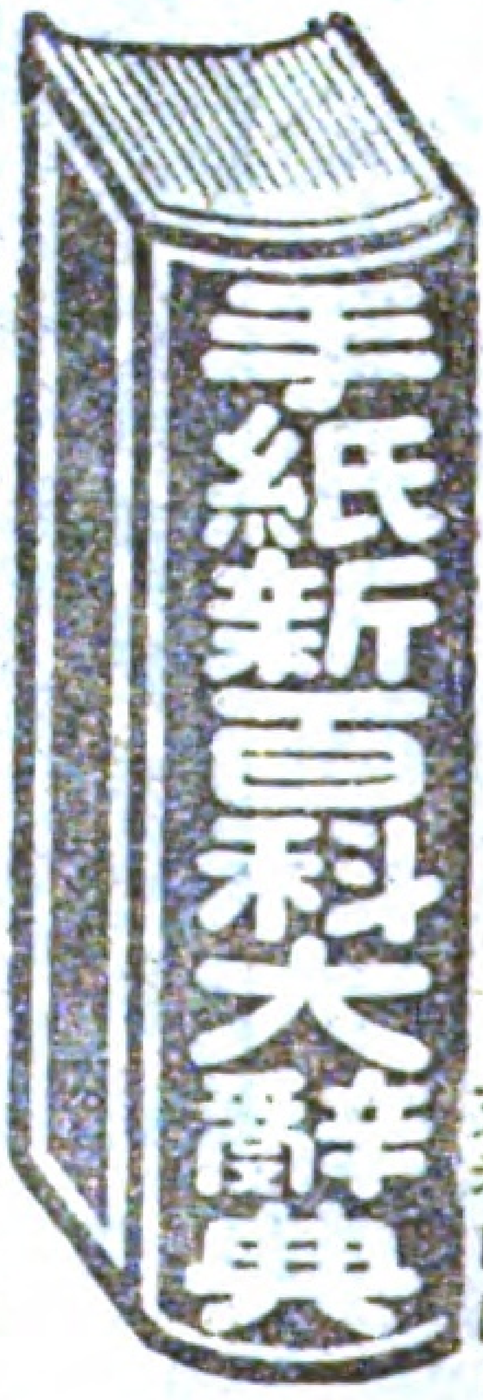
本會獨特の方法で **ペン字・毛筆・手紙文** 上達保證

▼手紙と記入ハガキで申込次第見本進呈
▼東京市小石川表町七〇 國民實科大學院

孫子の代までも每日使へる便利重寶な信用ある字引 **三冊** 揃ひ只の **一圓** に大割引

◇◇紙數合計 一千四百頁

左の模範的大辭典三冊定價 **五圓** の處實物宣傳の爲三冊一時に御注文者にはタヾの一圓に大割引す



商用文◆公用文◆儀式交際◆日用文◆ハガキ文◆案內文◆注文文◆催促文◆慰問文◆弔慶文を始め凡そ手紙百般に亙る事細大漏さず掲載すればどんな惡文家も必ず上達保證の大辭典

◆他でまねの出來ない新式考案編輯で◆見◆口語文◆候文◆

新手紙研究會編
縱四寸八分横三寸八分
總紙數三百八十六頁
定價金二圓廿



みよいわかりよいのが大特長であるから手紙や文章を書くときチヨツとみればどんな難しい字でも忘れた字でも忽ち字と意味が同時に分り一を引いて百を知り百を知つて活用無限、實に便利重寶の大辭典なり

◆之までのいろは字引よりも、ひきよい

常用漢字研究會編
縱四寸八分横三寸八分
總紙數三百十二頁
定價金一圓五十錢



ねば新聞や雜誌を讀んでも演說を聞いても何がナンだかさつぱり分らぬ本書は日常のあらゆる新語をいろは引でひけるやうにし一々解釋をしてあるから誰にも聞かずどんな新らしい言葉でもスグ分る良書なり

◆近頃流行の新熟語外來語流行語を知ら

新語研究會編
縱四寸八分横三寸八分
總紙數四百二十頁
定價金一圓五十錢

發賣記念の爲 **記憶字典** (二百九十頁)(美本一冊宛) 進呈 後では忘れる今スグハガキで申込め

●此の三辭典は至急投賣處分品に就き內容見本等は差上げられません
●當店を信用の上御申込下さい御氣に召さぬ場合は何時にても返金す

前金送料十二錢◆東京市小石川區表町六七
代金引換卅錢增◆振替東京六六八〇〇番

進文館本店

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

皮膚病退治 テーム水

左の三大特長はテーム水のみが有する最大の誇です

◉殺菌作用　皮膚病の菌蟲を殺滅し痛さ、痒さ氣持悪さを速かに去る。

◉滑澤作用　皮膚を滑か艶やかにアレを防いでキメを細やかにす。

◉收斂作用　患部を健康組織に復活して早くヨクなる。

主効

◉たむし◉いんきん◉水蟲◉ひぜん◉くさ◉おでき◉ただれ◉かゆがり◉吹出物◉しらくも◉はたけ◉なまづ◉うろこ◉汗疹◉がんがさ◉にきび◉そばかす◉とびひ◉唇 肛門のただれ◉藥、漆のカブレ◉ひび、しもやけ、肌のアレ◉あせも等皮膚病一切に用ゐて▲シミズ▲いたまず▲内訌せず▲つけて汚れず▲目に立たず▲痛さ痒さを去り▲ただれを乾かして早くヨクなる。全國到る處の藥店にて販賣す。

テーム水定價　卅錢　五十錢　一圓　二圓　送料内地六錢



毛はへ藥フミナイン

子宮卵巣に故障があつて、不姙症を起せば、子供の宿らないと同じに、毛母を營養づける、毛根血管に故障があると生えるべき毛髪も發育しないで、毛母の不姙症と云ふ事になります。吾國皮膚科の泰斗として知られた、田中醫學博士は早くも此點に着眼せられ、多年苦心研究の結果成功せられたのが現今毛生藥として好評湧くが如き**フミナイン**であります。**フミナイン**は殺菌作用と興奮作用と榮養作用とを兼ね與へて奇妙に毛をはやし脱け毛を止めます禿頭病◉若禿◉薄毛◉脱毛◉腫物禿◉かもじ禿◉眉毛薄き◉生え際悪しき◉男女あるべき所に毛なき◉其他毛の不足不恰好の人は後と云はず今スグお用ゐあれ。全國藥店にあり。（説明書申越次第呈上）

藥價　五十錢　九十錢　一圓六十錢　三圓　五圓五十錢　送料内地十二錢

發賣元　東京市芝區田村町一八　**東京藥院**　大阪市赤十字病院前

漫彫＝畠の囁き

田中比左良 作



人蔘の女房お大根

『ねえお前さん、この不景氣に醉つ拂つてばかしゐちやしやうがないじやないの、子供に着物一つ着せられない癖に、お隣りの牛蒡さんごらん眞黒になつて稼いでるじやないの』

人蔘

ウヘ・・・・心配すんねえ、不景氣な時にや一杯引掛けてカラ景氣でも付けなくちややり切れねえや、近頃人間社會も不景氣と見えて水みたいなコヤシばかりよこしてロクに醉ばらひも出來やしねえ』

牛蒡の細君お蕪

『ねえ貴郎、そんなにせつせと働くばかりが愛の表示じやないことよ、たまにはあたしの斷髪ぶりでも批評して下さらなくちやホームが面白くないじやありませんの』

文明は空へ

文明が進むにつれ人間は地上を征服し、地下を征服し、それでも足らず空まで征服して行く。何でも世界一が好きな米國に、又々六十七階高さ八百十三尺のクライスラー・＊



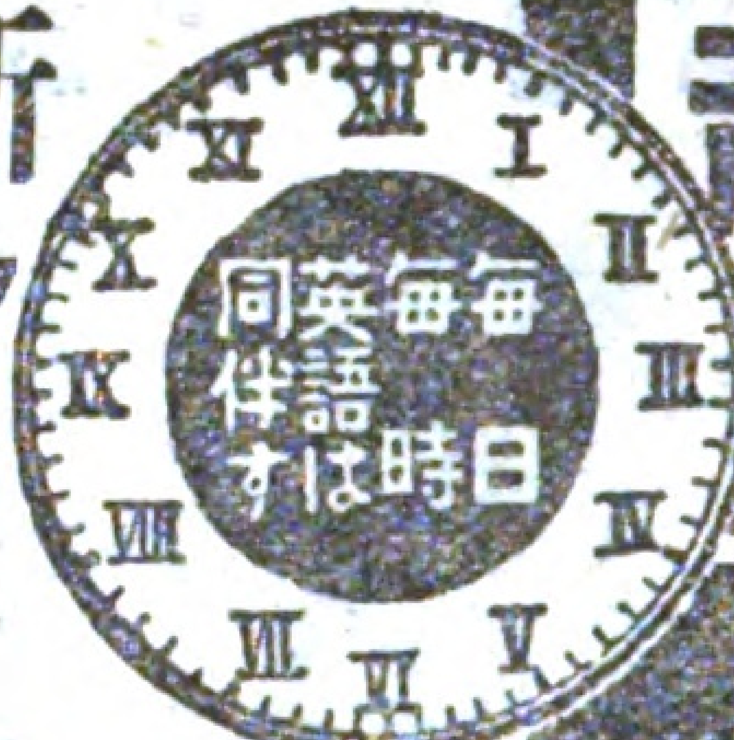
＊ビルデングといふトンデモない摩天樓が出來た（上圖右方）。場所は紐育のレクシントン大通り。左方に見ゆるチャニン・ビルデングも有名な高い建物であるが、斷然これを凌駕してゐる。

下の寫眞はクライスラー・ビルの頂上からチャニン・ビルを見下した壯觀！街路には自動車が蟲のやうに蠢動してゐる。



研究社

英語通信講座



◎キングといふも英語―モダンといふも英語、英語は常識です

◎新聞雜誌程度の英語が分らなくては、現代人の資格は？？？

◎併し遲くはない、本講座でａｂｃの讀方書方から學び給へ！

WELCOME!

新會員募集

今日からでも大丈夫

覺えさせずに措かぬ熱意と完全なる設備とで
貴下を必ず十五ケ月で英語全科卒業の實力に
而も每日二時間で充分！豫備知識一切無用！

◎ラヂオの岡倉先生初め獨學に理解深き英學諸大家の平易懇切な講義

◎學友拾萬、整然たる日課表により勉強、文檢專檢高檢他合格者續出

◎別冊五大附錄贈呈・學資全免懸賞・すぐ內容見本（立案內附）を御申込あれ

東京市麴町區富士見町六丁目

研究社英語通信學部

振替東京三〇八五番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ムッソリーニの獅子吼

世界的偉傑の炬の如き大演說集

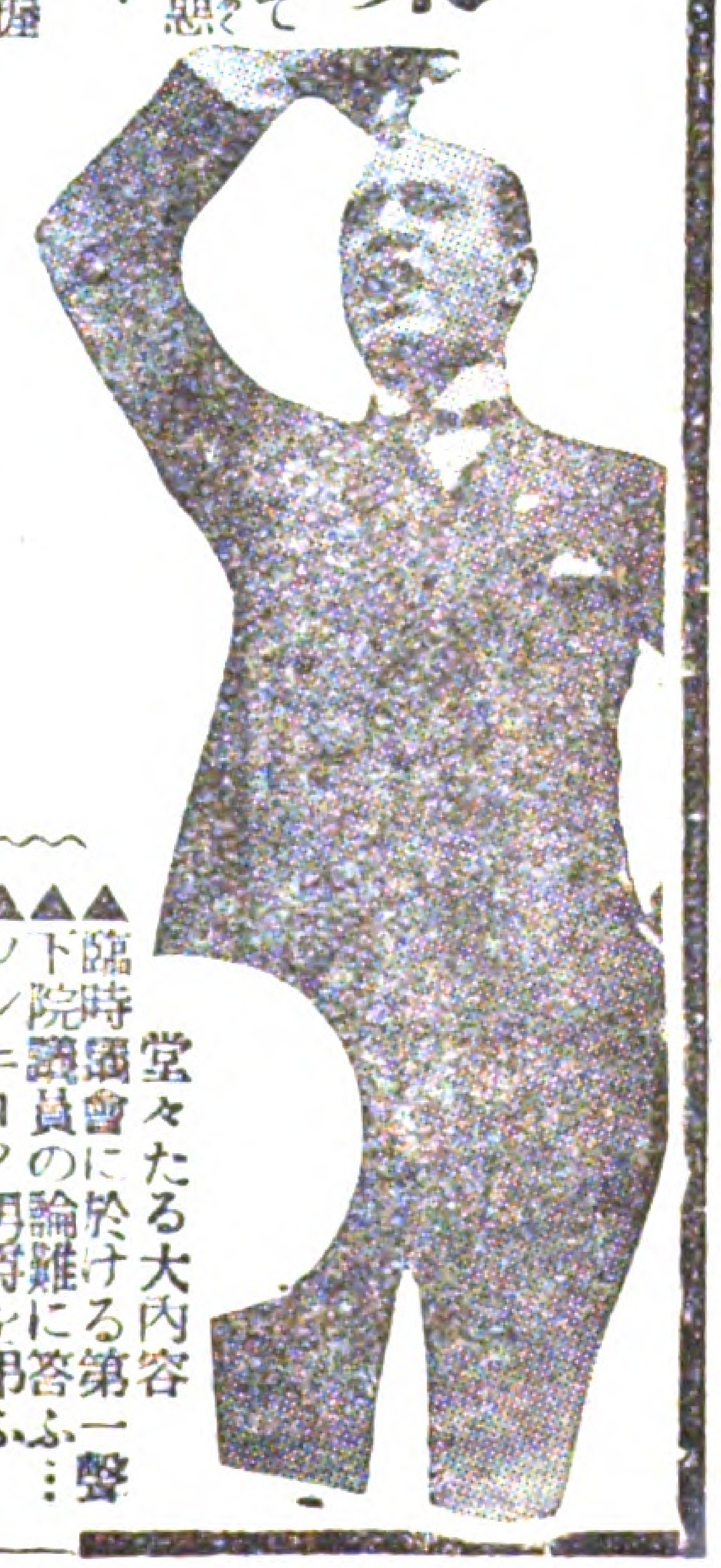
世界大戰後、憂國の同志を糾合して奮然蹶起し、財政窮乏、思想極度に惡化して將に亡びんとする祖國を救ひ、更に少壯三十九の身を以て政權を掌握全世界に熱血宰相の名を謳はれたムッソリニの名論卓說

憂國の赤誠全卷に溢れ

噴火山的熱辯肺腑を衝く！

見よ！數萬の民衆を前に聲涙共に下る革命演說、反對黨を睥睨して傍若無人の大壯語或は戰死者の靈を弔ふ追懷の辭、或は勞働者に、廢兵に、或は學生に諄々と祖國復興の大理想を說く、

眞に懦夫をも起たしむ不朽の大文字！



下位春吉先生譯



譯者下位春吉先生は…

滯伊實に十有餘年、伊太利を理解する點に於て、我國の第一人者である。多年ムッソリニと親交あり、歐洲大戰中は伊國決死隊に投じて活躍、文筆家としても既に定評あり、本書の譯文も亦流暢快明鐵腕宰相の眞骨頂躍如たり。

青年學生、軍人教育家、政治家は見よ

大好評 重版又重版！

（四六判・總布裝・箱入美本）定價壹圓八十錢 送料十二錢

東京市本郷（振替東京三九三〇）
大日本雄辯會講談社

堂々たる大內容

- ▲臨時國會に於ける第一聲
- ▲下院議員の論難に答ふ…
- ▲ソンニーノ男爵を弔ふ…
- ▲上院議員の論難に答ふ
- ▲墺國首相サイペルに答ふ
- ▲伊國の農民に囑す…
- ▲「鐵工所」の職工に…
- ▲ワシントン條約の僞を笑ふ
- ▲軍功勳章黄金章の勇士に
- ▲陸軍省印刷局の職工に
- ▲ルール問題について
- ▲マルゲリータ條約に就て
- ▲イタリアの外交方針
- ▲フアッショ勞働團體に…
- ▲財政恢復のため…
- ▲世界に於ける伊國の發展
- ▲盲廢兵に……
- ▲廢兵諸君に……
- ▲獨逸大統領ヘルドに答ふ
- ▲獨逸ス外相に答ふ
- ▲昇天の演說…
- ▲「一麥の戰爭」…
- ▲ヂエノバ港內勞働者に…
- ▲ローマに參集せる山岳兵に…
- ▲ローマに參集せる大學生に…
- ▲ナポリ市に於ける演說…
- ▲クレモーナ市に於ける演說…
- ▲ウヂネ市に於ける演說…

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ドクトル　高木中麿先生藥效御證明並に顧問

月やく

おろし
專門藥

滯りて御心配の方。他藥を用ひても效なきお方は一日も早く私方の秘藥で御安心下さい。キット通經の御滿足を得て戴きます。三錢切手封入御手紙下さい。詳しくお知らせします。

大阪市南區高津町三番丁一〇　和田山たつゑ

どもり

どもりは立身出世の妨げです。どもりでお困りの方は三錢切手封入御申し込み下さい。藥をのまずに自宅で人知れず治る方法をお知らせします。

東京市小石川區丸山町六番地
東京雄辯指導會
電話大塚(86)一八六五番
振替東京三八一二四番

御申込の際はお所お名前を楷書で詳しく御書き下さい

▽高等靈學（說明書御請求は必らず雜誌名御記入の上御申込みを乞ふ）

見本進呈

心身鍛練 交靈感應 氣合術 通信講習

附、古往今來百般靈術悉く詳解

◎心身鍛練活殺自在、判斷記憶斷行力養成法、無病長壽法、靈動術、大本教神降しの眞法、一呼萬病救治法、金剛力不死身術、銅針術、鐵火術、不動金縛り法、刀の刄渡り法、火渡り法、護身白刄取り法を始めあらゆる百般の靈術を通信教授す。希望者には御申越次第說明書進呈す。

東京市京橋電車交叉點際（日活前）
天玄洞本院

無代進呈

無努力簡易禁煙法

煙草さへ廢めれば胃腸は强健、體重が二三貫目も增し不眠症神經衰弱等はケロリと治るが、仲々煙草は廢め難いものである。然るに今回東京市京橋區常盤町三、グランド社では無努力簡易の禁煙法を發見して無料で敎へるから希望者は雜誌名記入同社宛て申込むがよい。

無代 進呈 ワキガ藥

今回「東京市京橋區常盤町グランド社」で新發見したワキガ救治藥は如何なる頑固のワキガをも速座に救治せしめます。論より證據には雜誌名記入の上申込み次第右の救治藥を無代で送呈します。



ウテナ

色白く美しく

陽春の輝き『ウテナ化粧料』！

專賣特許

色の黒い方…赤黒い方…蒼黒い方…垢ぬけせぬ方…ニキビ吹出物等のでき易い方…アブラ顔アレ性の方…小皺を除きたい方…すべて色白くない方は急いで『ウテナ』を愛用下さい。

東京本郷二丁目
ウテナ本舗
久保政吉商店

冬、アレたお肌の手入には、色白くキメをこまかにする『ウテナ』を……
春先のニキビ吹出物を防ぐには、美しく肌を滑らかにする『ウテナ』を……

『ウテナクリーム』は、無脂肪のべたつかない雪印と、脂肪中性のアレ止め用淡化粧用、マッサージ用月印と、脂肪性の濃化粧用、白粉落し用の花印と三種類が理想的に揃つて、香氣床しく、内容豐富、舶來品に優る優秀國產クリームとして素晴しい評判で愛用されてをります。

『ウテナ』定價一圓、二圓、三圓――『ウテナクリーム』雪印六十錢、月印七十錢
花印一圓――『ウテナ白粉』各色理想的に取揃へ近々發賣――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

升の裁判

……裏面の説明を御覧下さい……



山田敬中筆

キング教訓畫譜（その三）

領主と八兵衛

成瀬隼人正は尾張犬山の領主となり、正しい政道を行つたので、領民は皆歸服した。此に米屋八兵衛といふ、此地切つての富豪があつたが、一日隼人正の許に來り、訴へ申すやう、

『まことに濟まぬことではございますが、私、親の時分から二つの升を使ひまして、買ふ時は大きな升、賣る時は小さな升と、諸人の眼を欺り、斯くて一廉の財を作りました。此度の御政道正しきに依り、自ら恥ぢ恐れまして、此段自訴仕り、白狀致します。あはれ願くは御裁許に預りたう存じます。』

と申上げた。

隼人正之を聞いて、しばし感嘆してゐたが、

『親からの無道を申出で、非を改めることにてあれば、罪は免じて遣はす。其代り當年より七年の間、又々穀類に二升を遣ひ、出す時には多く、取る時には少く致せ。郡外に呉服諸品類も商賣致し、利益を薄く仕れ。』

と、沙汰した。八兵衛は固より富めるものなれば、喜ぶこと大方ならず、

『有難う存じます。承知仕りました。』

と、領掌して、買ふ時には小さき升、賣る時には大きな升を用ひたので、人々此店に群集し、其評判隱れなく、他領にまで聞えた。呉服諸品も格安であるので、店は大繁昌にて益々富裕となつた。

文學博士　笹川臨風

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ハーモニカなら……

サンキューに限る！

サンキューハーモニカは松原千加士先生の創案監製されたトンボ工場空前の力作で新鳴装置のハーモニカとして第一番満點の品であります。先づサンキューを

廿穴 複音 一、六〇 重音 一、七〇

廿一穴 複音 一、八〇 重音 二、〇〇

更生の KKKハーモニカ現る！

トンボ工場はハーモニカ生産の權威今度改良された…………

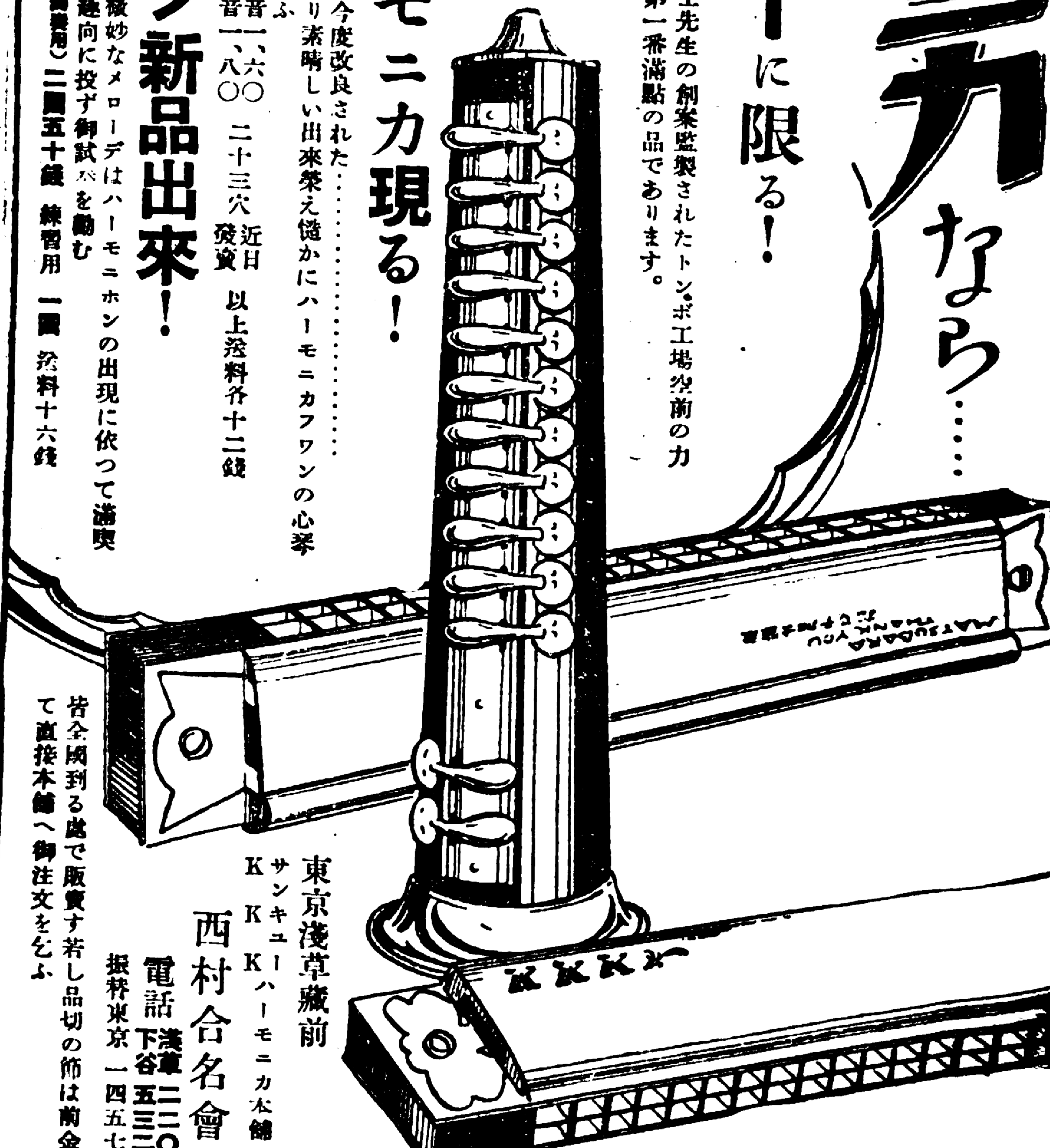
KKKハーモニカは更らに堅牢となり素晴しい出來榮え僅かにハーモニカフワンの心琴を彈つものと信じます實物一見を乞ふ

二十穴 複音一、五〇 重音一、六〇　二十一穴 複音一、六〇 重音一、八〇　二十三穴 近日發賣　以上送料各十二錢

ハーモニホン新品出來！

ハーモニカとクラリネットを併せた微妙なメローデはハーモニホンの出現に依つて滿喫する事ができます必ず音樂愛好者の趣向に投ず御試※を勸む

一號（[illegible]）三圓五十錢　五號（[illegible]）二圓五十錢　練習用 一圓　送料十六錢



サンキューもKKKも從來品と異るトンボ工場の優秀品であります

東京淺草藏前
サンキューKKKハーモニカ本舖
西村合名會社
電話 淺草二二〇五番 下谷五三二八番
振替東京 一四五七五番

皆全國到る處で販賣す若し品切の節は前金添へて直接本舖へ御注文を乞ふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大谷紝子夫人序文

山中峯太郎先生著

九條武子夫人

四六判羽二重表装函入極美本
口繪優麗なる夫人の大寫眞四枚、挿繪
裝幀者 山川秀峰畫伯苦心の傑作 十三枚入

本書出でて僅に旬日感激讃嘆の聲四方より起り

夜來ればもの丶理みな忘れひたふる君を戀ふとつげまし



重版又重版

驚くべき大賣行！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

見よ！一代の麗人、宛ら生けるが如し

九條武子夫人の一生は美しき詩であつた。涙もて綴れる小説であつた。玉の如き容姿、類ひ稀なる才藻、深く尊きその信仰、淸らかに澄めるその心境、氣高く華かに——又惱ましく、悲しくも雄々しかりし四十二年の全生涯がマザ〳〵と描かれてゐる。

全巻愛と感激！眞に是れ婦德の化身！



武子夫人令兄光明師裏方
大谷紝子夫人
は一讀追憶の涙新たに、熱烈なる推奬序文を寄せらる。

賢く、正しく、淑かに、菩薩の如き慈愛、絶世の才色、それ等數々の婦德を身一つに備へた武子夫人の、京都錦華殿に於ける繪の如き生立より、九條男爵家に嫁いでの主婦ぶり、脊の君と別れて孤獨十年、流人の如き深刻な苦惱、有髪の尼としての信仰精進、或は街頭の健氣なる奉仕生活から、天下哀惜の中に淨土に歸るまで、その間夫人の戀愛觀、結婚觀、人生觀等もそのまゝに描かれ、眞に感激感銘、襟を正し熱涙に咽ばずには讀み得ません。

婦人は日本婦人としての進むべき道を知り
男子は理想的な日本婦人を見る事が出來る

惱める人には救ひの光、迷へる人には導きの手、淋しき人には慰めの泉——何人もスグ御一讀下さい！

◎定價金貳圓（送料十二錢）全國信用ある書店にあり

◆東京本郷區駒込坂下町　大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

通信教授

音樂講義錄



注意　偽物

ハガキにて申込次第

各科規則書進呈

實に輕く……よく鳴る

ハーモニカ出現!!

本會專賣の

ハーモニカ スヰートホーム

見本呈進

家庭印 第一號 二圓五十錢

特價提供 貳圓 送料十八錢

通信教授 音樂講義錄

- 大好評百五十版 ヴァイオリン科
- 大好評八十三版 マンドリン科
- 大好評五十五版 ハーモニカ科
- 大好評百四十八版 尺八科
- 大好評九十一版 琴曲科
- 大好評三十八版 三味線科

專賣特許

賜天覽台覽

秋月作尺八、朝日ヴァイオリン、琴譜本、複音大正琴

特長

一、此のハーモニカにて吹けば一日にて唱歌や簡單な流行唄等は何人にでも吹ける樣に新發明の獨習方法がしてあります。

新案特許願濟（形式の如何に關せず模造假造を嚴禁す）

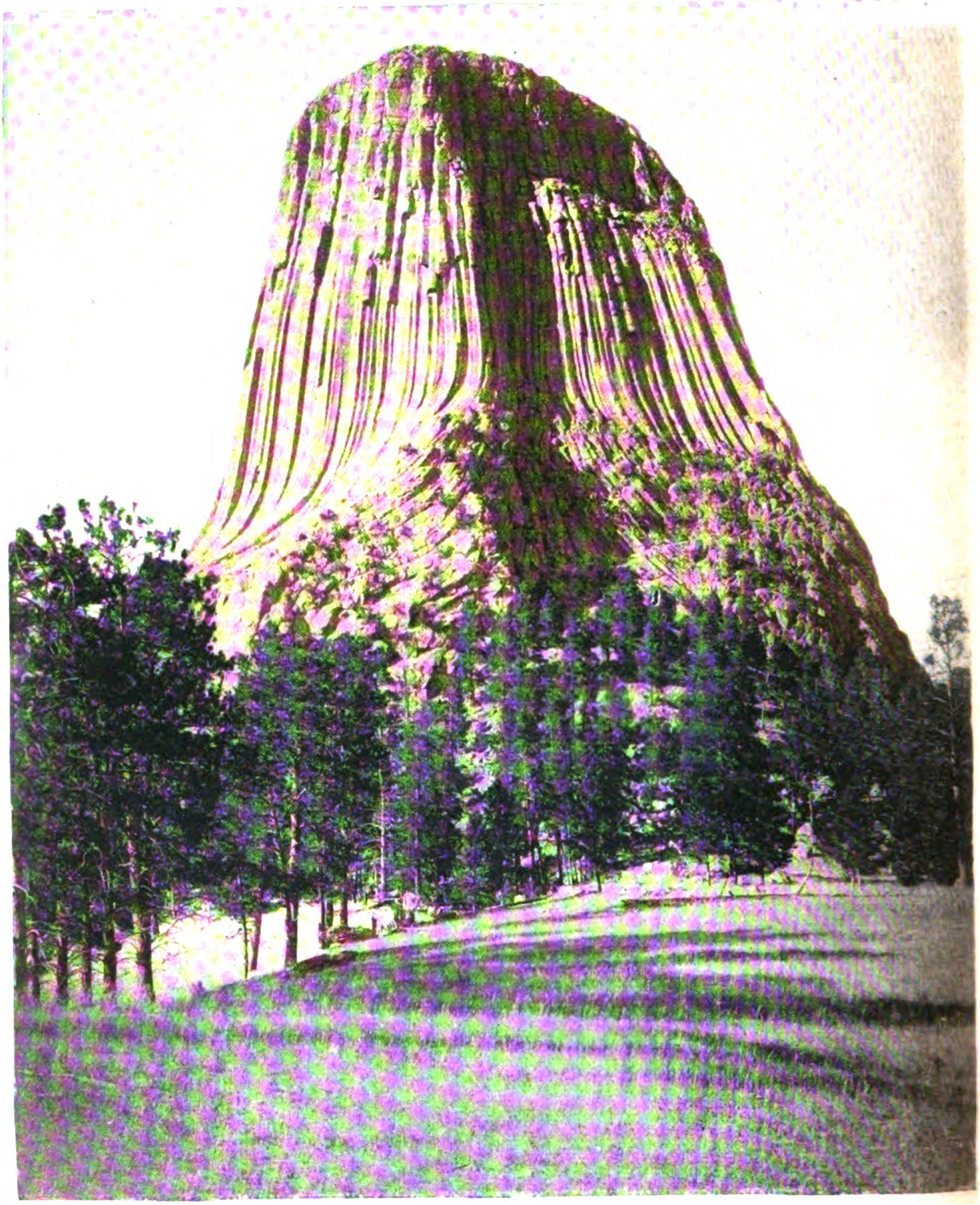
二、極めて丈夫です、されば永久責任付です、若しハーモニカがこはれた場合には無料修繕致します（但し送料二十一錢送金の事）

三、此ハーモニカは本會の專賣品なれば一般の店にはありません、又名稱スヰートホームは日本に只一つ特許されたる登錄商標ですから何人も之を用ふる事が出來ません。

○音樂が通信教授などで出來るものかと云ふ人あらばそれは此の本會專賣の巧妙なる方法を知らぬからであります。即ち本會講義錄による時は上記各科希望の樂器を居ながらにして直接教師に就て學ぶより、ヨリ以上の效果と便利が多數あります。されば三ケ月を出ずして人の前で奏せる位にキツトなれます。論より證據ハガキにて上記各科の内希望の科目を明記して御申込次第くはしき規則書を進呈します。

發行所　東京神田區須田町二番地　振替東京二七八〇〇番　**大日本家庭音樂會**　東京支部

惡魔の塔



『何だらう？あれは』

『隨分怪奇的だね』

米國バーリントン附近をすぎる者は、誰しもこの異形の山？に好奇の眼を放つ。

鋭い刄物で削つたやうな岩石の柱が、幾千となく相集まり、宛然、喇嘛の大宮殿を偲ばせてゐる。聞けばその名も「惡魔の塔」であるとか。

惡戯なのは造物主である。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

婦人服の今昔

これは昔から今迄の婦人服の變遷です。毛皮を着たり（石器時代）、鬘を被つたり（十六世紀）、又は輪入りのスカートをつけたり（十八世紀）して今日に及んでゐます。ところが右端と左端を比べて下さい。皮肉な事に今の服裝はイヴの原始時代そつくりです。流石のモダンガールもこれ以上は裸になれないと見えて流行に行詰まつた揚句、今度は(2)のやうな長目のスカートがはやり出しました。これとても(3)の百年も前に逆戻りの感がいたします。



1


3


2

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

顧問
子爵 三島章道閣下
海軍少將 小山武閣下

速成 速記 講座

就職の最高武器と能率增進

即刻學べ!! 能率時代の實力發揮に

摑め!! 生活安定と出世の爲に速記術

▼先づハガキで御申越あれ詳細說明書無代進呈す▲

立身も成功も合理的で最も早いことが第一の條件である。速記術は現代社會に活動する人々にとり完全に自己の才能と實力を發揮するに是非とも知らねばならぬ成功の近道であり且又常識である。處世上必須の武器であり且つ近代的職業として最高のものである。速記の可能者は調法で何時も引張り凧で同僚先輩の羨望の的である。本講座こそは從來の獨修書や教授法と全然異り、最も新式な獨創的教授法であるから此新講座に就て學べば小學校卒業程度の學力さへあれば、誰でも樂に或は學業の餘暇、仕事の合間に練習して僅か三ケ月で完全に獨修が出來、早速役立たせるに十二分の實力がつく。(會費一ケ月一圓卅錢、三ケ月完了三圓)

東京市麴町區三番町八三
日本速記學會
振替東京七七九七五番



エスペラントの創始者 ザメンホフ博士

覺よ!國民生活の無駄を省き世界人類の爲にエス語を學べ

世界共通語

エスペラント講座 (內容見本無代進呈)

エスペラント時代來る

學ぶは今!エスペラントは日本人が世界的に活躍する必須絕對無二の世界共通語である。然もエス語は日本人にとり總ゆる語學の中で最も簡單に修得出來る理想的世界語で、全然外國語の素養なき人も獨得の本講座に依れば初歩から三ケ月で容易に實用化し得る。我國エス語界の最良獨習機關たる本講座の「內容見本」東京市麴町一口坂、**大日本エスペラント會**宛にハガキで申込めば無代でスグ送る

大壯觀！大偉觀！

日本一流の大家花形悉く集る

面白い！實に面白い！飛抜けて面白い！

『講談倶樂部』三月號

小說讀むなら講談倶樂部――特に三月號はスバラシイ出來榮えです。左記日本一流の大家花形の大傑作を初め、尚特選讀物、大畫報等頗る豐富、ゼヒ御覽下さい！

◎快俠鈴木新內（時代小說）……村上浪六
◎死境に燃えた愛（純愛小說）……野村愛正
◎珊瑚重太郎（大衆小說）……白井喬二

◎お洒落狂女（時代小說）……本田美禪
◎尼子十勇士（痛快講談）……一龍齋貞山
◎命がけの婚禮（烈婦物語）……大倉桃郎

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

◎火の翼（家庭小説）……加藤武雄
◎蜘蛛男（探偵小説）……江戸川亂歩
◎處女爪占師（大衆小説）……吉川英治
◎王冠（戀愛小説）……中村武羅夫
◎かげらふ斬（劍俠小説）……大佛次郎
◎負けない男（諧謔小説）……佐々木邦

◎義賊報恩の涙（人情講談）……中井樂翁
◎少女誘拐慘殺事件（探偵實話）……松本泰
◎嫁違ひ（滑稽落語）……三遊亭圓馬
◎法廷に輝く恩愛（人情美談）……渡邊默禪
◎金剛丸事件（軍國美談）……陸軍中將星野金吾
◎熱血兒の結婚（出世美談）……朝名輝

昭和美人麗人列傳（特輯讀物）

各方面で噂の高い美人麗人の物語——二百萬圓の持參金鈴木書記官長夫人…◆天才的少女舞踊家尾上菊子孃…◆明眸の歌人今井邦子さん…◆金解禁の花形津島財務官夫人…◆英國仕込のモダン娘小林美彌子孃等々、澤山

右 鈴木書記官長夫人
左 加藤海軍大將





現代出世評判男列傳（特輯讀物）

…海軍の偉材加藤寛治大將、政界の花形中野正剛、新聞界の巨人下村海南、外當代評判男の出世物語澤山

右の外讀物頗る豐富！

大値下げ五十錢（送料三錢）

◎東京本郷 大日本雄辯會講談社發行（振替東京二九三〇）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

うらゝか

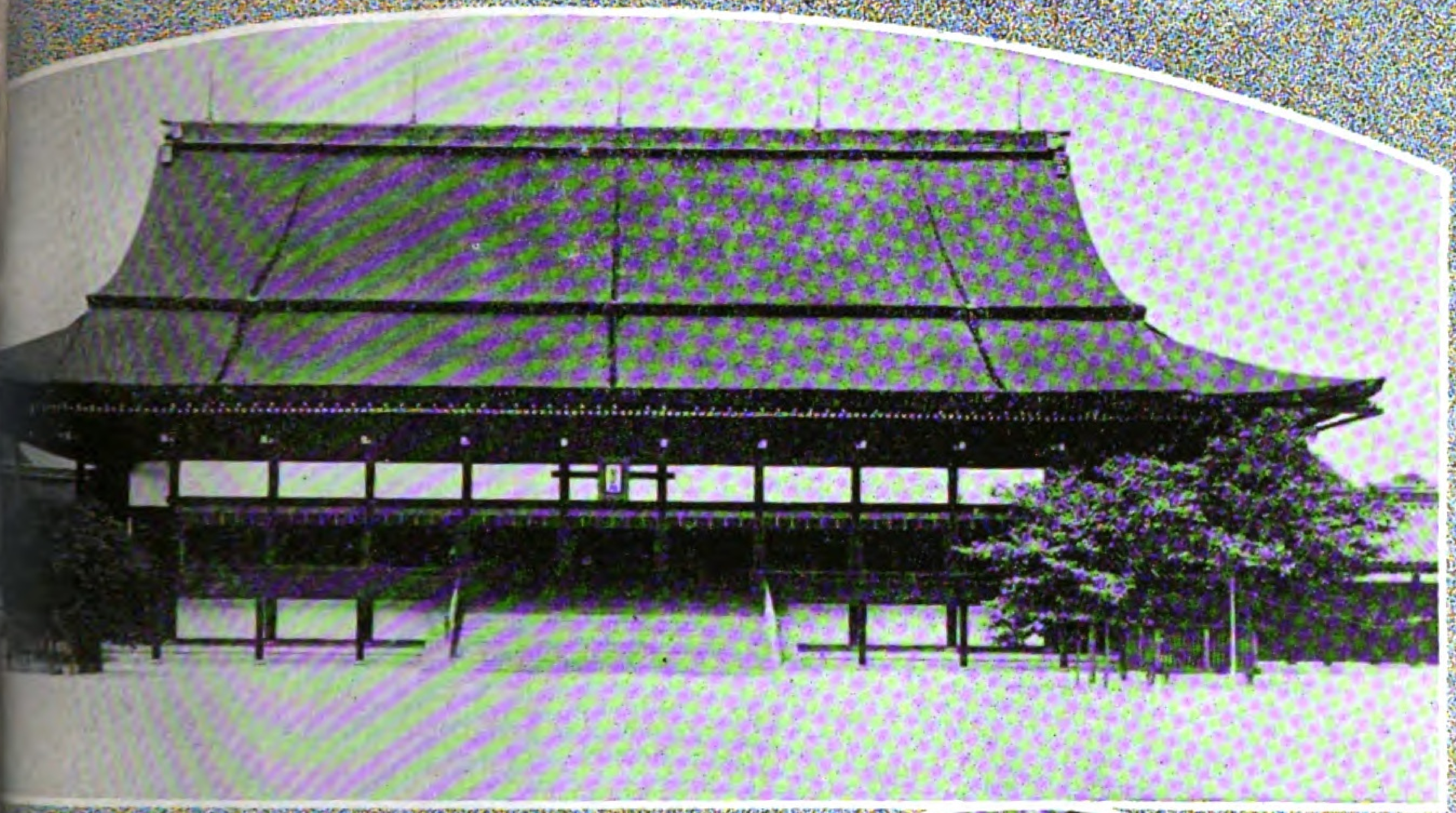


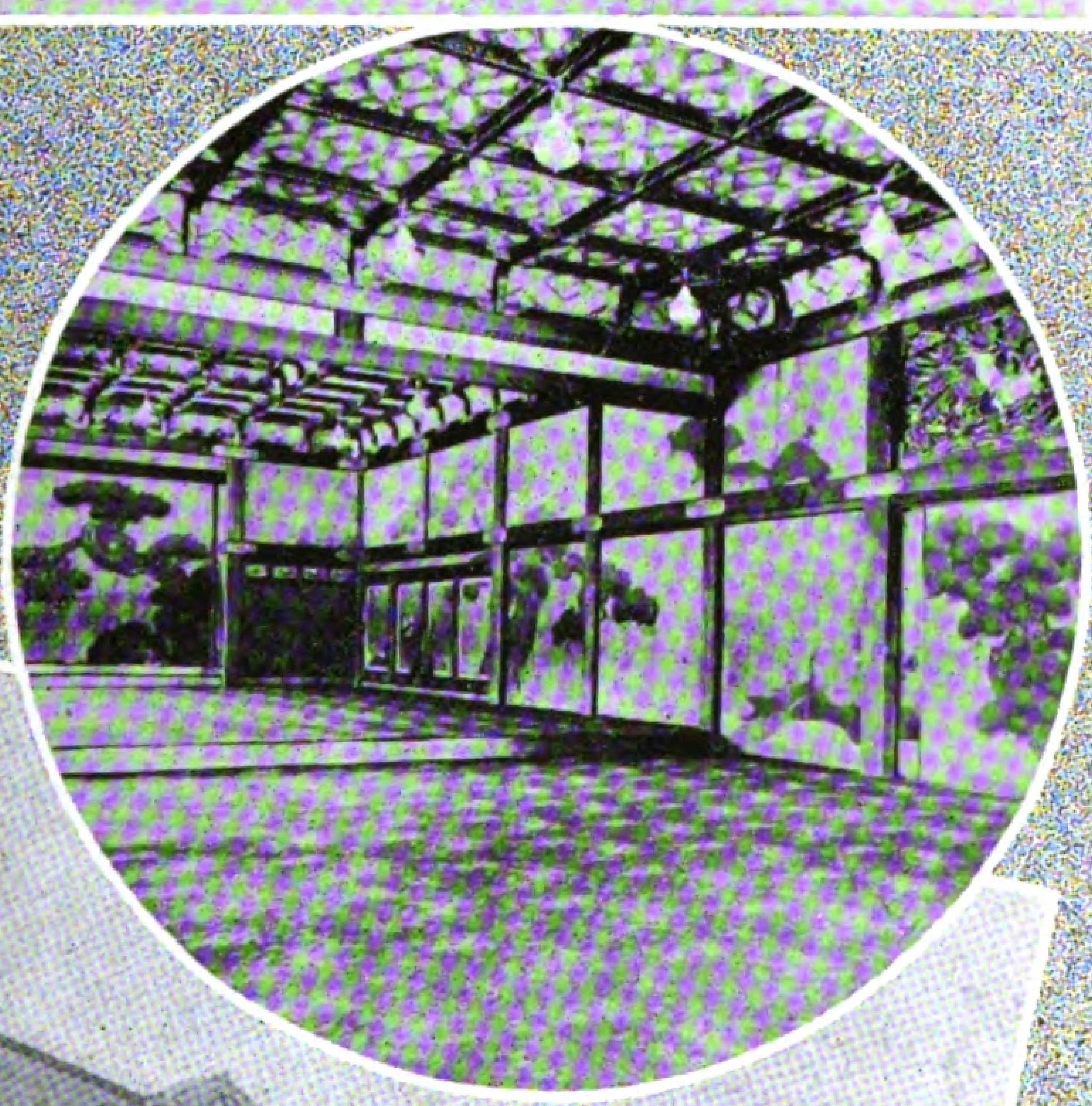
陽炎や名も知らぬ蟲の
　しろき飛ぶ　蕪村

どこからか聞えて來る牛の一聲、紅梅が散る。子守の髮には花片が一つ二つ。白壁を塗る家、芽生えた土筆、全てが懷しいのどかさである。お隣りの姉さんがお嫁入りの日も近づいた。

[illegible]山撮影

御所と







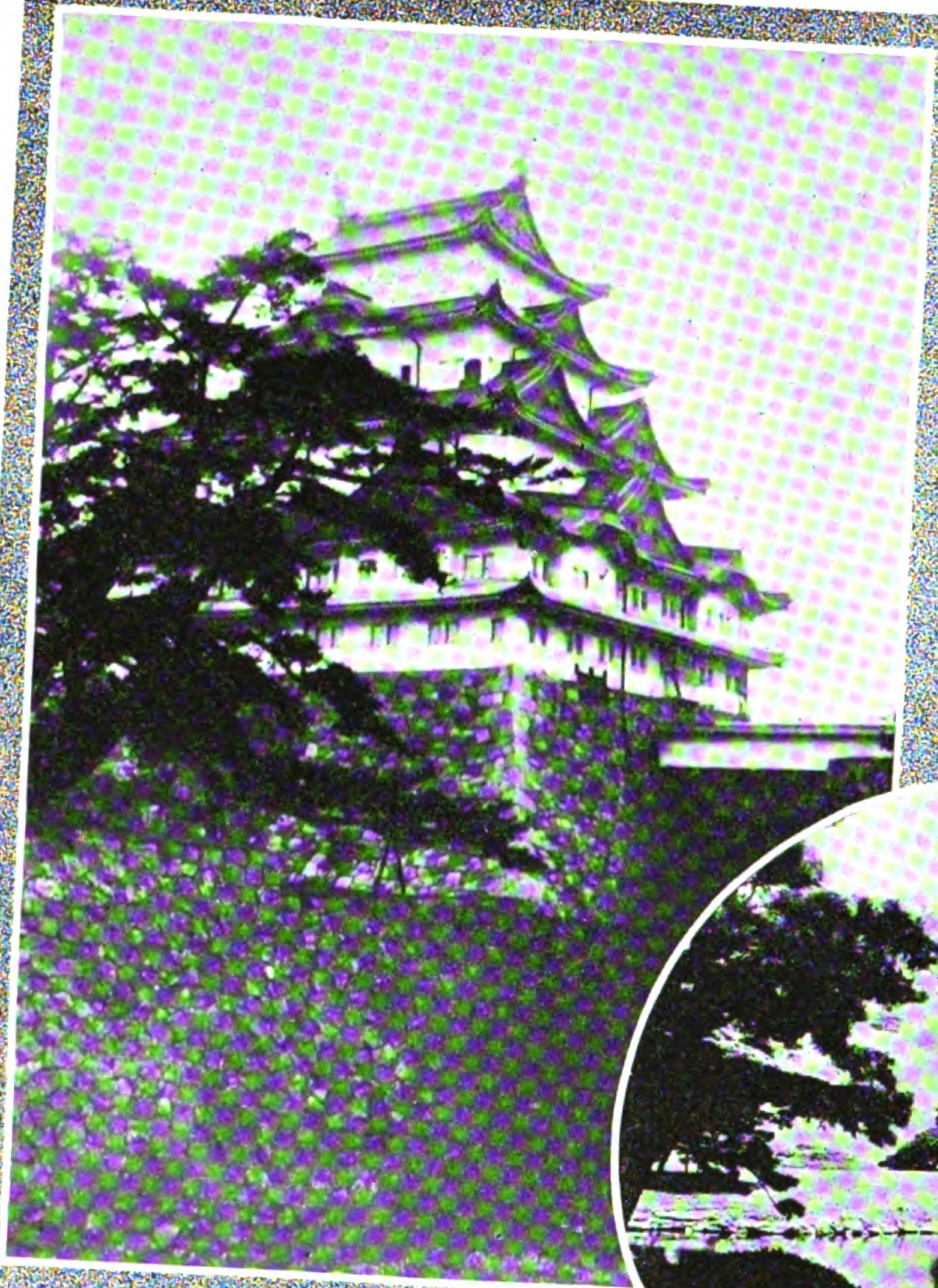
(右)京都二條離宮二の丸宮殿大廣間
(上)京都御所紫宸殿の外觀
(下)東京霞關離宮外觀

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

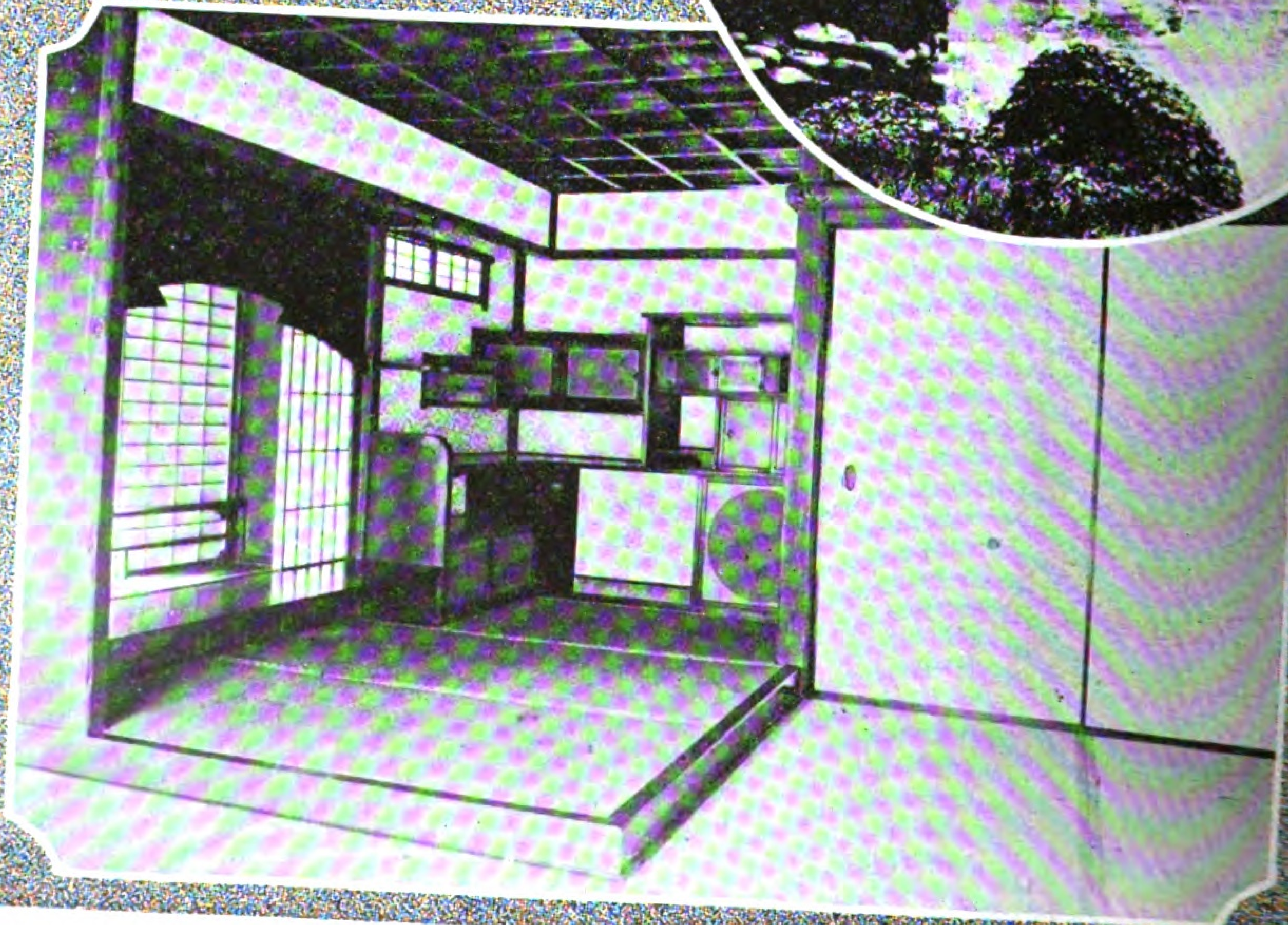


(下)東京赤坂離宮庭園

(左)名古屋離宮天守閣



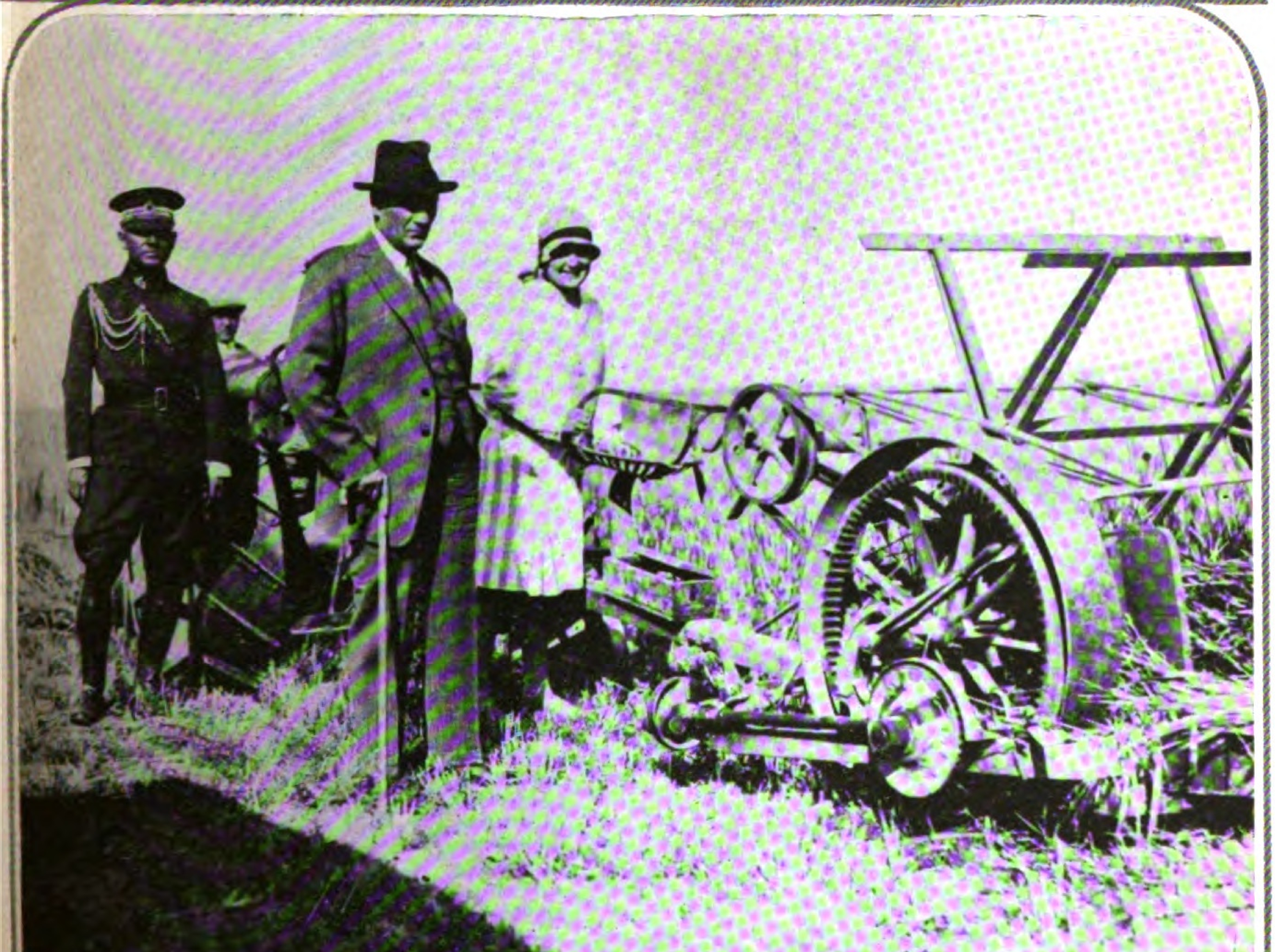




(左)京都桂離宮 御幸御殿 御書院

建設を目ざして





上は英國に於て有名なハンプステッド擬國會の光景です。これは下院を眞似たものでありまして、有力な代議士練習所となつて居ります。閉會の當日には、將來立派な代議士たらんとする人は勿論、現に一流の政治家達も參加して熱心に討論致します。（下は新興國トルコの建設に沒頭してゐる大統領ケマル・パシヤ（中央）です。今新調の蒸氣農作機械の前に立つて、日一日と改良されて行く自國のさまを熱心に見守つてゐます。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

慢性胃腸病と腦神經衰弱を全快した告白

茨城縣筑波郡　大塚林平（本年二十一歳）

思ひ出は遠く二年前の春種々の草花が筑波山麓の農場を彩る頃私は胃病に犯され爾來一年有餘の間あらゆる醫藥賣藥に親しみました。其の間便秘はする肩がコル食慾はあつても胃痛を怖れて食事も控へ勝ちであるから意氣はいよ〳〵衰へる其の上神經衰弱まで併發して惡夢に迄もおそはれ一日として愉快な日を送つた事がありませんでしたが或醫學の本に蝮が種々の病氣に非常に効力ある様に記載されてありましたからそれ以後は毎日の新聞廣告に注意して居りました所圖らずも天龍館の赤蝮の活性絞り汁に高山藥草七種によつて造られた養命酒のあるを發見し早速買ひ求め朝晩小盃に一パイ宛飲みはじめると一日毎に効力があらはれ其日から身體が温まり數日にしてあれほど頑强な便秘も治り通常となり肩のコリも忘れるやうになりました今思ひ出しても全く夢の樣ですそしてグン〳〵目に見えて快方に向ひ其のキ、メには驚くより外ありませんでした飲用十數日にして血色もよくなり身體もメキ〳〵と肥えて來て飲用前より一貫五百目ばかり體重もまし日に〳〵健康の域に達しました。これ全く創製本舗たる鹽澤家に感謝する外ありませんでした次に五凋間分お送り願つて飲用する事一ケ月遂に病より脫し今では前にも增した健康體の持主となり久し振りで土に親しむ樂しさを取返しました。其の後は如何に働いても風邪一つ引かず益々青年の意氣を發揮する事が出來ました、まづ健康をモツトーとする今日天龍館の養命酒を病める人々に飲用させて健康體になられん事を望み鹽澤家の益々御發展せられん事を祈りつつ筆を擱きます。尚皆々樣の爲に特筆したい事はマムシの絞り汁と云つて氣味惡がる事は大間違ひで蝮の絞り汁に高山藥草七種を加へそれを滋養酒に醸造され數年間經たものであるから上等の葡萄酒よりも其の風味も香りもよいから女でも子供でも又どんな病人でも美味しく飲用出來ます。

鹽澤家天龍館の景
日本アルプス赤石嶽



「記者曰く」

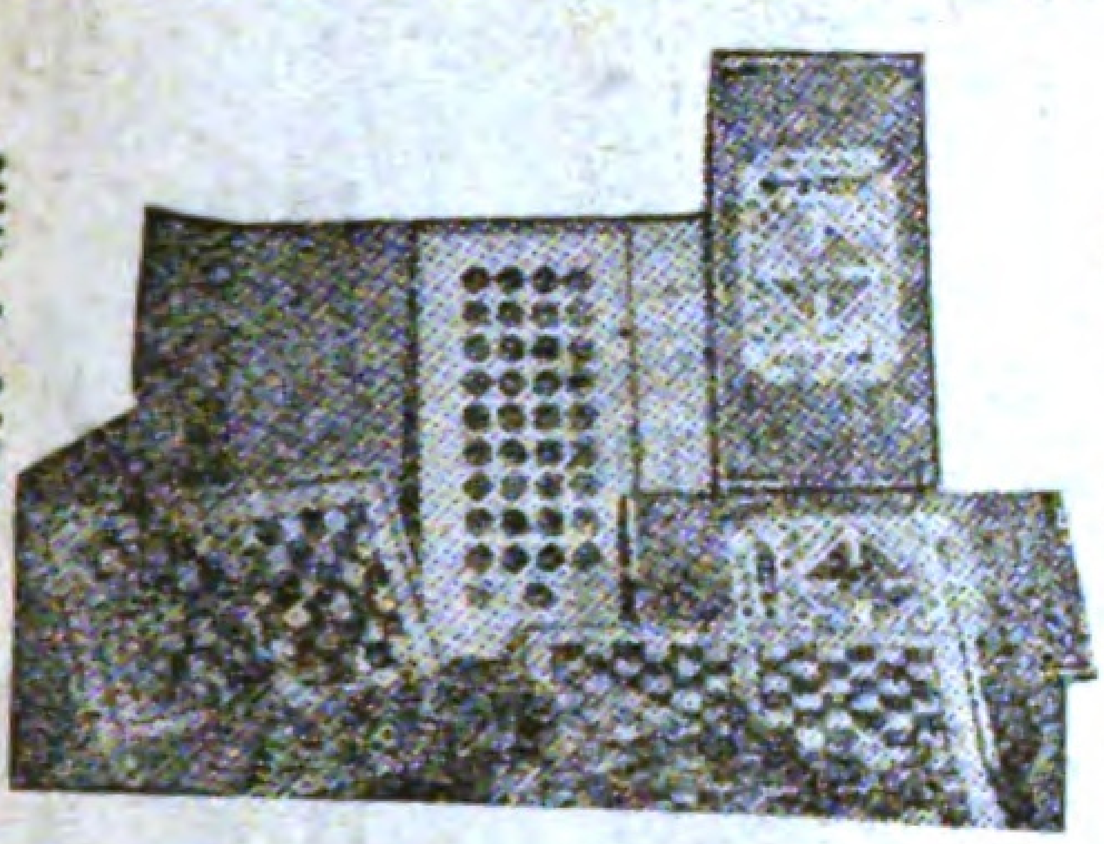
信州天龍峡の鹽澤家は賴朝時代からの素封舊家で現在海軍少將も出て居りますが今から三百年の昔十八代前の祖先鹽澤宗閑が赤石嶽特產の赤蝮蛇の絞り汁に高山藥草七種を加へ一種の藥酒を釀造して近郷の病弱者の爲に無代で惠んで居りましたこれを鹽澤家では代々繼承して今日に至つたのでありますから世にありふれた榮養劑や强精劑とは異り身體の眞底から根强い精力が付きます。各博覽會では金牌を受領し醫學博士阪口勇先生も横森賢次郎先生もこれを[illegible]しく來患者に薦められて居ります、御希望の御方は東京、大阪市内は各百貨店全國各地は有名藥店にあります。品切の節は東京澁谷町神宮通り一丁目七

天龍館東京出張所（振替東京六八八五五番）へ御申込下さい、實費二十日分參圓、三十日分四圓で送料三十五錢、新領土六十五錢、代金引替實費ですが、御都合で講談社代理部（振替東京六六二一九番）へ申込まれてもよい。

◎◎◎◎

無代進呈　「見本瓶詰一と說明書御希望の方はハガキで本舗へ申込下さい

少女娯樂 クロスゲーム



二人でも三人でも四人でも 家中揃つて樂しく遊べる

ストーブの前でおこたの上で野邊の芝生で汽車の往復で、お父さんもお母さんも妹も弟も皆揃つてトテモ愉快な高尚遊戯です。折疊式で美しい箱入ですから携帶に便利然も損はれる心配のない優秀品殊に競技盤上を可愛い純眞そのものの様なランナーの光る美しさにタマラなく爽快、目と心も躍ります。

遊び方説明書付定價[illegible] 送料十五錢

東京本郷大日本雄辯會代理部（振替東京六六二九番）

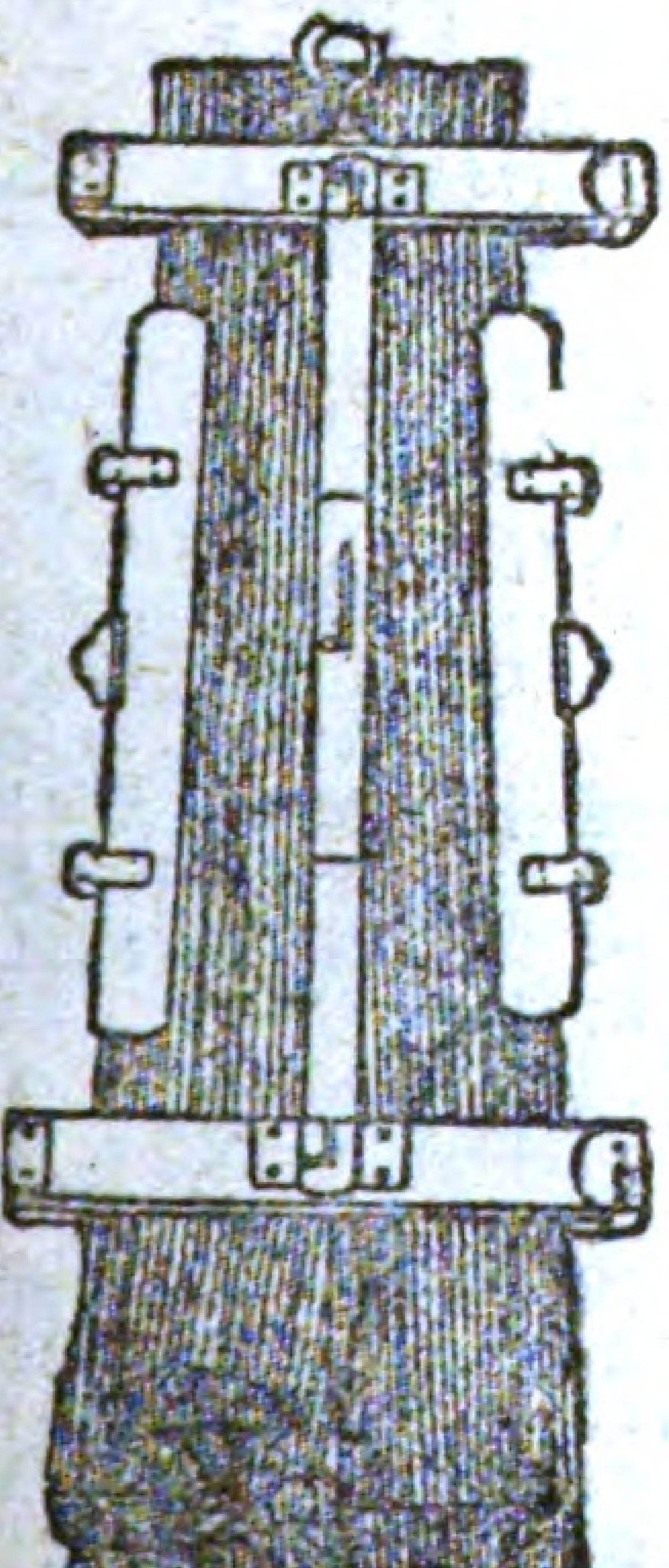
胃腸病の强敵現る!!

之ならキット！

◇特別難症痼疾の方々に奨む！

本藥は海拔四千五百餘尺の大深山より湧出する天然の温鑛泉中に含有されて居る特殊な有效成分を化學的に精製抽出した神秘藥であります。本藥に就いては已に田原醫學博士を始め多數専門大家もその著效を認めて居る程で之以上の説明を要しません。永年の苦惱にある方は是非御試し下さい。御すゝめいたします。寶泉錠六十五錠入一圓五十錢百五十錠入三圓送料十二錢 東京本郷大日本雄辯會代理部取扱ます。

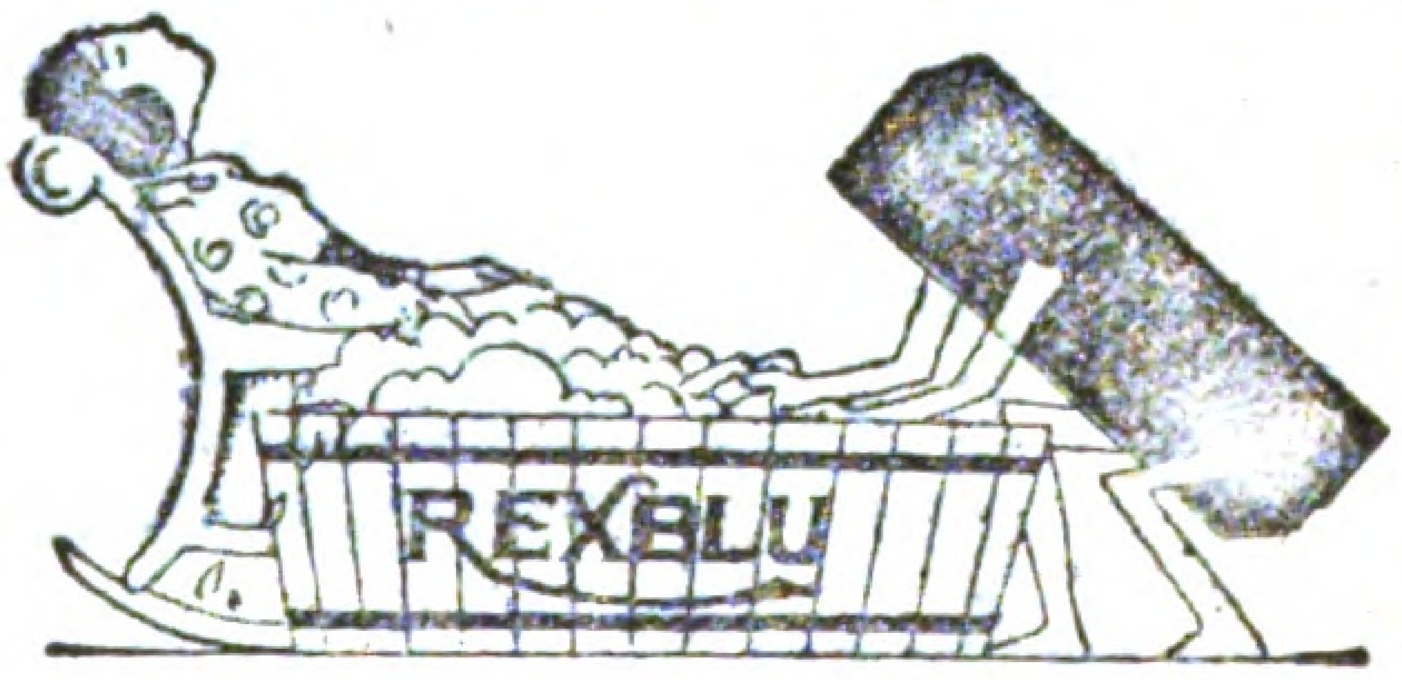
文化的發條式 ズボン整調器



何時も正しく伸張されたズボンを着用する事によつて、自とその品位も高まります。

▼在來のズボン伸張器は不自然な伸張法なる爲め品質を損傷する事も少くないが此の發條式に依りますと極めて自然に伸張され少しの無理がなく、洋服の厚地薄地（冬物夏物）に從ひ自由に調節が出來使用法も頗る簡單であります。ズボン整調器（説明書付）一組二圓八十錢送料内地二十五錢 領土五十錢

東京本郷駒込 大日本雄辯會講談社代理部 振替東京六六二九



ひとりでに洗濯出來る

レツクス洗濯劑

漬けて置くだけで揉まなくとも洗濯になる

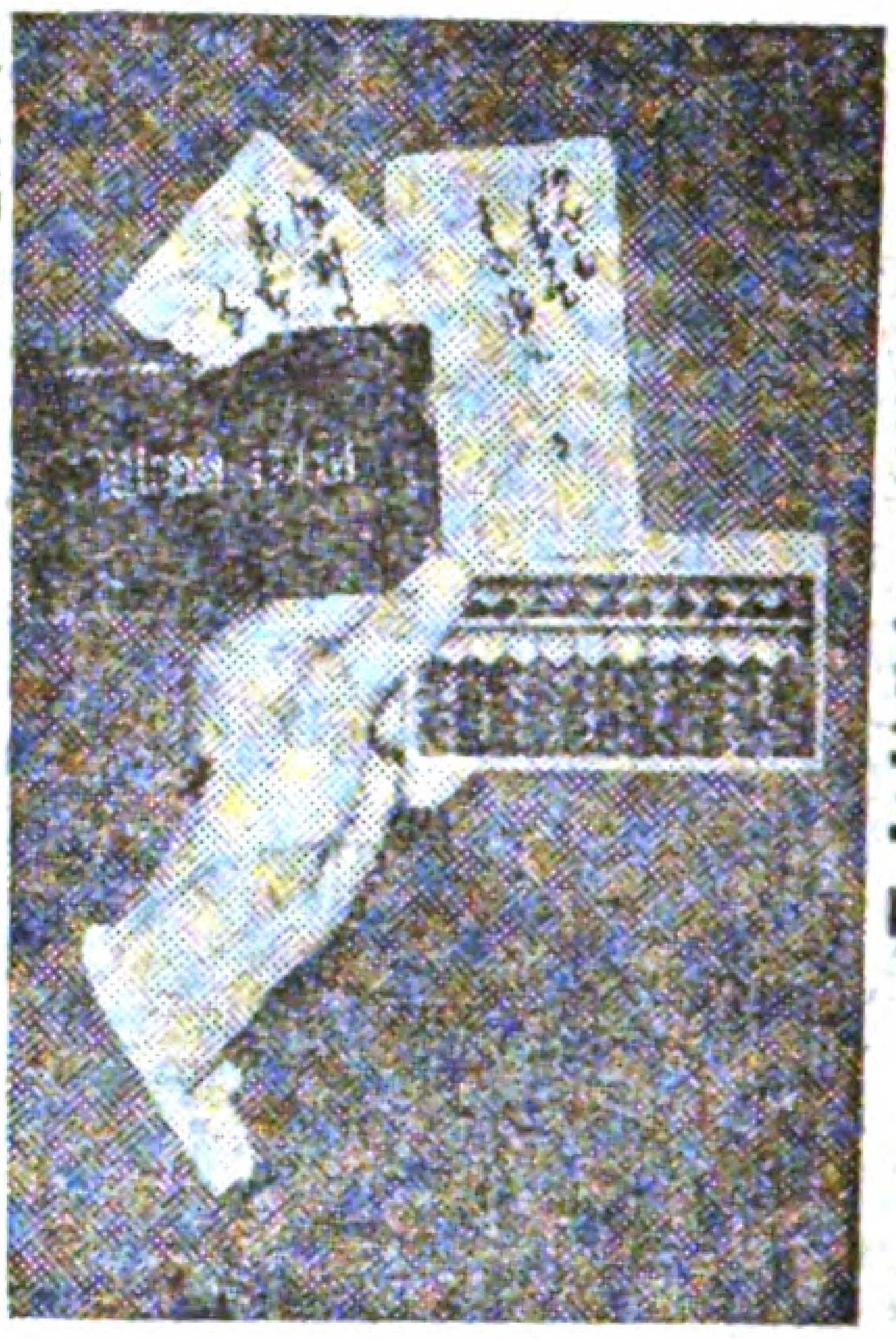
■レックスは石鹸の様な固形物です。これを削つて石鹸と一緒にタラヒの中へ少し入れ置くと、化學的作用により、洗濯物は洗濯板で扱いたり、手でもんだりしなくとも、ひとりでに見違へる程キレイになります。■これ程驚くべき作用がありますが、レックスはキモノを決して損じない許りか却つて手で洗濯するより三倍以上も洗濯物の壽命を長くする不思議な効があります。■洗濯時間を省いてお子さんのお世話やお料理や讀書に時間を御使ひ下さい。洗濯の様な腰の痛む不衛生な勞働はお止め遊ばせ、その代りレックスを使つて汚れ物を立派に洗濯して下さい。レックス二個一組大盥十杯分量七十錢（送料四錢）

大日本雄辯會講談社代理部 東京市本郷區駒込（振替東京六六二九）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大日本雄辯會講談社 代理部雜貨案内

新發明器 ポケットレヂスター 算盤兼用萬年手帳



之は某知名の實業家の發明になるもので、萬年ノートと算盤を兼ねた、活社會に活躍するビジネスマンの必携品である。

◇大きさ・縱二寸横三寸二分厚さ二分五厘最少の手帳位

◇體裁は・堅牢優美のセルロイド製で寫眞の樣にケースから拔き出すと二枚のメモと小型の算盤が出ます

◇鉛筆も・付いて居りますからその場で直ぐ心覺えを書き直ぐ計算する事が出來ます

◇メモ板・は萬年手帳の役目を兼ねた上等セルロイドですから絕對汚物や破損の心配がない金消歐文入のトテモモダンです

定價一圓三十錢 送料内地十二錢 領土五十錢

大家庭好評用 小型ミシン



誰にも使へて何んでも縫へる

完全、精巧 堅牢で廉價

本社代理部特製のパインミシンは貳拾四圓です。

◇和服洋服何でも縫へる。

◇縫目は粗くも細かくも意のまゝに出來ます。

◇用法は簡單誰にも直ぐ使へる。

◇小型ですから取扱に頗る重寶。

◇堅牢保證絕對に狂ひが出ない。

◇女學校小學校處女會等から大歡迎。

◇木製臺及蓋付特價卅圓

◇鐵製蓋付臺なし特價廿四圓

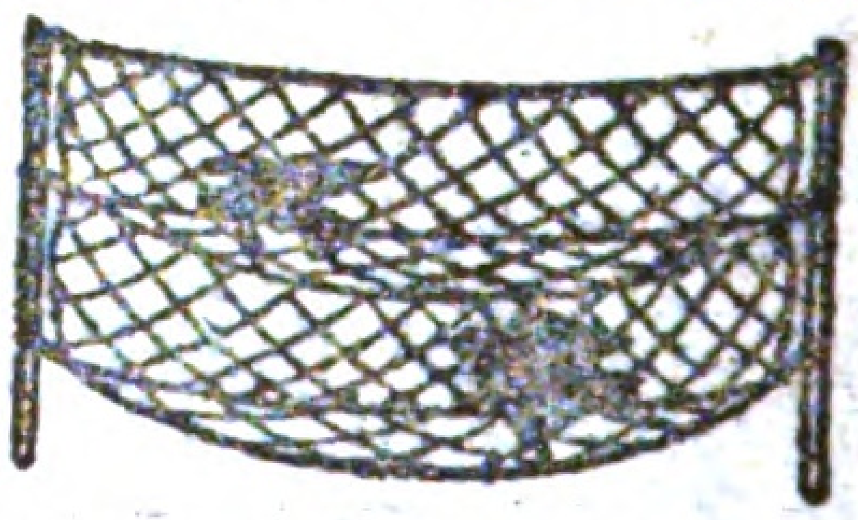
（針絲卷油さしねぢ廻し付）

（荷造費五十錢實費拂）

—申込次第型錄進呈す—

我國特有の 捕鳥用カスミ網

面白い程よく捕れる



只張つて置くだけで雀類白等の小鳥が面白い程よくとれる純絹絲製の捕鳥網ですそれに少しの危險もありませんから庭園内でも自由に用ひられます

六分目二棚網 長六間 高八圓八十錢

長三間 六尺 四圓五十錢

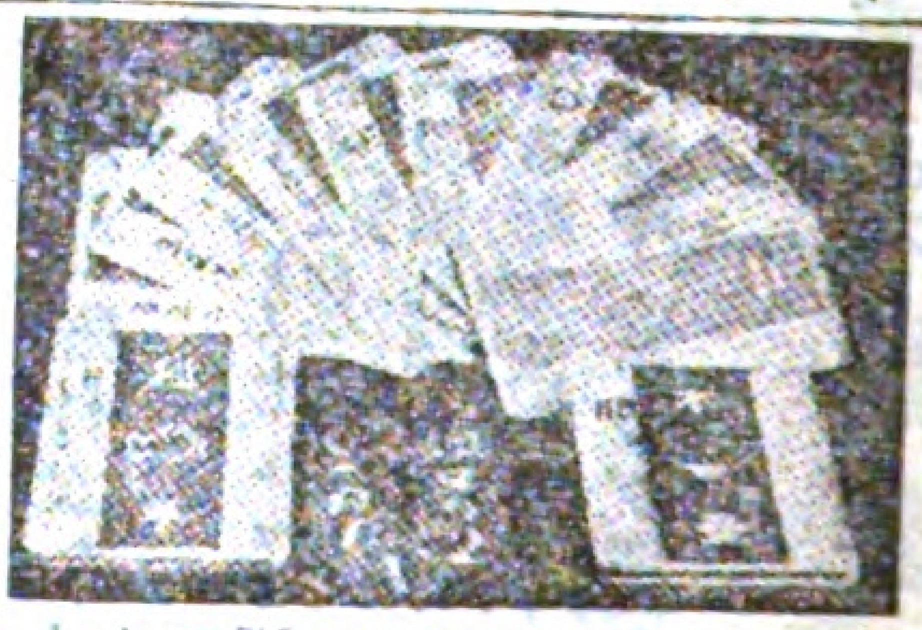
送料内地十五錢 領土五十錢

SN式携帶用顯微鏡 萬年筆形 倍率正確 ポケット用



萬年筆大のものでポケットに入れ携帶することが出來何時何處でも使用する事が出來ます。然も價がズハ拔けて安く、倍率が正確で使用に少しの面倒がなく構造頗る堅牢永久的使用に堪へる便利品。トテモ他の顯微鏡や擴大鏡の比ではありません。二百倍二圓六十錢、一百倍三圓六十錢、壹千倍七圓六十錢、送料内地十五錢、外五十錢

素敵に面白い卓上遊戲 野球カード



一名（卓上ベース）

このの美しいカードが諸君の代りになり卓上で投手になり打者となつて自由自在に活動致しますの遊び方は普通の野球と全く同じですから、野球をやつて居る以上に實に愉快なものです。

一組遊び方付 七十五錢

送料十二錢海外は四十五錢

三十餘種の競技が出來る オリンピック競技カード



總計五十八枚のカードを組合せますと五種、十種競技は勿論實に卅餘種の競技が出來ます。二人以上何人でも結構又オミットトか一枚の使ひわけから微妙な働きを生じますのもこのカードの特長です。

一揃（說明書付）價一圓廿錢 送料十二錢

東京市本郷區駒込坂下町四八

大日本雄辯會講談社代理部

（振替東京六六二九番）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

断髪！美醜論!!

此令嬢断髪洋装スタイル頗る宜し然れ共天性色黒なるが爲頗る不評◆嬢にして若し五大博士大家の研究發明に係るハルナーを愛用せば色白く美しくなりニキビソバカスも自然消滅し断髪+色白+洋装モダン・シヤンとなり十指十目の的たるや必然也

科學は急速度で進歩する流行の變遷も亦驚く可き速力である島田髷や桃割は影を潜め現代は何と云つても断髪の世の中だ断髪美醜論を云々する者あれ共、要するに容色一つだ、島田でもオールバックでも断髪でも其人の容色一つだ、取分け婦人は色が白ければ美人に見える「色の白いは七難かくす」と云つて昔から色白を美人第一の條件としてゐる…從來色の黒いのや赤いのニキビソバカス吹出物等は顔面外皮の疾患と計り考へられて居たので只外面から化粧水や塗り薬をつけて治さうとしたのみである處が歐米先進國の醫學界では此等の皮膚障害はソンナ單純な原因でなく飲食物や氣候風土の關係で體内に發生した惡血毒素が男女成熟期に達する頃の肉體的變化作用で自然と外面に吹出すものである事を發見し特殊の内服藥を以て治療した處殆ど快癒の好成績を舉げ得て現在では路傍に見惡い男女を見受けぬと云ふ位である……然し其大効ある外國藥も飲食物や氣候風土の異る我々東洋人には全然……



効めなく却つて髪の毛を赤くする等と云ふ危險があるので我國醫學界で有名なる藥學博士島田一先生敷津先生越澤先生等の五大博士大家は共に協力研究して遂に内服に依り體内の惡血毒素を淨血してニキビソバカス吹出物を治し科學的に自然と色を白く美しくする東洋人種専門のハルナーと云ふ内服藥を發見したのである……ハルナーは單なる内服法に依り男女何人でも効果に變りなく色白く美しくなる。何人も科學を信頼せよ老も若きも直にハルナーに依つて色白く美しくなり愉快に世の中を暮し給へ……ハルナーは全國有名局店で其力を確信し進むで取次販賣す藥價は一圓二圓三圓特別大瓶五圓十圓等又製造元へ直接振替にて御送金あれば送費勉強目立たぬ樣急送す。

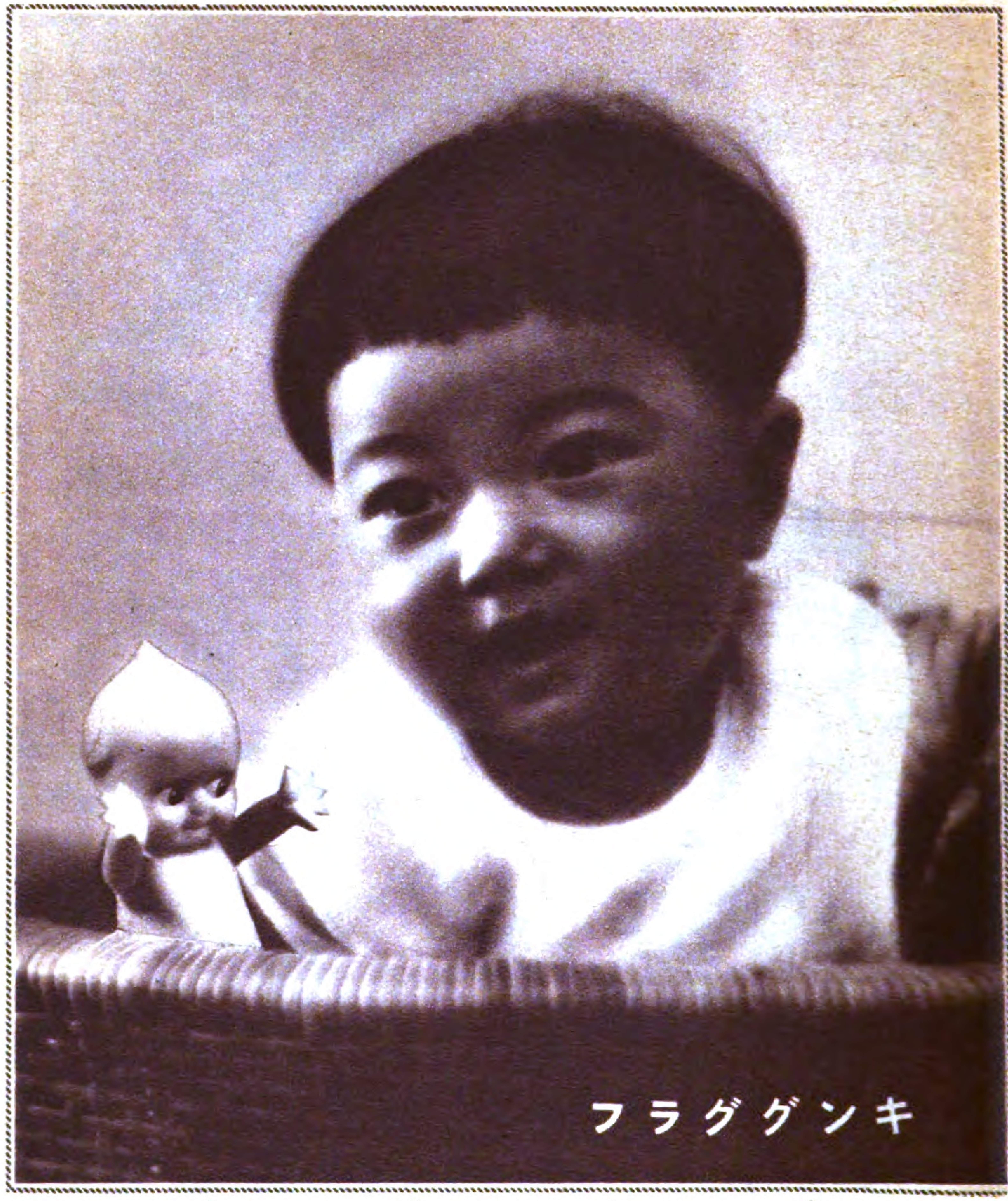
●美身白色法無代進呈す！

尚今回我五大博士大家は人體皮膚の構造は勿論皮膚病の原因と療法**ニキビ**發生の理由と全治法、**ソバカス**現滅關係と消除法、吹出物退治法、其他色の黒い理由と色を白くする新方法を詳述したる美身白色法と云へる雜誌を發行し何人にも**ハガキ**（キング愛讀者として左記宛に）申込次第壹部宛無代進呈す

ハルナーは全國到處の有名藥局藥店にあり

東京市京橋區築地橋際
合資會社 **濟生堂製藥所**
電話東京(56)一〇二七番
振替東京一七二〇一番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



わたしは三ツ

ハチロー

カアサン　カアサン　ネエカアサン
ひとりで椅子にのつたのよ
キユーピイさんも　ごいつしよに
チヨコンと椅子に　のつたのよ

カアサン　カアサン　ネエカアサン
ワタチはおべべをきてるけど
キユーピイさんは　ポンポンを
どうして　どうして　出してるの

カアサン　カアサン　ネエカアサン
ワタチは黒い　髪の毛よ
キユーピイさんは　赤髪の毛
それもチヨンピリ　あるきりよ

カアサン　カアサン　ネエカアサン
たつたひとつだけ　おんなじね
おめめがそつくり　おんなじよ
クリクリ目玉の　大めだま

全てが生活

世渡りとなれば、何一つとして樂なものはない。大向ふを喜ばせる樣々の珍趣向も、その實本人にとつては、汗みどろの生活戰術だ。



(1)罷り出でたはお芝居の蛙。小野道風を丸呑みにしさうな大きな身體で、柳の枝にピョコン／＼。中の役者も定めし息が切れる事だらう。



(2)銀座ボーイの話題を賑はすマネキン嬢も、職業的に考へて見れば活動寫眞の行燈か、つぎと親類筋。



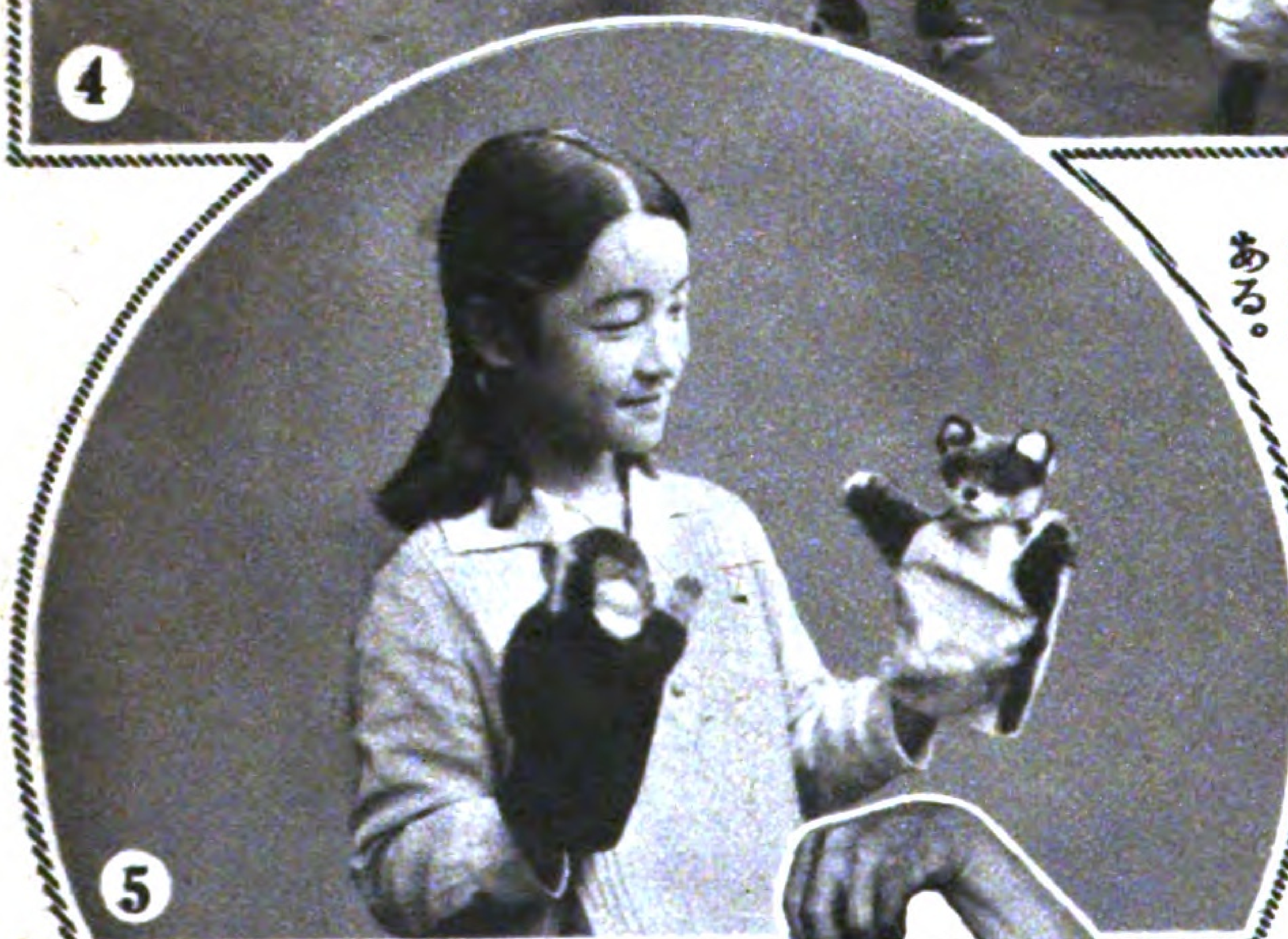
(3)勿體なや萬物の靈長と生れ乍ら、時には猿にまでならねばならぬ映畫俳優。個々スターも辛いものだ。

(4)分別盛りの顔をし乍ら、足拍子よろしく街を練り歩くチンドン屋。これも酔狂でない。みんな商賣のためだ。

(5)指先を器用に動かして、人形を踊らせてゐる玩具屋の少女。見れば遊びたい盛りの年頃、世は春だといふに……

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN





(6)身を一管の竹に託して彷ふ虚無僧の姿。天蓋の下から洩るゝ尺八の妙音も、あはれ自動車の警笛に乱され勝ちの世の中である。



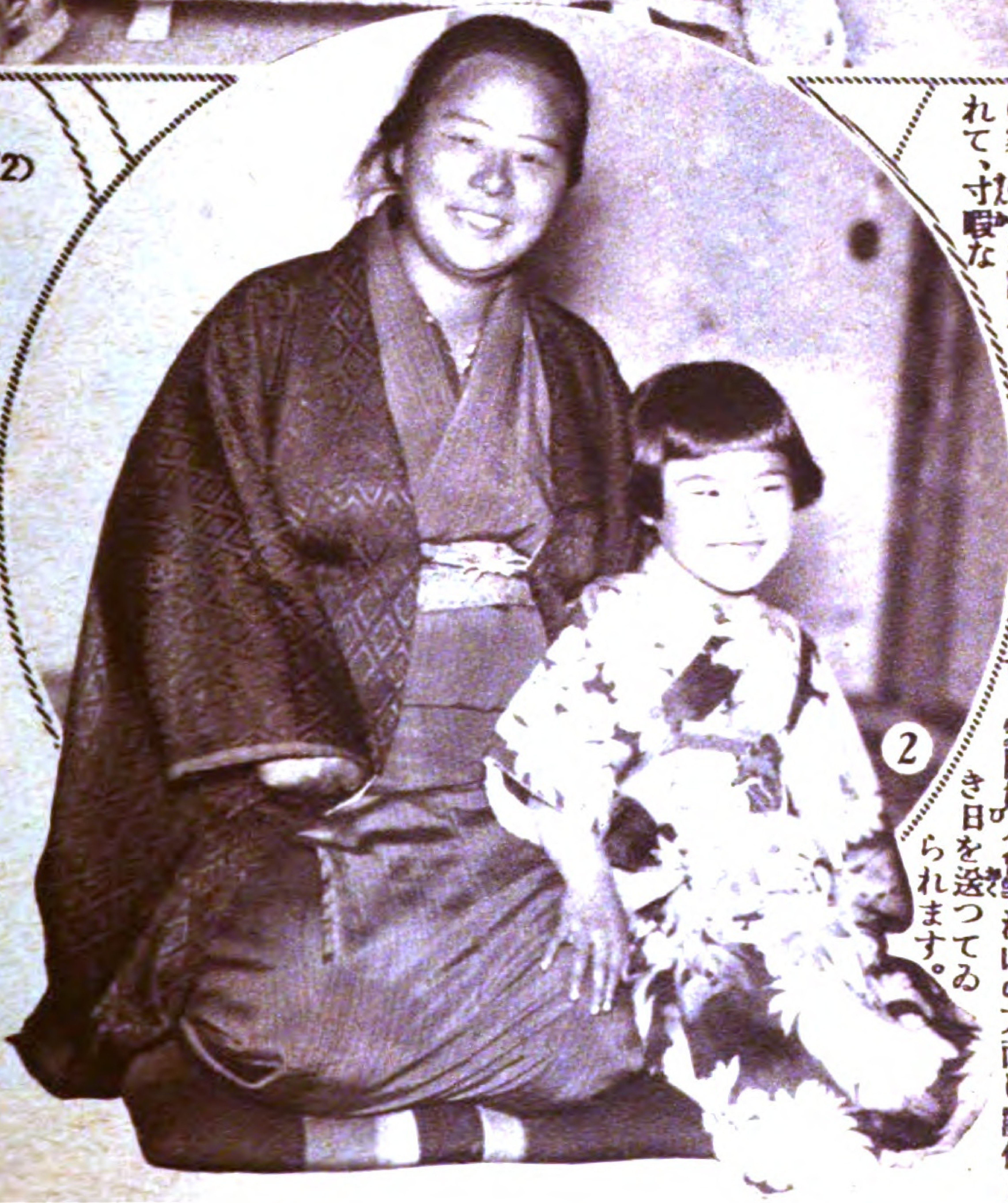


(7)今高座では百面相。蛸魚の茹上りは最高潮の場面に達し、見物はヤンヤと大喝采。だが考へて見給へ、これも妻のためだ。子のためだ。本當に商買は辛いものだ。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN







一家の柱と頼む夫の亡き後は、雄々しくも生活戦線に立つて、活動してゐられる方々です。(1)元外務大臣本野一郎子未亡人久子女史、今は少年保護協會、孃の家、特志看護人會、愛國婦人會等澤山の方面に關係されて、寸暇なき日を送つてゐられます。

(2)元早大教授片上伸氏未亡人あさ子女史。みづから保險會社の外交員として至難の仕事を續けてゐられます。

未亡人



(3)元代議士前川虎造氏未亡人靜子女史。議院に近い虎の門に、美粧院を開いて働いてゐられます。



(4)元東京驛長高橋善一氏夫人はつ子女史。東京驛構内に賣店を經營してゐられます



(5)曾て一高、帝大に教鞭をとつてゐられた沼波武夫（瓊音）氏未亡人多尋子夫人。家傳の脚氣妙藥『壬寅湯』の調製販賣に沒頭してゐられます。

廣告術は



①

商戰の先頭を承はる廣告術は、年と共に驚くべき發達を遂げてゐる。(1)見るからに異形の行列は佛國の自動車博覽會に現れた護謨輪づくめの人間でこれはタイヤー業者の廣告である。(2)この恐ろしい怪物は巴里の淺草シヤンゼリゼーに於ける活動寫眞の假裝廣告。



②



③

何處まで



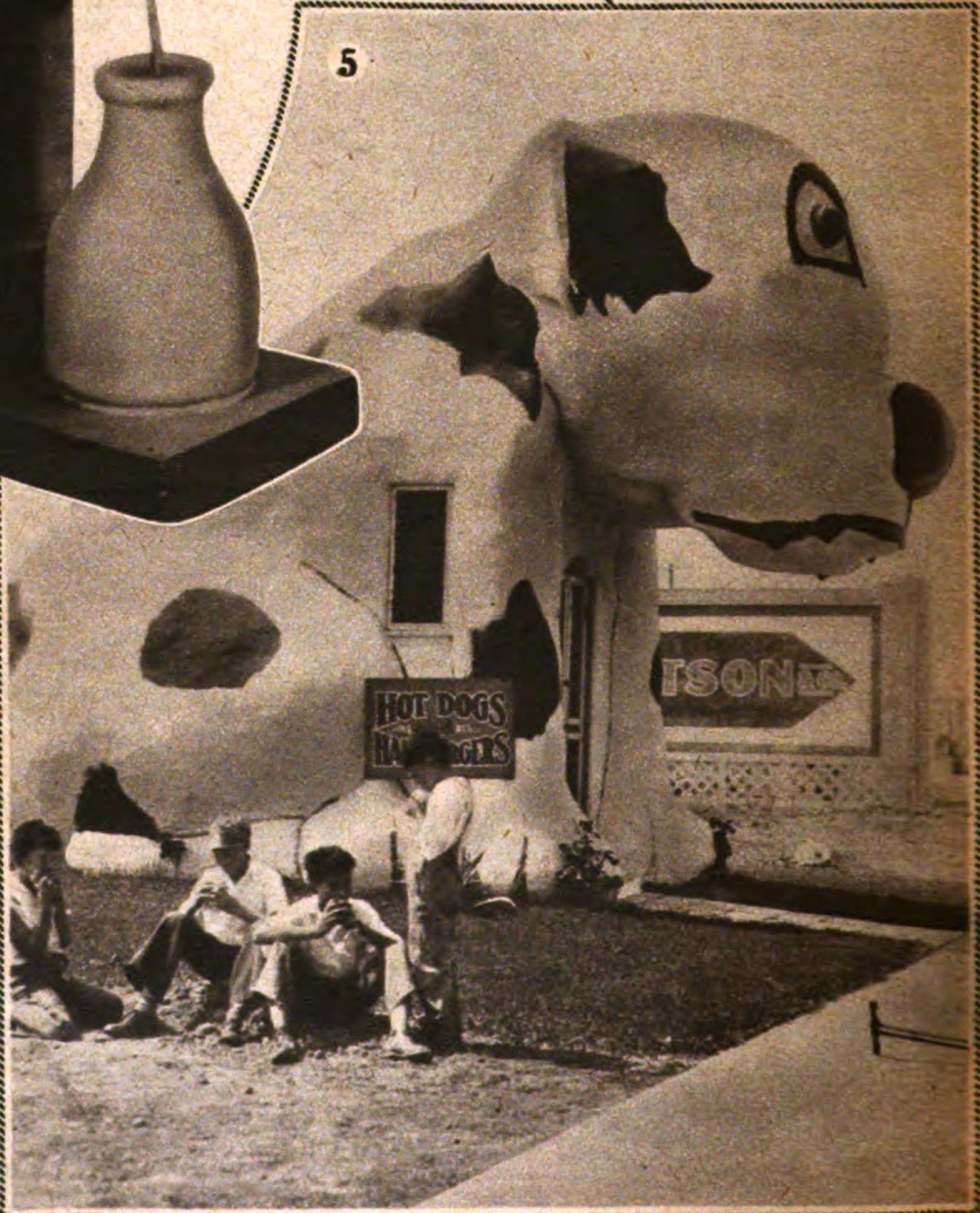
(3) 非常に藝術化した百貨店の蠟人形。これは商品の側に飾るもので、その獨創的な技術がお客の注意を惹いてゐる。

(4) これも廣告に使ふ藝術的な蠟人形で、少女がミルクを飲んでゐる形、『大いに牛乳を飲みませう』の宣傳に使はれたものである。

④



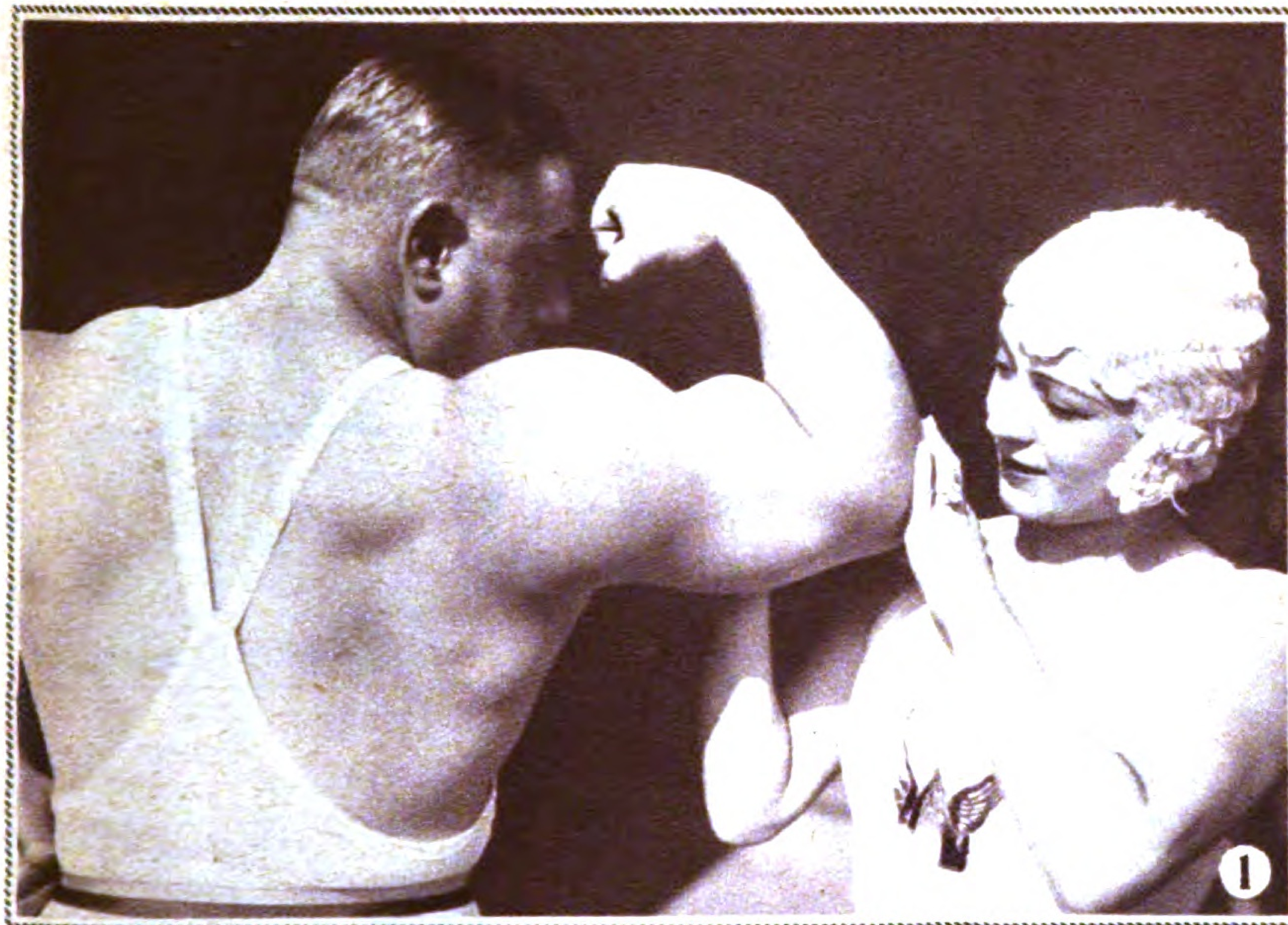
5



(5) 何と素晴らしい大きな犬ではありませんか。これは米國加州で評判になつてゐる犬の形をした賣店。中で賣つてゐるのは、その名も『暖い犬』といふおいしいお菓子。廣告術も此處までくれば徹底したもの。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

(1)『世界で最も強い男』と噂され、各種重量競技のレコードを持つてゐるリグロー君。その隆々たる腕の筋肉を御覧下さい。右にゐる妻君の頭にも負けない太さです。(2)は紐育で評判の怪力少年ハリー君。中指一本で三十貫の品をぶらさげたり、それから背中には二百四十二貫の荷物を擔ぎあげるといふ豪のもの。その胸圍も有名な拳闘家デムプシー位あるさうです。



1



2

(3)これは男でありません。花恥しき十八の嬢です。腕力にかけては米國婦人の中でも一二を爭ふといふイルマ嬢。これではウッカリ近寄れません。



3

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ぢ疾患者の一大鬼門!!

嚴寒の及ぼす影響と進歩せる藥物療法



東京肛門病院長 谷泉 述

寒風凛烈肌をさす今日此頃、亦しても痔疾の再發、惡化に、生命をおびやかされつつある、氣の毒な人がいかばかり多いことであらう、由來痔疾に寒さは一大鬼門で、痔疾患者の死亡率は常に冬期に於て最高率を示してゐるのである。

しかして本症は、初期の裡非常な苦痛のない爲、患者は迂闊にも之を等閑に附する傾向多く、殊に婦人の如きは場所柄だけに之を隱ぺいするの風があり、爲に病魔は情容赦もあらばこそ、骨肉細胞の深きに入り、亦肺、肋膜、心臟病等の餘病併發の憂目を見、名狀すべからざる苦悶と慘狀を齎らすのである。

痔疾！痔疾！余は東京肛門病院にて多くの痔疾患者を診療するの時、常に念頭を離れざりしものは、種々なる事情の爲、責任ある醫師の治療出來ざる人、或は治療を嫌ふ人を如何にして救濟するかの問題であつた。即ち權威ある自宅療法藥の創製こそ！この氣の毒なる人々を救ふ最大の道ではないか！余は之を信じ、余の三十有餘年の實際的經驗と更に加ふるにドクトル・メヂチーネ谷岩太氏の最新學說を斟酌し、價格を超越せる高貴藥を配して、痔疾**ヒット**を江湖に送つたのである。

ヒットは含有各藥物の完全なる效果を速進せしむべく、最も愼重に配劑され、從つてその鎭痛、消炎、防腐、殺菌、止血、吸收等の實際的治療效果を最も安全に、最も迅速に擧げ得るのであり、この點斷然一般市場の痔疾藥と選を異にしてゐる。かくて**ヒット**は手術を欲せざる人、できざる人等に眞に理想の自宅療法藥として推奬するを憚らないのである。

世に痔疾患者多く、痔疾藥亦枚擧に暇なき程であるが、醫藥をその儘賣藥とせるものは蓋しヒットを以て最初とする。江湖幾萬の痔疾に惱む方々よ！宣傳のみを生命とする舊式賣藥や家傳妙藥等と稱する駄藥に迷はず、速かにヒットによつて恐るべき肛門病を根本より掃蕩せられよ！初期輕症の人は勿論、いかなる重症者も決して悲觀は無用である。

(ヒットは三種あり。挿入、塗布、內服、挿入は內痔核、痔出血、內痔瘻等に適し、塗布は痒痔、裂痔、脫肛、痔核、痔瘻等の外部症狀に良し、內服は一般痔疾を輕快ならしむるの效著大なり。以上三種を以ていかなる痔疾と雖自宅で自分獨りで安全に治療し得るのである、**ヒット藥價**、挿入藥、一圓、二圓、五圓、十圓、塗布、五〇錢、一圓、二圓、五圓、十圓、內服、一圓、二圓、五圓、尙治療速進に**ヒット式痔バンド**あり。一具一圓。全國到る處の各藥店にあり。發賣元は東京市銀座新肴町八(振替口座東京七二二一)大阪市西區新町通一ノ二(振替口座大阪一〇六〇)丁子堂藥房(**誌名記入御申込み次第說明書進呈**)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大躍進！

現

趣味と知識の大寶庫！！

社會の第一線に立つて雄飛活躍せんとする人は見よ！



池田藤四郎氏　杉村陽太郎氏

◇選職の岐路に迷ふ青年へ……文學博士 淡路圓治郎

◇就職の開拓策……東京市社會局長 安井誠一郎

◇最近歐米百話……能率增進協會長 池田藤四郎

歐米大成功者の事業經營ぶり、成功訓等面白くて有益な生きた實例。一讀處世成功のコツを會得せしむる名篇

◇ムツソリニの一轉機……法學博士國際聯盟事務次長 杉村陽太郎

◇南米開拓奮鬪記……三石 久

◇三億圓の大事業……草間 秀雄

◇大禮服美談（師弟愛物語）……山田 司海

◇『贈賄と利權』物語……清瀨 一郎

◇仕入商品の繰り方……井關十二郎

◇何人も心得おくべき法律知識……大澤 一六

◇政界秘話……

◇名士の應接ぶり……

◇運動界ゴシップ……

◇名士の談話室……

◇新しい言葉……

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

現代 三月號

◇現代名士の自叙傳……

沼田賴輔、谷本富、稻田彌太郎、豐田旭穣、神近市子の諸氏が大膽率直にその體驗を發表した、面白い自叙傳　名士の面目紙上に躍如！

◇各種金儲け座談會……

出席者
三越常務取締 濱田四郎　中外商業經濟部長 小汀利得　能率增進會長 池田藤四郎
岡辰押切帳著者 谷孫六　昭和銀行頭取 生田定之　日清紡績社長 宮島清二郎 諸氏

斯界の權威者たる以上の諸氏が一堂に會して、特に農村、中小賣商人及び一般人の心得べき金儲け法に就て、その體驗から得た貴重の秘策を公開す。經濟國難の叫び高い今日、何人も必讀すべき名記事！

◇モダン經濟百景

銀座に丸ビルに、百貨店に街頭に、其他あらゆる方面に亘つて觀察した新しい經濟の動き。新時代に活躍する人は見よ！

◇金儲綺談 黃金街を行く

岡辰押切帳で有名な谷孫六氏が、誰にも出來る金儲け法を教ゆる面白い物語。時節柄どなたも是非ごらん下さい。

◇大家短篇傑作集

現代一流花形大家が心根を打込んで執筆の名篇を蒐む。

◇現代小說 樂園の犧牲……三上於菟吉
◇戲曲 秀吉と家康……松居松翁
◇時代小說 原城天帝旗……生田蝶介
◇諧謔小說 先輩後輩……佐々木邦
◇現代小說 耀ふ黎明……長田幹彥
◇トノバンゲー……ウエルズ原作 鶴見祐輔譯

此外面白い讀物有益記事多數！

定價五十錢（送料三錢）

東京本郷駒込坂下町四八
大日本雄辯會講談社
（振替口座東京二九三〇番）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

新療法
紹介

神經衰弱や白痴の原因となる 鼻の病氣と其治療法

△自宅で誰にも出來る最近醫學上の大發見▽

最近蓄膿症の流行

鼻と腦とは薄い骨の膜一枚で隣り合つてゐるので、鼻に故障あればすぐ腦に影響する。頭が常に重く年中頭痛がするとか、記憶力が減じ物事を考へられぬとか、物事に疲れ易く直ぐ倦怠を覺えるとかいふのはよく調べて見ると、大概鼻の何處かに故障のあるためであります。昔から鼻は萬病の門といはれてゐます位でありますから、鼻の病氣のある人は重くならぬ中に根治の方法を取らぬと、腦に接近してゐる場所である丈けに、遂には腦の血液循環が調はなくなつて、腦神經衰弱の原因となるばかりか、記憶力が鈍つて低腦になつてしまふ事があります。鼻の病氣中でも最も多いのは蓄膿症でありますが或る學校の如きは全校の約三分の一の生徒が蓄膿症患者であるといふ事實すらありまして、今や蓄膿症は激しい流行病のやうな勢で肺病にすら引けをとらぬほどの慘害を年若い人達の上に加へつつあるのであります。

蓄膿症とその原因

では蓄膿症といふ病氣はどういふ病氣かといへば、鼻腔内の空洞中に、膿汁の溜る病氣で、其原因は大概風邪引で鼻がつまるのを打棄て丶置いて、何時までたつても治らないやうな場合によく起るものであります。其他にも原因はいろいろありますが、その何れであつても鼻腔内に膿の溜るのは同樣で、その結果は眼の上や下が腫れたり、そこを壓すと痛みを覺えたり、鼻汁が澤山咽喉の方へ落ちて來たり、頭が重く感ぜられたり、殊に長い間溜つてゐた膿が出る時など、とてもひどい臭氣で自分でも嘔吐を催すほどで、兎に角不愉快極る病氣でありますが、茲に一つ理想的の新療法が發明されました。それは湊式吸癒療法と申しまして、ドクトル湊謙治氏が父子三十五年の長年月苦心研究の結果完成されたものであります。

理想的な家庭療法

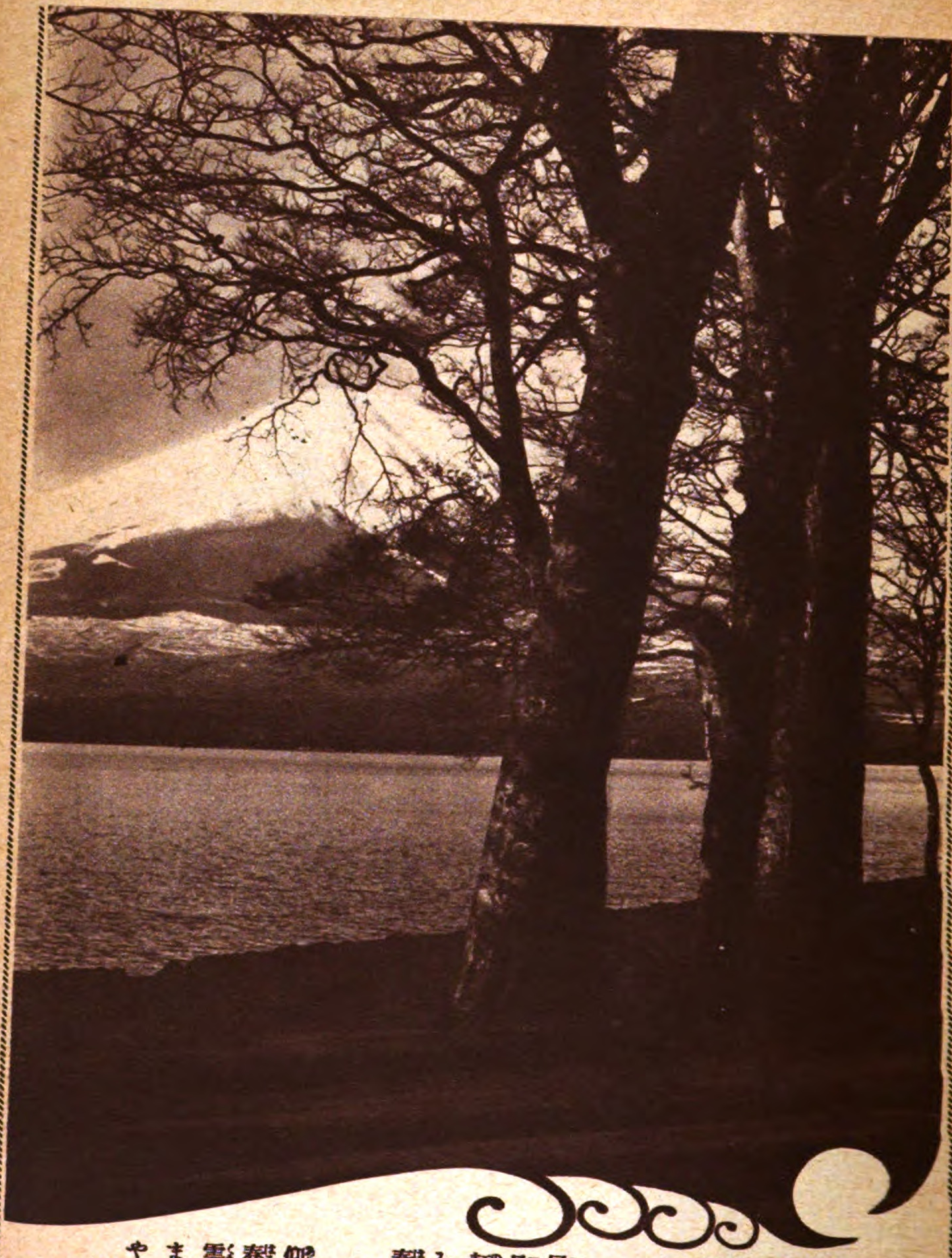
湊式吸癒療法は從來の療法に全く一新機軸を出せるもので、其方法は頗る簡單容易で、自宅にゐながらでも、又電車汽車中でも、執務勉强中でも極めて無雜作に誰にも出來、その卓効は、嘗て「キング」及「科學畫報」誌上にも發表せられてありまして、最初青いどろ〳〵した膿も次第に色濃く遂には水のやうになつて全く病氣らしい症狀がなくなつてしまひ、頭痛とか鼻が臭くてつまるやうな症狀も不思議に止みますので、一度實驗した人は皆其効果に驚かぬ人はありません。鼻病の王樣といはれる蓄膿症が前記の通りでありますから、其他肥厚性鼻炎、鼻茸、急性慢性鼻カタルなどのありふれたる鼻病に對する効果はいふまでもありません。

湊式吸癒液十瓦（六十日分）金三圓、湊式吸癒器一揃金貳圓五十錢、送料東京市内十二錢、内地廿五錢、滿鮮五十二錢、東京市麹町區下二番町十番地明光社（振替東京六〇七九六）又は「講談社」代理部へ申込めば御送り致します。

實驗報告集
（ハガキで「キング」で見た旨記入し東京市麹町區下二番町十番地明光社へ申込み次第即時進呈します）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

春浅し



山なかは
春も寒しも
落ちたぎつ
水音多く
なりにけるかな

——土田耕平

屋根の雪
日にけに解けて
軒しづく
みだれ流るゝ
春は來にけり

——平福百穗

仰ぎ見る
春のあさ空
雲あらず
ま青き色の
やゝかすみくる

——戸田龜造

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN





熱帶の暴君ライオンは饑餓に迫ると、時々狂暴な本性を發揮する。(3)は斑馬を襲ふ二頭のライオン。鮮血迸る悲愴な場面！(4)は同じく河馬を襲ふライオン。見よ！、周章狼狽、水中に逃込まんとする河馬の悲痛な表情を！





力と力――唯それ丈けが生存の條件となつてゐる動物界では、思ひまうけぬ物凄い爭鬪が、時々演ぜられる。

(1)あれ吾が仔は、逃げる遑もなく猛虎の牙に襲はれた。憤然として怒つた親象の唸り！　臼の如き巨大なる足が差伸べられたと見る間に、虎の五體は忽ちメリメリツ！と挫けて了つた。

(2)小敵と侮つて、山猫が肉迫するや否や、機先を制した山あらしは、全身の鋭い毛を逆立てゝ見事逆襲！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

亂闘









(5)樹上に於ける大蛇と大栗鼠の白熱戦！敏捷な栗鼠は巧みな戦術でジリジリ敵に迫つてゐる。

(6)海の怪物、抹香鯨が大きな口をあけて、大槍烏賊を呑まんと焦つてゐる光景。波浪躍り、飛沫天に飛ぶ物凄さ！

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

もの ゝ臭ひ！ 人の渦！
喧騒！ その市場に立つてゐると、何となく私達の生活が鼓舞されてゆくやうな氣がして、懐しいものです。



(1)魚市場
『鹽引の腹に三つ四つ年の豆』（川柳）



(2)羽子板の見本市
『羽子板を預けて帯をしめなほし』





(3)干柿市場
『よく見れば手の跡くだけ澁い柿』

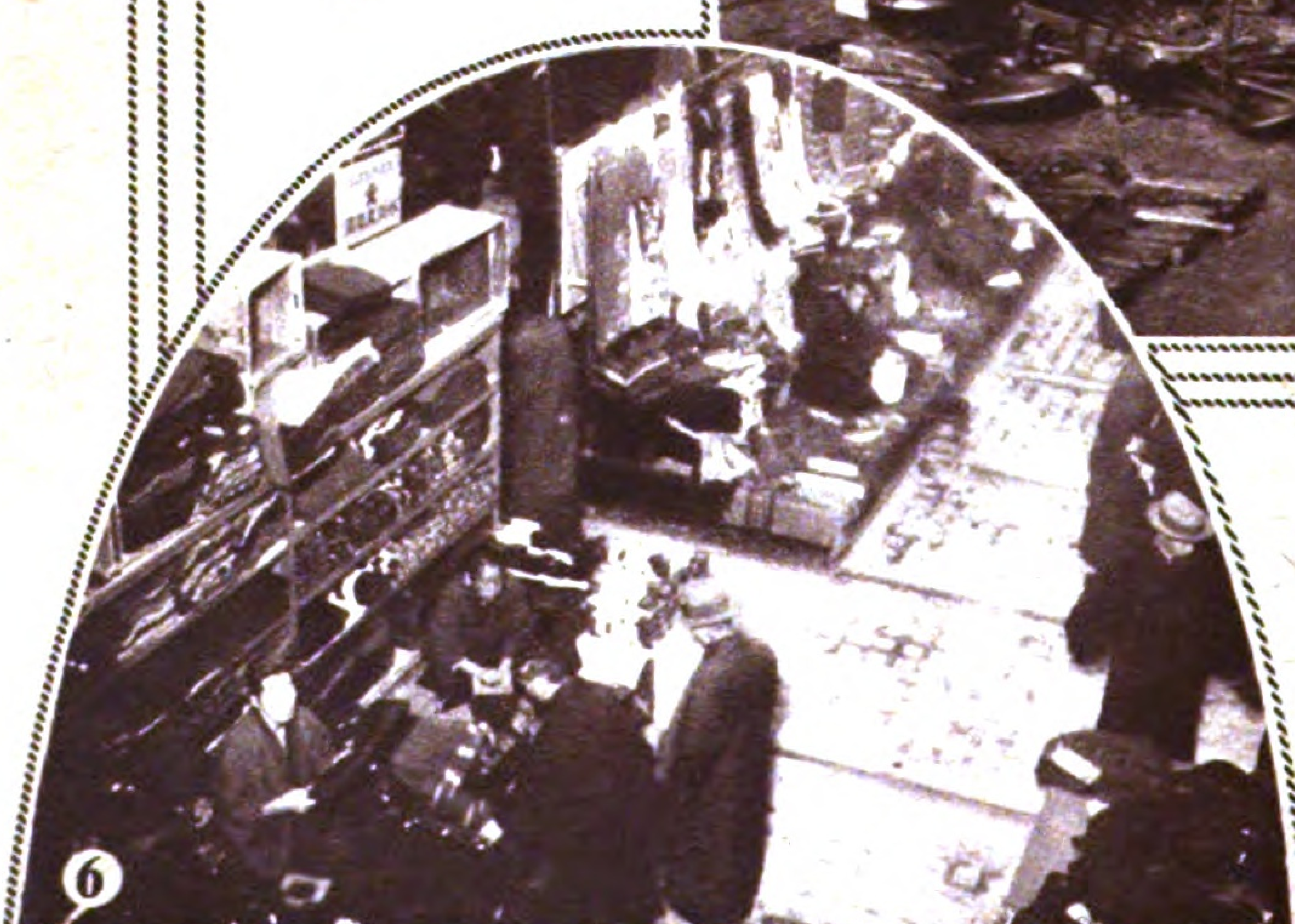






(4)野菜市場『ひんぬいた大根で道を敎へられ』

(5)古道具市場『金鎚が出て鉤裂きの仇を打ち』

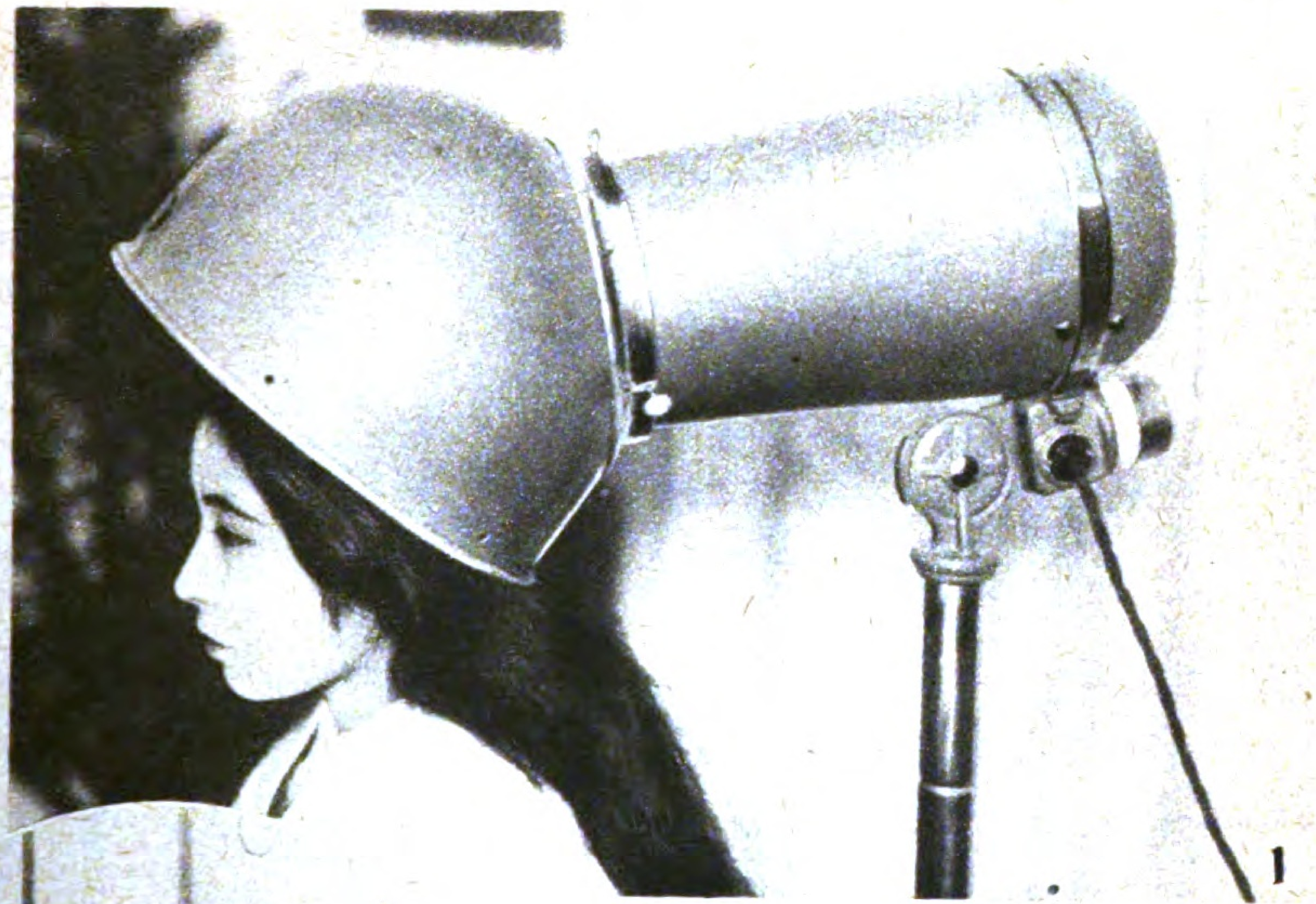


(6)古着市場『吳服店なにやらいふと持つて來る』

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

電氣

此處に掲げたのは様々の方面に利用されてゐる、電氣の力であります。



1

(1)これは電氣を應用した婦人の頭髮乾燥器(ヘイアドライヤー)です この器械を使へば、どんな洗ひ髮でも僅か二十分位で忽ち乾いて了ひます。

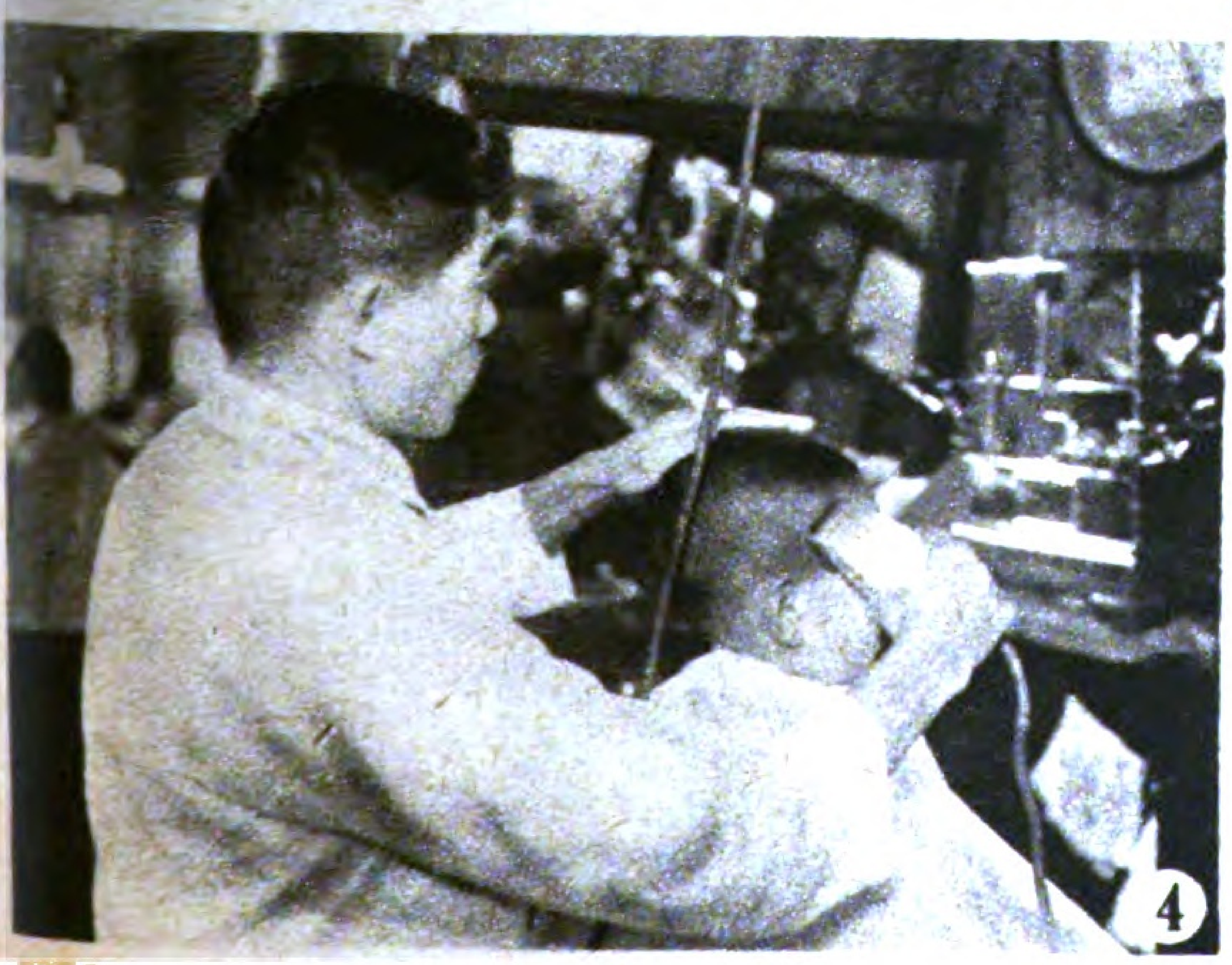


3



2

(2)日本にはまだ珍らしいユージインといふ器械。電氣で髮をウエーブするものです。



4

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

の　力

(3)は電氣體操機です。扉にかけた帶が震動して、居ながらにして獨りでに體操が出來ます。

(4)此の頃床屋さんにドンドン使用されてゐる電氣バリカン。

(5)重寶で便利な電氣冷藏庫、中で隨意に氷が出來る仕掛になつてゐます。

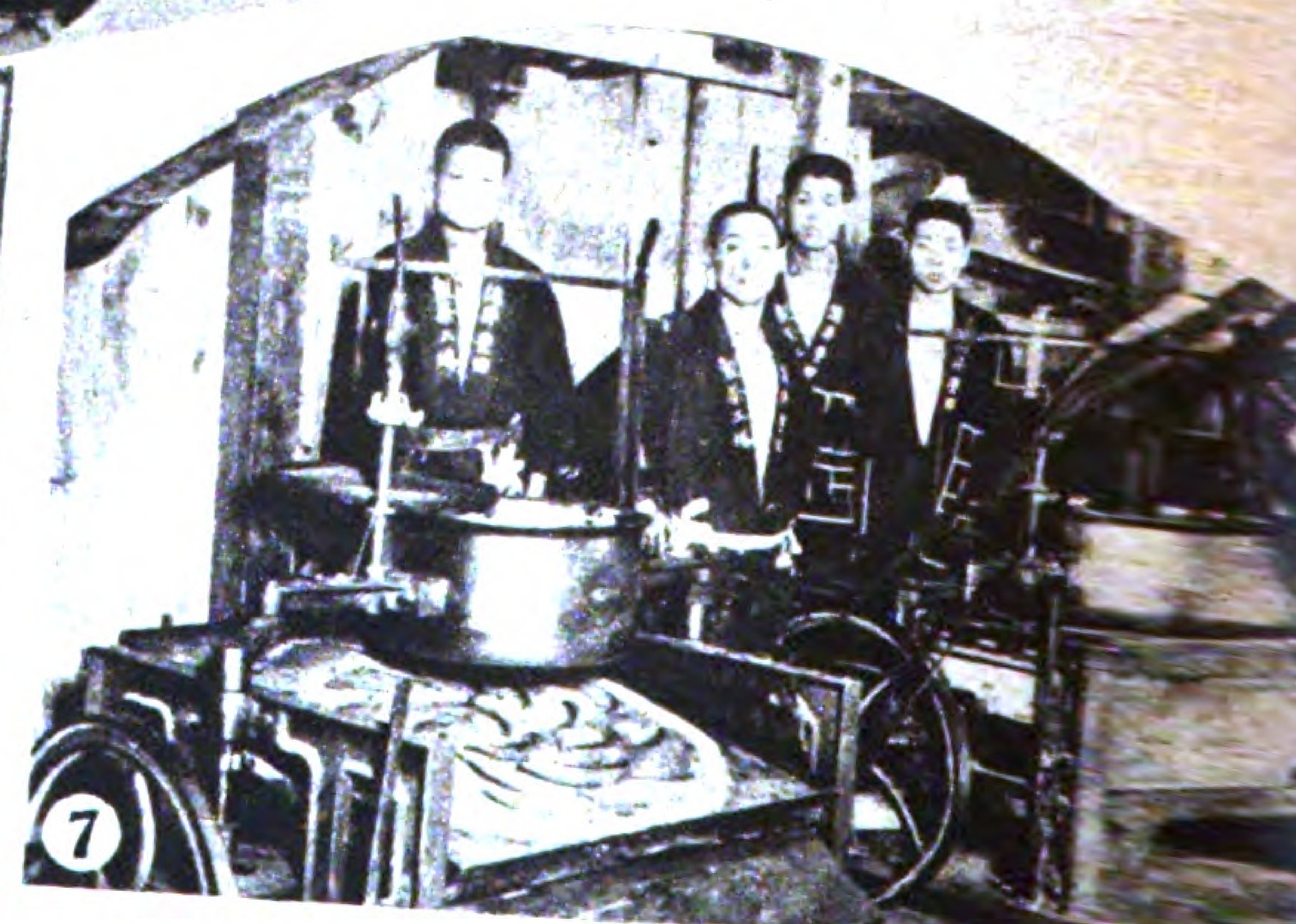


5



6

(6)農村に進出しつゝある電氣籾摺機。四分一馬力のモーターで一時間に玄米一石五斗位は出來ます。



7

(7)此の頃はお茶の葉を捻るのも手などではありません。チャンと機械の力を借りて立派にやつてのけます。

(8)これは電氣應用の眞空掃除器。ドンナ埃でも不思議な程綺麗に吸込んで、何の苦もなくお掃除が出來ます。



8

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN





ぽかぽか暖かいお日さま！　地にうつつた影法師！　お手々をつないだニコヤカな子等！　聞えて來る朗かな童謠、全てが懐しい春の景物です。　土筆よ！　蒲公英よ！　早く芽を出せ子等のために……

體驗者 加藤港述…

はい病の全快法

社會奉仕・再生記念

無代進呈

御安心下さい肺病は必ず治ります。私の治つたが何よりの證據です私は數年前から猛烈な肺病にかゝりあれこれと隨分金も使ひ有名な先生にも見ていたゞき人がいゝと云われる藥や療法は勿論木の實草の根、虫やけものゝキモに至るまで數限りなく試みましたが何れも一向にキヽメなく日増にやせ衰へ家人には恐れ嫌われ只死を待つばかりの心細い身の上となりました所、フトした動機から發見した合理的療法により僅か二ケ月半の後には立派に元の身體になる事が出來ました。

昔から「病んで醫者になる」の諺通り今では肺病の事なら專門家も及ばぬ程體驗による實際の智識を得ました爲に近頃世間に發賣してゐる色々な賣藥の內幕や療法なども悉く知つて居ます無論藥は必要ですが此の病氣ばかりはどうしても服藥をすると共に攝生を合理的にしなければ決して早く完全に治るものでありません。

この合理的療法により完全に治つた私の現在は御覽の通り人一倍元氣に働くやうになり今では僅か乍ら蓄財も出來恵まれた家庭の中に樂しく暮して居ます。

それにつけても全國に百萬人以上も現に肺病で惱んでゐる人達があると聞くにつけ私の苦んだ當時を思出し氣の毒でなりませんので此のたび貯蓄の一部をさいて病氣當時の實驗や藥の選び方を初め息切れ、セキの止方喀血した時の手當法、肺病を治すに何より大切な食物等を委しく記述した肺病全治の極意とも云ふべき寫眞入で約五十頁の書物を作り私の治つた御禮の意味で人助けのために無料で差上げて居りますから御病人は勿論其の御家族の方でも此の記事に目がついたのが幸です御遠慮なく近所の方は私宅へ、遠方の人は手紙で「肺病の全快法」を記述した書物を送れと御申込下さいドナタにも無料でスグ送つて差上げます。

東京下谷上根岸町九六皆統寮內 加藤生

鶴見祐輔先生第二作

最後の舞踏

何といふ輕快、新鮮、優艶さであらう

風薫る南國、キューバ島遊覽のダイノソール船客、高山巖――聰明にして快活、風姿颯爽、この日本青年をめぐりて――



代表的ヤンキーガアル、ドロシー孃

花の如きアメリカ娘あり、妖艶なパリの未亡人あり、
明眸比ひなきイギリス美人、情熱的なロシヤ女あり、
世界各國の學者、政治家、富豪あり、それらの人々の間にあつて、如何に彼が賢明に快活に、自由に振舞つたか？

星降る夜の甲板上の戀は濃艶哀切

世界人を相手にその言動は爽快痛快、而も得意の柔道を揮つて、暴漢を懲す快場面あり、堂々日本の權威を示す感動感激の大場面あり、その間、國際知識、社交禮法は縱横に織込まれ、全卷に漲る異國情緒は讀者自ら海外に遊ぶの感あらしむ。

青年も學生も、紳士も淑女も何人も見よ！

重版！重版！忽ち二十七版！！ ―全國書店にあり―

四六判布装 極美本 定價壹圓八十錢（送料二十二錢）

東京本郷駒込（振替東京三九三〇一）

大日本雄辯會講談社

一滴！ タマ一滴!!
見る〳〵澄んで黒水晶の様な眼差しに……

◇…どんな眼でも忽ちパッチリ鈴を張つた様に美しくなる
◇…濁つた眼も涼しく澄んでいき〳〵した眼となる
◇…ドンヨリした眼も見る〳〵冴て瞳が清らかに潤が出る
◇…ウツトリと見とれる様なチヤーミングの眼差となる
◇…眼中爽快！眼性がよくなり眼に疲れが來なくなる

魅力と潤ひある美しい眼とする

〔美眼液〕

パミール

パミールは眼を美しくするばかりでなく眼を丈夫にし眼性をよくし眼の疲勞を快復する事實に妙で魅力に富んだ美しい眼を望まれる方は是非一度御試し下さい必ずビツクリ致します

携帯用 ¥1.80
中……¥2.80
大……¥6.00
送料 内地¥.15 領土¥.50

發賣元 大日本雄辯會講談社代理部
東京本郷駒込 振替東京六六二九番



全國藥店、化粧品店、百貨店に販賣
代理店 大木、玉置、福井、中田

肺病や肋膜炎に惱める方々へ

ドクトル　尾山瑞雄

一、肺病や肋膜炎は養生次第で必ず治すとのできる病氣であります。それにも拘らず、世上肺病に惱める人々の多いのは何故でせうか？それは病者自身が適確なる療養上の知識をもたないのと、今一つには療養上最も大切なる藥物の選擇法を誤つてゐる爲であります。實に現代は肺病藥の洪水時代とも言ふべく、その數は驚くべき多數に上つてゐます。けれども頑強なる結核菌に對して、眞に徹底的の作用を及ぼし、肺病を根治に迄導くに足る藥物は、なかなか得難き實狀なのであります。

私は藥物研究の爲、米國に數年間留學いたしまして、只管理想的肺病藥の完成に苦心努力いたしました結果、幸ひにも此れならば誰方にでも責任を以てお奬めのできるといふ、最も理想的且合理的なる新しき藥物の創製に成功することができたのであります。それが即ち『ツベルシン』であります。この『ツベルシン』が從來の諸種の肺病藥に比して最も勝れたる特徴は、實に左の三つの點にあります。

（一）結核菌の蠟樣皮膜を溶解してます〳〵喰菌作用を促すのに著しき効果がある。

（二）結核菌を孤立せしめて諸他の病原菌との混合傳染を未然に防止する。

（三）菌體の毒素を稀釋して患者の最も恐るべき身體の消耗衰弱を喰ひ止める。

以上の三大特徴は、從來の肺病藥には絶對になかつたもので、獨り『ツベルシン』のみが有するものであります。故に本劑の服用に依つて先づ患者は著しき食慾の增進を覺え更に連服する時は、最も短時日のうちに體力の恢復に伴うて熱は下り、盜汗もかゝなくなり、咯血や血痰もピタリと止り、次第に血色も生々となつて、今迄減る一方であつた體重もメキメキと增加して來るのであります。然も『ツベルシン』はその藥効の著しいのにも關らず、從來の肺病藥に有勝の危險なる副作用等は絶對にありませんから誰方も安心して服用を續けて頂くことができるのであります。（「ツベルシン」に就ての更に詳しい記事はキング昭和四年七月號三四八頁八月號二六〇頁を御參照くださいませ。）

最後に私は理想的肺治療藥『ツベルシン』の創製者として、世の肺病者諸氏へ大なる確信を以て本劑の御試用をお奬めいたします。事實この『ツベルシン』の服用に依り、初期の輕症患者は言ふまでもなく、二期三期の重症患者で、今迄に全治の悦びを得てゐられる方は、多數に上つてゐるのであります。されば現に肺病でお惱みの方々は勿論、肋膜や肺尖加答兒で御心配の方も治癒困難の腸結核等の方も、どうぞ一日も早く『ツベルシン』の服用に依つて永久に病苦の境から遁れていたゞきたいとお祈申上げる次第でございます。

▲右の「ツベルシン」は東京市牛込區原町三ノ二吉松仁平藥局（振替東京六六六一番）か又は大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）へお申越ください。二週間量七圓、五週間量十五圓、十二週間量卅二圓、送料何れも內地十八錢、領土四十五錢。發送は振替又はカハセ着金次第尙又不便の地は代金引替小包でも取扱ひ何れも嚴重小包にて發送致します。（御注意。初期の方なれば二週間量でも結構ですが稍々進んだ方は五週間量、重症の方ならば初めから十二週間量を注文になればお得であります。）

進呈

△キングで見たる旨を記し、「ツベルシン」製劑元たる東京市牛込區原町三丁目二番地吉松仁平藥局宛へハガキでお申込になれば、肺病根治に就ての正しき方法を教へた詳細なる冊子を、誰方にでも無代で差上げてくれます。御遠慮なくお申込なさいませ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



大人物の眞面目

此の一點を見よ！

大木と蟬

南洲翁の偉大さ

安倍季雄
小山榮達畫

ある人が、西郷南洲先生に、何か御教訓をと請うたところ、先生は暫く默想して居られたが、やがて吐き出すやうに、

『世の中に、借金ほど恐ろしいものはござらんな。』

といつて、口をギユウと結ばれたといふ事である。金が敵の世の中、今の時世に沁々と考へさせられる話である。

これも金に關する面白い挿話。

ある日、出入の者が深切に、夫人に向つて、

『川邊町の近所に格安な田地の賣物がありますが、お買入れになつてはいかゞです。』

と勸めた。夫人は何かの時の用意に、買つて置いても惡くはあるまいと考へたので、

折を見て先生にその事を相談されると、先生は、例の大眼玉をギロリと光らせて、藪から棒に、
『宅の子供達のうちで誰が一等馬鹿かな？』
と尋ねられた。あまり思ひがけない質問だつたので、夫人がもぢ／＼して居ると、重ねて、
『いやさ、魂の入つて居らん奴は、どの子かときいて居るのぢや。』
といつて、ハツタと夫人の顔を睨まれたが、やがて居ずまひを直して、
『人間は、善か物食うて、善か着物着て、善か家住まふなどと思ふのは大間違ひの骨頂ぢや。子供でも、親から金貰ろて勉強するやうな者は、後々、碌なお役にたたん。うちにも魂の入らぬ馬鹿息子でも居れば、田も畑も買はねばなるまいが、幸ひと皆人並みと生れとる。田地買うて何とするのぢや。餘計な心配はせぬがよいわ。』
と言はれたので、話はそれなりになつてしまつた。

幾歷二辛酸一志始堅　丈夫玉碎恥二甎全一
我家遺法人知否　不下爲二兒孫一買中美田上

これが先生の本當の心持であつた。先生は滅多に餘計な口をきかれない代りに、其の一言々々には大磐石のや



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

うな重みがあつた。
嘗て板垣退助が、雄辯家の後藤象二郎に向つて、『貴公と西郷どんが話をして居る處は、まるで松の大木に蟬がとまつて居るやうぢや。蟬は一日中ガアガア〳〵鳴いて居るが、松の大木は默々として知らざるものの如しだ。西郷は大きいな。』
と笑ふと、剛愎の後藤も頭をかいて、『その通りだ。西郷と論談して居る時は、いつも自分の勝のやうに思ふが、西郷どんに別れて家に歸つてからゆつくり考へ直して見ると、西郷どんの言はれる通りだ。なる程〳〵と思ふ事が多いよ。西郷どんには迚もかなはんな。』
といつて、苦笑したといふ話がある。
五稜郭の榎本武揚、刀折れ矢盡きて官軍に降るや、廟議、死罪を主張する者が多かつた。それを極力庇護したのは南洲先生であつた。武揚深く之を德とし、勝海舟邸で偶然南洲先生に面會した時、再生の恩を謝し、ひとへに先生のおかげでありますといふや、先生嚴然として喝一言、『そげな事ごあはん！』武揚再び言ふ能はず、退いて人に語つて曰く、『あんなに怖しいと思つた事は生れてはじめてだ。』





Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN



七十五仙で當選した
リンカーン

岩崎英祐
富田千秋畫

米國大統領であり、人道の戰士として名高いエブラハム・リンカーンは一生を淸貧で通した人であつた。

リンカーンは二十三歲の時、始めて州會議員の候補者として起つたが不幸にも落選の浮目を見た。さなきだに赤貧の彼は、これによつて益々赤貧の度を加へた。

話はその後彼が、ホイッグ黨（現在のレパブリカン黨の前身）から推されて州會議員の候補者となつたときのことである。

赤貧の彼れには勿論選擧費用などありようがない。それで黨から援助してくれたけれど、その金額とても僅か二百弗にしか過ぎなかつた。

彼はこの少額の費用を以て堂々と戰ひ、見事當選の榮冠を贏ち得た。

ところが、それから數日たつて後、ホイッグ黨の本部にリンカーンの手紙が屆いた。開いて見ると中には百九十九弗二十五仙が入つてゐる。そして選擧費用は七十五仙で間に合つたから殘額は御返しする旨書添へてあつた。

僅か七十五仙で當選―あまり不思議なのでだん〳〵尋ねて見ると彼れの言葉はかうである。

『當時演說會場費や辨當等は總て有志が支辨して吳れたのと、自分としては馬にのつて選擧行脚をしたのであるから費用がかゝらなかつた。唯有志のうち咽喉が渴いたと言ふものがあつたので飮料水（アップル・サイダー）を買つてやつたが爲に七十五仙を使つたに過ぎない』からだと、リンカーンは語つた。

事實は單にこの短い物語りに過ぎないが、淸貧で一生を通したエブラハム・リンカーンの眞面目さ、正直さ、嚴肅さが躍如としてをつて、誠に奧床しい限りである。



蚊に食はれた

乃木將軍

大内道夫

渡部審也畫

明治三十七年日露戰爭の際である。黑井悌次郎海軍中佐（現在の海軍大將）は旅順攻圍軍司令官乃木將軍の下に從軍することとなつた。

特別使命を帶びた中佐が、若干の部下を率ゐて旅順に赴き、將軍に挨拶した時、將軍は徐に中佐に對し、

『何分海軍の方々が陸地で仕事をされるのであるから萬事に勝手が惡いことだらうと察する。精々注意してあげるから陣中不自由の中でも決して遠慮なく申出でられるがよい。』と何かと親切に申述べられ、側らに居つた經理部長にも同樣に指圖をされた。

中佐の一行は將軍の言葉に感激し、

『あの方の爲めなら俺も生命を投げ出して君國の爲に報じよう。』

と層一層精鋭の氣魄が湧いて來た。

折柄炎熱の候である。蚊軍は毎夜に攻め立てるので、中佐はホト〳〵閉口してしまつた。そして烏滸がましくも將軍の手許には二つや三つの蚊帳はあるものと推斷し、



或日のこと將軍の前に罷り出でた時、蚊帳のことをお願ひ申上げて見た。處が早速に大きな新しい『レース』の蚊帳を下されたのである。

　中佐は喜び勇んで舞ひ戻り、自分獨りで使ふのは餘りに勿體ないので、部下五、六人が一緒に頭だけ突込んで毎晩使つた。ところがこの蚊帳は爲んぞ知らん將軍自身の蚊帳であつたのである。

　相變らず炎熱の夜は續く。

　一方蚊帳を中佐に贈られた乃木將軍はどうかといふに、蚊帳がなくなつたので支那家屋の土間の上に上着だけ脱られて腕組をなし、壁にもたれて胡坐のまゝ、僅かなる睡眠をとられるか、さもなくば土間の上に敷かれた『アムペラ』の上に横になつて眠られたのである。

　或日のこと中佐は、この老將軍の美しき行爲を洩れ承つて將軍の量り知るべからざる慈愛に感泣、恐懼したと共に、輕率なる願望を大に悔いられたと云ふ。勇猛果敢古今に絶せる天下の武將、乃木將軍の半面にはかくも慈愛に富んだ美しき物語がひそんでゐる。因にこの蚊帳は現在でも黑井家の家寶として『乃木將軍情の蚊帳』として大切に保存されてをる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『我輩が責任を負ふ』と叫ぶ

ムッソリニ

澤田謙
吉邨二郎畫



今は伊太利の大宰相として時めくムッソリニが、まだ墺太利領トレントで、新聞記者をしてゐたころの話である。

『伊太利と墺太利とは、アラを以て國境とすべし。』

といふ一文が、墺太利官憲の忌憚に觸れて、忽ちに捕縛された。

手錠手枷をはめられたムッソリニが、引つ張つて行かれたところは、皮肉にも、そのアラ市の警務部長の官舍であつた。

『直ちに墺太利を追放す。自今、領内に止まることを得ず。』

それが官憲の嚴命であつた。柱時計を見ると、午後正一時である。汽車の出るのは午後七時であつた。

ムッソリニは、例の巨眼をキョロつかせ乍ら重々しい口を開いた。

『ちやうど六時間ある。何うでせう、男爵、我輩が領内を立ち去るまでの間、自由にしては頂けまいか。』

警務部長は、この大膽な提議にギョッとしたのか、頭の頂邊から足の爪先まで、見上げ見下ろした。しかしムッソリニの態度には、鵜の毛でついたほども、悪びれたところはなかつた。

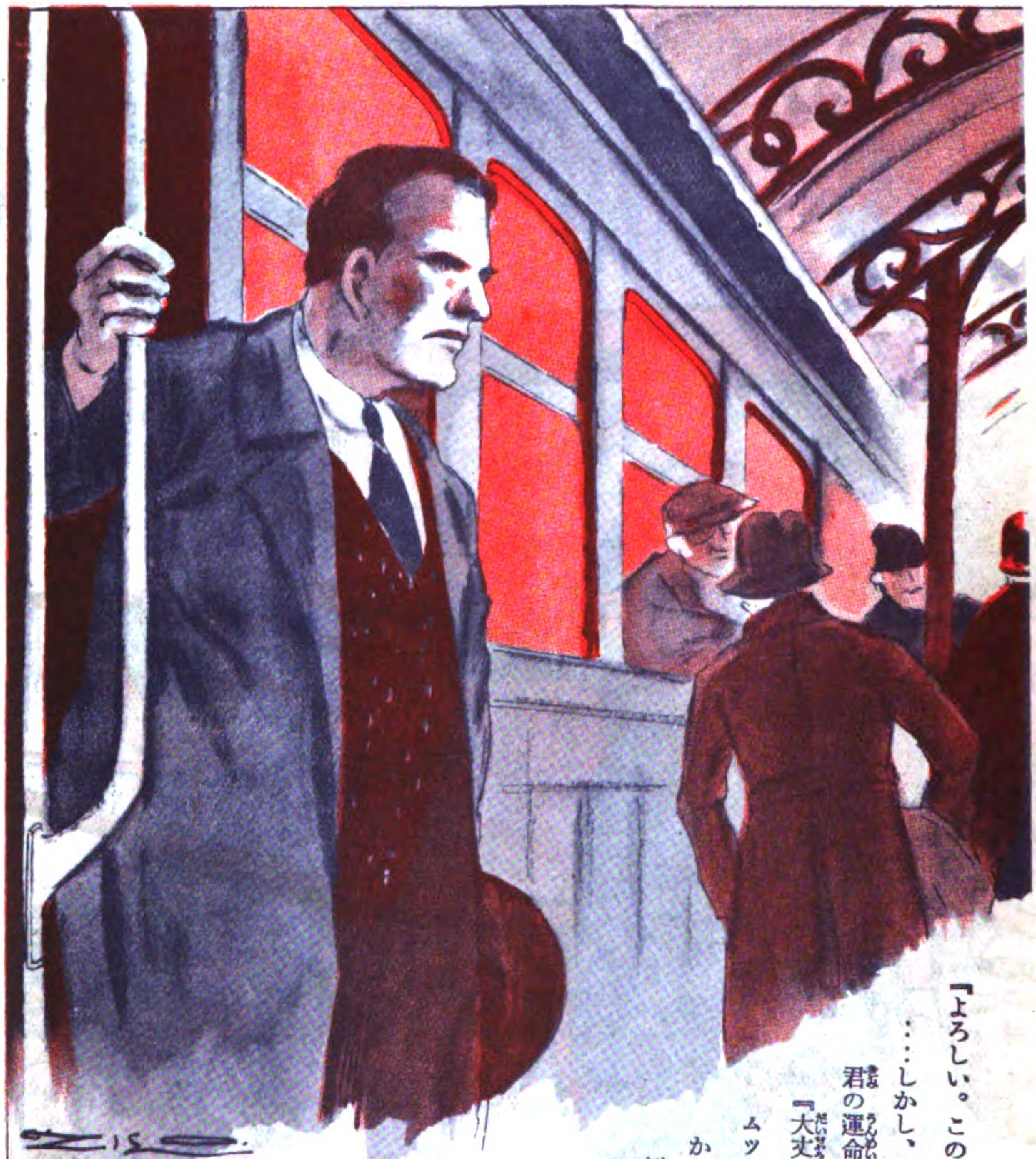
『うム、……しかし若し君が、發車の時間までに歸つて來なかつたら、君の身柄の責任を負ふ人が、誰かあるかね？』

男爵は、かう尋ねた。するとムッソリニの答は意外であつた。

『その責任は我輩が負ふ。』

まるで、借用證書の保證人に、本人が立つと同じだ。

この男らしい答が、男爵の氣に入つた。



『よろしい。この六時間の間、君を自由にしよう。……しかし、夕方の七時！　一分でも遲れたら君の運命の破滅だよ、いゝかね。』

『大丈夫。誓つてお約束いたします。』

ムッソリニは手錠をはづされた。それから六時間、アラの停車場には、發車の合圖を待つ汽車が黑々と黑い煙を吐いてゐた。

と、その一刹那である。先程から、プラットフォームを往つたり來たりしてゐた男爵に、輕く目禮をして、ヒラリ列車に飛乘つた男があつた。それは誰れであるか說明する迄もない。

男爵は、自分の地位を賭した義俠的行爲が立派に酬いられた事に對し、思はず滿足の微笑をもらした。

農夫を泣かせた

品川彌二郎

大倉桃郎

川瀬巴水畫

雨の中、代々木の畑ぞひ道を、一人の農夫が肥料車を挽いてゐた。泥濘が深い上に大凹みにかゝつて轍がねばる。汗かいてもちよつと動きにくかつたところへ、折も折前方から二頭立の馬車が走つて來た。

一方は溝川である。道も廣くない。すれちがふゆとりがない。大官の通行と見てとつた農夫は狼狽てた。道をふさいで叱られると思つたからである。だが避けようにも車が動かない。いよ／＼焦つた。



果せるかな近づいた馬車の御者は、鞭をふりながら屹と睨んだ。

退けつ――怒鳴らうとしたその刹那である。

『止めろ。こつちを止めろ。』と、喝したのは、馬車の主であつた『無理をしてはいかん。』と云ひ乍ら下に降りたのは立派な大官であつた。そして乗つてゐた馬車を能きるだけ横へ片よせさせた。それから御者に命じた。

『あの肥料車の後を押してやれ。』

主人の申しつけである。御者はしぶ〳〵に農夫に力を添へる。進みかねてゐた車はやうやく泥濘を破つて動きだす。大官はやさしく農夫に聲をかけた。『御苦勞だな。道がわるいで骨が折れるだらうな。』

『有難うございます。お邪魔をいたしました。』と、農夫は鉢卷をとつて涙ぐんで過ぎた。

やりすごして馬車を直させ　再び乗り移つた大官は、御者をやはらかに諭した。『農事は大切だ。農夫は昔から天下の大御寶といふ、萬石の米も農夫の粒々辛苦の働きからできる。今のは農業に大切な肥料桶を積んだ車である、あれを挽く苦勞を思へ。そまつに見てはならんぞ。』

『恐れ入りました。』と御者は赤面した。この大官は誰あらう、純潔誠實を以て鳴つた明治維新の偉勳者、時の内務大臣品川彌二郎であつた。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

恐怖の獄中に印度經を繙く

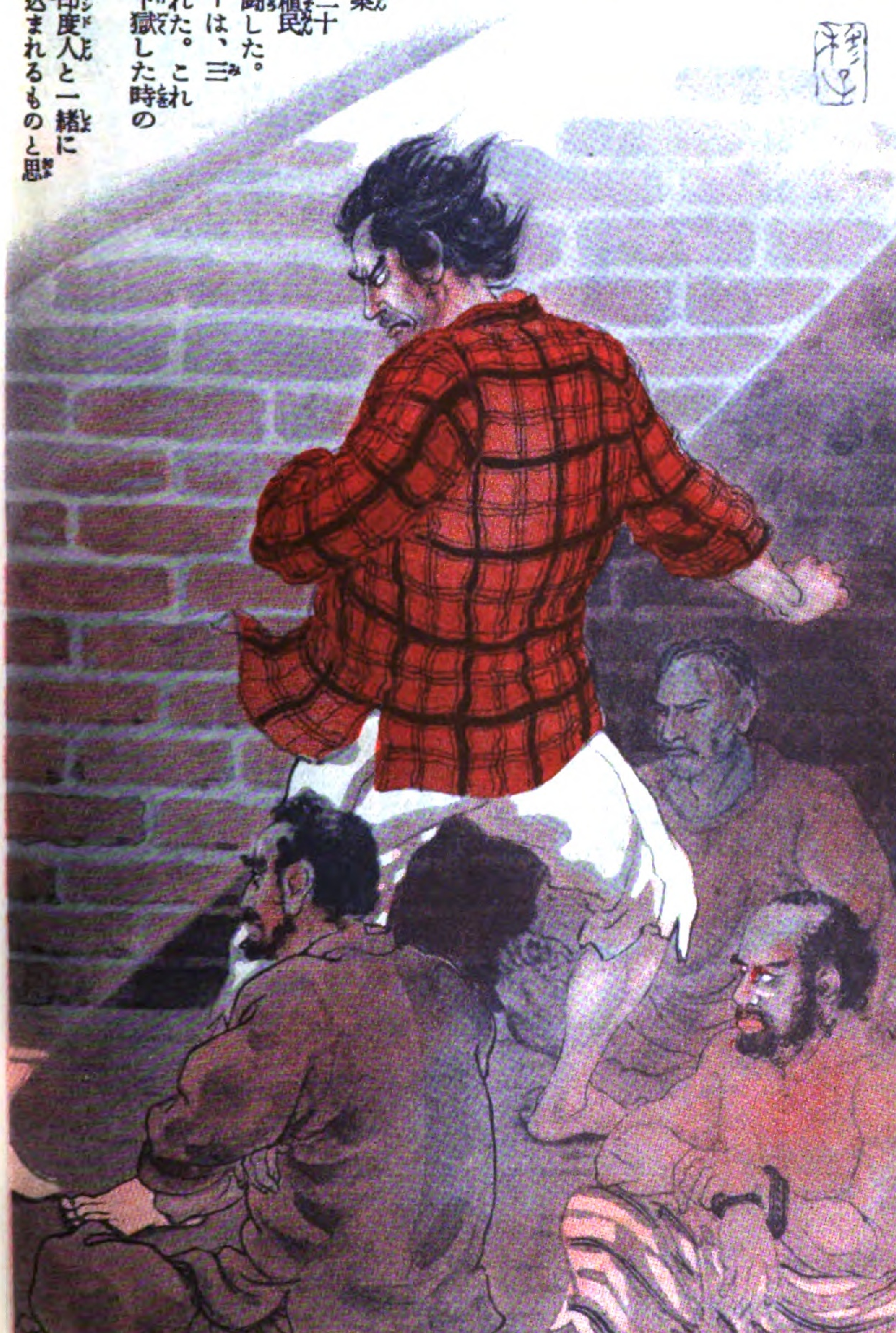
聖雄ガンヂー

風間清
本田穆堂畫

迫害と忍苦の文字でつきてゐる二十年間——實に印度の聖雄ガンヂーは、南阿弗利加に於ける同胞印度人が白人の迫害を受けて悲慘な境遇にあることを憤慨し、非人道的なる差別法案撤廢のために、二十年の長い間英國植民地政府と惡戰苦鬪した。

その間ガンヂーは、三度牢獄に投ぜられた。これは彼が二度目に下獄した時のことである。

彼は最初他の印度人と一緒に同じ監房へ投り込まれるものと思



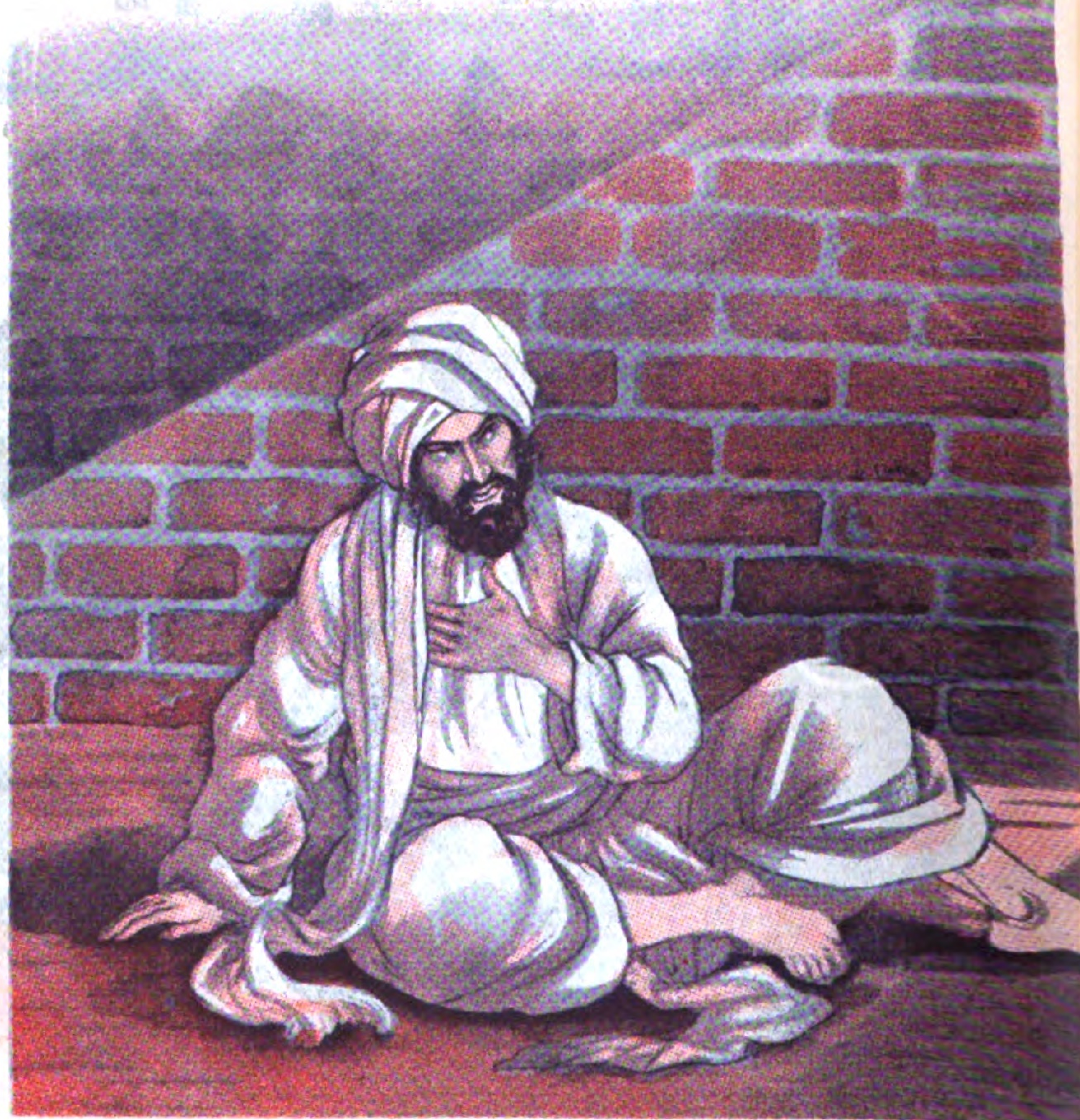
つてゐた。が、意外にも彼の入れられたのは南阿土人や支那人ばかりの、しかもみな兇悪残忍な殺人犯人や强盗で充ちてゐる監房であつた。

ガンヂーが監房へ入つて行くと、イキナリ一人の獰悪な形相をした南阿土人が彼に近づいて、土語をもつて何やら話しかけた。ガンヂーは彼等の言葉が分らぬので默つてゐると、忽ち彼を嘲弄、罵詈し始めた。

それから、ガンヂーが便所へ入ると、後から一人の南阿土人がやつて來て、亂暴にもガンヂーを引摺り出した。しかし同獄のものはこの有様を見ても誰一人としてガンヂーに同情しようとする者はなかつた。

牢獄の一夜は恐怖と苦痛のうちに更けた。が、曉になつて、ガンヂーは思ひ出したやうに携へ來つた印度經の聖典を讀み始めた。そして長い間默想してゐる間に、一道の光明が彼の心の中に閃めいた。『同胞のためにわが身にふりかゝる苦みを耐へ忍ぶのが自分の義務である――』と考へると、恐怖は心の中から消え去つた。

翌日、ガンヂーは他の印度人囚の監房に歸された。と、看守がやつて來て彼に向ひ、『獄内の便所掃除のため二人の印度人囚を出すやう。』と命じた。と、ガンヂーは言下に答へた。『その仕事はどうか私一人にやらして下さい。』



この輝かしいガンヂーの精神こそは、他日聖雄と崇められ、二億の印度民衆を率ゐて彼等を手足の如く動かし得た所以である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

門下に教を乞うた

高島秋帆

鈴木彦次郎
近藤紫雲畫

秋は攘夷熱の盛んな幕末のことである。

我國洋式兵法の元祖、砲術の大家である高島秋帆も、毛唐に心を寄せるといふ疑ひをかけられ、遂に無實の罪に問はれ、監禁された。

この意外な飛報に駭いて江戸に馳けつけたのは、秋帆の一番弟子、伊豆の豪族、江川太郎左衞門であつた。早速幕府の當路者に對し、師の高潔な心事を說き、しきりに御赦免を願つたが、頑固な幕府の役人は一向耳を藉さなかつた。

その內に數年は空しくすぎた。

時勢も變り、幕府にも漸く秋帆の偉大さがわかつたので、やつと江川の願ひを聞屆け、秋帆の監禁を解いた。

大いに喜んだ江川は、すぐさま秋帆を自邸に引取つて、常に上座に置いて、どこまでも先生として崇め師禮をつくした。だが、秋帆が數年監禁されてゐる內に、江川太郎左衞門の努力に依



つて、砲術の研究は素晴しく進み、今は秋帆の知識技術も及び兼ねる有様だつた。この様子を見てゐた服部といふ塾生は、或日、江川に向ひ、忠義顔して、

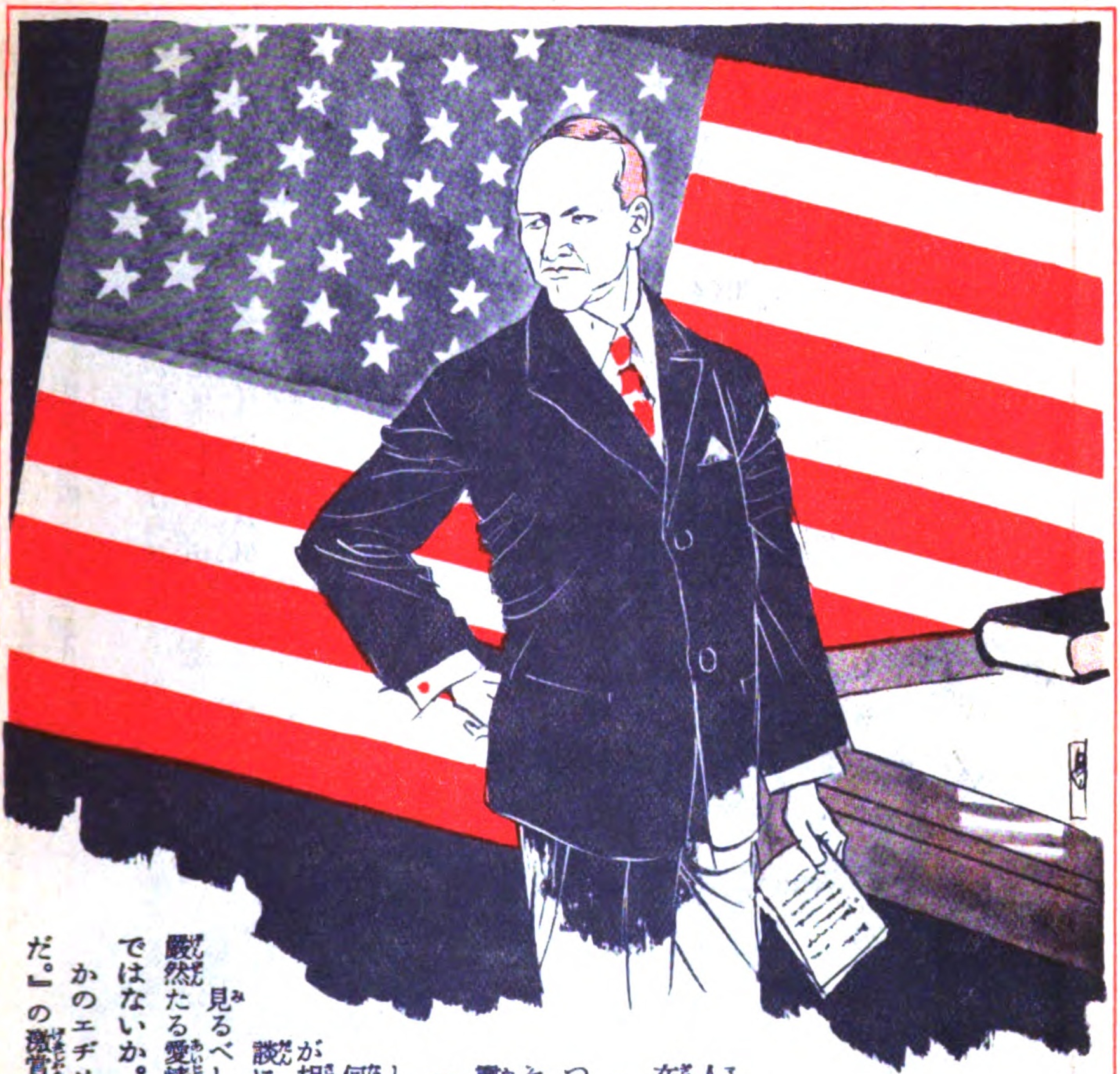
『先生は、如何にも高島氏から教を受けられたでせうが、先生の改良と發明がなかつたら、よもや今日ほど完成してはゐなかつたでせう。さすれば、以後は秋帆如きを師と仰がず、別に江川派と稱して一派をたてられた方がよろしいと存じます。』と述べ立てた。すると江川は、顔色を變へて怒り出し、

『だまれ、汝の師は即ち高島先生の門弟である。今日の砲術家として誰一人先生の御恩を受けぬ者はあるまい。その尊い先生を、輕んずるなどとは以ての外な奴ぢや。』と、嚴しく訓戒を與へた。

が、一方秋帆もさすがに大人物――自分が監禁中に砲術の改良されたのを知り、心から打ち喜び、六十餘の老體を物ともせず、稽古袴を着けて、自ら砲を手にして、江川のみか、その若い塾生達へも、頭を低くして熱心に新式砲術を習練した上で、再び江川と共に研究に研究を重ね、益々その完成をはかつた。

かうした聞くも涙ぐましい程、うるはしい師弟愛に培はれて吾が國の砲術や兵法は異常の發達をとげたのである。





エヂソンを感嘆せしめた

クーリッヂ

立花丈夫

石井朋昌畫

ジヤズと黄金の殿堂——米國にも稀に見る沈默の人として畏敬されてゐるクーリッヂが、まだ大統領在任當時の話である。

彼の一人息子のジョンは大學を卒業することになつたので、父の大統領に就職斡旋の手紙を送つた。

その手紙を貰つたクーリッヂ氏は早速息子に返翰を書いて曰く、

『父は御身の就職口を捜すことには絶對に同意し難し。唯御身が將來從事せんとする希望の業務に對し、何職業が最も適當せるやとの判斷に迷ひありて御身が相談せらるゝならば、予は父として喜んで判斷の相談には應ずべし。』云々。

見るべし、彼の處世に對する眞劍なる態度、息子に對する嚴然たる愛情とは、この短い手紙の中に油然として溢れてをるではないか。

かのエヂソン翁までが『クーリッヂこそは眞面目な男の典型だ。』の激賞してゐる。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

一九三〇年式 ビウイク號

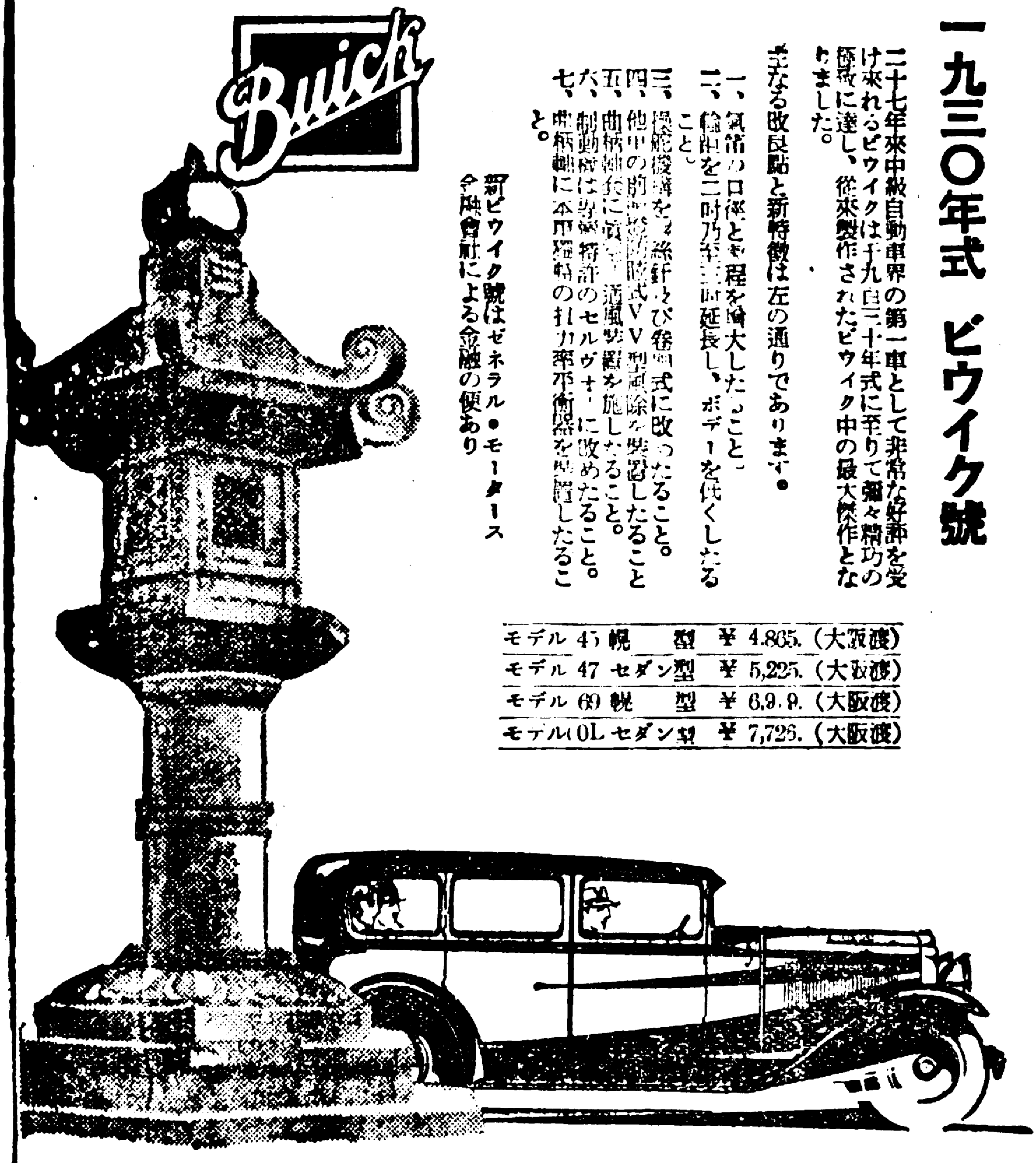
二十七年來中級自動車界の第一車として非常な好評を受け來れるビウイクは千九百三十年式に至りて彌々精巧の極致に達し、從來製作されたビウイク中の最大傑作となりました。

主なる改良點と新特徴は左の通りであります。

一、氣筩の口徑と衝程を増大したること。
二、輪距を二吋乃至三吋延長し、ボデーを低くしたること。
三、操舵機構を螺絲杆及び齒車式に改めたること。
四、車中の前部に換氣防塵式VV型風除を裝置したること。
五、曲柄軸室に新式通風裝置を施したること。
六、制動機は專賣特許のセルヴォー式に改めたること。
七、曲柄軸に本邦特許の扭力平衡器を裝置したること。

新ビウイク號はゼネラル・モータース金融會社による金融の便あり

モデル 45 幌型	¥ 4,865.	(大阪渡)
モデル 47 セダン型	¥ 5,225.	(大阪渡)
モデル 69 幌型	¥ 6,9.9.	(大阪渡)
モデル 60L セダン型	¥ 7,726.	(大阪渡)



日本ゼネラル・モータース株式會社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

聽け千古に

識見を高め人物を磨く絶

重版又重版、何れも大好評

現代日本の偉人大家の名演説、大識見を居乍ら聞ける、萬人必讀の大名著

▲**永井柳太郎氏大演說集**
（永井柳太郎氏の代表的大演說集、愛國の熱誠紙上に燃ゆ。）
四六判洋裝美本・定價一圓五十錢・送料八錢

▲**永井柳太郎氏大演說集第二集**
（最近の社會問題、思想問題、生活問題に關する熱辯を主として收錄。）
四六判洋裝美本・定價一圓五十錢・送料十錢

▲**鶴見祐輔氏大講演集**
（大卓見、大識見！各方面に一大センセーションを捲起せし大熱辯十篇。）
四六判極美本・定價二圓二十錢・送料十二錢

▲**尾崎行雄氏大演說集**
（憲政の神、咢堂尾崎氏が既往に亙る大演說十餘篇。悉く歷史的大文字。）
四六判總クロース函入 定價二圓・送料十二錢

▲**犬養木堂氏大演說集**
（痛烈の言辭、辛辣の比喩、匕首胸に迫るの概ある犬養氏の代表演說集。）
四六判總クロース函入 定價二圓・送料十二錢

▲**濱口雄幸氏大演說集**
（一言一句苟くもせざる濱口氏の名演說 壯重豪快、天下の大壯觀！）
四六判總クロース函入 定價二圓・送料十二錢

▲**賀川豐彥氏大講演集**
（愛の使徒、熱淚の戰士賀川氏が血を吐く絕叫！眞に襟を正さしむ。）
四六判總クロース函入 定價二圓・送料十二錢

▲**下村宏博士大講演集**
（該博の知識、透徹の識見、何人も熱讀すべき新日本の指導的快文字。）
四六判總クロース函入 定價二圓・送料十二錢

▲**谷本富博士大講演集**
（深遠豐富なる內容を、奇智諧謔を交へ平易に說く所博士獨得の壇場。）
四六判總クロース函入 定價二圓・送料十二錢

▲**中島德藏氏大講演集**
（學德一世に輝く中島氏の大講演集、言言句々胸に徹し感銘頗る深し。）
四六判總クロース函入 定價二圓・送料十二錢

▲**高田早苗博士大講演集**
（教育界の至寶、大早稻田の建設者早苗博士の大識見悉くこゝにあり。）
四六判總クロース函入 定價二圓・送料十二錢

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

輝く大熱辯

好指針！辯舌練習の秘鍵

▲高島米峰氏大講演集（一世の快男兒たる哲人批評家米峰氏の警世的大痛快、深刻天下一品。）四六判總クロース函入 定價二圓・送料十二錢

▲新井石禪氏大講演集（禪門第一流の大知識が說く死生觀、人生觀、宗教觀、現代人必讀の玉篇。）四六判總クロース函入 定價二圓・送料十二錢

▲加藤咄堂氏大講演集（辯論の名人と謳はるゝ咄堂氏の代表演說、言辭比喩悉く之玉を成す。）四六判總クロース函入 定價二圓・送料十二錢

▲道重信敎師大講演集（宗敎界の巨人が語る修養立身、國家興隆の大根本、人物練磨の指針。）四六判總クロース函入 定價一圓八十錢・送料十二錢

▲靑年雄辯集（現代日本の花形諸氏が、學生時代の名演說集、生々躍動、意氣天を衝く。）三六判總クロース美本 定價二圓・送料八錢

▲泰西雄辯集（泰西古今の偉人英雄が一世一代の歷史的大演說、一讀何人も大熱狂。）三六判總クロース美本 定價二圓・送料八錢

模範的式辭挨拶五分間演說集

應用自在の活指針

現代に活躍せんとする人は何人も一寸した演說挨拶が出來ぬ樣では成功は覺束ない。本書載する所悉く一流大家が各種會合式典に於ける模範演說で應用自在、一讀その呼吸が解る。附錄に諸會合席上必知の社交禮法虎の卷あり。

演說指導書類

▲加藤咄堂先生著 雄辯法講話（壇上生活三十年の體驗より生れたる極めて平易實際的の指導書、小久保喜七氏激賞の名著！）三六判クロース函入 定價二圓 送料十四錢

▲テーブル・スピーチ（一名卓上演說といふ。商事、社交、軍事、政治其他凡ゆる場合に於ける實例豐富、應用自在！）最新ポケット型美本 定價一圓 送料六錢

◎發行所―東京本鄕 大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

登録商標

黴毒と體毒を切らず注射せず治す「ベルツ丸」

△**統計上から見た有毒者** 東京市の衞生試驗所では昭和四年十月廿五日に血液檢査無料デーを行つた處來檢査の人員が男千二十二人女百二十二人計千百四十四人に達した其内陽性即ち有毒者は男百九十一人即ち一割八分七厘が恐るべき有毒者であつた所が女に到つてはとてもひどく百二十二人中四十九人即ち四割が有毒者であつた。之を以て直ちに全國有毒者數の一般を推す事は勿論出來ぬとしても又意識しない人の多くも有毒者である事は事實である(右は東京朝日新聞四、一一、四發表)尙梅毒は自分一人の病氣に止らず妻を泣かし子を泣かせ其の害毒は恐るべきものです。

△**恐るべき梅毒體毒は內服藥で根治出來る** 最近醫學の進步發達は非常なものであるが實際梅毒や體毒の患者は少しも減じて居ないそれ丈け治療が困難であると云へる。こゝに於てベルツ丸創製者たるベルツ博士は明治九年我が國政府の懇請に依つて來朝せられ爾來三十年間東京帝國大學教授宮內省御用係として令名天下に轟いた名醫で人類愛の一念に驅られ此の恐るべき梅毒を社會から一掃したい念願から種々苦心研究の結果梅毒や體毒を切らず注射せず治癒する內服藥を創製完成せられ自らベルツ丸と命名し弊店に命じ廣く社會に發表されたのであります。

△**ベルツ丸は實にこうした權威ある藥ですから** 梅毒、體毒、下疳、しつ毒、痳毒、梅毒性痔疾リウマチス、ひえ毒、脊髓、惡性ニキビ吹出物、又は梅毒性にて頭腦惡き方や常に便秘性にて苦しむ方其の他凡て梅毒性から來た諸疾患に思ひ當る方はベルツ丸を服用すれば切らず注射せず血液中の諸毒を大小便に依つて體外に排泄します。試みに四五回服用すれば直に心身の氣力は恢復して頭腦は輕くなり胃腸は強健になり食慾は進み知らず識らずの間に血液は淨化され日ならずして全治の悦びに逢します。



梅毒や體毒の爲めに今迄數十本注射をしたが尙且全治せぬ方がベルツ丸で全快したと云ふ實例が澤山あります注射の御嫌ひの方は一日も早くベルツ丸を御試めし下さい

左に數ある禮狀の一部を紹介します

△**ベルツ丸十五圓で全快** 熊本市 寺內博君
「前略」小生は二年前縣立病院にて六〇六號注射を數十本致しましたが效果なく全く苦しんで居りました處キング誌上にて貴藥を知り早速五圓分注文致し着藥其の日から服用致しました處其の效力の偉大なるに驚き追て十圓分一個服用致し全く健康體となりました念の爲前日病院にて血液檢査を致しました處無毒と云ふ有難い通知に接し只々感謝の外はありません……云々。

△**潜伏梅毒を根治した私** 山形縣 高山良雄君
「前略」ベルツ丸服用以來胃腸は強健になり頭腦の重いのは治り氣分もはつきりし全身の抵抗力は驚く程強くなり全く生れ變つた樣な身體の持主となり毎日感謝に咽んで居ます……云々。

△**高木博士が推奬したベルツ丸で頑固なニキビを全治した** 岐阜縣 大內保君
「前略」先日御送藥頂はし候は愚息が顏面に一二キビ吹出物…出し困り居り、處偶と內科醫の診斷を乞ふ必要ありて伊勢羽津山病院に行き診斷の節種々の話より高木博士がベルツ丸を推奬せられ早速御送藥頂はしたる次第其の後連服致居候が約半量にて全治致し候殘部は後日の爲大切に保存致置候之偏にベルツ丸の顯著なる效力と家內一同喜び居候……云々。禮狀そのまま

藥價は輕症用三圓、重症用五圓、頑固用十圓、常服根切用二十圓、特別大德用三十圓。送料內地十八錢、領土六十五錢、代金引替切手卅錢封入の事

東京市日本橋區濱町三ノ四(新大橋下車)
鈴木日本製藥社
電話浪花一〇六番 振替東京一〇五番

回講談社代理部(振替東京六六二九番)にもあり。

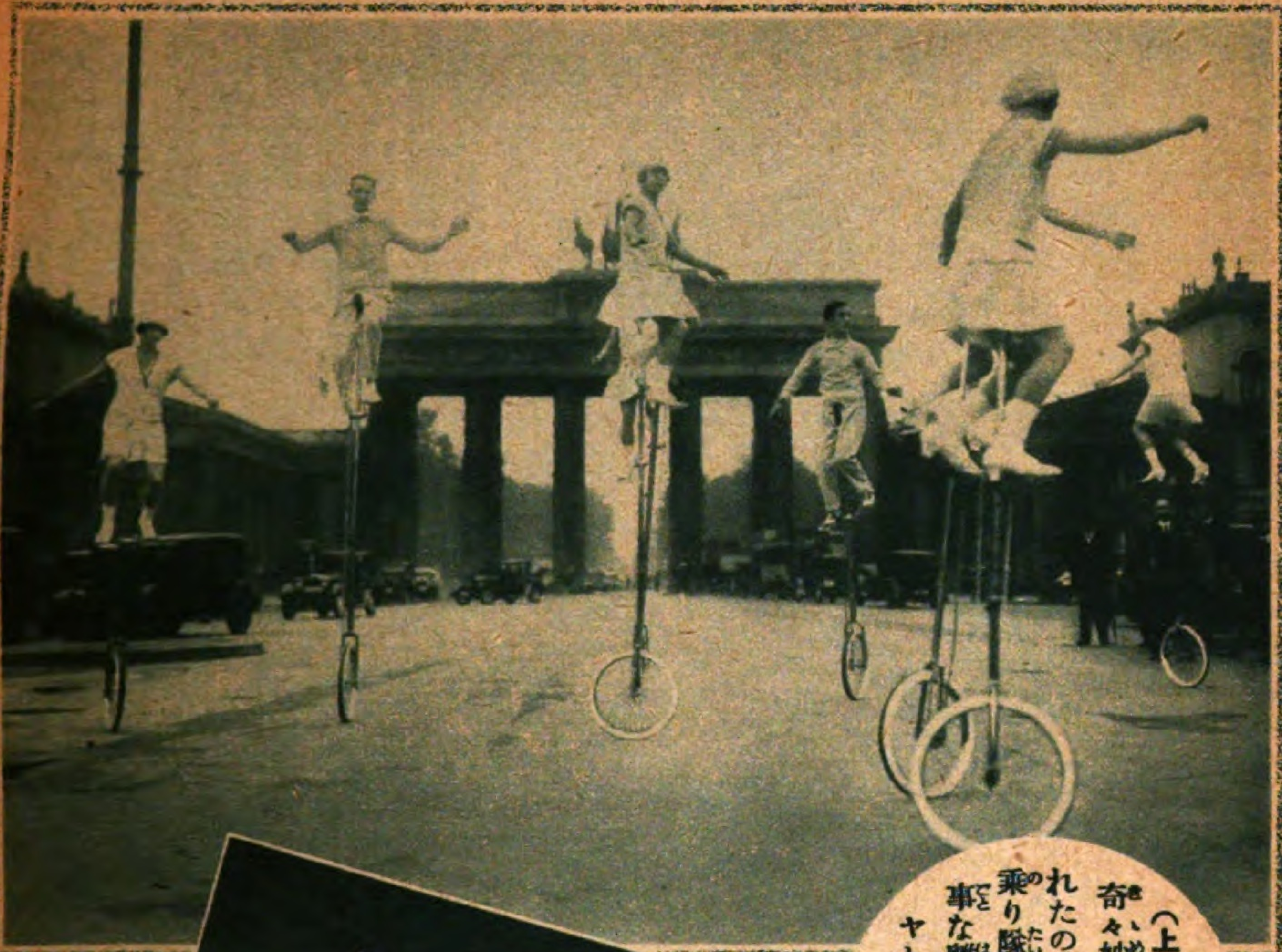
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



これは最近米國で行はれてゐる新式の室内運動です。恰度ボートを漕ぐ時のやうな姿勢で、四肢の鍛錬を行ひます。

珍遊戯・珍スポーツ・アルバム

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN



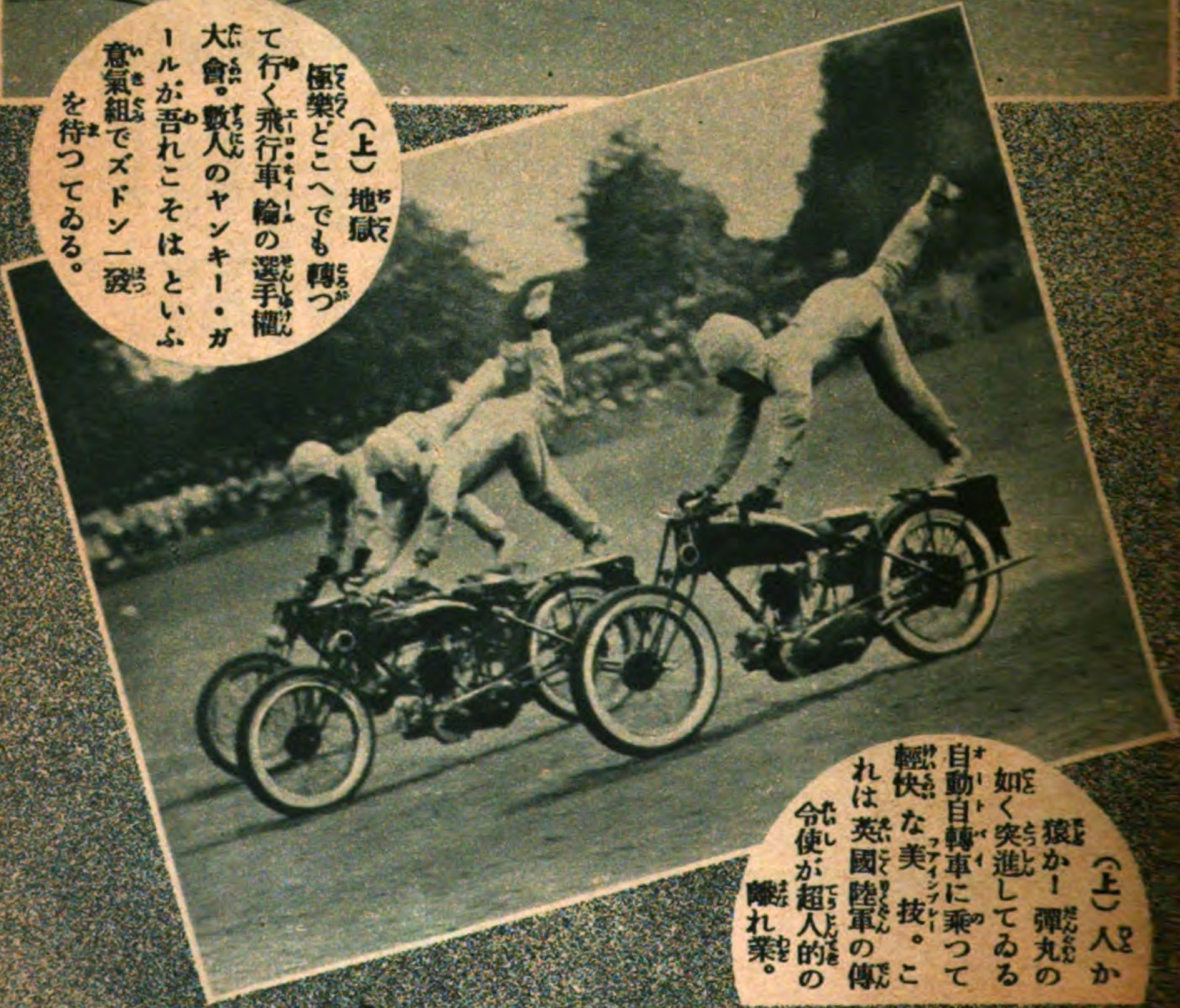
（上）オット危い！奇々妙々、伯林の街に現れたのは、一輪自轉車の曲乗り隊。男も女も混つて見事な離れ業に行人をヤンヤと云はせてゐる處。



（上）六人のデブちゃん、輪廻し競爭で白熱の接戰！これは毎年巴里で呼物になつてゐる俳優大會の一場面で、みんな著名の俳優である。



（上）地獄極樂どこへでも轉つて行く飛行車輪の選手權大會。數人のヤンキー・ガールが吾れこそはといふ意氣組でズドン一發を待つてゐる。



（上）人か猿か！彈丸の如く突進してゐる自動自轉車に乗つて輕快な美技。これは英國陸軍の傳令使が超人的の離れ業。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

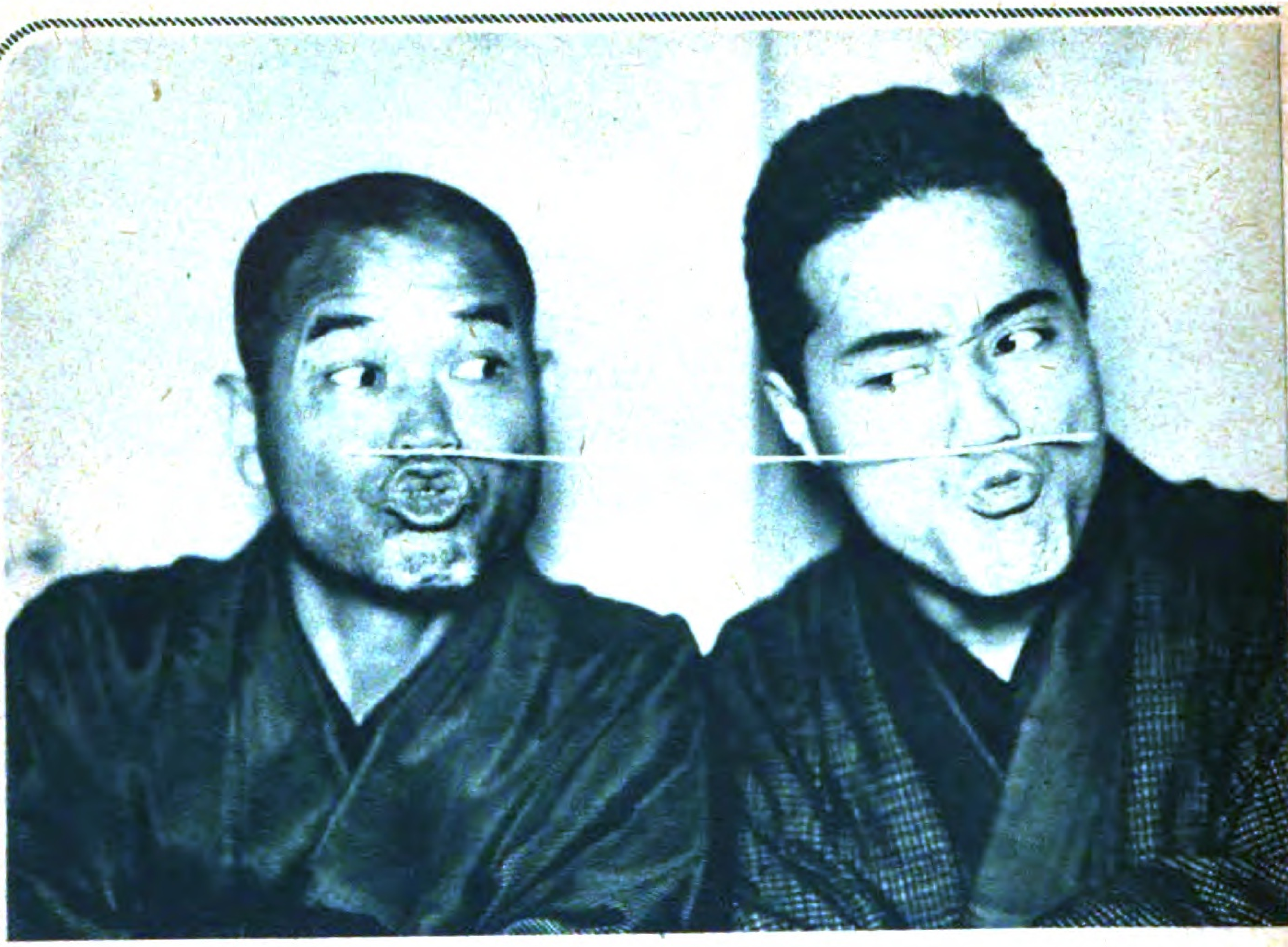


（上）『これは白髯の大明神で御座る。チョトその輪を申受けたい』『サ、お取り召され』物云ひながら輪を取り遣りする遊び。下顎の肉を延してならず、笑つてならず、相手を笑はせんとするうちにポロリと落せば、『そりや負けちや』とやられる。

（下）身體を反らしてローソクを吹き消す競爭。やつと反つたかと思ふとがつくり頭が壁へ。ズデンドウとデングリ反へる。肥つた人なんかは命掛けの仕事だ間違つて髪の毛を焼かぬ御用心々々。



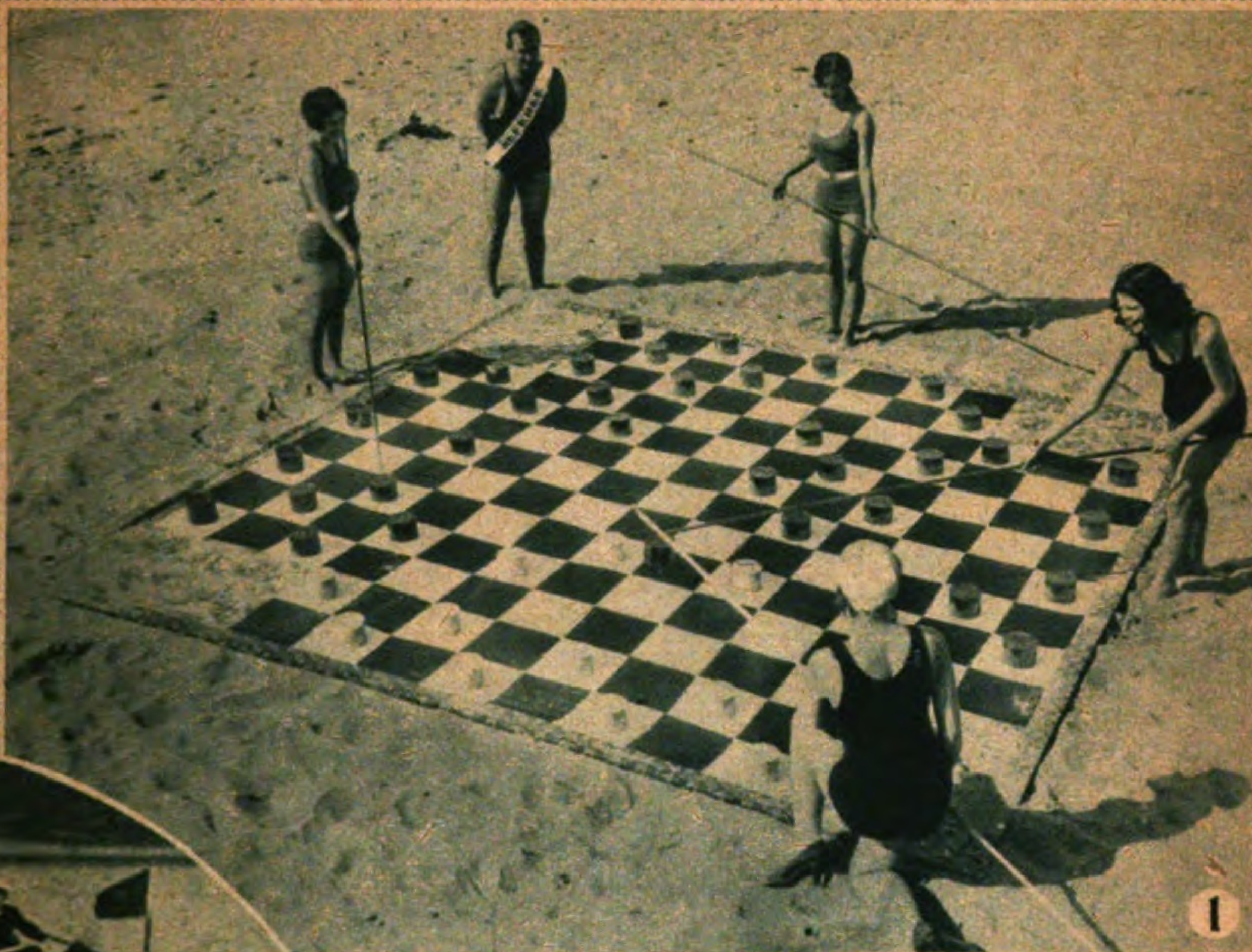
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



（上）コヨリを鼻の下に挾んでひつぱり合ひ。蛸の吸口のやうな口許こそ滑稽の至りだ。『ヤッ』『ウ、ン』金剛力を籠めてえんやく／＼と曳くうちに、コヨリがプッツリ――まさかそんなに鼻の下の強い人もなからう。

（下）かくの如く身體の自由を奪ひつゝ、茶碗を咥へて持上げた人があつたら、座中第一の輕業師だ。宴會の席などでこの曲藝競技をやつて御覽じませ。ヤンヤと滿座の喝采を博すること請合ひ。







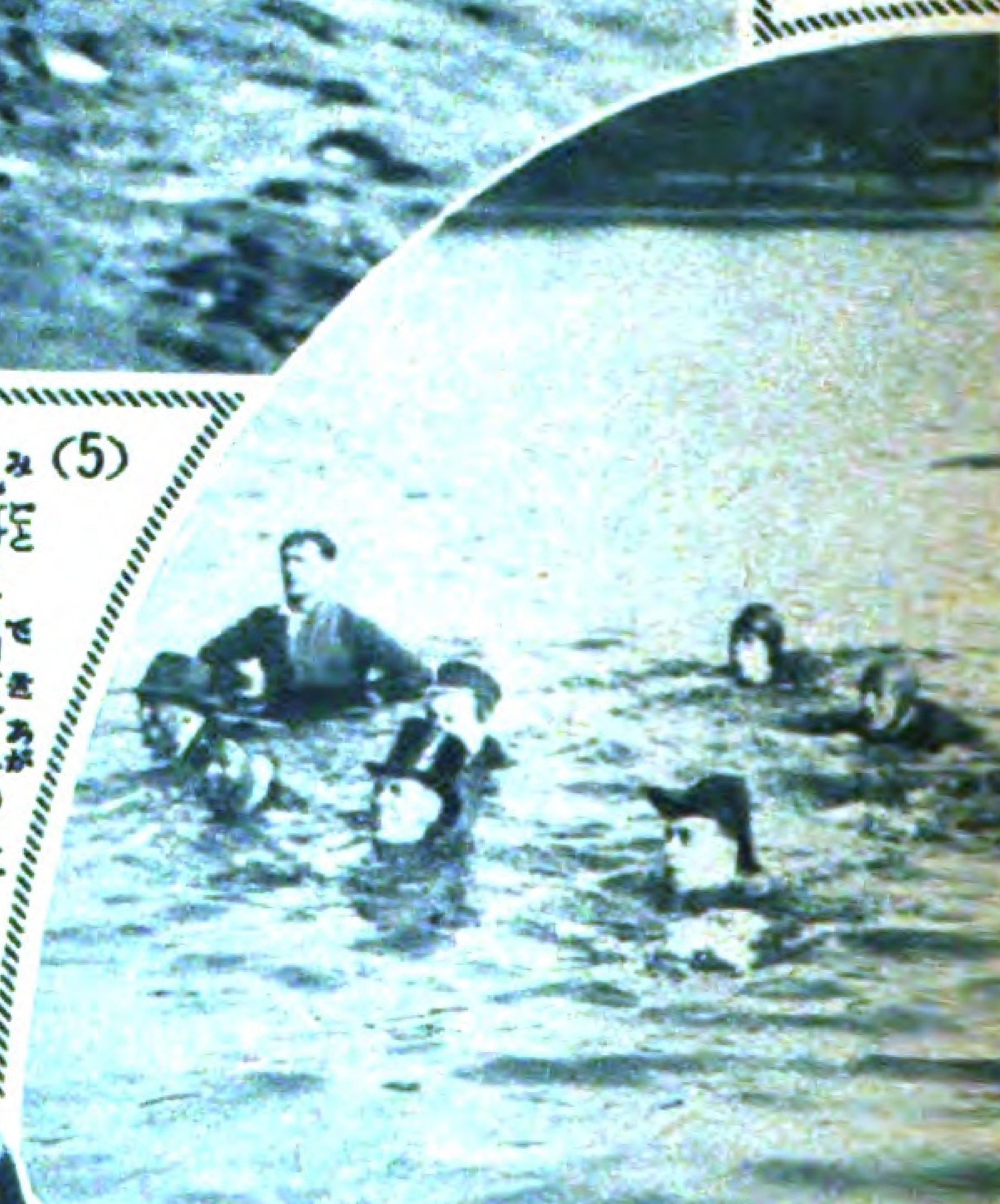


(1)さすがは米國である。これは縦横十八尺といふ途方もない大きな將棋盤だ。駒を動かすのにも、御覧の通り長い棒が要る騒ぎ。

(2)倫敦で開かれた『伸張力競技』バネ仕掛の紐を力一ぱい左右に引張り、その伸びた距離によつて優劣を決するものである。

(3)場所は矢張り倫敦。ハイド・パーク公園の池に、シルクハツトやら海軍







(5) 見事に出來上つた人間のハート型。これは身體の柔軟と緊張を圖る運動法で、特に肥滿した人が體重を減ずるのに効果があるさうだ。

帽を被つた一隊の紳士が、息せき切つて泳いでゐる。スワ何事！と誰しも思ふに違ひない。ところがこれは着物を着たまゝの水泳競技だとは、世の中に物好きは絶えないもの。

(4) 見るからに愉快さうなボートだ。夏の佛蘭西に大人氣を博してゐる。輕便短艇で、木の葉のやうな櫂も頗る古典的の感じがする。



(3)『サアお曳きなさいな』『よくつて曳くわよ』と女太夫さん樂屋のつれづ



(2)『ウンとドッコイ』『ヨイショ來たッ』と、力一ぱい塗枕の引つ競だ。塗つた枕はする〳〵滑る。肘を疊から離しちやいけないんだからなか〳〵むづかしい。あかぎれの出來た人なら勝つこと請合ひ。



(1)座布團の土俵。目かくしをして尻押し角力。ヤッと押せばヒラリと躱す。目には止らぬお尻の早業。ハッケヨイ〳〵殘つた〳〵。尻に力を入れて堪へる所を、無二無三に押切つて遂に大尻山の勝とはこりやどうぢや。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

れに、白粉を氣にし乍ら首の綱曳き。笑つちやいけない。しつかり〳〵。





4

(4)『曳きも曳いたり』『押しも押したり』『頸の強さよ』『骨の強さよ』『ウフ』『ワハ』兩人『ウワハハハ』錣引きならぬ頭の綱曳き。どつちが景清やら國俊やら。



5

(5)火吹竹でローソク消し。目かくししてゐるのでローソクの見當がサッパリ解らぬ。見て居ればつい腹を抱へて噴き出してしまふ。これは鼻の利く人がローソクの匂ひに見當付けてフッとやれば勝つこと請合。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



(1)『エーヤッ』と一聲、さしもの大丸太も見る〳〵宙に持上げられた。この風變りな競爭は、倫敦第一の劇場に開かれたブレーマー大會の一場面。毎年蘇格蘭地方の青年男女が集つて、お國自慢の珍しい競技を公演するのだ。



(2)阿弗利加ボラ族の間に行はれる奇拔な遊戯。一隊の土人が、手に手に槍を握つて、砂の上に描かれたカンガルーを突刺し、大いに士氣を鼓舞するもの。



(3)オッと危い！ 頭の上には煙突のやうな澤山のバスケット、うまく調子をとつて、一つも落さず歩いたのが勝といふ珍競走だ。毎年倫敦の呼物となり、見物は勿論、活動寫眞隊まで飛出すといふ騷ぎ、此の選手權を得たチーム君は二十個のバスケットを頭に載せて二百五十ヤード突破。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



(4)三頭の馬を並べてヒラリ跨つた六人の若者。これは米國ヴァージニア州騎兵聯隊で、兵隊さん達が行つてゐる輕妙な曲乘りだ。かうして人も馬も練習をつむと十頭以上の馬を一列に並べ、その上に何十人の兵隊さんが、ピラミッドの樣に重なり合つて乘り廻すといふ美技を演ずることが出來る。



(5)人か！駝鳥か！見るからに美しい古典的なダンスだ。米國パサデナのダンス學校の生徒が、今熱心に駝鳥ダンスをやつてゐる。眞中には本もの〻駝鳥、美人に圍まれて眼をパチクリ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



（上圖）ハアチヨイ〳〵、リヤッサ、トン〳〵、松ウ竹ツ梅ツ――えゝ殘念、アイ・ラヴ・ユウ――どうだい、極つたらう。エヘン〳〵と鼻の高いこと。掛聲囃と共に、藤八拳は何時も乍ら賑かな遊びだ。

（下圖）『エヘ、お笑ひ下され』『イヤ、可笑しくはない』『でも、チョッとお笑ひ召され』『ウ、ウフフ、』でとう〳〵煙管が落こちる笑ひ上戸は必ず敗ける煙管吊り。





トルストイ

一本の蠟燭が、千本の蠟燭に火を點じ得るやうに、一人の人間愛は、千人の心を眼醒めしめる。人の我慾を滅して、共存相愛の道を植てようとする正念は、たとへそれが微々たりとも、かの百萬金の營利事業より、遙かに偉大な成果を齎す。

この正念を培うてゆけば、五つのパンと二つの魚を頒つて、普く婦と幼童を飽かしめ、なほ五千人の餓を救うたといふ聖書の奇蹟を、今の世に再現することさへ難くはない。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



新建設の槌の音

後藤静香

○

生きとして生ける一切を愛すること、之以上に高い目的はない、又之以上に貴い仕事は無い。此の故に一部の人間を愛して他の一部の人間を惡むことは間違つて居る。

○

現代は大衆の時代である。如何にして大衆を幸福にするか、此の目標の爲めに凡ての機關が動かねばならぬ。

○

大衆を無視し、甚だしきは大衆を犠牲にして、小數の特權階級が幸福を專有した時代もあつた。まだ社會制度の中に其の名殘が無いではない。此の不合理に對し、目覺めたる大衆が不滿を感じ反抗を試みることは當然である。

○

併し大衆時代と云ふことは、大多數の人間が幸福であれば、少數者の人間は不幸であつてもよいと云ふことを意味しない。

○

惡むこと呪ふことは罪惡である。過去に於て、大衆が少數の特權階級に犠牲にされたとしても、之を怨みとし、之を呪ひ、之を惡み、之を苦し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

めることは人間として許されないこと、其の心既に惡魔の心である。

○

惡まれたからとて、惡み返したのでは、決して平和は來ない。それは互に罪の焔に油を注ぐもので、地上を猛獸の世界に引き下げるものである。

親が殺されてさへ仇討は許されない。國家と雖も罪人を一般民衆から隔離するだけで、罰しては居ない。刑それ自身でさへ罪を犯したものと、一般民衆との保護である。愛の變形である。決して惡みの姿ではない。

○

世を呪ふ者よ。人を罵り世を罵る前に、自己の其の姿が同樣の罪惡たることを反省せよ。過去に犯した少數者の罪惡に報いるため、之を懲らしめんが爲めに大衆の暴力を備るといふか。

其の態度即ち少數者積年の罪跡であり、罪に對するに罪を以てするもの。斯る低き心情によつて救世濟民の大業が爲し遂げられる筈はない。

○

建設のための破壞といふか。

舊き家をこはすとき、誰も之を惡みはしない、寧ろ愛と感謝の念をもつ。

惡みから現れる破壞によつて神聖なる健全なる建設の大業は全うしない。

○

大衆の名に全人類を包ましめよ。

一切を愛する意味に於て、又其の心情を以て、社會改造を企て又其の方法を確立すべし。吾人は之を救世最高の原則と信ずる。果して斯る最高原則適用の方法ありや

然り、確かに有り！

事實を以て誰かに立證せられるであらう。吾等は今の今此の原則に基づく新建設の槌の音を聞く。



壇上の加藤咄堂氏

萬人感激の大雄辯

汲めども盡きぬ心の泉

加藤咄堂

生れぬ先の我

世相の定めなきが如く我が心も定めなく、次ぎから次ぎへと移り行く世相の變轉に刺戟せられて一刻も止ることなく動きに動いて居るのが現代人の心であります。忙はしき現代人は心の整理をする暇さへなく、雜然紛然たる心のもつれは、いつ解くべきすべもなく、無暗に押し込んだまゝ次ぎから次ぎへと取り入れて居るのであります。

これで何うして眞の我といふものを攫むで行けませう。一時限りの鼻先き思案、どうか、かうか其の場をさへ過ごしてしまへば、後は野となれ山となれの刹那主義、其場々々の我あつて永久の我なく、胡魔化しの我あつて眞の我はなく、我が身で我が身が解らず、眼、外に捕はれて內に省みることなく、終生役役、外界の奴隷となつて其の日〳〵を送つて居るのが現代人の通弊であります。其の爲めに我としての責任觀念もなければ奉仕の思想もなく、全く生れた序でに死ぬまで生きるといふ他の動物と異らざる本能と刺戟とに動いて居るものであります。生きんとする本能、それは吾等が動物以來持ち傳へて來たものであります。今一つは我と同じ生命を永遠に傳へるべく種の繼續に根ざす性の本能であります。これによつて親から子、子から孫へと傳へて來たのでありますが吾等はたゞ生れて子を造つてさうして死んで行くだけが能でありませうか、これは犬でも猫でも馬でも牛でもやつて居ることであります。人としての我の特色は一體何處にあるのでせう。

靜かに我自ら我を考察してごらんなさい。外界の刺戟に動いて居るのは我の表面であつて內面ではありません。しばらく見聞覺知を止めて我を內觀する時、たゞ今の我の心の中には生れ越し昔からの思想が潛在的に我が心に貯へられて居るのを知る

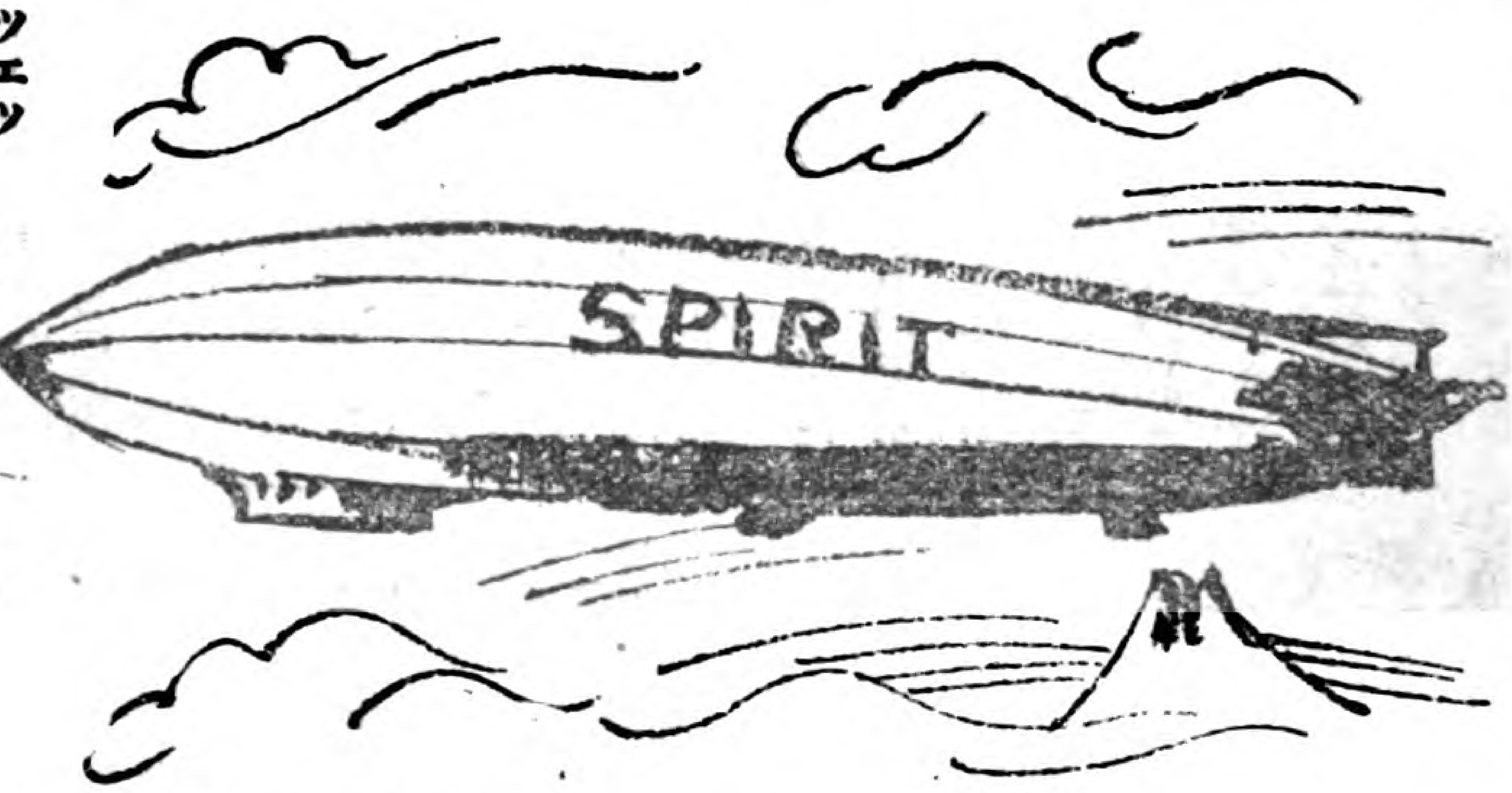
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ことが出來るのです。否、今、我と呼ぶ所のものは悉く過去の經驗によつて築き上げられたる意識の統一の上に名づけられたるものに外ならぬのであります。しかし其の所謂過去の經驗なるものは生れてから今日までのことのみでせうか、吾等の記憶に浮ぶものは全く生れてから今日までの經驗に過ぎないのでありますが、誰れ數へずとも持ち來つた本能は、生れる以前の父祖より傳へ來つたものに外ならぬので、此我が心の奥には生れる以前より傳はり來つたものを收めて居るのであります。

それはただ父祖傳來といふのみでせうか父祖は又其の先きより傳へ來つたので、遡つては生物の始源に至るのでありますが此生物亦忽然として發生し來るものではありませんから天地の始源、宇宙の本源へと遡つて無限の過去より傳へ〳〵て來つたものは悉く現在の此我が心の中に貯藏せられて居るのであります、禪宗の公案には父母未生以前の我を見よと申すのがありまして古人の歌にも

闇の夜に鳴かぬ烏の聲きけば
生れぬ先きの父ぞ戀しき

といふのがあります。心靈の本源を探ぐれば無限の宇宙に想到せざるを得ないのであります。（拍手）



ツェッペリンの飛行船は實に偉大なる科學の力を示すものであります。

天地と我

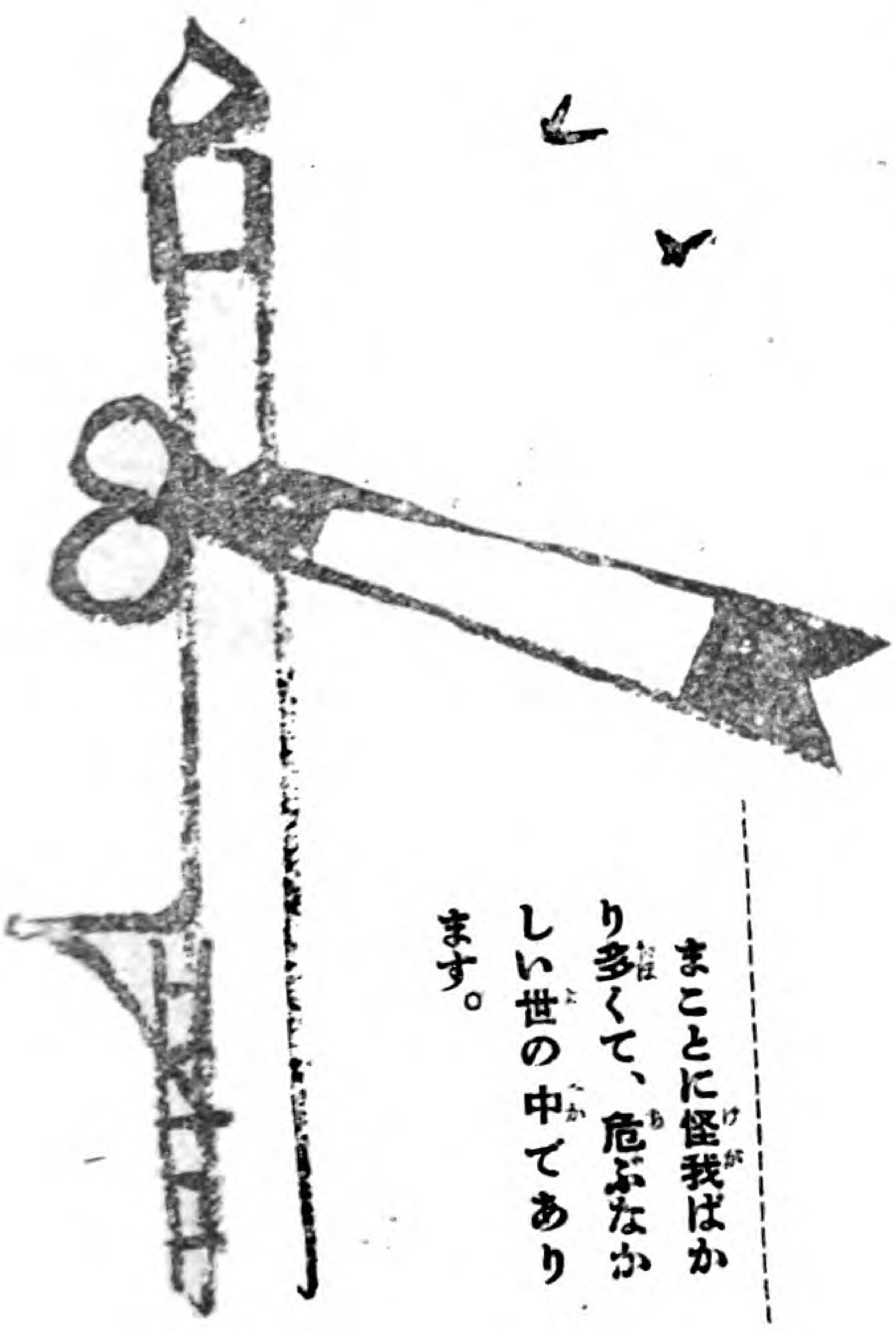
まあ考へて御覽なさい。此の我れの父母は二人でありますが、祖父母は四人であり、曾祖父母は八人であり、其の先きは十六人、其の先きは三十二人、其の先きは六十四人、其の先きは百二十八人、其の先きは二百五十六人、其の先きに五百十二人、其の先きは千二十四人と十代二十代と遡つて次第〳〵に其の先きを尋ぬれば終に無限の數に驚かるゝので數へ切れるものではありません。我が此の五尺の身體も實に過去無限の生命で、これが養はれ來たのは多くの動物、多くの植物、而して其の動植物を生育せしむべき風や土や水や火の、あらゆる生物無生物の力でありますから、之れを奪つて申しますれば無限の天地萬物が來つて我なるものを造り上げたとも見らるゝのであり、此の我に内在する心には是等のすべてが含まれて居るのだと見ることが出來ます。昔の人は之れを天地同根、萬物一體といひ、天地我れと同根ならずば、何故に草の藥や木の根を以て我が身を養ひ、石の粉や土の粉を以て我が病を醫することが出來るであらうと申して居ります。こ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

れを逆に申しますれば、天地萬物悉く我れに備つて居るので、我れが天地の理法を考へ、萬物の法則を發見し得る所以は我が心の内に之れを考へ、これを發見する素質が備はつて居るからで、若し我れに此素質なくんば天地の理法、如何に現前するも、萬有の法則、如何に顯著なるも、これを理解することは出來ないのであります。ニユートンは林檎の木から落つるのを見て引力の理法を悟り、ワットは鐵瓶の蓋の湯氣で上がるのを見て蒸氣汽鑵を發明したと申します。林檎はニユートンの生れる前からポトリ〳〵と落ち、鐵瓶の蓋はワットの生れる前からブクブクと上がつて居ります。しかしニユートンの叡智とワットの明察のないものには之れを知ることが出來なかつたやうに人に若し此叡智と明察との素質なくんば天地の理法も萬有の法則も之れを闡くことは出來ないのであります。帝都を訪問したるツエッペリンの飛行船は實に偉大なる科學の力を示すものであります。しかし、これも亦人間の心の中より造り上げられたるものなるを想ふ時、誰れか我が心の更に偉大なるものあるに驚かぬものがありませう。榮西禪師の『大なる哉、心、天の高きは窮むべからざるなり、しかも心は天の上に出づ、地の厚きは測るべからざるなり、しかも心は地の下に入る』といはれたのは單なる形容の詞ではないのであります。（拍手）

怪我多き世

宇宙の靈妙なるが如く、我が心も靈妙であり、宇宙の無限に繫がるが如く、我が心も無限に繫がつて居るのであります。陸象山と申しますは宋の大學者でありますが、年甫めて十三、古書を讀んで『上下四方を宇といひ、往古來今を宙といふ』に至つて豁然として大悟し、『宇宙內の事は乃ち己が分内の事、己が分内の事は乃ち宇宙内の事』というて、宇宙は乃ち我が心、我が心は乃ち宇宙、心は一心、理は一理、此心此理は二あるにあらず。孔子は一以て之れを貫くといひ、孟子は道は一のみと說くと心の本源に究盡して天地と一體たる所を突き詰めたといふことであります。これ我が生命の本源であり、心靈の泉であります。我が心の奥を尋ね



まことに怪我ばかり多くて、危ぶなかしい世の中であります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

て此本源に至つてこそ、眞の我なるものを識得し得るので、彼の外界の刺戟や内心の慾求で、右に左にと動きに動いて居るのは皮相の我であつて本當の我ではありません。現代人は此本當の我を攫むことをせずに變轉常なき假りの我によつて其の日其の日を過して居るのでありますから、まことに危ない我であり、怪しげな我であるのであります。

移り行くはじめもはても白雲の
あやしきものは心なりけり

まこと怪我ばかり多くて、危ぶなかしい世の中であります。



神へのあこがれ

神へのあこがれ

危ふくも亦怪しく、日々にイラ〳〵として騷ぎ廻つて居る此の我の求むる所は、たゞ生れた序でに死ぬまで生きようとするだけで他の動物と何の異りもないのが果して本當の我の要求でありませうか。吾等は更により善く生きんことを求めます。此より善く生きんとする要求こそは人類をして他の動物と異ならしめて、これではならぬ〳〵と發明に發明を重ね、創造に創造を積んで現代の文化をも築き上げて來た人間活動の原動力であります。此原動力は無限に進まんとする、汲めども盡きぬ心靈の泉から迸り出た本然の要求に基くので、まことにこれ理想への憧憬であります。プラトーンは此我の本源を理想の故郷に置き之れを求むる吾等の心をイデアの戀だと申しました。眞を求め、善を求め、美を求むる吾等の心の憧憬は、まことに戀にも似たるものがあるのであります。一休和尚は最も洒脫に、

本來の面目坊のたち姿
一と目見しより戀とこそなれ

我のみか釋迦も達磨も阿羅漢も
此君ゆゑに身をこがしけり

古來、道のために身を惜まず、理のためには命をも顧みざる哲人傑士は皆な此戀にも似たる執着と熱心とを此の理想に捧げたるがためであります。戀といふには、あまりに尊嚴ではありますが、神をあこがれ、佛を慕ふ心も亦之に外ならぬのであります。吾等が何故神を求め佛を求めるのでせう。これを求むる心には何の飾りも僞りもないのです。此飾りなく僞りなき純眞の要求こそ奥深き心靈の泉から湧き出でたる必然の迸りではありますまいか。(拍手)

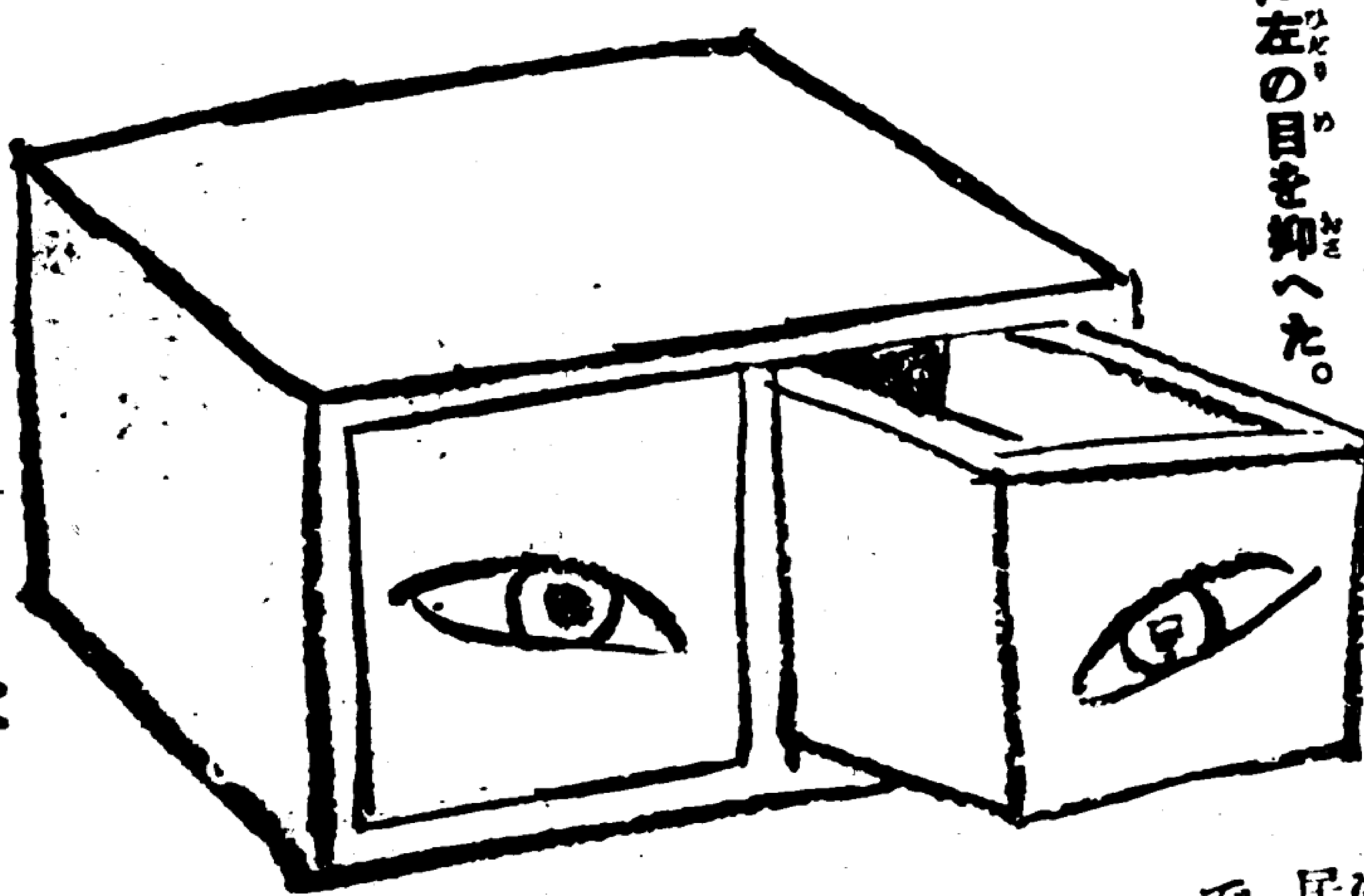
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

心の整理

私は現代人に此心靈の泉を汲まれんことを切望いたします。これによつて吾等は眞の我を攫んで毅然として社會に立つことが出來るからであります。然らば何うして心靈の泉を汲むか、私は、これに就ては、靜思冥想を勸めたいのであります。

由來現代の文明は飛ぶが如く變轉しまして其の爲めに吾等は外を見るに忙しくして内に省みるの餘裕なく、其の場限りの胡魔化しに忙殺せられて、靜かに反省し内觀することが少ないものでありますから、雜然紛然と見聞覺知のまゝに心の内に入り來り、考へても役に立たぬことや、思うて益なきことが心の隅々に積み重ねられ、考へねばならぬことや、思はねばならぬことが其の下積みとなつて、事の有功無功や、其の本末輕重は少しも整理せられて居らぬので、其の爲めに精神能率は何時も發揮せらるゝことが出來ないのでありますから、チッと考へて心の無駄を省き其の本末を明かにして本を忘れて末に走るやうな愚な行動に流れぬやうにせねばなりません。

柳生但馬守宗矩が其子十兵衛宗嚴の技倆を試めさうとして、或る時不意に石を右の目に打ちつけらるると、十兵衛は直に左の目を抑へたのを見て、此子は必らず劍道の名人になるといはれたといふ稚拙な話があります。右の目へ石が當れば右の目を抑へるのが普通の人情であります、併し抑へたからとて何の役にも立ちませんが、若し第二の石が左の目にあたれば盲になつてしまひます。當つた右の目は仕方がないが、當らぬ左の目は大切であります。ソコデ突嗟の場合に無駄を省きて有効に就き、末を去つて本をつかむだ此の心の働きは心の整理の出來て居るものでなければやれない藝當であります。（拍手）



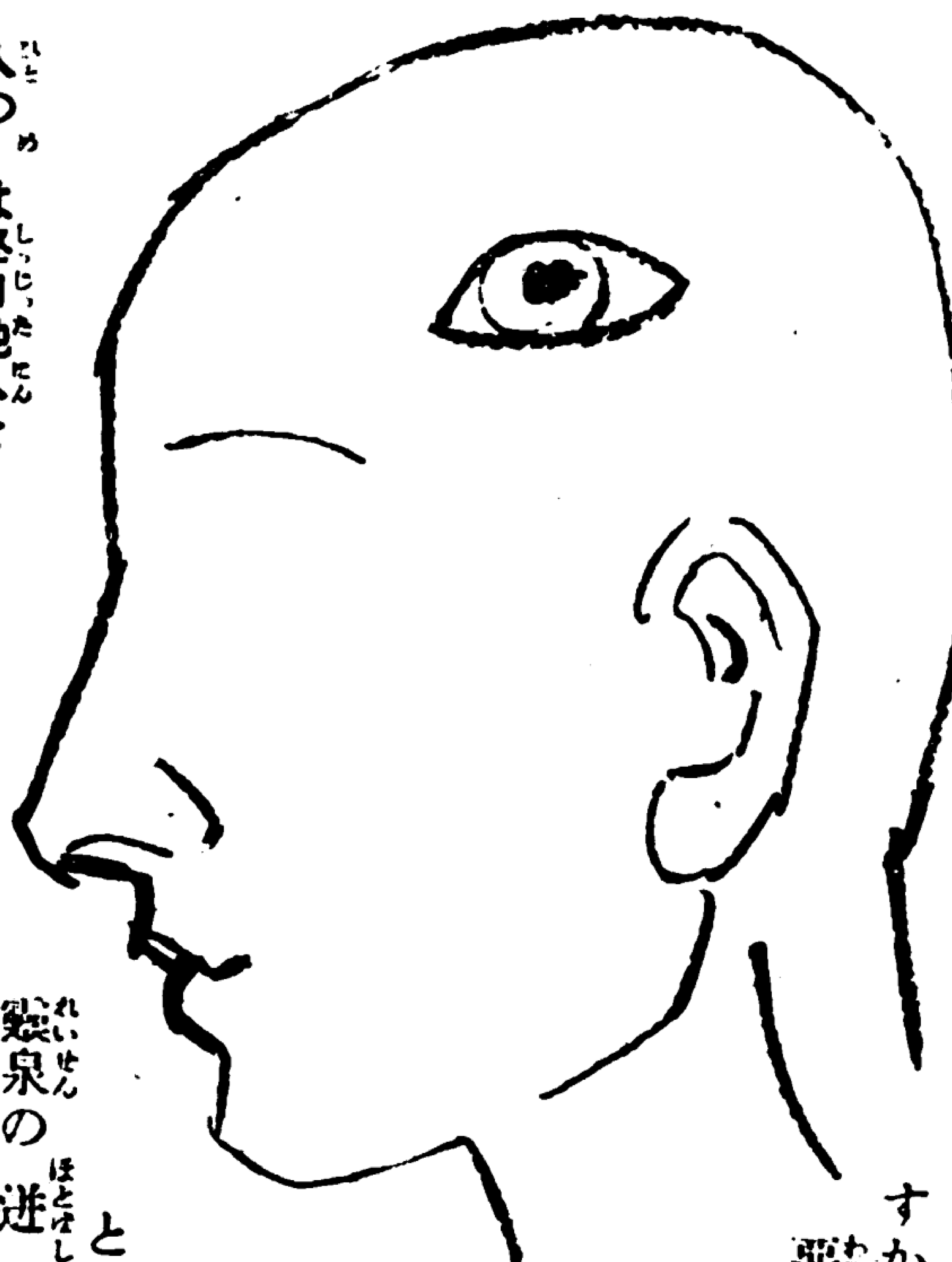
右の目へ石を打ちつけたら直に左の目を抑へた。

自己反省

無駄を省き有効に就き、本末を明かにして過ちなきは精神能率を發揮する所以で、これには靜かに考へて我が心を整理するといふことが必要でありますが、更に靜かに考へて自分で自分の行動を批判して見るといふことが必要であります。反省内觀は實によりよき自己を築き上げんとする唯一の經路でありまして、これなきものは罪に罪を重ねて其の罪たるを知らず、惡に惡を積みて惡たるを知らず、假りの我、怪しき我に追ひ使はれて終に救ひ難きに至るもので、司馬承禎は、

人の目は終日他人を見るが故に、心、外を追うて走り、終日他事に接するが故に、目も亦外を追うて見る。營々たる浮光、未だ曾て内を照らさず、奈何ぞ病み且つ夭せざらんや。と申して『目を閉ぢて自己の目を見、心を收めて自己の心を見よ』と勸めて居ります。

目を閉ぢ心を收めて、眞の自己を見る時、誰れか自己の過失を見出さぬものがありませう。此自己の過失を見出すといふことは心の奥に潜める眞の我の光りであります。鏡はもと／＼明かなものであらねばなりませんから曇つたとか錆たとか氣のつくやうに、心は鏡の如く明かなるべき本來の性を持つて居りますから『あゝ惡かつた』と氣のつくので、此氣のつくといふことは天地と我と一貫する靈泉の迸りで、これによつて罪過を洗ひ淨めてしまへば、明皎々たる本の光りは現はれるのであります。涅槃經には『陰雲除けば月則ち清明なるが如く、惡を作して能く悔ゆるも亦此の如し』とありまして、一切の宗教の悔い改めを說かぬものゝないのはこゝに其の根本を置いて居るからで、其の悔い改めの條件としては靜かに自己を反省するを第一とせざるものはない。靜かに自己を反省す、これ自己向上の一路であります。（拍手）



人の目は終日他人を見てゐる。

閑中の滋味

靜思は知識を整理する所以であり、行爲を善導する所以であると共に又實に美趣感得の源泉であります。心淨ければ天地淨し、我が心穢れあつて、どうして天地の美を感得することが出來ませう。靜思は我が心垢を洗滌して我が心を鏡の如くに明かならしむが故に天地の美、宇宙の妙其儘に我が心に映じ發して詩となり歌となるので、絶代の才筆と謳はれた金聖歎は『筆下さんと欲して而して擱き、紙、舒べんと欲して而して捲き、墨、磨らんと欲して而して停む、我が才盡きて我が腸斷つ、而して我が目くらみ、我が腹病む』とこれ實に心垢洗滌の惡戰苦鬪であります『而して鬼神來つて風雷忽ち迎ふ』とありますのは、撥つて心靈の源泉に觸れて滾々として湧き出る奇趣妙想、直に天地の美を謳ふことが出來たので詩人の所謂天來の興趣なるものは又實に此間の消息を語るものに外ならぬのであります。俳聖芭蕉は、見る所、花にあらずといふことなし、思ふ所、月にあらずと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

いふことなし。像、花にあらざるときは夷狄にひとし、心、月にあらざるときは鳥獣に類す、夷狄を出で、鳥獣を離れて造化に從ひ造化にかへれ、

といふて居るのは此心を以て此天地に對するの妙趣で、此心明かならずして、どうして天地の美趣を感得することが出來ませう。しかし私は詩人が外界の美を感得する上に於てのみ此靜坐冥想をお勸め申すのではありません。

一室、人なく、靜かに此冥想に耽ける時、心の奥の其又奥に潜める無限へのあこがれの情操が、云ひ知れざる快感を我等の心に湧き起さしむるもので、これは到底日常東に西に南に北にと外界の刺戟に任して心を動かして居るもの丶考へ及ばない所謂閑中の滋味なるものが存するのであります。かくて奥深く尋ね入つて、

一夜、定中、忽然として前後際斷、絶妙の境に入り……觀聽言動、豁然として平日に異る。こ丶に於て試みに天下の至理妙義を求むるに頭々上に明かに、物々上に顯かに、歡喜の餘、自ら手の舞ひ足の踏む所を知らず（禪海一瀾）

うつるとも月は思はず
うつすとも水も思はぬ
猿澤の池



といふやうな快感を生じ、曾てあこがれ求めた理想は我が胸中に明かに、或る人が之れを戀の成就に擬して、

うれしさを昔は袖に包みけり
今は身にもあまりぬるかな

と謳うたやうな境地に達するので、これを神人冥合ともいふ至極の境に入るのでありますが、それは更に別種の問題に觸れねばなりませんから、こ丶にはたゞ心靈の秘奥此の妙境あるを申すに止めて置きます。（拍手）

處世の妙諦

かくいへばとて私は徒らに靜思冥想をお勸めいたすのではありません。此靜かに處ることによつて自己の心を落ちつけ、其の落ちついたる心を以て萬事に處して戴きたいと思ふのであります。靜かに想はずんば心平かならず、心平かならざれば事理明かならず、事理明かならざれば失策ばかり多くて應用自在に行くものではありません。心が落ちついて居れば本末も明かに、微細なことにも活用が出來るもので、劍聖とまで云はれる宮本武藏は晩年には

『心平かなれば劍も亦用なし』

とて平生は丸腰で居られたさうでありますが、或る時武藏が

例の通り無腰で庭前の涼み臺に腰をかけて團扇を使うて餘念なく夏の夜の景色に見とれて居つたのを、一人の弟子が先生を試めさうとて、行きなり短刀を拔いて涼み臺の上に飛び上つた。武藏はアツといつて忽ち退くと同時に、涼み臺に敷いてあつた筵の端を引つ張つた。スルと其のはずみで弟子は涼み臺から眞逆樣に倒れ落ちたのを見むきもせず平然として『何をするか』と一言いつたばかりであつたさうであります。心を明鏡止水の如くに磨き澄して置きさへすれば何時いかなる事變が起らて來ても、それに處するの方法は自然に胸に浮んで來るものであります。

うつるとも月は思はずうつすとも　水も思はぬ猿澤の池、

此無心にして此妙致がある。人に談判するのでも、向ふが斯らいへば斯う、あゝいへばあゝと初めから企んで行くと、其の考へて居られぬ方面から切り込まれると、忽ち閉口せなければならぬこととなるので、或る外交家が得々として『私は事を論ずるに一から十までの計畫を立てて、向ふが一ならばかう、二ならばかうと定めて行く』

といふと、或る禪僧が、

『それはなかなか綿密なことだが、若し相手が十以上の問題を、持ちかけて來たらどうする』

『それでは十一も考へますか』

『十一以上なら何うする。上には上があつて此方の注文通りに行くものではない』

『それでは何うしますか』

『マア考へずに行きなさい、無心にして應ずる時、そこに自由な立場が得られるものぢや』

と教訓せられたといふ話があります。此静處の修養こそが活殺自在、與奪縱横の活作略、これを動處に應用して世に處し人に接する上に理路整然として、しかも綽々として餘裕ある行動を爲すことが出來るであらうと思ひまして、私は先づ現代に此心靈の泉を汲まれんことを望まざるを得ないのであります。（拍手喝采）

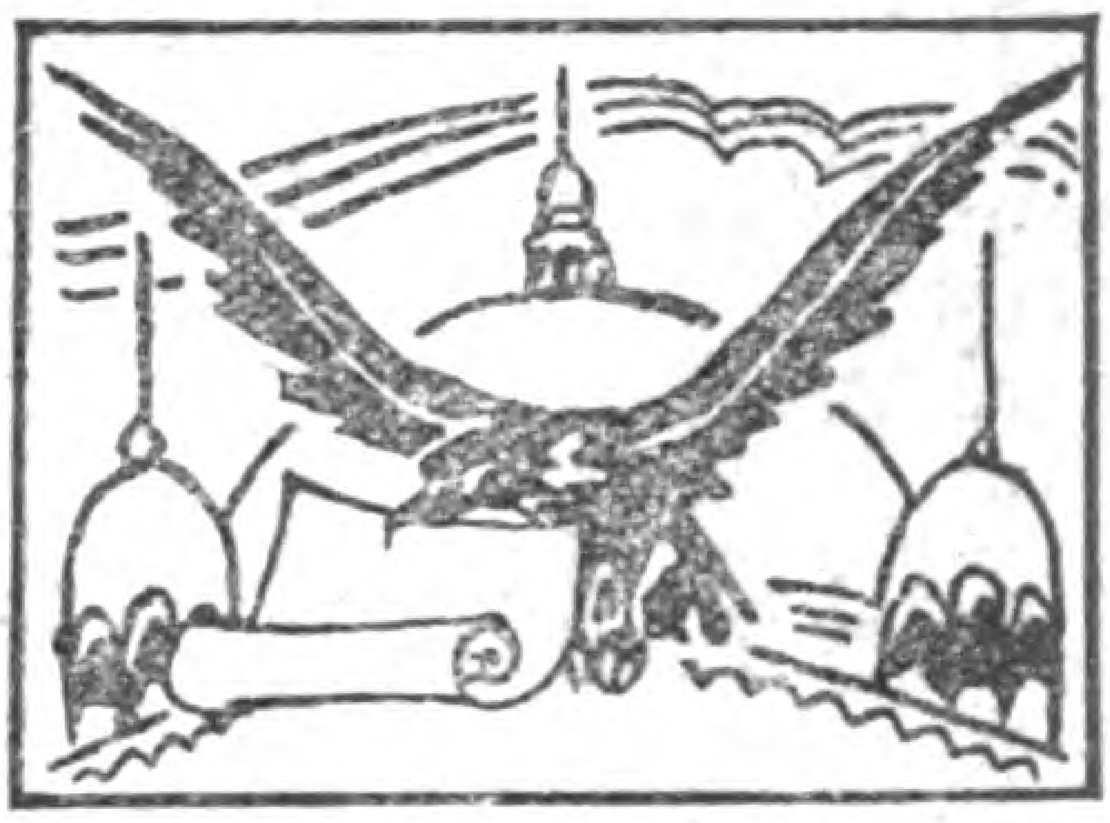
雄辯十訓

衆議院議員　鶴見祐輔

一、確信なくんば決して壇に上る勿れ。
二、我が思想を傳ふることは第二とし、我が人間を印刻することを第一とせよ。
三、登壇直後に聽衆の心理を見分けよ。
四、近代の聽衆は主觀的理論よりも、客觀的事實を好む。
五、態度は自然なるを貴び、表現は短きをよしとす。
六、終つて後の餘韻に工夫を凝らすべし。
七、聽衆の氣を轉ずるため、多くの挿話を用意せよ。
八、前夜は能く眠り、演説前は少食に、且つ排泄に注意すべし。
九、野次は無視するを上乘とす。
一〇、如何なる聽衆に對しても決して調子を下ろす勿れ。十人の中必らず一人の賢者あり。

さしゑ、川端龍子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



キング大講堂

◇誰でも聞いて置きたい問題！
◇誰でも知つて置きたい知識！



現代青年が處世上修養上特に心掛くべき點は何でせうか

法農學博士　新渡戸稻造



僕は他人に教訓を與へる程の修養もないが、只一つ世の中を渡るに、常に心得度いと日頃思ふことがある。

それは『こゝだナ』と物事に就て一寸注意することである。

人の云ふ、或は書物に書いてある教訓は、大概解り切つた事のみであつて、五倫の道とか、忠君愛國とか、人に親切をせよとか云ふ如き教は數千年前から今日に至る迄變らない。

またわれ〳〵が幼少の時からも、家庭に於ても、學校に於ても耳にタコの出來る程聞いて居る。けれ共實生活を見ると斯く云ふ僕を初として、有難い教を守る者は少い。即ち我々は實行力を缺く、そこで實行と、教訓との間に遠い隔がある。

僕の『こゝだナ』と云ふ思ひつきは此隔を縮める策である。即ち考と實行とを結び付ける方法である。

勿論如何なる場合に於ても右の兩者が結び付けられるならば、其人は既に君子、聖人の域に達した人である。僕は一般世人を以て悉く君子聖人になるとは期待しない。僕自身も理想は高くし度いとは思ひ乍ら、恥かしい事に君子聖人の域に自ら達するとも思はない、けれ共『こゝだナ』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

と云ふ考は忘らないで記憶することを努める。

朝起きて夜寝る迄に、氣に喰はぬ事が數へ切れぬ程ある。顏洗ふに水が冷た過ぎたり、湯なれば熱過ぎたり、或は生温かつたり、食卓につけば飯が强かつたり柔か過ぎたり、汁の加減が甘過ぎたり鹽辛すぎたり、第一天氣がカッキリ自分の注文通りあることは一年に三日あらうかどうか、又家庭に在つて聞く事にしても、氣に障る樣な事は決して少くはない。何れも些細な事にしても自分の心を痛めるか、悲しませるか、傷つけるか、兎に角喜ばせるものは少い。

總て斯の如き場合に當つて、耐忍といふのは『こゝだナ』と思ひ出せば氣に喰はぬ事も、忽ちに消え、親切といふのは『こゝだナ』と思へば、飯焚きの不手際も忽ち赦し、勇氣といふのは『こゝだナ』と思へば寒い、暑いも我慢が出來、寛大といふのは『こゝだナ』と思へば他人が己の惡口を放つたり、己の心を疑ふ者も直ちに赦す心地になる。

斯くすれば世の中には己の心を害する者が少くなる。

右は甚だ簡易にして低級な心がけなるが、僕は之以上の高き道德を論ずる力がないから茲に求に應じて日頃の所感を述べる。

月の世界に就ていろ〳〵研究されてゐるやうですが一體何處まで解つてゐるでせうか

理學博士　山本一清



月は地球から約十萬里しか離れて居ませんから、今百倍の望遠鏡を用ふれば、僅か一千里の距離に近づけて見ることが出來ますし、世界最高の倍率を有する二千倍の望遠鏡を用ひますと、五十里の近さにまで引き寄せることが出來ます。從つて、月世界のことは、わざ〳〵探檢に出かけないまでも、我が地球上の事よりも精しく分つてゐる事が多くあります。

月には海も陸も山も溪谷もあつて、其等の高さ深さ廣さ長さなどは、何キロ何メートルあるかまで皆精しく測量が濟んでゐます。

その表面の解り易い場所に家が一軒あれば、其れは見える筈です。無論東京驛ぐらゐな大きさのものなら何でもよ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

く見えて居ます。

海と云つても水が無く、空氣も無く、從つて、月の世界は誠に澄みきつた萬年快晴で、晝でも月からは多くの星が見える筈です。溫度は、晝と夜とで大變な相違ですから、とても普通の衣服や防寒具などでは生棲することは出來ません。

しかし、月の世界の地上には未だ可なりの地熱があるやうですから、深く掘つて見れば暖氣もありませうし、溫泉も湧きませう。

アメリカのピケリングといふ老天文家が數年前から研究してゐるところに據ると、月の或る山からは烟や湯氣が時時立ち登るのが見えるさうです。又、ごく幼稚な植物も生えてゐると云ふ報告を發表してゐる人もあります。

月の運動は甚だ規則正しくて、滿月から滿月までの長さは二十九日と十二時間四十四分二秒八二と云ふことが知れて居ますから、之れを基礎にして勘定すれば今から百萬年後の滿月や新月の日をも豫言することが出來ます。

又、月の直徑は平均三千四百七十三キロ二〇（約八百八十里）であります。

月の世界には大小の噴火山が五萬以上ありまして、大昔には大々的噴火をしたらしい形跡があります。今は殆んど皆死火山となつてゐますが、しかし將來決して何事も起らないと斷言することは出來ません。

偉人になり大人物になる爲めに最も肝要な心掛けは何でせうか

衆議院議員　鶴見祐輔



少年のころより、私は傳記と歷史を好み、殆んど手當り次第に英雄傳などを亂讀した。その癖は今日に至つても已まない。

世に出てからは、私は日本は固より、海の外なる國々の偉人傑士を訪れて、親しくその人の思想言行を研究した。

近頃は自分が政治に入つて、色々な危險に曝されてきた。さうして實際社會の如何なるものたるやを多少體驗した。

さういふ三つの見方から、古今の人傑を眺めて見ると、成程と思はれることがある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

偉人と偉人たらざる人との區別は、私に取つては、まことに簡單である。

『偉人とは、恐怖といふ感念を克服したる人の謂である』

私はさう思つてゐる。

人間ば誰でも、心の中に危險を恐れる感じがある。ゆゑによい事と知つても、あぶない事はしたくない。人に非難されるやうなことには手を出したくない。さういふ感じに、後髪を曳かれて、大ていの人は、危險を避けて安全な道を歩いて死んでゆく。

誰でも偉人となる機會は惠まれてゐるのだ。人傑たるべき才能は、誰の心内にも潛んでゐるのだ。

たゞこれを發揮すると否とは、その人が安全を求めずして、危險に向つて勇往邁進するかどうかで決まるのだ。

古人はこれを勇氣といつた。

しかし勇氣といふ文字だけでは足りない。私は危險を恐れざる心、と言ひたい。卽ち自己心内の恐怖心を克服することだ。

秀吉の傳記を見て、一番に感服するのは、この一漢子が、一生を通じて、恐れるといふ感じを持つてゐなかつたことだ。秀吉位の智慧のあつた人は、まだ外にも澤山あつたのだ。しかし彼のごとく、恐るゝことなく邁進したものは、日本史中殆んど匹儔がない。

この頃私はビスマークの傳記を讀み直して見て、彼が如何に『恐るゝところなき人』であつたかを痛感した。

羅馬の英雄シーザーの傳記を繙くならば、彼が終生一貫、『恐れざる人』たりしことを知るであらう。

この『恐れざる心』から、すべての偉大なるものが生れたのだ。(四、二三、二四)

日本人は大人も子供も、一人當り百圓近くの借金を脊負つてゐると云はれますが、一體どういふ譯でせうか

經濟學博士　牧野輝智



老衰して足腰の立たないお婆さんも、生れたばかりで東西も知らない赤ん坊も、日本人はみんな澤山の借金を脊負つてゐます。それはかういふ譯であります。我國の國債はざつと六十億圓あります

が、内地人口を六千萬として一人當りの負擔を計算すると百圓宛といふことになるのであります。

公債六十億圓といふのは大ざつぱの計算であるが、正確な數字で云ふと、昭和四年九月末の現在高は五十九億九十五萬四千八百九十九圓であります。そして其の内十四億五千一百二十九萬一千八百四十九圓が外國債であります。

かやうに政府は五十九億餘萬圓の内國債、外國債を負うてゐるため、其の利子だけでも一ケ年にざつと三億圓ばかり支拂つて居ります。三億圓といへば陸軍の費用、海軍の費用全額を合計した額と殆ど同樣であります。

右の國債の中でも、外債の十四億五千萬圓は、我々國民として特に氣にかゝる負債であります。

此の外に我國では、東京市、大阪市などいふ公共團體の外債があり、又南滿洲鐵道會社や、東京電燈會社などいふ民間會社の外債があり、その合計が五億五千萬圓ばかりとなりますから、國債と合せると我國の外債の總額は二十億圓に達し、毎年々々外國に支拂ふ利子だけでも一億圓に達してゐます。

我國は年々輸入超過であるため外國に對し多額の金を支拂はねばならぬ上に、外債の方面でも利拂だけが一億圓もあるといふことは非常な苦痛であります。イギリスは矢張り毎年輸入超過の國でありますけれども、外國に澤山の金を貸して其の利子が這入りますため、輸入超過の分は其の利子收入で支拂ふことが出來ます。然るに我國は輸入超過である上に二十億圓からの外債を脊負つてゐる是では我々は安閑としてゐる譯には參りません。

政府の財政といふものは國民の經濟を基礎とするものであります。又國民の經濟といふのは我々の私生活、私經濟の集合であります。それで我々が努力して富を作りそれを貯蓄すれば、國民經濟が豐かになり、國の財政が鞏固となるのです。政府や民間の會社などが外國から金を借りるのは、日本に資金が乏しいからであります。政府が澤山の國債を發行してゐるのは、財政が鞏固でないからであります。

我々が勤儉力行して國力が充實すれば、政府の財政も豐かになり、國債を償還することもたやすい事です。國民一人の力は大したものでないにしても集合した力は偉大なものであります。今は郵便貯金は二十億圓に達して居りますが、あれは實に三千七百萬人といふ人々が平均五十四圓宛貯金して出來たものであります。今後我々が協力して更に二倍三倍の郵便貯金をなせば、これで外債全部を償却することが出來ます。さうすれば國としては利拂だけでも一億

圓から儲かることになるのです。

政府が負ふ六十億圓の國債の始末は結局我々の責任であります。努力して其の餘裕を貯蓄することは單に自分の利益になるばかりではない。軈てそれが大いなる國の利益になるのであります。

小說とわれ〳〵の實生活と、どんな關係があるでせうか



文藝家　千葉龜雄

あながち小說とのみ限らない。どの國でも、その國の出版書籍の中で、文學書が一番多く讀まれる。文學はどの書物とも違つて、事實を書いて居て、理窟を書いて居ないからだ。われわれ人間が生きて實驗して居るところの『實際の人生』を書いて居る。六づかしく云へば具象物である、だから、誰にもわかり、その上、誰が讀んでも惹きつけられる。面白くてたまらない。その中でも小說が第一位である。文學は、小說、戯曲、詩の三種に分類されるが、戯曲は、俳優がそれを演出して始めて完成するものであり、讀むだけでは面倒だ。詩になると、韻文だ。きまつた型があるので、讀むにも、作るにも難儀だ。小說だけは、それ等の窮窟がなく、自由に讀め、自由に作れる。三つの中で、小說が、昔から、絕對的な勢力を占めて居たのはその爲めだ。つまり小說が實生活に一番親しい。

第二に、小說は、人間の持つかぎりの人情や、心理や、感情を、最高級から、最低級まで洗ひざらひ見せて呉れる。それを暴き出す鋭どい眼と心は、小說家のみが持つて居る。讀者は、そこに現はれた、神のやうなけ高い人間の精神を味はつて、自分の心を淸めるがよいし、また人間の心理が、こんなにも複雜であることを知つて、實生活の用意にする事も出來る。

第三に、小說は四五千年の昔から現代までのあらゆる國民性や、國家や、社會の姿を畫に書いたやうに見せて呉れる。ことに各國の國民性は、小說が一番好く書き分けて居る。

第四に、小說は、人間に限りない慰めを與へてくれる。人間の娛樂は數多いが、酒を飲むとか、賭博をするとかは、一時の慰さめにはなるが、そのあとに害惡を伴なつて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

來る。疲れた時、もしくは苦しくてたまらぬ時、一部のすぐれた小說を讀むとする。自分はいつか、見も知らない天國へ連れて行れかて、もう今までの苦しさなどはけし飛んで了ふ。精神が清められ、救はれる。

第五に、小說を讀むと、人間が親切になれる。社會の事情と人間の心の奧がわかるからだ。同情が出來て物わかりがよくなる。

第六に、小說は、書いてある文章が、何とも云へぬほど、讀者の美に對する感情をそゝり、またその感情を健康に育ててくれる。文章を讀むだけでも、どれほど樂しいか知れない。

第七に、小說は、社會進化の歷史ばかりでなく、宇宙萬般の知識が得られる。これによつて自分の社會や實生活に對する理想を養つてくれる。

農村を振興させる爲に何うい ふ名案がありませうか

衆議院議員　山崎延吉



今日の農村は悉く自治體になつてゐる。故に自治の本義に目ざめ、自治機關の整備と自治事業の振興とが出來れば、何處の農村も振興する。その實例は全國に澤山あるのである。

然し、事實を調査すれば、又農村には疲弊すべき原因が橫つてゐないではない。由來、我國の政治政策は、農村を閑却して都市偏重になつてゐる。市民生活の前途のみ保護して、農村民の前途を何等保護してをらぬ。故に政治を公明にし政策を公平にするは目下の急務であり、農村振興の對策としては、それが先決問題である。

とはいへ、政策によりて農村の振興をはかるは猶越中褌をかくが如しである。いざといふ場合に、向ふから外れる恐れがある。他力本願はあてにならぬ場合がある。故に農村振興の根本は、自力本願でゆくのが安全であり、六尺褌が一番大丈夫であることを覺悟すべきである。換言すれば、農村振興の開祖は、やはり農民自身でなければならぬ。即ち農民の自重が根本である。

大阪府下八尾町の青年團長をしてゐた梅原幾次といふ人、これは住友の電線製作所の職工であるが、これが日曜毎に百姓をし、三段五畝作つて、一昨々年は六石八斗一合

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

穫つた。職工をしながら日曜だけでこれだけの收穫を上げた。この話を私が青年團の講演でしたところ、千葉縣の地主で高橋といふ人が、之を聞いて、專門の百姓が一生懸命やつてもなか〱さうはゆかないが、職工の片手間ではそんなに取れる筈がないといつて信用しなかつた。ところが、實際當人が行つて實地に之を見て來て、すつかり感心してしまつた。かうした例もある。農村の主業である農業を有利に經營して、まづ農村民の收入を豐かにすると共に、舊來の陋習である不規則を破り、無意義の消費に對して節約を加ふべきである。

岐阜縣の模範村に蛭川村といふのがある。そこに感心な青年がゐて、私は次男だから百姓をやるなら未墾地を開拓して掘立小屋から一家を起したい――かう云ふので、私が世話をして、まづ愛知縣の種畜場へ入つて一ケ年間畜類の扱方から作物の實際をみつちり稽古させた。そこで、岐阜縣の中津といふ町の上の方に何人も手をつけない瘦せ地があつたのを、低利資金で手に入れ、そこへ掘立小屋を建て、土地を肥すべき牛を飼うて、牛と共同生活をはじめた。ところが、掘立小屋でも一家をもてば、女房が無くては困る。それからいろ〱嫁の物色をしたが、こんな家へ嫁にゆかうといふ物好きの女はなか〱見當らぬ。すると、蛭川村の助役の娘、これが私ではいけますまいかと云つこ來た。不足どころか勿體ない位。だから吾々も力瘤を入れたのであるが今では夫婦共稼ぎで立派にやつてゐる。

これだけの意氣をもち、眞に農民としての自覺の上にしつかりした人生觀を持つならば、農村の疲弊必らずしも悲觀するを要しない。又百姓の嫁になる女がないなどと弱音を吐く必要もない。女と雖、決して百姓を嫌ふわけでない。眞に敢然として奮鬪する程の男にならば、女に限らず男でも協力する氣持になるものである。私はかうした實例はいくらでも知つてゐる。すべての農民がこゝに目ざめるならば、日本の農村と雖、かの丁抹の如き農產業の振興を見ることが出來ると信ずるのである。

現代の婦人に關して、どういふ問題があり、どんな運動が行はれてゐるでせうか

早大教授　帆足理一郎

近代のあらゆる運動の底を流るゝ大思想は、「人を人として取扱ふ、何人も他の人に從屬せず、何人も他の人の奴隸



たるものにあらず』
といふ、尊い人間性の自覺及び、之から生れる、舊來の不合理なる制度より人間を解放せんとする叫であります。

婦人問題も亦然りであります。即ち、今までは、いろいろの事情から女子が男子の從屬物の樣に取扱はれたのを改めて、女子も一個の獨立した人間として、男子と對等の社會的地位を與へんとするものであります。而してそれには色々な方面があります。

第一に、我國では男子にばかり大學教育を施して、女子を除外してゐる。中等教育では男子の中學にも劣る劣等女學校を高等女學校と呼んでゐる。これを女子中學と改稱して男子のそれと同等にし、女子にも大學豫科を設けて、大學の門戸を開放せよといふ教育の機會均等を主張する運動があります。

次に、婦人が政治上男子と對等の地位に立つことを要求するのも道理で、國民の半數は婦人であり、彼等女性の利害は女性を其局に立たせねば分らぬことで、男子と同樣婦人にも公民權を認めて、地方自治に參加させ、又參政權を與へて、代議士を選んだり、自ら女代議士にもなる資格を認めて貰ひたいといふ婦選運動があります。

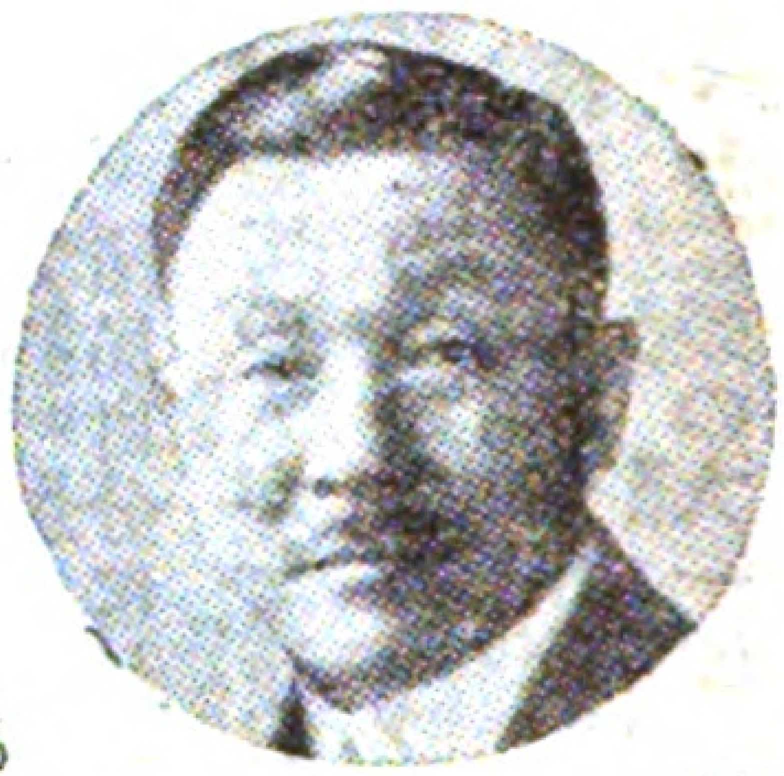
又社會問題の一として、藝娼妓のやうに、男子の玩弄物となつてゐる憐れな婦人の賣買を禁じ、又同時に、私娼をも撲滅して男子も一般良家の娘と同樣に、性道德を守り、娼婦のために身を汚すなといふ廓清運動や廢娼運動があります。

更に又、婦人はこれまで妻として子を生む機械に外ならず、貧乏人の子澤山で、子供を粗製濫造し、病弱早死は勿論、無能力な子を澤山生んで社會に迷惑をかけてゐた。處で、少數の優れた子供だけを生む母の自由を認めて貰ひたいといふ產兒調節運動があり、そして又貧乏な母の負擔を輕からせよといふ母性保護の運動もあります。

今後の社會では家婦の財產權を認め、夫の不品行や、妻に對する虐待を法廷で男女對等に裁判させたり、又妻を家庭の女王たらしめよといふ家庭權の主張もあります。

政黨といふものは何故必要でせうか

法學博士　岡　實



政黨といふものは議會政治につきものである。憲法に依つて選擧權を得『自己表現』の機會を與へられた多數民衆が、彈丸の代りに投票を以て、ある首領なり、ある主義政綱なりに味方し、又は敵對するために出來る。つまり政黨は政治的同志の集りである。

從つて政黨には、親分本位のものと、政綱本位のものと二通りある。前者はある優れた人を中心とした政治的集團で、從來日本の政黨は多くこれに屬する。後者はある主義政綱を中心とした政治的集團で、英國の自由黨保守黨などがその適例である。

今日は個人や少數者が獨斷專行の時代ではない。議會といふものが存在する以上、國民が自己の信奉する主義政綱を貫徹するには、どうしても政黨の力を借りねばならぬ。換言すれば政黨は、國民の意志を代表し、團結の力によつて國民の利福を計る公器である。

しかし、一旦政黨といふものが出來上ると、源家平家の如く反對黨と相對する事になるから、立派な政黨でも、動もすれば理智の働きが鈍り、寧ろ爭鬪に燃ゆる感情に支配され易い。かの神宮球場に於ける六大學リーグ戰のファンの氣持が黨人の心理である。殊に親分本位の政黨になると、もともとその黨員の間に經綸が乏しいのだから、政爭の弊は一層甚しい。

要するに政黨の陷り易い弊は、盲目的、感情的、射利的になり易い點である。所謂黨派心なるものは、あらゆる問題を政黨の利害から判斷する結果、政黨の行動は往々國家社會の利福と相反することがある。

しかし、政黨は憲法政治に當然つきものであるのだから、これを否定するのは固より間違ひである。われ等はお互ひに覺醒し、政黨が本來の使命を完うすべく、その改善に向つて驀進せねばならぬ。

日本を米國の樣な繁榮な國にするにはどうしたらよいでせうか

トラスコン鋼材社長　アール・エフ・モス

日本を繁榮させる方法は色々あらうが、何よりも先づ、輸出貿易を盛にすることである。



然も、輸出貿易は各國の激しい競爭であるから、之に勝つには物を安くせなければならない。物を安くするには、一方に出來るだけ無駄を省くと共に、他方に出來るだけ能率を擧げることが必要である。

私は、約二十年間日本に住んでゐるが、日本人は、非常な長所を持つてゐると共に、また、大きな缺點を持つてゐる。

長所と言ふのは、日本人は偉い働き者であると言ふのである。缺點と言ふのは、その偉い働き者であるにかゝはらず、滅茶苦茶に能率が惡いと言ふことである。

アメリカ繁榮の一つの大きな原因は、誰でも、何時でも解雇して差支へない制度になつてゐることである。本當にその事業に向き、本當にその仕事に必要な人だけが傭はれて、一生懸命に働いてゐる。解雇された人は、他の會社を尋ね、結局自分に最も適當な職に落付くことになる。即ち、總ての人が一番自分の向いた仕事に、最高の能率を發揮してゐるのである。從つてアメリカでは、費用が少なくて澤山の品物が出來、結局、極めて物價が安い、これがアメリカ繁榮の大一原因である。

然るに、日本では、官廳にも會社にも其他至る所に不必要な、又不適當な人が澤山傭はれてゐる、さうして一人で出來る仕事を二人でやり、二人で出來る仕事を、三人でも五人でもやつてゐる。

これは、日本の人口過剩も一原因であらうが、同時に、「解雇しては氣の毒」といふ日本人の親切心が却つて仇をなしてゐるものと、私は信ずる。

總て、會社に不必要な人、怠惰な、能率の惡い人を傭つてゐることは、單に其の給料の損失である許りでなく、その會社に勤めてゐる全部の人に、惡影響を及ぼすものである。

もとより、私は、勞銀を安くして、それで利益を計れと言ふのでは全然ない。勞銀を充分に與へて、たゞ必要な人材と、高き能率によつて、多くの生産をなし利益を擧ぐる樣にと、主張するのである。

斯うして費用少なくして生産を增加すれば、結局、物が安く出來ることになる。一般國民の生活費が、安く上ることになる。若し、一人當り、平均月に五圓の生活費が安くなつたとすれば、驚くべし、日本七千萬の人口では、一ケ年三四十億圓の購買力を增す。

これ丈の購買力を增せば、今日の失業問題などは忽ち一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

掃されるであらう。

尚ほ、日本の人々に勸めたいことは、もつと多く機械や、最新知識を應用して、出來るだけ無駄を省き、能率を上げることと、次には大學、專門學校出の人も、喜んで職工になること、無學な勞働者だけでは、能率の擧るものではない、米國では職工の中に、大學者もあり、支配人よりも高額な給料を取る職工もある。社員と職工との間に於ける、昔の武士と百姓の樣な階級的觀念を一日も早く取り去ることである。

更にもう一つ、勸めたいことは、商業を出來るだけ標準化（大きさや性質を型をまとめて商品を統一すること）することである。私は、ガラス窓の鐵の枠をこしらへてゐるが、日本では賣上高は極く少いにかゝはらず色々の形の物が注文されるので、結局、物が割高になる。こんなことでは到底、國際間の優勝者となることは出來ない。

もつと／＼申上げたいことは澤山あるが、要するに、どうすれば少ない人數で、少ない費用で、少ない勞力で多くの生産をなし、安く造るかと言ふことに就いて、日本の方方が研究さるゝならば、もとより勝れたる日本人である、世界有數な輸出國となり、不景氣とか、失業とか、あのいやな聲を聞かずに、皆人が、愉快々々に暮されることが出來るであらうことを私は確信いたします。

運動の良い影響は何でせうか 惡い影響は何でせうか

文部省體育課長　山川健

―良い影響―

○心が快活になり、剛毅、果斷の人となる。

○堅忍不拔と協同一致の精神が豐かになる。

○公明正大、正義を尚ぶ念を高める。

○體格の均整を保ち、姿勢が立派になる。

○體力旺盛になり、輕快敏捷となつて作業能率が高まる。

―惡い影響―

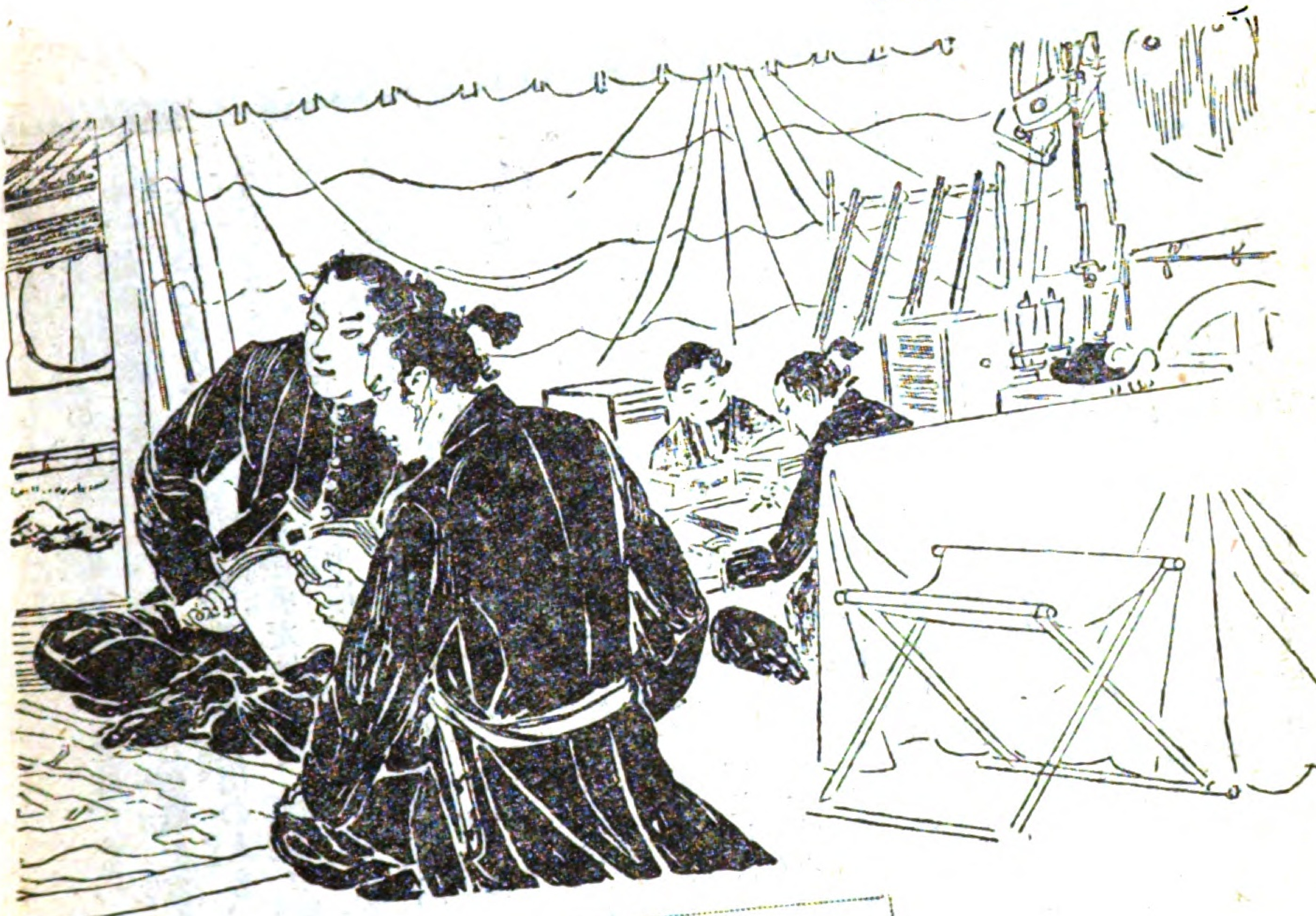
○磊落に過ぎ、粗暴に傾くことがある。

○較もすれば名譽慾に驅られ、勝敗に捉はれて運動精神を忘れる事がある。

○感激し易くなり、往々常軌を逸することがある。

○過勞、過食の爲、却つて健康を害することがある。

○病氣の初期、或は女子が月經時に運動して病勢を進めたり身體の變調を來すことがある。



江戸城總攻（戯曲）

眞山青果
小山榮達畫

登場人物

山岡鐵太郎　幕府精鋭隊長
覺王院義觀　上野東叡山執當役
龍王院堯忍　同上
林玖十郎　大總督府武家參謀（宇和島藩士）
中村半次郎（後の桐野利秋）薩摩藩隊長
村田新八　同上
益滿休之助　薩摩藩浪人
西鄕吉之助　大總督府武家參謀
その他、諸藩歸順者、總督府出仕、筆生、諸隊長、參謀方詰人、役僧等――

慶應四年三月初旬の或る日。明るき日の午前。

駿州靜岡の城下、征東大總督府武家參謀の詰所。家は傳馬町の豪富某の居住なりといふ。舞臺の裝置は平舞臺、室内より庭園を見る。

武家參謀詰所は、十疊敷ほどの二室を打通してそれに充て、その奥に廊下あり。鍵の手に曲りて總督府の御用室に通ずるも、御用室は見えず。一室には急造りの大卓子を置き、床几數脚あり。紫の幔幕を張り廻はし、軍器を飾り、旅具を積みて威容嚴重なり。一室には大火鉢を置く。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



庭園には雜木なく、苔蒸したる岩組に蘇鐵の簇生せるを見るのみ。春光にな
やかに降りそゝぐ。

幕明く。詰所出仕樋口某、谷村某、安場某、二室の中間に一丈四方ほどの大地圖を擴げて、戰爭報告書に引合ゝせてその地點を檢分しゐる。諸藩の隊長らしき者三名、その周圍に立ちて地圖を眺むる。室の一隅には書役の者二人机に坐りて指令書やうのものを筆記してゐる。云ふまでもなく一同軍裝なり。

谷村 何、何處が分らないのだ。(指差して)それが岩崎山だらう。

樋口 (地圖を探しつゝ)それは知つてるよ。等々力、等々力が分らんのだ。うゝと、これが坂上だから……。

隊長甲 あ、その手の下が菱山だ。その下、もう少し下だ。

樋口 うむ、これだ。等々力もあつた。文字が違つてゐる。

安場 すると近藤勇はこれとこれに關門を置いて、北は菱山といふからこの高地だ、これからこれへ砲壘を築いたのだ。

谷村 誰か石筆を持つとらんか。筋を引いて見いよ。

安場、鉛筆を借りて地圖に描く。

先鋒總督府づきの諸大夫城方某、許可指令の書類一束を持ち來り、筆記生に渡し去らんとして地圖を見つける。城方は六十二三、素襖を着し烏帽子をつく。

城方 いや、これは驚いた。何處だ。甲州の實測繪圖だ。(樋口を押し除けるやうにして)これは素晴しい。ちよつと、ちよつと拜見……。

樋口 何をなさるんです。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

城方　ちよいと……年號を拜見します。なる程これは………。安永六年丁酉の四月……。いや、恐入つた。處でと、この地圖は何方からお求めに相成りなした。

樋口　(迷惑さうに)城内の御書物文庫とか云ふ處を掻き廻はして、やつと探して來ました。

城方　流石は將軍家の威勢だな。恐入つたものだ。これは貴方、安永六年だから、伊能忠敬先生の測量地圖以前のもので、世間に類品のあると云ふ品ぢやない。何うですこの精密なる測量は……、恐入つたものだ。(近眼を寄せ、地圖の上を這うて見る)

樋口　では、讀むぞ。(土佐藩より送り來りし戰況書を讀む)然るに翌六日の朝、賊徒ども甲府城より三里ばかり東に着陣いたし候由相聞え、石和驛まで斥候を差出し候へば……、石和驛、あつたか。それだ〳〵。……斥候を出し候へば、勝沼驛に屯駐致し候に付、因幡高島の二藩及び本土佐藩の兵隊、同時に押寄せ候處、驛中に關門を設け、官軍をさへぎり候樣子に付、押破り、其番兵を追拂ひ、それより總勢を三手に分ち、一手は因州一小隊、本藩大砲隊と共に本街道より進み……。やはり然うだつた。おれの間違だつた。本街道は土佐の北村長兵衞だ。谷守衞は左方の山を攀ぢ上りとある。

安場　然うだらう。おれの方が正確だ。(地圖に線を引く)

城方　(びつくりして)これ〳〵、あんた方何をなさる。この繪圖に書入れなぞなさつて、飛んでもないことだ。何品と思つてゐなさる。

安場　(煩ささうに)又出てござつた。三河萬歲殿の出て來るところぢやない。あんた方は小笠原流の禮式で、御上御用を勤めて貰ひませう。

城方　三河萬歲とは……、私か。そりや好いが、地圖だ。

樋口　戰爭の研究だ。あんた方に口を出されちや困る。

城方　これは、安永六年の繪圖で、世間に又とある品では……。

谷村　地圖などは何うでも好うがせう。今兵隊どもこの甲州の遣り取りを爭つて、實地に鐵砲を打合つて戰爭を初めてゐるんだ。

城方　何うも……、田舍諸藩の方々には困りきる……。

樋口　こつちは京都の御公卿樣達に困つてゐるんだ。ピラシヤラ長袖を振り廻して、何事も仕事の邪魔になつて可かん。

城方　(むつとして)少しそれは……、口が過ぎませう。

安場　私達はね、國元でピン〳〵する生魚を食つて育つて來たのだ。乾魚に茶粥を召上つた方々のやうに、悠長なお附合ひは出來ません。

城方　怪しからんことを仰しやるものだ。京都ぢやとて……。

樋口　御上御用が缺けませう。何うかあちらへお詰め下さい。

城方　(安場を見て)あんた達は、薩摩の御藩中だの。

安場　(わざと國訛りを出して)はい、然いでごわんす。

城方　何うも……、中でも薩摩がひどい。兎角京方を輕んじて

ござる。（ブツ〳〵と呟く）

樋口　京都を輕んじは致しません。京都のお人が輕んじられます。

城方　（ジリ〳〵して）大體その地圖は、安永六年……。

谷村　こゝは陣地です。あちらへお引取り下さい。

城方　何うも、諸隊の傲慢、無禮……、怪しからん次第だ。

城方某、ブツ〳〵呟きながら去る。一同はそれを笑つて、又地圖を點檢する。

薩摩藩隊長取締中村半次郞（後の桐野利秋）入り來り、廊下に立ちて總督御用部屋の方を見る。半次郞、三十二、軍服に朱鞘の大刀。磊落にして精悍なる相貌。

中村　（御用部屋の方を見て）誰だ。誰が詰め掛けてゐるのだ。

樋口　上野の御使者が、朝飯前から來て動きません。

中村　坊主ども又、慶喜さんの命乞ひか。煩さいこつちや。（面を膨らして）で、おやぢ應對してゐるか。

谷村　先生は今日、避けてゐられるやうぢやつた。

中村　出られちや困るぞ。こゝへ來て泣言を聞かれては、それこそ千日の萱だ。（床几に腰掛ける）

安場　そりや有るまい。今度の西鄕どんは確固不動だ。慶喜公の首を見ないうちは、何事も手につかないと云うてゐる。

中村　無論その筈だ。が……、先方も必死の運動だ。先日は和宮樣の嘆願、やつと女使を追ひ歸したと思ふと、今度は上野の宮樣の哀訴だ。大總督の宮に於ても、情誼上忍びさせられぬ場合だ。油斷はならん。

樋口　中村さん、あんた勝沼戰爭の報告を聞かれたか。

中村　うむ、大村藩で聞いて來た。もう荒方、戰爭は濟んだちやとなあ。そいぢや何んにもならん、詰らん。（不平さうに呟く）

谷村　高が近藤勇を大將に、獵師や博奕打を四五百集めたゞけぢや。官軍に抵抗されるもんぢやない。

中村　土佐さんが氣がきかんよ。賊徒は四五百でも、少し負けてくれると好かつたのぢや。すりや川崎口から、遮二無二江戸を叩き潰す。

樋口　もう後五六日ぢや。三月十五日の總攻擊は延びさうな筈がない。

安場　考へりや嘘のやうぢやのう。あの江戸城目掛けて大砲をぶち放す……壯快ぢやらうなあ。はゝはゝ。

谷村　關ケ原以來の欝憤だ。一つうんと、暴れてやるかの。

安場　お互に、好い時節に生れ合はせたのう。はゝはゝ。

一同、哄笑する。中村ひとり何か考へながら、傍の記錄など讀む。この時各小藩の重臣、近國の旗本の家老等六七名、みな麻上下着用にて、白木臺に勤王誓書と稱する降伏書を捧げて、兢々として恐れ入りつゝ入り來る。

藩臣（一）　（廊下に立ち）伺ひまするが、武家參謀のお詰所はこちらでござりまするか。

樋口　何んだ、どれからござつた。

藩臣(一)　(坐つて)主人が代理に、勤王證書を持參致しました。何卒大總督の宮樣に、御前體よしなに御披露を願ひ上げます。

樋口　何處藩ですか。

藩臣(一)　下總國多古藩久岡桂之助家來稻田永馬と申します。

樋口　聞いたことのない名だな。どうで小藩ですな。

藩臣(一)　知行領地……一萬二千石頂戴して居ります。今般大納言樣參與方よりの御導きを受けまして、斷然朝命を遵奉仕り、盡忠報國の微志を貫きたしと存じ、主人桂之助に代つて勤王證書を……。

樋口　その盡忠報國は少し立遲れでしたな。ははゝゝ。

藩臣(二)　(進み出て)手前は松平上總介家來、筧孫太郎にござります。

樋口　松平上總介殿……？將軍家の御一家ではないか。

藩臣(二)　一家同宗と申しましても、朝命のためには大義親を滅し、飽迄も聖旨遵奉の外には、素より他心ござりませぬ。



樋口　然うか。(笑つて)披露致しませう。證書を御用部屋へ差出し、溜へ戻つて御沙汰をお待ちなさい。

藩臣(一)(二)、恭しく敬禮して去る。

旗本(一)　(手札を出しつゝ)拙者は三河磯山、藤懸三十郎と申します。

同(二)　(同じく手札)刈谷在、五千四百石、田邊只之進にござります。勤王御用について、粉骨碎身の御奉公を致したく存じまする。

同(三)　(同じく手札を出し)私は六千五百石、津田玄蕃の用人……。

中村　坊主ども長いなあ……。(記録を閉ぢ大欠伸しつゝ嘆願書を見る)ほゝう、あんた達は三河侍の御歷々衆と見えますな。やつぱり可けませんか。勤王方が便利でごわすか。はゝゝ。

旗本　われ〱は德川家旗本とは申しながら、王臣王土の名分は一日

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

も忘れは致しません。何卒相應の御用を仰せ付けられたく……。

同(二)　大總督府へ御披露のほど、偏に願ひ上げまする。

中村　頼もしいお旗本衆だ。はゝはゝ。徳川も瓦解する譯だ。

旗本(一)　いや私どもは決して主家を主家として……。

中村　理窟は云はんが好い。あんた達のやうな人を味方にすれば、さぞ朝廷もお心強いだらう。はゝはゝ。

樋口　兎に角、控室に下つて御沙汰を待たるゝが好からう。

旗本等、敬禮して去る。

半次郎、その後姿を見てプッと吹き出し、カラ〳〵と笑ふ。

樋口　何んですか、中村さん。

中村　あの麻上下といふやつさ、はゝはゝ。今見ると、よく吾々も平氣であれを着てゐられたものだ。まるで紙細工の天神樣だ。はゝはゝ。

樋口　本當だ。はゝはゝ。時勢といふやつは恐ろしいもんだ。



中村　全くだ。吾々が徳川を潰すのぢやない、時勢が幕府を倒すのだ。時に、横濱の報告は未だないかな。些と、手延びぢやないか。

安場　今日は歸りませう。パークスは元より藩との密約があるから異存を申す筈はなからう。抗議が出れば佛蘭西公使館だ。

中村　佛蘭西の抗議は初めからの覺悟だ。何うで佛蘭西公使は幕府に聲援するに極つとる。勝がゐる、小栗上野介がゐる。その膳立はチャンと出來てゐるだらうよ。

谷村　(勇躍するやうに)兎に角、三月の十五日だなあ!

樋口　然うだ、十五日だ!　はゝはゝ。

安場　向島の花はまだ散るまい。今年は江戸の花見だ。はゝはゝ。なあ、中村さん。

中村　然うだ。みなうんと飲めるぞ。はゝはゝ。

一同、一種の興奮を感じてどつと大笑する時、參謀附監察村田新八、紀州藩隊長某を叱りつゝ廊下を通る。新八、中村と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

同年配にて巨大なる體格。

村田　(紀州隊長を睨み)あんた方、今それ云つて何んとなさる。

隊長　決してわが藩は先鋒を厭ふ譯ではありませんが……。

村田　それは云はるゝ迄もない。たゞ私は、出陣の延引を問責するのだ。

隊長　即刻、直ちに出發します。

村田　無論のことです。甲州戰爭、近藤勇の一軍は鎭定しても、幕臣不逞の徒は諸方に蜂起を企てゝゐる。決して油斷はなりません。

隊長　承知致しました。直ちに發動いたします。(憤然として去らんとす)

村田　あ、紀州さん〱。(後から急に呼び止める)

隊長　は？(立止まる)

村田　申す迄もなく、貴藩は幕府第一の親藩ですぞ。

隊長　はい。

村田　他に勝れた軍功がなければ、笑止なる結果を見んとも限らん。藩が大事、君が大事、足下等家來の身も大事、篤と御勘考の上に御出精を頼みます。(多少揶揄の口調にて云ふ)

隊長　は、承知致しました。(足音荒らく憤激して去る)

中村　(御用室の方に行かんとする新八を呼ぶ)おい〱、村田。

村田　何んだ。

中村　(少し聲を潜めて)おやぢ今日……、何うしとるか。

村田　(閾際に來り立ちつゝ)相變らずボンヤリしとる。何か考へてゐられるのぢやらう。

中村　大事の時だ。おはん警戒しとらんと、可かんぞ。

村田　大丈夫だ。今になつてグラついて何うするかい。はゝははゝ。

中村　然うか。そいなら好いが、おりや何んとなく不安を感ずる。

村田　不安？ 何う――？ (室内に入り床几に腰掛け、屹として中村の目を見詰める)

樋口、谷村等一同は二人の談話を遠慮する心持にて、地圖などを片付けて去る。筆生等は依然として執務する。

中村　(鋭く村田を見て何か云はんとせしが、何か思ひ返して)まあ云はんと置かう。云ひたく……ない。

村田　が――？ (半は中村を詰るやうに促す)

中村　こゝはお互に、生死存亡――大事の場合ぢや。(厳かに對者を見詰めて)おりやその大事の場合といふが不安なのぢや。

村田　(目は鋭く半次郎を凝視しつゝ、首を振つて)分らん！

中村　おやぢはあれで、大事の場合ほど度胸の定まる人間だ。おりやその度胸が……、恐ろしいのだ。未だおはん、分らんか。

村田　分らん！ ……分らん！ (激しく首を振る)

中村　こゝまで追ひ込んで來ては、三月十五日と確定した江戸城總攻めの大謀議を、誰人とて、何人とて覆し得るものぢやない。徳川慶喜の首を見るのは、われ〱一同の希望た

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

熱望だ。日一日とその希望が實現しつゝあるだけに、何人にも

誰人にもこの大謀議は覆し得ない堅固なものになつとる。

村田　(重く頷首いて)然うだ。そりや然うだ。で――?

中村　(文句を案ずるやうに、言葉を切りつゝ)この確定してゐる謀議を、覆し得るものと考へる人があれば、それは……おやぢより外にないのだぞ。(重き意味を含めて云ふ)

村田　(相手の言葉を理解し得ぬやうに、左の耳を突き出し) あん――?

中村　他人には到底動かせない確定議を、動かし得るものと考へるのは、おやぢだ。又事實、動かし得る人間も、おやぢより外はない。

村田　ふうん、分つた!(拳を握つて、ドシンと卓上を叩き付ける)

中村　氣を付けてくれよ、村田。こゝは必死の場合だ!

村田　うむ、分つた!(叫ぶやうに云つて、一點を凝視する)

この時、奥の御用室の方に言爭ふ人聲聞ゆる。

中村　(顔を上げて)何んだ……? 何事が起つたのだ。

村田　上野の坊さんらしい。(立つて樣子を見てから)今日は坊さん達も命賭で乘り込んで來てゐる。容易なことでは退去しさうもないのだ。

中村　使僧は覺王院か。あいつ骨があるぞ。應對は誰だ。

村田　宇和島の林參謀が出てゐるらしいが、林君ぢや駄目だ。

中村　と云つて、先生を出しては後が面倒だ。貴公行つて、頑張つてくれ。坊主どもの方は、おれが引受けた。

村田　然うか。ぢや、構はず坊主ども追歸つてくれ。

中村　よし、おれがゐる。江戸攻めの斥候戰をつとめるぞ。

村田　頼むぞ。篠原が横濱から歸つたら、直ぐ寄越してくれ。

中村　承知した。

村田新八、去る。中村、中央の床几にどつかと腰掛け、腕組して使僧等を待つ。

上野寛永寺の執當職覺王院義觀、同じく龍王院堯忍、手代と稱する下役の僧二人を隨へて、武家參謀林玖十郎(宇和島藩士)と爭論しつゝ入り來る。

覺王院は四十六七歲、豪膽氣概の人物、龍王院は五十三四歲溫順篤實なる性質、共に紺玉蟲色精好織の素絹(俗に本素絹など云ふ)と稱する法衣を着用す。

中村半次郎、腕組のまゝコクリ／＼と居睡る。

覺王院　西郷氏は何うなされた。(廊下に突立ちて動かず)西郷氏に面談を求める。かほどの大事に、立會はれぬ筈はない。

林　(龍王院を詰所に導きつゝ)西郷參謀は御用繁多にて、今日は出席の暇がありませぬ。御質問には、拙者からお答へします。

覺王院　怪しからん! 申しても輪王寺一品大王の御口上書を却下さるゝに、當役の西郷氏が列席を拒まるゝとは何事だ。皇族たる法親王に對し奉り、態度不敬にあたりませう。

林　(穩かに)いや、上野の宮樣の御内願狀を却下するなぞとは……勿體ない。御口上書は御手許にお納め願つたのでござり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ます。

覺王院 恐れ多くも大王は、三十里の險阻を凌して大總督府に慶喜謝罪の内願をいたされたのである。然るに、一橋初め列藩六十餘名の哀訴狀と共に差戻さるゝからは、大王の御趣意も立たぬ譯……、即ち却下せられたも同樣ではあるまいか。

林 違ひます。慶喜處分は國家の重大事、朝廷の威權に關する大問題です。政治上の事件に、世外法中の尊貴の御身を煩はし奉るは、餘りに恐れ多く考へます。即ち法親王樣の御再考を願ふために、御口上書は封のまゝお納め願ひました。

覺王院 然し今日午前、大總督の宮樣と大王と第二回の御對面にて、用務萬端は兩參謀より愚僧等に說明あるべき筈になつてゐる。然るにその西鄕氏の出席もなく、この方宮樣の御書狀を却下せらるゝとは、その意を得ない。しきつて西鄕氏に出席を求むる。

林 西鄕參謀は陣中の用務多忙を極めて居ります。

覺王院 お手透をお待ち申す。勿體なくも法親王御方には、江戸表から御出張なされてゐるのだ。條理を立てゝ、回答を煩はしたい。西鄕氏、西鄕氏にお取次ぎを求むる。



林、默然として答へず。覺王院、詰所に入り床几に腰掛けてやゝ憤激の聲をなす。その聲を聞いて、居睡りしてゐたる中村半次郎は、キヨトンとして顏を上げる。

中村 （恍けたやうなる聲、人々を見廻し）あん？　西鄕が、西鄕が……何うか致しましたか……。

覺王院 （その態度にむつとして）西鄕參謀にお取次を求めてゐる！

中村 あゝ、然やうか……。（馬鹿にしたやうに云つて、又居睡る）

龍王院 （靜かに進み出て）婉くも申す通り、前將軍慶喜に於ては先月十二日江戸城を立ち出て、上野東叡山大慈院に閉居いたし、前非を悔んで只管謹愼の誠意を表し居ります。その恭順を御認めなく、强ひて征討ありましては寛仁なる朝廷御趣意にもかゝはりませぬかと、憚りながら愚僧などは……。

林 貴僧等は、伏見鳥羽の戰爭は會津桑名の二藩の罪、先供の間違のやうに申されますが、闕下を犯し奉らんとした反狀は歷然としてゐる。のみならず、天皇には既に關東御征伐の號令をも全國に下されてゐる場合であります。天皇の親征は重大の事、前將軍の菩提寺入りぐらゐとは、輕重比較にもなりません。

龍王院 然し、前將軍慶喜は水戶に生れ、烈公齊昭を父といたし、代々勤王をもつて聞ゆる家筋でござりますれば……。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



林　たゞ謹愼、たゞ恭順、御追討御猶豫と幾度人を換へて哀願されても、總督府に於ては謝罪の實効が認められませぬ。一度お踏出しになつた御親征の大本營を、然やうな曖昧な事をもつて、お引歸しにはなるものではありませぬ。

龍王院　わたくし共は僧侶の身とて世事にうとく、御政道に口を入れる筈はありませぬが、一品親王の宮樣にも、道中の難儀をも顧みず、遙々のところ歎願に向はれました事ゆゑ、その邊の處をも……。

林　然やう……。（腕を組んで重々しく、答へず）

龍王院　旗本には血氣無謀の輩も多く、或は宮軍に對して如何なる無禮を働かぬとも限りませぬ。一人騷ぎ出せば萬人狂ひ出して、江戸市民百五十萬は焦熱の慘苦を嘗めねばなりませぬ。然やうあつては、王政一新、專ら御仁德を施さるべき時にあたりて、恐れ多くも御宸襟を惱まし奉ることに相成りませう。宮家御方に於ても、その點を御慨きの餘り……。

中村　（卒然口を出し、嘲るやうな口調）そりやこつちへ持つて來る尻ぢやない。慶喜さんの心次第ぢやないか。なあ林さん。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

林　さあ……。

龍王院　（中村を見て）前將軍の心次第と申さるゝと……。

中村　あ、大事な御談判に、うつかり口を出して惡かつた。田舍者だ、御免なさい。はゝはゝゝ。（カラ〳〵と大笑）が、宸襟を安んじるも、萬民を救ふも、こつちで仕向けた事ぢやない慶喜さんの考一つで、何うにでもなることですよ。はゝはゝ。

龍王院　と申されますと……。

中村　和尚さん達にはお分りありますまい。江戸へ歸つて慶喜さんに御相談なさい。當人は百も千も氣がついてゐることですよ。はゝはゝゝ。

龍王院　……。（嘆息して、中村の顏を見詰める）

龍王院　（それまで目を瞑りゐしが、不快さうに半次郎を見て）あなたは薩摩の御滯中と見受けられますが……。

中村　（ケロリとして）は、隊長中村半次郎でごわす。

龍王院　われ〳〵一行が當地へ參る道中、慥に三島邊にてお目にかゝつてゐるやうに記憶する。

中村　然うでごわした。上野の宮樣の御通行は三島の宿はづれで拜したやうに思ひます。從ふ者は榊原、土屋、秋元以下大名が七頭、家來總勢三四百人、いやあ……立派な御行列でごさりましたたな。

龍王院　その時宮樣御方より龍王院執當職を御使に立てゝ、薩摩の隊長中村半次郎なる者へ命ぜ下されつゝある筈と思ふ。

中村　（小兒のやうた頭を掻いて笑ふ）中村半次郎なる者、でごわすか。はゝはゝゝ。半次郎なる者、慥かに御使者を受けました。

龍王院　その時法親王の令旨には、わが一行は徳川家謝罪のために靜岡大總督府に出頭いたすところである。その趣意の達する迄は、官軍諸隊に於ても進發を暫く見合はされたいとあつた筈である。

中村　然うでごわした。この和尚さんが（龍王院を指差し）わしの隊に見えて、その旨の御演說がごわした。

龍王院　その時隊長中村半次郎は答へて曰く、謹んで王命を受けます。然しながら吾々勅命をうけて進軍いたす者でござります。箱根の關所は東海第一の要害の地ゆゑ、その關所手前には止まられませぬ。箱根權現社までの進軍をお許し願ひたい。そこに停つて、必ずその前方には進みませんと云ふ答であつたかと思ふ。

中村　（他人事のやうに笑つて）好く御存知、然う申しました。

龍王院　然るにその官軍は、湯本に止らぬ。關を越え、畠宿を越え、湯本、風早、遂に小田原の宿まで陣舍を進めたやうに聞いてゐる。

中村　は、今日あたりはまだ〳〵進みました。神奈川、川崎、あん邊みな官軍で一杯でごわすよ。はゝはゝゝ。（巫山戲にしてゐるやうに笑ふ）

龍王院　（むつとする心を靜めて）宮家の令旨を何んと心得てゐら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

れます。

中村　はあ、誠に……相濟まんこつてごわした。（頭を下げる）

覺王院　相濟まんこと……？　王道は蕩々たり、至正至明と承はる。官軍の隊長と申さるゝ御仁が、令旨を輕んじ誓約に背いて、然やうな詭詐を行はれても宜しいものでござりますか。

中村　和尚さん。ちよつとお待ち下さらんか。

覺王院　何んです。

中村　あんたも漢文で云はれるから、わしも漢文で云ひますが……、（[illegible]の口調にて）何んとか云ふ言葉がありますな、大將たる者は、陣中にゐては……、何んでしたな、勅命を聞かずでしたかね。天子樣の命令でも、陣中にあつては從はれぬ場合があると云ふ漢文ですよ。はゝはゝ。

覺王院　何——？

中村　和尚さん。官軍はもう六鄕川まで乘出してゐます。江戸總攻撃は三月十五日、あと五六日に迫つてゐます。（斷然たる決心をもつて）誰方が來られても、決して、決して、決して、後へは引返しません！

覺王院　然らば飽まで、慶喜公の首級を見ようと云はるゝか。

中村　無論です。大總督の宮はその爲め天皇より節刀を授けられ、大命令をうけて京都を出發して參りました。

覺王院　（喝として）朝廷は、臣下の恭順至誠を認められませぬか。

中村　言語の恭順は認められません。實効が第一です。

覺王院　實効とは——？　實効とは何事ですか。

中村　慶喜さんが死ぬんです。それより外に道はありません！

覺王院　然やうか。御趣意のところ明瞭いたした。（龍王院と目くばせして）もはや申すべき言葉がない。大王にこの旨を報告申し上げる。

林　遠路御苦勞に存じます。宮樣へよろしく言上願ひます。

覺王院、憤然として席を蹴立てゝ去る。龍王院、悄然として首を垂れつゝ、林參謀に見送られて出て行く。

中村半次郎、ひとり殘りてクスクス笑ひゐる時、町の方に紀州軍先鋒隊の進軍の軍樂聞ゆる。

横濱に使者に行きたる蘆田軍介、倉皇として歸り來り、中村を見て室内に走り去る。

蘆田　困つた。（中村の手を握つて、低聲）困つたことになつた。

中村　何を慌てるか。公使館の方は、結果何うであつた。

蘆田　江戸を攻撃するには、われ／＼は英吉利と戰ふ決心でなければならん。

中村　何を云ふか。何んで英吉利と戰ふことになるんだ。それよりは、病院の方は何うだ。戰爭が始まつたら、官軍の負傷兵を、英國公使館の病院で收容してくれる承諾を得て來たか。

蘆田　それどころぢやない。パークスは大變な劍幕だ。

中村　何が大變だ。落付いて話せ。（舌打して）總攻撃の準備は

總て調つてゐるが、我軍の缺乏はたゞ軍醫官なのだ。その點は是非とも英國公使の援助を受けるより外に策がないのだ。

蓮田　それが可かんのぢや。戰爭を開けば、英吉利は幕府に援助の兵隊を出さんとも限らん。

中村　何を云つてゐるのだ。何處と何處との戰爭なのだ。英吉利が何んの關係するところがある。狼狽しちや可かんよ。

蓮田　國際公法といふものがあるんださうだ。パークス公使はそれを盾にとつて、官軍の無法を憤つてゐるのだ。困つた、實に困つた。

中村　分らん。ハツキリ云つてくれ。何んでパークスが……。

蓮田　好く聞きたまへよ。パークスは今回の戰爭を內亂征伐の軍とは見ないさうだ。政治上の戰爭、卽ち……政論の爭ひと見ると云つてる。順逆の大義をいかに說明しても、異人には分らん。

中村　政治の戰爭？　無論何日の戰爭でも政治の戰爭だ。

蓮田　然うぢやない。君は國際公法といふものを知らないのだ。內亂征討と政治戰爭とは全く違ふと、パークスは主張してゐるのだ。

中村　又國際公法か？　國際公法とは人の戰爭の邪魔をする法律か。そんな馬鹿げた法律が何處にある。日本で、日本人が戰ふんだ。

蓮田　君は、人の話も聞かんで、無茶を云ふからいかん。

中村　お主が馬鹿なのだ。そんな使して來るやつあるか。（[illegible]）まん。

田　賴まんなら、初めから人を遣らんがいゝ。馬鹿な――！

中村　何？

蓮田　最う好い。ぢかに先生へ行つて報告して來る。

兩人の高聲を聞いて村田新八出で來る。

村田　何を騷いどるか。

中村　馬鹿なことをこいつ、國際公法とか云つとる。

蓮田　馬鹿なこつちやない。英國公使は薩摩に病院を貸すどころか、薩摩の暴虐に向つて警告を發しようと云ふのだ。

中村　何んの爲めに、何が暴虐だ。

蓮田　パークスが云ふには、前將軍は今回の政治戰爭に於て、荀も一方の統御者である。しかも恭順謹愼して無抵抗の狀態にゐる。それをなほ逐へて殺さんとするは、人道上より見逃しがたき罪惡である。英吉利は通商國としてその暴虐を默過されないと云ふ。

中村　餘計なお世話だと云つて來い。默つて歸つて來るやつあるか。

村田　（中村の激昂を制しつゝ）で、何か。英國は幕府を援助するのか。

蓮田　それは云はんが、斯う云つた。例へ國事犯罪者であつても、その主謀者に第三國が保護を加へるのが歐米諸國の慣例となつてゐる。若し慶喜公にして英國公使館に逃込む場合があれば、英國公使は大英斷の斷案のもとに前將軍を保護す

ると明言した。

村田　厄介な事を云出して來たなあ。そんな面倒な法律が、世界に有つたのかなあ……。

中村　好いぢやないか。構はん〱。病院を借りなけりやそれで好い。怪我人は皆地べたへおッぽり出して置いて、生殘つた者だけで江戸城を乘り取らう。遣らう〱。日本人の戰爭だ。

葦田　佛蘭西公使は初めから幕府援助だ。英國まで敵にとつては、この際不利益ぢやらう。

村田　中村、何うする。先生に報告しようかな。

中村　うむ、おれも考へてるところだ。却つて好いだらう。先生は障害の起る度に奮ひ立つ人だ。貴公から話してくれ。

村田　好し！（葦田を見て）おい、おはんも一緒に來い。

村田、葦田、共に去る。中村、一人殘つて癇癪らしき舌打ち、「馬鹿にしてゐる……。ちよッ、何んだ……。パークスが何んだ。英國が何んだ。」不快さうに呟きつゝ室内を歩み廻る時、同藩浪人益滿休之助、ひよツくり入り來る。

益滿休之助は西郷の密命をうけて江戸探索の役をつとめ市内を擾亂したる罪によりて傳馬町の獄屋に入りゐたるが、勝安房守のために助命の恩典をうけて同邸に匿はれゐるうち、今回山岡鐵太郎が慶喜公助命の嘆願のために靜岡へ出張すると聞き、自ら進んでそれと同行せる人。三十歳ぐら



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ゐ、洗暢なる江戸辯にて、服裝なども町人めきたる好みなり。

益滿　(颯爽さうに入り來り、友人の扉を叩いて)中村。

中村　おゝ、益滿。お主幕府につかまつて牢屋にゐると聞いたが……。

益滿　うむ。二月ほど傳馬町で、ひどい目にあつたよ。

中村　何うして出て來た。もう……遣られてゐるものと思つた。

益滿　勝先生に助けられて、不思議なところで娑婆に出たよ。

中村　御苦勞だつた。貴樣が江戸で暴れてくれたので、こつちの仕事も大きに樂だつた。まあ掛けろ。何しろ結構だつた。

益滿　連れがあるんだ。西郷先生は？

中村　連れ？

益滿　山岡鐵太郎——鬼鐵、あいつ引張つて來た。

中村　山岡は……幕府精鋭隊の隊長だらう。何んで——？

益滿　うゝむ、命乞ひだ。慶喜さんの命乞ひに、二人で遣つて來た。

中村　貴樣が命乞ひ——？(呆れて顏を見る)

益滿　然うよ。あの人を殺して見たつて、藝もないこつた。

中村　益滿！(むつとして)お主、本心で、そんな——。

益滿　おりや勝先生に約束した。殺しちやいかんよ。(平氣で煙草入など出し、煙草を吸はんとする)

中村　(悄然として益滿を見詰めゐしが、急に廊下に立つて呼ぶ)村田

村田！

村田新八、入り來る。

村田　何んだ。

中村　(益滿を指差しつゝ)こいつ、歸つて來た。精鋭隊の山岡鐵太郎をつれて、慶喜の命乞ひに來たと云つとる。

村田　山岡と二人で——？(呆れつゝ)益滿！　山岡は？

益滿　玄關に立つとるよ。先生に取次いでくれないか。

村田　こいつ——、何うしよう。(當惑して中村の顏を見る)

中村　こいつの始末は、何うにもなる。山岡だ！(村田を見詰める)

村田　然うだ。山岡だ！

中村　何うする！

村田　何うする！

村田、中村、互に決心を促がすやうに目を鋭く、兩方より或る意味の決意を促がす。やがて互に強く頷首きあひ、玄關口の方に走り出でんとする。

益滿　(慌てゝ二人の前に立塞がりて)何、何處へ行く。

中村　お主の知つたことぢやない。山岡に面會するんだ。

益滿　君等が會つて何になる。先生に取次いでくれ。

村田　先生に——？　何を寢恍けてゐるんだ。

益滿　貴公等は山岡を切る氣だな。以ての外の話だ。

中村　何？

益滿　山岡は切られるのを望んでゐるのだ。行つて見ろ。

中村、村田、益滿を睨みつけ、去る。益滿、何か思案して御用所の方に行かんとする時、その方より笑ひながら歩み來る西郷吉之助の大聲聞ゆる。その後につゞいて、山岡鐵太郎、入り來る。

西郷は四十二歳、肥滿せる體格に軍服をつけ、例の無造作なる態度に入り來る。山岡は三十三歳、月代も髭も伸びて搔縦はぬ服装なり。

益滿は西郷の笑聲を聞きて、急に緊張を感ずるもの〻如く、閾際に直立して動かず。

吉之助 (笑ひながら)可けませんよ、あんた。あすこでガン〱叫かれては、お公卿様達がびつくりなさります。こつちへお出なさい。

山岡 何うも、持前の地聲で……。はゝはゝゝ。(西郷に導かれて談話所に入り來る)

益滿 (首を垂れつゝ)先生。叱られに……遣つて來ました。

吉之助 お〻益滿か……。(ジロリと見てから、呟くやうに云つて椅子に掛ける)悪い人を連れて來たものだ。弱つとるぞ。

益滿 はい!(涙含める聲にて)それは……存じてゐます。

吉之助 (獨語のやうに)勝先生も……酷い。こゝへ來て西郷に……

……何うせいと仰しやるのだ……

山岡 (たゞ一心の誠實より進み出て、熱心に)別に、むつかしい事ぢやありません。慶喜公の御命を救つて下されば、それで滿足します。

吉之助 そんな事出來るもんと……。(微笑、山岡を見て)困つたこつちや、なあ山岡さん……。

山岡 あんたは困つた位の腕組みだが、こつちは死ぬと生きるとの大事です。何うか前將軍の生命は、助けると極めて下さい。

吉之助 そんな、あんた……。(笑ふ)

山岡 西郷先生。笑ひ事ぢやありません。(生一本の性質からムキになつて)あんたはこの際好い主取をしてゐるから、暢氣がい〻男になつてゐるし、實際山岡よりは得を取つてゐませう。一つ奮發して下さい。

吉之助 好い主取?好い主取とは何んでごわすか。

山岡 あんたは今日の出の勃興國、薩摩の家來だ。こつちは滅亡國德川の臣下だ。云ふことに、それだけの損得がありませう。

吉之助 そりやあんた……廻り合せですよ。はゝはゝ。今日までには、薩摩も隨分苦しんで來てゐますよ。

山岡 然うでせう。然うでせう。(正直に頷首き)そりや分るけれど……。慶喜公を殺されては困る。西郷さん、何んとかして下さい。

吉之助 (思はず吹出し)あんた隨分無遠慮な人だなあ……。

山岡 無遠慮?私が?然う……ですかなあ。

吉之助 無遠慮でなければ暢氣先生でごわせう。はゝはゝゝ。

山岡 こりや、怪しからん。(呼吸に、不足さう)西郷さん、わしはこんなに、腋の下に汗をかいて話してゐます。暢氣坊と思

はれては困りますよ。

吉之助 はゝはゝゝ。(腹をゆすぶつて大聲に笑ひ出す)

山岡 笑つちや可かん、笑つちや可かん。西郷さん、何んとかして下さい。

吉之助 はゝはゝゝ。

山岡 何うも可かんなあ……。(俯向きゐる益滿を見て)益滿君。君からも先生に、話してくれたまへ。

益滿 先生！(一歩進む)

吉之助 可かん〳〵。おはん口を出しちやなりませんぞ。

益滿 (手を振る)益滿は江戸を出る時、死を覺悟して來ました。

吉之助 死なざなりますまい。止めません。(ジロリと門弟を見て腕を組む)

山岡 西郷先生、そりや困る。西郷先生……。

吉之助 そりや無理でごわすよ。

山岡 先生。西郷先生！

吉之助 ――。(冷然として瞑目のまゝ、動かず)

中村、村田、山岡を尋ねたる樣子にて戻り來りしが、詰所に西郷と山岡と應對してゐると見て驚き、互に屹と目を見合はせ、ツカ〳〵と來て鐵太郎の左右に立つ。殺氣を含んで山岡を睨む。

中村 (暫くして、決然)先生。この人は何んですか。

吉之助 あゝん？(目を開いて、二人を見)山岡さんちや。



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

幕臣の御方ぢや。

村田　何か御内談でもありませうか。秘密の御用でも？

吉之助　あん達は少し遠慮して貰ひませう。山岡さんにしても大勢の前では、主君の大事は話憎くからう。

中村　然し、われ〳〵も承つて置きたい。

吉之助　道中腹も減つてござるのだ。あんた達接待して、山岡さんに何か御馳走してあげて下さい。

村田　（屹として）先生！

吉之助　（二人を威壓するやうな眼先）特に、あん達二人に山岡さんの接待を頼みます。御臺所に申付けて下さい。

中村　（村田と何か目配せし後）は、承知しました。

　村田、中村、去る。やゝありて西郷は、常の打解けたる態度に復し、親しげなる微笑を含んで山岡を見る。

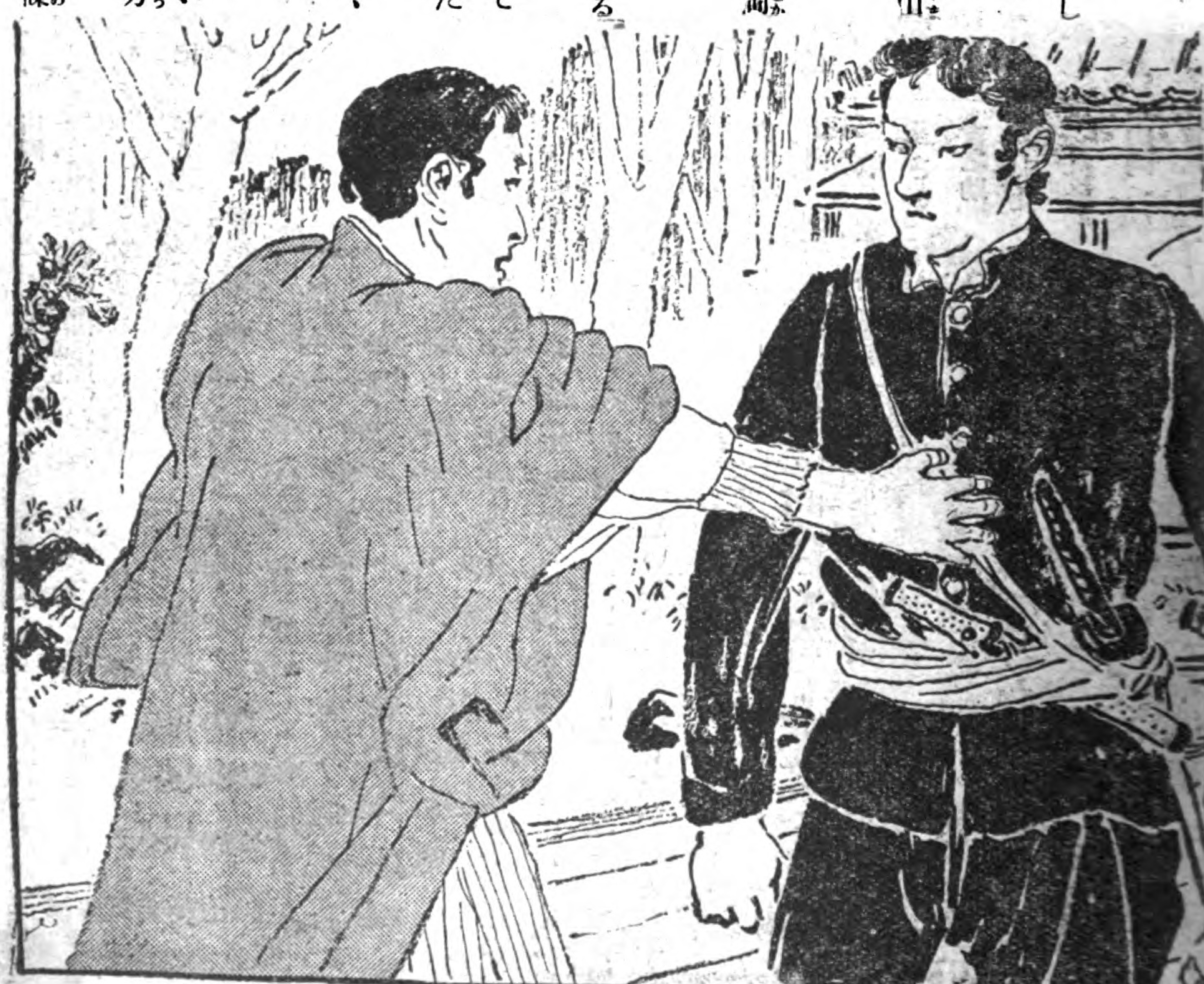
吉之助　それにしても山岡さん、好くこゝまで無事に通つて來られましたな。街道は官軍で警戒嚴重でごわしたらう。

山岡　處が存外、油斷のあるものですよ。思ひの外平氣に、暢氣に二人で遣つて來ました。

吉之助　ほう。官軍咎めませんでしたか。

山岡　川崎には薩摩藩の先鋒隊が宿舍してゐました。こいつ面倒だと思つたから、わざと案内を乞はず、わしの方からツカ〳〵と隊長の部屋へ入つて行きました。

吉之助　ほう、そりや……。（面白さうに笑つて）川崎には篠



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

原が隊長で行つて居ます。

山岡　・隊長室に突つ立つて、朝敵德川慶喜の家來山岡鐵太郎、大總督府へ通ります。と大聲で叫びますと、隊長らしい二人が、德川慶喜々々と、たゞ二言小聲で呟いてゐました。外に百人ほどの兵士が居ましたが、唯わしの顔を見るだけで、何も云ひません。こりや、締めたと思つて、サツサと出て來ました。

吉之助　そりや失策ぢやつた。はゝはゝ。（相好を頽して笑ふ）あんたを無事に通過させるなんて、その隊長譴責もんです。はゝはゝ。

山岡　神奈川宿に來ると、あれからは長州藩の兵隊です。益滿君を前の駕に乘せて、咎められる度に鹿兒島辯で、薩州藩でごわす、靜岡へ通りますと叫ぶと、長州兵はみな道をあけてくれます。わしは默つて後の駕に腕組みしてゐると、薩摩の大將株とでも思つたのでせう、みな捧げ銃をして私に敬禮してゐます。ちよつと、好い氣持になりましたよ。はゝははゝ。

吉之助　ほ、ほ、そりや見事でごわした。諸隊の者、みな罰則でごわす。はゝはゝ。（無邪氣に悦ぶ）

山岡　それはそれとして、西郷さん、何うして下さる。（小兒が物をせがむやうに云ふ）あんたが働けば助かるのだ。何んとかして下さい、お助け申して下さい。

吉之助　山岡さん、又この話ですか。（苦々しさうに見る）

山岡　又と云つて、わしはそれ一つで飛込んで來たのだ。是非御助命の御沙汰を拜さないうちは、動きません、動きません。

吉之助　命乞ひは、慶喜さん御當人の希望でごわすか。

山岡　誰だつて死たかない。無論、御希望です。

吉之助　然し官軍はもう六郷川まで殺到して、江戸城を包圍してゐる。日本を兩分して、東西の合戰に及ばんとしてゐます。前將軍にも、御自分ひとりの命でなく、大局につけて考へたが好ござんせう。もう遂うに、決心なさる時だ。

山岡　あんたは殺す方だから、そんな事を云つてゐる。死ぬ方はなか〱、そんなに死ねるものぢやない。兎に角、あんたが私の身になつて、薩摩侯がその場合に置かれたとして御覽なさい。殺せるか、殺せないか、云ふ迄もないことぢやないか。

吉之助　然し――

山岡　西郷先生、賴むよ。山岡には意見も議論もない。たゞ慶喜公を殺したくない一心だ。何うかそれだけを引受けて下さい。

吉之助　（嚴くして）山岡さん、實は、こちらにも弱味があつて、引受けたい處かも知れません。然し、勤王の大精神としてそれはなりません。

山岡　弱味？　何んの弱味ですか。

吉之助　正直に云ひますがね。英國公使から苦情が起つてゐま

す。慶喜さんを殺すことは、萬國の公法に背くと云ひました。然し、わしは……考へた。(重く、強く一點を見詰めて)例へ萬國の公法に背いても、今は日本建國の大精神を發揮する時ぢやないでごわせうか。山岡さん、何う思ひますか。慶喜さんは、何う云つても朝敵です。(腕を組んで動かず)

釜瀬　(決然、山岡の進み出るを遮つて)西郷先生。先生の口から英國と云ふ名が出たから申します。勝先生の衷心から恐れるところは、この際に起る外國の干渉です。日本國が東西の二勢力に分れて戰ふ時、英佛の二箇國が、必ずその何方へか加擔しませう。そして若し一度外國の勢力を藉りた時、異人干渉の端緒がそこに開けて、東西兩軍は勝つても負けても、外國權利の侵入を受けませう。印度の滅びたのも、支那の領土を失つたのも、皆外國の兵力を一時藉りたゝめではありませんか。

吉之助　(腕組のまゝ、重く頷首き)實に……痛いところでごわす。わしも今、英國公使の報告を聞いて、ふつと……それを考へてゐました。(嘆息して)勝先生はやはり、わし共よりは……遠いところを見てござる……。(語尾に顫へる如き氣味を帶ぶ)

釜瀬　その正義は何れにあつても、日本國内のことは日本人どうしによつて解決しなければなりません。例へ何んな些末な事であつても、この際外國人の勢力などを藉りることは――

吉之助　(手を上げて、狼狽せるやうに思はず叫ぶ)分つとる、分つとる!　英吉利病院を借りようとしたのは　おいどん一生の失策でごわした!　惡かことと考へました!(苦しさうに聲を搾つて、目に一杯の涙をためて、凝と一點を睨みゐる。暫くして又)日本勤王のためには、萬國の公法と云ふものを破つても、それは恐れません。たゞ外國に病院を借りようとしたこと……、誠に、誠に惡かことしました。勝先生に、面目ごわせん。

山岡　西郷さん。山岡は理窟ぢやない。わしは劍術遣ひだが、人を殺すのは洵に嫌ひだ。朝廷の御主意も、人民を殺すにはありますまい。天子は民の父母なり。何んとか考へて下さい。

吉之助　(涙を拂つて)分りました。慶喜さんの恭順が、實効さへ顯はるれば、朝廷にも必ず御寬典の御所置がごわせう。

山岡　實効とは何事ですか。それを命じて下さい。慶喜に於ては、決して朝命にそむく筈はありません。

吉之助　暫くこゝにお控へ下さい。大總督の宮に言上しませう。

西郷吉之助、立つて出去る。紋付袴の給仕の少年二名、膳部を搬び來りて次の室に供ふ。村田新八、中村半次郎、出で來りてその膳部の傍にどつかと大胡坐をかく。

中村　(控所を見て無作法に)山岡さん、如何ですかな。

山岡　ほ、御馳走ですか。遠慮なく頂きませう。(立つ)

村田　釜瀬、何うだ。貴公にも、御相伴しようよ。

釜瀬　うむ、飲むとも(決心をもつて)この酒は飲まずにゐられまい。

村田　(殺氣を含んで)飲むか。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



益満　飲むとも――、無論飲む。（膳部に來りて胡坐を掻く）
　　山岡、同じく次室の膳部に坐る。

中村　（黒塗の銚子をとつて）さあ、如何。われ／＼は特に先生から、あんた達の接待を命じられたんだ。

山岡　（わざと大盃をとつて）心持よく、なみ／＼頂きませう。

村田　（益満に酒を注ぎつゝ、笑談のうちに鋭く）山岡さん、今わし共二人で玄關にあんたを探しに行つた。居られんで仕合せだつた。

山岡　（盃を乾しつゝ）然うでせう。それ位のことがあると思つたから、取次を頼まんで先廻りしました。そこは江戸ッ子だ田舎の人よりは、立廻りが早いよ。はゝはゝ。

中村　何うしておやぢを見付けました。（又酒を注ぐ）

山岡　庭木戸からズン／＼入つて、窓と云ふ窓の下から西郷どん、西郷どん、用ありさうに呼んで歩きましたよ。おう、障子をあけて、大男が出て來ましたよ。はゝはゝ。

中村　（ムシヤクシヤしつゝ）さ、お上んなさい。われ／＼は接待者だ。

山岡　然うですか。ぢや、頂かう。

村田　益滿。貴樣も飲め。今日の酒は旨からう。

益満　注いでくれ。幾らでも飲む。

　一座に殺氣溢れて酒を飲みゐる時、西郷吉之助、手に奉書の卷紙を持ちて、詰所に戻り來る。山岡、それを見て立たんとする。

吉之助　いや、そこで結構。そこで好ろしい。（閾際に立つて）山岡さん。只今大總督宮殿下より、五箇條の御書が御下げありました。

山岡　は！（敷臺を下りて、恭しく正坐平伏する）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



吉之助（奉書を開き）一つ、江戸城を明渡す事。一つ、城中の人數を向島へ移す事。一つ、軍艦を渡す事。一つ、徳川慶喜を備前藩へ預ける事。以上五箇條。實効相立ち候上は、徳川家寛典の御所置もこれあるべし。（讀み終る）

山岡　謹んで承はりました。（屹と顏を上げて）然れども右五ヶ條の内に於て、その一箇條は拙者に於て、何分にもお請け出來ません。

吉之助（書札を卷き納めつゝ）それは、何の箇條でごわす。

山岡　最後の箇所、主人慶喜を一人備前藩へ預けること、それは決して相成りません。

吉之助（少し當惑さうに）山岡さん、又それを云ふか。

山岡　その箇條は、徳川恩顧の旗本八萬騎が承伏いたしますまい。戰端が開かれ、空しく數萬の生命を絶つは顯然たり。これ王師の正道とは思はれませぬ。西郷先生は人殺しになりませう。山岡鐵太郎、斷然その一箇條には從はれませぬ。

吉之助（屹として、重く）朝廷の御命令であります。

山岡　例へ朝廷の御命令でも、拙者に於ては從はれませぬ。

吉之助　朝命である！

山岡　――。（正坐して動かず）

西郷、無言に立去らんとする。

山岡　西郷先生！（屹と正面を睨みたるまゝ叫ぶ）

吉之助（立上つて）何ですか。

山岡　わたくし、鐵太郎のために、たゞこの一言について御一考を願ひます。（雙眼より滂沱として流るゝ涙のまゝ）先生も人

の祿を食み、君主を上に頂かれる力であります。たゞ一ツ時山岡と、先生と、地位を易へてお考へ下さい！

吉之助 ……。（凝つと山岡の態度を見詰めゐる）

山岡 先生の御主人島津公、若し誤つて、朝敵の汚名をうけ、その、その、その汚名を雪がんにも……、（歔欷をまじへつゝ）天朝遙かにして、路なく言葉なく……、官軍の征討を受くる日にあたり、しかもその君、恭順謹慎の實效をも認められず汚名は汚名として、雪ぐに道なく……、その時、先生……、山岡、わたくしの身になつて……、主家のために盡力する時（熱涙に言辭も斷絶しつゝ）主人慶喜に對する如き……、朝命が……、島津侯に下つたとしまする。その時、先生……、その命を奉戴して、その主君を差出し……、安閑と、平穩に、傍觀なされまするか。君臣の情、先生は、先生は……、如何、如何お考なされますか。たゞ一言、たゞ一言、それを承りたうございます。（泣く）

吉之助 然うですか……。（ホッと大息を洩らす）

中村、村田、流石に目を伏せて、暫らくの間、無言。

山岡 先生。西郷先生、篤と、篤と……御一考願ひます。

吉之助 （ホッと又溜息して、詰所の椅子に掛ける）山岡さん、こりや少し考へさして下さい。（グッタリして目を瞑る）

一同、無言。やゝ長き間つゞく。山岡は兩手に膝頭を摑んで歔欷の聲を洩らす。

吉之助 （やがて目を開き）好ござんす。吉之助、京都へ急行しませう。今日は七日。三月十五日の總攻めまでは、まだ八日あります。慶喜公の事は御心配なさるな。吉之助に任せて下さい……。

西郷吉之助、立上る。

（幕）

―をはり―



○ 樞密顧問官 男爵 田健治郎



近頃の大官連の醜聞は何とも沙汰の限りではないか。それについても思ひ起すことは、嘗て吾輩が逓信大臣をして居つた時の事ぢや。當時野黨にあつた政友會總裁原敬氏に相談事があつて、手紙を出したところが、早速返事が來た。それを見ると、先づ要件を辨いたあとへ、特筆大書して「政黨に對する物質上の御配慮に絶對に御斷り申上候」とあつた。彼原敬は、何と云つても偉い政治家であつた。

○ 文部省實業學務局長 木村正義

教育界で一番大事なことですか？ それは一言で云へば「生徒の創造力即ちオリヂナ



リテイーを伸ばす」といふことです。先進國では教師が生徒に注入的に教へ込むことを一切やらぬ。生徒が自ら學んで行くやうにする。例へば參考書を示して、生徒自身で研究させ、說明させるやうにし、教師は只それを補つて行くだけである。機械を用ふる實驗でも、生徒をして先づその機械を分解させる。今度はそれを組立てさせる。然る後その機械を使用して實驗させる、と云つた工合に、何處までも生徒を活かし生徒の力を引伸ばすやう心掛けてゐるのである。日本でも大分から云ふ敎育法が實行されてゐるやうだが、まだどうも、教師の云ふがまゝを安心して受入れるといふ習慣がとれない。日本人に偉大な發明發見が出ないのは、こんなところに一つの原因があると思ふ。獨り學校教育がかうであるばかりでなく、廣く社會全般を見渡しても、この傾向が滔々として風を爲してゐる。

工場に働く職工にしても、役所に働く官吏にしても、自發的に働く、いろいろ工夫考案を廻らすといふ心掛けが出來てゐない。命ぜられたまゝをやつてのけるのが力一ぱいだ。滿身の力を何處までも伸ばして働くことにたれば、日本は駸々として興隆すること疑なしである。

○

理學博士　小泉丹

先日ある婦人會の方々が、緊縮實行方法の相談會を催された。時節柄至極結構なことです。その申合せを拜見しますと、第一酒なしデー、第二煙草なしデー等々とある。成程「酒と煙草とは衞生に害あり」と昔から相場がきまつてゐます。



併し酒のみ煙草のみでなければ、酒煙草のことを語る資格はありません。私をして更に言はしむれば、煙草を廢めた人にして始めて禁煙を語り、酒を廢めた人にして始めて禁酒を說く資格があります。令夫人達が、禁酒禁煙を問題にする前に、もつと大切な緊縮が他にありはしないかを、自ら省りみて貰ひたいと思ふ。現内閣が緊縮を叫び、次官や局長から役人方の自動車をとりあげたといふのは、ガソリンや運轉手やタイヤの費用を節約するのが眼目では恐らくありますまい。『世人擧つて反省せよ。ひき締つて眞劍で働け』といふことではないでせうか。

○

音樂家　永井郁子



『ばら』專門の植木屋さんが、所用でお見えになつた時の話ですが『先生、兎に角この「ばら」といふのは、その種類が毎年大變に殖えて參ります。イギリスの國花ださうですが、何しろ花の大小から形狀、又花瓣の色合など、ドン／＼新種が出來てまゐります』

それから、植木屋さんは一段聲を落して、『それにつけても殘念に思ふのは、日本の國花と云はれてゐる「櫻」ですが、これは「ばら」とは反對に、その種類が段々減るばかりです。何とかならぬものでせうか』と。

私はこのお話を伺つて、それからそれへいろ／＼考へさせられました。



家庭小說

燃ゆる花

菊池幽芳
小早川清畫



賴子夫人

松尾信重が松尾家の老執事に伴はれて、麹町の松尾邸に始めて姿を見せたのは、その日の夕方であつた。老執事は伯爵夫人の命を受けて、帝國ホテルに信重を迎ひに來たのである。外國の旅から歸つて來た以上、當然一度はわが家に歸省しなければならない信重は、老執事の懇請を斥ぞける理由がなかつたばかりか、どうせ母に逢ふ必要はあるので、機會を失ひかけて居た彼には、いつそ渡りに舟と、快よく執事に伴はれて、一先わが家の閾を跨ぐ事としたのである。

母がまづ澁面でも作つて、彼を迎へるかと思つたには引かへ、更に何事もなくて無事にわが懐に歸つて來た愛し子を迎ふるやうな態度と、笑顔で彼を待つて居たのだつた。信重はほつとしたやうな氣持で、母に歸朝の挨拶を述べた。

惠美子の事には何一ツ觸れずに、最初の對話は進行した。母は久しぶりで彼と晩餐を共にし、彼の歸朝を祝はうといふのである。

食堂に隣つたリヴヰング・ルームで語り合つて居るのであるが、父がまだ姿を見せない事が、いくらか信重の氣になつた。

『お父さんは居らつしやるでせうね。』

『お父樣は前からのお約束があつて、今夜は外す事が出來ないのださうです。一緒に食事の取れぬのが殘念だと仰しやつて、先刻お出ましになつたのですよ。』

信重は少し失望を感じた。父の居ないといふ事が、何か自分に不利益であるやうな氣がした。

『お父さんからお聞になつたでせうね。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

信重は母から何も切出されずに居るのが、却つて壓迫を感ずるやうに心苦しいので、自分の方から切出した。

賴子夫人は眉一ツ動かさずに、

『聞きました。併し私はあなたが自分の過誤を知る日はすぐ來る事と信じて、安心して居るのです。』

『それは何を仰しやるのですか。さういふ日は永遠に來る事がありますまい、それが私の擇んだ妻に關する限り……。』

『あなたの結婚といふ話は、子供の飯事のやうなものだと、私は思つて居るのです。眞面目にあなたからその話を聞かうとは思つて居ません。』

『お母さん、私はいつまで子供ではありません。自分自身の行爲に對しては、飽くまで責任を持つ私です。たゞ御兩親の承認を求むる事の出來なかつた事情については、重々お詫をいたしますけれども……。』

賴子夫人はどこまでも沈着いた調子で、

『私から見ればそれは結婚でも何でもありません。私達が認めなければそれまでのものですから、あなただつて仕方がないでせう。』

『併し私達は正當な結婚をしたのです。この結婚を破棄する權利は誰にもないといふ事を、御承知を願ひたいのです。』

『正當な結婚といふのは、日本の法律で認めた結婚でなければなりません。あなただつてそれは承知の上の事でせう。』

『日本では正當な結婚といふ事には、如何にも兩親の承認が必要です。併し私にはあなた方の御承認が必要でない日も、すぐ來る事をお忘れになつてはいけません。たゞ御兩親に楯つくといふやうな事になる事は、好みませんから、是非ともお母さんの御承認を得たいと心を苦しめて居る次第です。私はお母さんが妻の惠美子に逢つて下されば、そこに何等かの途が展開すると思ふのですが……。』

『いゝえ、逢ふ必要はありません。それはどんな聰明な、また美くしい女であるにしても、あなたの擇んだやうな素性の女を、松尾家に入れる事は、絕對に出來ないのです。』

『お母さんは今日の時勢といふものを、考へて頂きたいのです。家柄や素性を八釜しくいふ事は時代錯誤ぢやアありませんか。家柄よりは人格です。この松尾家にしたところで、先祖は何だつたのです。土百姓から身を起したのでせう。本を洗へば貴族も平民もありません。それを考へて下さい。』

『あなたのやうに云へば、歷史といふものを無視する事になります。松尾家の貴とい歷史が、あなたには何とも映らないのですか。松尾家の代々の人達は、わが家の歷史を誇りとして生て來たのです。宮廷にも伺候の出來るこの貴とい血統の松尾家に、曲馬團に居た娘や、女優などを入れる事が出來ますか。少

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

し冷靜に考へて御覽なさい。』

『惠美子が曲馬團に居たのは、惠美子の罪ではありません。そこにはたゞ運命の冷酷さがあるだけで、一面から見れば、さういふ冷酷な運命に苛なまれ、あらゆる辛酸を甞て、鍛練されて來たといふ事は、決してその女を卑しくするものではありません。その上伊太利で立派な教育を受けた女です。女優といふと墮落した女を聯想なさるのかも知れませんが、その墮落し易い流れの中で、珠のやうな純潔さを保つて來た女は、どれほど貴といかも知れません。私は妻を誰の前でも誇る事が出來ると考へて居るのです。それが松尾家の歷史に汚點を印するものと、どうして考へられるでせう。』

『私はあなたの意見に同意する事は出來ません。私達はこのごろ階級が混亂して、上流の血潮にいろ／＼の血が雜つて來ては、だん／＼汚されて行く事を嘆いて居るのです。われわれ同族のためには、今日階級の純潔を保つといふ事が大事なので、それも成上りものは格別、祖先以來長い歷史と傳統を持つ松尾家としては、別してこの純潔な血統の流を擁護する事が、私共の祖先に對する義務でなければなりません。私はこの貴とい松尾家の血統によつて、あらゆる平民を侮辱します。平民達と私達のやうに、幾代も幾代も洗煉されて來た貴族の間には、人間の上に大きな隔があります。その松尾家に入るものとしては、正しい素性と高い家柄が何よりも必要です。たとへそれがどんな女であらうとも、素性の卑しいものを入れて、松尾家の血潮を汚す事は、私達にはどうしても忍べない事です。あれは曲馬團の娘だ、女優だと後指をさゝれるだけでも、それが松尾の家名に泥を塗るものでなくて何です。』



清

母が階級意識の強い女である事は、知らぬではなかつたが、その謬見を說破りさへすればどうにでもならうと多寡を括つて居たのが不覺だとも考へた。かうまで凝固まつた母の階級意識は、議論では迚もどうにもなりさうもないらしい。で惠美

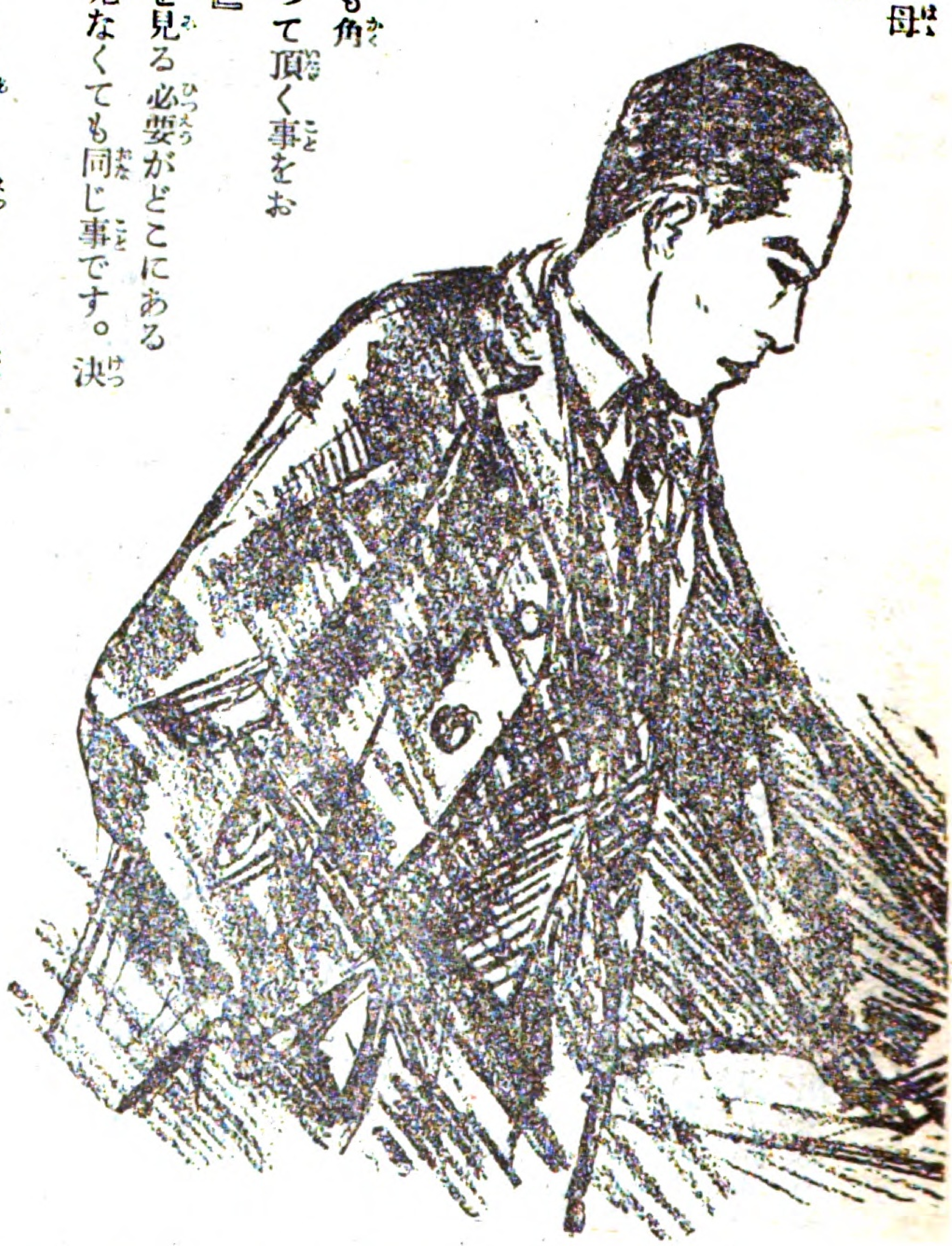
子さへ見てくれゝば、母を動かす事も或は出來るだらうとの、最初の考へに、再び戻つて行く外なかつた。

『併しお母さんは恵美子を知らぬから、松尾家に入れる事の出來ない女のやうに仰しやるのです。私は兎も角お母さんが恵美子に逢つて頂く事をお願ひして見たいのです。』

『あなたの妻といふ女を見る必要がどこにあるでせう。それは見ても見なくても同じ事です。決して逢ひますまい。』

母が逢ふまいとするのは、逢へば弱くなる自分の心を恐れるからだとも、信重には考へられた。それならばやはり母に逢はせるに限るが、たゞそれには機會を待たなければならないと、彼は思案した。

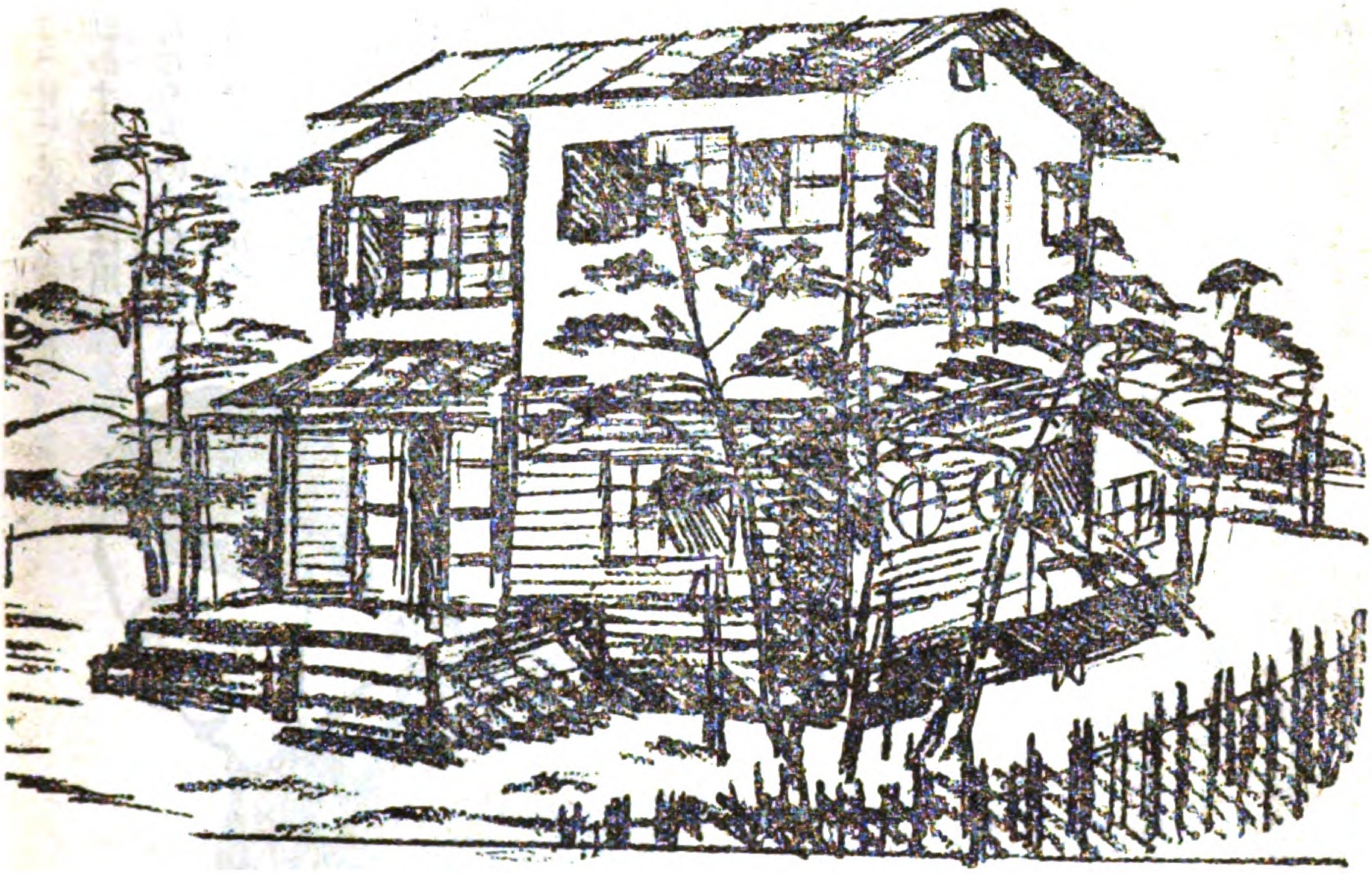
『それなら強ひてお願ひはいたしますまい。併し私達は正當に結婚して來たものだといふ事と、君の名譽が——延ては松尾家の名譽が、それにかけられてあるといふ事を御考慮に入れて頂きます。』



『あなたの伊太利での結婚といふのも、ほんとに合法的のものであつたかどうか、それも實は調べて見る事になつて居るのです。』

『お調べになるのは御勝手で、その方が結構です。私達は神の前に、伊太利の法律の前に、精神的にも肉體的にも固く結びついたのです。この結婚は如何なる場合にも破棄する事は出來ません。もし御兩親が最後まで御承認がなければ、止むを得ませんから、私が滿三十歳になるまで待ちます。その上では日本の法律が正當に二人を結びつけてくれませう。』

「さうなれば仕方がありません。あなたが飽くまでも私達の意



志に從はぬとなれば、松尾家もそれまでです。併しさうならない中にあなたがきつと迷ひを覺してくれるものと、私は信じて居ます。……この事では最早あなたとは云合ひますまい。きつとあなたに云渡して置ますが、もう一切惠美子とやらの事を、私の前で云出してはいけません。その問題は忘れて了つて、樂しく晩餐を取る事にしませう。』

不愉快な使者

信重と惠美子が愛の巢を鎌倉の海濱に構へたのは、それから數日の後だつた。家は小さな文化式住宅で、建築は粗末なものであつたけれども、靜かで淸らかな環境が惠美子を滿足させた。親切な家主の世話で、日用の器具なども一通りは整へる事が出來た。女中一人を置いた簡易生活で、二人はそれを住心地のいゝ住宅とするためにいろ〳〵の工夫をこらしたり何かする事に、當分飯事のやうな興味を感じて、何事も忘れて居た。

信重は元來樂天家で、今は兩親が反對して居ても、結局は認めてくれるだらう。またさう落つく外に途がないのだと、多寡を括つて居るのだつた。惠美子は信重ほどは樂觀して居ないけれども、良人が樂觀して居るものを、それに信賴を置かない譯にはいかなかつた。假にまた兩親が承認してくれなくても、良人が來年になれば日本の法律の下に、改めて合法的に結びつく事が出來るのだといふ事が、彼女に最後の安心を與へて居るのでもあつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



清

或日信重の不在中に松尾家の顧問辯護士板垣定行が、突然惠美子を尋ねて來た。

定行は賴子夫人から、早く惠美子に逢つて見て、出來るならば一日も早く信重と手を切らせるやう、一萬や二萬の金を出しても差支ないからと云はれて居ながら、その使命が成功するものとは信じないところから、今日まで躊躇して居たのである。

『板垣さん、あなたの仰しやる通り、來年の七月に信重が滿三十歲になれば、信重の意志次第で、その女と日本でも結婚する事が出來るのです。その時は私達の力はもう信重に及ばないので、その事は女も承知して居るのでせう。併しあなたからもなほそれを云つてやれば、多分女の空想を滿足させる事が出來ると思ひます。決してそれに反對の意見を仰しやつてはいけません。それが差當つての手切話を容易にする事に役立つでせ

『併し奥樣の仰しやる通りの事が、來年事實にある場合があるとしても、それはこの板垣の責任ではございませんぞ。』

『それは承知して居ます。私には考があります。』

以上の注意が伯爵夫人からあつた上で、定行は全く氣が進まないながら、惠美子の許を訪づれた次第であつた。

惠美子のすぐれて美くしく、人を惹つけずには措かない、明るく華やかな姿に接しても、定行は格別驚ろきはしなかつた。それは伯爵から兼々聞及んで居たためであつたが、惠美子がただ美くしいといふだけではなく、伯爵家の新夫人として、恥かしからぬ沈着と、品位にさへ富んで居た事は、寧ろ意外だつた。たゞ妖艶な肉感的の美人なのだらうと考へて居た事は間違つて居たのだ。

そしてその女に信重が打込む事は、當然過るほど當然であるとも、彼は考へるのだつた。伯爵夫人にどんな成算があるのか知らぬが、來年の七月までに、信重がこの女から離れるやうな結果が生じようとは信ずる事が出來なかつた。またこの女にしても正當の理由がなくて、信重と別れ切つて了ふ事を承諾しさうには思はれなかつた。惠美子が決して人任せになつて居る弱いばかりの人形のやうな女でない事、その眸子の輝やき、引結んだ唇にも仄見える烈しい氣象の隱れて居る女である事、如何なる場合にも自分から運命を開拓して行く女である事なども、定行には想像された。

松尾伯爵家法律顧問と、インキで肩書を書添へた法學博士板垣定行の名刺が通ぜられた時から、惠美子はそれが不吉な訪問

である事を豫感したのだつた。が、わるびれず、打解けた態度で、彼に面會した事はいふまでもなかつた。

伯爵夫人の內意を受けて尋ねて來たのだといふ事は、定行がそれを切出す前から、惠美子には分つて居た。併し始めて逢つた定行の態度には、人を見下すやうなところはなかつたし、また容易に感情を人に見せないらしい謹嚴老巧な老紳士とは見えながら、自分に惡感を持つて來た人でないと、一目で悟つた事が、惠美子の氣持を落つかせた。

まづ一通りの挨拶が終つた上で、

『伯爵夫人からの御用向と仰しやるのは、どういふ事なのでございませうか。』

惠美子の方から切出すと、

『私は決して愉快なお使ひにまゐつたものではありません。伯爵も伯爵夫人もお氣の毒ですが、あなた方の結婚を御承認なさらぬのです。それで明らかにあなたにその意志をお傳へするやうにといふのが、伯爵夫人の御命令なので……。』

心持惠美子の顏色は變つた。

『御兩親の御意志は良人を通じて承知して居ります。わざ〳〵のお使ひには及ばないかと存じますが、もしかまたその上私の進退をお指圖なさらうとでも、仰しやるのでございませうか。』

『いゝえ、決してお指圖をするなどと、そんな干涉がましいお使ひにまゐつたのではありません。』

迂濶な口は利けないと、定行は思ふのだつた。

『私は御兩親が御承認下さらない事を、ほんとに悲しみます。もし出來ます事ならば、忍べない事でも良人のために忍ばうと覺悟して居る私なのでございます。今は氣長く御兩親の御承認下さる日を、良人と共にお待する考なのでございますが、あなたはそれは無益だと仰しやるのでございませうか。』

定行は當座逃れの事は、この女の前では云へないと、當惑しながら、

『私も若しその日が來れば、これほどの喜びはないと、考へては居りますが、併し果してその日が來るかどうか、私には何とも御請合申上兼ます。』

『私共は最後の肚は極めて居るのでございます。日本の法律では、男が滿三十歲になれば、兩親の承認なしに、自由に結婚が出來るのださうでございますね。慥かにさうなのでございませうね。』

『たしかにその通りです。來年七月になれば、信重さんは御自由に結婚屆をお差出しになる事が出來ます。』

『それなら私共は來年まで待てばよいのでございます。良人はまた何も日本で生活せずとも、外國では正當な夫婦として立

派に生活が出來るのだから、すぐ外國に引返す事にしてもいゝなどと申して居るんでございます。』

惠美子は兩親が承認しなければ、このまゝ外國に引返す肚さへも持つて居るのだといふ事を、伯爵夫人に知らして置く方がいゝと、咄嗟に考へたのだ。

『なるほど、それも不可能ではありますまい。』

『併し私共は御兩親に楯つくやうな事は、なるべくしたくございません。私共を認めていたゞいて、圓滿な結局を見たいと、ほんとに希望して居るのでございます。たゞ最後まで御兩親がお認め下さらない場合には、どちらかの方法を取る外ございません。そしてそれは私共の罪ではないと考へて居ります。』

『あなた方には深く御同情申上げます。それで私は御兩親の御承認が當分得られないものとして、この間に善處する何等かの方法を講じたいと考へて居るのです。あなたは多分信事さんが、社會的地位も名譽も失はず、そしてかねての御希望の外交官としての地位に、再びつかれる日をお待受になつて居らつしやる事かと存じます。併し



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

し、それともさういふ考はお捨になつて居らつしやるのでせうか。』

『はい、良人が外交官として生活したい希望を持つて居る事はよく承知して居ります。また私としましても一日も早く、良人がその地位を得ます事を望んで居るのでございます。併し外國で合法的に私と結婚して來たといふ事を、あなたは良人の社會的地位や名譽に關する事とお考へになつて居らつしやるのでございませうか。』

『いゝえ、以ての外で……私、個人としてはさういふ風には決して考へて居ません。併し御兩親がそれをお認めにならなくて問題を起した場合、世間的に見てそこに疑惑が生ずる事は止むを得ません。あなたの爲にも面白くない噂がひろまることともなりませう。殊に信重さんが地位を得られる上には、伯爵、別して伯爵夫人の隱れた偉大な勢力を、お忘れになつてはいけません。巴里倫敦の大使館勤務には希望者が非常に多いやうで、容易にその地位は得られないらしいですが、伯爵御夫婦が進んでお骨折になれば、案外容易く信重さんの希望を達する事が出來ようと――これは私の臆測ですが、この點はあなたに何等かの暗示をお與へする事にならうかと思ひます。』

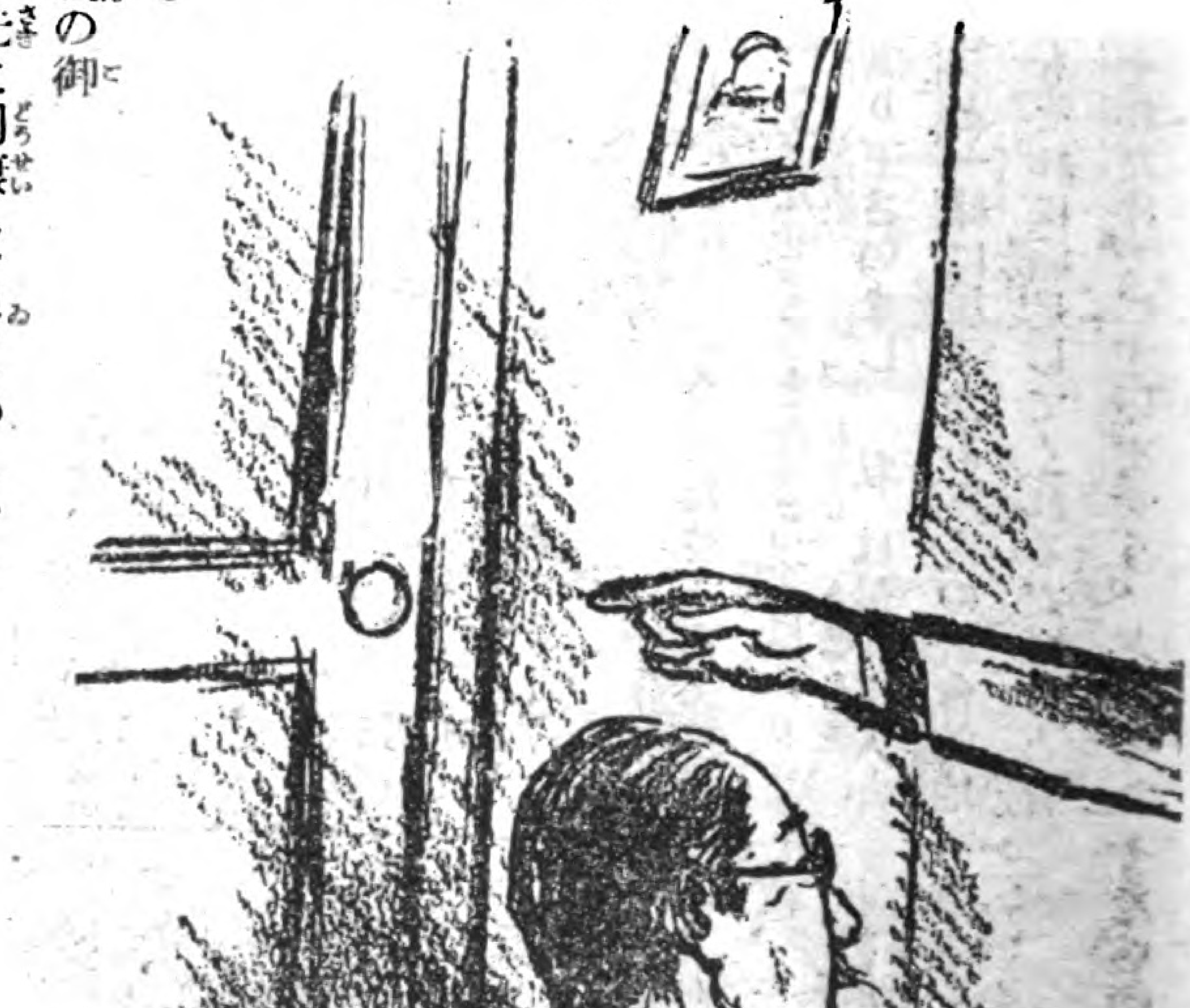


さう婉曲に云つて、定行は靜かに惠美子の顏色を伺がつた。恐ろしい失望がだん／＼惠美子の胸を蝕ばんで行くやうに見えた。併しそれを勉めて押かくしながら、

『それでは私と一緒に居ります事が、良人の地位を得る上に、大きな不利益だと仰しやるのでございますね。御兩親は私が居つては良人を推薦する事を差控へると、かう仰しやるので

ございますね。』

『露骨にさう仰しやる譯ではありません。あなたがおいでになるにしたところで、可愛いお一人子の事ですから、それは必ず御推薦もなさるでせう。併しいつの場合にも微妙な感情問題が意外な働らきをするものだといふ事を、お忘れになつてはいけません。結局御兩親の御承諾がないのに、つい鼻の先に同棲して居らつしやるといふ事は、あなた方に正しい理由があるにしたところで、信重さんのために、いろ／＼の不利益を招來する結果になる事は爭へません。……そこで私は甚だ露骨な意見を申上げると、あなたが當分信重さんとお別れになるといふ事、それがこの場合に處する賢こい方法ではないかとも考へるのですが、併しこれはあなたと信重さんの結合に、何か不安なところがあるとするとお勸めは出來ません。一年後には信重さんはどんな場合にも必ず、あなたの懐へ歸つて來るといふ信念があつて、始めて出來る事で、如何でせうか、あなたは信重さんを深くお信じになつて居らつしやる事だとは存じますが……。』



惠美子の顏はいよ／＼蒼ざめたが、併し昂然として、

『私は良人に少しの不安も持ちません。よし一年が二年になりましても、良人は必ず私に歸つて參ります。たとへ社會がどんなに私共を壓迫しようとも、御兩親が最後まで御承認なさらなくとも、良人を私から、私を良人から引離す力はどこにもございません。』と、やゝ聲を震はせて云つた。

定行は惠美子の信念と、その深い愛に動かされながら、心から憐れむやうに、

『私はあなた方の上に最後の祝福のある事を祈ります。併し今こゝではあなたがお別れになるといふ事はどうでせうか。いつそ伊太利へお歸りになつて、信重さんが外交官として巴里な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

り倫敦なりへ御赴任になる日を待つといふ事に……失禮ながらそれまでの生活費、旅費といふやうなものを、一萬圓或はそれ以上伯爵夫人のお手元から差上げる御意志のやうですが……。』

見る／＼惠美子の美くしい蒼ざめた顏は、怒に慄へて、許すまじき烈しい眼光を、定行の上に投げたと見ると、

『伯爵夫人は私への手切にそれだけのお金を渡さうと仰しやるのでございますね。私を日本から遠ざけて置いて、そして良人の意志を動かさうとするのでございませう。私はお金で身賣をする女とは違ひます。良人の手以外からは、誰方からも一文だつて頂きません。』

定行は慌てたやうに、

『手切れなどとさういふ風にお取になつてはいけません。云はばそれは好意の附物で……それも伯爵夫人が明らかにさう仰しやつた譯ではなく、私が忖度して申上げたのは失策でした。これは取消します。』

『伯爵夫人は永遠に私を良人から斥けようとなさるのです。それでなくて私一人を外國へ立たせようとなさる筈はありません。どうぞきつぱりとお斷り下さいまし。私は最早良人からは決して離れません。私と一緒に居るため良人の社會的地位が失はれますなら、良人もそれに滿足してくれるだらうと存じます。あなたの御用向はそれだけでございませう。どうぞお斷り下さいまし。』

定行は折角順調に進み出して居た對話が、こんな事にならうと豫期しなかつた。どうかして話を戻さなければならないと思ふので、

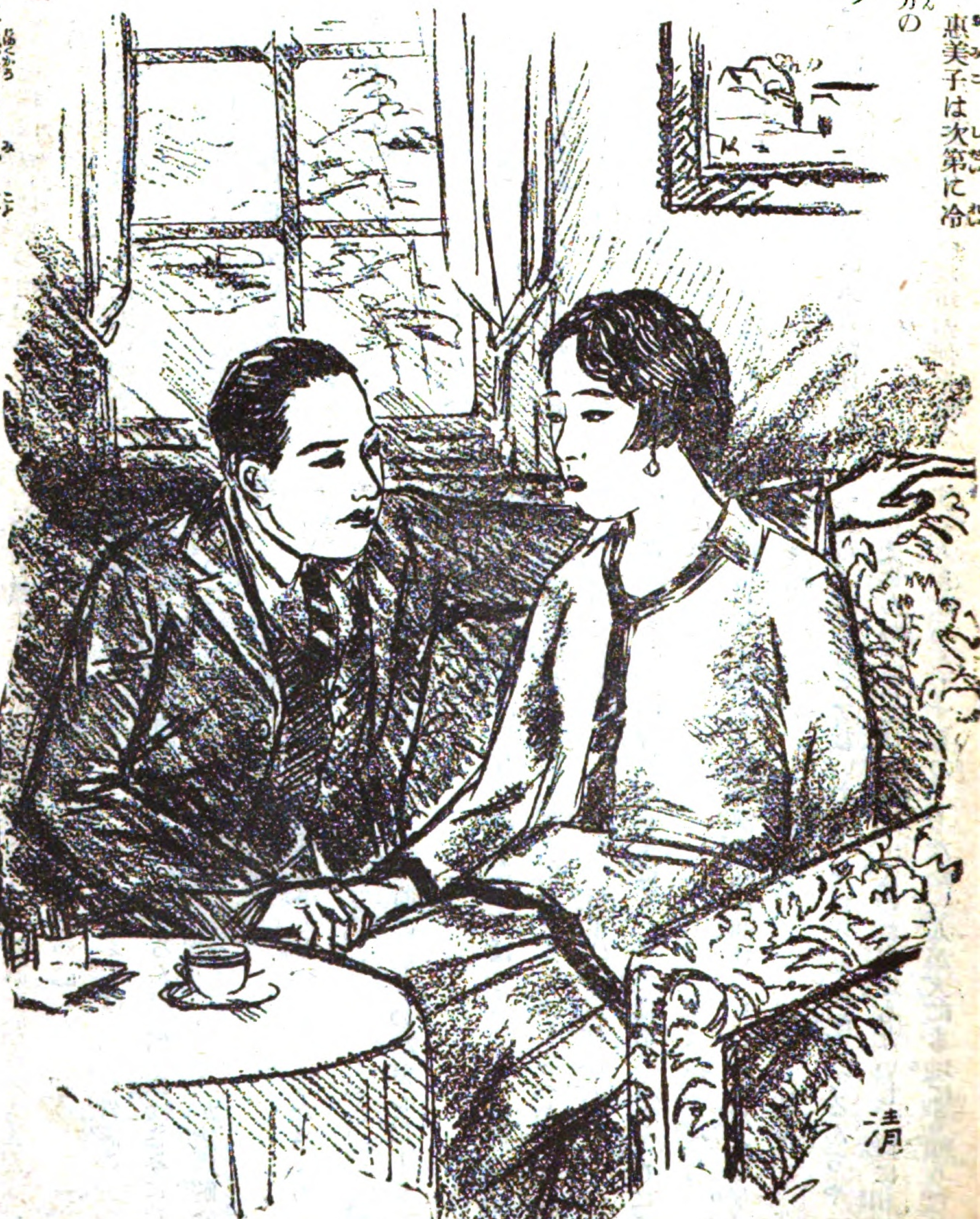
『いや、これはどうも失敗で……重々失言はお詫します。私は一面伯爵夫人のお使ではありますが、一面またあなた方の同情者としてお尋ねした次第です。金の事は水に流して頂きます。伊太利にお歸りになつてはと申上げたのは、これは伯爵夫人の御内意ではありません。私がこの席でふと思ひついたまでですが、私としては意味はなかつたのです。何も伊太利でなく、東京にお住ひになつたところで同じ事で、お別れになつたといふ事にさへなれば、必らずそこに有利な事情が生じませう。一ツその點を冷靜にお考へになつて頂きたいので、伯爵夫人にどういふ底意があるか、それは問題にしなくてもいゝと私は思ひます。あなた方が逆にこれを利用するといふ事も、一ツの方便で、要するにこれはあなた方が最後の決心さへ確かなれば、一時お別れになる位何でもないぢやァないかと、たゞその事を申上げて見たかつたのです。併しこれに對しては決してお返事を頂だからの何のといふのではありません。重ねて申ますが、私はあなた方の不利益を計るために上つたのでは決してないのですから、その點はどうか誤解のないやうに……。』

默つて聞いて居る中に、惠美子は次第に冷静を取戻して來ると、自分の突然に見せたヒステリックな態度や言葉が、少し自棄的だつた事を、この自分達に同情してくれて居るらしい老紳士の前に恥るやうになつた。

『御免遊ばせ、私一時にくわッとしたものですから、つい失禮を申上げました。』

『いや、それで私も安心しました。私はこの上多言はいたしません。私の申上げた事を、もし取どころがあるとお考になれば、なほゆる〱御再考を願ふ事として引退ります。』

『はい、良人の利益のために熟考して見る事



にはいたしませう。ですけれどももし良人と暫らくでも別れなければならぬとすると……あゝそれは私に取つて、どんなに悲しい事でございませう。』

『いや、御同情申上げます。此上は陰ながらあなた方の御利益を計る考で居ります。』

定行は恵美子から深い印象を受けて辭し去つたが、彼を送り出した恵美子の胸には、嘗て覺えぬ心淋しさと不安が深くも食入つて行くのであつた。

恵美子の思案

恵美子は今まで夢にも良人と別れて生活しようなどと考へた事はなかつたが、今眞面目にそれを考へて見なければならなくなつた事を感ずるのだつた。併し良人と暫らくでも別れて見る氣には、今の彼女にはどうしてもなれないのだ。憂鬱に良人の歸りを待つて居る中に、夕刻信重は東京から歸つて來た。

『どんなにか待つて居たらうね。早く歸つて來るつもりだつたが……おや、恵美さん、顔色が馬鹿にわるいぢやアないか。どうかしたのかえ。』

『えゝ……先刻お母樣のお使ひに板垣さんといふ方が見えたのよ。』

信重は眉をひそめて、『なに、板垣が來た。板垣が何を云つて來たんだね。併し、恵美さん、板垣が何を云つて來たつて、そんな事を氣にするには及ばんよ。放つて置いたらいゝんだよ。』

『だけどもさういふ譯にはいきませんわ。』

『全體何を云つて來たのさ。板垣といふ男はね、存外譯の分つてる親爺で、私達に同情してくれて居るんだが、板ばさみになつて困つて居るんだよ。母の使ひだと云つて、まさか無理解な事を云つて來た譯ぢやアあるまい。』

『えゝ、あの方は私達に不利益な事を考へる人ではなさゝうですわ。ですから私、考へさせられるのよ。』

さう云つて彼女は、今日の定行の訪問の趣意を語り聞かせた。

『ウム、そんな事だらうと思つた。實はさういふ意味の事は、私も板垣から聞かされたんだ。何もそんな事を考へる必要はないさ。放つて置くがいゝ。』と、信重は無造作に云つた。

『だけどもあの方の仰しやる事にも、一理はあるとお思ひにならない？』

『それぢやア恵美さんは、當分私と別れてもいゝと思つて居るのかえ。』

『あら、さうぢやアないわよ。だから私心配してるんぢやアありませんか。私は日本には一人のお友達もないし、誰に相談する人もないんですもの、あなた一人が天にも地にも頼りなの

よ。一日でもあなたと別れて、生きて居られるかどうかと案じて居る位ですわ。』

『それ、御覧、それなら別れる必要はちつともないさ。私なんざそんな事を考へても見ないよ。』

『ですけれどもあなたが御希望の大使館勤務の地位を得るためには、御兩親のお口添が何よりも有力だといふ事は、事實なんでせう。』

『それは兩親の口添は有力さ。そして消極的にはなほ有力だね、といふのは假に外の方面から運動して極つても、兩親が反對すると一遍に打壞されるといふ事さ。そんな事もなからうけども、有得る事には違ひないんだ。』

『だから御覧なさい、考へて見る必要がありますわ。』

『併し惠美さんと一緒に居るため、兩親が口添へをしてくれないといふなら、さうまでして外交官にならなくてもいゝよ。』

『だけどもあなたが倫敦か巴里の大使館詰になる事が出來たら、私は外國では立派にあなたの妻の待遇を受けることが出來てよ。この事を考へて御覧なさい。』

『それはそれに違ひないがね、そして一日も早くその日の來る事を望んで居るんだがね。』

『ですから一時お別れする事も一つの方便ではあるのよ。そのために御兩親があなたのためにこの運動をして下さるといふなら……。』

『別れる事は考へない事にしようぢやアないか。一緒に居たからと云つて、父が口添へをしてくれないとは信じたくない。要するにそれは最後の手段だ。』

『えゝ、最後の手段よ。お別れしたつてあなたさへ確りして下されば、私には心配はありませんわ。』

『いやだ、別れるのはいやだ。それは別れたつて心が變るやうな私ぢやアないが……死ぬまで惠美さんに忠實だと誓つてるんだからね。』

『その誓ひを忘れないでね。』

『忘れたら生命でも差出すよ。惠美さんだつてきつと私から離れないだらうね。』

『私、二度とあなた以外の良人は持ちませんわ。』

『いや、併し別れ話はほんとに止さう。なに、その中に母が折れるだらうと思ふ。』

『私、お母様にお目にかゝつたらどうでせうかしら。』

『それは私も考へて居るのだが、併し今はいかん。それは時機を待つての上の事だよ。今にその時機も來るだらう。』

『さうでせうか。……ぢやア當分お目にかゝらないがいゝのね。』

惠美子はさう云つたけれども、數日の後無斷で伯爵夫人を訪問した事が、事件を收拾の餘地のない狀態に導びく結果となつて了つた。(つゞく)


フオレッチ氏


ヘールシヤム氏

世界の平和と祖國愛

駐日獨逸大使　エー・アー・フオレッチ

最近世界の耳目を聳動せしめた問題は、海軍軍縮會議であります。これは確に人類の平和に對する一つの美しい企てでありませう。併し各國が一般軍縮、即ち陸軍の軍備も縮小せなければ、眞の意味の平和は中々至難であります。世界の列強は、ベルサイユ條約により、軍備縮小の會議を起すこと前後數十回、この間十年の歳月を閲して居ります。それにも拘はらず依然として軍縮の實現は前途尙遼遠であります。日本が陸軍に就ても、縮小せんとする希望のある事は、新聞や政治家の意見中にも屢〻述べられて居ります。私は日本の軍備縮小のために、その輝しい祖國愛が左右せられるとは思ひません。家庭の圓滿、民族の一致、社會的協働によつて、益〻日本人が祖國に奉仕せられると共に、世界人類のために貢献せられん事を切望いたします。

日本の青年に贈る

前英國大法官子爵　ヘールシヤム

諸君は驚嘆すべき犠牲の精神を祖先より受けついでゐる。故に青年諸君は、この天禀の美徳を失墜せず、世の爲に大いに活動すべきである。全人類はこれに依つて一層幸福となり、一層向上さるゝ事であらう。日本青年たるもの、破壊に向はず、よろしく建設に向つて一生を捧ぐべきである。

永遠の生命

救世軍米國總司令官　エバンゼリン・ブース

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



ブース女史



ニコルス氏

私の父ウイリアム・ブースが、世を去る數日前の事であります。或る日の夕、私は父の病室の窓から、非常に美しい日沒を見ました。西の空は眞紅の海の如く、何とも言へない程、雄大、華麗、莊嚴な美觀でした。私は早速父にむかひ『お父樣、窓際に來てあの美しい日沒を御覽なさい』と申しました。その頃父は兩眼とも不自由でありましたが、それでも左の眼は僅かに黑白を辨ずる位は見えました。父は窓から外を眺めて居ましたが『私には何にも見えないよ』と力なく答へました。私は父の肩に手を置き乍ら熱心に『よく御覽なさい。あの眞紅の色が幾らかは見えるでせう』と云ひますと、父はその兩手を差のべて私を抱きつゝ『わが子よ、私には日沒が見えない。けれどもやがて、日の出を見る事が出來よう！』此の言葉こそ、此の世の生命がつきる時、彼の世の生命が始まる事を意味したものであります。永遠の生命に對する明るい希望――それが父の全部でした。

公明正大の輿論

加奈陀六大新聞社長　エム・エー・ニコルス

私が日本に就て特に感激した事は、輿論の公明正大な事であります。昨年濱口内閣が官吏の減俸を企てたとき、新聞雜誌は一樣にその問題を取扱ひましたが、いづれも率直不偏な態度で輿論を述べ、また政府がその計畫を取止めた時も、各新聞雜誌はそれに乘じて、政府を攻擊するやうなことがなかつたのは、非常に敬服いたしました。

エヂソン氏代理ゼー・ヴイー・ミラー氏よりの來翰

拜啓貴誌御掲載の原稿に關しエヂソン氏宛の御芳書、拜受仕り候。近頃エヂソン氏は、護謨の實驗に專念沒頭し居らるゝため、最も緊急重大なる事件の外は、他に意をそゝぐこと覺束なく、從つて一切局外の問題より避くることを願はれ居り候。無論、氏も貴意に添ひたき事は萬々に御座候へども、何分時間の關係上執筆の許さざることを、生等遺憾に存じ上げ候。敬具

エヂソン氏代理　ゼー・ヴイー・ミラー

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

どうしたら拔擢されるか

◇立身出世の要諦はこゝだ……◇

阪神急行電鐵社長
東京電燈副社長 小林一三

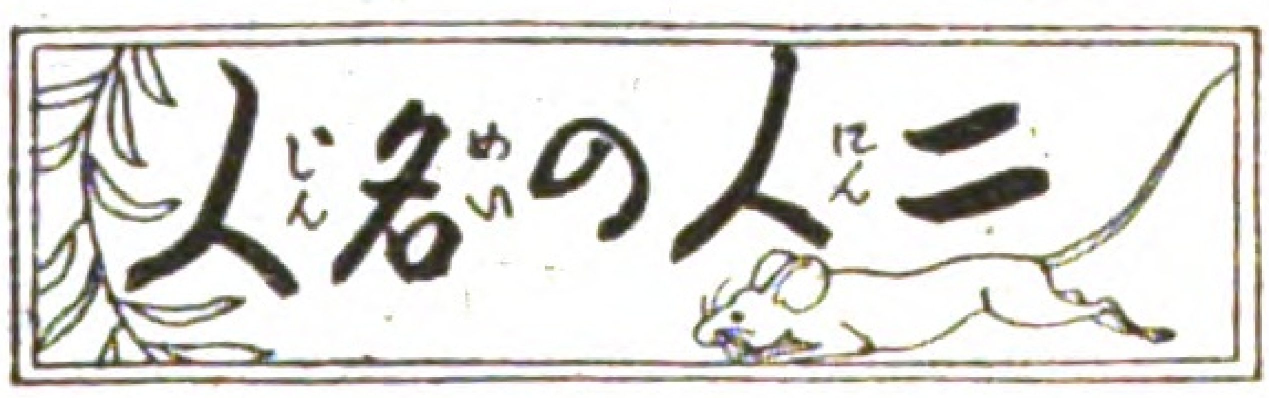


小林一三氏

事務の世の中

軍人に志願して、志を達して將官になると、どういふ風に戰をすれば勝つか、といふ所謂六韜三略の戰法や作戰計畫に苦勞するならば軍人の面目にかけて面白いと思ふけれど、實際問題になると、如何にして軍縮の實を擧ぐべきか、萬國平和會議には如何なる方針を立つべきか、國際聯盟に處する海軍力制限の程度如何といふやうな戰を避けるべき仕事のみに憂身をやつして暮らしてゐる。戰をするのが專門である處の軍人すらも現在に於ては其仕事の重大なるものは戰爭の機會を絶無にし根絶しようといふ世の中であるから、日常執るべき仕事の性質は大分變つてゐると思ふ。如何に智略武勇に富む人と雖も『いざ事ある時には君の御馬前に天晴功名手柄をして見せる、己は平々凡々たる俗人のするやうな事は嫌ひだ』と言つて常識離れの生活をしてゐると假定せば、其軍人は恐らく一生浮ぶ瀨のない、みじめな境遇に沈吟するであらうと思ふ。

二人の名人



○…畫猫道人

畫猫道人は天明寛政頃の人で、髮を後に長く垂しぼろぼろの着物に跣足といふ風體、しかも昂然として禿筆二本を手に、町中を『猫描だ〳〵』と大聲で呼び歩いた。『猫描さん一つ』と頼むと運筆風動一氣にして描き上げる。一寸見ては何でもないやうだが、一度これを壁に掛けてよく見る今にも飛びつかんばかりの威勢があつた。

ある金持が鼠に苦しんで、知合ひの者に相談すると、『それは猫描きの猫を壁に張つておきなさい、鼠が畏れて出なくなるさうだから』と教へてくれた。そこで畫猫道人に頼んで猫を描いて貰ひ、それを座敷の壁に張つて置くと果して、あれほど澤山ゐた筈の鼠がそれからは、こそともしなくなつた。たま〳〵



平和の繁榮を樂まう、何とかして戰をやめようといふ時代であるから、軍人と雖も、智略武勇のみをたのむ譯にはゆかない、智略武勇を戰時に役立たせる腕前があるから平生は大概な事は見逃がしてくれと言ふ譯にはゆかない。是からの軍人は、或は、一生涯實戰に遇ふ機會があるやなしやで戰爭といふ一種の假裝業を事務的に取扱ふ事務家として終らなければならぬかも知れない。さうなると、軍人ですらも我々實業家と同じやうに、所謂豪傑型では駄目だ、忠實に事務的生活を送らなくてはならぬ時世になつたのだと私は信じてゐる。

實力本位とは何か

軍人ですら然り、況んや實業界に於てをやで、大學卒業生が巡査を志願することを怪まないのみならず、工業會社では職工の仕事から、商店では小僧から、鐵道會社では車掌運轉手から、といふ風に、あらゆる方面に於て先づ勞働の體驗によつて試錬することが、順序であり、正當の階段であるといふ事になつて來た。これは數年來深酷になつた就職難の賜であつて、學校出でも、實地から上つてゆく人でも、等しく實力本位に競爭が出來、昇進が出來る時世に急變した事は誠に喜ばしい次第である。

即ち實力本位によつて出世する、其實力本位とは何であるか。一口に實力本位と言へば、何人も明瞭に判つてゐるやうであるが、さて實際問題になるとなかなかさう簡單にゆかない。謂はゆる理外の理と云ふものがあつて頗る複雜に出來上つてゐるのが俗世界の實際である。強いものが必ず勝つ相撲のやうな譯にはゆかない、勝つべき野球試合さへも負ける事もある。技倆才幹があるからというて、直ちにその人が他より優れて物の役に立つとはいへない。人格德望といふものは大切なものであるが、さりとてそれだけで世の中の事はいゝかといふと、さうは

一匹の鼠が出た時鼠を見るなり、俄にハッと畏縮して走ることが出來なくなつた

○百兩はもういらぬ

京都東山の麓に稻荷の社があつた。この度、新しい祠が出來たので、額の揮毫を當時の名人といはれた池大雅に賴んだ。

さて、いよ／＼出來上つて、大雅自身その額を持つて來た。『揮毫料は？』ときくと『百兩！』といふ。

稻荷の氏子はびつくりしてしまつた。何時もなか／＼引受けぬ大雅が、やす／＼承知したと思つたが、さては方外の金を貪る積りであつたかと後悔したが後の祭、澁々百兩の金を渡した。

その金を受取つた池大雅、逃げるやうに急いで出て行つたが程なく引返して來て、百兩は、ある道具屋になか／＼立派な茶釜があつたので、それを欲しいと思ひ値段をきくと百兩といふ話、その金に困つてゐた矢先、賴まれた額の揮毫、これ幸と早速仕上げて、この金を貰つたが、今その道具屋に行つた處、茶釜は賣切れてしまつてもう無い。だからこの金も、もういらぬ」と百兩そつくり氏子へ返した。

氏子の者は二度びつくり。

ゆかない。また英雄崇拜の氣風がすたれて、多數の力を度外視することの出來ない世の中であるから、理想高潔、情義兼ね備はるといふだけで、その人に天下が取れるものとも限らない。即ち或る意味に於て、實力があるからというて、直ちにその人が立身出世をするとはいへないのである。そこでどういふのが實力本位かといふ問題は、結局どうすれば實力本位で勝つことが出來るか、また出世することが出來るかといふことに歸着する。

一頭地を抜くこと

實力本位といふ事は實際の力を養ひ、其力量によつて仕事をするといふ事である。然しながら實際の力があるからと言つて、これを現はす機會が無ければどうする事も出來ない。今日のやうに、資本制度が確立せられて、それ〴〵勢力範圍が嚴守せられ、秩序や順序が七面倒になつてゐる時代であるから、其階段は一つづつ上らなければならぬ、而かもそれが友人同輩と吽唄をならべて、歩調をそろへて、同時に進むのであるから、暗默の間に競爭になる事は勿論である。そこでどうしても一頭地を抜くより外に途はない、一頭地をぬくと云ふ事は拔駈の功名すればよいといふのではない、何人もやり得ないことをやつて見せるといふ堅固なる決心が必要である。何人もやり得ない事と云うても何も辛い辛抱をしなければならないとか、苦痛に打勝つ耐忍力が必要であるといふやうな六ケ敷いことではない、極く平凡な日常生活を几帳面に嚴守するだけの決心があれば、それでその人は必ず一頭地を抜き得るものであるといふのである。

出勤退出の時間

例へば、會社や役所に出勤するとする。八時出勤の規則ならば、必ず三十分前に

鉄石心物語

○・ガンベッタ起つ

大奈翁の偉業を夢みて起つたナポレオン三世の雄圖は空しく、慘敗につぐに慘敗。首都巴里では臨時議會が開かれたが和戰孰れとも決せぬ。時に議事堂の露臺に猛然と立ち『起て、擧國一致して戰へ！』と熱辯怒號したのは誰あらう、昨日まで非戰を唱へ續けて來たガンベッタでないか。市民はその火の玉の様な絶叫に奮ひ起つた。



が、どつと押寄せて來た總勢五十萬の普魯西の大軍に圍まれ、巴里城の糧食は遂に缺乏。今は國を擧げて敵に降るか、最後の一人になる迄戰ふかの岐路に立つた。或夜の事、突如、魔の如な一大輕氣球が暗憺たる空高く浮揚した。中には一人――それは民望によつて陸軍大臣になつた偉傑ガンベッタが乘つてゐた。單身決死、此重圍を脱れ出て町から町へ、殆ど飲まず食

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

には出勤する。その三十分を利用して、宅で讀む新聞雜誌を會社で讀んでもよろしい。しかし時間前に、自分の受持の仕事の段取りを定め、それを整理しておくだけの注意と餘裕とを必要とする。

また四時の退散ならば、翌日の仕事に直ちに着手し得るだけの順序を整へておくこと。それが三十分かゝつても、その日の仕事は其日のうちに片づける方針を守ること。今日、これだけの平凡なる些事すらも實行し得ない人々のみであることを斷言する。

この平凡な出勤退出の時間を數年間勵行する青年があるならば、彼れは必ず支配人課長に見出されて、同級同輩の後から一頭地を拔くに相違ない。既に一頭地を拔く、そこに進むべき道がおのづから開かるゝのである。

世間は就職難を訴ふる聲のみ喧しい。如何なる仕事でも喜んで働きますといふ、哀訴の聲のみを聞く。それと同時に、如何なる會社でも人が無くて困る、いい人が無くて困るといふ愚痴のみを聞く。双方共に事實である。世の榮達を希ふ者は、宜しくこの事實に深く思ひをひそむべきである。

今日は使ふ人と使はれる人との間に、一つの溝のやうなものが横はつてゐる時代である。昔の主從といふやうな思想は、最早世に存在しなくなつた。

『なに、技能さへあれば、先方で買つてくれるだらうし、昇進することも出來るのだから、自分は時間通り勞働の切賣りをすればそれでいゝのだ』

かういふ風に考へるものが多い。たとひ、それが正しい理窟であるにもせよ、然らばその技能を如何にして先方に認めさせるか、自分にはこんな技能があるぞと先方に知らしめるには、どうすればよいかといふ問題になると、やはり平凡なる日常生活から出發すべきものであると、私は信ずる。

はずで一週間『巴里を救へ。』と絶叫しつゞけて歩いた。その結果全國から馳せ集つた義勇軍二十萬。今日の佛國あらしめたのは彼の鋼鐵のやうな愛國の賜である。

○封祿何かあらん

天正十五年、強敵島津を征伐して博多へ引上げた豐臣秀吉は、突如切支丹宗門禁制の令を天下に布いた。だが、播州明石の城主にしてこの度の戰にも拔群の働きをなした高山右近友祥は、信教の意志固く、陣中へと訪れ來つた秀吉からの使者に、斷乎として云つた。



『どうぞ歸つて御復命下され。殿下の爲ならば右近はたとへ肝腦地に塗るゝとも敢て意としませぬ。併しこの度の御命令ばかりはお受けする譯には參りませぬ。眞に迷へる人間の魂を救ひ得るもの、尊き切支丹宗門の教より外にないからでございます。』

秀吉は怒つて右近の封土を沒收した。

晩年彼は徳川氏の爲に呂宋に追放された。彼の墓は『日本大名』のそれとして、今も▼

平凡主義の時代

出勤退出の時間に就て私の言うたことを實行したとして、その效果はどうであるか。その實例は澤山にあるが、要するに、その規定時間以外の時間に於て、種種突發する出來事を處理する機會が多きことに依つて見出さるゝのである。

假にさうした突發事件がなかつたとしても、たゞ出勤退出を規則正しく勵行するといふだけの平凡事すらも、絶無なる今日の狀態に於て、其人は必ず同輩よりも一頭地を拔き得るといふことを斷言するものである。

既に一頭地を拔く。そこにまた平凡なる日常雜多の仕事が待つてゐる。これを整然と處理してゆく。それを最後までやりぬく、これが即ち實力である。

然しながら、實力なるものゝ内容は時世につれて常に變化する。戰國時代には武勇であり、封建時代には忠義であり、維新時代には英氣であり、明治時代には新知識であつた。それの如く、今や私の多年主張して來た平凡主義によつて進路をひらき、謂ゆる縁の下の力持ちをなし得る人間が一番早く其實力を認められる時代であつて、實力本位とは平凡の仕事を規則正しく几帳面に終始一貫遂行し得るといふことに外ならない。かゝる決心をもつて世に立つ人の實力のみが、時勢の潮流に乘つて大成すべきものであると、私は確く信ずるのである。（終）



金錢と法律

巖谷小波

金の曰く、「人間ほど馬鹿な者はない。折角おれをこしらへながら、おれを自由に使ふ事ができない」

法律の曰く、「人間ほど間拔な者はあるまい。勝手におれをこしらへておきながら、おれにしばられてジタバタして居る」（寫眞は巖谷小波氏）

ニラに殘つてゐるといふ事である。

○救ひの水兵

英國リバアプールに、水兵や其家族達の住む共同住宅があつた。或夕方の事である。突如「火事だ〳〵。」といふけたゝましい叫び聲が聞えた。火は三階の誰もゐない部屋から起つた。一階二階の人々は直ぐさま戸外へ逃げ出したが、一番上の四階の人達は、火事に氣がついた時はもう階段が燒落ちた後である。消防隊や近所の人々が馳けつけて梯子をかけたが、短くて怒へは人の脊位足りない。火勢は次第に強くなる。がどうする事も出來ない。その時である。一人の若い水兵が、

「よしつ、俺がいま助けにゆく！」

と怒鳴つて、する〳〵と梯子をのぼつて行つて頂上に突立ち、顏へ吹きつける火焰をものともせず「さあ、早く、俺の身體を傳つて下りて呉れ。」と叫んだ。

一人殘らず自分の脊中を傳はらせて下した後、かの水兵は地上へ下りたが、その時彼の顏面と手足は見るも無慘な大火傷を負うてゐた。それでも彼はにつこりとしてゐる。群集も助けられた人々も感極まつてたゞ泣くばかりだつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



結婚は藝術である

與謝野晶子

人生の成長の大きな一つの事實として結婚がある。

私は結婚の意義について細かに述べる時を持たない。唯だ祈ることは、皆さんの眞面目な冒險的創作として、御自身の結婚を愼重に考へて頂きたいことである。

結婚と云ふ新しい生活への進出は、勿論冒險であり、それに發見の喜びが伴ふと共に、想像してゐたよりは苦勞も亦伴つてゐる。それに耐へて、夫婦の二重奏を完成するまで、一生の推敲を重ねて倦まない情熱と努力とが必要である。

藝術家は自己の創作を決して呑氣に仕上げてはゐない。構圖に苦心する。著彩に苦心する。推敲を重ねる。結婚は皆さんの合作に成る長篇小説である以上、その完成は一生の仕事である。性急であつてはならない。浮華であつてはならない。私はこの點に皆さんの覺悟を望んで止まない。

人生で何が最も樂しいかと云へば、冒險のなかに新しく築き上げる創作の上に出るものは無いと、私は確信してゐる。創作を重ねて行く意味に於て、結婚は確かに一つの藝術である。藝術家としての樂みと苦勞との體驗、それから皆さんの新しい結婚藝術が次第に完成されて行く。それを期待して、私は皆さんの結婚を祝福する。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



八代先生にお目にかゝるの記

＝樞密顧問官、海軍大將男爵、八代六郎先生御高話拜錄＝

野間恒

昭和四年十二月二十一日。

――午前中照つてゐた麗らかな陽の光が、何時か陰つて、曇硝子を透した樣な淡い光が、流石に、何處となく、慌しい、師走の街に射してゐた。併し寒さは左程でもない。

午後三時頃、私は小石川植物園の裏手に當る、八代先生の靜かな御玄關に立つた。最近賜つた御揮毫の御禮に參上したのである。

見れば、今しも來客を送り出された所と見えて、石疊に淑やかな老婦人が立つて居られ、疊の上には溫顏のお年寄が、和服を召されて、頻りに籠の中の鸚哥を眺めて居られた。これが日頃敬慕する、そして初めてお目にかゝる、八代先生と奧樣とであつた。

奧樣に御挨拶を申上げると、奧樣は直ぐ先生にお傳へ下さつた。

『野間君の御子息か、まあ上り給へ。』

『ハイ、御多忙の所と存じますので、御玄關先で御挨拶だけ、申上げ度いと存じます。』

『まあいゝから。』

『どうぞお上り遊ばせ。』

と奧樣も、側からお勸め下さる。私は恐縮しながら、歲末御多忙中、御迷惑とは思つたが、强つて御辭退するのも失禮と、畏る畏る御言葉に、從ふ事にした。

手土產の果物を差出す。

『何だ土產か、土產など持つて來ては困る。』と先生は先に立たれる。

『お洋服のやうですから、お坐りになるのはお窮屈でせう。椅子に致しませうか？』と奧樣のお心遣である。

先生のお居間であらう、十疊程の、簡素なお部屋の中央に、低い卓が置かれ、床の間に寄つて、洋風のテーブルと椅子とが、置かれてある。床の間の刀や木刀が直ぐ目につく。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

私は御禮を申上げる。

『君は劍道をやると言ふことを聞いたから、一度會つて見度いと思つてゐた。――精練證だといふ話だが、年は幾つかね?』

『二十一歳になります。』

『二十一で精練證といふ事は、武德會始まつてから珍しい事だ。――精練證は六段とかいふのだね!』

『はい、普通四段とか五段とか申して居ります。』

『君のお祖父さんも、道場を持つてゐたといふ事だね!』

『はい、森要藏といふ私の曾祖父が、千葉周作先生の門人で、麻布に道場を持つてゐたやうに、聞いてをります。』

『お父さんも、やれるやうだし、武道の家だとすれば、今の時世に對しても、君などは特に武道の爲に、一生懸命にやつて貰ひ度い。』

『はア、父もそのやうな考へで、私は只今、主として武道に勵んで居ります。』

『道場が幾つもあるさうだね。』



八代大將

『はい、東京と伊香保と千葉とに御座います。』

『伊香保でも千葉でもいゝが、二十人位宿れる樣な設備をして、劍道の先生が泊りながらやれるやうにするといいね。』

『私共が居ります時には、十人二十人と、諸方の先生に御滯在を願つて、お教を受けるやうにして居ります。戸山學校からも、十五人位づつ、先生方が、數回お出で下さいました。』

『では私の思つてゐる通りの、設備が出來てゐる譯だね。平生、道場へはどんな先生が來られるかね。』

『中山先生を始め、白土、齋村、大島、堀田、山本、橋本、等

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

の諸先生、その他朝鮮の持田先生、佐賀の大麻先生なども、數回お見えになりました。警視廳關係の先生方も、大分お見えになつて居ります。』

『中山先生の御子息は、棒をよく使ふね。』

『杖術で御座いますか？』

『うん、あれは私も中山先生と一緒に、內田先生——內田良平君のお父さんに敎はつた。私はもう駄目だが、中山先生は其後ズツと續けてやつて居られる。何時であつたか親子で使はれるのを見たが、御子息も仲々能く使ふ。あれなども宜い。武道をやると、眞劍になり、眞面目になる。劍道の先生方は餘り言はないが敵から斬込まれた時とか、何か危急の場合とかに、サツと、かう身を交す。これは非常によい事で、この「身を交す」といふ事は、戰術の上でも極く大切な事だ。——

武道は日本建國の精神で、伊弉諾、伊弉冊尊が始めて國を造られる時に、まだフハ〳〵、ドロ〳〵としてゐた下界に、天の瓊矛を差入れて、お搔き廻しになると、あまたの國々が生れた。即ち天地創造の始めから、矛を以て、四海經綸をなされた、といふ事になつて居るので、神武天皇の、御名さへある位だから、日本はどうしても、この武道といふものを忘れてはならない。日本の歷史を一貫してゐるものは、武道の精神だ。平安朝の頃などには、一時朝廷につかへる者達が、皆、詩歌管樂などに耽つたが、それが爲に、源平の武家が興つて來るといふ具合で、永い間に多少の盛衰はあつたが、日本の歷史を一貫して流れてゐるものは、武の精神だ。

何にしても武道を全國津々浦々までも盛んにしたい。一人の力で容易に行くものではないが、君などが、日本の武道を、一人で背負つて立つ考へで、やつて貰ひたい。劍道が漸く、中學校の正課に、加へられる事になつたやうだが、元來、武道を體操科の中へ入れて置くのが間違ひで、私なども、此の點隨分力說したものだつた。私の考へでは幼稚園から、袋竹刀の素振り丈けでもよいから、やらしたいと思ふ。その意味で、死んだ內藤範士にも、五つ位の子供にやれる劍道の型を、作つて呉れるやうに、賴んで置いたのだが……』

『父なども、遲くとも、小學校の五年頃から、劍道を必須課目としたいといふ考へから、先生方のお力を借り、來年は雜誌の上で、大いにやつて見度いなどと、申してをります。』

『是非、さうして貰ひ度い。君は幾つから始めたかね。』

『私は遲い方で御座いまして、十五歲から始めました。』

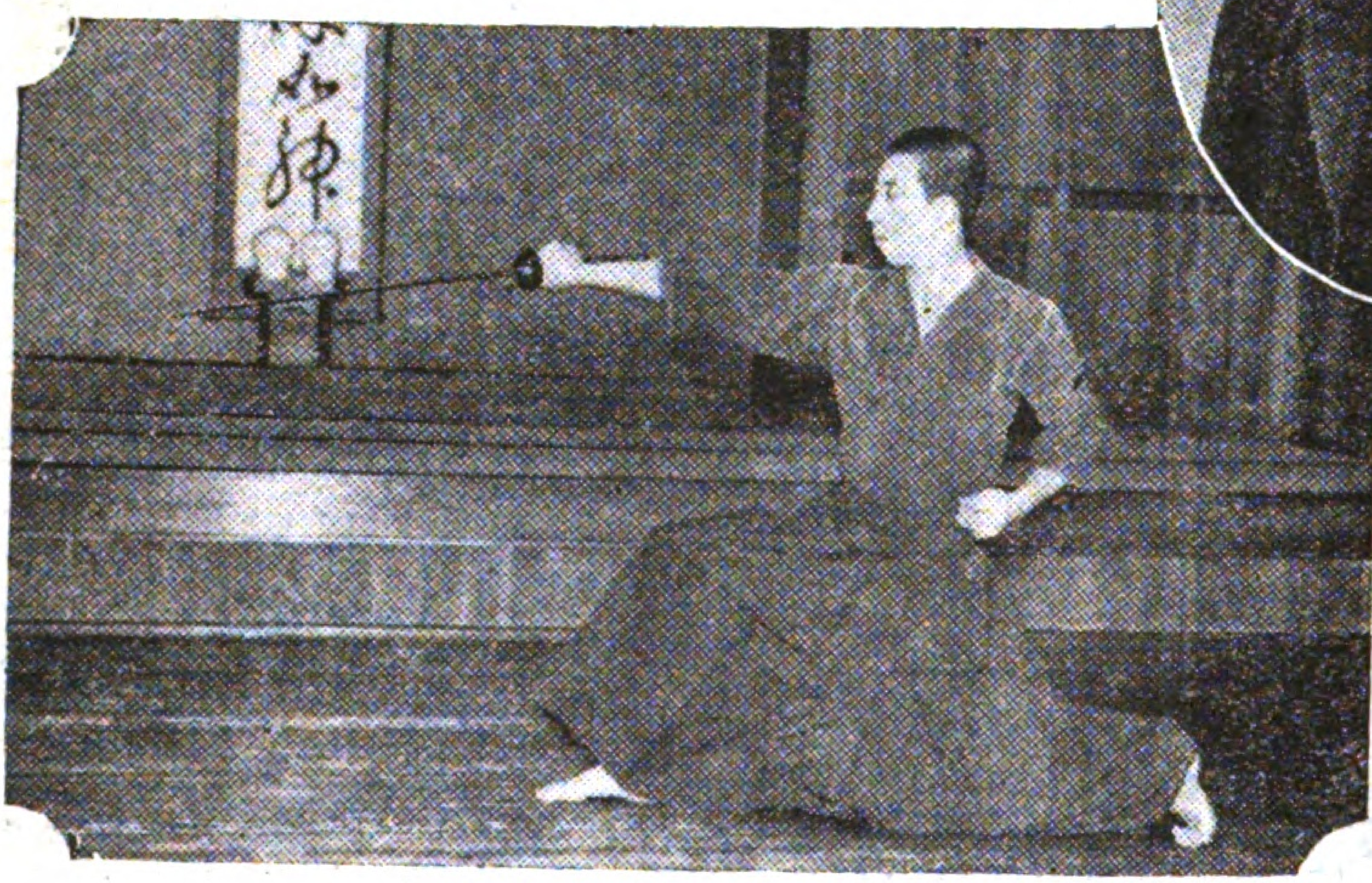
『今七つになる、私の親類の子供と孫に、袋竹刀を振らして居るが、親達の話では、同じく振るにしても、段々力が入つて來るさうだ。柳生先生の道場で、十一の子供に、試しに私の手を、袋竹刀で打して見たところが、子供でも、氣合が乘つて打つたので、こゝが赤く腫れ上つた事がある。小さい子供は、普通の竹刀だと眼を突いたりすることがあるから、袋竹刀の方が宜い。私は、かういふ質だから、上手ではなかつたが、身は輕かつた。劍道は、幼少の時から始めて、十一の時には、同じ齡

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

の相手と、藩公の前で試合して、相打になつて、二人とも殿樣から、扇面を戴いた。後に明治大帝の御前でも、二度御前試合を命ぜられた。八ッの時から、まあ謂はば、兵隊の給仕の樣な事をして居たが、朝五時頃に、道場へ出て稽古した。十七の年だつたと思ふ、海軍兵學校で、伊庭軍平先生に、稽古をお願ひする。どうかして、先生を打たうと思ふが、どうしても打てない。竹刀の先で、サツサツと、悉く拂かれてしまふ。今度こそはと思つて、思ひ切つて、面へ飛び込んで行つたが、途中から我知らず、サツと折敷の胴に返つた。それが見事に當つて、先生が、「參つた」と云ひながら、振冠つて、私の面を打つたが、實に痛かつた。その痛かつた事を、今でも忘れないね。』

溫顏に微笑を絶やさない先生も、かうした話しになると、さながら私達青年





上、野間恒氏
下、同氏の居合術

のやうに、熱して來れらる。

『この間、人から聞いた話だが、巣鴨邊の、寂しい町を、夜、妙齢の娘が、歩いてゐると、後から、男が組みついた。ところが、忽ち男が放り出されて、娘はその儘行つて仕舞つた。後で調べて見ると、男のあばらが、折れて居たといふことだが、一種の當身、手刀といふものだらう。柔道で、後から組付いて來るのを、身を沈めながら、背負投にする手があるが、あれと同じ樣に、身を沈めつゝ、當身をしたに違ひない。是非、女にも武術をやらしたい。女は劍道といふ譯には行かないから、矢張り薙刀だね。弓も大變いゝ。私の知つてゐる人で、日置流の先生があるが、私が奬めて、今、女學校で敎へて貰つてゐる。弓をやると、矢張、身のコナシが出來て來る。

婦人に、武術を仕込んで置くといふ事は、只その婦人の爲めだけではなく、家庭の人となつて、武術が出來なくなつても、その子供に影響するから、大變宜い事と思ふ。近頃、いろい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ろのスポーツが盛んになつて、殊に野球などは、非常なものゝやうだが、私は、あれも、矢張武道だと思つて居る。あの驅引などは、全く戰術と異はない。相撲なども、劍術と、氣合は少しも變らない。

常陸山が生前に、私の所へ來て、「立ち上るのが、ちよつとでも遲れたら、倍の力がなければ、勝てない。」といつて居つたが、總て劍と同じだ。當時、常陸山などの、相撲協會の連中が、相撲を、武德會の中に加へて貰ひ度い、といふ事で、大分運動もし、私の所などへも、賴んで來たが、興行といふ樣な事が、問題になつて、其時は到頭纏らなかつた。相撲などは、立派な武術だ。

近來思想問題が、大分やかましい樣だが、武道でもやらしたら、餘程違ふと思ふ。マルクスの資本論を讀んで見ても、物の價值は、人間がそれを欲求する心の多少に依つて定まる、といふ經濟の原則に、變りはない。唯物論等が、盛んに行はれてゐる、世の中だが、結局は、心の問題だ。大學生などの中には、共產主義にかぶれて、邪道に落ちる者などがあるやうだが、武道でもやつて、眞面目な精神を鍛へたらと思ふ。成程、同じ人間でありながら、一方は食ふに困つて、子供を抱いて、身投げをするといふのに、一方は懷手で、遊んでゐるといふ樣な、社會の不平等に對して、若い者が、氣まぐれになるのも、一面からいへば無理もないが……』

憂國の至情より迸る言々句々、先生は語續けられる。

『武道家は、多くは金錢に淡白で、迷はされる事が少い。その證據には、武道家には、金持はない筈だ。尤も、君のお父さんは金持だが、武道で金持になつた譯ではなく、文の方で、それも、金を儲けようなどと、考へてではなく、世の爲、國の爲に、計りながら、金持になつたのだ。』

先生は茶を啜られて、

『君は、宮本武藏の「五輪書」を讀んだかね？』

『いゝえ。』

『さうか、あれは是非讀んで置くがいゝ。「五輪書」と「三十四個條」とには、今の人々の、言ひ得ない、實にえらい事が說いてある。これを本當に味讀したら、大に悟る所があらう。宮本武藏は、劍道の神樣の樣なものだね。

君も知つて居るだらうが、一生の中、六十人以上の、名人を斬つてゐる。最後が佐々木巖流との試合だが、巖流は、勿論、親の敵でも、何でもない。この巖流といふのは、何とか（富田）五郎右衞門の門人で、非常な天才だ、燕が飛んでゐるのを見て、例の燕返しといふ、劍法を編出した。書物の上では、只燕返しといふ丈で、はつきり解らないが、私の想像では、燕がとまらうとして、柳の枝に飛んで行くが、柳が風に吹かれて、とまれないので、サツと身を飜して飛び返る。拔打か何かで斬りつけて、尚不十分の時に、返す刀で足を拂ふ、といふやうな事だらうと思ふ。兎に角、この巖流は、二十四歲の弱年で、既に小倉藩の師範役を勤め、武藏か巖流かと言はれたのだから、

餘程の名人であつたに相違ない。この二人が、愈々試合をする事になる。場所は船島、今いふ巌流島、時刻は辰の上刻。試合の當日、武藏は、小倉から家老の船で島へ渡る事になつてゐたが、愈々試合の前夜になると、小倉を立つて、下關の方へ行つて仕舞ふ。そして翌日は、わざと時間を遲らせ、自分で船を雇つて、島に向ふ。その船の中で、船頭から櫂を買ひ受けて、木刀を削るのだが、これは自分の刀が、巌流のより短い事を知つて、間合の上で、不利だと考へたが爲で、これを四尺餘に削り上げた。二刻（四時間）も遲れて、武藏は島に着く。待ち兼ねてゐた巌流が、「武藏、拙者は辰の上刻前に渡つてゐるに、餘りの遲參不屆ではないか。」と氣色ばんで、詰め寄つて來る。』

熱して來られた先生は、眉間に皺を疊まれながら、恰も巌流其人の如く、眞に迫つて話續けられる。



『側へ降りるのは、危險だから、武藏は、少し離れて、船から飛び降ると、巌流は、矢庭に刀の鞘を拂つて、海に投げ捨てる。その時に、武藏が、「巌流、試合は、その方の敗ぢや。」といつた。巌流が怒つて、近づくのを、「勝つつもりなら、鞘は捨てぬものぞ。」と武藏がいふ。巌流は、年が若いから、愈々怒つて、サッと斬つける。見物は、武藏が斬られたと思つたさうだ。ところが、不思議にも、斬りつけると同時に、巌流は、ドッと倒れ、武藏の鉢卷が二つに切れて落ちた。眞に間髪を入れない。次に倒れた巌流に、武藏が近づく時、巌流がサッと横に拂ふ。武藏の袴が切れると同時に、巌流のあばらが折れて、鮮血が流れた。武藏は袴の裏に、紅の布を附けてゐたから、袴を切られた時に、紅裏が、血の色に見えて、この時も、見物は、武藏が斬られたと思つたさうだ。

武藏は、巌流の口に手を當てゝ、呼吸の絶えたのを見届けると、默つて檢使に一禮し、船に乗つて下關に引上げてしまつた。この時、武藏が止めを刺さなかつたのを、流石の武藏も、狼狽したのだらうといふものがあるが、武藏は、一生の中、六十何人と試合して、悉くこれ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

を斬つたが、一度も止は刺さなかつた。

武藏が試合をしたのは、決して怨恨の爲では無かつたから、必ずしも、相手を殺す必要はなかつた。死ねば仕方ないが、蘇れば、それでもよいと云ふんだね。

君の後の、床の間にある木刀は、武藏の木刀に、則どつて作つたもので、明石大將から贈られたものだ。』

私は、木刀を拜借して、振つて見た。

『兎に角、武藏は餘程の達人だつた。』

『武藏が、故意に約束を違へて、遲刻した事について、私は、平素多少の疑問を持つて居りますが、如何なもので御座いませう？　元來、武道では、特に「正しい」といふ事を尊んで居ります。武藏が、わざと刻限に、遲れたといふ事が、どうも腑に落ちないやうに、思はれますが……』

『うん、それは武術の所謂「虛」で、戰の上で、敵を謀るといふ事は、少しも差支へない事と思ふ。』

『併し、武士が一旦約束して置きながら――私はよく存じませんが――例へば、現今の戰爭で、一旦、休戰條約を結んで置きながら、その約束を破るといふのは、如何なものでせうか？』

『歐洲大戰の、佛蘭西と獨逸の休戰條約などは、大砲彈藥悉く取上げて――謂はゞ、降伏狀態の休戰だね。だから、現今の戰爭では、それを無視して戰はうとしても戰へないやうになつてゐる。

武藏と巖流との試合の如きは、もう心術の爭ひだから、巖流が敗けたのは、心術が足らなかつたと言ふ外はない。日本の戰史を研究すると、實に面白い。西洋の戰史も研究して見たが、まあナポレオンのが、稍、日本の戰に匹敵する位で、日本ほど、烈しい戰爭をした所は少い。上杉謙信と武田信玄などは、十八年間戰ひ續けてゐた。尤も、本當に、お互が鎬を削つて戰かつたのは、僅かに三回だが、何時も謙信は攻勢、信玄は受身であつた。謙信といふ人は、戰はうといふ時には「全軍、直ちに國境ひに出陣せよ」といふ命令を、下して置いて、自分は旗本丈けを從へて、眞先に馳を飛ばして、出陣してしまふ。これが、所謂「懸り待ち」といふ戰法だ。道場でいふならば、相手より先に出て、道具をつけ、支度を整へ、十分氣を鎭めて置いて、敵を迎へ擊つといふ戰法。これが爲に、信玄は、少しも油斷が出來ない。電信柱を立てゝ置くやうに、國境から甲府まで、一町置きに、百姓姿の斥候を置いて、謙信が、國境に姿を現すと、直ぐに、それが傳はる仕組にして置いた。

この謙信の戰法は、今言つた「懸り待ち」だが、併し、一面また「待ち負け」といふ事もある。餘り長く一箇所に待つてゐると、待ち草臥れて、士氣が沈滯し、その爲に、却つて、敗を取る。日露戰爭の時に、我が艦隊が、長い事一箇所に、碇泊してゐた時、私は加藤參謀長に、書面で「待ち負け」の事を言ひ送つた事がある。

今、甲州流軍學の、秘傳を傳へてゐるのは、恐らく私だけと

思ふが、私も來年は七十一になる。もう長い事もないから、死ぬ前に誰かに傳へて置きたい。
私は柳生先生とも懇意にして、小太刀の免許を受けてゐる。尤も、これは幾分お愛想だらうが、……。柳生流には、實に立派な型が百本以上もある。君丈け出來れば、早いだらうから、柳生先生から、あの型をお教へを受けるといゝね。それから安岡正篤先生、先生の家は陽明學の家で、漢學禪學など敎へて居られる。當身も敎へられるが、一つこの兩先生に、私が紹介して上げよう。』
次の間から、奥樣が、名刺と硯をお持ちになる。先生は早速紹介狀をお書き下さる。
『どうもリウマチを患つてから、この指が利かないのでね。』
と言はれる。成程、御不自由のやうにお見受けした。



『今日も亦、書を書いて置いた。その中三枚は、臨書ではないが、特に君にと思つて、書いて置いた。若い人に、下手な私の字を、上げる譯ではなく、字は下手でも、文句丈けは、十分選擇してあるから、それに依つて、私の心を貰つて呉れ給へ。』
私に賜つた御揮毫は、『忠孝者天眞發露、立命大本』『武者國家定立安康之大道』『右文左武』の三つであつた。
暮れやすい、冬の黄昏が、逼つて來たので、私はおいとますることにした。先生は、私をお送り下さりつゝ、
『私は、私の先生に、人から、決して、金品を貰ふな。」と言はれて、七十になる今日まで、ズツと、それを守り通して來てゐる。君が持つて來た果物か何かは、貰つて置くが、どうも女の人などは、悪い習慣で、來る度毎に、何か必ず持つて來る。その爲に、こちらでも、返禮をするやうになり、何時も迷惑してゐる。これは決して、自ら、清廉を衒ふ譯でも、何でもなく、私がかうして、自ら省みて、疚しいところもなく、老後の毎日を、實に愉快に暮して行けるのも、全く人から物を貰はぬといふ、點にあるのだから……。』
と言はれる。前々から屢ゝ聞いてはゐたが、親しく先生の、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

この御言葉を承つて、私は一層先生の崇高なる御人格に、思はず肅然襟を正して、一種清爽の氣に、打たれたのであつた。

私は、此の日の拜顔に依つて、乃木將軍夫妻を思はずには居られなかつた。まことに、先生といひ、奧樣といひ、話に聞く乃木將軍夫妻を、彷彿たらしむるものがあつた。

私は國家の爲に、先生の御健康を、心の底から祈念しつゝ、奧樣にも、有難く今日の御禮を申上げ、澤山の御揮毫と『これは、あなたに、これは、あなたのお父樣か、お母樣か、お使ひになるやうに……。』といふやうな、有難い奧樣の御言葉を、添へられての、結構な品々まで頂戴し、長時間の御迷惑を恐惶しながら、併し、言々悉く、愛國の至誠に燃ゆる、先生の御高話に、少なからず興奮しながら、深い感激を胸に抱いて、薄暮の中を、歸路についたのであつた。

先生も奧樣も、私如き者を、お玄關にまでお送り下さつたのである。唯々感激に堪へない。私は車上の人となつて後も、遙かに、先生の方に向つて、默禮を捧げつゝ、この光榮身に餘る御恩寵に對して、他日必ず、報いる所なかるべからずと、深く心に誓つたのであつた。

申すも憚多い次第ながら、私は、先生に對し、父と申上げるも勿體なく、祖父と申上げるも恐れ多いが、何とも言へない、感じに打たれたのであつた。先生も、

『雜誌で寫眞などを見てゐた故か、初めて會つた氣がしないよ。』

と仰せられてゐたが、まことに、勿體ない次第である。

此の日、先生から、御紹介を賜つた兩先生には、何れ年も更つて後、御都合をお伺ひして參上、親しく御指導に預り度いと考へてゐる。

（昭和四年十二月二十八日記）

楠木正成遺訓の一節

一、少しの惡しきを以て、大なる用に立つ者をすつるなかれ。

一、學問に怠る事なかれ、言行にみだるゝ事なかれ。

一、上下をとほくして、諸事家老にうかゞはせて、自ら知らざることは惡しきなり。

一、自ら道に逆はされば、家の風も自然に善くなるものなり、吟味なくして賞罰を加ふる事なかれ。

一、罰は十、賞は十二三に行ひ、罰すべきを許すべからず、賞すべきを、時をうつすべからず。賞も過れば賤しき者は忠節に怠り、おごり出る者なり。

一、人の惡しきを名を現はして言ふべからず。人のほめそしるをも誠と思はず、また僞とも思はず、自分の眼力と心とを以て、人の言葉をまゝにすれば、讒と媚と多きものなり。事にもたゝぬ他人の非を語る事なかれ。

一、一人樂しまんとて、數多の人を、なやます事なかれ。

一、怒つて罰を行ふ時は過る事あり、內心に怒あらば、罰を延ぶべし。——以上、正成が正行に與へた遺訓より——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

外來語の身元調べ番附

東（右方）

番附	語
横綱	コンペイ糖（葡語）
大關	カンテラ（蘭語）
關脇	合羽（西語）
小結	ブリキ（蘭語）
前頭	チャルメラ（葡語）
同	トンネル（英語）
同	サーベル（蘭語）
同	メリヤス（葡語）
前頭	馬鹿（印語）
同	フラスコ（蘭語）
同	ラッパ（印語）
同	パン（葡語）
同	タバコ（蘭語）
同	シャツ（英語）
同	アンペラ（印語）
同	イルマン（西語）
前頭	ガス（蘭語）
同	カルサン（葡語）
同	阿闍梨（印語）
同	レッテル（英語）
同	ランチュウ（葡語）
同	アルヘイ糖（佛語）
同	アーチ（英語）
同	ギヤマン（蘭語）

中央

蒙御免

役	語
行司	ビードロ（葡語）
	ビロード（葡語）
年寄	尼（印語）
	和尚（印語）
勸進元	洋行倶樂部

西（左方）

番附	語
横綱	カステラ（西語）
大關	シャッポ（佛語）
關脇	キセル（西語）
小結	バケツ（英語）
前頭	ペンキ（蘭語）
同	コンパス（蘭語）
同	マント（佛語）
同	シャボン（佛語）
前頭	カルタ（葡語）
同	ポンプ（英語）
同	ラシャ（蘭語）
同	メートル（佛語）
同	ビール（英語）
同	ウニコール（羅語）
同	ランセッタ（蘭語）
同	ミシン（英語）
前頭	ボウブラ（葡語）
同	テラ（朝鮮語）
同	マッチ（英語）
同	パテレン（西語）
同	サラサ（葡語）
同	フランネル（英語）
同	サントメ（印語）
同	チョッキ（英語）

杉山正榮作

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



心の日月

菊池寛
田中良畫

押し迫る壁

麗子は、自分の目の前に、急に灰色の壁が出來て、それが一日一日自分に、押し迫つて來るやうな氣持だつた。いやでも、その壁は一日に一尺か二尺かづつは、麗子の方へ近づいて來るのだつた。

樂しい事はなか〳〵近づかず、凶い事は、矢のやうに早く近づいて來るものだつた。三月がまだ二十日近くあると思つてゐたのに、もういつの間に月末近くなつてゐた。岡山市で、一番の呉服屋である天滿屋の番頭が、毎日のやうにつめかけて來た。三月の二十五日には、式服が縫ひ上つて來た。麗子は、母に勸められて、仕方なく手を通してみたが、喪服を着たやうに、心が寒くなつてしまつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

總桐の簞笥、等身大の姿見、春の訪問服、珊瑚の帶止、それはみんな麗子の身體を、結婚の方へいな、良吉の方へ引きよせる目に見えない綱のやうに麗子には、いとはしく感ぜられた。

いよ〱擧式の日は、四月の十一日と決定した。

麗子は、父とも妹とも、あまり口をきかなくなつた。彼女は、今自分がどうしたのが一番よいかを考へ始めた。目をつぶつて、心にしまない良人の手に身を委ねるのが、一番正しいのか。父や、義理のある母の犠牲になるのが、一番正しいのか。人間として、それが一番正しいのかと考へて見た。しかし、それがほんとうに正しいかどうかは、麗子にも疑問だつた。

ある晩、麗子はお湯から上つて、自分の部屋へはいると、結婚のために買つてくれた大姿見の前に立つて、ぢつと自分自身の姿を映して見た。

彼女は、學校でみんなから、美しい〱と云はれてゐた。しかし、彼女は自分の器量については、あまり考へたことがなかつた。しかし、今自分の姿を、じつと見てゐると、自分の美しさを自分で認めずにはゐられなかつた。自分の眼は、どこか高畠華宵の描く少女の眼に似てゐると云はれたが、黑目のかつた大きい眸は、美しいと思はずにはゐられなかつた。小さい唇も、美しいと思はずにはゐられなかつた。

『わたしだつて、相當にきれいなんだわ。わたしの身體は、ほんとうにわたしを愛してくれる、そしてまたわたしがほんとうに愛するたつた一人の男性に捧げるべき筈のものだわ。あんな良吉さんなんかに、ムザ〱ふみにじられるべきものではないんだ！』

さう思つて來ると、麗子は差し迫つて來てゐる結婚に對する大きい反撥の炎が、心の中に燃え盛つて來るのだつた。

『あんな人に、やつてしまふには、あまりに美しすぎるわ。さう思ふのは、わたしのうぬぼれかしら。』

麗子は、鏡を見ながら、さう思はずにはゐられなかつた。

その中に、四月が來た。そして、四月五日には、良吉が大阪の會社から、休暇を貰つて歸つて來た。

麗子は、良吉を未來の良人と云ふよりも、自分の處女と自分の美しい肉體とを狙ふ敵としか感ぜられなかつた。

良吉は、麗子の家に來ると、自分の家へでも來たやうに、振舞つた。實際、麗子の義理の母は、良吉の生母だつたし、良吉は麗子と結婚すると、麗子の家の姓をつぐことになつてゐたので、麗子の妹までが、良吉を『兄さん、兄さん。』と呼んでゐた。しかし、麗子は、一言も口をきかなかつた。

『麗子さん、散歩に行かない？』

初めて、來た日の晩に、良吉は麗子を誘つた。しかし、麗子は首を振つただけで、自分の部屋へひつこんでしまつた。御飯

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

のときも、母によばれても、麗子はわざと遲れて、良吉とは顏を合はさないやうにした。

　そのうちに、四月七日になつた。後四日である。物を物が動くまゝにして、置くと後、四日經てば麗子は、いやでも良吉の妻にならなければならなかつた。

　七日の晩だつた。麗子が、自分のたつた一つのお城である、自分の部屋に閉ぢこもつてゐると、良吉が外から聲をかけた。

『麗子さん。一寸。』

『なあに。』

『僕、一寸あなたに話があるんです。』

『……』

『一寸、三十分ばかり。』

　良吉は、さう云ひながら、襖を開けた。麗子は、その方をふりむかず、机の上の本から目をはなさなかつた。

『ねえ。一寸。』

　良吉は、去年の夏のことがあるんで、中へは、は入らうとはしなかつた。

『どんなお話ですの。』

　麗子は、顏をそむけながら、一寸聲をけはしくして云つた。

『僕、貴女と將來のことを少し相談して置きたいの。それに、新婚旅行の打ち合せもあるし……』

『……』

『ねえ。一寸は入つてもえゝやろか。』

『でも！』

『いやか……』

『わたし、新婚旅行なんかしたくないの。』

『そなえな、無茶云うたらあかん。わしは、ちやんとその用意しとるのに。』

『でも、わたしはいや。』

　麗子は、きつぱり云つた。

『結婚式が濟んだら、新婚旅行に出よう思うて、樂しみに待つてゐるのに、そなえなわがまゝ云うて……』

『……』

(結婚なんかもしたくないのよ)と、麗子は云ひたいのをだまつてゐた。

『そんなら、新婚旅行は、どちらでもえゝとして、結婚したら、當分大阪へ來て貰はうと思うて、家を借りるやう頼んであ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

るんやが、あんたは、どなえな家が、えゝやらうか、それ訊かうと思つて。』

麗子は、良吉と一つ家に、生涯を共にすることを考へると、急に悪感を感じて來るほど、いやだつた。

『……』

『えゝ、どなえな家が、えゝやろか。』

良吉は、しつこく訊いた。

『わたし、そんなこと知りませんわ。』

『知らん云うてかて、もうすぐ考へないかん問題やないか。』

『いゝわ。いゝわ。そんなこと、わたしどうだつていゝんですもの。』

麗子は、くやし涙が、こぼれさうになるのを、じつと抑へてゐた。

『さうか、そんならまあ、いそがんでもえゝ。大阪へ一しよに行つてから、探してもえゝ。その代り、當分わしの借りてゐる狹い部屋に一しよ



に居るんやぜ。』

麗子は、兩耳に手をやつて、その呪はしい言葉をなるべく聞くまいと、努めた。

卑しき彼

わたくしに凡ては暗黒です。もう四日すると、わたくしは……あゝ書くのも汚はしいことです。なぜ、わたくしに鐵のやうな意志がないのでせう。父に母に、ハツキリとおことわりすることが出來ないのでせうか。家族制度のくびきに、引きずられて、わたくしは結婚と云ふ檻の中にいやでも、引きずりこまれてしまふのでせうか。でも、わたくしに鐵のやうな意志が、あつたとしても、わたくしはどうすればいゝのでせうか。父や母に、斷ることは出來ます。でも、斷つた後に、わたくしの一家が、どんな風になるのかと思ふと、わたくしには、ハツキリ斷る勇氣が無くなつてしまふのです。わたくしは、この頃毎晩、三時頃まで眠れません。くやしくて、悲しくて、どうしても目を閉づることが出來ないのです。わたくし、自分の魂を心を、そして肉體を、こんなにも、心にそまぬ人の手に捧げることが、正しいことでせうか。わたくしは、何だか正しくない氣がします。でも、さうしないと母に背き、父を悲しませることになります。わたくしは、ほんとうにどうすればいゝのでせうか。女學校で、敎へて頂いたいろ／＼の敎訓を、どんなにくりかへして見ても、私には何の助けにもなりません。一日一日、身が刻まれて行くやうです。でも、こんな事を貴方に、申し上げても、たゞ貴方に御心配をおかけするだけで、何にもならないことは、よく分つてゐます。でも、このお手紙を書いてゐるときだけでも、心がなぐさめられます。すみません、貴方をおさわがせして。でも、ほんとうに、わたくしどうすればいゝのか、分らないのです。もし、あなたに萬一、よいお考へがあるのでしたら、どうぞおしらせ下さいませ。もう、あと、四日しかありません。あなたのお返事が、もし遲れると、わたくしは、もうどうにもならない、身になつてゐるかも知れません。それを考へると、心がふるへます。

麗子

磯村晃様

それは、麗子が磯村に書いた最後の手紙だつた。磯村に、そんな手紙を書くことが、無理だと云ふことは、よく分つてゐた。磯村が麗子を愛してゝくれゝばくれるほど、それは相手を苦しめることだつた。でも、麗子は、書かずにはゐられなかつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

た。彼女は、何かに訴へずにはゐられなかつた。自分に迫つて來る灰色の壁に、押しつぶされないやうに前後左右を見廻して、どこかに一點の光明を求めずにはゐられなかつた。彼女は、その手紙を書いてから、磯村からの返事を一心に待ちわびてゐた。磯村の返事には、何か何か救ひが示されてゐるやうな氣がしてならなかつた。何か何か奇蹟が、磯村の返事と共に、到來するやうに思はれた。

　結婚式が、明後日に迫つた四月九日の朝だつた。どう考へても、磯村の返事は、その日の朝までには、來る筈だつた。麗子は、七時頃に目がさめた。手紙の配達されるのは、八時過ぎである。麗子は、その手紙が、自分の運命を決するとさへ思つたので、顏を洗ふことも食事をする暇も、心は門柱の横にとりつけてある郵便受函の方へ飛んでゐた。麗子は、玄關の横の小窓へ行つて、そこから郵便受函のガラスの蓋を、いく度見たか分らなかつた。だが、八時が少し過ぎても、郵便は來なかつた。八時十分二十分、麗子は、胸がちぎれるやうな、いらだたしさをこらへて待つたが、手紙は來なかつた。

　到頭八時三十分になつた。郵便は、どんなに遲くなつても、八時三十分から遲れたことはなかつた。あゝ、もう朝は駄目なのだわ、ちやきつと夕方の配達なのだわ。夕方には、きつと間違ないのだわと思つた。麗子は、崩れかゝる自分の心を、やつと持ち堪へて、自分の部屋で、お縫物をしてゐた。すると、女中のときがは入つて來て、

『あのお母さまが、お呼びです。』と、云つた。

　また、結婚式に必要な雜用をさせられるのだと思ふと、急に憂欝になつたが、仕方なく麗子は母の居間である奧の八疊へ行つた。母一人かと思つて、は入つて見ると、思ひがけなく、良吉が、母と一しよに坐つてゐた。

　いやな豫感がしたが、麗子は母の前に坐ると云つた。

『何か御用ですの？』

『あゝ一寸。』

　母は、さう云つてから、一寸云ひにくさうだつたが、すぐ言葉をつゞけた。

『今朝ね、良吉が門のところに立つてゐると、郵便屋さんが來たので、良吉が郵便を受けると、こんな手紙が來たさうだが、お前この人知つてゐるの？』

　母は、さう云ふと、鏡臺の上に置いてあつた白い西洋封筒を、麗子の前にさし出した。それは、まぎれもない磯村の手紙だつた。麗子は、目がくらみさうだつた。

『この磯村と云ふ人お前知つてゐるの。』

『…………』

麗子の胸は、火のやうに燃えて、言葉が出ないのだつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『良吉は、何もお前を疑ふわけはないんぢやが、結婚する前に、一寸でもお互に誤解があると、いかんから、訊いてくれと云ふんぢやが、お前この人何でもないんぢやらうね。』

『……』

何と云ふ、いやしい良吉だらう、人の書信を疑ふばかりでなく、母の力を借りて、自分を責めようとするなど、何と云ふ卑怯な嫉妬ぶかい男だらう。麗子は、良吉に對する怒りと輕蔑とで、身體がワナワナふるへた。

『わたし、お前を信じてゐるから、何でもないと云つたんぢやが、ねえ、何でもないんぢやらう。』

『……』

麗子は、凡てが呪はしく、不快だつた。口をきくのもいやだつた。

『でも、良吉は、何でもサッパリした方がえゝから、何でもないのなら、こゝで開封してくれと、さう云ふんぢや。』

と、母は云つた。



他人の人格を無視した何と云ふ失禮な態度だらう。たとひ、暴力で强ひられても、母や良吉の前では、この自分にとつては神聖な手紙を開きたくはなかつた。

麗子は、一言も返事せずにだまつてゐた。

『ねえ、麗さん。お前、この磯村と云ふ人とは、何でもないんぢやらう。』

『えゝ、何でもありませんわ。』

『ぢや、お前わたし達の前で、あけて見せてくれても、えゝんぢやらう。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『……』

『えゝぢやらう。あけて見ても。』

母は、危く封筒に手をかけようとした。いかに、義理の母でも、麗子はそれまでは、忍び得なかつた。

『いけませんわ。お母さま。』

麗子は、涙聲ではあつたが、ハッキリと止めた。

『なんで、いかないの。』

『だつて、お母さま。わたし、わたし……そんな手紙まで……そんな、そんな……』

麗子は、あまりのくやしさに、泣き崩れた。手紙の自由、それまでも侵害されなければならないのか。まだ、結婚してもゐないのに、たつた一つの慰めである磯村の手紙を、人の手で辱しめられなければならないのか。



麗子の心には、今怒の雷火がほとばしつた。(あんまりだわ、あんまりだわ)と思つた。

『でも、お前このまゝだと、つまらない疑ひを殘すことになるぢやないの。お前だつて、結婚前の大事な身體ぢやないの。何も、後暗いことなんか、ないと云ふことを、ハッキリ見せた方が、えゝぢやないの。』

母は、執拗だつた。麗子は、母をうごかしてゐる良吉の男らしくない卑劣さを、ハッキリ感ぜずにはゐられなかつた。死んでも、こんな男に指一つだつて觸らせるものかと思つた。麗子は、どんな手段をつくしても、この結婚を避けようとする決心が、心の中に猛然として起

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

つて來た。

『お母さん。わたしを信じて下さるのなら、手紙まで御覽にならなくつてもいゝと思ひますわ。これ、わたしが敎會で知り合つた方ですもの。』

麗子は、涙を拭ひながら、云つた。彼女は、自分の決心が固まると同時に、氣持が急に落着いて來た。

『さうぢやらう。わたしは、何もお前が、へんな事をしてゐるとは、思はないけれども、良吉が心配するもんぢやから。』

と母は自分を辯解するやうに云つた。

『あら、お母さん。僕は、何も云はないぢやありませんか。僕は、たゞ磯村と云ふ人は、誰かと云うてきいただけぢやありませんか。』

良吉は、麗子に恨まれないやうにと、あわてゝ辯解した。麗子は、その良吉の態度が、いとはしいものに思はれた。

『お母さん。これ頂いて行つてもいゝんでせう。』

麗子は、一刻も早く、磯村の手紙を自分の手にとり返したかつた。

『さうぢやのう。良吉どうや。』

母は良吉に相談した。

『えゝですとも。僕は初から、何とも思つてやしません。』

『さう。ぢや、彼方へ持つて行つて、およみ。』

麗子は、奪ふやうにその手紙を、手にとると、自分の部屋に歸つて來た。

そして、ふるへる手で、開封した。

あらゆる手段で、御結婚を御中止下さいませんか。僕は、それについて責任を持ちます。必ず、必ず責任を持ちます。僕を信じて、どうぞ御結婚をおのばし下さい。

磯村

と書いてあつた。

新しい勇氣が、麗子の身體に充ち充ちた。誰が誰が、あのいやしい良吉などと結婚するものかと思つた。

出奔

お父さま、ほんとうに申譯がございません。でも、麗子は、どうしても、結婚いたしたくございませんの。どう考へても、あの方と一生を共にする氣にはなりません。もつと、早くにお斷りすればよかつたのです、でも、心が弱く、お斷りすることが出來なかつたのです。そして、到頭こんな破目になつてしまつたのです。どうにかして、お父さまやお母さまの御希望通りにならうと、努めて來ましたけれども、やつぱり駄目でした。こんな氣持で結婚すれば、結局



あの方を不幸にし、自分も不幸になり、お父さまやお母さまをも、不幸にすることになると思ひます。結婚式は、アト一日と云ふことになりました。今から、いやだと申し上げても、どうにもなることではございません。それで、たいへん不孝ではございますが、しばらく身をかくすことに致しました。お父さまに、どんな御心配をかけるかと思ふと、空おそろしい氣が

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

いたします。でも、身をかくしても、決してこの上、お父樣に御心配をかけるやうな誤ちは、決していたしません。一人で、淨く正しく暮してゆくつもりでございます。その點はどうか、御安心下さいませ。その代り、一生のお願ひでございますから、どうか警察へなど、お頼みにならぬやうに、おねがひいたします。不心得なことなど、決して致しませんから、しばらく麗子の思ひ通りにさせて下さいませ。くれ〴〵も、おねがひ致します。

麗子

父上樣

お母樣。何とも、おわびの仕樣もございません。不孝の咎は、いく重にもおゆるし下さいませ。

麗子

母上樣

麗子は、二通の手紙を書いて、机の引出しに入れた。子供の時から、お小遣ひを二圓三圓と預け置いた郵便貯金が、五百圓ばかりあつたのを、そつとおろして置いた。夕方、お座敷へ忍んで行つて佛壇の亡き母の位牌の前に坐つて、手を合した。

『お母さま。麗子のすることは、間違つてゐないつもりでございますの。どうぞ、わたくしのする事をおゆるし下さいませ。そして、わたくしを守つて下さいませ。』

三分ばかり、祈つてゐる内に、麗子は涙にむせんで來た。母が、生きてゐてくれたならば、こんな悲しいことにはなるまいにと思ふと、泣けて泣けて仕方がなかつた。

良吉の聲が、次の間でしたので、麗子は、いそいで自分の部屋へ歸つた。身仕度は、何もすることがなかつた。結婚の仕度に、新調したお召や錦紗の着物が、幾揃ひもはいつてゐる自分の簞笥を見ながらも麗子は、それを一枚だつて、とり出さうとは思はなかつた。たゞ女學校三年のときこさへて貰つたお召の着物と、錦紗の羽織を入れた小さい一つの風呂敷包みだけ作つて置いた。たゞ、晝間買ひ物に行つたときに、着て行つた新しい銘仙の揃ひを、着換へないでゐた。化粧道具も、わづかのものを袂にしのばせた。亡き母の寫眞と、磯村からの手紙は、ハンカチーフに包んで、ふところに入れた。

妹のあや子を、一目見ようと思つたが、御飯がすむと母の居間へ行つたまゝ、出て來なかつた。

麗子は、最後の決心をして、立ち上つたが、此の部屋へいつが來たら、歸つて來られるか、いな永久歸つて來られないのではないかと思ふと、足がすくんで、容易には部屋を出ることが出來なかつた。だが、やつと決心して、庭先に、用意してあつた

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

草履をはくと、裏のくゞり戸からそつと、戸外へ出た。涙で、足もとが分らないほどだつた。たゞ、一刻も躊躇してはゐられなかつた。麗子は、三町ばかり小走りにはしると、兼ねてから考へてゐた行きつけない車屋へ行つた。

車夫が、俥を用意するのが、待ち遠しかつた。

『驛まで！』

麗子は、涙を抑へ、なるべく平靜に云はうとしたが、聲がかすかにふるへるのを、どうともすることが出來なかつた。

（つゞく）

『心の日月』黨より（讀者の聲）

▽……一句！一句！息もつがずに讀んだ後で、麗子の眞劒な心持にすつかり泣かされました。こんなにしんみりと讀んだ小說は生れてはじめてゞす。（山形　土田みつ子）

▽……心の日月！何と言ふ面白い、力強い小說だらう、菊池寛氏の作品の中でも、傑作中の傑作だと思ふ。次號が待たれて仕方がない。（芝、田川愛之輔）

▽……私共一家は大の『心の日月』黨となりました。キングが來ると家中引張りだこです。兄は六高を出たので何となく好奇心が手傳ふと見え、小說は喰はず嫌ひだつたのに、今ではこれは面白いなどと勝手なことを言つて居ります。（兵庫、土井雪枝）

名言物語

魏の文侯は、支那の諸侯中で名君と云はれた人である。或日、その文侯が家來の狐卷子に問うて曰く、

『父が傑れた人であれば賴りにしても好いものだらうか』

ところが狐卷子は即座に答へて、

『先づ賴りにはなりません』と云つた。

『それでは子が賢明であれば賴りにして好いだらうか』

『駄目です』

『兄弟が立派な人であつたら？』

『それも賴りにしてはいけませぬ』

『然らば、忠實な臣であつたら賴りになるのか』

『それもいけませぬ』

文侯はたまりかねて憤然として怒鳴つた。

『何故賴りにならないか、其のわけを云へ、わけを云へ！』

然し、狐卷子はびくともせずに徐ろに云つた。

『人の父として堯にすぎた賢人はありませぬ、然るにその子の丹朱は遂に放逐されました。人の子として舜にすぎた賢人はありませぬ。然るにその父の瞽瞍は分らず屋で有名でありました。人の兄として舜にすぎた賢人はありませぬ。然るにその弟の象は傲慢でありました。人の弟として周公にすぎた賢人はありませぬ。然るにその兄の管蔡は誅せられました。人の臣として湯武にすぎた賢人はありませぬ、然るにその君の桀紂は亡びました。

他人はあてになりませぬ、若し君にしてよき政治を望まれるならば、先づ自分の身を修めることから始めねばなりませぬ、人を恃み、人を賴ることは愚の至りであります』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



千艘隱し浦

見よ、巖と鬪ふ二十年!!　偉なる哉!　眞劍の力!!

江見水蔭

さしゑ　石井滴水

海邊に巖

海邊で時々生じる悲喜劇の一ツが、肥前國松浦郡名護屋灣口でも又演じられた。それは蛸の大きなのが海女の右の手に搦み付いたのであつた。八本の足でグル〱卷いて、離れゝばこそ。海女は獨で困つてゐた。

元龜二年の春の日、潮は引いて鷗遠く。風は凪いで浪高からず。霞が溶けて海に成つたか。海が蒸れて霞に成つたか。朧かさ此上もない眞晝の間。灣口に現はれた錠ケ瀬と呼ぶ暗礁の一部での此出來事。生憎他に誰もゐなかつた。

『おのれ、私を海へ引入れようとて、何んでそれが可能ものか』搦まれたまゝに大蛸を、岩角にピタ〱と打付けたが、自分の手が痛いだけで、海の道化物は益々強く愈々で吸ひ付いた。既に手の脈を留められて痺れて了つた。この海女は名護屋南浦の小満津と呼んで、母親孝行で知られてゐた。潛水に掛けては海女仲間でも一人者。今日は此暗礁へ來て稼いでゐるのであつた。

突然そこへ又一人の若者が現はれた。北浦の方から泳いで來たのだ。好い處へと小満津は喜んで、其人に救つて貰はうとして、ハッと氣が着いた。それは憎々しい敵なのであつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

それも昨日や今日の敵ではなく、實に十年前の子供時代からの敵として、いつも此所の暗礁が干潮に水面へ現はれた時には、意地の惡い爭鬪がつゞけられて來てゐたのだ。

北と南と入海を隔ちて、向ふ同士の仲が昔から惡るかつた。その中間の鋸ケ瀨の根方は、鮑の巢、榮螺の巢、魚の寄りも好い處から、兩方から來てそれを捕る。その爲に自然と睨み合ひ。時には言ひ爭ひ。打つた張つたの小衝突は絕えなかつた。それが十年も續いて來た。その儘お互に子供では無く成つたのだ。

『ヤア好い氣味だ。蛸に搦まれたな』

若い男は高らかに笑つた。これも北浦では母親孝行で評判の好い京之助といふのであつた。

『大きにお世話さま。お前に助けて貰はうと云ひはしまいし』

と小滿津はムッとして云つた

『だが、その手に蛸が搦んだまゝで、お前の浦へ歸るには、どうする』

『ハテ、來た時と同じ樣に、泳いで歸るばかりぢや』

『それこそ大變。海に入つたら蛸の力は倍に增す。さうして直ぐに仲間を呼ぶ。他の蛸が左の手に搦む。兩足を搦む。首を絞める。如何に水泳の名人でも、溺れて死ぬるより他は無いぞ』

『まア本統かえ』

『私の方の浦では、それで死んだ者がある』

『さうしたら、如何したら好からう』

小滿津は思はず弱い音を吐いた。

『お前とは長い間、睨み合つてゐて、喧嘩ばかりしてゐたが、それはそれとして置いて、差當つての難儀なら捨置けぬ。さア手を出した』

京之助は云ひつゝ、腰から貝鑿を取出した。小滿津は此所で敗けたやうな氣がした。口惜しいとも思つた。恥辱とも考へた。けれども此男の助けを拒んで、强情に泳ぎ歸る途中。萬一蛸に殺されたら、後に遺る母親を誰が養つてくれると思ひ到つて、屈辱の苦を嚙みながら、恐る〳〵手を出した。

十年振りで自然に敵と握手する運命、蛸の惡戲で開かれた事を、怪しくも感ぜずにはゐられなかつた。

浦の爲に

此事有つてから後は、自然に二人の不和が消滅した。併し又如何した拍子やら、前に比べて顏合はせが遠ざかる樣にも成つた。小滿津が歸つた跡へ京之助が來るとか。京之助の上つた處へ小滿津が着いて、久々で話さうとすると、他の海女が來合せるとか。妙に廻り合せが惡いのであつた。

魚突く銛を杖にして岩頭に立つ京之助が、南浦の方を見詰めた儘、歸るのを忘れてゐると、いつしか滿潮と成つて、鋸ケ瀨の暗礁が沈まんずるに驚く。そんな事も數〻有つた。

昆布刈りの鎌の柄を握り締めて岩角に腰を掛ける小滿津の眼の配りが、北浦から離れぬ其隙間に、繫いだ小舟が流れに掛つた事さへ、時々あつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

それが一年過ぎての春、去年の蛸騷ぎの日と同じやうな麗かさ。どちらも朝から來合せて、女は貝を、男は魚を、若も大漁で、午餐をニコ／＼で食べ合ふ時が來た。お茶の遣り取りが有つた後。

『お前は母親孝行ぢやさうなが一體父さんは如何したのか』と喜之助から問うた。

『父さんは難船して死んでぢや。若も此錠ヶ瀬で』と、小滿津は急に打萎れて答へた。

『えッ、父さんが此錠ヶ瀬で』と喜之助は驚いて云つた。

『あい、なう』

『や、不思議な事もあるものぢや』

『何が不思議で』

『私の父親も此所で難船して死んだ。云つて見れば錠ヶ瀬は親の敵』

『まア、それでは同じ身の上かいな』

『この錠ヶ瀬は名護屋の港に取つて、どの位祟つてゐるか分らぬ。まことに呪はしい暗礁ぢや。これさへ無くば、九州でも指折りの良い港。大船小船何千艘でも入れられる、大きな巾着袋



のやうなのに。此岩あるばかりで、出入りが難澁。案内知つた土地の船頭漁師でも、滿潮時に乘揚げる。お前の父さん、私の父さん、そればかりではない、昔から何十百人、死んでゐるか分らぬのぢや』

『それ故に、港の口に錠を下したやうな瀨。錠ヶ瀬とは云ふといなう』

『これさへなければ、辨天の瀨戸一ツ向ふの呼子の港ばかり繁昌はしまいもの。其爲に名護屋は船乘りから見捨てられて、呼子に借金のある船で無うては、滅多に繫らぬ』

『名護屋の港の南も北も、浦が衰微してゐるのは當り前。お互ひの家が貧乏なのも、已むを得まい』

『この錠ヶ瀬が無かつたら、名護屋の爲にどの位良いか知れぬものなア』

小滿津も喜之助も共々に、錠ヶ瀬を呪はずにはゐられなか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

つた。

『あゝどうかして此鋲ケ瀬を、無い物には出來ぬかいな』

小満津が突如として口走つた。

『さア今、私も、同じ心が浮んだ處ぢや』

喜之助も口走つた。

『親達の敵を取る、そればかりではない。諸人の難儀を救つて、航海安全。船が澤山泊りにくれば、港は自然に繁昌して、名護屋浦の人々の爲にも成る』

『これが道端の小石なら、取つて捨てる事も出來るのだが、何分にも疊五六枚も敷ける上面ではなア』

『それでも人の一心、命を打込んで掛つたら、鋲ケ瀬の暗礁も除かれぬものでも有るまい』

女ながらも小満津の意志は、鐵石よりも固かつた。



神への誓

その時はそれだけで別れたが、又逢ふ度に鋲ケ瀬を取除く相談。いろ〳〵研究して見た結果、二人が心を一ツにして、氣長

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

に仕事を續けたなら、敢て不可能ではないと知れた。

それは、此暗礁が干潮時水面に現はれる頂上こそ、五六疊の廣さを有しても、海底近き根方は意外に細く、ちやうど唐傘を擴げた形なので、根方の岩の細目の個處を砕いたら、上部は倒れて深海へ陥ちる。だが、その作業は難事中の難事。干潮時を選ぶとしても、一尋以上水底に潜入して、陸の十分一も力の入らぬ鑿を根氣能く遣つて見る。それより他に方法は無いのであつた。

『どの道鮑取りには潜るのぢや。お前も魚突きばかりせずと、潜つて岩を砕きなさんせ』

『おう、一日に五寸でも好い。二人で一尺。鑿が利かぬ時は、鐵の棒で穴を穿けては、鐺つても好い。何としても下風を積んで、名護屋の港の錠前を脱さう』

『それはいふまでもない、加部島の明神樣に御願掛けして、神樣の御力を借りませう』

『大願成就するまでは酒を斷たう』



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『それは云ふまでも無い事』
『では、女を絶たう』
『ほゝゝ』
『や、冗談ではない。本望を見事に達するまでは、私は女房を持たぬ決心』
『そんなら私も、良人を持たぬ覺悟』
『それがお前に出來るか』
『私には出來るが、お前こそ、それが出來るかいな』
『出來る。出來る。キッと出來る。唯併しながら、これが十年で出來るか、二十年で出來るか、三四十年掛かるかも知れんのぢや。今が二十五歳。六十一の本卦歸りか。七十の賀の祝あたりにヤッと本望を遂したとしたら、もう嫁に來てくれる者が有るまい。すると一生私は男やもめで暮らすのかなア』と思はず喜之助は嘆息した。
『それは私とて同じ事、神に誓を立て掛かるから、六十七十の婆樣に成らうとも、それまで亭主は持たずにゐる』と小滿津は躊躇なく云ひ切つた。
『すると、他からモウ嫁に貰ひ手の無く無つた老婆と、他からトテモ嫁に來手の無い老爺と、互ひに世の中の廢り者が、其時に成つて三々九度、初めて目出たく婚禮するか』
『そんなに年を取らぬ間に、早く夫婦に成れるやうに、一心籠めて錠ケ瀬を取除けようでは無いかいなア』



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『巧く行つたら、翌日にも取れよう』
『まア氣の早い、おほゝゝゝ』
『あはゝゝゝ』
笑ひながら二人は手を取り合つた。けれどもその笑ひは、ホンの僅かの間で、双方の顔面には眞剣味が漲つた。然うして二人は揃つて加部島の方に向ひ、合掌して念じ入つて、此所に最後の決意を固め、未來の誓を立てたのであつた。

夢の様に

天の浮橋に似た鉦ケ瀬は、喜之助と小満津との二人に取つて唯一つの逢ふ瀬であつた。非常な嵐でない限りは、雨の日も、雪の日も、干潮時には必らず來た。然うして父に早く死別れた子達の不幸を語り合ひ、慰め合つた。老いの母親への孝行を、助け合ひ、且つ励まし合つた。

鉦ケ瀬崩しの難工事は、孜々矻々、撓まず、倦まず、二人の異常な努力に於て續けられた。けれども何んとしても水中の作業だけに、如何に潜水の達人でも、陸上の働きの百分の一にも當らず。此儘で進んだら、百年二百年經過しても、覺束ないかと悲觀された。

それでも着手してからの半歳目には、偶然海底から鐵の長棒の先端が螺旋錐の如く造られた異様な品を引揚げた。それは異國船が先年此所で沈沒した、その積荷の一部と知れたのであつた。

これを得てからは非常に働き能く成つて來た。潜水せずに濟む場合があつた。

けれども斯ういふ機械を得て、鉦ケ瀬崩しをしてゐるといふ事を、浦人に殊に意地悪るの浦役人に知らせぬやうに苦心した。どういふ拍子で誤解されぬとも限らぬので、唯その二人の母親だけには知らしてゐた。どちらの母親も、それをどの位樂しみにしてゐたか知れなかつた。神に佛に成功の、一日も早かれと祈つてゐた。

この作業の有る爲に、二人は今までの倍の倍も筋肉を働かさなければ追ひ着かなかつた。家業の漁を放棄する事が出來ぬ爲にだ。それ故どの位疲勞するか知れなかつた。他の若い男女が戀の夜更かしに現を抜かす、その仲間には入りやうも無くて、精氣一杯に日を送つた。

三年過ぎた。五年過ぎた。工事は一向進まなかつた。その間に、先づ喜之助の母親が病死した。友を引いて間もなく小満津の母親が死んだ。

『どこまで同じ運命だらう』
『どの道先へ逝く人達ながら、せめて鉦ケ瀬が少しでも傾くのを見せたかつた』

嘆きながらも努力は續けられた。

夢の様に十年過ぎた。けれども作業は半ばにも達しなかつた。それでも斷念しようといふ心は、小満津にも喜之助にも起らなかつた。意地に成つた。飽くまで意地を貫かうとした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

いつ夫婦に成れる事か。それは念頭から離れなかつた。けれども加部島の神樣への誓ひ。それを破るのを罪恐ろしく考へて、時の來るのを待つのみであつた。

小滿津の顏には小皺を生じて來た。喜之助の頭には、早くも白髮の少量を見るやうにも成つた。

天正十八年はちやうど二十年目に當つた。喜之助は四十五歲に成つた。小滿津は四十二歲と成つた。

七分は岩を缺ぎ得たが未だ後に三分は殘つてゐた。

その三分に何年掛るか、未だ十年も努力せねば成らぬかと二人は今更人の力の微かなのを、嘆かずにはゐられなかつた。

冬の海に日の落ちるのを、ぼんやりと見送りながら、小滿津と喜之助とは鉈ヶ瀨の上に立つてゐた。

そこへ南浦の方から一艘の早船が漕ぎつけた。中には、浦役人風見藤馬といふのが乘つてゐた。

『どうも變だと思つてゐた。いつ頃から始めたのか分らぬが、長い間には相違有るまい。二人で此瀨を崩しに掛つてゐたのだな。此頃注進する者があつたので、今日は遠見をして居つたのぢや。若も異國の道具を遣つてゐる樣子。怪しからぬ致方。二人ともその分には捨て置けぬ』

組子の者がバラ／＼と岩上に飛上つて、二人を縛り上げた。二人は如何とも抵抗は出來なかつた。

これは皆戀の叶はぬ返報からで有つた。風見藤馬は數年前から姥櫻の小滿津に言ひ寄つてゐたが、役人風は今日まで、少しの利き目も無かつたのだ。

その結果が此日の捕物となり、二人とも散々拷問されて、其揚句が所拂ひといふ事に決定した。

死切れぬ



紳士淑女方の頭髮料は!!

毛髮を養ひ、黑々と艷を出し得も言れぬ清新な香を放つ

純植物性……

千代田ポマード

定價 五十錢

試用見本 美髮の栞 無代進呈
キングで見たと二錢切手同封の上御申込下さい。

千代田香油 四〇、五〇、一、〇〇
千代田ヘーアトニツク 一、〇〇

東京市外池袋七六八
山岸商店
電話大塚二二三〇番

全國化粧品店・本社代理部販賣

折角此所までに成つたのだ。二十年の努力。血の努力。涙の努力。云ふに云はれぬ忍苦の奮鬪。それが全くの水の泡。その泡よりも果敢なく終らなければ成らぬのだ。

親達の仇敵とも見た。浦人の爲、船人の爲、すべて世の爲と信じて、之までにしてゐるのを、所拂ひと成つて了へば、もう錠ケ瀬へは指一本觸れられぬ。

二人は落膽の絶頂に達して、氣抜け同然、兎、に角連立つて加部島の知る邊を便つて行つた。

『もう斯う成つたのぢや。錠ケ瀬崩しが出來ぬと極つたら、翌日は二人で明神樣へお參りして、願ほどきをして、一層夫婦に成らうではないか』

『それが好う御座んす。岩を取るまでは男絶ち女絶ちと、互ひに神樣に願掛けしたが、それが出來ずに夫婦に成つたら、必らず神罰が當りませう。さ、その罰が當つて二人とも死ぬとしたら、却つて本望。自分で死ぬのは死切れぬ怨ぢや』

小滿津と喜之助とは然う約束した。翌日の朝、田島明神の御前で、願ほどきから直ぐに結婚と心を極めた。

その夜、突然、大海嘯が起つて、玄海灘の大暴浪は、加部島と波戸崎との水道から、一氣に名護屋浦を襲擊した。海邊の人家には多大の被害があつた。

灣口の出張りの浦役場は、一溜りなく洗ひ去られて、風見藤馬その他二三の下役は、溺れて死んだ。多年の惡政に苦しめられた浦人等は、天罰の覿面に、歡喜した。

『錠ケ瀬が見えぬぞ』

『干潮に暗礁が出て來ぬ。不思議〳〵』

加部島からもそれは認められた。

扨ては遺す處の三分の岩根も、頭部の重さに釣合を失つてゐた處へ、海嘯の勢で遂に倒れたのであらう。然う小滿津と喜之助とは、誰よりも眞先に覺り得た。

『錠が脱れたッ。錠ケ瀬は取れたッ』

『名護屋浦の運は之で開いたッ』

『嬉しや』

『喜ばしや』

加部島の岸邊に立つた二人は、抱き合つて嬉し泣きに泣いた。

故鄕へ錦

太閤豐臣秀吉、天正十九年朝鮮に向つて戰を開いた。その本陣を肥前松浦郡名護屋に定めて、此所に城を築き、自から總指揮を司つた。

朝鮮に近い對馬。その對馬に近い壹岐。その壹岐に近い處に良き港を求めて、それに當つたのがこの名護屋なのであつた。

『錠ケ瀬が取れたので、九州無二の良港と相成りました。入海は奥へ奥へと袋の如く入り込んで居ります。之なら千艘の船が隱れても外からは見えますまい』

小西行長の報告が基といふ。名護屋の港は千艘隱しと、後の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

世までも傳へられるに至つたのは、全く小滿津喜之助兩人の眞劍な心掛から起つたのであつた。

豐太閤、名護屋滯陣のつれづれに、近き加部島の明神詣で。その時、小滿津喜之助の二十年苦鬪の事情を聞いて、

『ほう、それは二人が長年の骨折こそ、名護屋浦の爲に成つたばかりでなく、日本國の爲に成つたのぢや。二人は故郷へ早速歸れ。改めて浦長の役を申付ける。港出入の錠を握つて、船運上取立てるが好からう』

故郷へ錦を飾る二人を迎へて、昔に變つて隆りに盛る名護屋の人々が、總出總踊の歡迎。この賑やかしを豐公も喜んで見物。『もつと遣れ〳〵。面白い風俗して、踊り廻れ』



これをヤツシと稱して、最近まで傳はり、假裝した音曲行進が、毎年春には催されてゐた。筆者は明治三十九年に此ヤツシを見て、この傳説を聞いたのであつた。（をはり）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



霧の中の曙

野村愛正
林唯一畫

父と娘

實に思ひがけなかつた。が、いつのまにか一度はかういふこともあらうかといふ覺悟が出來てゐたものと見える。殊にこゝは病院なので、逃げたり、隱れたりも出來ない。刹那の驚きと當惑がすぎると、蘭子は、自分でも意外に思つたほど落着いて、

『まア、お父さん……！』と、もう一度深い胸聲で繰返して、靜かに部屋の中にはひつて行つた。

父は一人ではなかつた。角張つた顏の、眼の鋭い、見知らぬ中年の男と一緒である。後で聞くと、かねて搜索を依賴してゐた私立探偵社の主任とかで、この人達も新聞によつて精二の名を見着け、蘭子も病院にゐることを知つてやつて來たので――慘めな服裝をした變つた娘の姿を見るにつけて、悅び、怒り、憫み、父の胸には一時にさま〴〵の感情が込上げて來たらしい。

泰造は、なんともいへない表情を浮べて、身體を乘出して何かいはうとしかけると、探偵社の主任は急いでそれを遮つて、

『お嬢さまでいらッしやいますね。さア、まア、どうぞ……！』

豫じめ打合せがしてあるのである。蘭子が椅子に掛けるのを待つて、父には默らせておいて、その男一人で何かしきりにいふ。碌すツぽ耳も傾けなかつたが、結局、同道して歸らうといふのだつた。

『いゝえ、それは出來ませんの、重態の病人がありますので……

……。』蘭子は首を振つた。

泰造の顏が紅くなつた。また何かいはうとするのである。が、探偵社の主任は再びとめて、狡猾な愛嬌笑ひを浮べて、

『いや、お嬢さま、そのことも存じてをります。まことにお氣の毒な次第ですが、何しろみなさんがご心配なすつてゐられます。一度ご親類までお歸りになつて、それから改めてお出直しなさるといふことに……。』

見え透いた詭計だ。歸つて行けば容易に出掛けられるものではない。父が許してくれるとは思はれない——が、父に對しても一度は歸つて行かねばならぬ場合で、强つて歸らないともいはれない。蘭子は窮した。途方に暮れた。

この難關をどうして切抜けるか？ 切破詰つてじツと考へこんでゐた胸の中を、ふと明るい光がすぎた。蘭子は顏をあげて、暫く父を瞶めてゐたが、やがて

『お父さん、蘭子を宥して下さる……何もかも？』といつた。

その聲には、遠い少女時代を想はせるやうな可憐な愛情が籠められてあつた。泰造は思はず眼を瞬いたが、感情を隱さうとして故らな咳拂ひをした——蘭子はつゞけて、

『そしてあの方……精二さんも？』

『……………。』が、今度は、泰造の顏は俄かに硬くなつた。

『お父さん、あの方は、今、死ぬか生きるかの境で、お醫者さまにまで見放されかゝつてゐますの。ほかの時とは違ひます。理窟なしに宥してあげて頂戴……！』

『出來ない相談ぢや！』

宥すといへば、全快後には結婚まで承諾しなければならない。それは泰造には出來なかつた。

『いゝえ、お父さん、このまゝ見棄てゝ歸ればあの方は死ぬのです。それならあたくしは歸る譯に行きません！』蘭子はきつぱりいつたが、同時に縋着くやうな哀願の眼で見上げて『でも、お金がないので充分手當をすることも出來ないでゐるのです。神さまがお父さんをお寄越しになつたと思つて……あたくし、一生ご恩に着ます。蘭子に免じて宥して……助けてあげて下さい！』

だが、これは猾吏泰造には出來る相談ではなかつた。斷じて應諾の色を見せない——蘭子の方も必死である。傍で眺めてゐた探偵社の主任は、このまゝでは到底穩かに落着しさうにないことを察して、

『それでは如何です。和田さんも……お嬢さまもご尤もです。此際ですから、藤崎君との關係を綺麗になくなされる意味で、治療費だけを出しておあげになるといふことになすつては？』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

と妥協説を持ちだした。

『絶對に出來ません！』蘭子は、言下に答へた。『そんなことをするくらゐなら、まだ殘つてゐて一人で蹈つて行きます！』

『わしも不贊成ぢや！』と泰造もいつた。『否應はいはさぬ。わしの娘ぢや。素直に歸らねば、警察の手を借りてでも………

……！』

永久の別離

『まアお待ちなさい。お二人とも、萬事、私に任せて下さい！』探偵社の主任は、二人の間にはひつて、『お嬢さま、今も和田さんの仰有られる通りです。なんとしてもひとまずお歸りになるよりほかありません。後のことは私がお引受けします。ご安心して穩かにお歸りになつた方が、ご病人にとつてもおためですよ！』

もう一度、蘭子も考へ直さねばならなくなつた。さうだ、どんなに頑張つてみても引戻されるのだ。無理に連戻られることになれば精二は棄てられる。助かる望みはない。それよりも、温順しく探偵社の主任の言葉に從つた方がよくはないか……？

また、感情的には一人きりでも蹈つて行く決心はあるが、實質上の成算はない。たとひ殘ることが出來るとしても、結果は見えてゐる——たゞ、これほどの氣持でゐるのだ。愛は棄てたくない。蘭子は、思ひあまつて、たうとう泣きだしてしまつた。

だが、生命をなくなさせて何等の愛ぞ。愛なればこそ、辛い犠牲も忍ばねばならないのだ！　さうすることは、一方では兩親を安心させることでもあるし——蘭子は、やうやく顏をあげて、

『では、きつと充分手當をしてあげて頂けますね？』と念を押した。



また泰造が何かいひかけるのを、探偵社の主任は狼狽て制して眼顔で頷いて見せて、

『無論ですとも。この私が責任をもつて！』

といつた。

『それでは、あたくし……歸ります！』といつて、蘭子は全身を震はせて顏を覆つた。

一話は落着した。蘭子は、や

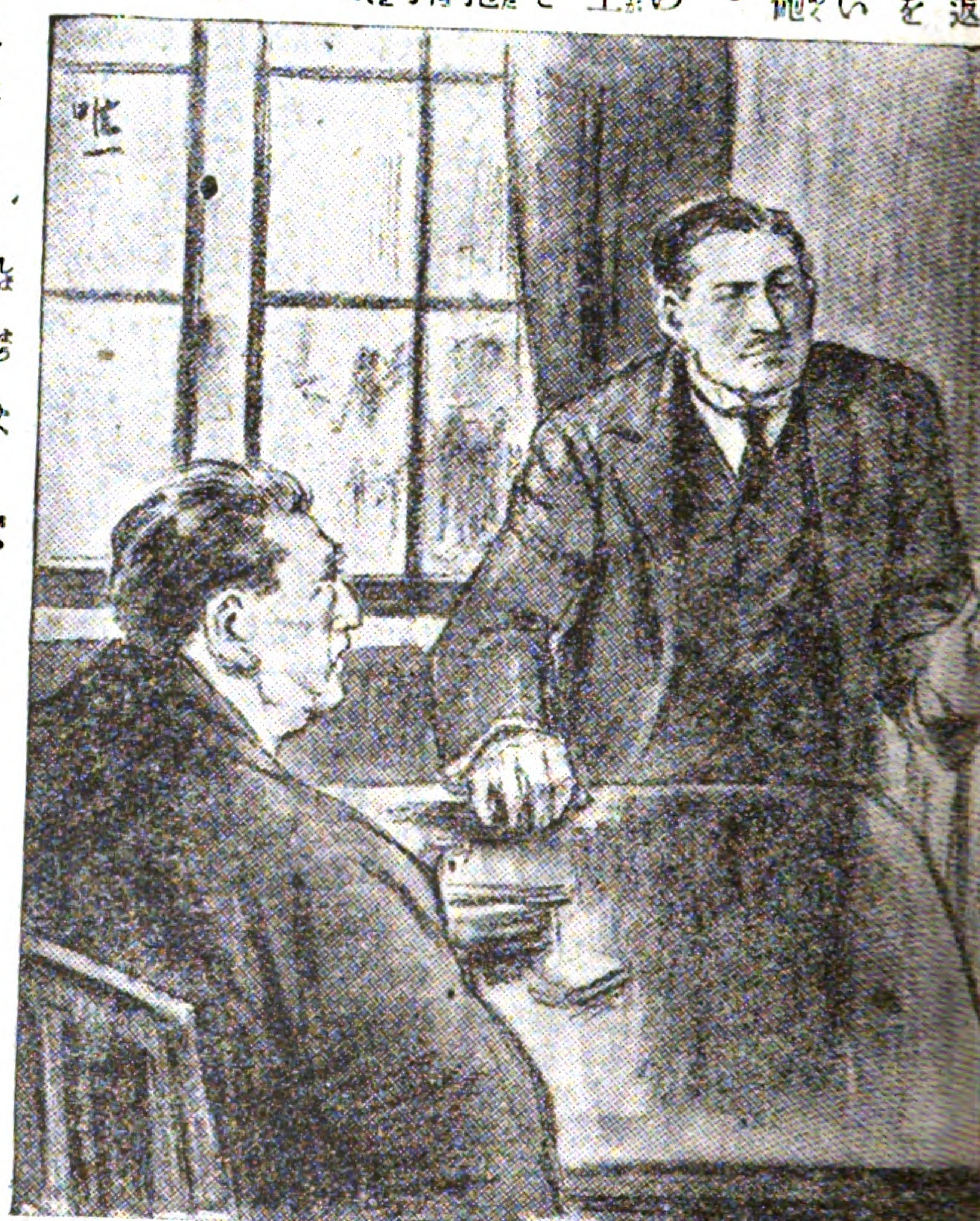
がていくらか自分を取返して、父にも一度精二を見舞つてやつてくれないかといつたが、泰造は飽迄融和を欲しなかつた。素氣なく首を振つたので、詮方なく一人で立上つて――最後のわかれである。破れさうな胸を抱き、袂を抑へて病室に引返して行つて、その枕頭に崩れるやうに坐つた。

氣配に、精二は、また瞑ぢてゐた眼を瞠いた。

蘭子は、いづれ後々にはわかることではあるが、重態の今、餘計な心配はさせたくない。芝の方に歸ると思はせておくつもりでゐるので、

『あの、あたくし、ちよいと歸つて、仕度をしてすぐに出直し……。』いひかけたが、不意に言葉が途斷れた。

いひやうのない悲しみの固りが、胸から咽喉の方に込上げて來たのである。蘭子は、衝動的に全身を震はせて、思はずわッと聲をあげて泣伏してしまつた――が、わづかに自分を制して



眼からハンケチを除つてみると、鋭くなつてゐる病人の神經が何も感じずにゐる筈はなかつた。精二の熱ッぽい視線は、何事が起つたか、もの問ひたげにじッと濺がれてゐる。最早、隱すに隱されなくなつて、

『あのう、ほんたうはね、お怪我をなすつたことが新聞に載つて、それであたくし達の居所がわかつて、迎へのものが來ましたのよ。でも、また……。』

それ以上はいへなかつたが精二はすべてを知つた。犧牲にならうとしてゐる氣持はわからないので、たゞ〳〵彼女のために兩親の許に歸つて行くことを悦んで――微笑を、それも歪んではゐるが頬に浮べて頷いて、

『それが、いゝです。長いこといろ〳〵……僕のことは、みんな堪忍して下さいよ。お幸福で……！』

弱々しい嗄れ聲でいつて、手を差出さうとするやうに身を悶躁く。蘭子は察して、その手を固く握緊めて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『いゝえ、あなたは……蘭子こそ……。』が、再び咽喉が詰つて、聲が出なくなつた。

精二もそれきり默つてゐたが、感情は感じてゐた。涙は、靜かに、枕の方に滴り落ちて行く――その彼を、このまゝどうして見棄てられる？ 見棄てられるものか！ どうしたつて、どんなことがあつたッて……！

またしても込上げて來るはげしい悲しみに壓倒されて、蘭子は、狂亂的に、もうどうなつても構ふものか、傍は去るまいと思つた。が、あまり長くかゝるので、心配して樣子を見に來た探偵社の主任に促がされて――天も地も、裂けないのが不思議である。蘭子は、生れてはじめて死を願つた。死は易いが、それでは精二は救へない。詮方なく、よろめきながらやうやく立上つた。

『でも、とてもあたくし、長くは生きてゐられない。やがて胸が破れて死ぬ……！』

左樣なら、戀よ――永久に！

この、やがて死ぬといふ考へは、いくらか慰めを齎してくれた。蘭子は、振返り／＼病室を出て、父の待つてゐる應接に引返して來ると――それまで持耐へてゐた堤が切れた。いきなり父親の胸に身體を投げかけて、

『お父さん……！』と、あらゆる感情を籠めて叫んで、悶絶するやうに膝を折つた。

泰造は、蘭子がゐない間に探偵社の主任とどんな打合せをしたか。打つて變つて上機嫌で、眞心から劬りながら、自動車で下落合に向つた。

僞瞞

誰もかれもほッとした樣子で、歸つて來た蘭子を悦んで迎へた。殊に叔母の貞緒なぞは傍に附切りで、早く創痍を忘れさすやうに、きまり惡く思はせないやうにと氣を配つて、さま／＼やさしくしてくれる。さうした人々に圍れて、馴染深い自分の居間に落着いて見ると――この半年近くの間、長い惡夢を見つづけて來たやうな氣持にもなる。蘭子の心もすこしは輕められて行くやうに感じた。

だが、打碎かれた悲しみがさう容易に癒えるものではなかつた。精二は、午後には病室を變へた筈である。殘された唯一の慰めであり、悦びでありするので――まさか訊くことも許されない理由もあるまい。蘭子は、夕方近くになつて、どうなつたかそッと病院に電話をかけてみた。

ところが、意外にも、移されてないばかりか、蘭子が申込んでおいた豫約も取消されてある。精二の容態は、いよ／＼よくないといふ――不審と驚きに青褪めて、父の滯在してゐる部屋に驅込んで行つて、

『お父さん、どうして約束どほり精二さんに手當をしてあげて下さらないのですか？』と、詰寄るやうに訊いた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

はじめ素直は、いゝ加減に誤魔化してしまふつもりらしかつたが、蘭子の方は一生懸命である。鋭く詰問して來るので、たうとうあしらひかねて、

『わしは知らん。わしには約束した覺えはない！』といひだした。

『いゝえ、あんなに固く……！』

『それはあの男が勝手にしたのぢや。わしの知つたことではない！』

なる程、父に多少の不服のあつたことはわかつてゐたが、探偵社の主任があれほど責任を持つて引受けてくれた。その方はすつかり安心しきつてゐたのに——とにかく二人は、穏かに連戻しさへすれば後はなんとでもなるといふ考へからやつたことである。蘭子はうまく／＼瞞されたのだつた。

探偵社の主任のことなぞは今更問題にならない。父が娘を瞞したのだ。娘の抱く信頼を利用して、計畫的に偽瞞した……！

『ひどい／＼お父さん！』蘭子は、悲しみとも、憤怒ともいひやうのない激情に戰きだして叫んだ。『お父さんが、娘の蘭子をお瞞しなすツた……！』

『瞞すも、瞞さないもないことぢや。わしはお前を誘拐したり、このわしの顔に泥を塗つたりした男に對して、鐚銭一文出してやることは出來ん。死なうがどうせうが自業自得、後々になつて何かいひ出すやうなことでもあれば、**容赦なく刑務所に叩込んでくれるつもりぢや！』**

これが素直の本心である。蘭子は、惘れたといふより、情けないといふより、谷底に突落されたやうな絶望を感じて、

『あゝ、お父さん、人一人が死にかゝつてゐるのです。見ず知らずの他人の場合でも棄てゝおけないのに、まるで鬼みたいに……。』

が、自分の父である。非難は許されなかつた。いひかけて、蘭子は、その場に泣倒れてしまつた——叔母の貞緒が驅附けて來て、その蘭子を寢室に連れて行つていろ／＼慰めてやらうとしたが、てんで耳に入れない。詮方なく一人きり残しておいて立去つた。

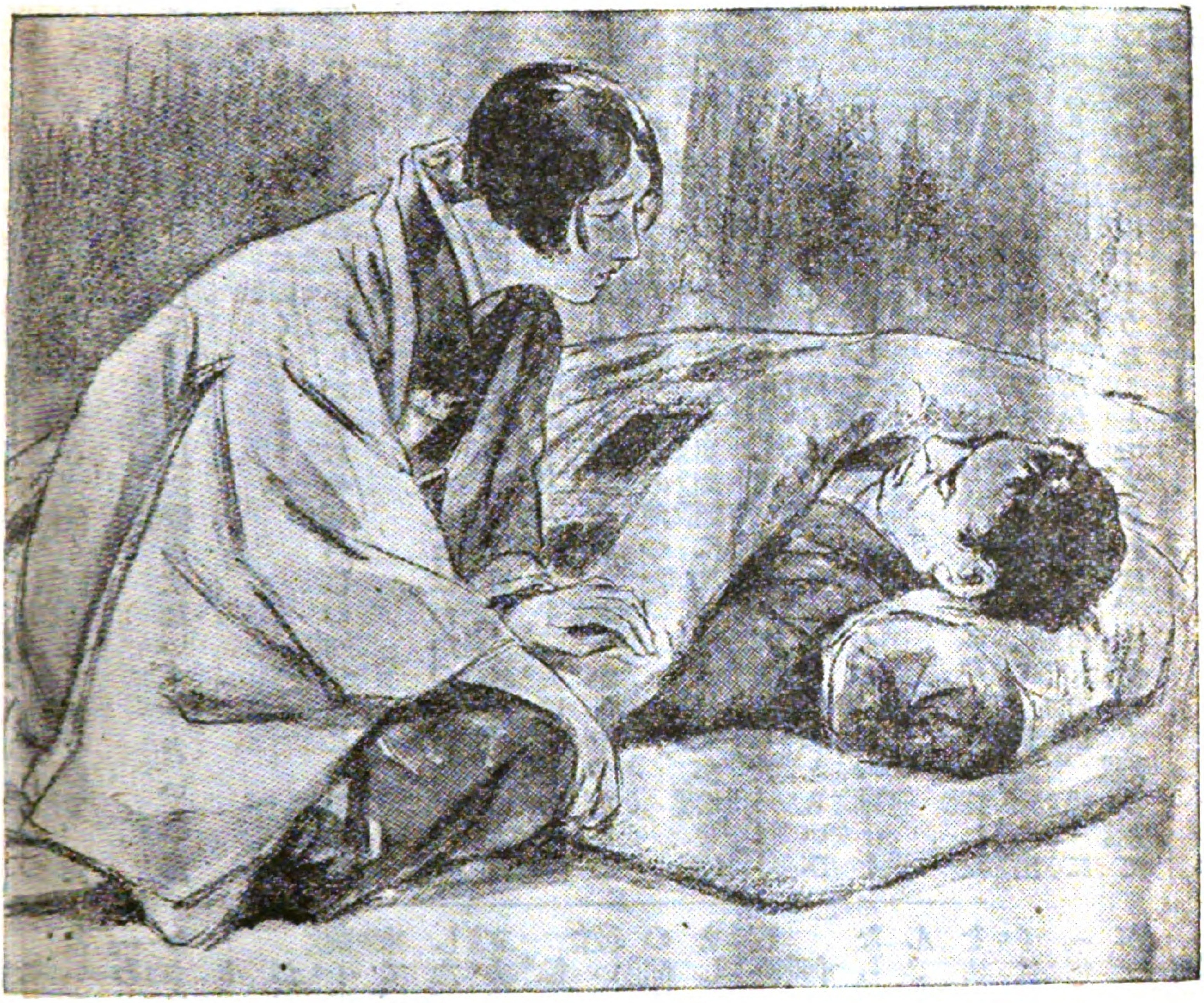
餘ッぽど經つて、蘭子は、やうやく自分に返つた。涙はもう乾いてゐるが、どれほど狂憤的に悶えたことか。知らず識らずの間に嚙破つたものと見えて、兩方の拳が腫上つて、血さへ傷ましく滲んでゐる——さて、これからどうするか？　蘭子は、寢臺の上に腹匍ひに起返つて、じッと眼を見据ゑた。

何より、第一に、もう一度精二を助ける方法を講じなければならないといふ考へが浮んだ。折角、死ぬほどの辛い思ひを忍んで犧牲にならうとしたことも、このまゝでは、單に自分の愛を裏切り、精二を棄てる結果に終るのだ。それは出來ない。蘭子は顧みて、

『犧牲にもなんにも、もと／＼棄てるといふ考へを起したことが一番惡かつたのよ！』と思つた。

その不信な責任に對しても、是非償ひをせねばならない。蘭子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



に、重態と聞けば猶更だ。急ぐ。明日にも……！」

だが、今更父には縋られない。縋つてみても無駄なことはわかりきつてゐる。叔母も父と同腹と見なければならない。ほかに方法はない！　たゞ、父は約束を果さなかつた。蘭子も守る必要がなくなつたので、精二に返つて行つてもいゝと思つて——ふと、ある懸念が感じられた。そこで急いで寢臺を降りて、扉に行つて開けようとしてみたが、動かばこそ。案の定、外から鍵がかけられてあつた。

殘雪の夜

かうなつては、檻禁も同様、部屋から一歩も出ることも出來なくなつた。蘭子は、詮方なく引返して、再び寢臺に身を投げた。

最早、絶望の上の絶望である。自分の自由さへ奪はれては、精二をどうかしてやるといふことなぞは思ひも及ばなくなつて——とはいへ、そのまゝでは死ぬことがわかつてゐるのに、みすみす放つてしまはれようか？　それも出來ない。絶對に…………！

蘭子は、文字通り切破詰つた、死物狂ひの氣持に襲はれた。またしても自分の兩手の拳を嚙み〳〵、新しい悲しみ、憤怒、屈辱感にはげしく全身を震はせて、のたうつやうに泣き悶えてゐたが——不意に顏をあげて、



『さうよ、蘭子は、もうあの方のものではなくなつてゐるのよ！』

愛は棄てたのだ。そして犧牲になる覺悟をした上は、どこまでもそれを生して行かねばならない。蘭子は、ある一つの悲壯な、絶對的な方法を思ひ着いたのだつたが――實行するには、殆んど耐へきれないほどの苦痛と、不可能に近い困難が伴ふ。すぐには決心も出來かねる。暫くは、歪んだやうな眼をしてじツと考へこんでゐたが、

『でも、ほんたうにお助けするつもりなら、どんなことでも忍ばねばならない……！』と自分にいつて、ふらふらと立上つて窓を開けて下を俯瞰した。

冴返るほどの月が、昨夜降つたまゝの庭園の雪を青く照してゐた。蘭子は、高さを計つてみて、一度は怖くなつて頭を引込めたが、精二の方は半日を急いでゐる。決行するとすれば今晩のうちでなくてはならず――自由を求める出口はそこよりほかはない。やうやく決心して、引返して身支度をはじめた。

無論、二階の窓から飛下るやうな離れ業は出來ない。蘭子は、ありたけの紐を集めて垂してみたがまだ屆かないので、シーツを引裂いて繼足し、端を寢臺の脚に結び附けた。この間に長い早春の夜も更けて來て、まさか誰もこんなことは想像してゐなかつた。安心して眠つたらしく、物音も靜まつた。

そこでその紐に兩手で縋り、眼を瞑つて――身體がふらりと宙に浮いて、何度も横に搖れた。が、一生懸命だつたせゐか、思つたより遙か容易に滑下りることが出來た。蘭子は、無事に地上に立つと、夢中で門を開けて走り出た。が、東京には向はなかつた。その反對の、かつて酒兒と騎馬で駈けたことのある街道を歩みだしたが、氣が着くと足には何も履いてゐない。手に入らなかつたのだ。まだいくらか人通りもあるので、見咎められることを惧れて、武藏野鐵道の電車線路に出て行つた。この頃までは意識もかなりはつきりしてゐたが――やがてだんだん、不思議な感情が、その斑消えの雪をいたいたしく踏附けて行く裸體の足からやつて來だした。はじめは、一足毎に、冷さが、疼痛のやうに、爪先きから頭の頂邊に滲透るほどに思はれたのが、いつのまにかちツとも感じられなくなつた。

そしてこの麻痺は、脚から腹部、胸と、次第々々に上の方に及んで來て、たうとう全身を占領した。すると、精神的、肉體的にあらゆる感覺が停止してしまつたやうに思はれだして――最早、悲しみも、苦しみもない。なんのために、どこをさして行きつゝあるか、それさへ忘れたほどの氣持である。蘭子は、はげしい喪心狀態に陷つて、まるで狂女か、夢遊病者のやうに、青白い月光のベールの中を、たゞふらふらとすゝんで行つた。

深い泥濘も至るところにあつて、蘭子は、幾度も〳〵躓いて轉んだ。が、その都度、殆んど無意識に起上つて、またふらふらと歩みつゞける。そのうち、一度、汽車か、電車の驀進して來るのに出會つて――そのまゝ轢かれて死ねばいゝとも思つたが、本能的に飛退いて避けた。暫く呆然と後を見送つて、

『えゝ、さうなの。蘭子はまだ死なれないのよ、あの方を助けるまでは！』と、誰かに答へるやうに聲を出していつた。かと思ふと、立止つて、さめ〴〵と歔欷いてゐた――。

『みんな、誰も蘭子を堪忍して頂戴ね！』

どこをどう歩いて行つたか、どれほどの時間を彷徨ひまはつたか知らない。ふと、非常な惡寒に襲はれて氣が着くと、まさか眠つてゐたのではあるまいが、とにかく冷い地面に坐つてゐる――意志が、一念が、こゝまで導いて來てくれたのである。蘭子は、月光を浴びて眼の前に立つてゐる洋館を見上げて、

『たうとう、たうとう來たわ……！』

殘りの力を集めて立上つたが、絶えずかち〳〵齒の根も合はないほどの戰慄に襲はれつゞけてゐるので、五六歩で倒れた。が、また起上つて――低い門は容易に開いたが、ポーチまでの間は半ば匍つた。彼女はこれが自分の結婚の道中であることを知つてゐた。そしてやうやく玄關に辿り着いて、鈴を探しあてて押した。

遠い〳〵ところでけたゝましい響きが起つた。同時に蘭子は――氣が緩んだのか知れない。そのまゝ前に突伏して悶絶してしまつた。

身に代へて

深夜、時ならぬ鈴の音に驚いて、家政婦が恐々起出して行つて覗いてみると、蘭子が、ポーチに、手も足も氷のやうに冷えきつて氣絶してゐる。いよ〳〵仰天して、すぐ樣酒見を呼起し、寢呆眼を擦つてゐる女中にも手傳はせて、取敢へず二階の來客用の寢室に連れて來て寢臺に入れた。

が、蘭子の容態は、なか〳〵素人の手では恢復しさうに見えないので、酒見は、家政婦が濡れた衣服を温いのと取替へてやつてゐる間に自分で驅出して行つて、近くの醫師の門を叩いて迎へて來た。そして注射したり、昂奮劑を服ませたり、摩擦してやつたり、さま〴〵手當を加へると、やがて呼吸は微かに通じだしたが、苦しげに呻いたり、わな〳〵痙攣的に震へたりしてゐるばかりで、意識は容易に返つて來ない。そのうちたうとう夜が白々明けて、今度は反對に、體温がぐん〳〵、ぐんぐん、異狀に騰りはじめた。

警戒を要するといひおいて、醫師はひとまづ歸つて行つた。その頃には、蘭子の體温は四十度近くに騰つた。酒見も、一旦は家政婦に看護を任せて寢室に引取つたものゝ――精二の負傷も、蘭子が連戻されたこともまだ知らない。夜中、裸足で、全身泥塗れになつて驅附けて來たことである。尋常一樣のことでないと思はれるだけに、

『さて、どうしたものかな……?』

秦造に通知すべきかどうかについて、非常に惑つてゐた。そこへ家政婦が、

『お孃さまのお氣がお着きになりまして、お眼にかゝりたいと仰有いますが……。』といつて來た。

『おゝ、さうか。それは……。』

酒見は、早速引返した。

蘭子の頰は、熱に上氣して眞赤になつてゐた。さうして呼吸も苦しげで、依然として惡寒に襲はれつゞけてゐるらしくはげしく震へてゐる——酒見は、傍に椅子を引寄せて、もう大丈夫だ、決して心配することはないと繰返し〳〵いふ。その顏を、蘭子は、異樣に潤んだ、きらきらする眼でじツと瞶めて、

『酒見さん、あなたは、蘭子がどんな境遇におかれても永久に愛すると仰有つた。あれはほんと?』といつた。

突然ではあり、蘭子の調子にどこか挑戰的なところがあるので、酒見はちよツと眼を瞠つた。が、すぐに頷いて、

『ほんたうですよ、蘭子さん!』

『では、あたくし、來ましたのよ。結婚して頂戴ね!』

『どうなすつたのです、蘭子さん? 僕、わかりませんね…………。』



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

『……あの方が死にます。たアれも助けてやるものがない……あたくし、逃げだして來ました。二階の窓から……蘭子の肉體はまだ綺麗です。處女です……。』

『蘭子さん〳〵、昂奮してはいけません。落着いて……！』

『落着いてゐられるとお思ひになつて——かうしてお願ひに來るほどなのに？』

『まア〳〵……！』酒見も弱つた。

實際、高い熱が分別を亂して、たゞ〳〵思詰めて來た一點よりほかのことはわからないのである。蘭子はいよいよ病的に昂奮して、

『……あたくし、あなたの愛は信じてゐますのよ。だから蘭子を買つて頂戴！　そしてあの方を助けて頂戴……！』

だが、それも長くはつづかなかつた。蘭子は、前後の取りとめもなく、とぎれ〳〵に顚末を語つてゐたが、それがだんだん譫言に化した。同時に衰弱も現はれて來て、たうとう再び昏睡の中に落ちて行つた——病的昂奮が加はつてゐるにしても、全部が熱に浮された妄想である筈がない。酒見も、事情の要點をはつきりと摑んだ。

一昨日、はじめて眞の蘭子を知つたのだつたが、その獻身、その努力、彼女だからこそこの悲壯な決心も出來たのだと思つた。いつのまにか酒見の眼にも淚が一杯に浮んで來た——やゝ暫く額に指をあてゝ考へてゐたが、やがて酒見は立上つた。そして部屋を出て行かうとして、ふとまた見返つた。



蘭子は、微かな呻聲を發して、魚のやうに苦しげに喘ぎつゞけてゐた。その頰には、まだなま〳〵しい淚の跡さへ殘されてある……。

けなげなものよ！　勇しい愛の鬪士よ！　じつと瞶めてゐた酒見は、靜かに身體を曲げて額に接吻した。熱のために燃えるやうに熱い——途端、蘭子も、ぽつかりと眼を瞠いた。その視覺はまるで空虛で、意識はなかつた。

涙を抑へて酒見は部屋を出て來て、家政婦に醫師と相談の上至急看護婦を寄越すからといひ置いて、手早く外出の仕度にかかつた。事情がわかつてみれば、泰造の方も今朝になつて大騒ぎをしてゐるに違ひない。その通知も急がねばならなかつた。

恩のために

病氣がだん〱悪化して、醫師はたうとう蘭子に急性肺炎だといふ診斷を下した。報知によつて驅附けて來た泰造は驚いて、早速自動車に乘せて、市内の有名な病院に入院させた。

四十度を越える熱が幾日もつゞいた。何度か危篤も傳へられて、母の兼子も顔色を變へて上京して來た。その間、蘭子は全く夢現、まるで記憶がない。たゞ譫言、それも精二の容態を案じる意味ばかりを繰返し〱いつてゐたが――幸運に恵まれたり、手當も充分に行屆いた。十四日目になつて危險を脫して、はじめて熱も分解した。



が、豫後の經過はあまりいゝ方ではなかつた。手も足も枯木のやうに痩細つて、起上る氣力もない。また十日ばかり經つて、見舞に來てくれた春枝と、看護婦とに、子供のやうに兩手をとられてやうやく病室をひとまはりしたほどで――まる〱二月、それでも櫻花が散つた後になつて、どうにか退院が許された。泰造も、郷里にはまだ精二と驅落した噂が消えないので、體面からいつても連れて歸ることは出來ない。かた〱醫師の勸告に從つて逗子に家を一軒借り、看護婦を附けて、氣長にゆつくり養生させることにした。これが一段落着くと、用事も溜つてゐる。兼子も一緒にひとまづ引上げて行つた。

この間に、精二はどうなつたらう？

蘭子は、離熱して意識が自分に返るとから非常に知りたいとは思つたが、病後の衰へた神經が考へるだけでも涙を催させる。訊いてみることも怖かつたし、また誰も心配させまいため

である。いつてくれるものもなかつた――逗子に移つた後には、酒見は殆んど顔を見せなくなつた。が、春枝は度々遊びにやつて來て、つい寂しいので引止めると、快く幾日でも滯在して歸つた。

最初、蘭子は、春枝は自分の家、つまり芝の養家から來てくれるもの丶やうに思つてゐたが、だん〱聞いてみるとさうではなかつた。今では酒見に引取られて、練馬のその家に寄寓させてもらつてゐるといふことで、

『ほんとに不思議な縁よ。いろ〱ご恩になつて、その上……恰度ね、蘭子さんが精一さんの怪我を知つてお出掛けになつた、あの翌日のことよ。あたし、折角だがお金もお入用になつたことだし、お妾にでもなんにでもなるつもりになつて、お預りしてゐたダイヤをお返しせうと思つて病院に行つたの。さうするとあなたがいらツしやらないので、酒見さんにお眼にかゝつて……。』

その手に托して返してもらふ意味で會つたのだつたが、根掘り葉掘り理由を訊かれたので、春枝は、たうとう持前の泣癖を出して、訴へるやうに語つたものである。酒見も、春枝にも同情はしたもの丶、それよりもつと、蘭子が、乏しい中から大切なダイヤまで與へて救つてやらうとしてゐたことに感激の度をます〱深めた。深夜、精一のために自分を棄て丶駈附けて來たことにはげしく打たれてゐた際ではあり――かた〱病氣の蘭子に代つてやるべきだと考へた。そこで早速生家に交渉して、養育料を出してやつと養家と手を切らせた。が、春枝は、詮方なくそのまゝおいてやつてゐるのだつた。

用命にも歸りたがらず、といつてほかに落着く家もない。

あゝ、そのダイヤ! ダイヤが一日早く返つて來ることがわかりさへすれば、蘭子も、たとひ父には連戻されても、最後に酒見の許に走るやうなことはせずに濟んだのだつたが……!

とはいへ、蘭子は、不運は嘆いても、後悔はしなかつた。ダイヤを取戻したのでは、精二は助かつても、春枝が妾になつてしまつたからである――この春枝の物語は、端なくもかねて熱望してゐた消息を傳へてくれるものとなつた。その後、愉々訊いてみたりして、酒見が詞を入れて充分治療してやつて、鍛上げられた頑強な體力のせゐもある、精二は醫師も驚いたほど奇蹟的に生命拾ひして、自分より一月も早く退院したことも知つた。

それから間もなくである。またやつて來た春枝が、

『蘭子さん、たうとう精一さんが東京から行つてしまつたのよ。あなたによろしくいつてくれツて……!』と、言傳を齎

之は自慢です

ひゞ凍傷が速く治ります

ひび凍傷が酷くヒドタなると肌が紫黒色に腫上り、どんな藥でも中々に治り難いものです。ところがこの専門藥を使ひますと、僅か一二回で痒みも去つて、二日も用ひますと餘程ヒドイのも忘れた様に治ります。その効實に不思議! 之は本社代理部自慢の凍傷專門藥です。　小廿錢(送料二錢)
大八十錢(送料十二錢)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

した。

「さう……どちらへ?」

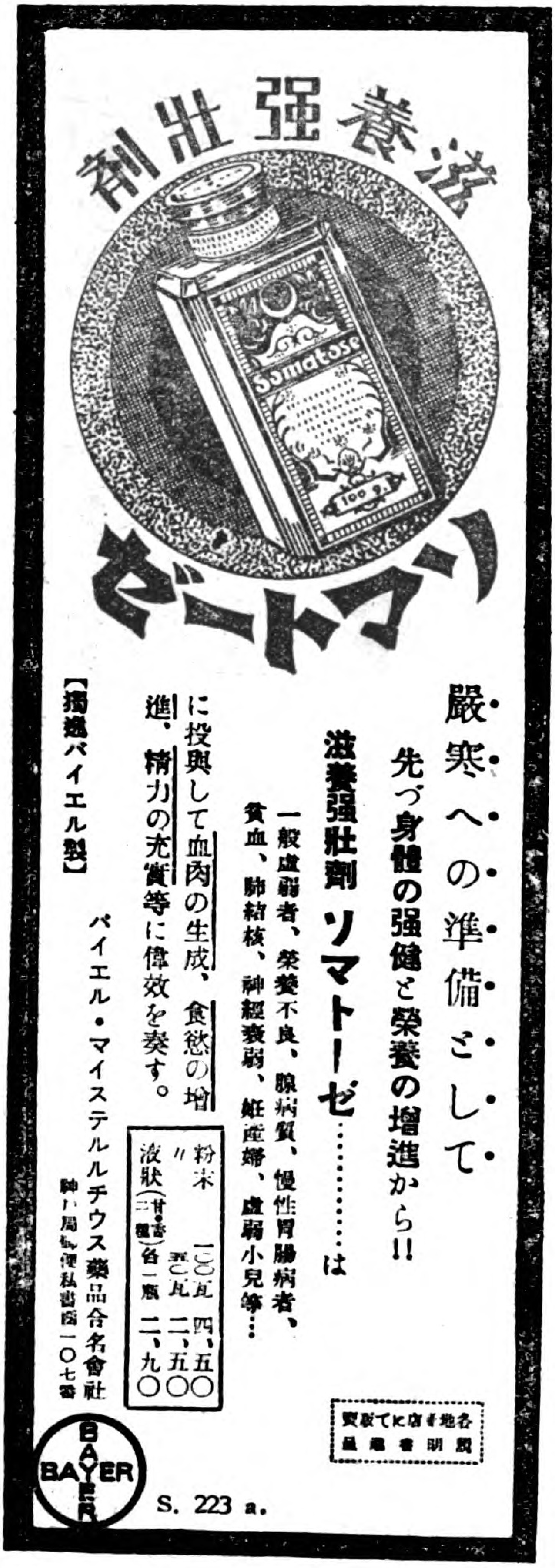
『酒見さんはご存じよ。訊いてあげませうか?』

『いゝえ、いゝの……!』

全快後になつて、精二は、はじめて自分が酒見、といふより寧ろ蘭子に救はれたことを知つた。酒見に返つて行つたことは彼女の幸福のために悅びもしたが——犧牲になつてくれたことを考へると、いひ樣のない感慨と、感謝とに打たれる。殊に、それ以來友達のやうに知己を感じて來た酒見の態度によつて、自分が介在してゐる限り蘭子と結婚の意志も持ち得られない立場も察した。病後ではげしい勞働も出來ず、恩のためには身も退かねばならない。地方に職を見付けると、物理學校に入學したいといふかねての志望も棄てゝ靜かに立去つて行つたのだつた。

蘭子は、會はうともせず、手紙も書かず、たゞ一言『よろしく。』とだけいつて去つて行つた精二の胸の中を、說明されるよりもつとはつきり感じた。が、酒見が詫を入れてくれた以上は、最早彼女は彼のものではない。彼のことを考へる資格はなくなつてゐる——蘭子は、自分のすべてを抛つて精二の生命を救つたことをせめてもの悅びとして、齒をくひしばつて沸返る悲しみを抑へた。かうして暫くその人達の上にも平靜な日がつゞくことになつた。

（つゞく）





◇あたる筈だよ

ミツクル『僕の友達で自分の死ぬ年月日から時間まで、一ケ月も前からチヤーンと知つてた男があるよ、不思議にもそれがピツタリ的中して、ねえ——』



ピツクル『不思議だなあ、成程。何うして知つたんだらう？』

ミツクル『裁判官に教はつたのさ。死刑の宣告を受けたものだから——』

◇凍らぬ液體

化學の先生『さて皆さん、凍らぬ液體をあげて御覧なさい』

生徒『はい、お湯です』

◇署長に言ひつけますよ

違法の速力で自動車を運轉してゐる婦人を、いやつと呼び止めた交通巡査、



『モシ、モシ。さつきから貴女を手招きしてゐるのが、おわかりになりませんか？』

婦人は憤然として曰く、『いやな人ですねッ。知りもしない女を呼び止めて馴れ〳〵しく聲をかけたりなんかして失禮なッ』

◇危険

士官『お前は射撃の時どつちの眼を閉ぢるかね』

兵卒『兩方!!』

◇常習犯

ミル『ちやどうしても私の要求を容れて下さらないんですねえ、貴女は！』



リナ『本當にお氣の毒ねえ！　でも仕方がないわ。どうせ、わたし貴方が嫌ひなんだから』

ミル『いや！　それならもういい。ぢや、序に、僕の上げた手紙の全部を返して頂きませう。あれにはまだ使はなくつちやならない名文句がうんとあるんだから』

◇モダーン邯鄲

月曜の朝五時半に眼がさめたので、『まだ早い』ともう一寢入、今度眼がさめて見るとまだ七時半だ。まだいゝと又トロ〳〵とすると今度は九時なので、慌てゝ會社へ出勤して支配人に、『何うも少し遲刻致しまして：：：』と言譯すると支配人、『今朝の遲刻はいゝが月曜と火曜の無斷缺勤は困るね』

◇白熱試合

先生・この間、この道場へ大變強い浪人が試合に參つたげにございますが、先生には如何なされました？と訊くと、先生長い白髯をしごきながら、いゝなに、迚も未熟な野郎で



無茶苦茶に竹刀を振り下すのを素早く引き外し、二度目に振り下すのを――と云ひかければ、弟子、氣を焦つて、それからどうなされました？　すると、先生、至極眞顔で、

『こゝぞとばかり、額で受け申しました』

◇如何に訓へて置いても駄目



警官『この不良少年は其方の子か』

少年の親爺『左様でござります』

『この少年は何度捕まつて來たかわからんが、其方がよく訓戒しないからかうなるのぢや』

『いゝえ、よく申聞かせて置きますが、馬鹿な奴で、ぢき、捕まつてしまふので』

◇ラヂオ煮



無線電信の發明者として有名なマルコニーが、旅行先である料理店へ這入ると献立に麗麗と『マルコニー煮』――ハテ面妖なと、給仕を呼んで訊ねれば、

給仕『旦那は無線電信のマルコニーを御存知ありませんか？　無線――つまり筋のない柔らかな料理がマルコニー煮なんで、ハイ』

◇轉んでも只は

競馬場で――

妻『今度私の馬が勝つたら、私着物を新調するわ』

夫『だが若し負けたら？』

妻『もちろん、貴郎にこしらへて頂くからいゝわよ』

◇ほざいたり

裁判官『で、盜んだ品を皆お前が一人で運び出したのぢやな？』

犯人『左様でムいます。實際この頃の人間は何奴も泥棒のやうな奴で、サッパリ信用出來ませんので、ハイ』

◇上に倣ふ



一人の志願兵士、どんなに射撃つても中らない。士官はその銃をとつて、叱言いひつゝ睨みつけて、

『お前はよく中りさうな射手ぢやないか？これはどうしたのだ？』

士官は狙つた。撃つた。外れた。

『そら。お前は此麼工合にやつてゐたのだらう。此麼事ぢや駄目だ』

士官は第二發目を狙つた。撃つた。外れた。『お前のやつてる通りだ。これは』

士官は第三發目を狙つた。撃つた。中つた。『こんな工合にやらんけりやいかん。』

◇第二天性



相場師『私の娘を愛してゐるつて』

青年『はい』

相場師『それで？』

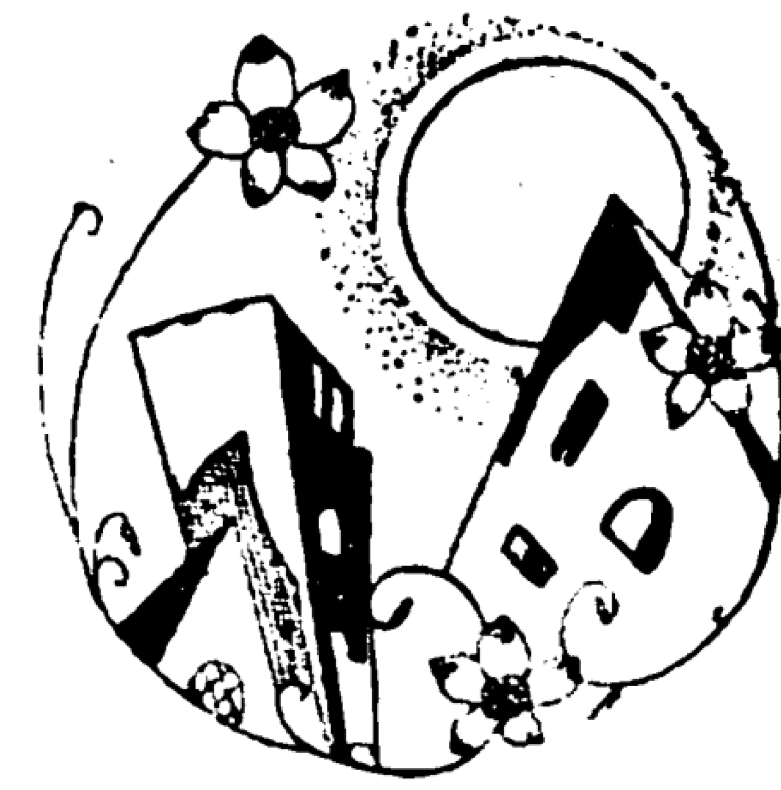
青年『結婚をゆるして戴きたいのです』

相場師『ふむ。あんたの財產はどのくらゐか？』

青年『少くとも五萬圓はあります』

相場師『賣つた！』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



見よ、この責任を守る人々

千代田女子專門學校長　泉　道　雄

△飛行機は何故おちるか

諸君は御承知であらうか。大正六年五月二十日のこと。日本飛行學校の教官玉井清太郎氏は、東京日日新聞社員湯川禮三氏を同乘せしめ、東京芝浦の高空三十米突に於て飛行中、突風の爲めに左翼を折られて、急に眞逆に墜落、二人とも無慚の最期を遂げたことを。

私は此の記事を讀んだ時、一種云ふべからざる悲痛の感に打たれた。飛行機の研究が我國に始まつて以來、陸海軍人や民間飛行家の慘死を遂げたものは、無慮、幾百十人の多きに達してゐる。これらの人々が、この新研究のために拂はれた尊き犧牲に對しては、私共は滿腔の敬意と感謝とを拂はずにはゐられない。

だが併し、この事件について我々が輕々に看過することの出來ない一事がある。他でもない、飛行機の墜落が、飛行家の技倆の未熟のためであるならばともかく、飛行機そのもゝ製作上に於て、許すべからざる缺陷があつたといふではないか。

當時新聞紙の報ずるところによると、左翼の重要部に、メーン・ウワイヤーを二度かけておかねばならぬ所を、一度だけで手拔がしてあつたといふことだ。果してそれが事實であつたとすれば、飛行機墜落の原因は、これを職工の道義的觀念に歸せねばならない。

私共は嘗て飛行家ナイルス氏が、『飛行機の安全は、國民の道義心に待つことが最も多い』と云つた言葉を、今更の樣に思ひ起さざるを得ぬのである。たとひ巧妙なる飛行家と優秀なる技師とがあつたとしても、その下に働く職工の道念が腐敗してゐたならば、決して飛行の安全を保證することは出來ないからだ。

それは何も飛行機のみの問題ではない、すべての事業に於て起る問題である。見られよ、近年頻々として起る不祥な事件。曰く汽車の轉覆、曰く自動車の轢殺、曰く電車の衝突、曰く火藥庫の爆發、曰く銀行の破綻……等々々。一として道念頽敗の結果ならざるものはない。所謂天災は止むを得ずとするも、不注意、怠慢、不謹愼より生ずる災害に至つては、到底當事者

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

の責任を避れ得ないものと斷ずる。

△我れラスキンに恥づ

この弊風を矯正せんが爲めに、一時『安全第一』といふ言葉が盛に唱道された。この語は嘗て米國で熱心に唱へられたものであるが、我國の現狀からいつても、大に奬勵すべき、時勢に適した好個の箴言であると思ふ。

『安全第一』とは何を意味するか。平たくいへば『念には念を入れよ』といふことだ。更に他の言葉でいへば『職務に忠實なれ』といふことだ。職務に忠實であることは、責任感を持つことである。ラスキンは、其著『ヴェニスの石』に於て、かう言つてゐる。

『古代の建築の長所は犧牲の精神の旺盛なる點にある。雇主は金錢を惜まず、職工は勞力を惜まない。かくして古代の宏壯にして堅牢なる建築が出來たのだ。然るに近代建築に於ては、一は金錢を惜み、一は勞力を惜む。今日外觀ばかり美しくて、實質の弱い建物の多いは、この結果に外ならぬ』建築ばかりか、すべての方面が皆さうである。我ラスキンに恥ぢざるを得ない。



稻取村長田村又吉氏

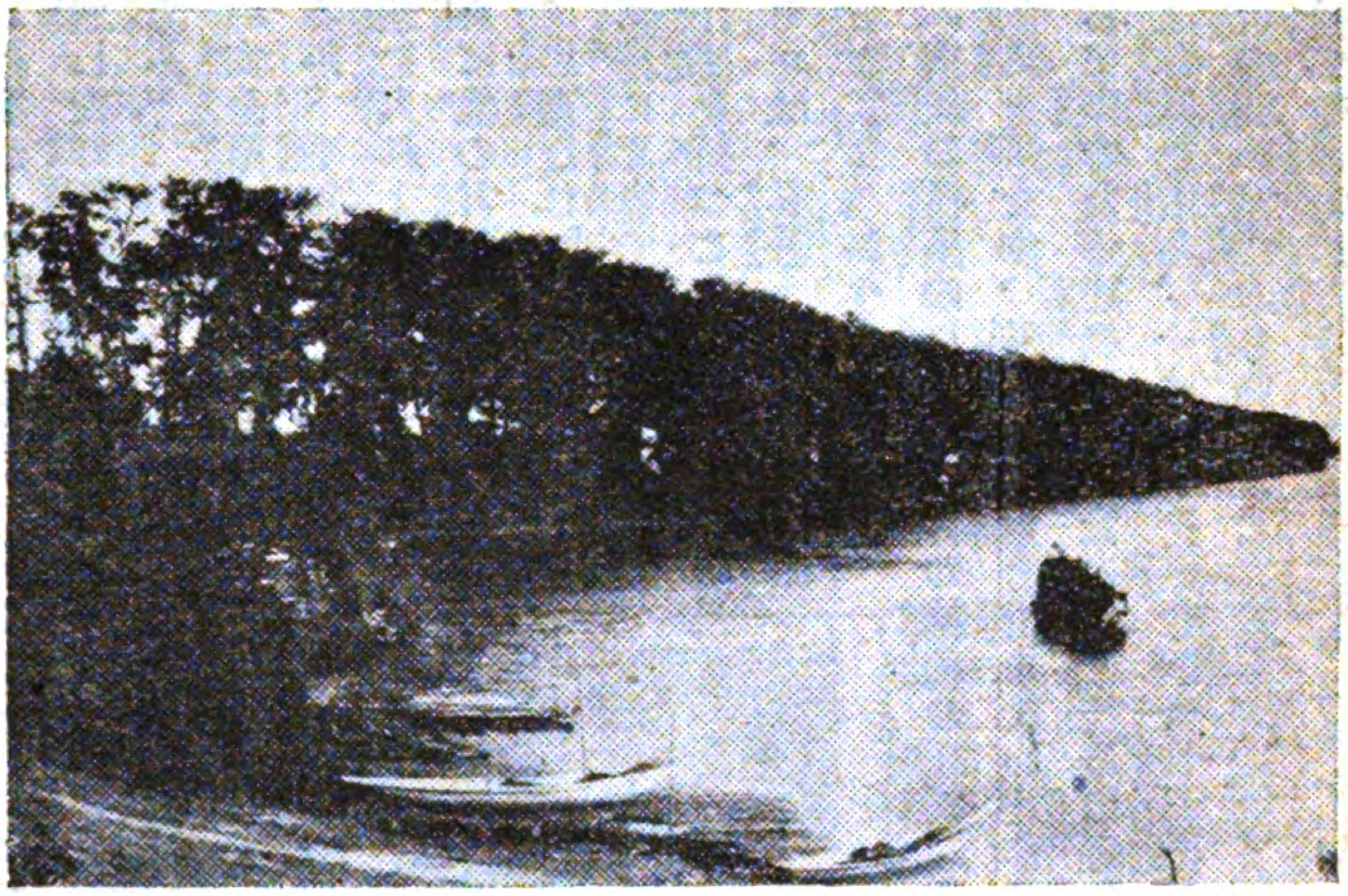
△心で植ゑた松並木

もう二十年にもなる。私は伊豆の稻取村に村長田村又吉氏を訪れたことがある。そこは伊東溫泉の南八里、漁村と農村とより成る一部落。有名な寒村で、嘗て靜岡縣下の三難の一つに數へられた村である。然るに氏が村長となつて以來、二十餘年の久しきにわたる苦心經營の結果、つひに全國の模範村として、內務省からイの一番に表彰さるゝに至つたといふ。

私は伊東溫泉に湯治の序を以て、陸路天城山麓を越えてこの村を訪ね、田村氏から半日、愉快な懷舊談を聽いた。

或年であつた、氏は海岸に松林を作ることを計畫し、戸毎に松苗を持つて來て植ゑつけるやうに村民に命じた。村民は命の如く、海岸一帶に松苗を植ゑつけた。然るに、どういふ譯か、植ゑても植ゑても松は枯れて行つた。氏は考へたのである——

『お前達は手で植ゑるから駄目だ。心で植ゑなくてはならぬ』と諭した。さうして一本々々の松に銘々の名札を立てさせて、松の成長を各自の責任に歸せしめた。同時に氏は每日のやうに松林を見まはつて、枯れかゝつた松があると、一々本人に注意して、新らしい松に植ゑ替へさせた。かうなると村民も時



薩摩義士が築いた油島締切堤（別名千本松）

時松林に來て見ては、自分の松が枯れない樣にと注意せずには居られなかつた。

かくて幾年かの後、海岸一帶は白砂青松の美觀を呈するに至つた。私は現にその松原を歩いて、『心で植ゑた』緣の濃さを、根の强さを、勢のよさを、しみじみと觀賞することが出來た。『責任』の成果の根强さと見事さとを禮讃せずには居れなかつた。

△薩摩義士傳の一頁

寶暦二年十二月下旬。

薩摩の藩主島津重年に對し、徳川九代將軍家重の名によつて、木曾、長良、揖斐三川の治水工事を命ずるといふ、實に敷から棒の、厄介至極な御沙汰書が屆いた。さらでだに連年の財政難に苦しんでゐた薩摩の君臣は、全く寢耳に水のこの台命に對して、呆然自失、殆んど云ふところを知らなかつた。

元來この三川の護岸工事は、美濃、尾張、伊勢の三國に跨り、沿岸實に二十八里に及ぶ大規模の難工事で、徳川幕府でも久しく持てあまして、殆んど手のつけやうがなかつたのである。それを緣も由緒もない外樣の薩摩藩――しかも何百里を隔てた九州のはての鹿兒島に之を命じたといふことには、深い意味があつたに違ひない。否、それは幕府の常套手段で、若し否と云へば藩を沒し國を滅ぼす姦手段に出ないとも限らない。薩摩の城内では、硬軟二說に分れて大評定を開いたが、結局引き受けるより外に道はなかつた。

國家老の平田靱負は重臣の身を以て、自ら進んでこの難工事一切の監督を承はる事を申し出た。而て藩の土木學者伊集院十藏を總參謀として、士分以下九百餘人の同勢を率ゐ、寶暦三年正月二十九日、住みなれた鹿兒島城下を後にして、茫漠たる濃尾平野の原頭に立つた。

幕府の指令書によると、工事の見積は三十萬兩といふのであつた。今の金にすれば約三百萬圓にも當るであらうが、靱負が現場視察の結果は、とてもそんな事で出來ようとは思はれなかつた。彼はこの第一印象からして、既に自己の責任の重大性を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

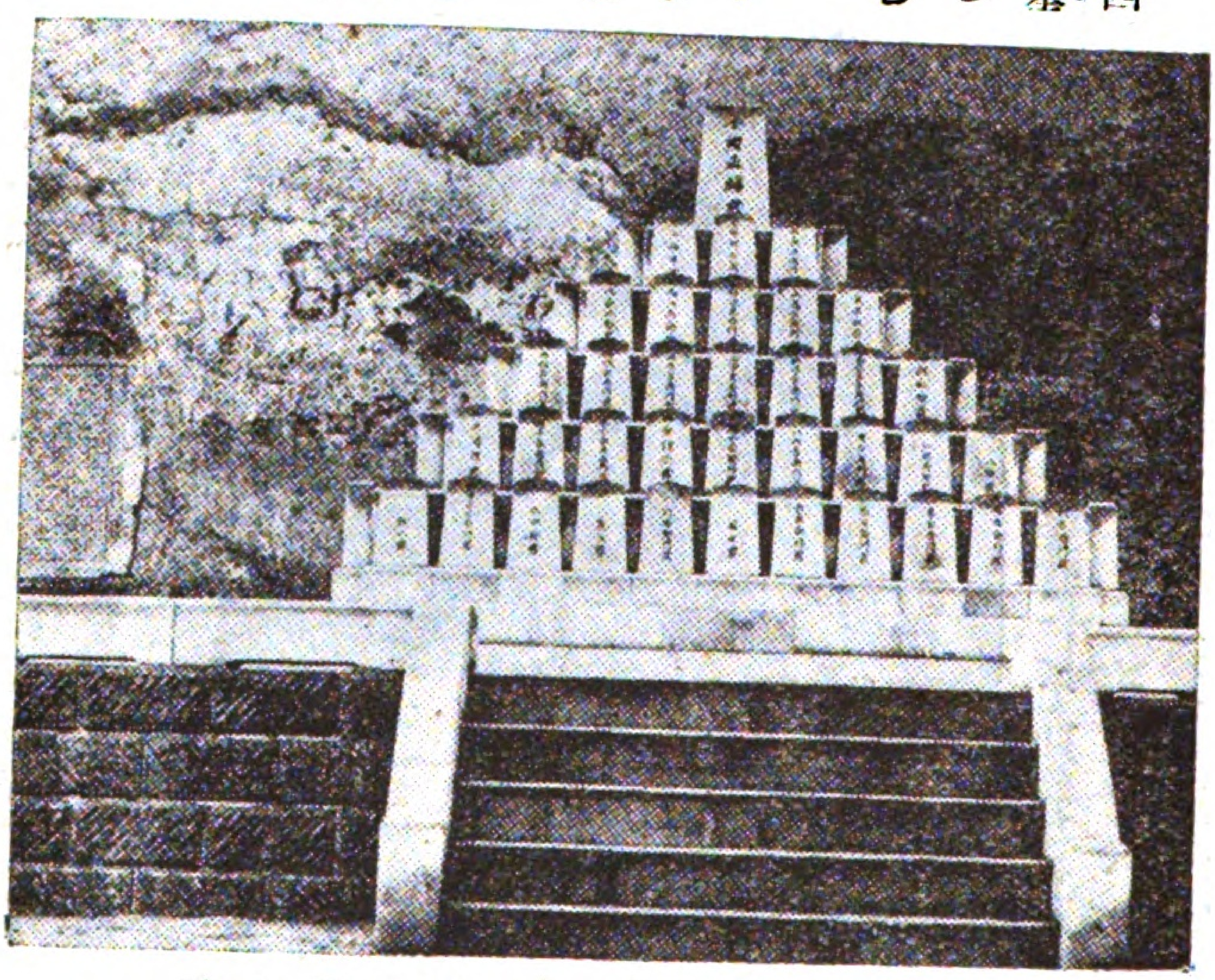
痛感せざるを得なかつた。

　工事に關する一切の準備が整つて、いよ／＼仕事に着手したのが、同年十二月廿七日であつた。平田始め伊集院以下藩士一同が懸命の努力は、着々工事の進捗を見せて、輝かしい春が迎へられたが、その三月（寶暦四年）、僅か五六日間の霖雨は、折角築き上げた基礎工事を、半ば以上、濁流に押し流してしまつた。薩摩隼人の苦心は文字通り水泡に歸してしまつたのである。

　平田、伊集院等の落膽はいた／＼しいばかりであつた。彼等は死は易かつた。併し今は死すべき時ではない、失望すべき時ではない。たとひ豫算が超過しようと、時日が延引しようと、薩摩隼人の面目にかけても此の工事を完成せしめねば、藩主に對し、祖先に對して申譯がない――二人は日頃の平靜に立ち歸つて、勇猛精進、新に更生の道を辿つたのである。

△油島の悲劇

　かくて同年九月から更に工事に着手して、翌五年の三月には美事に完成を告げた。幕府の檢分役が全部の檢分を終るのに、三十七日間かゝつたのを見ても、如何に、その範圍が廣大であつたかを察することが出來る。



鹿兒島市城山下の薩摩義士碑

『どこからどこまでも、何一つ申分ない見事な出來榮え、御苦勞の儀、お祭し申す』

と檢分役の眼には僞りならぬ涙があつた。

『過分の御言葉、靱負、一同に代つて御禮を申し上げまする』

から挨拶した平田の聲は曇つてゐた。

　過去三年の間、禁酒節慾、一身をなげうつて此の難工事にあたつた平田や伊集院の悲壯なる心事に想到して、列座の薩摩武士は誰れ一人、頭をあぐる者もなかつた。

　越えて三日、平田、伊集院の兩人は、この工事の最難所といはれた油島の突堤上に荒蓆をしいて、遙かに西南鹿兒島の空を伏し拜んで、藩主に謝罪した。

『私共兩人、君命を畏みて當地に參りましてから七百餘日、殿樣の御威光と、部下一同の必死の努力とによつて、三川治水工

事は茲に首尾よく完成するに至りました。これによつて、殿樣の御面目を完うすることが出來ましたのは、靫負、十藏一代の譽として、恐悦至極に存じまする。さりながら、豫算以上の大金を費して殿樣に御迷惑をおかけ申した一儀、何とも申譯ござりませぬ。その責を負うて私共兩人、今日只今、この處に於て割腹してお詫び申上げまする。何卒部下一同の上に特別の御慈悲を下し賜はるやう懇願いたします……』

薩摩隼人の名に負ふ勇士の兩眼から、熱い〳〵淚がポタ〳〵と荒蓆の上に落ちた。

かくて二人は見事に割腹して相果てたのであつた。時に寶曆五年五月二十五日。之を聞いた七十五人の薩摩武士は、同じく自分の持場々々に赴いて、一齊に腹かききつて平田に殉じたのである。

噫！　何たる悲壯な最期であつたらう！　世には自己の責任を逃避せんが爲めに自殺するものがある。これは匹夫の死である。薩摩隼人の死は決してそんな卑怯の死ではない。責任完成の上の死である、戰場に屍をさらす名譽の戰死にも勝る死である。眞の武士道の死だ。


平賀昌一氏

宜なるかな、二百年に垂んとする今日まで、幾百回の洪水に出逢うても、薩摩隼人の築き上げたる堤防は、一石の搖ぎだになく、數十里の長堤逶迤として、翠松千古の水に映じ、薩摩健兒の精魂氣魄を無言の裡に物語つてゐる。

彼等は二百年の古に於て、『安全第一』の理想的實現者であつたのだ。崇高なる責任感の殉教的行者であつたのだ。

△炎々たる猛火の中に

大正十二年の大震災は、何といつても我國未曾有の大厄難であつた。古人が『時窮して節すなはち見はる』といつたやうに、さうした非常時に際しては、さすがに我が國民性の麗はしさを發揮した幾多の美談が殘されてゐる。その中でも私の最も感動に堪へないのは、住友銀行員の沈着にして壯烈なる行爲であつた。

頻々たる餘震のうちに、火災は各方面に起つた。日本橋の住友銀行では、庶務課長平賀昌一氏が行員を指揮して、各階の窓のシヤツターを閉ぢることに必死の努力をした。何しろ鐵骨五層樓の建物で、全階を通じてシヤツターの數は、幾百といふ程であつた。これを一々閉めることは、かなりの時間を要した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

かてゝ加へて、大地震の爲めにシヤツターの具合が悪くなつてゐて、完全に閉められないものも少くなかつた。

平賀氏は行員を督勵して、鐵槌やら釘拔やら、色々の小道具を用意して、具合の悪いところを一々丁寧に直し、完全に窓を閉め終はつた時は、夜も九時を過ぎてゐた。此時までは他の行員も各々その持場々々を整理してゐたが、いよ／＼防火準備が出來たので、一同は自由に歸宅することを許された。その時平賀氏は、

『諸君は自由な行動を取つて下さい、併し私は責任上、この銀行に踏み止まつて籠城する積りです……』

と云つて、悲壯な別れを告げた。二人の小使と二人の守衞とが氏と運命を共にせんことを申し出たので、都合五人が居殘ることになつた。

時に火は各方面に擴がつて、容易ならぬ形勢を示してゐた。さきに歸宅を許された行員達も、猛火の中をくゞりくゞつて、辛うじて東京驛附近に免れることが出來た。

籠城した五人は暗黒の部屋の中に、死を決して運命の來るのを待つてゐた。外部には時々家の崩づるゝ音や、火を吹く旋風の唸りが、海の遠鳴りの如く初秋の嵐の如く聞えた。五人は將に落ちんとする孤城を死守しつゝ不安の一夜を送つた。隣接の白木屋も全燒した、三越も火がはいつた。たゞひとり、不思議な住友銀行のみは不動明王の如く猛火の渦卷の中に巍然として聳え立ちつゝその整容を崩さなかつた。

夜があけた。日本一の繁華街は一面の燒野が原となつた。五人の生死を氣遣つて翌朝早速に驅けつけた行員は、わが住友銀行が只一つ燒け殘されてゐるのを見て、夢かとばかり怪んだ。店の前に行つて扉をノツクすると、中からも又ノツクが聞えた。

『やー生きてゐる……』行員は狂氣の如く叫んだ。やがて五人は内より扉を明けて出て來た。五人とも皆無事だつた。感激の涙がとめどなく一同の目から流れた。

平賀氏は平素から非常な責任感の強い、眞面目な人であつた。自ら行員を指揮して、澤山の窓のシヤツターを一々點檢して、完全に之を閉め終つたことは、氏の美しい性格の現はれと云つてよい。頻々と起る地震と、刻々に迫る火の波とを前にして、落ちついて一々の窓を檢分するなど、氏の如き責任感の強烈な人でなくては到底出來ないことである。まして自ら死を決して銀行と運命を共にせんとするが如きは、日本古武士の面影を髣髴たらしめる。あゝ偉大なる責任感の權化！

＊　＊　＊

諸君！　私は今われ／＼の同胞の間に於て、而かも現在の社會に於て、かうした美しい模範的紳士のあることを心から愉快に感ずるものである。而してこれはわれ／＼同胞の中に祖先の麗はしい血液の流れてゐる生きた證據であると思ふ、私は將來第二第三の平賀昌一氏が現はれて、各方面の危機を救つて呉れる可能性を信ずると共に、諸君がその一人とならんことを切望して止まないものである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

地久節

千葉胤明

かげたかき秋のみやまのまつかぜに
ことほぎかはすひなづるの聲

臼田亞浪

月にほやかな地久節の夜の霞
御雛に常世の齢ひほぎあげむ
地の光り草の芽の潤ひにつゝ

佐佐木雪子

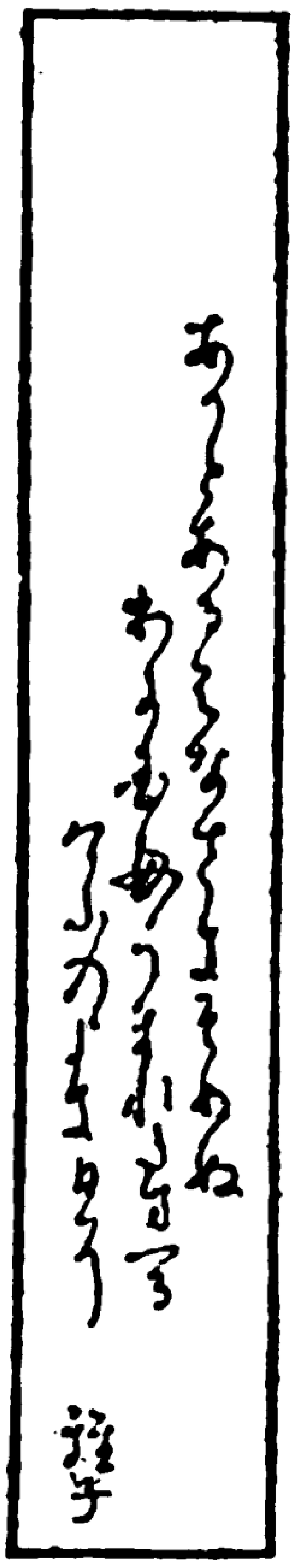
かしこけどわれらをみなのかがみとし
仰ぎまつらふみきさきの宮

あれましし今日の吉き日をわれらをみな
ひとつ心にことほぎまつる
大地と久しくいませ御民らをいつくし
みませみきさきの宮

高島平三郎

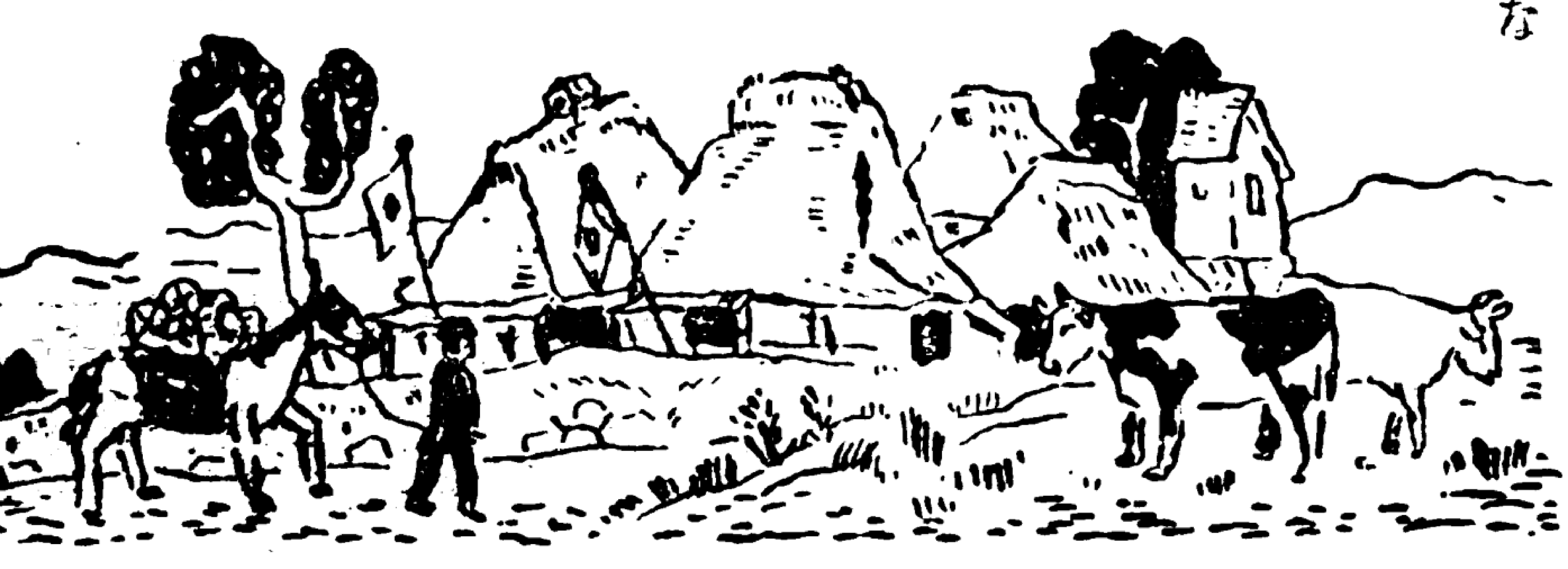
この年も吾れまさきくて國つ母の
あれましゝ日に逢ふが嬉しさ
道に逢ふ乙女の群は笑みてゆく
きさいの宮のあれましゝけふ

茅野雅子書



加納野梅

除幕式ある校庭や地久節
鞠と遊ぶ子等に池晴れ地久節

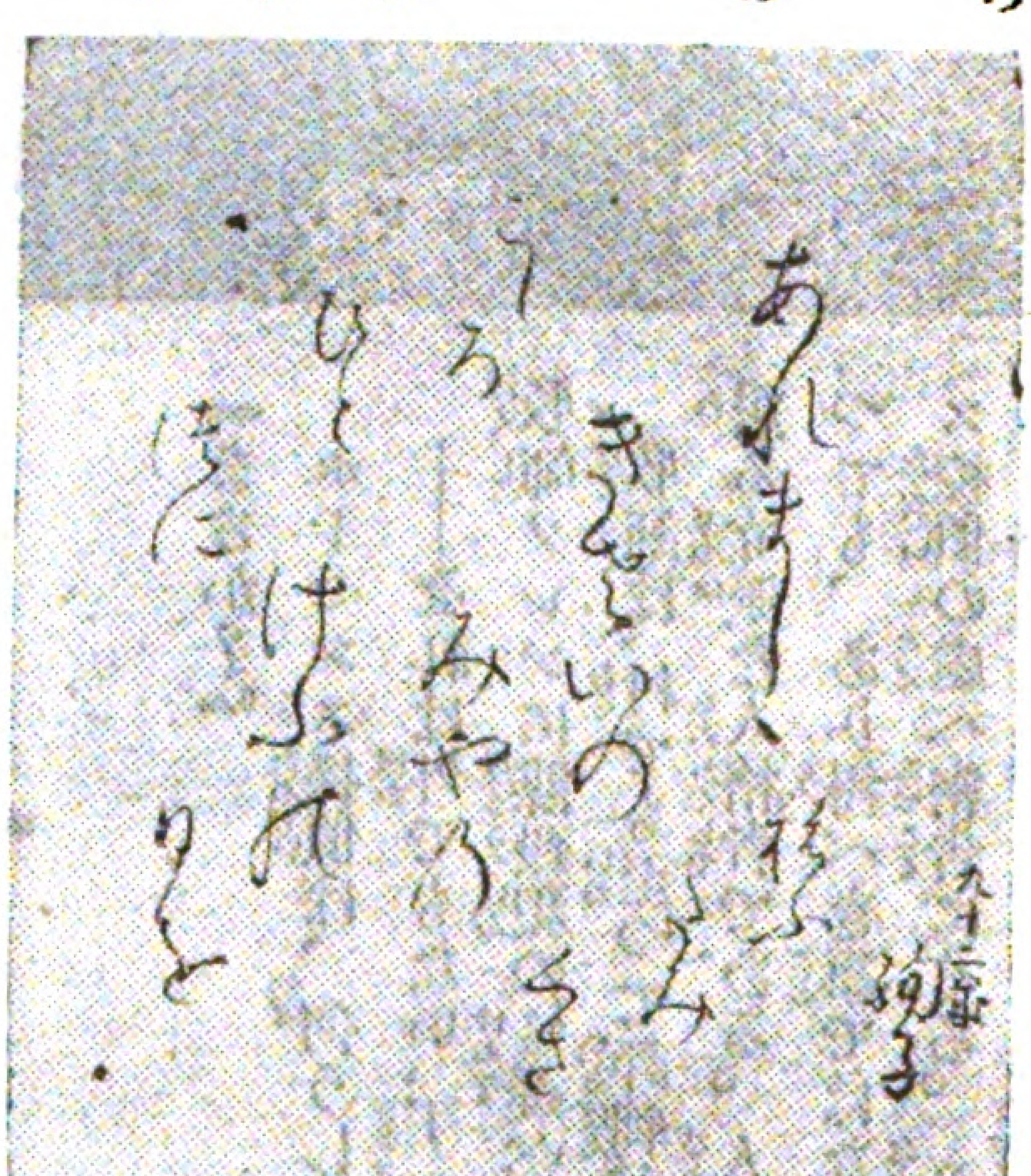


日と月と雲井にならびいますとし思ふ時しも民安らなり

大君の千代田の宮の奥ふかくいまして民の心知りたまふみぎひだり姫みこいまし秋の宮の玉のよそほひたぐふものぞなき

四賀光子

小鳥が鳴いてゐる
門口に立てられた國旗は
ゆるやかに風に吹かれてゐる
けふは地久節だ



棚橋絢子書

吉井勇

ひんがしの日女の日とこそ名づけまし后の宮の生れまし丶日を

ほがらかに鷄鳴きて夜は明けぬ地久のまつり今日はしもある

吾妹子もいとほがらかに化粧して地久のまつり祝はむとゆく

戸をあけたま丶
平氣でるすにしてゐる
野中の一軒家
庭には桃が咲き

相馬御風

長谷川かな女

地久節の歌花桃の朗らかに

御眉を雛に見まし地久節

御人の美しさ誇れ地久節



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



探偵實話

夢遊病者の殺人

前大審院長
法學博士　横田秀雄
小寺健吉　畫

一

『まさか？』

ホーセンス探偵は、何うしても信ずることが出來なかつた。

――それは外でもない、丁抹ユトランド半島の、ウエルビーの部落に住んで居る牧師ソレンに謀殺犯の嫌疑がかゝつて居たのである。

牧師は、村でも至つて評判がいゝ、百姓をし乍ら、日曜は教會で、神の道を說いて居る立派な人格者である。人もあらうに、その牧師が人を殺すなどとは、どう間違つても、あり得べき事ではない。だが、被害者の兄モルテンは、しきりにホーセンス探偵の處へ密告にくる。弟のニエルスを殺したのは、牧師に違ひないと云ひ張つて居る。

（ニエルスが、牧師に賴まれて、農場の手傳にやとはれたのは、事實だ、このニエルスが、少々頭が足らぬので、思ふやうに働かない、終始怠けて居るので、牧師も業を煮やして、叱言をいつた、ところがニエルスが負けては居らず、牧師にくつてかゝつた、何か二人の間に爭が始つた、……それ丈のことは、認められる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

が、牧師が相手を殺すと云ふ、そんな馬鹿な眞似をする筈がない、只、ニエルスがそれ以來行方不明になつたといふのは、不思議である」

彼は、大きな疑問にぶつかつて、そこで行きづまつて了つた。とはいへ、何うしても牧師に向つて、嫌疑をかける氣にはなれなかつたのである。

グレネエ警察署の一室で、そんなことを考へてゐる矢先、彼を尋ねて來たのは被害者の兄モルテンである。

『へえ、旦那、先達ては、證據がなくては牧師を縛るわけにはいかないと、此う仰在いましたね』

笑ひ乍ら入つて來た。

『さうだ、何か證據があがつたのか』

『へえ、今日は證人を二人つれて來ました、ぜひ、御調べ願ひたいと思ひます、何しろ、私の家といふのは、旦那も御承知のやうに、弟を稼がせなくても、十分生活はたつてゆきます、だが、相手は隣村の牧師ソレン樣、御世話を願つたら、弟の爲にもならうかと存じまして、それでまア、百姓の手傳に出した處、いつかな家へもどつて來ない、可怪しいと思つて、ソレン樣にきくつてと、何處へか逃げうせたと云ふ御話、……段々手をまはすと、此間申上げたやうに、ソレン樣に鍬で毆り殺されたので厶います、現在、それを見てゐたものが居たんですから、惡いことは出來ません』

『見てゐた？』

探偵も　これには驚いた。

『よし、つれて來い』と、モルテンが引ぱつて來た證人の訊問にかゝつた。

その一人は、寡婦のカーステンだ。

『丁度ニエルスさんの居なくなつた日の正午で厶います、わたしは娘と二人で、牧師さんの屋敷の傍を通りかゝると、垣根の中から娘をよぶ聲がしました、誰かと思ふとニエルスさんで、お前の持つて居る果物を一つくれないかと仰在いました、聞きますと、牧師さんに賴まれて、畑をうつてゐるが、こんな仕事は詰らない、腹がへつて堪らぬから一つくれないかと云ふ御話、御氣の毒に思つて娘がもつてゐた果物を差上げました、すると、扉のあく音がして、牧師さんが庭へ出て來ました、わたしは、垣根の前で容子を見てゐると、二人で口爭ひが起りました、牧師さんが、何を怠けて居るのかといふと、ニエルスさんが、腹がすいたからだと答へる、それから大聲で怒鳴つて居りましたが、馬鹿な奴、擲り殺すぞと、牧師さんが仰在ると、烈しく叩く音がしました、ひよいと見ると、垣根の上へ、鍬の先が出て、ぴかと光りました、こんもりと茂つて居るので、その鍬は誰がふりあげたのか、ハッキリ見分がつきませんでしたが……』

『ふうむ』

聞いてゐた探偵は、小首をかしげた。

もう一人の證人といふのは、百姓のラルセンだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『わッしは、その晩、隣村迄いりやして、遅くなつて、戻つて來やしたが、牧師さんの家の前迄くると、夜中にザクザクと土を掘る音が聞えるだで、ハテ妙だわいと、履をぬいで、高い垣根によぢのぼつて、茂みをかきわけて見るてと、丁度月夜のことでがすから、晝のやうに明るい、すると、靑い衣をつけ、白い帽子をかぶつた牧師さんが、一旦掘返した處へ土をうめて、から鍬の先で、かき均して居ましたゞア、……何だか、秘密がありさうなで、ゾーッと怖氣だつて、後をも見ずに、家さ歸つて來やしたが、翌くる朝聞くと、ニエルスさんが姿をかくしたッてことで……、へえ、これ丈でごぜえます』

恐る〳〵陳述した。

二人の證人の直話をきくと、何うしても牧師ソレンの行動が怪しくなる。ホーセンス探偵は、これを何う解釋していゝか、ひとりでは判斷に苦しんで、署長に相談することにした。

『そりやア、無論、ソレンが殺して、死骸をその場にうづめ、行方不明といふことにして、犯跡を晦ましたんぢや、……すぐに現場を洗つて見なさい』

署長は、言下に斯う命令した。

『しかし、あの物やさしい牧師が、そんなことをするとは思はれません』

『そりやさうかも知れない、だが人は見かけによらぬものぢや、さういふ證人があれば、もう動かすわけには行くまい』

と、膝をのりだしてくる……。

二

『よろしうムいますとも……、私の屋敷内をお調べ下さるといふことなら、どうぞ十分御調べ願ひます、お上に御迷惑をかけて、何とも恐入ります、私が御案内をいたします』

牧師ソレンは、ホーセンス探偵をはじめ、現場調査に向つた警察官の一行に對して、何のこだはりもなく丁寧に挨拶した。

その態度なり、口吻なり、一點の取りみだした處もない。もし、彼が牧師の假面をかぶつて、内實には、さういふ惡事を働いて居たものだとすれば、此の瞬間、何等か恐怖の表情が現はれねばならない、探偵は注意ぶかく彼の顔を見つめてゐたのだが、いつものやうに、穏かな物しづかな應接ぶりである。

(やつぱり俺の見た眼にくるひはない)

探偵は、いさゝか得意だつた。

さて、牧師の案内につれて、庭内を殘るくまなく捜査した。

百姓ラルセンの申立によると、牧師が穴を掘つて、これを又埋めたとあるので、その邊の地面をしらべると、土を掘返したらしい場所が堆くなつて居る。

『こゝだ』

警察官の一行は、此處を發掘することになつたが、それでも牧師ソレンは泰然として居た。

さくりさくり。鍬を入れると、柔かい土が造作なく掘返されて、二三尺下まで掘下げて行つた時、警官の一人が思はず聲をあ



げた。

『あッ！』

探偵がのぞくと、泥まみれの帽子の頭が見える。

『やア』

不審さうに、氣を配つて、掘下げると、人間の手が出た。

『死骸だッ』

腐爛した男の死體が、土中から發見された。しかしだ、その一刹那でさへも、牧師は顔の色をかへなかつた。

『これは、これは……、何うしたことでムりませうな』

死體は何者とも分らなかつたが、被つて居る帽子と衣類とは、姿をかくしたニヱルスのものだ。殊にそのシヤツには、ニヱルスの名がちやんと記してあるのだ。

『牧師さん、あなたは、ニヱルスは逃亡したと仰在いましたな』

ホーセンス探偵は、詰問するやうにいつた。

『さうですとも、……ニヱルスは、逃出したのでムいます』

『そのニヱルスが、この通り御宅の庭にうづめてあるのは、何うしたことですか』

『さア、……私にも一向分りませんが……』と、取りすまして居る。

此うなつては、牧師ソレンが何といひわけをしようとも、事實が許さない。ソレンはつひにニヱルス殺しの犯人として檢擧されることになつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

彼は、グレオエの獄につながれて、間もなく法廷に引出された。前にあげた二人の證人の外に、牧師とニエルスが口爭ひをして居たのを目撃したものが現はれた。彼是、うごきのとれぬ證言があつたが、當の牧師は犯罪を否定した。

『ニエルスを殺した覺えはありませぬ』

頑強にさう云つて居る。

此の事件の捜査に從つたホーセンス探偵も、さう云はれると、どうやら、そんな氣がしてならない。自分は始めから、牧師に疑ひをかけて居らぬのだが、どうもをかしい、何か、牧師の爲めに反證をあげてやりたいと、彼は八方に手をまはしたのである。

さう此うして居る中に、何事ぞ、ソレン牧師は、裁判官の前で自白してしまつた。

『實は、ニエルス殺しは、私でムります』

今迄、何回きびしく訊問しても、眞實を吐かなかつたソレンが、突然、罪狀を自白したので、裁判官も喜んだ。流石に牧師である、懺悔の爲めに、一切をぶちまけて、神の裁きをうけようとするつもりであらうと思つた。

で、改めて問うた。

『お前は今迄、かくし立てをして居つたのは、何ういふつもりか』

『いえ、今日の今日迄は、私は斷じてニエルスを殺害したとは考へなかつたが、よくよく考へると、私であらうといふ確信がつきました』

妙なことを云ひ出した。



『私には、生れつき惡い癖がある、それは何かした拍子に、氣が苛だつと、ツイ粗暴な振舞がムいます、これではならぬ、神さまに御仕へする身が、こんなことではならぬと、何度か御祈をしたのですが、……ニエルスが怠けて居るのを見た時は、わけもなく腹がたつて、日頃のたしなみを忘れて了ひました、おのれやれと思ふと、ニエルスの持つてゐた鍬を奪ひとりました、此奴、毆り殺すぞと、穩かならぬ暴言を吐いて、鍬をふりあげました、二度ばかりこれで毆りつけると、ニエルスはころりと倒れました、その一刹那、しまつたと氣づいて、後悔をいたしましたが、もう遲い、

……あゝといつて、鍬を抛げすてると、不思議や、ニヱルスは、がばと刎起きさま、脱兎のやうに其の場を逃出しました、やれ、命に別狀はなかつたのかと、私は吻として、そこに跪いて、神さまに御許を願ひました、…で、私は、ニヱルスの事が氣にかゝつてはゐたが、あの勢では、死ぬやうなことはないと安心をいたして居りました、すると、何うでムりませうか、私の屋敷中から死骸となつて現はれたのでムいます、これは全く私の記憶にないことでムいます、何と皆さまから責められても、身に覺えのないことで、今迄否認いたしましたが、今日は、潔く是認いたします、私が殺したに相違ムりませぬ』

意外な陳述である。

三

『それは又何うしてか』

裁判官にとつては、ソレンががらりと口供をかへたのが、疑問となつた。

『何もかも申上げますが、ニヱルスが逃げた處迄は、私も記憶にある、處が、夜になつて白い帽子をかぶり、青い衣をつけた私が、穴を掘つて、ニヱルスの死體をうづめたのを見たものが居る、そして其の死體が土中にうづまつて居る、さうとすると、やはり私が毆り殺したものであらうと存じます、どうもさう信ずるより外はムりませぬ』



『待て、お前の申立は、いかにも他人のことのやうだが、さう思ふとか、さう信ずるとか云ふのは可怪しい、又記憶があるとかないとか云ふのも怪しい、その邊の陳述がハツキリ出來ないのか』

『はい、……實は、私は夢遊病者でムいます、今迄も何度さういふことがありまして、つい此の間も、近村の教會へ參りまして、ハンケチを忘れて歸りました、翌朝眼がさめると、ハンケチはちやんと枕元にある、それでいつもの病氣が出て、夜中に教會へ行つて、ハンケチを取つて來たなと氣がついたやうな次第、證人の申立を伺ひまして、いろ〳〵思ひ合はすと、私の犯罪は、夢遊病の結果のやうでムいます、といふのは、私は平生夜寢る時は、衣を椅子にかけておくのですが、あくる日の明方は、床の下にたらしなく取りちらしてムいました、きつとニヱ



ルスは一旦蘇返つて、向う手の林の中へかけ出したが、そこで倒れたものでムいます、夜になつて、私は現場から死體をはこんで、穴を掘つて埋めて了つたものと思ひます、此間の出來事は、夢遊病者がふら〳〵となつてやつた仕事なので、私の記憶には殘つて居らぬのでムいます、目撃したものがあると云ふ確かな事實と、翌朝の私の寢室に於ける取亂した光景とを思ひ合はせて、私が罪人であると、かく自認するより外はありませぬ』

首うな垂れて、一切を懺悔した。

牧師が、夢遊病者であるといふ事は、此時始めて判つたが、果してさうとすれば、此の申立は正當と認めた。

ニエルス殺しは、牧師ソレンと決つて、死刑の宣告が下つた。

『して見ると、あんな物のわかつた牧師でも、人殺しをしたのかな』

探偵ホーセンスは、變な氣になつたが、それでも、まだ謎が殘つて居るやうに思はれてならなかつた。しかし、すべての事實が明瞭となつて、本人が罪狀を自白して、いさぎよく刑に服したので、結末はついた譯であつた。

此の探偵物語も これで完了すれば、何の奇も

ない。

讀者諸君、話はこれからだ。

牧師が處刑されて後、二十一年の月日が流れた。殺されたニエルスの兄モルテンも死んで了つた。

ある日、モルテンの住んで居たウエルビーの部落に一人の年をとつた乞食が現はれた。

『此村のモルテンさんが亡なつたといふことを聞いたが、ほんとうでムんすか』

通りかゝりの村人にきいて居る。

『さうだよ』

『跡は、どうなりましたか』

『たつた一人、弟があつたが、ずつと前に殺されて了つた、……で、子供もなし、兄弟もなし、目下百姓で大分金はあるらしいが、跡をとるものが居らんよ』

『へえ、そいつは好い鹽梅だ』

思はずから口ばしつた。

『何だつて？』

村人が聞咎めると、うへゝゝゝと薄氣味わるく逃げるやうに駈け出した。

ソレンが死刑になつた後、教會をあづかつて居るさる老牧師が、その夜遲くなつて、門を叩く音をきゝつけた。

『はてな、誰か來たらしい』

臘燭をもつて、そつと出て見ると、門の外に乞食が立つて居る。

『誰だ』

『へえ、牧師さん、一寸おあけ下さい』

『お前は、寢る處がないのか』

『へえ、左樣でムいます、……それに、あなた樣に御願もムいます』

乞食は、哀れな聲を出した。老牧師は兎も角、門をあけてやると、此の乞食がのそり／＼と入つてくる。臘燭のあかりで、ジーツと透して見ると、髭は茫々と生えて居る、頭髮は長く垂れて居る、むさくるしい顏形だが、どこかで見たやうな記憶かある。

『どうも、わしは、お前に會つたやうに思ふが、どこで會つたらうか』

『へえ、牧師さま、私もあなた樣を存じて居ります』

『さうか、どこで會つたな』

『この村でお目にかゝりました』

『何だと？　此の村で……？　何時？』

『今から二十一年前！』

『今から二十一年前！』

老牧師は鸚鵡返しに恁ういつて、もう一度乞食の顏を見直した途端、危ふく臘燭を手から落すところだつた。

『おぬしは、ニエルスぢやないか』

『へえ、そのニエルスで厶います』

二十一年前に牧師ソレンに殺された筈のニエルスが、ひよつこり生きて返つたのである。

第六感といはうか、ホーセンス探偵が初めからニエルス殺しは、牧師ソレンぢやないと睨んだ眼は狂はなかつた。だが、目撃者の證言があり、常人の自白があり、いかんとも反證のあげやうがなく、ソレンは處刑されたが、二十一年目に、謎をとく鍵は與へられた。ニエルスは何もかも老牧師の前で、告白したが、それによると、モルテンは、牧師ソレンの娘を妻に迎へようとしたが、ソレン父子に刎ねつけられた。それを根にもつていつかはソレンに復讐しようと企てた。そこで、ソレンが時々氣のあらくなるのにつけ入つて、弟のニエルスを農場の手傳ひに出した際、つとめてソレンの氣を苛立たせるやうに仕向けさせた。到頭、ソレンが鍬でニエルスを毆つたので、死んだ振をして一旦倒れた後、我家へ逃げもどつて來た。

『ようし、俺について來い』と、兄のモルテンは、その晩、弟のニエルスをつれ出し、丁度彼と同じ年恰好の男が二日前に墓地におくられた。その死骸を掘出し、弟の衣服をきせ、帽子をかぶらせ、牧師の家の庭に忍び込んだ。そして牧師の寢室に忍びこんで、青い衣と白い帽子をぬすんで、自分でこれを身にまとひ、庭の隅へ穴を掘つて死骸をうづめ、衣と帽子とは、元の寢室へそつと投げ込んで置いた。弟のニエルスは、植込みの中で見張をしてゐたが、それがすむと、モルテンは弟に金を握らせていつた。

『さア、手前は遠方へ逃げてうせろ、二度と再び此村へかへつてくると、手前の命は、此兄のものであるぞ』

威かされて、いやも應もない、永久に此の秘密を葬る爲の犠牲となつて、國外へ姿をかくした。だが、いかにも口惜しい、此頃風の頼りにきくと、兄が死んだとやら、それなら最う好からうと思つて、村へ舞もどつて來た、ついては元のやうに我家へかへれるやうにしてもらひたい、――此ういふのだつた。

此は、一八二〇年前後の出來事で、『情供證據誤判錄』の中に例證として出て居る。今の警察官にも、裁判官にも、捜査の上にも、斷獄の上にも、參考となるべき實話である。（終）

約四十年の久しきに亙つて司法裁判に鞅掌された横田秀雄博士は、その裁きぶり嚴格公正なると同時に、一面人情味ある裁判官として今大岡の名のあつた人であります。萬一裁判官の誤判から無辜の民を罪するやうなことあつては聖代の痛恨事である。判官は此の點最も注意すべきであるとして常に後輩を警められた司法部の大恩人であります。

かつて、刑政研究會に於ても『刑事裁判と國民の信頼』といふ題の下に講演を試みられ、『情供證據誤判錄』の事例を引いて誤判の危險を說かれたことがあります。本誌は今回、その誤判實例中の有數師殺人事件に關する博士の談話を、一層讀者に分り易く且つ感興を添へる爲に、物語體に記述し博士の承認を得て茲に掲載した次第であります。（記者）

漫畫レヴュー ファン百態

小野寺秋風

一 野球ファン

球場に入場出來ずラヂオ屋の前に腰を据ゑて居たが試合白熱となるや放送につれ、身を躍らせ獨野球……。



二 芝居ファン

羽左衛門のあの臺詞は素的だつたなーと聲色を出してゐると隣座敷の親父、



『伜の奴も改心したと見えて、あんなに藍なから詫びて居るわい……』

三 ペーパ、ファン

マッチペーパ蒐集の彼、最う喫茶店、カフェーのマッチも漁り盡し、今は野良犬の様に塵芥箱から塵芥溜を掻き廻し歩いて居る。



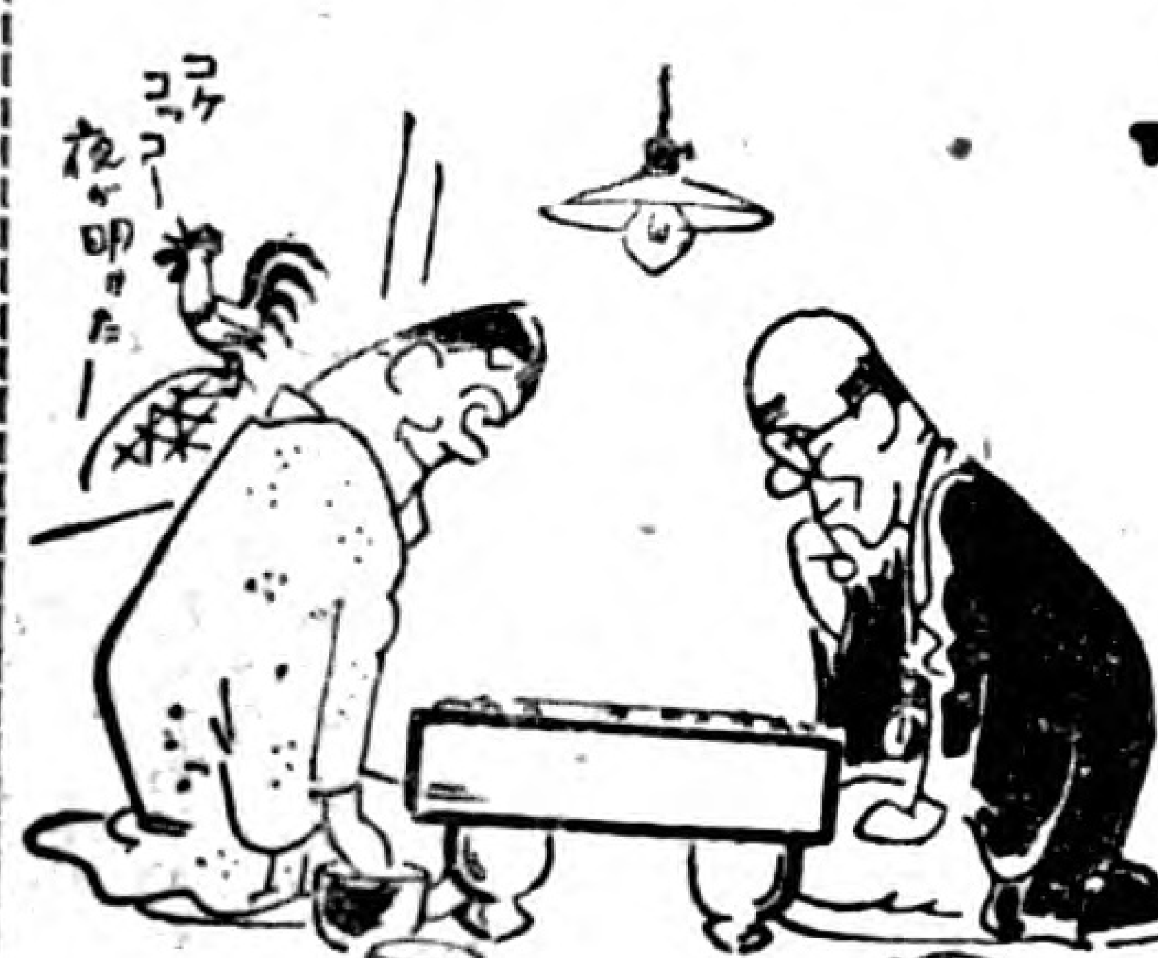
四 相撲ファン

『何と言つても相撲は日本の國技だ、君前の栃木關が御得意の「左差し寄切り」ていのを知つてるかい？ つまり、かうしてかうさ……』と、人さへ見れば取組みたがる……。



五 圍碁ファン

夢中にやつて居る間に夜が明けてしまつた、お互にあたりを見廻し『オヤ遲いと思つたら未だ朝だ、日暮れまでゆつくり出來るぞ有難い〳〵。』



六 劍劇ファン

『寄らば切るぞ！』『なにを、御用だ！』座敷をスタヂオにして駈け廻つて居ると、外を通つた御用聞き、『ハイ御用ですか、何を持つて參りませう。』



欅の命（童話）

松村武雄



英吉利の片田舎に、スミスといふ文士が住んでゐた。

スミスが借りてゐた家の庭に、一本の見事な欅の樹が生えてゐた。スミスは朝夕それを眺めて、ひとりで樂しんでゐた。

と、或る日二三人の木挽がやつて來て、その欅の幹に大きな鋸をあてゝ、いきなりひき始めようとした。スミスは怪しんで、

『それをどうするつもりかね。』

と尋ねた。

『どうするかねつて、勿論切り倒すんですよ。』

と、木挽たちが、平氣な顔をして答へた。スミスは、のけ反るほど驚いて、

『そんな無慈悲なことをするもんぢやない。止しておくれ。』

と叫んだ。しかし木挽は冷やかに、

『だつてわたし達は、家主さんに云ひつかつて來たんですぜ。云ひたいことがあるなら、家主さんに話したらいいでせう。』

と答へた。スミスは、それを聞くと、

『では、家主に話しをつけて來るまで、そのまゝにしておいておくれ。』

と云ふたり、近所に住んでゐた家主のところに驅けて行つた。そして欅の樹を切らないやうに、いろいろと頼んで見たが、慾な家主は、せせら笑つて、

『だつて、わたしは、あれを賣つて金にしたいんだよ。わしの屋敷の木をわしが切るんだもの、何も云ひ分はなからうぢやないか。』

と云つた。スミスはその返答を聞くと、ぐつと詰つてしまつて、暫くの間ぢつと考へ込んでゐたが、やがてきつと頭をあげて、

『では、欅の代金をわたしの手で拂つて上げたら、わたしの頼みを聞いてくれるでせうね。』

と尋ねた。家主は、また鼻の先でせせら笑つて、

『お金さへ手に入れば、たつて切り倒さうとは云はないさ。だがあの欅は安

くはありませんぜ。どう見積つても、五十磅はしますぜ。お前さんにその金が拂へますかね。』

と云つた。

これを聞くと、スミスはさつと顔色を變へた。スミスは文士ではあるが、至つて貧しいのであつた。

スミスにとつては、五十磅といふ金は、まことに大金であつた。とても拂へさうにもない大金であつた。しかし心から欅の樹を愛してゐたスミスにとつては、それを切り倒されるのは、自分の體をひき割られるほどつらいのであつた。

スミスは脣を噛んだまま、永い間考へ込んでゐたが、やがてきつぱりした聲音で、

『よろしい、わたしの手で、それだけの金を調へませう。三月ばかり待つて下さい。』

と、叫ぶやうに云つた。

『三月待てつて、よろしい待ちませう。だが三月分の利息は勿論貰ひ受けるんですぜ。』

と、家主はどこまでも强欲であつた。スミスはそれを承知しなくてはならなかつた。

かうして欅は無事に命をとりとめたが、スミスは、その日から氣狂ひのやうになつて、筆を執り始めた。ほかに金を手に入れる方法がないと知つたスミスは、一篇の物語を書き綴つて、それを出版者に賣り込まうと決心したのであつた。

スミスは毎日朝早くから夜遲くまで書いて書いて書きつづけた。筆が澁り出すと、庭の欅の樹を見上げて、

『さうだ、わしはあの欅の命をとりとめなくてはならぬのぢや。』

と呻くやうに獨言を云ふのであつた。

二月半ばかりたつと、やつと原稿が出來上つた。スミスはかねて知合ひの出版者に譯を話して、それを買ひとつてもらふことにした。出版者は、スミスの優しい心根に感激して、七十磅でそれを買取つてくれた。

スミスは家主の家に驅け込んだ。そして五十磅の金に利息をつけて渡すと、はれやかな顔をして、

『では、もうあの欅の樹は決して切り倒さないでせうね。』

と云つた。家主は苦笑ひをして、

『ええ、さうですよ。だがお前さんも、よつぽど物好きだね。』と云つた。

スミスは喜び勇んで、自分の家に歸つて來た。そして二月半の苦しみにげつそり痩せこけた頰を撫でながら、

『欅よ、欅よ、安心して枝をひろげておくれ。』と云つて、ほろほろと涙を滾した。（終）



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

風雲天滿双紙

佐々木味津三
小田富彌 畫



巨星の退隠

一

――馬は、勝手知つたもののやうに、不氣味な蹄の音を深夜の道々に殘し乍ら、駈けに駈けて、一氣に奉行所へ走りつけました。

と――何としたものか！　不審でした。乗りつけたその奉行所は、當然、ひつそりと人の氣配もなく靜まり返つてゐるだらうと思はれたのに、意外や物々しい騒ぎをつゞけてゐる最中でした。八文字に開かれた門の内外には、十人！　三十人！　いやもつとゐるであらう！　足ごしらへ嚴重な捕り方の一隊が、いづれも十手、捕り棒に武裝をこらして、いく張りかの御用提燈を、事ありげに打ち振り乍ら、犇めき騒ぎつゝ、今し、いづれかへ大擧して繰り出さうとしてゐたので、平八郎のいぶかつたのは當然です。

『控へい！　何ごとぢやッ。』

『…………。』

『この夜中に騒々しい何ごとぢやッ。』

然るに捕り方達は奇怪でした。その制止の聲が聞えないのか、それとも耳へ這入つてはゐても、わざと知らぬ振りをよそほつてゐるのか、止まらうともせず、まつしぐらにこちらへ殺到して來たので、あがきを早め乍ら駈け迫つていつた平八郎の馬前に、お伴の正一郎が、前髪ふりふり、飛鳥のごとく躍り出すと、大手をひろげ乍らその進路を遮切つて叱咤いたしました。

『いづれも方には目も耳もムらぬかッ。先生でムるぞッ。大鹽

の大先生で厶りまするぞッ。』

『おゝ！』

　その聲をきいて、漸くそれと知つたらしく、捕り方達のうしろから、先刻淀べりの菊園で分れたばかりの門人吉見九郎右衛門が、息をはずませ乍ら馬前に駈けつけると、仰々しく言ふのでした。

『丁度よいところで厶りました！　すぐこの者共と御一緒に堂島へ御出馬下されませ！』

『何ぢや！　堂島へとは何ごとぢやッ。』

『この頃ぢうからまたまた米が値上り致しましたゆゑ、それに腹を立てたので厶りませう！　只今非人の群れに、市中の町民共が五六十名程も交りまして、堂島の米問屋に軒ごと狼藉を働いてゐるとの急訴が厶りましたゆゑ、捕つて押へに参るところなので厶ります！』

『なにッ、捕り押へに参るとな！　誰が行けと申しをつた！』

『御奉行様で厶ります！　以後もたびたびこのやうなことあつてはならぬゆゑ、見せしめのために構はず斬りすてろとの御厳命で厶りました！』

『馬鹿者奴等がッ。』

　きくや、全く萬雷のやうな一喝でした。烈火のやうに憤ると、その五體を怒りにふるはせ乍ら、犇めき立つてゐる捕り方勢を叱りつけました。

『その方共は何の爲に御番所の祿を頂戴致しをるかッ。物の本末が分らなくて何事ぢや！　狼藉働く市民共が悪いのでない！　米價を不當に吊り上げた奸商共こそ懲すべきぢや！　元を涸らさず、末の若葉ばかり拂うたとて何になるかッ。奉行が許さうともこの平八郎が許さぬ！　引き揚げい！　早々御番所へ引き揚げい！』

　理のある叱咤でした。まことその言葉の通り、不埒な米價吊り上げを策動する奸商があればこそ、細民達は怒りを爆發させたに相違ないのでした。さるを、その元兇たる奸商共には何等の掣肘を加へようともしないで、生一筋な市民達をいたづらに懲らしてみたとて何にならう！

『散れッ。人並みの心があらば早う散れッ。爲政者の列につながる者として、身の輕擧が恥しいと思はぬかッ。』

　痛烈な叱咤に、犇めき立つてゐた捕り方達は、いづれも胸を抉ぐられたものか、しいんと鳴りを鎭めると、十手をかくし、捕り棒をしよんぼりと垂れて、御用提灯の灯りをこそこそと消すと、穴あらばもぐりたいと言ひたげな姿で、すごすごと引揚げました。

　その、おろかな羊のやうな群れの中を、天滿の棟領は、戞つ戞つと蹄を鳴らして、まつしぐらに御番所内へ馬もろ共乗り入れると、案内も乞はずづかづかと奉行所役宅へ押し入り乍ら、跡部山城守を眼下に見下して、ずばりと先づ浴びせました。

『御奉行には人の血、通つてをりませぬかッ。』

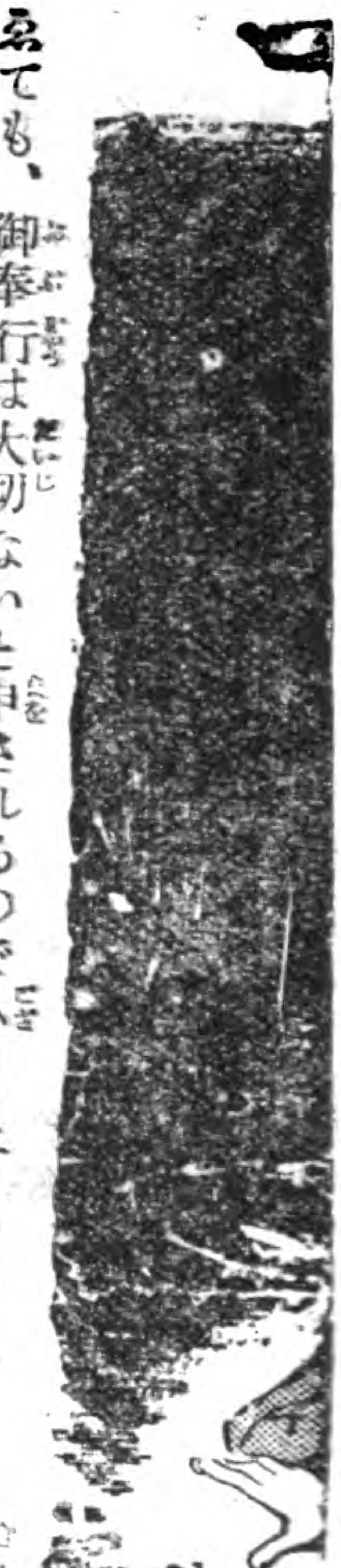
『…………。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『己れの非行非業を恥かしいとは思ひませぬかッ』
『控へい！』
『控へませぬ！ 大塩平八郎控へませぬぞッ。人の上に立つべき奉行職にある者が、物の本末すらも見分ける明が無うて何と召さりまするかッ。よく胸に手を置いて、お考へなさりませいッ。』
『控へろ！ 控へろ！ 夜中案内も乞はず押し入るさへあるに、膝も折らいで上長に意見がましう暴言を吐くとは何事ぢや！』



『何事とは何事に厶ります！ 参るべき筋合があればこそ、平八郎、かく夜中を犯して、御意見申上げに参つたので厶ります！ 今しがた大阪三郷の農民共が急訴いたせしところに依りますれば、攝、河、泉、おしなべて棄ておき難き大凶作ぢやさうに厶りますのに、御奉行はまたなぜあのやうな血も涙もない苛酷な沙汰致されましたか！ 御申條厶りますれば、大塩中齋、これにてしかと承はりませう！ 何の理由に厶ります！ いかなる仔細を以つて、かゝる苛酷な御振舞なされましたか！』
と——、跡部山城守は、それか、と言ふやうに、ふふんと嘲笑ひ作ら、聞くだに憎々しく言ひ放ちました
『何ぢや。それしきのことでこの深夜、物々しう喚きたてに参つたのか。秋口の夜雷と言ふは跡部山城初耳ぢや。あまり大人氣なうがみがみ鳴ると、天満の中齋先生に瑕がつかうぞ。』
『何を埒もないこと申されまするか！ では、百姓共が飢ゑ渇



ゑても、御奉行は大切ないと申されるので厶りまするな！』
『當り前ぢや。凶作であらうと、饑饉であらうと、この跡部山城の所爲ではない！　不足があらば、天日樣に怨み言ふがよいわ！　取るべきものを正しく取立てるが正しき天下の御政道ぢや。愚か申すと鬼が嗤ふぞ。』
『控へさつしやりませい！　天日樣に怨み申せとは何事に厶りまするか！　足らざるは仁慈を以つてこれを援け、餘らば蓄へさせて後日の災に備へさするが、民百姓を預るものの心得べき第一條の筈、取るべきものを取立てるとは何事に厶りまするか！　何の正しき政道に厶りまするか！　御奉行こそ、愚か申しまするとお名に拘はりまするぞ！』
『ふふん――。そちは、この跡部山城に說法せうと言ふのか。』
『元よりで厶ります！　これしきの道理、お辨へのない力を上に戴きまするは、天滿與力一統の不面目に厶りますゆゑ、飽までも諫爭申上げいではおきませぬ！　民百姓の苦しみ衰へは、即ち天下の衰へ苦しみも同然、お考へ直しあるまでは、大鹽平八郎、千ケ日萬ケ日かゝりませうともこの座を立ちませぬぞ！』
『うるさい！　控へい！』
『控へませぬ！　今宵は平八郎斷じて控へませぬぞ！　本來申さばこの大阪三郷は、神君お定めの永代無年貢自治領に厶りますゆゑ、冥加米すら取立ては當を得てをりませぬのに饑饉と知り乍ら、民百姓の膏血を絞るがごとき御振舞ひあるとは何事に厶りまするか！』
『くどいわッ。幕命ぢや！』
『何で厶ります！　幕命で厶りますとな！　幕命ならばなほさら大阪三郷を預る奉行職として、かゝる苛酷な御命令なぞ峻拒なさるが良吏の本分、正邪の判別もなく盲從するとは、身の無能恥しくお思ひ召さりませぬか！』
『默らつしやい！　汝等ごとき小吏の知るところでないわッ。』
『默りませぬ！　斷じて默りませぬ！　與力平八郎が小吏ならば、洗心洞塾主天下の大鹽中齋として御諫告仕りませう！　今宵のうちにも冥加米取立ては御沙汰止め召さりませぬと、恐るべき一揆騷擾が勃發するやも計られませぬぞ！』
『一揆起こらば跡部山城、ひと揉みに蹴散らすまでぢや！　あまりくどう申すゆゑ、二の句が繼げぬやう知らしてやらう！　冥加米急いで取り立てたは、當上樣の大御所樣が、このたび二の丸入りを遊ばされるに就き、そのお祝儀米として匇々に獻上せいとの御諚が厶つたゆゑ、例年どほり納米の沙汰したまでぢやわ！』
『えツ――。』
平八郎は啞然として、言ふべき言葉を失ひました。またなぜ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



にこれが啞然とならずにゐられませうぞ！　當上様の大御所様と言ふのがすでに論外なのです。德川家征夷大將軍の職を奉じてこん日までに十一代。大御所様の尊稱を許され得たものは、宗祖神君家康公と、二代台德院殿秀忠公以外にはないのに、分家とも言ふべき枝葉の一ツ橋家より入つて、宗家の社稷を繼いだ將軍家のその他家にある御生父を、輕る〲しく大御所と僭稱したばかりか、凶作飢饉の中から、民の膏血を絞つて取り立てようとしてゐるその冥加米の用途が、他の地方の飢饉救濟米にでも充當するかと思ひのほかに、全然無駄な、いや、むしろ不埒なお祝ひ米、祝儀米に、獻納しようと言ふのでしたので、平八郎の啞然となつたのは當然でした。あまりにもおろかしきその小吏根性に言ふべき言葉を失ひました。まさしくすべては、いち跡部山城が己れ一身の利益榮達のためから計つた事に相違ないのです。幕閣諸老臣の機嫌氣褄を取り結ばうとの卑しむべき魂膽から、かゝる許し難き苛税をも敢て行なつたに違ひないのです。

それならば――天滿の偉傑の太眉は、怒氣を含んで、ピクリと動きました。千語萬語を費やして諫止したとて、小利小策にまなこの眩んでゐる山城守が、素直に農民達の愁訴を容れるべき筈がない！　その、嗤ふべく蔑すむべき小吏根性を、芯から叩き直さぬ限りは、いかほど天下政道の要訣大本を說いたところで、埒の開く筈はないのです。

然らば――平八郎の腦裡に閃いたのは、誰ならぬ御城代松平丹波守のことでした。大阪城代と言ふ御威權にすがつて、俗吏跡部山城の秕政を眞向微塵に粉碎し、塗炭の苦しみに呻吟しつつある三郷の民草を救ひ出す以外に策はない！　途はない！

『よろしうムります！』

平八郎は敢然として、席を蹴り乍ら突ッ立ち上ると、痛烈、その肺腑を抉らんばかりに言ひ放ちま



した。

『凡百萬民の命よりも、御自身の榮達出世が御大切とは、さてさて御殊勝なお心掛けで厶りまするわ。中齋には中齋の思案厶りますゆゑ、おうろたへ遊ばしますなよ！』

『ふふふ。申したな。それが天満の棟領とやらの臺詞か。――待てツ。待てツ。』

『………。』

『待てと申すに待たぬか！　まだ申すことがあるわ！』

『何で厶ります！』

『何でもない！　心地よいのぢや！　わはゝゝゝ。近頃またとなくさわやかな宵ぢや喃。』

『………。』

『天満の棟領とやら先生とやらに、ひと泡吹かして、三斗どころか、一石二石も溜飲が下つた思ひぢやわ。――もう用はない！　たはけ者めがツ。早う尾を捲いて行けツ。』

嚇ツとなつて、思はず平八郎は、その腰の天明行廣に手をかけましたが、しかし對手は兎にも角にも上長の奉行なのです。默然とし乍らやゝ暫し、本當にやゝ暫し、あの恐るべき双のまなこで、睨みすゑておくと、床を蹴つて立ち去りました。

二

――怒氣を含んで出て來た平八郎のその姿をみとめると、

『いかゞで厶りました！』

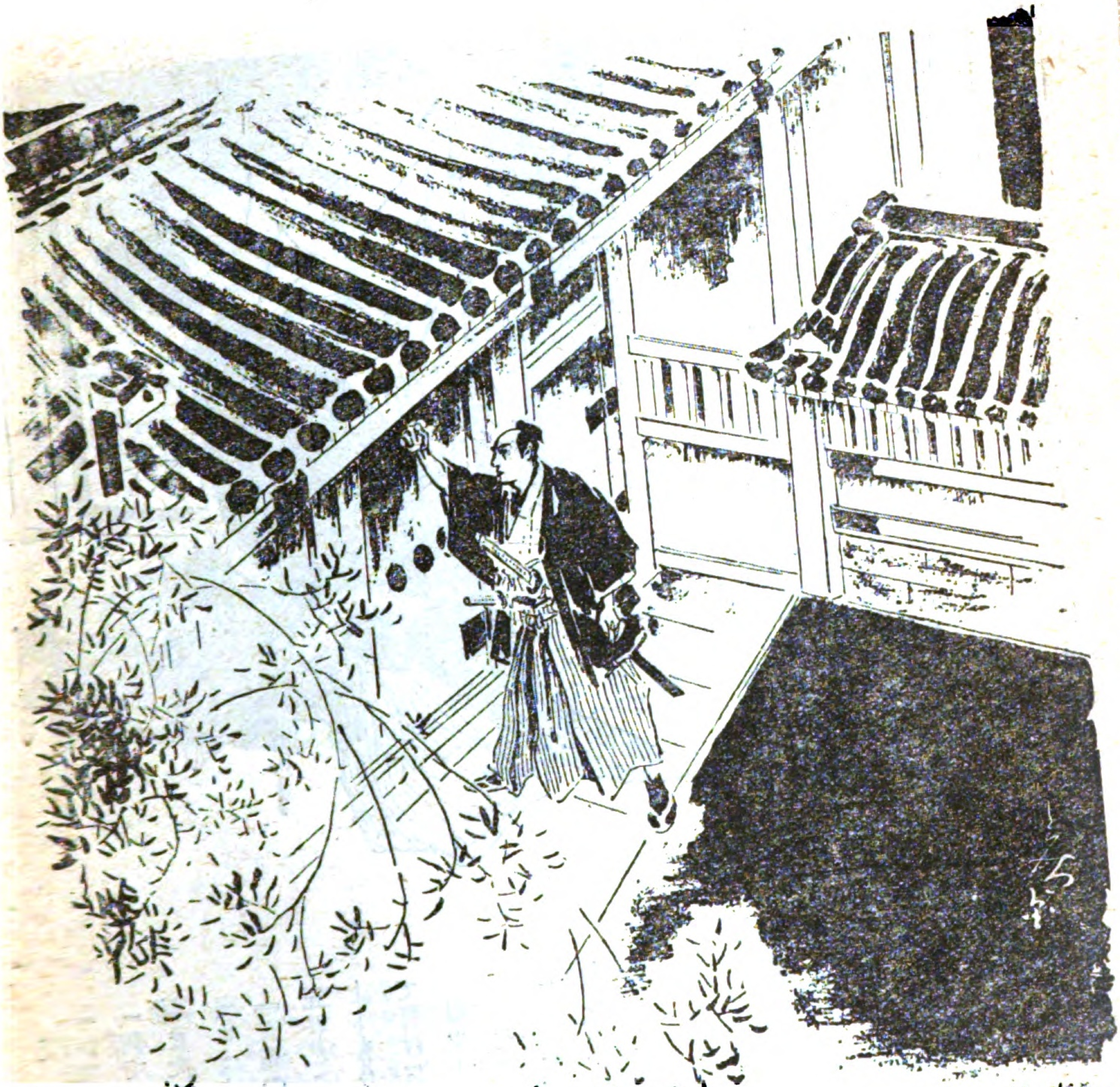
『駄目で厶りましたか！』

『どのやうな容子に厶ります！』

やはり心配だつたものか、洗心洞からあとを追つて、いつのまにか奉行所の表に殺到して來てゐた攝、河、泉、三郷の名主名代達が、犇めき立つて口々に左右からきゝ尋ねました。

『何とお申されました！』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



『御立腹の御容子にムりまするが、御奉行様はおき丶入れ下さりませなんだか！』
『おきかせ下さりませ！　早う安否をお話し下さりませ！』
降り注ぐやうに言ひ迫つた言葉の雨を、平八郎は只一言――。
『騒ぐな！　奉行は聞かずとも、御城代と言ふ最後のお味方がムるわツ。吉報聞かせう程に、心配なら静かにつゞけツ。』
駒寄せに、嘶き躍つてゐた愛馬にひらり打ち跨ると、馬前を大井慓悍兒跡後に門人瀬田濟之助。あとに長蛇のやうな名主の一隊を引き随へて、寂々とした深夜の濠ばた沿ひを、大阪御城大手の門を目ざして一散走りに急ぎました。
勿論、門は一文字に閉ざされて、聞えるものは、城中見廻り番の打つ撃柝ばかり――。
『番の衆！　番の衆！』
濟之助以下一統の者を、静かに城外に待たしておくと、平八郎は門扉打ち叩いて、大きく呼ばはりました。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『番の衆！　番の衆！　大廊中務不意の登城ぢや！　開門せい！　開門せられい！』

天満の先生不意の登城ときいて、打ちうろたへ乍ら、怪しみいぶかつて番士の者達が開くをおそしと進み入りさま、御城代御役宅の二の丸大玄關目ざして眞一文字――。

然るに不審なのです。

すでにもう御城代は、御寝なさつてゐられるだらうと思はれたのに、奥書院のあたりから、ちら／＼と火影が洩れてゐるのでした。しかも、所士、近侍、小姓達までが、何ごとか容易ならぬ大事でも出來してゐるらしく、いぶかしげな亢奮の色を見せ乍ら、慌たゞしく廊下先を往き來してゐたので、平八郎の胸は思はずも不吉な豫感にさわめき立ちました。

しかし、いたづらに怪しみ躊らつてゐる場合ではない！

勝手知つた奥書院へ参入すると、――だが、そこに端然と正坐されてゐた御城代丹波守の御氣色は、何といふ沈痛なお色であつたらう！　憂色深く打ち沈み乍ら、默然としてうなだれてゐたのです。

のみならずその膝の前におかれてあつた奉書のいぶかしさ！

――上意、墨痕淋漓と、その奉書の表には、上意と大きく書きしるされてあつたので、平八郎はハツとなり乍ら、打ちのめされたやうにそこへ平伏すると、愈よ募りまさつた不吉な豫感に、胸とどろかし乍ら、聲をふるはせて呼びかけました。

『中務にムります。これなる御上意はもしや？　……』

『おう！　平八郎だつたか！　遅かつた！　遅かつたぞ！』

『えツ！』

『何急用あつて夜中慌たゞしう罷り越したか存ぜぬが、この松平丹波にも、魔の手が廻つたわ。』

『すりやあのこの御上意が！』

『おう！　高井山城殿が煙たいならば、この松平丹波も目の上の瘤と見え、跡部奉行が兄水野越前を動かして、笑止な小細工したと見ゆるわ。』

『いつ、いつこれなる御沙汰書が参りましたのでムります！』

『ほんの一刻前ぢや。』

『御左遷にムりまするか！』

『なら、腹も立たぬが、御役罷免の上、所領松本へ就藩せいとの御沙汰ぢやわ。』

なぜに愕然とならないでゐられよう！　またなぜに悲しまないでゐられようぞ！　ふた刻前、心の知己と相許し合つた名奉行高井山城守を御送別申し上げたばかりなのに今また最後のいち人、只ひとりなるわが力、わがお味方と頼み仰いだその御城代が、その松平丹波守すらまでが、すでに跡部奉行の陰險極まりない魔の手に禍ひうけてゐたのです。

『も、申しあぐべき言葉もムりませぬ。いえ、もう、申しあぐべき勇氣ムりませぬ。――御免。』

蹌踉として立ち上ると、平八郎は、心も身も魂も、打ちひしがれたもののやうに、青み沈んだ顔に、悲痛限りない歎きの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

色を泛べ乍ら、力なく、本當に力なく、いつ下城して、いつ大手の門をくぐりぬけたかも心知らずに、その姿は城外にありました。

素早くそれをみとめて、容子いかにと犇めき殺到したのは、一刻千秋の思ひで待ち構へてゐた堤、河、泉、三郷の名主名代達です。

『やはり――。』

『駄目で厶りましたか！』

『わたくし共の望みは破れましたか！』

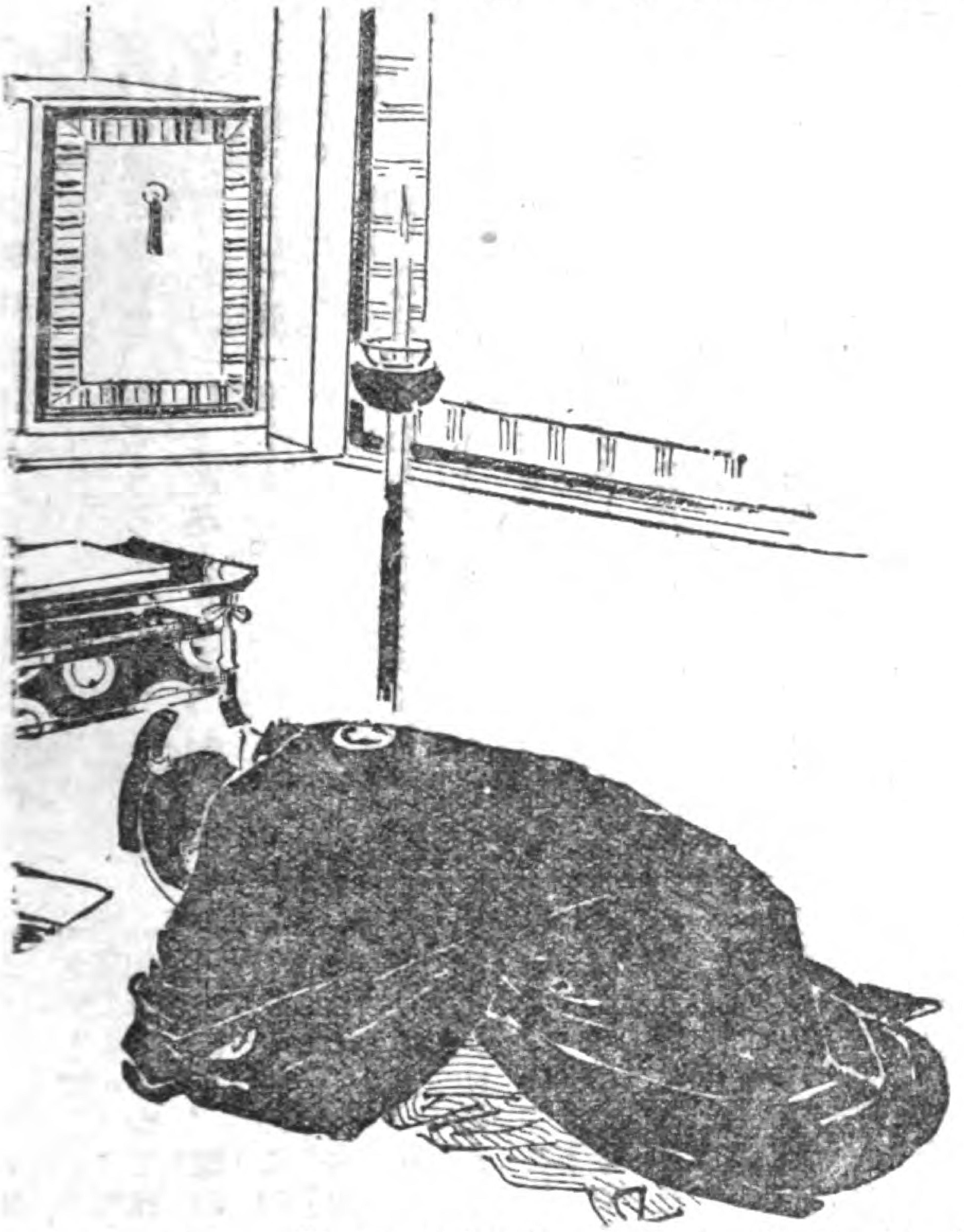
『どうあつても、お救ひの手は下りませぬか！』

『神も厶りませぬか！』

『佛も厶りませぬか！』

『もし！……もし！』

『お先生！』



『大鹽のお先生樣！』

『御返事の厶りませぬは、手前共に飢ゑ死にせい、との御謎で厶りまするか！』

『仰有つて下さりませ！』

『もし！』

『お先生！』

『天滿の先生！』

だが――、平八郎は默然としたまゝでした。唖のごとく默然としたまゝでした。答へず、言はず、靜かに馬を曳きよせると、魂ぬけた人のごとくに馬上の人となり乍ら、カパ、カパ、カツパ、カツパと、うつろな蹄の音をひゞかせ乍ら、夜陰の道を、急がす力もないやうに、悄然と、只悄然と運ばせました。

その頭上を、巨星が散つた！

長い光芒を、不氣味に暗い空へ曳き乍ら、巨星が一つ流れました。さながら巨人大鹽平八郎の今後の命運命數を、占ひ暗示でもするかのやうに、巨星が空を流れました。

同時にうしろから、農民達のすゝり泣きが一齊に揚りました。そして物言はぬ天滿の棟領の、愁然として行き去る悲しげな姿で、己れ達の哀訴歎願が、水泡に歸したの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

を察したものか、すゝり泣き乍ら、一齊に地上へ、崩れ伏した氣配がありました。

大井慓悍兒も默々無言……。

瀨田濟之助もまた默々無言……。

元より平八郎は啞のごとく無言……。



三

けれども、かく默々と馬を進ませつゝも、すでにそのとき天滿の棟領は、斷乎たる覺悟を整へてゐたのでした。

退隱！

退隱！

それ以外に途はないのです。なまなか與力と言ふ職務に就いてゐればこそ、跡部山城守ごとき俗吏鼠輩の下風にも立たされて、胸中の鬱勃たる經世の策、濟民の計をも、實行する事が出來ないのです。いや、實行が出來ないばかりではない！　下職の與力と言ふ席に就いてゐればこそ、思ひのまゝに、存分に、跡部山城守と抗爭する事が出來ないのです。いや、そればかりではない！　與力と言ふ職責がある以上、跡部山城守の不埒な醜行にすらもその手足となつて左右され、わが身を慈父のごとくに慕ひ頼る大阪三鄕の民草達を苦難に陷し入れねばならないのです。

去つて戰ふのだ！

職を拋つて爭ふのだ！

一私人となつて、思ひのまゝに、公敵公賊と抗爭するのだ！

天下の陽明學者大鹽中齋となつて思ふがまゝに爭ふのだ！

力の限り！

命の限り！

しかも正々堂々と！

民のために！

弱き農奴のために！

闘ふのだ！

爭ふのだ！

颯爽堂々と！…………。

『ユウ！　ユウ！　こりやユウはをらぬか！』

平八郎は洗心洞塾の己が屋敷に歸りつくと同時に妻女を大書院に呼び招いて、猪突に、そして、嚴然と命じました。

『早々に元服の用意せい！』

『…………？』

『何を躊らひをるか！　早うせい！』

用意の出來るのを待ちうけ乍ら、さらに、おごそかに言ひました。

『關東からお越しの御客仁は、いづれに御寢ぢや。』

『もはや先程…………。』

『お寢つたと申すか。』

『いえ、先を急がねばならぬから、とこのやうにお申されまして、夜旅立ちなされましてムります。』

『なに！　もはや御立ちとな！　では止むを得まい。江川殿か齋藤殿を髻親にお頼み申しなば、天下にそれ程立派な元服仕儀はまたとあるまいと存じたが、御立ちならば止むを得まい。父が、この平八郎が自ら致さう。急いで格之助を、これへ連れい！』

呼び招くと、短檠の灯りかき立て乍ら、養嗣子格之助の、ふつさりと濡れ羽色なす前髪を、式禮通り、森嚴な格法古禮に則とつて、剪りおとしました。――ばさりと白紙に落ちて散つたとき、秋の夜ふけの寂しい奏です。チイ、チイ、チチと、蟲の音が中庭の闇を縫つて傳はりました。

準備は成つた！

退隱の要意は成つた！

與力職の跡目一式を、今ぞ元服遂げた養嗣子格之助に讓り與へておけば、明日と言はず、己れは一介の野人大鹽中齋となつて、誰憚るところもなく、また何びとの掣肘もうけず、思ひのまゝに戰ふことが出來るのです。

しかも、今や大英斷の覺悟をとげた大鹽中齋は、全く疾風迅雷でした。その翌早朝、先づ奉行所に退隱の屆けを濟まし、同時にかゝる場合の定例通り、嗣子格之助に與力の跡目相續を遂げさせておくと、呼び招いたのは大井正一郎です。

『戰場は堂島ぢや！　米價の變動、奸商共の行動、出來るだけ詳しう探つて參れッ。』

そして、新與力格之助を呼び招くとさらに命じました。

『今日からはそちが跡部山城の目付人ぢや！　わしが退隱したとならば、凡らく心許して、今日にも何ぞ堂島の奸商共とよからぬ策動初めるに相違なからうゆゑ、拔からずに山城の行動探つて參れッ。』

果して、兩名いかなる報告を齎らすか？――。

攝、河、泉三郷の民百姓のために、憤然、職を棄てて蹶起した天滿の巨人と佞人跡部山城守との抗爭は、堂島の米の市場を中心にして、漸く玆に風雲急を告ぐるに至りました。

（つゞく）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



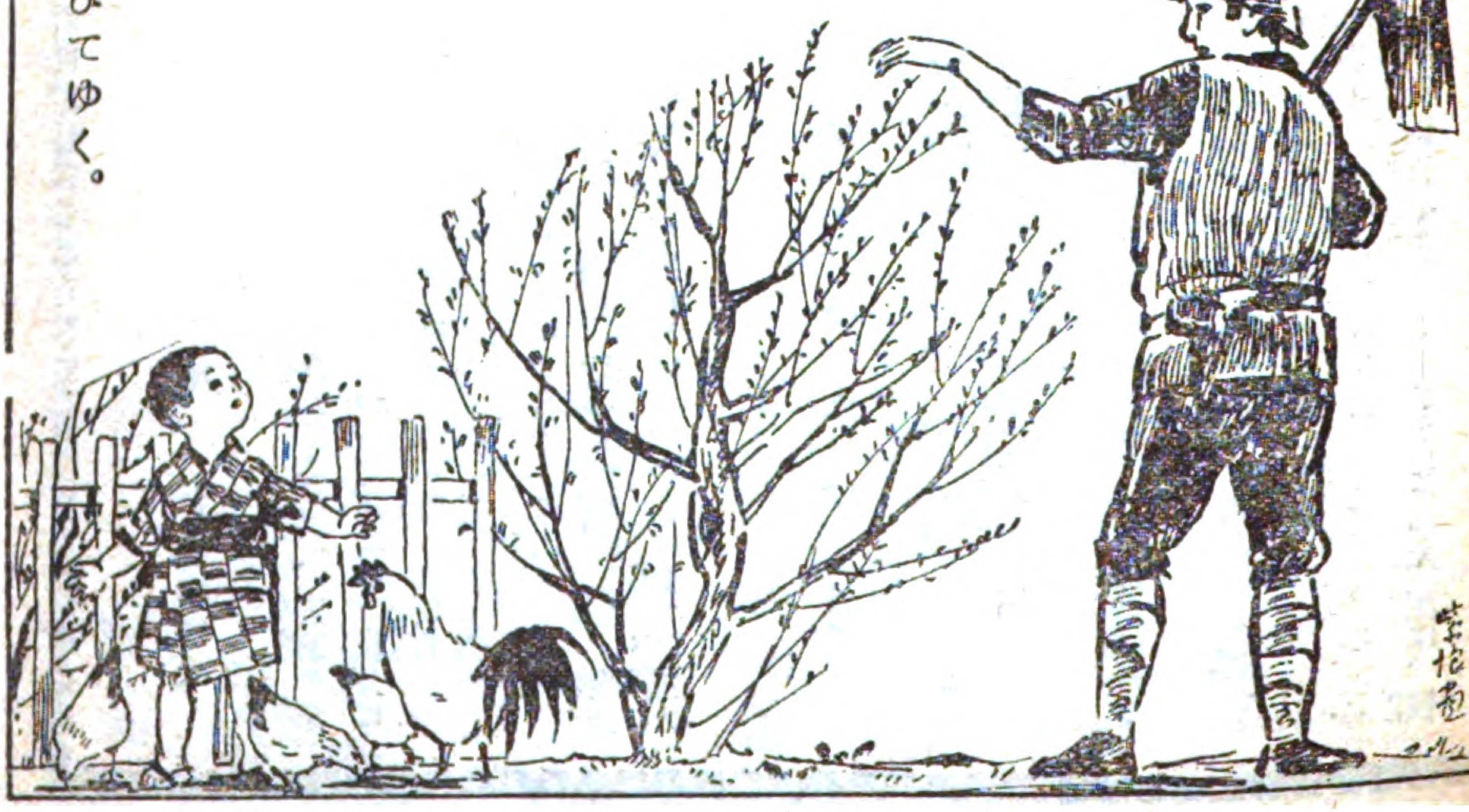
樂しき家

—入選民謡—

齋藤子郊

月が繰ります
日が紡ぎます
愛の結んだ二つの魂が
我家樂しと歌聲あげて
永久に輝やく光の綾を
トン　トン　カラリと織つてゆく。

天が笑みます
地が歌ひます
愛を讃へて産れた子等は
我家樂しと歡聲あげて
永久に榮える生命の儘に
スイ　スイ　スラリと伸びてゆく。







唯一の眞實　ワイルド（英）

歡樂と笑ひの影には、何か粗野で、生硬で、無感覺な一種の氣分が潜んでゐるが、悲哀の影には常に悲哀があるのみである。苦痛は、快樂と違つて、何等の假面をつけてゐない。自分には、この世の中に悲哀に化すべき眞實は他にないやうに思はれる。悲哀のみが唯一の眞實のやうに思はれることが時々ある位ゐである。

悲哀以外の他の事物は、人の眼を眩ましたり、人の心を飽かしたりするやうに出來てゐる。又それは人の眼や欲求の幻影であるに過ぎない。けれども、古から悲哀を材料にして、幾多の世界が立派に建設されてゐるのだ。嬰兒が生れるにも、星が生れるにも、そこに必ず苦痛が伴ふのだ。

握手　ツルゲネフ（露）

街を歩いてゐると、よぼよぼに老いた乞食が、私を呼びとめた。泣き腫れた眼、蒼ざめた脣、毛ばだつた襤褸服、穢苦しい腫物……貧乏に恐ろしく蝕ばまれた不幸な男だつた。

それが、赤裂れのした、汚い手を伸ばして、呻いて、扶けを求めた。

私は、ポケットを悉皆探したが、財布も、時計、手巾さへ無かつた。あやにく、何も持たずに、出かけて來たのだつた。

乞食は、ぢッと、手を出したまゝで、待つてゐる。その手が、微に震へながら、ふらふらと動く。

まッたく、困り切つて、私は、その汚れた、震へる手を、心を罩めて握つた。

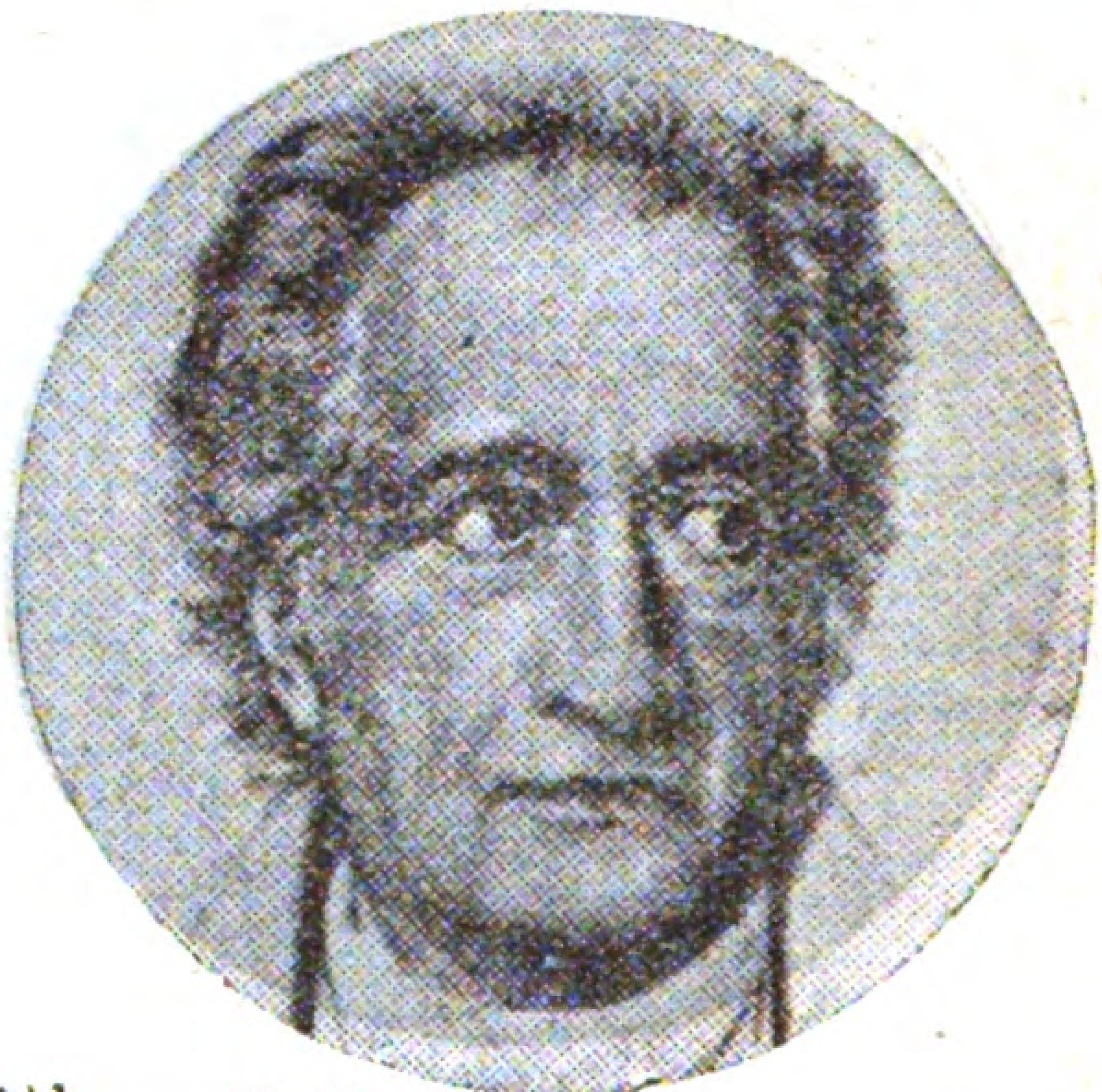
『僕を責めないで呉れ給へね、兄弟。僕は、何も持つてゐないんだから。』

乞食は、その腫れた眼で、私を見詰めた。蒼ざめた脣が微笑む——さうして、今度は、彼が、私の冷えた指さきを握り締めた。

『どうしまして、兄弟。』と彼は口の中で云ッた。

『ありがたう、兄弟。君のこの握手を、僕は、ありがたく戴くよ。』

私は、私の同胞から、施しを受けたことを知つた。





世を動かすもの　ゲーテ（獨）

自己が先づ痛感して、それが肺腑から迸しつて、聽衆の心を、根強い興味で引き附けなくては、世間を動かすことは出來ない。ぢつと据わつてゐて、他人様の喰べ殘りで雜炊をつくッて、火消壺の中から、けちな火を吹き起しても、感動するのは、子供か猿だけだ。成功しようといふなら、正直でなければならぬ。鐘や太皷で叩きたてる馬鹿者になつてはいけない。智慧があつて、切實な議論をするなら、技巧を弄ばないでも、演舌はひとりでに出來る。何か眞劍に語らうとおもふなら、別に言葉を飾る必要はない。どうかすると、君たちの演舌は、人生の紙屑で巧な細工がしてあつて、見た眼には、絢爛でも、それは、あの、秋の枯葉を吹きまくる濕つぽい風のやうに氣持の惡いものだ。

困窮は人を生む　ユーゴー（佛）

困窮のどん底――それは驚くべき恐るべき試練であつて、それを受くる時、弱き者は賤劣となり強き者は崇高となる。

何故なれば、却つて小さな奮鬪のうちにこそ多くの偉大なる行爲が爲される。何人にも見られず、何等の譽れにも酬いられず、何等の歡呼の喇叭にも迎へられぬ、氣高い秘密な勝利があるものである。生活、不幸、孤立、貧困などは皆一つの戰場であり、またその中にこそ眞の英雄が居る。それは往々にして、高名なる英雄よりもなほ偉大な、人に知られぬ英雄である。堅實にして稀なる性格は斯くして創り出される。殆んど常に殘忍なる繼母である困窮は、時





として眞の母となる。窮乏は魂と精神との力を產み出す。窮乏は豪膽の乳母となり、不幸は大人物のためによき乳となる。

思想の斷片　ハーデー（英）

生の大きさは軍艦と違つて、外觀で決めることは出來ない。生の內容が充實してゐるか、空虛であるかで初めて決められるものだ。多感な水呑百姓の生は血のめぐりの惡い貴族の生よりずつと大きい、ずつと充實してゐる、ずつと興味がある。

○

人格の美しさと醜さとは、事の成否にあるのではなくて、其目的や欲望にあるのだ。人格の眞相は成し遂げた物よりか、やらうと思つた物に見られる。

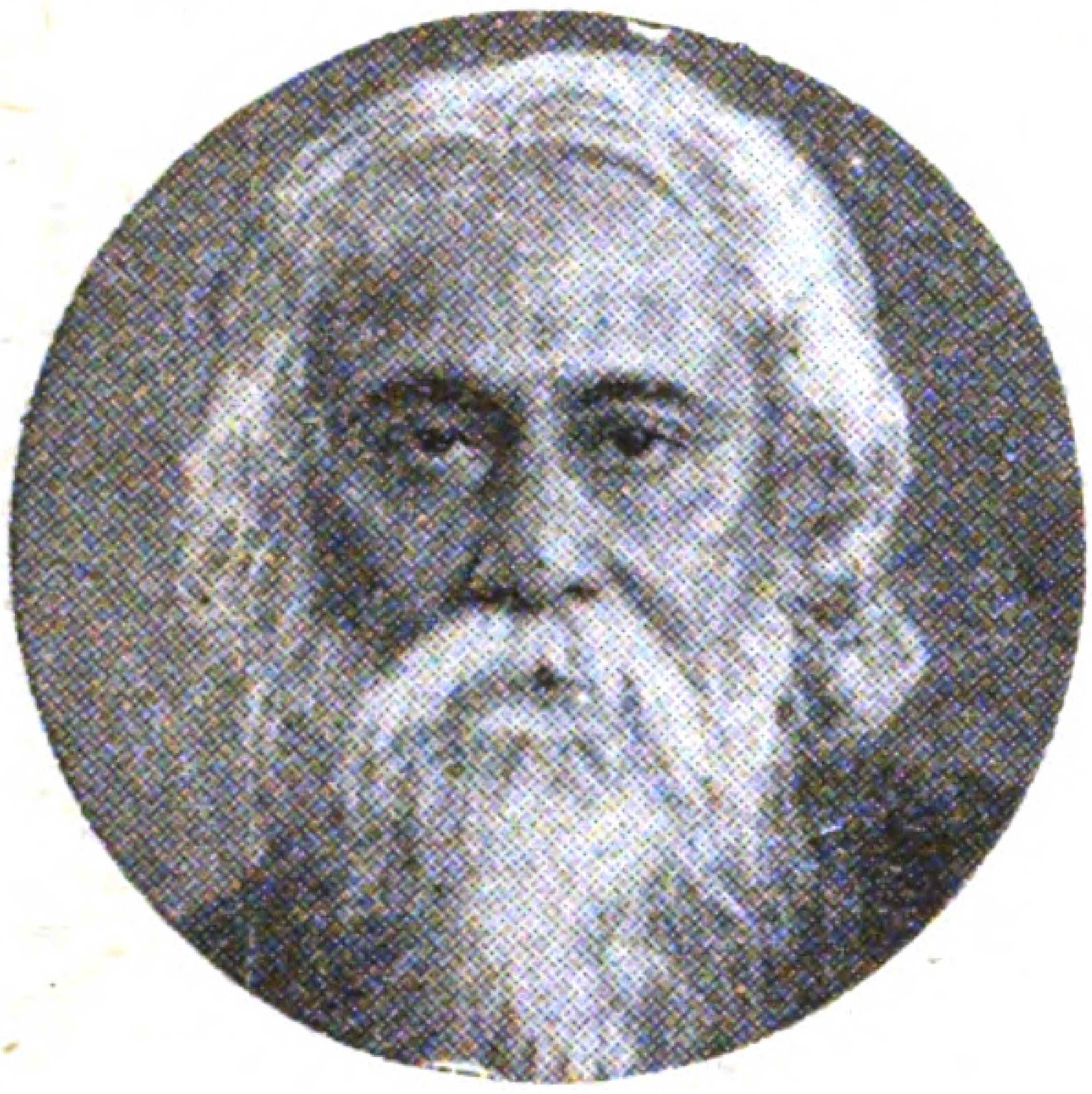
ほんたうの親切　ヂューマ（佛）

人生の入口に二つの道しるべを立て、一方に「善の道」一方に「惡の道」と記して、そこへ來たものに「さあどちらかを選べ」と云ふのでは、いくら親切のつもりでも、まだ本當ではない。基督がしたやうに、途中で踏み迷つてゐる人々には、第二の道から第一の道へ行く筋道を示してやるべきである。しかもそれらの道の踏み出しは苦しい事が多くて、到底進んで行く事が出來ないなどと思はせてはならない。

基督は、寛大なれ、人を赦せといふ事を敎へる爲めに「放蕩息子」の巧妙な譬へ話を用ゐてゐる。キリストは愛慾によつて傷つけられた人々に對しては、心からの愛を持つてゐた。そして悅んで、その瑕を癒すべき香料を探つて來て、手當をしてやつた。かくして、キリストはマグダラのマリアに向つて「爾多く赦さるべし。爾多く愛したればなり」と言つた。崇高な宥恕は崇高な信仰を起させずにはゐなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN





高嶺の巡禮　ロマン・ローラン（佛）

偉人は、山岳の絶頂のやうなものである。風はその面を敲き、雲はそれを圍む。しかし、吾吾はそこに於て、他の何處よりもより良く、より深く呼吸することが出來る。かやうな高嶺の氣は、心臓の穢れを拭ひ去る清浄さを持つてゐる。そして、それを取圍む雲が破れる時、吾々はそこから人類を眼下に見下ろすことが出來る。

私は全ての人が誰でもこの高嶺に活き得るものであることを主張するものでは勿論ない。けれども、少くとも一年に一回位ゐは、誰でもそこに巡禮すべき義務があることを認める。彼等はそこでその肺臓を清め血を新鮮にすることが出來るであらう。彼等はその高嶺に登つて、「永遠」に近づき得たることを感ずるであらう。そして、その後で、彼等はその日常の苦闘に耐へ得る心臓をもつて、再びこの人生の平原に降り來るであらう。

ランプの説　タゴール（印）

ランプが一滴の油をも失はれないやうにそれ自身を保護してゐる間は、その周圍に何等の關係もなく何等の意味もない。それが點火される時に、ランプはそれ自身の意義を發見する。遠近のあらゆる事物との關係が生ずる。そして、ランプは自由にその貯へた油を焔のために犠牲にする。

私たちの自我はこのランプのやうなものである。ランプがその所有物を蓄へてゐる間は、ランプはそれ自身を暗くする。その行爲はその眞の目的と矛盾するのだ。ランプが光明を發見する時は、ランプはその刹那に自身を忘れる。光明を高く掲げる。そして、ランプは所有してゐるすべてを、光明のために捧げるのだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

日本人の强味

慶應義塾大學講師　若宮卯之助

日本人は何でも出來る人間

日本人は何でも出來ないことはないといふやうな人間である。日本人の大部分は久しく百姓であつたし、現在でもその過半數は矢張り百姓である。日本人はその百姓に秀でて居る。

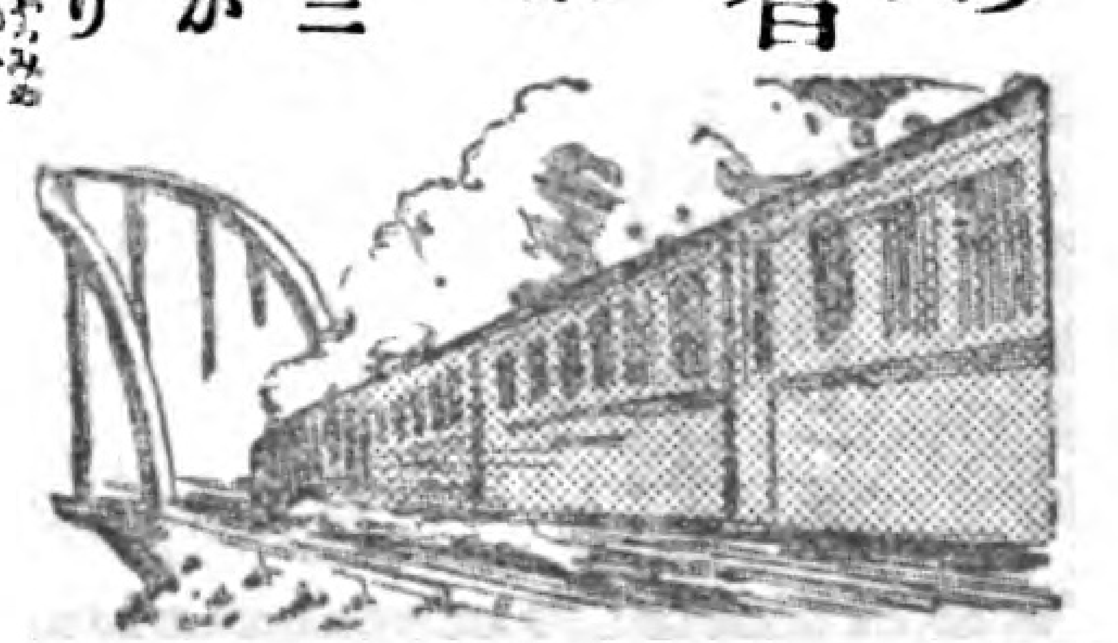
日本の百姓が、その副業から發達させた養蠶業は、日本を世界最大の生絲の産地に仕立てて居る。この事實は日本人に取つて餘りに平凡である。同時に世界の紛れなき驚異である。副業ですら此の通りだ。本業の米作に於て日本が世界の首位を占めて居るのは申すまでもない。日本米の品質は世界第一である。適應性に富んで居るのも第一である。即ち北海道にも、滿洲にも、沿海州其他にも移植して効果の擧がるやうに、その品種は改良されて居るのである。日本人の農業的力量は、米國西部の海岸地帶に於て最も有効に證明されて居る。何となれば此の場合には、歐洲渡來の白人の農業的力量に比較することが出來るからだ。

米國に移住した日本人は、必ずしも本來の百姓と限つて居ない。中にも仕

途上美談

踏切番の奇智

伊藤靜泉



今から七年前、大正十三年のことである。私は夏から秋にかけて三ヶ月ばかり病後の養生かたぐ\、故郷宮城縣古川に歸省してゐた。

其の時の事、たしか、九月の十日の朝であつた。私は平常の如く緒絶川——古川停車場から遠からぬ——の鐵橋近くまで來ると、立ち罩めた朝霧を衝いて、上り列車が轟々と驀込んで走つてきた。

ふと見ると、鐵橋の中ほどところに、五六歳位の子供が三四人何やら遊び耽つてゐる。

『アツ、あぶない！』

逸早く發見したらしく番小屋の中から女の叫び聲があつた。

と見る間に番小屋を飛び出した女は、子供たちのもとへ走らうとした。が、ヒタとその足を止めた。もう走つて行つても間に合はない——と彼女は思つたのであらう。ところ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

力なく百姓になつた人も可なりにあるのである。別して葡萄園の經營となると日本人は全くの無經驗であつた。此の無經驗葡萄園の經營に於て、技倆の卓越を證明したのは、日本人自身の農業的力量の何よりの代表である。白人農夫が植付けてから七年目に物にすると同じものを、日本人は六年目に於て成功するのだ。白人（主として伊太利人）の單獨經營は四十英町が面積上の限度だと謂はれて居るのに、日本人の中には一人で一千英町からの大葡萄園を易すく〳〵とやつてのける者があるのである。諸君は此の百姓の能力を輕んじてはいけない。

食糧の問題は問題の中の問題

である。昔の支那人は『民は食を以て天と爲す』と謂つて居る。現代歐洲文明國は、悉く食糧供給の問題に惱んで居る。幸にも日本は、少くとも當分の處、此の問題の心配は無用である。日本は世界無二の水產國として、陸地を牧場に當てるといふ必要のない世界だ。同時に米作上の多量收穫は、既に試驗を了つて居るのである。食糧問題を歐洲的に錯覺して騷いで居るものは、全く日本を知らないものだ。日本人の農業上の力量が此の如く證明されて、食糧增收の見込のついて居ることは、何と謂つても日本人の一の強味である。次には、


若宮卯之助氏

で、彼女は一寸思案した樣子であつたが、瞬間、身を躍らして河の中に飛び込んだのだ。

ざんぶといふ水の音、飛び散る水玉、白い泡、その中から彼女は、聲を張り上げて、精一ぱいに叫んだ。



『汽車が來たんだッ！　汽車が來たんだッ！　あぶないから早く川の中へ飛び込めッ！　小母さんが救けてやるから大丈夫だ。早くよう！』

常日頃から可愛がつてくれる彼女の言葉である。子供たちは何の躊躇もなしに、橋上から流水目懸けて飛び込んだ。

瞬間、ほんとうにその刹那であつた。汽車は轟然たる音響と共に、電光のやうな速さで、鐵橋の上を通り過ぎた。

四人の子供は無事に救はれたのだつた。自分の負傷を顧る暇もなく岸に辿りついた子供達を介抱する彼女（加藤きゑ女史）の尊くも雄々しい姿！　私は、何時か眼頭の熱くなつて來るのを覺えた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

日本人の商業的能力

に移る。日本は古來士農工商と謂はれて、商業の地位を少くとも形式上に於ては低いものとして居るから、所謂文明商人の見地から、自然に多くの不滿足もあつたのである。今や事情は少からず變つて居る。別して國際貿易に於ける日本商人の活動は、世界歴史の一新事實だと謂はれて居る。現に日本の商船は、絶え間なく五大洲を泳いで、世界の爲めに、世界の物資を、世界の各處に取引して、世界の有無を調節するといふ商業上の大使命に服して居るのである。

此の日本商人の國際的地位の特色は、南洋諸島殊にその蘭領に於て、最も面白き形に現はれて居る。即ち日本と支那と歐洲との商人の特色は、それぞれはつきりと其處に現はれて居るのだ。歐洲商人は、主としてその商品を港まで運んで來る。主としてだけである。それから先きは支那の商人は卸すだけ、土人との直接の取引は開かないのだ。(或は開けないのだ)日本人の取引も最初の狀態は、歐洲人と殆ど同じであつたが、次第に奥地に進入して直接取引の機會を得たのである。

支那商人の實際

は、歐洲人と日本人とが港に運んで來た物資を受けて、之を巧妙に捌くといふ立場である。支那人の販賣網は、綿密を極めたものだ。數百年の歷史的惰力と特殊の商才とを恃んで築き上げた立場であるのだから、その實力は何と

松平越中守の壁書

一、淫酒は早世の地形。
一、堪忍は身を立つるの壁。
一、苦勞は榮華の礎。
一、珍味珍膳は貧の柱。
一、多言慮外は身を損ずる根太。
一、仁情は家を治むるの疊。
一、華美は借金の板敷。
一、法度は僕を仕ふの屋根。
一、我儘は朋友に惡まるるの障子。

心の教

徳川家宣

心に物ある時は體窮屈なり、物なき時は心廣く體胖かなり。
心に慾ある時は義を思はず、慾なき時は義を思ふ。
心に飾ある時は僞をかまふ、飾なき時は僞なし。
心に驕りある時は人を侮る、驕りなき時は

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

しても認めなければならない。實力は實力であるが、此の支那商人の實力に關して、普通の日本人は少からず誤解を懷いて居るやうだ。支那人の實力は、他國の商人が港まで運んで來た品物を取次いで奥地で賣捌くといふことに限られて居るのだ。港で大きな輸入商として幅を利かせることはどうしても出來ないのだ。支那人自らは此の點を頗る殘念がつて居る。之を殘念がつて態〻奥地から輸入商を志して港に出て來た支那商人は、悉く失敗を繰り返へすだけに了つて居る。

略して言へば歐洲人は輸入商であり、支那人は卸小賣商であり、日本人は此の二つを兼ねた者である。日本人は輸入も出來れば、卸しも出來れば、小賣も出來るといふ何でも來いの商人である。此の點に於ける實際の問題は、何分にも日本人の活動の日の淺いことと、事情の深く知られて居ないことと、南洋向きの教育の缺けて居ることとに在ると謂ふべきである。日本人の農業的及び商業的態度は、此の如しだ。

その工業的能力は如何なる狀態

に在るのだらうか。日本は今や立派な工業國である。その工業上の研究の進歩に於て、世界の三大國に數へられて居るといふの勢である。即ち獨、米、日の順序は、工業研究の成績に於て、大體に誤つて居ないと謂はれて居るのだ。此の工業の進歩がなかつたならば、日本の農業も、商業も、その他一切の進歩も、今日の程度に及ぶことが出來ないのだ。

農業には肥料の關係があり、肥料には工業の關係がある。生絲の發達と機

人を侮らず。

心に私ある時は人を疑ふ、私なき時は疑ひなし。

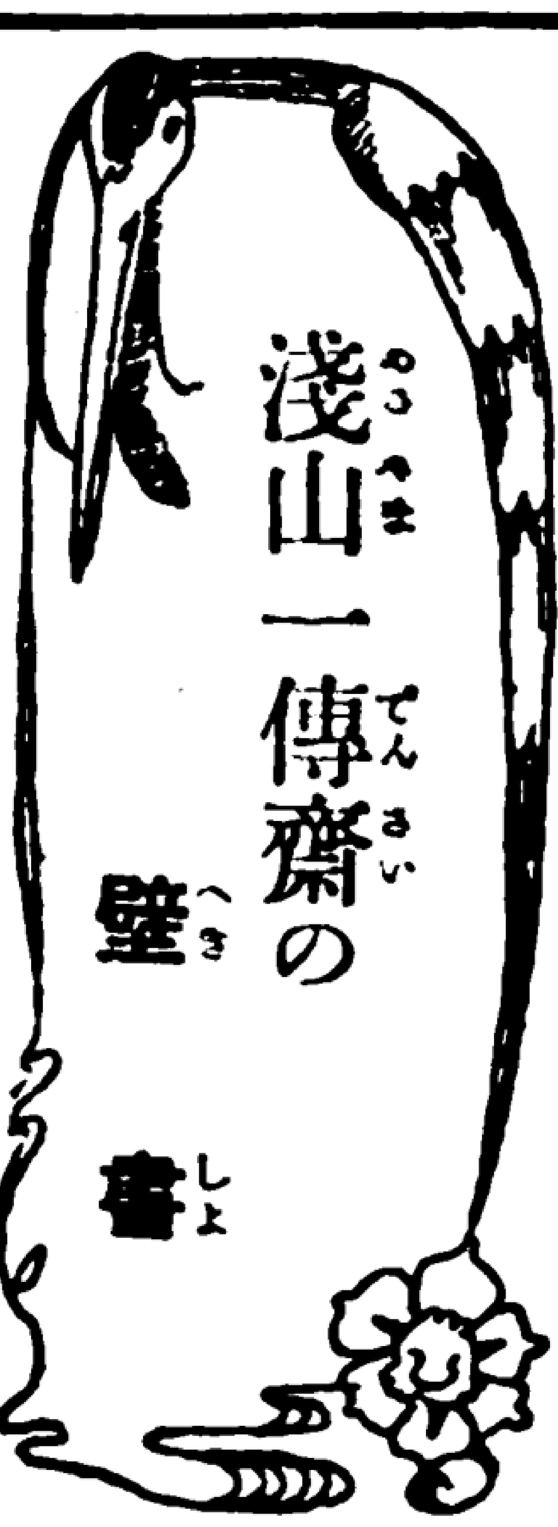
心に邪見ある時は人を害ふ、邪見なき時は人を害はず。

心に貪りある時は人に諂ふ、貪りなき時は諂びず。

心に怒ある時は言葉荒し、怒なき時は言葉柔かなり。

心に自慢ある時は人の善を知らず、自慢なき時は人の善を知る。

心に誠ある時は分に安んじ、誠なき時は分に安んぜず。



一、かさつは臆病の花。
一、短氣は未練の相。
一、心道は分別のいろは。
一、堪忍は忠孝の下地。
一、心掛は手柄の本。
一、武藝は其身の愼。
一、實意は自分の德。

械の進歩との關係はいふまでもないことだ。若し日本の商業に、その工業製品と之を運搬すべき船舶等の後援がなかつたならば、今日の發達を見ることは出來なかつたのだ。日本の工業は、その發達の年齡の弱きにも拘らず特種の日本的傾向を、明かに示して居る。

即ち日本人は何でも出來る人間であるといふの傾向を明かに示して居る。日本工業の特色は、日本人が、大きな物でも小さな物でも何でも御座れといふ多面的能力の具有者であることを證明して居る。日本人は世界最大の軍艦を造ることが出來る。同時に世界最小のセルロイドの人形を造ることが出來る。單に造るといふだけでない。その造つた品物が、それぞれ國際競爭の地位を占めることが出來るといふ點に、日本人の特色があるのだ。

日本人は、農工商其他の有形的活動に於て多面的であるに止らず、

學問藝術の無形の世界

に於ても同樣である。日本人は、如何なる學問藝術に於ても能力を試みることが出來る。如何なるスポーツ、如何なる競技、苟も日本人が手を着けたもので國際競爭の水準を降るといふやうなものは一つも無いのである。日本は久しく尙武の傳說を奉じて居た。花は櫻木、人は武士。武士道の背景に立つた國際的日本は今や、世界經濟の最大實力の一に數へられて居る。

此の多面的日本人の實力を涵養し、保障し、守護するものは、日本の國柄であり、その地形であり、その洋上の位置である。不幸にも大多數の日本人は、單なる日本國內の生活に始終して居るが爲めに、此の點に關して少なか

動物美談

愛犬チヤリの死

天野三郎



もう四年前の事になります。ぽか〳〵と暖い春のある日の事でした。

妹の正子が、四月から學校へ上るために買つて貰つた赤いカバンをかついで、チヤリ(我家の愛犬)と一緒に遊びに出て行きました

チヤリはよく正子になれて居ました。正子が生れた年に、裏の物置きの側で泣いて居たのを、拾ひ上げてずつと飼つて居たのです。正子もチヤリが居れば、一人でござなどを敷いておとなしくして遊んで居ました。ですから正子が居ない時は、チヤリは如何にもさびしさうでした。

『大變だ、大變だ、ま、ま、正子ちやんが川に落ちた』と突然お百姓の勇さんが泣聲で喚いたのを後に、私は無我夢中で村に一つしかないドンドン川へかけ出しました。その川は大した流ではありませんが、幅が二間もあり、深さも四尺位あります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

らず理會が缺けて居る。如何なる大勢力を擁して臨んで見ても、單なる一國だけで日本の死命を制することは出來ないのだ。これ實に日本といふ國柄とその特殊の地形と位置との賜物である。日本は自分自身の船で、自分自身の力で、自分自身の意の儘に、全世界の大半と取引が出來る偉大なる特權を持つて居る。大多數の日本人は、此の

偉大なる特權の意味

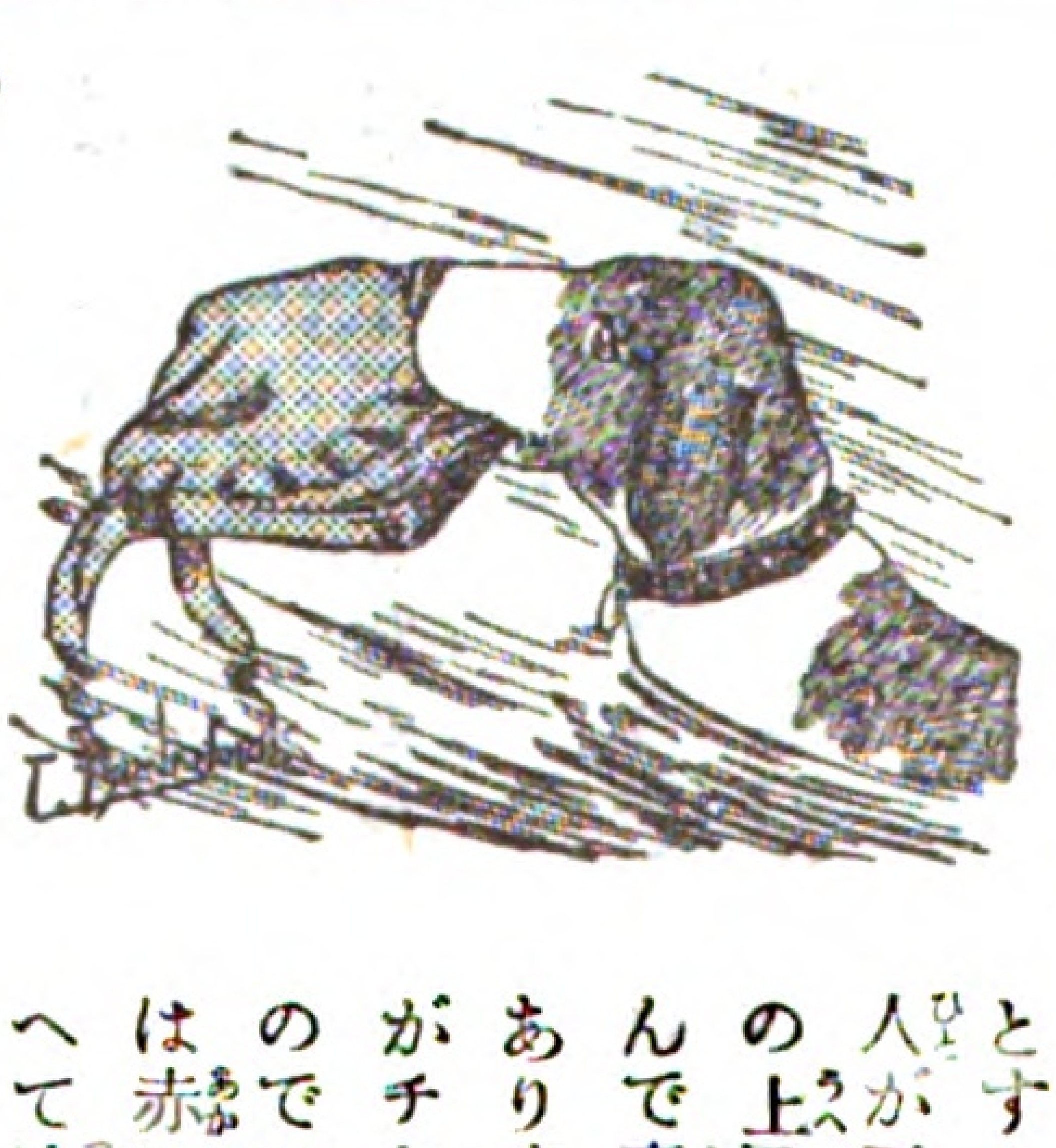
を十分心得て居ない。此の偉大なる特權の爲に負はされて居る責任の重大に自覺を缺いて居る。今日の日本は、二つの點に於て非常な誤りに陷つて居るやうだ。

第一は日本の山と海とが、新しい學問と技術との應用に依つて更に大いに開發されるものであることを悟つて居ない。次ぎには日本人の活動の舞臺が、東洋と南洋と東阿弗利加とに亙つた大舞臺であることを心得て居ない。此の國際競爭の時代に於て、日本の內地にツクネンとして、徒らに外來の勢力に壓迫せられ、輸入超過の結果に悲鳴をあげるといふのは、如何にも情けない智慧のない話である。

日本は衣食住の資源に困らない社會である。萬代不易の礎の上に据つた國柄である。その民族は何でも出來るといふ人間である。問題は單に世界を誤解して居ることと、誤解するやうな敎育に甘んじて居ることと、自家の能力と特徵と傾向と可能性とに就いて自覺が足らず、反省が足らず、獨立獨行の大無畏の精神を喚び起すことに氣がつかないといふ點に止るのだ。（終）

十分ばかりして、正子は二十間程川下の葦の中で發見されました。人工呼吸のお蔭で、間もなく、正子は息をふき返しました。みな歡聲を上げました。家へ抱いて歸つて介抱してゐる中に、正子はだん〳〵元氣が出て來ましたが、やがて小さい聲で『チヤリは？』と言ひました。

私は、はつと氣がついて、外へ出かけようとすると、村の人が二三人で板の上にのせて運んで來るものがあります。それがチヤリだつたのです。チヤリは赤い鞄をくはへて冷くなつて居ました。



チヤリは正子の後を追つて、川に入つたのでせう。さうして正子の大事な鞄をしつかりくはへて、正子をも助けようとしたのでせう。併し彼には餘り力がなさ過ぎました。

苦しい身體を起して、正子は緣側に出てチヤリをじつと見て居ましたが、その小さい目には何時か涙がたまつてゐました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



諧謔小說

ガラマサどん

佐々木邦
細木原青起 畫

生きた材料

或朝、出勤の電車の込み合ひの中で、
『熊野さん。』
と私を呼んだものがあつた。振り返つて見ると、販賣課の柳下君だつた。
『何うぞ。』
と會釋して席を讓らうとしてゐる。
『宜いですよ。』
『いけません。何うぞ。』
『もう直ぐですから。』
『いや。あなたは年長者です。』
『それでは。』
と私はお言葉に甘えた。柳下君は私より若いけれど、會社ではズッと故參だ。つい先頃までは、同じ電車に乗り合せても、平氣で新聞を讀むでゐたのである。
『何うですか？お忙しいでせう？』
と柳下君は私に代つて吊革に下りながら訊いた。
『掛け持ちで、天手古舞ひです。』
『しかしそれ丈けのことがおありでせうから、結構ですよ。』
『何あに、叱られるのが儲けぐらゐのものです。松本君も始終こぼしてゐます。』
『松本さんと同じ仕事をなさるんですか？』
『はあ。無論僕は手傳ひですが、家へまで引つ張られるんですから、僕の方が本當のプライベイト・シクレタリーかも知れません。』
『信用が篤いんでせう。』
『いや、お人好しだから、使ひ宜いんですよ。』
と私は謙遜してやつた。
『まさか。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『ハツハヽヽ。』

『ガラマサどん、いや、社長はナカ〳〵精力家だそうですな。』

『豪いものですよ。矢つ張り體力からして普通人ぢやありません。』

『はゝあ。』

『僕も隨分丈夫な方ですけれど、お相手に骨が折れます。』

『お家へは始終伺ふんですか？』

『いや、時折ですが、大將、話し好きですからね、晩くなるんで困ります。』

『成程。』

『晝間働いた上に、十一時十二時までお相手をすれば、誰だつて睡くなりまさあ。』

『御道理。』

『欠伸をすると、大將、頗る御機嫌が悪いんです。』

『はゝあ。』

『大將は決して欠伸をしません。僕は見たことがないんです。』

『矢つ張り精力家ですなあ。』

『迚も敵ひませんよ。』

『お察し申します。しかしその分認めて戯けるんですから。』

『何あに、叱られてばかりゐます。』



『何う致しまして。』

と柳下君は羨ましさうだつた。

次の停留場で、機械課の臼井さんが乘り換へて來た。

『やあ。』

『何うぞ。』

と今度は私が讓る番だつた。この人は私よりも數年の長者である。

『飛んでもない。』

『あなたは御老體です。』

『冗談言つちやいけない。』

『さあ。何うぞ。』

『もう直ぐだ。これで結構。』

と臼井さんはいつかな應じない。尤も後二停留場だ。

『それでは失敬します。』

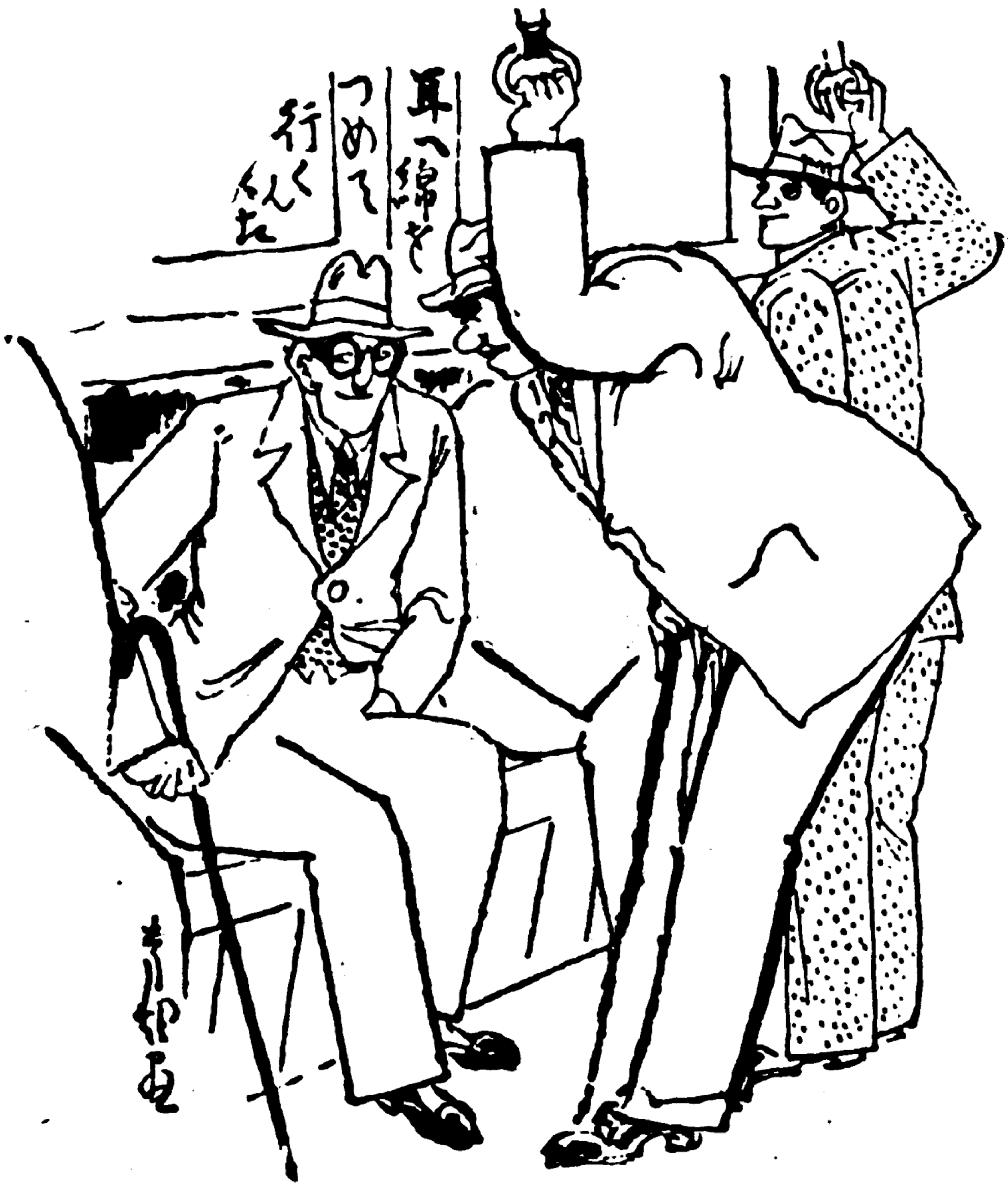
と私はそのまゝ納まつた。

『何うだね？　社長秘書は。』

と臼井さんは釣下つて私に話かけた。若し吊革がなかつたら、正に私を撲らうとする構へだ。しかし多大の善意を持つてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『眞のお手傳ひです。』
『本務よりも忙しいだらう？』
『掛け持ちですから、彼方此方と天手古舞ひです。』
『お祭し申す。』
『夜まで引つ張られるんですから、敵ひません。』
『淀橋の方へ伺ふのかね？』
『はあ。』
『それぢや大變だ。義太夫を聽かされやしないかい？』
『はあ。それで弱るんです。』
『ガラマサどんのデン／＼と來たら、皆逃げ出すんだからね。』
『欠伸をすると、御機嫌が惡いです。』
『當り前さ。宴會の時は松本君が手帖につけてゐる。』
『宴會の時は大勢ですけれど、家では二人差向ひですから、些つとも油斷がなりません。』
と私は訴へた。
『まあ／＼、精出して拜聽することだよ。』
『はあ。』



『相手がガラマサどんだ。惡いやうには決してしない。』
『はあ。』
『君は義太夫は嫌ひかい？』
『然うでもないんですけれど、妙に草臥れますよ、大將のは。』
『素人藝は皆然うさ。至らないところを補つて聽いてゐるから、精力の持ち出しになる。君。』
『何ですか？』
『好い法がある。傳授しようか？』
『何うぞ願ひます。』
『耳へ綿を詰めて行くんだ。』
『さあ。他の用事の時、聞えないと困ります。』
『用意してゐて、イヨ／＼始まる時に、便所へ立つて詰めて來れば宜い。』
『成程。』
『こんなことを僕が敎へたと言つちや困るぜ。』
『大丈夫です。』
『實は僕の方の連中は宴會の時、皆實行してゐるんだ。』
『はゝあ。』

『專賣特許さ。眞似をされちや困る。』
と臼井さんは傳授の件から急に聲を潛めて、柳下君に聞えないやうに計らつた。
『流石は機械課ですな。』
『ハツハヽヽヽ。』
『何ですか？』
と柳下君が首を伸して訊いた。
『秘密々々。』
と臼井さんは相手にしない。
『熊野さん、何ですか？』
『冗談ですよ。』
『敎へて下さい。』
『さあ。困りましたな。』
『決して喋りません。』
と柳下君は益々好奇心を唆られる。
『それぢや後から。』
『何うぞ。』
『いけないよ、熊野君。洩らされると、僕は課のものに申譯がない。』
と臼井さんはそれも然うだつたかも知れない。
この二人は一般同僚の態度を代表してゐる。私は社長秘書兼務を仰せつかつて以來、急に人氣者になつた。上の人も下の人も、
『熊野君、何うだね？』
『熊野さん、何うですか？』
と競つて珍重してくれる。二年そこ〳〵の新參だから、下といつては給仕小使の外殆んどない筈だつたが、同輩が一目置いて下になつてくれたのである。今まで全く交渉のなかつた他の課の連中まで何かの切つかけに話しかける。
『熊野さん。』
『何ですか？』
『あなたは昨日の夕方、社長とお二人で京橋のところで自動車からお下りになつたでせう？』
『えゝ。大好堂へ寄つたんです。』
『僕、外から覗いて見ました。』
『然うでしたか。』
『骨董屋ですな？ あすこは。』
『えゝ。』


毛髮を美しくする
メヌマポマード
最近都會で流行する
新人……としての淸姿には
メヌマポマードの
一糸亂れぬ頭髮美……



『あなたはあの方の趣味がおありなんですか？』
『いゝえ、眞のお供です。』
『日曜でもお家へ伺ふんですか？』
『お閑だつたものですから、呼び出されたんです。』
『大變ですなあ。お忙しいでせう？』
『天手古舞ひです。』
『社長のお家へは年賀に上る丈けですが、驛から大分あるやうですな？』
『十分ぐらゐのものでせう。』
『然うですかねえ。もつと遠いやうな氣がしましたが。』

『慣れると近いです。』
『あなたのお宅は何處ですか？』
『青山です。』
『すると會社へは市電でお出ですな？』
『えゝ。』
『何分かゝりますか？』
といつた具合で、相手になつてゐると、果しがない。會社まで何分かゝるかといふことは皆が訊くから、餘程重大な問題だらうと思つてゐたが、これは住所を尋ねた後、眞のお世辭に心配してくれる丈けで、深い意味はないのだ。考へて見れば、一時間かゝらうが、二時間かゝらうが、本人以外には痛痒ない。
『二十五分かゝります。』
と私はその都度答へてゐるのに、昨今でも、
『お宅は青山でしたね。會社まで何分かゝりますか？』
と未だに半分しか覺えない男がある。宣傳部に机を並べてゐる畑君丈けは親しい間柄だから、然う慌てゝ態度を變へない。私の値打を初めから認めてゐる。何も彼も知つてゐるのだから、この男に向つて勿體ぶつても仕方がない。
『熊野君、君は迚も素晴らしい人氣だぜ。』
と云つて、喜んでゐる。
『もう平社員ぢやないんだからね。』
『皆も然う誤解してゐるんだ。』

『君に會つちや敵はない。』
『餘つ程信用があると思つてゐるよ。』
『有難いね。』
『ガラマサどんの懐ろ刀だつて評判だ。』
『ハツハ、、。しかしこれでも肥後守ぐらゐの切れ味はあるかも知れないよ。』
『精々その邊だらうが、世の中は面白いものさ。』
『何故？』
『僕まで鼻が高いんだ。』
『ふうむ。』
『君と懇意にしてゐるものだから、皆それとなく敬意を表してくれる。』
『そんなに豪くなつたのかなあ、僕も。』
『兎に角話と云へば君のことだ。君の經歴を僕のところへ訊きに來る奴さへある。』
『宜しく宣傳してくれ給へ。』
『いや、僕は事實ありのまゝを正直に話してゐる。』
『それぢや宣傳部にゐる資格がないぞ。』
『先刻も米澤君が熊野君は一體何新聞から來たんですかと訊いたから、新聞は三つ四つ前でしたらうと言つて置いた。』
『いけないね。』
『新聞の次が雜誌だつたのかい？　雜誌の次が新聞だつたのかい？』
『新聞から雜誌、それから後は會社ばかりさ。』
『それぢやその通りだ。』
『方々で首になつたことまで喋つたのかい？』
『うむ。』
『よしてくれ。』
と私もこれには恐れ入つた。
『ところで何うだい？　ガラマサどんの自叙傳は。』



『一向目鼻がつかない。大將、義太夫ばかり語つて聽かせる。昨夜も十二時さ。』

『未だ一枚も書かないのかい？』

『材料がないから、手のつけやうがない。』

『しかし材料蒐集の爲めに私宅へ伺ふんだらう？』

『それは然うだけれど、大將、少し話すと直ぐに氣が變つて、「何うだい？　一段聽かせようか？」と來る。』

『君は能く辛抱が續くね？』

『これから取り入らうつてところだもの。此方は素より一生懸命。』

『おや／＼？』

『いや、もう／＼、大抵のことぢやござんせぬ。』

『よし給へ。馬鹿々々しい。』

と畑君も義太夫は耳に綿の欲しい方だ。

『大將、注文が無理だよ。「經歷なんか何うでも宜い。成るべく接觸してゐて、見聞したところから直ぐに精神を書け」と言ふんだ。例のシエキスピールの精神、キリストの精神さ。』

『國產ビールの精神だらう。』

『然うかも知れないが、大將、自信家だからね。西郷どんに會つて感じたところを書くのが本當の西郷傳ぢやあるまいかと言つてゐる。僕はガラマサどんから何か靈感を受けるのを待つてゐるんだ。』

『西郷どんとガラマサどんは一緒にならないよ。』

『それは分つてゐるけれど、口に出した日には忽ち御用御免になる。』



『一體いつまでに仕上げろと言ふんだい？』

『三年かゝつても五年かゝつても宜いんださうだから、此方も敢へて急がない。』

『しかし出來る丈け早くやる方が君の爲めだぜ。』

『何故？』

『大將はもう六十六だから、いつコロリと逝くかも知れないよ。』

『いや矍鑠たるものだぜ、僕なんか迚も敵はない。』

『萬一の場合さ。自叙傳の出來ない中に間違があつて見給へ。君の立場は隨分變挺なものになるぜ。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『舊の木阿彌さ。』

『現在得意な丈けに思ひやられる。』

『木から落ちた猿かね？』

『それで濟めば結構だけれども。』

『まさか首にはなるまい？』

『首になる理窟はないか、君の性分として辛抱が出來るか知ら？　君は不平があると直ぐにやめる男だからね。』

『それはその時になつて見ないと分らない。』

『何あに、もう六回おん出されたかおん出だかしてゐる。』

『おい。』

『何だい？』

『そんなにツケ〳〵物を言ふなよ。』

『君の爲めを考へてやるのさ。取越し苦勞のやうだが、この不景氣に中年者が短氣を起したら、もうお仕舞ひだぜ。』

『驚いたなあ。昨今僕に意見をするのは君丈けだ。』



と私は少々不平だつた。

『一體君は自叙傳が目的かい？　出世が目的かい？』

『無論出世さ、幾度も話してゐるぢやないか？　自叙傳に粉骨碎身してから、感心な奴だといふ次第で引き立てて貰ふんだよ。』

『それなら益々急ぐ必要がある。ガラマサどんが生きてゐればこそその自叙傳だからね。』

『分つてゐるよ。』

『ガラマサどんが丈夫でゐればこそ引き立てゝ貰へるんだからね。』

『急ぐよ。』

『釋迦に說法かい？』

『まあ、その邊だらう。』

『君はその通り現金だから案じられる。トン〳〵拍子になると


専門家用秘密器具
無代進呈
先着の入學者百五拾名を限り
肖像畫通信教授
急所は肉筆教授、器械應用の作圖法小寫眞よりの擴大法、絹地肖像畫法彩色法、モデルに依る描寫法等三ヶ月で卒業。校則及見本ハガキで申込次第急送す（必ず雑誌名御記入の事
●東京府田端東台通り角一號　肖像畫通信學校

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

元氣が好いけれど、普段はカラキシ駄目だ。

『そんなこともなからう。』

『いや、この間まで不平ばかり言つてゐたぜ。』

と畑君は私の平素を知つてゐるから、退つ引きさせない。

私は午前中宣傳部の仕事をして、晝から社長室へ出仕する。松本さんの手傳ひをしながら、社長の爲人を研究することになつてゐる。

『生きた材料を提供してあるんだからね。』

と社長は言ふ。

『はあ。』

『ねえ、松本君。』

『はあ。』

と松本さんも机から頭を擡げなければならない。うつかりしてゐると叱られる。社長は尚ほ閑を見て昔話をする。

『一寸思ひ出したから、熊野君の參考の爲めに、我輩の腕白時代を物語らう。松本君も聽いてくれ給へ。』

『はあ。』



『君達と違つて、我輩は寺子屋の教育を受けたものだ。時世に後れてゐる筈だよ。』

『何う致しまして。』

『君達はいつか我輩の語つた菅原傳授手習鑑、寺子屋の段を聽いたらう？』

『はあ。』

『松本君。』

『はあ。』

『君はあの時、ビラに寺小屋と小の字を書いたね？』

『はあ。』

『あれはいけない。子だよ。子供の子さ。寺子といつたものだ。寺子の集まるところ即ち寺子屋さ。』

『然うでしたか。私は寺の小屋だとばかり存じてゐました。』

『新しがつても、然う無學ぢや仕方がないぜ。』

『恐れ入りました。』

『あの寺子屋の段の通りだつたよ。お師匠さんは矢張り浪人だつた。弓矢は家に傳へても、今は仕へん君知らず、羽なき矢間重次郎。尾羽打ち枯らしてゐたのだらう。』

『はーあ。』

『考へて見ると、日本て國は變な國だつた。實に變な國だつた。何うも變な國だつた。』

『何故でございますか？』

と、斯ういふ時氣を利かさないと直ぐに御機嫌が惡くなる。

『寺子屋といへば、大抵浪人の仕事だつた。最も大切な普通敎育を失業者がやつてゐたんだからね。』

『成程。』

『未だ丁髷時代で、今思ひ出して見ると、お師匠さんは丁度武部源藏さ。我輩は寺子屋の芝居を見る度に何ともいへない懷かしい心持がする。語る時でも本當に泣いてゐるんだ。あだおろそかに聽かれちや困る。』

『はあ。』

『矢張り昔のものは好い。活動寫眞なんか見るものは馬鹿だよ。』

『はあ。』

『確かあの會の時だつたが、我輩の語つた直ぐ後から映畫說明の眞似をした男があつたね。』

『さあ。』

『あれは誰だい？』

『餘興は大勢やりましたから、誰でしたか一寸思ひ出しません。』

と松本さんは明答を避けた。これがこの人の好いところだ。

『あゝいふ人間は將來見込がない。』

『しかし好き〳〵で仕方がないでせう。』

『それにしてもさ。』

『はあ。』

『社長の寺子屋時代はお幾つ頃でしたか？』

と私は又氣を利かした。

『八つから入つたやうに覺えてゐる。明治三四年だつたらう。』

『はゝあ。』

『お師匠さんはナカ〳〵嚴しかつた。我輩は腕白もので叱られ通しさ。しかし胸は敏かつた。お師匠さんも「太田原は名詮自性、宗鄕ぢやの」と頭は認めてゐてくれた。』

『栴檀は二葉より香しかつたんですな。』

『何あに、中で神童の組さ、到頭こんな馬鹿ものになつてしまつた。』

『何う致しまして。』

『ハツハヽヽ。』

『鬪拔ける人は矢張り子供の時から違ひますよ。』



ニキビ、吹出物に
にきびとり美顔水

大ていのニキビですと、三四度もおつけになれば目に見えて効果が現れますので、色色なつけ藥や服藥で失望された方でもこの藥の効能には驚いてゐられます。この藥はまた美容藥としても比類なき効果があるので男女共盛んに常用されて居ます。

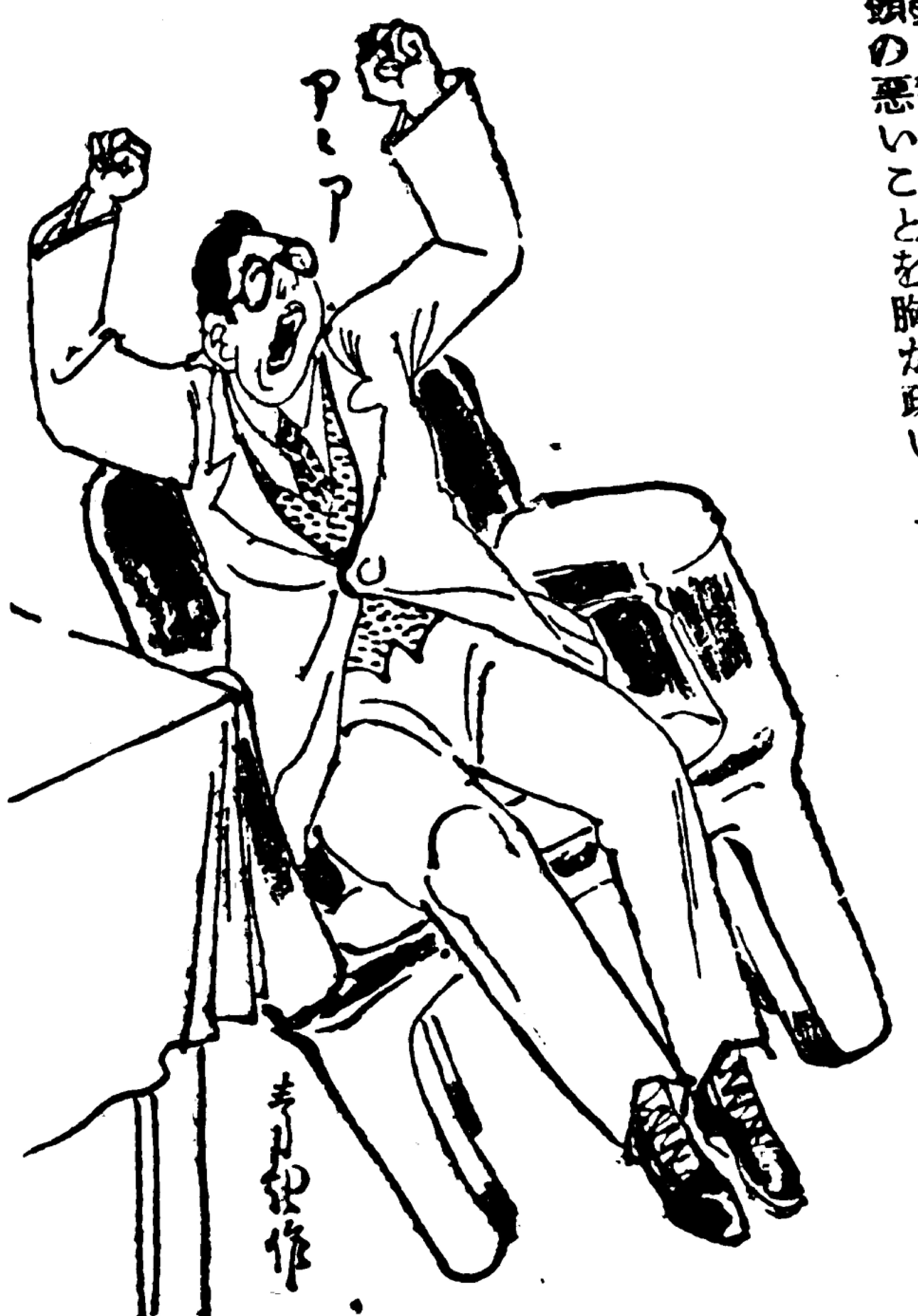
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『僕なんか子供の時だつて今だつて褒められたことはありません。』

と松本さんは厭味を言つた。

『兎に角、目から鼻へ拔けるやうな子だつた。何處へ行つても、太田原の宗鄕さんは胸が敏いといふ評判さ。當時は頭つてことを言はなかつた。頭は頭痛の道具とでも思つてゐたのだらうか？』

『さあ。』



『頭の惡いことを胸が疎いと言つたものだ。胸に手を當てゝ考へるとか、腑に落ちないとか、肚だとか度胸だとか膽力だとか、頭の働きを胸中でやつてゐたんだね。』

『これは面白い御觀察です。』

『膝とも談合なんて、もつと下の方へ持つて行つてゐる。』

『ハツハヽヽ。』

『いや、何うも我輩は餘談に入つていけない。』

『思想豐富でいらつしやるからです。』

『閑話休題。その太田原の宗鄕さんだが、褒められて増長したんだね。いつの間にか餓鬼大將になつてしまつた。尤も群鷄の一鶴さ。何れを見ても山家育ち。繁華の地と違ひつて次第で、侍の子は我輩一人だつた。小さい刀を一本差してゐた。自然押しが利く。』

『成程。』

『しかしお師匠さんには敵はない。失業者にしては教育家だつたよ。侍の子も町人の子供も差別しない。我輩がいたづらをすれば、胸の疎い百姓の子供と同じやうに罰する。机を捧げさせられたり、線香を持たされたり、態はない。これが癪に障つた。此方は何處までも侍の子だといふ頭がある。』

『御道理です。』

『口惜しくて仕方がないけれど、お師匠さんは影を踏むでも罰を當てると聞かされてゐる。怖くて手出しが出來ない。そこで考へたんだよ、長いこと。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『はゝあ。』
『お師匠さんは勿體ないから、代りに奥さんに敵討をしてやらうと思ひついた。奥さんは世話を燒く丈けで些つとも敎へない。お師匠さんの奥さんだけれど、お師匠さんぢやないから大丈夫と考へた。迷惑千萬な話さ。』
『イヨ〳〵佳境に入りますな。』
『そこで我輩は或日谷川へ行つて、大きなガラマサどんを捉へて來た。』
『はあ？』
『ガラマサどんさ。』
『何ですか？　一體全體。』
『鰌だよ。』
『はゝあ。』
『鰌の大きなのを捉へて來て、奥さんの袂へ入れた。夏のことだから、ガラマサどん元氣が好い。』
『ハツハ、、、、。』
『這ひ上つて行つて、腋の下を挾むだ。大變な騷ぎさ。』
『ハツハ、、、、。』
と私達は大笑ひをして顏を見合せた。
危い〳〵。
　ガラマサどんは國産ビールの外三つ四つの會社に關係してゐるから忙しい身體。日中、閑といつては殆んどない。話し始めると間もなく、訪問客が見えたり重役が入つて來たりして、
『それぢや熊野君、今の續きは今晩ゆつくり話さう。思ひ出した時やつて置かないと忘れてしまふから、御苦勞だけれど、今晩七時までに來てくれ給へ。』
といふやうなことになる。私は家へ歸つて、夕食を認めてから、淀橋の新邸へ出頭する。そこでは滅多に邪魔が入らない代りに、社長は思ひ存分待たせる。時間をやかましく言ふんだが、あれぐらゐの地位になると、自分のことは特別にしてゐる。それで通るから仕方がない。此方は後生大切と必ず七時までに駈けつけるけれど、社長が應接間に現れるのは八時過だ。
　或晩、いつもより長く待たされた。私は幾度も時計を見て
『これなら八時過に來いと言つてくれゝば宜いのに。』
と呟いた。次いで退屈の餘り欠伸をしてゐるところへ、女中がお茶のお代りを持つて來て、
『お待ち遠さま。』
と笑つた。
『今晩は特別長いですた。』


昔ハ筆　惡筆ハ一生ノ損
今ハペン　能筆ハ一生ノ得
新式ペン字手紙上達法教授
茲に日會獨特の速寫式練習法にて短日月に日本字英字は勿論手紙の書方簿記の付け方迄初習者でも必ず上達する速成法を通信教授すキングで見たとハガキで申込次第見本說明書無代進呈す(男女共)
東京目白女子大學校前　ペン習字研究會

と私は兩肘を突つ張つて首を左右に動かした。肩が凝つてゐる。

『もうソロ〳〵でございませう。』

『何をしていらつしやるんですか？』

『およつていらつしやいますのよ。』

『え？』

『お休みになつていらつしやいますのよ。』

と女中は拳を耳のところへ寄せて、枕の意味を傳へた。分りの惡い男だと思つたのだらう。

『何處かお惡いんですか？』

『いゝえ、夕食後お風呂に召してから、いつも一時間か二時間お休みになるんでございますよ。』

『はゝあ。然うですか？』

と私は感心した。宵寢をしてゐるんだ。欠伸をしない筈だ。

『やあ。』

とそれから間もなく社長が現れて、

『何時だい？』

と訊いた。

『八時半です。』

『それぢやもう晩いから、話は又今度にして、一段語つて聽かせよう。座敷へ來給へ。』

『今晩は義太夫は御免蒙ります。』

と私はつい強く言つた。待たせて置いて、もう晩いからもないものだ。一寸の蟲にも五分の魂がある。

『何故だい？』

『私もお仕事をお引受けしてゐる以上は早く完成したいのです。』

『それは分つてゐるよ。』

『義太夫も結構ですが、材料になるやうなお話を承はりたいと存じます。』

『材料は毎日生きたのを提供してゐるぢやないか？』

『しかし一通り御經歴を承はつて置きませんと、何處から手をつけて宜いのか分りません。』

『いつも同じことばかり言つてゐるんだね。精神を書けば宜いんだよ、我輩の精神を。』

『それは及ばずながら心掛けてゐるんですけれど。』

『我輩が義太夫を語つてゐるところを書いても、我輩の精神が現れさうなものぢやないか？』

『さあ。』

『斯うやつて腕組をしてゐるところを書いても事は足りる。』

『肖像畫なら兎に角、自叙傳となりますとナカ〳〵然うは參りません。』

『いや、君は普通の傳記類に囚はれてゐるから、經歴に重きを置くのさ。もつと碎けてかゝつて貰ひたいね。例へばシエキスピールにはシエキスピールの精神がある。その精神を充分に傳へるやうに書いたものは、たとへ生年月日やその他の事實に

多少の間違があつても、立派なシエキスピール傳ぢやあるまいか？』

と社長は自分こそ同じことばかり言つてゐる。これは恐らく交詢社あたりの文藝講演で聞いて來たのだらう。元治元年生れの寺子屋育ち、その後變則英語を少し齧つた丈けださうだから、所謂シエキスピールなぞは讀むでゐる筈がない。



押問答をしても相手が社長ぢや仕方がない。長いものには卷かれろと思つて、私は一段聽かされることになつたが、

『しかしお序ですから、社長が義太夫をお始めになつた動機をお話し下さい。』

と條件をつけた。

『然うさね。』

『簡單で結構です。お若い時からおやりでしたか？』

『いや、四十を越してからだけれど、動機は遠く青年時代に胚胎してゐる。熊野君、これは立志傳に持つて來いの材料だよ。』

『有難いです。』

『志を立てゝ上京してから間もなくのことさ。我輩は先輩の紹介で或辯護士の家へ書生に住み込むだ。この間話したらう？そら、將來毎日コーヒ湯の飲める身分になつてやらうと發憤した頃のことさ。』

『承はりました。』

『その辯護士といふのが毎晩義太夫を語つたものだ。それも奧さん初め、書生女中、家中のものが聽いてゐないと御機嫌が惡い。我輩も無論傾聽した。』

『成程。』

『今考へて見るとナカ〳〵巧者だつたが、その頃の我輩は徹頭徹尾迷惑した。しかし物は考へやうさ。禍を轉じて福にするやうに心掛けなければいけない。毎晩拜聽を仰せつかりながら、今こそ迷惑してゐるけれど、將來は必ず人に迷惑をかける

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

くらゐの身分になりたいと發心した。

『はゝあ。』

『常時、我輩が詩を吟じたところで誰も迷惑しない。何となれば、「やかましい！　默れ」の一喝で問題が片付く。しかし相應の地位になると否應なく聽かせる。聲の遊藝を聽かせるか聽かされるかで人物が定ると考へた。』

『これは驚きました。』

『演説にしても然うだらう？　聽かせる力が聽かされる力よりも大抵の場合豪い。』

『はあ。』

『物事の逆を行くことが時には必要だよ。若し常時義太夫が厭だ〳〵と思つてゐたら、我輩は恐らく今日がなかつたらう。今に見ろと思つて聽いてゐたから、勤まつたし、好きにもなつた。今ではあの辯護士に感謝してゐる。尤ももう疾うに死んでしまつたけれど。』

『好い御教訓です。』

『その後數年で何うやらコーヒ湯の飮める身分になつたが、未だ〳〵義太夫を語るには遠い。單に好みで彼方此方聽いて歩く丈けだつた。これが二十年も續いたらうね。實に一朝一夕ぢやない。』

『會社へお入りになつてから、お始めでしたか？』

『いや、入つても平社員ぢや誰も聽いてくれない。』

『成程。』

『四十を越して重役になる早々、時こそ來れとイヨ〳〵始めたのさ。』

『然ういふ御動機ぢや私も仕方ありません。』

『一段聽くかね？』

『はあ。』

『一間にこそはあゝ……』

と社長は立つた。ついて日本間へ行つたら、三味線彈きが待つてゐた。迚も敵はない。（つゞく）

三十年間努力の結晶　一萬圓を社會事業に
幼年倶樂部の記事に感激した一女性の美談

弱い女の身で三十年間汗と熱とで蓄へた貴重な一萬圓を社會事業の爲にポンと投げ出したと云ふ近來稀に見る事實美談が世人の注目を惹いて居る。名古屋市中區茶屋町四六産婆堀田敬子(五五)さんがそれである。敬子さんは産婆學校を卒業し、二十歳頃から今日まで約三十三年間助産婦としてひたすらに獻身的生活をつゞけてきたのである。感ずるところあつてずつと獨身を守つた爲實子はなく姪のみつ子(二六)さん甥の信世(一〇)さんを引き取つて我子の如く愛育してゐるが、家庭は非常に嚴格で自分も實踐躬行して來た。敬子さんは語る。『子供が讀んでゐる幼年倶樂部に日本が外債で苦しんでゐることやそのために多くの方々が國庫へ獻金なさいますお話が出て居ますのを見て強く心をうたれ、少しばかりですが寄附しました。』と

かうして本社の幼年倶樂部はお子様方ばかりでなく、大人の方々も感激され、多方面より浴びるが如き賞讃を博して居ります。

特別大懸賞「キング一頁讀物」大募集

キングは、當今の時勢に鑑み、日に日に深刻化しつゝある人間苦生活苦の暗黒世界に喘ぎ蠢く人々を、春風の如きまどかな柔ぎの中に誘ふべく、飛びぬけて明るい、面白い讀物記事を滿載して、希望と歡喜と幸福に滿ちた一大殿堂を築き上げたい存念です。從つて今回の懸賞も、斷然募集種目を變へ、範圍を擴大して左の如き原稿を天下に公募することゝなりました。是非是非キングの趣旨に贊意を表せられ、奮つて御力作を投ぜられむことを切望いたします。

募集種目

○短篇小說　○漫文漫談
○名人物語　○家庭科學
○短篇戯曲　○新作狂言
○縮尻話　○滑稽萬歳
○映畫小說　○新作浪花節
○難關突破記　○偉人名言
○ラヂオドラマ　○成功美談
○仁和加　○泰西小唄
○逸話美談　○豪勇物語
○滑稽問答　○古今意地くらべ

○感心した話　○奇聞珍聞
○皮肉くらべ　○寓話
○呼賣文句　○道話
○車中スケッチ　○奇智頓才物語
○家庭スケッチ　○あほだら經
○途上スケッチ　○魔術
○卓上五分間　○手品
○滑稽掛合　○智慧くらべ新案
○誌上レヴュー　○奇抜くらべ
○一騎打物語　○家庭遊戯
○家庭笑話　○各種判じ物
○新作落語　○之は意外物語
○新作講談　○奇人變人物語
○探偵コント　○途方もない話

その他面白くて明るい爲めになるものだつたら何でも歡迎します。

賞金

優秀篇四百九十篇には左の如く賞金を贈呈いたします

一等（賞金拾圓）三十名
二等（賞金五圓）六十名
三等（賞金壹圓）四百名

應募規定

○一篇四百字原稿用紙のこと。
○一人で幾篇投稿さるゝも差支へなし（但し各篇毎に別々に綴ぢ、且つ一篇毎に住所姓命を明記のこと）
○封皮には「キング一頁讀物原稿」と朱書のこと。
○宛名は東京・本郷・駒込坂下町　キング懸賞部
○〆切　二月末日
○應募原稿は一切返戻せず
○發表　本誌六月號

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



日露兩將の腹藝
—寺内正毅伯とクロパトキン將軍—

陸軍中將　堀内文次郎
寺内萬治郎畫

一

『露國陸軍大臣クロパトキン將軍來る！』

この通告があつた際、我が軍部當局は、ハツとした。

將軍は、元來非戰論者だが、日本を訪れる目的が那邊にあつたかはハツキリと分つて居た。

東方經略に野心のある露國は、已に韓國々境まで、その手を延して、機會あらば、滿韓を併呑しようとしてゐた。だが、此の横車を押さうとすると、當然障害物となるのは、日本の存在である。

『日本は、露國に對して、何う考へて居るか』

露國としては、それが知りたかつた。

で、陸相自から日本の地を踏んで、日本の對露政策を探らうといふ腹であつた。

時は、これ明治三十六年、丁度日露戰役前年の春四月二十八日、將軍は皇帝の勅命を蒙つて、露都を出發した。

一路、極東へ。西伯利鐵道に投じて、道すがら沿海州を巡視した後、露國太平洋艦隊の中でも最も快速力を有する巡洋艦アスユリド號で、神戸に入港したのは、六月十二日だつた。

我が政府に於ては、國賓としてこれを迎へることになり、陸軍大臣寺内正毅伯が、その接待役となつた。村田淳少將、田中義一中佐、津野一輔大尉等は、伯の指揮をうけて、國賓歡迎の準備に忙しかつた。

當時、日本は、露國の野心を挫かうとして、勿論、軍部當局は非常な準備をして居た。固より我から好んで手出しをする意志はないが、賣られた喧嘩ならば、いつでもこれに應じ得る準

備がなくてはならぬ。だから、十全の準備は出來て居たが、我軍部としては、彼にさういふ極秘の事情を看破られぬやうに注意せねばならない。

寺内陸相の苦心はこゝにあつた。

幸ひなことには、陸相は、クロパトキンとは兼て相識の間柄だつた。といふのは、明治十五年、陸相が佐官時代に巴里駐剳中、クロパトキン將軍と出會した事があるからで。

將軍は、氣輕に入京して、旅館に充てられた芝離宮に落ちついた。

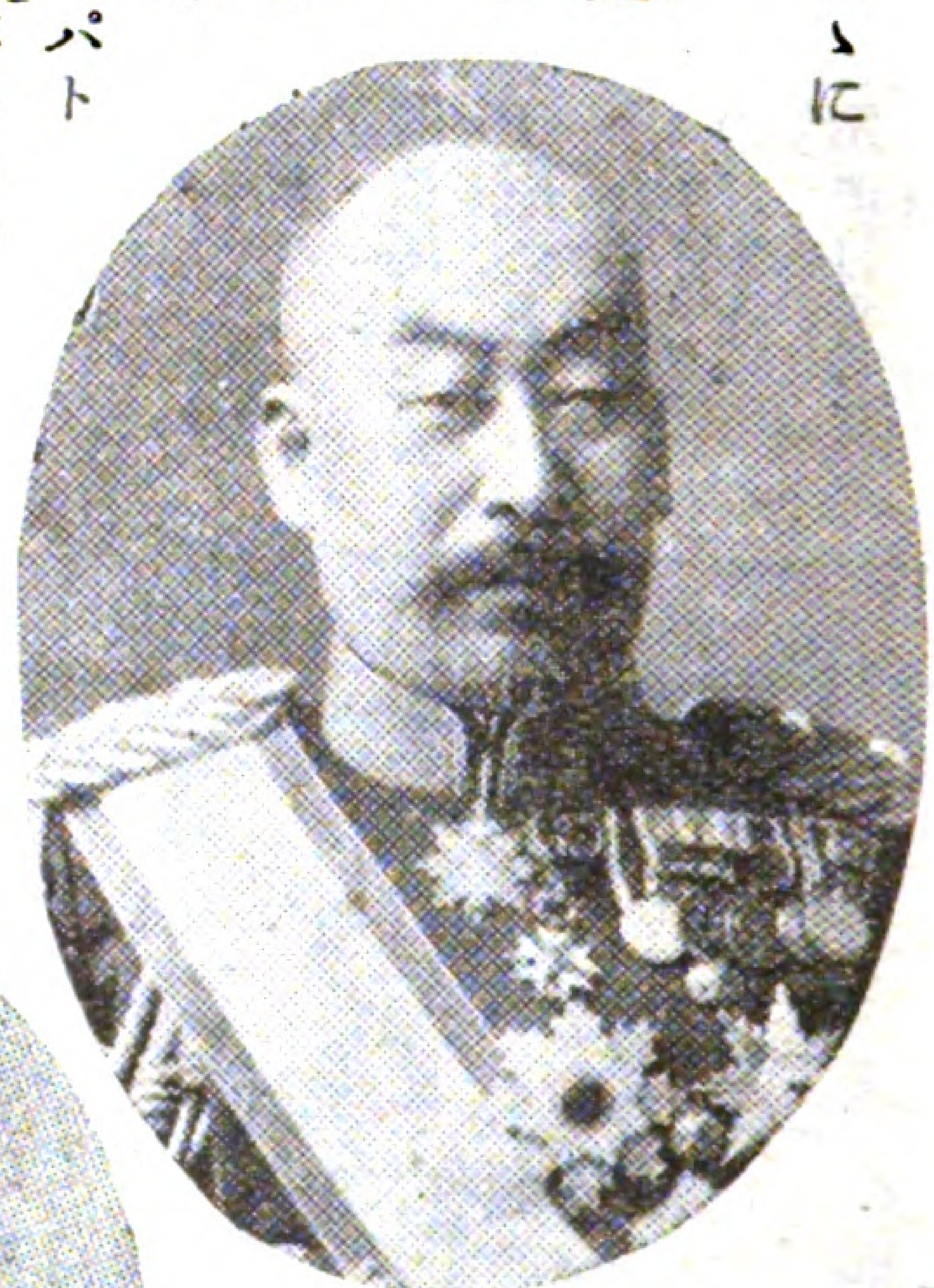
『まことに、お久しぶりでありました』

滿面に愛嬌をたゝへたクロパトキン將軍と、主人役の寺内伯とが握手した刹那、伯の唇頭から洩れた一言は、則ち是れ。

『巴里でお目にかゝつてから、もう二十年經ちますな』

將軍も打とけた挨拶だつたが、お互に腹と口とは違つて居る。

クロパトキンは、伯の心中を看破しようとし、伯は、さりげなく國賓を待遇して、内兜を見透かされぬ用心をした。握手はしても、心持は仇同志である。



寺内正毅伯

『日本と貴國とは、單に隣邦としての友誼のみではない、將來、東亞の平和を維持する上に於ても、是非提携せねばならぬと思ひます、小官は、閣下が前陸軍大臣ワンノフスキー將軍と同樣、日本に對する友誼的意見を常に感謝し、且信頼して止まぬものであります』

寺内伯は、先づクロパトキンの機先をはかるつもりで、パチリと一つ、捨石を打つた。

だが、相手もさるもの、飽くまでも日本を眼中に置かぬが如き態度を示して、最初から猛烈な正攻法をとつてくる。

『左樣、自分もまた日本の露國に對する穩健な態度に對しては、滿腔の感謝をして居る、併し、自分と世間とは大分觀察が違つてゐる。世間では日本が常に露國を假想敵國として軍備をとゝのへて居るといふて居るが、萬々一それが眞實だとすると、此上もなき遺憾である、どうでありませうか、閣下から御腹藏のない處を伺ひたいが……』



クロパトキン將軍

『意外な事を承はる、……閣下が、根柢のない流言飛語を確く

御信じにならうとは驚き入つた事であります、貴國の如き大陸軍國を假想敵國といたすなどとは、言語同斷の話で、左樣な風評の眞ならざることは、我國の兵器廠を御覽に相成れば即座に分明することであります』

伯は此うやつた。

『自分も固くさう信じては居るが、大分噂があるので……どうでありませうか、今回は貴國の兵器廠も一覽させて戴きたいと思ふが……』

急所をいくと、伯は驚くと思ひの外、平然として居た。

『勿論御案内申しあげます』

一向、あわてた容子もない。

翌日、兩國陸軍大臣は、同じ馬車を驅つて、先づ小石川の砲兵工廠へと急いだ。

だが、讀者諸君よ。當時の日本は、戰爭を豫想して、兵器の製造に日もこれ足らぬ有樣であつたのだ。然るに伯は、逆手を用ゐて、クロパトキン將軍の來訪と共に、砲兵工廠をきちんと整



理し、如何にも閑散なるかの如く見せかけたのだ。

『ふうむ』

將軍はうなづいた。

それから後樂園で盛大な午餐會が催された。食後、池上に臨む亭の欄干に腰をかけて、クロパトキン將軍が休息して居た、隨員もそこに居た。初夏の空は晴れ上つて、風がさや〱と池をくらくして居る若葉を吹いてくる。

『閣下、記念の爲、當砲兵工廠に於て鍛へた村田刀を御贈致します』

寺内大臣がその時、贈物をもつて來て、將軍に渡した。

『おう』

將軍は、村田刀をうけとると、欄干に倚りかゝつたまゝ、無雜作にすらりと拔き放たうとした瞬間である、たつた今までからりと晴れてゐたのが、急に天候がかはつて、一天墨を流したやうになる、どうと車軸を流すやうな雨、ぴかと槍のやうに閃めく稻妻。

ぐわら〱、鳴りはためく雷は、園内の大木の上に落ちたのだ。それが、丁度將軍の刀を拔かうといふ刹那だつたので、將軍はびつくりして、寄贈の刀を池の中へ落して了つた。しめたッ！ これを見た私共は、實際さう考へた。三國干渉以來、暴慢無禮の振舞を日本に加へ來つた彼れ露國である、神意、こゝに現はれて、敵國陸軍大臣に天威を示したのである、あゝ天佑と神助と、吾にあるからは、此の一戰必ず勝つぞと、竊かに勇み立つた事である。

二

併し、クロパトキン將軍も、陸軍大臣の地位を占めて居る露國の名將である。果して日本の情態を目撃して、日本に闘志なしと見てとつたであらうか。

露國が旅順要塞を修築し、青泥窪を經營し、着々として、日本を壓服してかゝる。よつて、日本は日英同盟によつて、これを防止しようとすると、露國は矢繼早に露佛同盟を發表して、いざ來いと對策をめぐらして居る。

滿洲還附條約によると、團匪事件によつて滿洲に派遣された露國軍隊は、すぐさま撤兵せねば相成らぬ事になつて居るが、一向そんな氣振も見えない。却つて、マドリトフ大佐の率ゆる一隊は、鴨綠江森林の伐採を口實に、韓國の國境を脅かして居る。

それはまだしも、露國宮廷派、就中侍從長ベゾブラゾフ一派の帝國主義者は、燃ゆるが如き野心を抱き、鴨綠江下流の韓國龍岩浦を占領し、こゝに軍事的施設を加へたのである。

かくしても、日本は指をくはへて引込んで居られようか、日本の爲ぢやない、極東全體の平和を破壞する上に於て此際何とかせねばならぬ重大な時機に際會して居る。

『露國討たざる可からず』

日本有志家の一部には、さういふ氣焰も揚つて、風雲は、日

に日に險惡となる。……

だが、日本へ來て見ると、成る程、寺内陸相の言明のやうに、一向戰備が出來て居らない。

『これなら安心だ』

クロパトキンは、さう思つたであらうか。

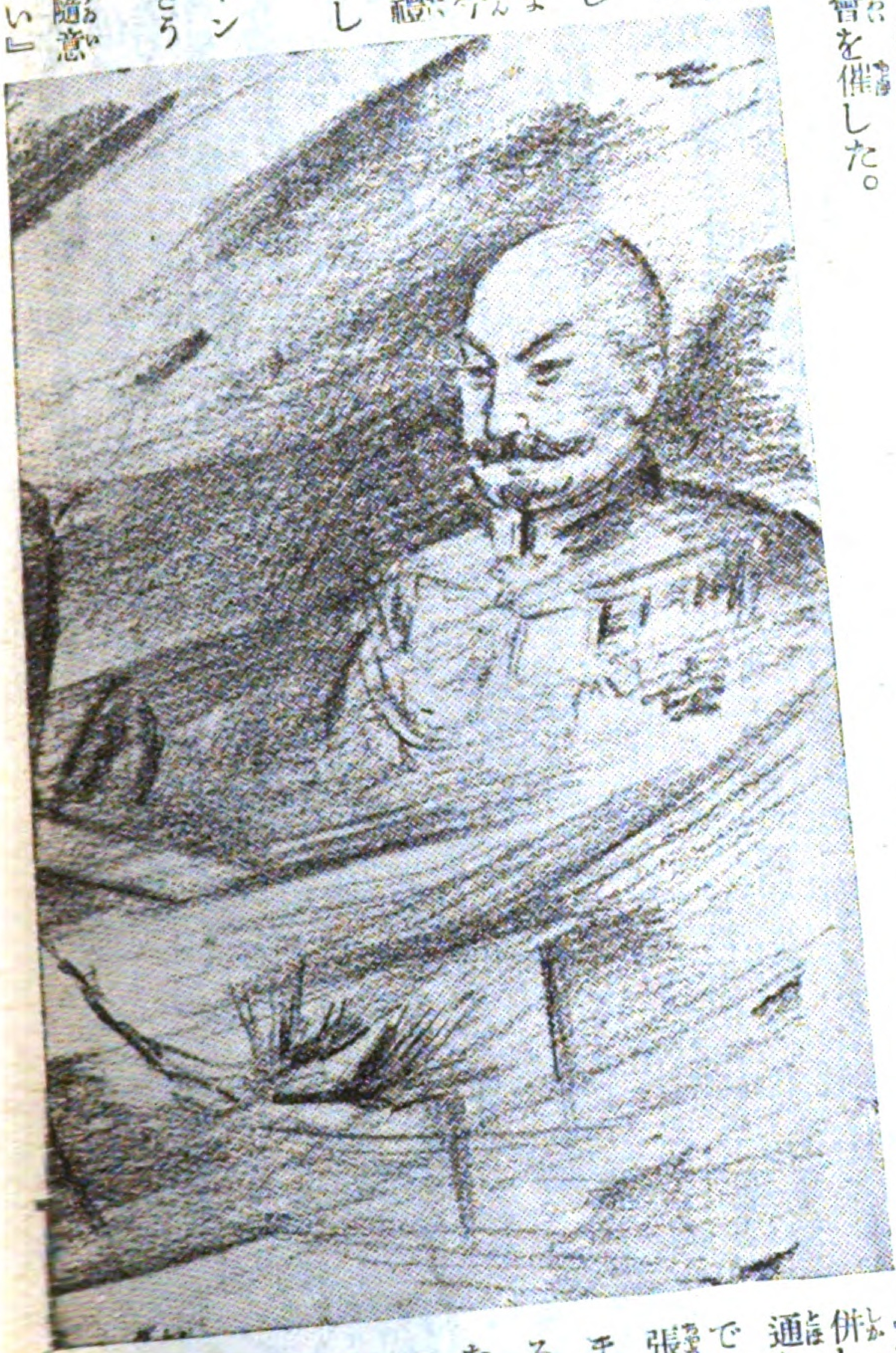
その推測は別として、まるで、名優と名優の腹藝のやうな會見で、客賓たる將軍も、主人たる伯も、さりげなく笑ひ、さりげなく語り、さりげなく又芝離宮に戻つて來て、夜になると同時に、盛大な宴會を催した。

やがての事、

『明日から關西地方を見物してゆつくり歸國したいと思ひます、ついては今日限り國賓の禮遇は御辭退致したい』

クロパトキンは、やがてさういつた。

『それは御隨意にせられたい』



伯も敢へて否まなかつた。

かくして十六日、クロパトキンは、東京を去る事になつたが、寺内大臣と別るゝに臨んで、

『多大の厚遇を蒙つて、感謝の外はありません、歸國の上は、皇帝陛下に對し奉りて、日本の露國に對する誠意を充分報告する所存であります』

かく公式の言葉を殘して去つたが、もし腹を穿つて、將軍の胸中に入り、想像を逞しうしたならば、多分將軍は次のやうに考へたであらう。

『露國には三百萬の軍隊がある、併し、日本に來て、日本の軍隊を一通り視察すると、軍人は誠忠無比である、且又日本人全體が中々緊張して居る、かゝる強敵を向うにまはして、うかと開戰などは出來るものでない、本國に於ては、みな日本の事情を知らぬので、直ちに日本を屈服せしめることが出來ると考へ、しきりに主戰論を唱へて居るが、これは非常な暴論である、露國自身を滅亡に導びくものである、まことに困つたものだ、**いつの時代でも、盲滅法、血氣に**

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

まかせて、戰爭を開始し、強ひて平地に波瀾を捲起さうとする輩が居る、此の手合が勢力を占めたら、國礎を危くするに決つて居る、自分は國へかへつたならば、皇帝陛下にお目にかゝり、自分の兼ねての意見に從ひ、日本との開戰は不利であると申しあげねばならぬ、そして他の平和手段によつて、日本との問題を解決せねばならぬ』



その證據がこゝにある。

即ち將軍の『回想錄』を讀むと、十六日西下して白砂青松の須磨に旅の疲れを醫し、悠々として瀨戶內海の風光を賞しつつ、日本にグツトバイを告げて居る。

そして七月上旬、彼は旅順に至り、所謂旅順會議を開いてゐる。集る者は、極東長官アレキシーフ大將、侍從長ベゾブラゾフ、北京公使レツサル、駐韓公使パウロフ及び、陸軍少將ウオガツク等であるが、その席上で、彼は、極力日本との開戰の不利を說き、露國の鴨綠江經營を商業的にすべしと主張してゐる。そして、日本の疑惑の種となつてゐるマドリトフ大佐の勸告的退職をさへさせてゐる。

寺內伯との會見が、如何に彼クロパトキン將軍に影響したかは、この事實のみでも十分證明される。

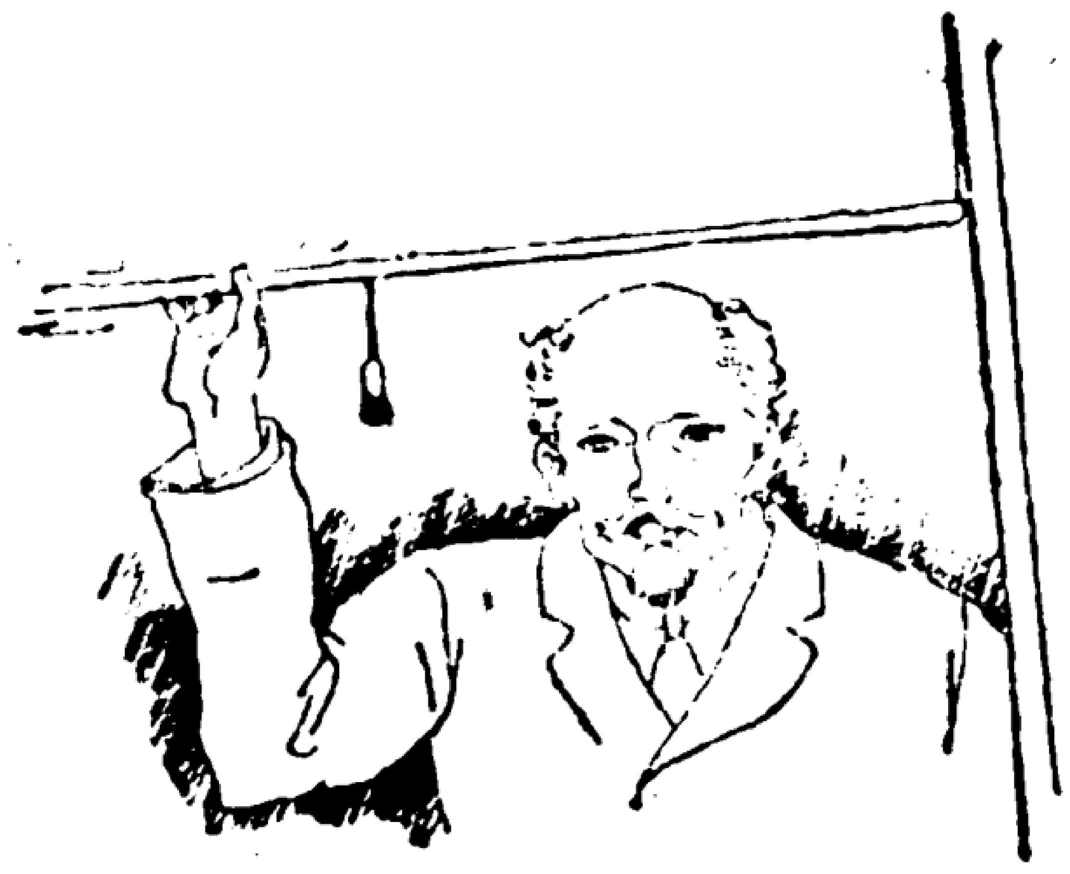
良將を見る者また良將、偉人を見る者即ち偉人。

『日本侮る可からず』

クロパトキンは、寺內伯の腹中を洞見して了つたのである。

惜しい哉、彼の意見は遂に採用されず、ベゾブラゾフの野心と、日本駐剳の露國公使館付武官ウオガツク少將の誤れる觀察に依つて、端なくも日露戰爭は開始されたのであつた。（終）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



泰西感激美談

友なればこそ

澤田謙
田中良畫

一

西行の汽車は、きちんと午前八時二十分に、サン・ロザリオの停車場に着いた。そのとき、厚い黒革の鞄を腕に抱へこんで、急いで街の大通を歩いて行つた、一人の若い神經質さうな男があつた。

朝のサン・ロザリオの街は、一日の活動の準備に、活氣よくざわついてゐた。その男は、傍目も振らずに、商業地の中央へと、眞直に歩いて行つた。其處には、向ひ合つて、この市の二大銀行——第一國民銀行と株式國民銀行とが建つてゐた。

その男は、ツカ〱と第一國民銀行に入つて行つた。九時に二十分前であつた。

『銀行は九時にならなければ始まらないんですが……』

するとその男は、名刺を取り出した。

『それは私も承知してゐますが、兎に角この名刺だけ受取つて下さい』

その名刺には『國民銀行計理士ネットルウイック』と書いてあつた。

銀行の仕事や帳簿に間違はないか。それを調べる公の役目を持つて、計理士は銀行の建物のなかに入つて行つたのであつた。その眼には、冷い光が光つてゐた。自分も決して間違をしない代りに、他人の間違も見遁さないといふ、機敏で冷酷で精悍な風が、一眼見てその男の風采に漲つてゐた。

銀行は一時に緊張した。

彼はすぐに、現金出納係の背後に立つた。金貨は計算板の上を、ザラ〱と音立てた。彼が紙幣を數へる細い白い指は、恰

度音樂の名人の指が、ピアノの鍵盤の上を飛ぶやうであつた。それが終ると彼は、切口上で言つた。

『現金は一文も間違ありません』

そしてすぐ個別帳簿係のところに行つた。

『君は通帳を、何月と何日、計算しますか』

『月に一度』

『さう、よろしい』

臺帳の紙が飜へされ、貸借對照表が風を切つた。その間も、この計理士の眼は、金縁眼鏡越しに、寸分の油斷なく、四方に走つてゐた。

『何んな些細な欠點だつて、俺は見遁さないぞ』

彼の眼はさう言つてゐるやうに見えた。

二

が、それほど慧敏な計理士も、氣のつかないやうな、ホンの一寸した出來



事があつた。それは一人の銀行員が、何喰はぬ顔して、ブラリ〳〵と、外に出たことであつた。

その銀行員は、道行く人と一緒に、株式國民銀行の窓口に立つと、急きこんでその行員に耳打ちしてゐた。

『おい、氣をつけろ、今度來た計理士は、とても辛辣だぞ。五錢の白錢まで數へてゐる。いゝか、隅から隅までホジクルぞ』

このとき株式銀行の頭取は、その密そり知らせに來てくれた若い銀行員に訊ねた。

『キングマン頭取は、もう銀行へ來てられますか』

『はい』

『では、この手紙を、秘つと頭取に渡して下さい』
青年銀行員が歸つて見ると、例の計理士は、いま總帳簿係を攻撃してゐた。その際に、封書は秘つと、頭取に渡された。
キングマン頭取は、封書を讀み終ると、それをチヨツキのポケツトに入れて、『割引手形』と記した革製の書類入れを、しきりに引つ搔き廻してゐたが、やがて腰を上げると、ツカ〳〵と計理士の傍に近寄つて行つた。
『やあ、計理士の方ですか。御苦勞樣ですね。私が頭取のキングマンです』
『は、私は計理士のネツトルウイツクと申します。唯今まで拜見しましたところでは、この土地の畜産業が不況に陷つてゐるに拘らず、貴君の銀行狀態はまことに結構です。あとは貸附金だけですが……』
するとキングマン頭取は、氣輕に言つた
『あ、その貸附金のことなら、この銀行内で誰よりも、私が一番よく知つてゐます。御案内致しませう』
キングマンと計理士とは、頭取の机に向ひあつて坐つた。計理士の調べは、例の通り懇篤で辛辣だつた。計理士の心は、恰度獸類の跡を嗅ぎまはる獵犬のやうに、彼方へ走り、此方へ走り、人の思はぬところに突き進まうとするやうであつた。
最後に六枚だけ證書を殘して、あとは皆な脇へおしのけ、改まつた事務的な口調で、頭取に言つた。
『これで取調べは終りました。銀行の狀態は滿足すべきものと信じます。が、たゞ一つ……この證書ですが、この額面約四萬弗ばかりに對して、公債證書や債券、株券などで、七萬弗ばかりの擔保がついてる樣に、證書面には記してあります。その擔保は、當然、證書につけてある筈なのですが、或は金庫か地下室にでも、お藏ひになつてるのではありませんか』
すると、頭取の答は意外であつた。
『いや、その擔保は、金庫にも地下室にもありません。實は私が、誰にも知らさず、密そりと拔き取つたのです。その擔保のないことについては、個人としての私を、責任者と、お考へになつてよろしいです』
計理士は、思はずハツと思つた。銀行の擔保を、『誰にも知らさず、密そりと拔取る』といふのは、由々敷き犯罪である。頭取が瀆職罪または橫領罪に問はれるは無論のこと、事によつては銀行の營業をも停止しなければならぬ。
『擔保を拔き取つた？……何うぞ、も少し明瞭りと御說明を願ひたいものです』
『は、御說明いたしませう。その擔保は私が拔き取りました。しかし私が使つたのではありません。たゞ私の古い親友を助けたければならぬので……さあ、此方へお入り下さい。お話い



たしませう』

三

計理士の眼の前には、怖ろしい想像がチラついた。

『自分は計理士としての職責上、何うしてもこの頭取を法廷に告發しなければならぬ、さうすると……』

彼は計理士になつてから、さういふ怖ろしい光景を、幾度か見てゐた。ホンの一寸したことで――僅か一時間違ひのことで――その間違を見遁して貰はうと、銀行の人々が跪いて、歎願して、女のやうに泣き叫ぶのを見たこともあつた。また一人の出納係は、自分の前で、机にかゝつたまゝ、ピストルで自殺したこともあつた。

しかし頭取は、平然と安樂椅子によりかゝつたまゝ、落ち着いた聲で、悠りと話しはじめた。

『若し一人の男が、四十年の間友達であつて、その男が水に溺れ、火に投げこまれ、土に埋められ、風にさらされた時、貴君の力で多少の助ができるとしたら、貴君だつて助けてやりたいとお考になるでせう』

頭取は少し說敎がかつと口調で語り出した。しかし計理士は、(だと言つて、それが七萬弗の擔保を使ひこむ理由にはならん)と、腹のなかで思つた。

頭取はそれには容赦なく、話をつゞけた。

『私とその友達とは、牛追ひ仲間でした。二人は金か銀を發見けようと思つて、アリゾナや、ニウ・メキシコや、カリフオル

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ニアの山中を駆け廻りました。互に肩をならべて、土人や馬泥棒と戦ひました。アリゾナの山中では、幾週間か餓死しようとしたこともあり、雪のなかに二十尺も深く埋められたこともあります。さういふ苦しい瀬戸を、一緒に渡つた友達といふものは、一生忘れることのできないものです。いま若しその友達が、苦しい立場に立つて、私の援助を求めたとしたら、私は何を措いても、その友達を救はずにはゐられないでせう。……しかし私が、真個に彼の友情を、心から沁々と感じたのは、そのときではありません』

頭取は溜息をついて、そつと窓の外を眺めた。計理士は向をかへて、他の手で頬杖を突いた。

『二十年前のことですが、私はこの州の執行官になりました。そしてその友達を主席助役にしました。私は収税官をも兼ねてゐたのです。ところがある冬、州の税金が僅かに入りこんで、私は一週間ほど、それを銀行に持つて行く暇がありませんでした。ところが或る日のこと、その金が、そつくり紛失してしまつたのです。

その週間は、私も働き過ぎて、神経が落着かないで、醫者は何だか難かしい名前をつけて、私に薬を飲ませてゐました。しかし警察官が来て調べて見ると、その金庫には、外から押入つた形跡は少しもないのです。そしてその金庫の鍵の組合せを知つてゐるのは、私とこの友達としかないのです。して見ると嫌疑は、二人のうち一人にかゝるではありませんか。家内は泣き叫びました。子供までが私に、物を投げつけました。私が途方にくれてゐると、何を思つたか、傍で仕事をしてゐた友達が、つッと机から立ち上つたのです。そして外に出て行きました。

「その金は自分が盗んだのです」

さう言つて、法廷で友達は自首しました。カルタの賭でなくしたといふのです。十五分間のうちに、確かな罪状が上つたので、私にその友達を逮捕しろといふ命令が下りました。お察し下さい、私の心を。この千人の兄弟を集めたよりも親しい友達を、いかに職責とはいひながら、捕へなければならぬことになつたときの私の心持を！

私は友達に申しました。

「君、君はいま容疑者だ。裁判が終つたら、俺の力には及ばない。今のうちなら、君の言ふことは、何でもできる」

すると友達は申しました。

「有難う。では迷惑でなかつたら、一つお願がある。何時でもいゝから、一度子供たちを、此處の庭によこして、跳ね廻らせて呉れないか。僕はそれが何より愉快なのだから」

私は無論その願を叶へてやりました。貴君だつて、無論さう

なさるでせう。ね、何うですか』

計理士は何とも返事しなかつた。このとき停車場に入つてくる機關車の音がした。頭取は時計を出して見た。十時三十五分であつた。

四

頭取はまた話を續けた。

『で、明日はいよ〳〵裁判があるといふ前の晩のことです。私はその晩、やはり前に起つたやうな神經に惱まされて、一晩眠れなかつたのです。でも夜中になつて、トロ〳〵と眠れたのでせう。ハツと眼を覺して見ると、何うでせう、私は着物をちよつと引つかけたまゝ、裁判所の廊下に立つてゐるのです。

「夢遊病者です」

醫者はさう宣告しました。そしてこの病氣にかゝつてゐる人は、自分では一寸も自覺せずに、いろ〳〵不思議なことをするものだと、面白い例などを私たちに聞かせました。しかしそれが何になりませう。明くればその日は、友達の宣告のある日でした。

私は家に歸つて、少し寒氣を覺えたので、一寸休まうと思つて、自分で部屋の古い戸棚を開けました。そして有り合せの大きな布團を引きずり出しますと……何うでせう、それと一緒にゴロリと飛び出したのに、友達がカルタで負けて使ひこんだ筈の金がその儘出て來たのです。

「おやつ、これは一體誰の仕業だツ」

私は覺えず、大聲を揚げました。

「夢遊病の仕業です」

と、醫者は申しました。

「おい、君もよほど耄碌したね。俺は君がその金を金庫から盗み出して、其處にかくしてゐるのを、見てゐたんだよ」

と、友達は申しました。

「ぢやあ、何だつて君は、自分が盗つたなんて言つたんだ」

「だつて、君が眠つてる間の仕業とは知らなかつた。……本當に盗んだんだと思つたんだもの」

私はそのとき始めて、友達の友情といふものが、何んなものか、よく判つたのです』

五

キングマン頭取は、これでピタと話を止めた。そしてまた窓をちらと見た。

このとき太陽は、向ひの株式銀行の窓に、カン〳〵照りつけてゐた。そして誰かゞ、大きな硝子窓に、黄色い日除をおろしてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

計理士は、このときはじめて頭取に訊ねた。

『失禮ですが、あの拔き取つた擔保の問題について、直接關係のあることを、もつとお話になることがありますか』

すると頭取は、急に驚いたやうに答へた。

『え、拔き取つた擔保ですつて？　それなら、此處に皆な在ります。公債證書も債券も株券も。……何うかお調べ下さい』

計理士は、飽ッ氣に取られた。密かに擔保を盗んで、私情のために公金を使つた罪人と思つたのは、飛んだ間違！　それはちやんと、机の上に並べてあるのだ。

では、何のために頭取は、今まで計理士を、散々じらしておいたのだらう。譃談にしては、少し念が入りすぎてゐた。しかし擔保がかうして出て來て見れば、法廷に訴へる必要はなかつた。そのほかに、この銀行には、何といふ一點の




お顔剃りの後にぜひ
美顔ユーマー
皮膚を消毒してニキビ吹出物等を防ぎ、少し續ければお顔を非常に活々と美しく致します

非難の打ちどころもなかつた。

不可解な、そして人に馬鹿にされたやうな、妙な顔をして、この俊敏な若い計理士が、齒ぎしりしやうとすると、頭取はニコニコしながら言つた。

『世のなかには、理窟だけで育つた若い方々のまだ判らない、いろいろな世界があるものですよ』

しかし計理士は、相變らず無愛想に、頭を一寸さげて、銀行を出て行つた。そして一直線に、向ひの株式國民銀行に入つて行つた。キングマン頭取は、自分の机にかへると、側の銀

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

行員がこつそり渡してくれた封書を、チョッキのポケットから取り出して、も一度眼を通す。

その手紙にはかう書いてあつた。

『役所の犬が一匹、君のところを漁つてるさうだね。ところが僕の銀行では、法律上、二萬弗の金がなければならないのに、たつた二千三百弗しかないのだ。實は昨日遅くなつて、ロッスが來て、一萬八千弗融通してやつたんだが、何しろ急なことで、擔保をつけるひまもなかつたのだ。

で僕は、すぐサム・ブラッドショー銀行に、現金二萬弗送つてくれと電報を打つておいたから、十時三十五分の汽車で屆くはずだ。それまでに計理士に踏み込んで貰つては困る。止むをえなければ、その男を逆さに吊るしておいてでもいゝ。それまで計理士を君の銀行に押へておいて吳れ給へ。いゝかね。現金が入つた相圖は、俺の銀行の窓に、日除を下ろしたときだ。それまでは賴むよ。

ボッブ・バックレー』

キングマン君



頭取はその手紙を、きれ〴〵に引き裂いて、紙屑籠のなかに放りこみながら、小さい聲で呟いた。

『これでボッブが助かれば、少しは喋べり甲斐もあつたといふものだ。しかしボッブが二十年前に、法廷で俺の身代りに立つてくれようとしたときのことを思へば、こんな骨折りなんか、物の數でもない』

――をはり――

紳士常識

◆顏剃りの後へは何をつけるか？

顏剃りのあとをそのまゝにしておきますとヒリ〳〵と痛んだり皮膚が荒れたりしてお困りになるものです。最近東京大阪等の紳士方の間で、顏剃りの後へ美顏ユーマーを附ける事が流行してゐますが、之れなどは剃りあとの手當として最も良い方法であると申せます。

御存じの事と思ひますが、美顏ユーマーは我國化粧品界の學術的權威と言はれる桃谷化粧品研究所で創製された最も進歩した科學的美容液で、顏剃りの後へ二三滴つけてよく〵すり込んでおきますと、皮膚の消毒となり、少し續ければキメを細かにツヤをよくし、活々としたお顏になりますので大へん評判になつてゐます。

◆ニキビ吹出物の方に

頑固なニキビ吹出物でお困りの方に「にきびとり美顏水」をお勸めします。大ていなニキビですと此の藥を三四度もお附けになれば目に見えて效能が現はれますので、色々な附け藥やのみ藥で失望された方でも此の藥の效能には全く驚いてゐられます。尙この藥は美容藥としてもまた比類なき效果がありますので、洗面後や顏剃り後などには男子方にも婦人方にも盛んに賞用されてゐます。

大笑ひ！滑稽





記者『此の頃は不景氣だの、緊縮だのと、世智辛い聲ばかり聞かされますが、今日は一つ皆樣から珍談、奇談、縮尻話……兎に角何でも飛切り面白いお話を伺ひまして、日本中の人々を腹の底から笑はせて見たい、活氣づけて見たいと思ふのですが……』

◇あちらの失敗

記者『大辻さん、何かアメリカ邊の縮尻話はありませんか』

司郎『僕のは悉く縮尻つて居るからね』

曉紅『縮尻らないのが縮尻話かね』

百出座談會

出席者

—○○○○—

池部鈞（漫畫家）
大島伯鶴（講談師）
田中比左良（漫畫家）
矢野錦浪（川柳家）
新井淳（喜劇俳優）
森曉紅（文藝家）
徳川夢聲（漫談家）
大辻司郎（漫談家）
生方敏郎（諧謔家）
古川緑波（映畫人）
三升家小勝（落語家）

—いろは順—



寫眞說明—（向って右より）速記者、古川緑波氏、本誌記者、大島伯鶴氏、森曉紅氏、田中比左良氏、速記者、本誌記者、大辻司郎氏、池部鈞氏、三升家小勝氏（頭だけ見える）、生方敏郎氏、矢野錦浪氏、新井淳氏、

司郎『さうだ、感違ひの失敗談があります。米國のサクラメントといふ處は、賭博が盛んで、中折を被つてキチンとしてゐる人は一人もゐないといふ位。誰れも彼れもみんな鳥打帽子、それに洋服の襟を立てて、吸ひからしの煙草を吸つてゐる悪漢ばかりです。

そんな工合ですからたかりやも随分ゐます。凄い奴になると白晝ピストルを差向けて金を奪ひ取ります。小つぽけな奴になると相手の顔色を見て「おい煙草錢を貸してくれ」と吹つかけます。

私がメキシコから行くとそいつに引つかゝつた。「五十錢呉れ！」と先方が云つたのでせうけれど、私には解らない。そこで彼奴は今度五十錢玉を一つ自分の掌に乗せて「これを出せば好いんだ」と云はんばかりの手眞似。だが私には矢張り解らないもんですから反對にそれを貰つちやつたんです。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



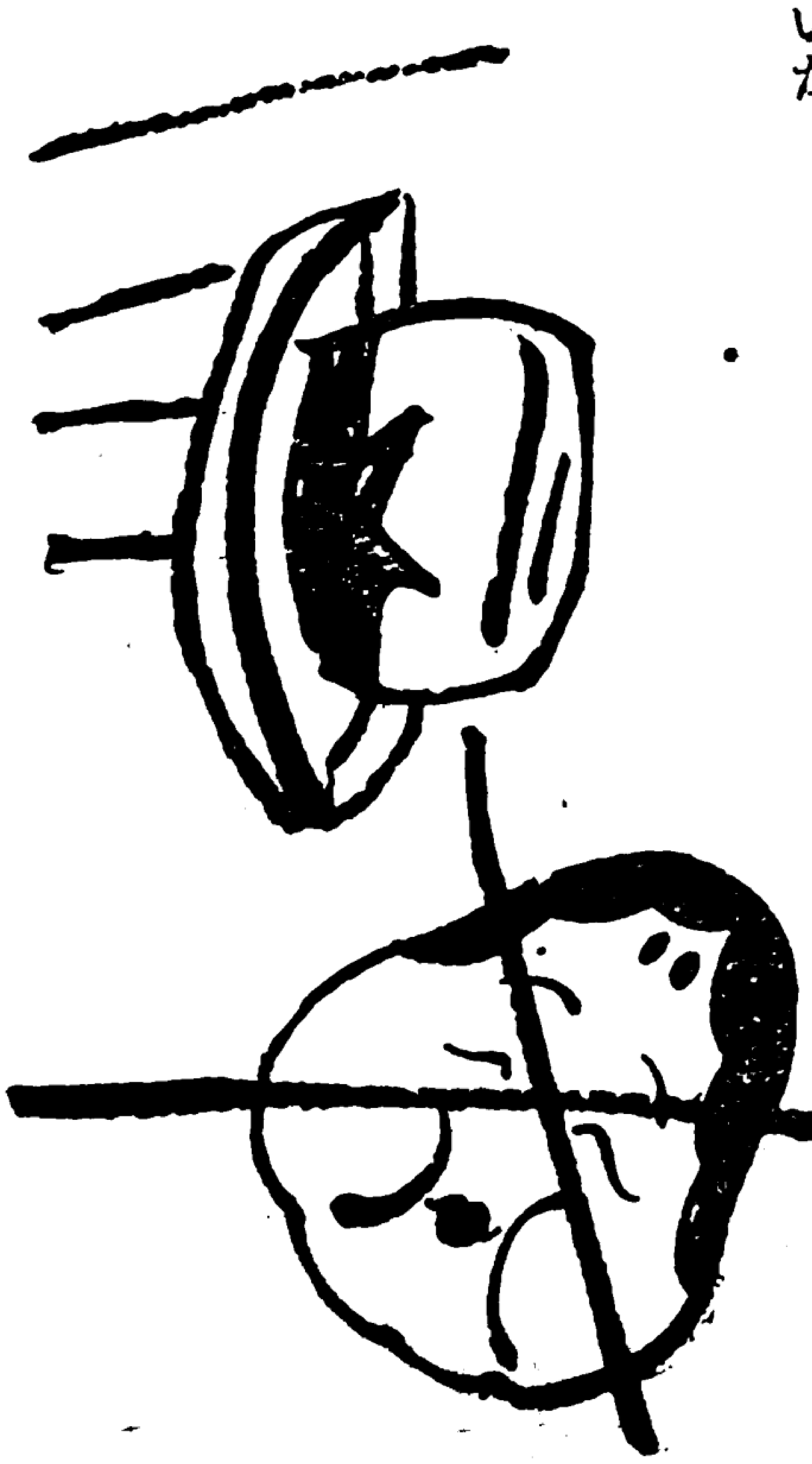
大辻司郎氏

こいつには先方も噴き出しましたね。それから私と一緒に行つた人の話ですが、お婆さんの方でした。便所へ入る時は英語で書いてあるのでどつちが女か分らないのです。そこで「字の短かい方にお入りなさい」と敎へてやつた。船の中は「ゼントルマン」と「レデー」ですから、短かい方が女の便所ですね。それをお婆さんはちやんと頭に祕み込んで居るので、彼地へ上陸してからもその通りにやつたんです。所が上陸してしまふと男が「マン」で女が「ウーマン」で字の長さがスツカリ反對なんです。それを知らずに男の方へ飛び込んで大目玉を食つたと云ふ珍談があります』

◇罪な天狗の面

記者『これは靜岡縣の出來事ですが、あそこは漆器の宜いのが出來るところで、或る年天狗の面を澤山こしらへてアメリカへ送つたことがある。非常な評判で追註文がどん〳〵來る。圖に當つたと喜んだ縣では、今度は、おかめの面を澤山こしらへて送つてやつた。すると驚てのことに其おかめの面だけを返してよこしてしまつた。不思議なことがあるものだと、其理由を照會すると、あれは帽子が掛からないから……と云ふ返事だつたさうです』

小勝『なる程、先方では面につかはずに、帽子掛にして居たんですね、はツはツこいつは面白いや、なる程おかめの鼻ぢや帽子掛にやならねえね』



錦浪『早呑込にはよく失策があるもので、とんだ電報の讀み違へをしたと云ふ話がある。或る人が田舍から甘藷をもらつて、其儘返事を出さなかつた、田舍の方では不思議に思つて、先日甘藷を送つたが受取つたか、と皮肉にも書留郵便かなにかで寄越したんですね。御本人は氣がついて「さう〳〵これは失敬した」と云ふので今度は電報で「結構なり多謝す」と打つてやつた。これを見た田舍の人は怒るまいことか、何と云ふ失敬な奴だ、人が親切に甘藷を送つてやつたのに、挨拶に事をかいて「ケツガ、ウナリ、グシヤス」とは何ごとだと云つた實話があり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ます』

司郎『なるほど、甘藷を喰べて尻が唸り出しやすか、面白いな』

◇握飯と腹藝

伯鶴『私が十四の時でした。その頃私は伯鶴の伜で半分の芝鶴（四角）と云つて居ました。船橋の面白亭と云ふ寄席で、親父から聞き覺えの講釋を二錢の木戸で叩いて居ました。四十日ばかりやつて居るうちに、三遊亭圓太郎と藤間小若と云ふ姉妹三人で踊る一座が乘込んで來ました。小屋が無いから明けて呉れと云ふのでしたが、俺は勘當されて行くところが無いから駄目だと頑張つてやつたら、そんなら一座してやれと云ふのでとう〳〵其仲間へ這入つてしまつた。それから房總方面に行つたが、錢を一錢も呉れないには閉口した。四ケ月の間と云ふものは湯に行く時の湯錢だけ、煙草は買ひ置きがあるからと云ふので煙管で濟ます、ただ御飯だけを有難く頂いて居ると云ふ始末、恰度館山まで行つたが、辛抱しきれたくなつて夜逃げと腹を定めた』

曉紅『大英斷だね』

伯鶴『懐中には十錢銀貨一つ、絽の紋付の汚ない奴を一枚鞄に入れて首に掛け、踵の拔けた編上げを穿いて、やつと富津まで逃げて來た。そこから横濱まで十錢で魚を送る舟に乘せて呉れると云ふのだが、この十錢を使つてしまつたらどうすることも出來ない。鰯の眞似をするから只で連れて行つて呉れと頼んだが、どうしても肯かない。仕方なしに町へ引返してぶらぶらして居るうちに日が暮れた。町外れの小さな社へ忍び込んで一夜を明かすことになつたが蚊が居て寢られない。仕方が無いから、大切な絽の羽織をかぶつて寢込んでしまつた。すると顏をツル〳〵夜通し撫でる奴がある』


矢野錦浪氏



曉紅『奇拔だね』

伯鶴『起きて見ると守宮なんだ。大へんな守宮さ、帶を解くと懐ろにも這入つて居やがる。守宮と云ふ奴は食ひつかんもんだね』

曉紅『食ひついても仕様が無いと思つたんだね』（笑聲）

伯鶴『翌くる日になつて到頭十錢の舟賃先拂ひで、横濱へ行くことにな

つた。血氣な奴が三人、爺さん婆さんと僕とで六人、何しろ僕は一昨日の晩から飯を食はんのでペコ〳〵なんだ。其内に爺さん婆さんが砂糖袋を出して握飯のつけ燒をうまさうに食べ初めた。サア腹の蟲がグーグー鳴り出す、欲しいには欲しいが赤の他人にまさかいきなり呉れとも云はれない。

そこで楠孔明の智惠を絞つたね「燒握飯とはうまいところへ氣がつきましたな、矢張り年寄はえらいもんだ」と獨言を云つたものです。するとお爺さんが、「よろしければお上がんなさい」と來たもんだ。〆めたと雀躍したが、腹の減つて居るやうな容子は噯にも見せないので、そんなにガツ〳〵食べる譯にも行かない。小さいのを二つばかり頂いたが、何處へ這入つたか頰張り判らない。（笑聲）そのうちに舟が觀音崎と富津の間に廻つて來ると、一天俄かに搔曇り……』



司郎『高座そつくりだね』

伯鶴『大へんな暴風雨さ。何しろ小さな舟なので雨は入はる、舟は搖れる、帆は倒して了ふ。爺さん婆さんすつかり醉つてしまつた。蒼くなつてウン〳〵云つて居る。途端に砂糖袋の握飯が轉げ出した。こつちはどんな暴風雨だらうが何だらうが、握飯の方へ氣を取られて居るんだからたまらない。「お婆さん握飯が勿體ないぢやありませんか」と云ふと「よ〳〵よろしかつたら召上つて下さい」先方は握飯どころの騒ぎぢやない。すつかり頂いてしまつて漸く人心地がついた所で横濱に着いた。横濱には石川と云ふ講釋場がある、茲へ行つて一つ稼がうとしたのだが、何か切かけがないと不可いから、そこでまた考へた』

錦浪『楠孔明の故智に習つてかね』

伯鶴『蕎麥屋へ這入つてもりを四つ食つた。こんどは先刻と違つて腹が一ぱいになつて居るところへ、もりを四つとやるんだから樂ぢやない。勘定となると待つて居ましたです。錢が無いから石川まで一緒に來て呉れと頼んで、石川へ蕎麥屋の馬を曳いて乘り込んだ。そば代を拂つて貰つた修業時代の苦心なんと云ふものは、大抵ぢやありませんよ』（笑聲）

◇女除けのお護符

淳『私が一昨年の八月京都下加茂撮影所の林長二郎主演衣笠貞之助監督の「海國記」へ蒲田から田中絹代さんと應援出演

の爲め京都へ行つた時の話です。丁度ロケーションに越前の敦賀へ行きました。半月程撮影して、敦賀から六七里奥の海岸にある河原市村と云ふ淋しい所へ行きましたが、此處には旅館が無いので村の有志達が村の公會堂見たいなところへ泊めて呉れることになりました。私は敦賀から行くのですから一列車早く行きました。

先づ有志の人に挨拶すると「お前様役者かね」と云ふのです。「いろ〳〵御厄介になります」と禮を云ふと「やれ〳〵安心した、實は役者衆が澤山來るから村長さんが心配して、村の娘ツ子は一人も外へ出さねえやうにしてるです。お前様が役者なら、村の若い衆の方がよつぽど好い男だ、村長様にさう云つて來べい」と云ふので一人の男が早速急を知らしたものです。何でも村では大變な問題だつたらしいですね、俳優の滯在中は村の娘達は一足も外出さしてはならんと云ふ注意書を廻はして置いたんださうですから……

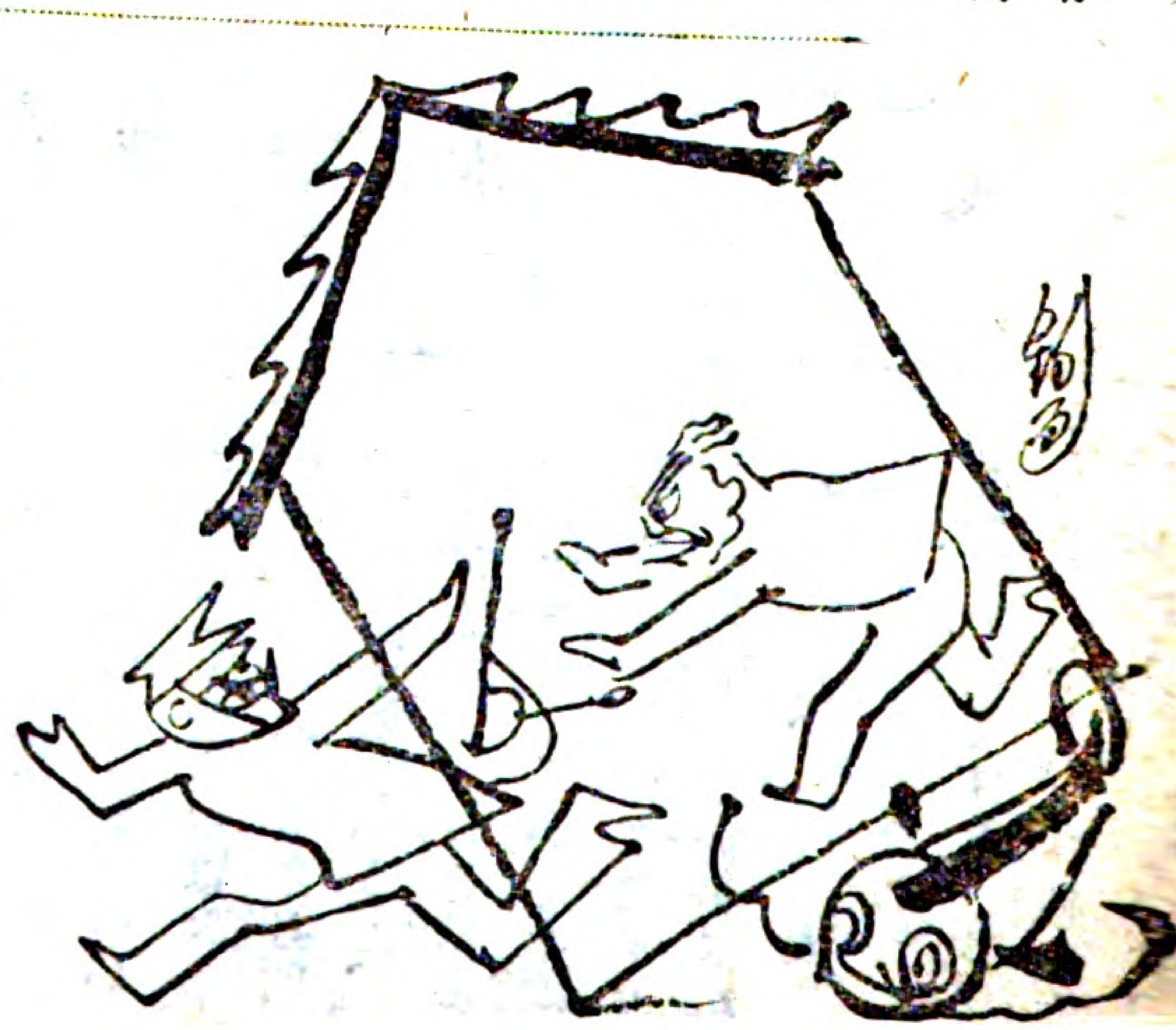
……村長さんは早速飛んで來ました。そして私の顔を見るなり「うふツ、これなら大丈夫だ、娘ツ子は出しても宜いぞ」と大勢に云ひましたつけ。林長二郎さんは後で「蒲田は親切だ、女除けのお護符までよこして呉れたつて笑はれました。笑はれた私こそ宜い災難です」



大島伯鶴氏

◇地震は時の氏神

夢聲『大正十二年の九月一日のことでした。私の活動辯士免許證の期限が切れたので、その手續をするやうに呼び出されて芝の警察署へ行つたものです「夢聲とはお前か」「さうです」「免許證の期限が切れたら何故更に手續をしないのだ」「つい多忙なもので」「多忙……？多忙が辯解の理由にはなるまい」「いや實はその」とやつてる所へあの大地震です。ずらり並んで執務して居た警官の面々悉く外へ飛び出してしまつた。いや飛び出すのがほんとうです。居据つて居る方が餘ツ程どうかして居る。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN


徳川夢聲氏

然るに私の取調べにか丶つて居る警官は、まさか私を放つてけぼりにして飛び出す譯には行かず、テーブルにつかまつて身體を搖られながら「君、えらい地震だね、これは驚いた！」と正に顏色なしさ。私も氣が氣でないが、嚴肅なる警察署に於て、逃げれば割が惡くなる。どうなることかと思つて居ると、最初の地震がやんだ。飛び出した警官が歸つて來る。又初めようとすると、ゆり返しの大きな奴が猛然とやつて來た。今度は私を調べて居た警官もたまらなくなつて逃げ出さうとするから、私は腰を浮かして「私は一體どうなるんでせうか」と訊ねると「う丶……何とかするから早く歸れ」と云つた儘表へ飛び出してしまひました』

◇機智と頓智

曉紅『私が文士劇へ凝つて居る時分でしたが、あの寺子屋の松王が木戸の外に居つて云ふ長い臺詞「各自の子供に仕立て助けて歸す」と氣張つた所で、例の聞かせ所の大きな咳をする。あれが却々難しいのです。外の臺詞は口の中でぶつぶつ云ひながら、電車の中でも稽古は出來ますが、咳ばかりはどうも不可ない、エヘンエヘンやつて居ると臆病やみのやうに見えるし、仕方がないから家へ歸つて來て、二階の机でエヘン/\やるのです。すると一口噺のやうですが下でお袋が「おい、羽織でもお着よ、風邪を引いたんぢやないかい」


新井洋氏

小勝『(感心して)う丶ん、落語になつてるね』

曉紅『オホン/\とくだらない咳は出ますが、舞臺に立つて、鬘を冠つてやると咳が出ない。どうしてもお客様に「おい風邪を引いたか」と云はれさうな咳しか出ない。しかしどうしてもやらねばならぬ咳です。世話役の團八と云ふ人に打明けて訊いて見ると「うん、それは譯はない、口を結んでやつて御覽なさい」と簡單なんです。やつて見ると成程うまく出來る祕事なんて云ふものは、一寸したところにあるものですね』

錦浪『宜い話ですな。芝居なんて云ふものは頓智で繋ぐ場合が多いやうです、

私の知つて居るある下廻りの男の話ですが、何の幕だつたか舞臺の變る繋ぎに淺黄幕を落し、仕出しが二人、上手と下手から出て來て反對に引込むと云ふことをやるんです「おい何處へ行くんだ」「俺はうちへ歸るんだ」「さうか俺もうちへ歸るんだ」それだけで右と左へ別れる。ところが或る日道具方が間に合はないと云ふので、もう一遍舞臺へ出ろと云ふんです。仕方が無いから二人は又戻つて來て「おいどうした」「家へ歸らうと思つたら大きな藪があるので通れない」「さうか、俺も家へ歸らうと思つたら大きな崖があるので行かれない」此處までやると道具方の方から出來上つた知らせがある、「あの藪が通れるかな、一つ拔けて見よう」「あの崖が通れるかな、一つ飛んで見よう」と云つて又お互に別れたと云ふ話があります』



◇油汗と冷汗

夢聲『私も冷汗をかいた話があります。何年か前に英國大使館の招待で、各國の大使を招ぎ麥館で大正天皇の御大典の實寫を見せた事がある。ところがお客はみんな外人ばかりだのに、字幕がみんな日本語なんです。「僕には説明が出來ない」と云ふと「口寫しに教へてやるから、其通りにやれ」と云はれたので、こつちも生嚙りを振り廻はして最初のうちは萬歳三唱「スリーバンザイ」となんとかやつて誤魔化して居ました。

そのうちにお神輿が出て來た。通譯に訊くとお神輿などは英語にないと云ふんです。それでも默つて居る譯には行かないから、怪しいことを喋舌つて濟ました顏をして居たら、突然シーンとして居た客席の一隅から「辯士、今のは一體何だい」と鮮やかな日本語で半疊を入れた外人がありました。いや吃驚しましたね。これはガスキョーと云ふ、伊太利大使館の人で、日本語の達人でした。日本語はどんなにでも喋舌れる人で、どこかへ行く時なども自動車へ一寸乘せて貰はうと思ふと「イタリーカシコシとね」なんて洒落を云ふ程な奴に捉まつたのだからたまりません。一生懸命汗水流して苦心した英語を滅茶々々にしてしまひました』

◇熱心なる滑稽

錦浪『非常に熱心になつて失敗することは、側から見ると滑稽ですが、自分では決して滑稽では無いのです。私が新聞記

者をして居る時でしたが、ある有名な記者で、或る重大犯人が死刑に處せられた時、何とかして彼れの死顔が見たいと云ふので工夫して居ましたが、やがて大勢の記者を掻き分けて、孤をかぶしてある死骸のそばへづか／＼と進み「先生、何と云ふ變つたお姿になつたのですか」と云ひ乍ら孤をはぐつたものです。それが餘り眞に迫つてゐたので驚いたのは係官、てつきり同じ仲間だと思つたのですね、早速其記者を連れて行つてしまひました。これほど熱心にならなければ材料なんか取れるものではありません』

小勝『私にもこんな話がありますよ。丁度十六の時、伊勢の松坂で、ある宿屋に厄介になつてゐた事があるんだがね。宿屋の婆さんは私を可愛いがつて養子にでもする氣らしかつたが、何しろ私は窮屈で旅に飛び出したくて堪らない。だがずらからうにも金がない。どうしたらよいかと鬱ぎ込んでゐると、その婆さんが小さい石を持つて來た。

そして何やら口の中でお呪ひみたいなものを唱へて居たが、「お前この石を持上げて御覽、願ひが叶ふとこの石が輕く上る、願ひが叶はないと、こればかりの石が持上がらない」と眞面目くさつて云ふんです。石を持上げると何でもなく上る「ずらかつては不可ませんか、宜いんですか」やつて見るとどつちでも上る。すると婆さんはムキになつて「お前は信心をしないから不可い」と云ふんです。「信心したつて、これつぽちの石は誰でも上るよ、これが上らない位なら、お三どんは澤庵を出すことが出來ない」「さう云ふ氣持でやつてはいけないこの石を、ふはり（手眞似する）と上げるんだ」「ふうはりとやつても何でも上るんだ」こんな押問答でとうとう婆さんを怒らしてしまつた。考へて見ると馬鹿馬鹿しい相手になつたもんだね』





三升家小勝氏

◇屁の足跡

錦浪『屁の足跡と云ふものを私は見ましたよ。（笑聲）御存知でせうが那須の温泉と云ふのは草津と同じで、時間湯です。何しろ一番が攝氏五十二度、二番が五十一度五分、三番が五十一度と云ふので、番外でも四十八度からの湯です、餘程下

の力の湯からでなければ五十度などと云ふ湯へ這入れるものではありません。そこへ魚河岸の人で名前は預つて置きますが飛び込んだんです。「あなたそれは亂暴です」と云つたが「なあに江戸ッ兒は熱い湯には驚かないよ」と云つて肯かない。突然五十二度と云ふ一番へ這入つたんですね、さあ熱い、熱いけれども江戸ッ子の手前、齒ぎしりして浸つて居た。何しろ少しも動けないんですからね、心臓の鼓動で起る浪でも、動けば迚も熱いんです。みんな腹が焼酎へつかつたやうになつて往生して居るんです。すると其先生腹工合が悪かつたと見えて、一發やつたんです。それが前に出て來れば何事もなかつたのですが、運が悪く背中を駈け上つた。いや熱いの熱くないの、まるで剃刀で裂かれるやうなんです。とうとう我慢が出來なくなつて飛び上つた。側の者こそ宜い災難、これも一斉に飛び上つた。その儘入つて居れば宜かつたのだが、飛び上つた爲めに背中へ登り龍の赤痣です。いまでも其痕がある筈です』



森　曉紅　氏



司郎『なるほど、屁の足跡だね』

◇僞物の少將

曉紅『僕は怪談を持つて居るんですがね、私が初めて上方へ行つた時です。江戸ッ子が行くんだから氣の利いた姿をしなければならんと云ふので、まあ色々と工面をして恥しくないと云ふ程度に身なりを整へ、例の山岸の手拭、藍のですね。あれを持つて行つて、先づ伊勢にお詣りして、それから奈良にゆき、奈良の魚佐と云ふところに泊つた。それが大晦日の晩です。

まあ風呂に入つて、すつかり宜い氣持になつて上つて廊下に出ると、向ふから番の女中がやつて來たが、私の顔を見るなり、いきなりキャッと云つた儘、蒼白になつて逃げて行つた。どうも變でしやうがない、此方も氣味がわるい、そこで自分の部室へ行つて僕の顔を鏡で見ると女中が驚く筈です。山岸の手拭が染めのわるいのだつたので、手拭の藍がみんな僕の顔についてしまつたんだから、お化けの顔をこしらへたやうなものなん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



生方敏郎氏

です』

淳『顔と云へば、私が一度ロケーションの時大失敗をやつたことがあります。陸軍少將の服裝でやつて居ると、先方から本當の陸軍少佐が來たんです。何しろ少將と少佐なんだから、先方は直立して敬禮をしたもんです。さあ贋物の僕は困つてしまひました。知らん顔をしては居られない。身體谷まつて擧手の禮をしながらお辭儀といふ妙なことをやつてしまつたんです。其場はそれで濟んだがあとで調べると丁度その附近で演習があつたんださうです。少將級の人は來る筈はないと詮議が嚴しくなり、とう〳〵化の皮が現はれて、警察へ突き出され、一晩拘留を食つて了ひました』

◇情ない名譽

伯山『軍人の事で思ひ出しましたが私にこんな話があります。若い頃青森の成功亭と云ふ席で四十日打つたが借金が十二圓殘つたと云ふ鉈棒な話。席亭は妙な顔をして、「もう貴方は立つて呉れ」と云ふのだが立つて行く所が無い。すると第五聯隊から一席講談をやつて貰ひたいと云つて來た「おい席亭もう大丈夫だ」と云つて喜び勇んで聯隊に行つた。一個大隊づつやつて三日間、將校集會所で一日やつて都合四日だ。少くとも五十圓は大丈夫と云ふ胸算用で待つて居ると、軈て聯隊附の少尉殿が馬に乘つて大きな箱を持つて來た。

「しめた」喜んだのは私より席亭の方だ。これで貸した金は取れると思つて居たんだね。どうぞこちらへと云ふので奥へ通すと「將校團一同面白く承はり、精神作興上非常な參考となつた。聯隊長殿からよろしくと申されました」と水引のかゝつて居るものを恭しく置いて行つた。席亭と私は爭ふやうにして早速それを開けて見ると感狀が一通、一つは目錄「銀盃一組贈呈す、第五聯隊將校團」とあつて、片々を見ると銀杯は池ノ端玉寶堂に注文をしてあるから、出來次第御尊家に御送附する。と云ふだけで五十圓はおろか一圓札一枚這入つて居ない。席亭は何とも云ひやうのない顔をして一「八え



池部鈞氏

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

誠に御名譽なことで……」と云つた切り。罪な銀盃だ。其代りにその聯隊長の添書を貰つて打つた興行が十日間大入滿員と云ふのでした』

◇無錢宿泊の卷

敏郎『旅ではよく樣々の事件がありますな。これは私が廿一の時ですが、ある人に賴まれて越後へ行つたことがあるのです。大體先方の用で行くのだから、自分の金は一文も要るべき筈でないのだが、何かのはずみに茶代位は自分が拂はねばならなくなつた。とう〳〵癪にさはつて、大切にして置いた學資を越後見物に皆んな費つてしまつたんです。いざ東京へ歸らうとなると汽車賃が無い、少しばかりは殘して置いたのだが、どう勘定して見ても長野迄行つて十錢餘るだけしかない。長野へ降りて俥屋を呼んだ「どちらへ」と云ふから「長野には知人が居るのだが、所書が判らないから富士屋と云ふ宿屋へやつて呉れ」と云つたんです。富士屋と云ふのは僕の郷里の沼田に桑原と云ふ一番の財産家がある。それと親戚だと云ふことを知つて居るので、宿屋に乘りつけ、先づ車代を立替へさせる。車で乘込んだ客だから先方も大切にして三階の一番宜い座敷へ案内し、二の膳つきで飯を出す。腹が減つてるからそれをうまく食べて湯に入つた。

すると不思議なことには湯から出て來ると待遇がまるで變つてしまつた。僕の脱ぎ捨てや、持物の樣子で見て取つたんだね。お座敷を變へますからと云ふので今度は一番下の黴臭いところへ連れて來られた。途端に宿屋の番頭が出て來て宿賃を呉れと云ふのさ。まあ二三日滯在するからと誤魔化したが其手には乘らない「御勘定は日に〳〵頂戴いたすのが私共の掟でございます」と云ふんだ。「それはさうだらうが僕は今金を持つて居ないから」

と云ふと、番頭の奴吃驚して「旦那はお金を持たずにお泊りになつたんですか」と云ふから「お前のところは宿屋だらう……」「宿屋には違ひないがお金なしでは困ります」「困るのは僕の方が餘程困る、まあ取寄せることにするから」と云つたら「一體旦那はどちらです」「宿帳に書いた通り東京だ、が本籍は上州沼田だ電報爲替で取寄せるから」と云ふことで早速郵便局へ行つて賴信紙を貰ひ、イザ打たうとすると電報料がない。切手を貼つて來れたけ



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN


古川緑波氏

れば困ると云つて局では電信を受けつけて呉れない「電報で金が來るんだから、十五分か廿分の間、待つて居て呉れませんか、その代り僕も茲で待つてる」と云つたが、郵便局は取合はない。

仕方なしに宿へ歸ると「旦那の長野の知合と云ふのは何處です」と云ふから所書は忘れたが、太田と云ふ家だと云つてやつた。「それでは家で非常に懇意にしてる家だから、今から御案内します」と番頭は僕の荷物を持つてもう連れ出さうとして居る。仕方が無いから後をついて行くと、僕の懇意な知合と云ふのは其宿屋の前だつた。それでまあホッとしたわけだ』

◇得意の失敗

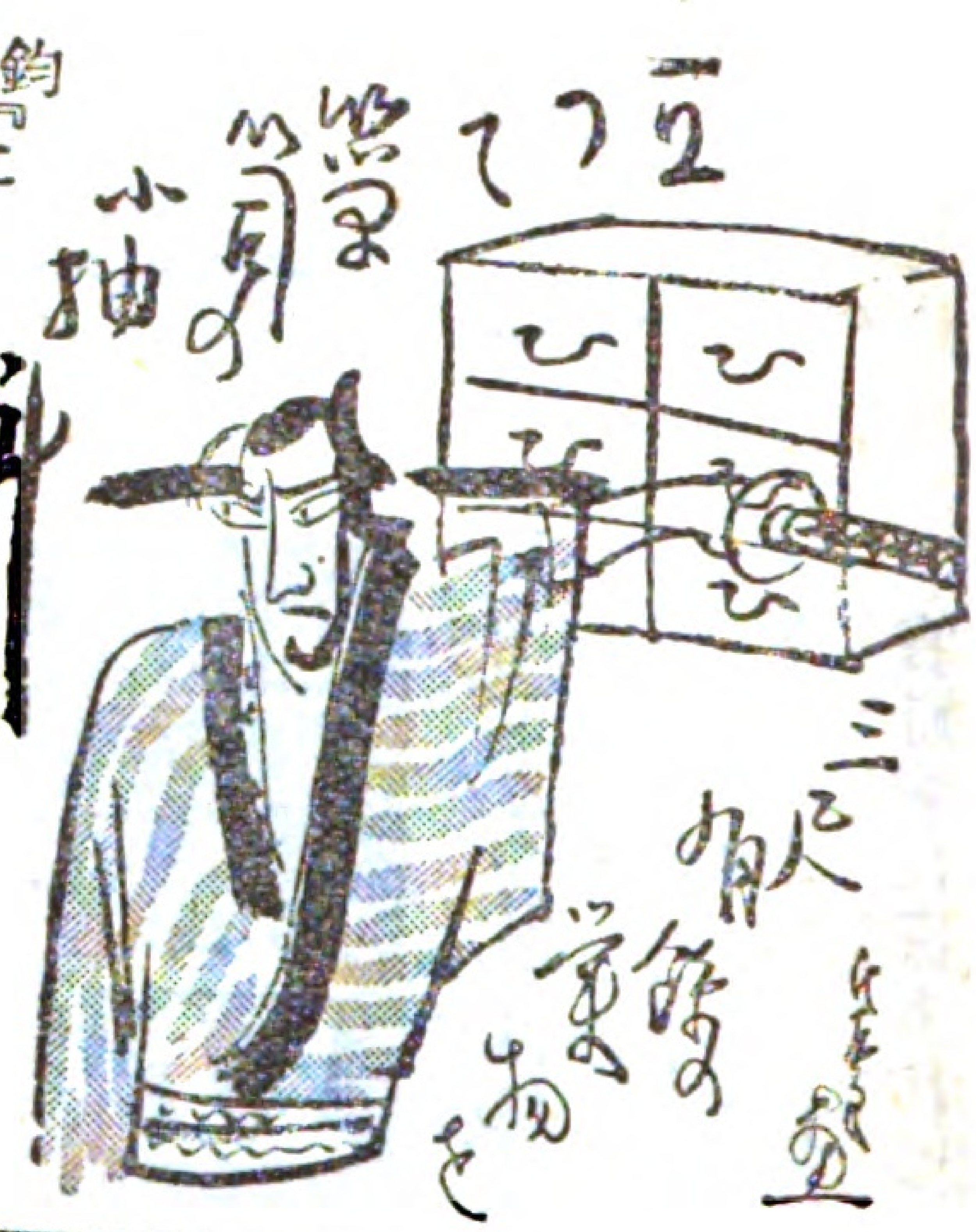
伯鶴『汽車の中にも面白い事件が澤山ありますよ。昔私が廣島へ行く時、靜岡から乘つた女が私の側に腰をかけた。馴れ馴れしくいろ〳〵な話をしかけるのでこつちも宜い氣になつて自惚れて居ると、やがてうとうとして來るうちに、懷ろへ女の手がスーツと入つて來た。私の紙入れをぬからうと云ふんです。「何をするんです」と小聲で云つてやつたら「あまり手が冷たかつたもんですから」とぬかしやがる「いくら冷たいたつて、薄氣味の惡いまねをするな」とおどかしつけると其女は名古屋で降りてしまつた。

さあ其女が降りたから私は大きな聲で「皆さん驚くぢやありませんか今のはあんな美人で箱師ですぜ、何も取られたものはありませんか」と云つたら、六七人のものが「俺の蟇口がない、俺の紙入れがない」と云ふ騷ぎ、私は紙入を拔かれそこなつたんだから大威張りでさあ「旅は氣をつけないとね」とかなんとか涼しい顏をして居ると「あなた鎖が」と云ふのでふと見ると、いつの間にか私も時計をやられてしまつて居たんです』（笑聲）



◇プロレタリアの謝禮

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



釣『これは仲間の話ですが、假りにTと云つておきませう、それが銀座で似顔絵を描いて賣つて居た。カフエーかなんかでやつて居たんですね。ところが暴力團めいた凄い顎鬚の男が來た。『俺はプロレタリアだ、プロレタリアは錢は一文も無い、ないけれどもお前の藝術を愛好するから是非俺の顔を描いて呉れ』、こつちは金儲けをやつて居るのですから困るのですが、嫌だと云へば撲られさうだ。それで仕方なしに描きあげた。ところがそのプロレタリア先生、『君に無料で描いて貰つても氣の毒だから、僕の書いた本を一冊上げよう、之れを、取つて呉れ』と渡されたのを持つて歸つて見ると産兒制限法と云ふ本だつた。と云つた丈けではつまらなさうな話だが、實はT君といふのは現在子供が五人もあつて、まだどんどん生れさうな子福者でした。それを知つてた茶目の仲間が一寸悪戯をやつたんですがね』

◇微笑哄笑苦笑


田中比左良氏

緑波『活動寫眞に映畫俳優の御挨拶と云ふのがある。ロケーションの時に序だと云ふので其土地の常設館へ御挨拶と觸れ出し、大々的人氣を博さうと云ふ計畫で大宣傳をやつた。ところがすつかり當がはづれて散々な不入りだつた話があります。後で聞いて見るとロケーションで役者の顔はすつかり見ちまつたから、もう見なくても宜いと云ふんです』

伯鶴『調子と云ふ奴は恐ろしいもんで、我々の仲間なんかでも、張扇を叩いて調子づいて來ると、振り下ろした一刀、美事左の腕を切り落す、返す刀は逆に拂つた一文字、右の腕を根元より、それにも怯まぬ敵もさるもの、齒がみをなしてむんずと組付き、なんて兩腕の無いのが組みついて來る。さうかと思ふと「立つて簞笥の小抽斗、三尺有餘の業物を」と來るから物凄い、小抽斗から三尺の刀は出やしない』

記者『今日は色々と面白いお話を聞かせて頂きまして、誠にありがたう御座いました』

――をはり――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

快報！大快報!!

キング四月號大增頁大飛躍！

何といふ感激でせう！何といふ歡びでせう！
愛讀者各位の熱烈なる御俠援により、飛躍！ 飛躍！ 又飛躍！ 新年號この方眞に目覺ましきキングの發展、毎號の大增刷、編輯局の感謝歡喜たとへん方なく、一同躍り上りいよ〳〵勇み立つて居ります。

大發展感謝！ 更に猛然大活躍！

四月號、大增頁を斷行！ 大附錄特輯！

大附錄
新時代の
立身出世繁榮道

と題する壯快極まる大特輯附錄を添へることに致しました。

時は春、天地に生氣よみがへる時、積年の不況に惱みぬいた日本が、苦境のドン底より浮び出て、大繁榮を目ざして起ち上らうとする時、全國各學校から希望に輝く若人が實社會に躍り出づる時、就職や、轉任や、開業や、到る處に新なる運命が築かる〻時、

わがキングは、此大特輯を世に贈り、諸君の開運成功に資せんとするのであります。

見よ！希望と感激に輝くこの内容

◎新時代の立身出世に必要なる諸條件あり
◎大成功者の體驗から得た成功の要訣あり
◎東西大人物の出世のいとぐちあり
◎各方面花形人物が、一旗あげるまでの苦心慘憺實話あり
◎七轉八起大願成就物語あり、裸一貫大成功物語あり
◎學校へゆかずに成功した人々あり
◎中年過ぎから發奮して大成功した人々あり
◎各社の社員採用の打明け話あり、特別拔擢の實例あり
◎夫の出世を助けた夫人あり、身一つで奮闘成功の未亡人あり
◎人物掘出し物語あり、花嫁出世美談あり
◎御用聞きの見た榮える家の主婦と衰へる家の主婦あり
◎日本でも面白からうと思はるゝ歐米の新職業案内あり

其他まだ〳〵澤山、悉く立身出世の名教訓、成功繁榮の活記事滿載

男子も婦人も、少年も少女も、何人もゼヒ御覽下さい！

古人もいふ、修身、齊家、治國、平天下と
先づ立身せよ！成功せよ！繁榮せよ！

乞ふ次號を待たれよ！

尚又、四月號は、小説、講談、落語、美談、逸話、面白い方面に於ても水際立つたとても面白い素晴しい出來榮えてす。どうぞお樂しみにお待ち下さい。



怪盜夜叉王

前田曙山
山川秀峰畫

警戒の周到

夜叉王如何に大膽にても、天下の一臈たる大老職の奥殿に、事々しく前觸をして乗込み得られるであらうか。

波多野右近も鬼玄蕃も、殆んど呆れて分別が附かなかつた。小梅の御住居に狼藉を働いたとは言へ、夫は警護の手少なも有つたらうが、場所もあらうに櫻田外の霞ケ關、前は皂莢河岸を隔てゝ、雲に聳ゆるは千歳の松、枝も動がぬ千代田の御城にして、東隣は廣島四十二萬餘石の大大名松平安藝守、西は三州田原の三宅備前守、南は九州宇土の細川山城守、夫が何れも上屋敷で有る上に、續いては眞田信濃守、有馬兵部大輔の下屋敷が取卷くし、櫻田外から日比谷内には、上杉、太田、柳澤、相馬、西尾、小笠原、其外大小名の上屋敷が碁盤の目を列ね、辻番の灯が夜を警しめて居る眞中に、飛鳥墜す御大老の奥殿へ、何として忍び込む手段があらう、必竟は大老職を御辭退申せの、天誅を加へるのと、徒らに鬼面人を威す戯事に過ぎまい。第一妾

も見せぬやうな賤劣卑怯の夜盗の鼠輩に、三十万石の上屋敷が、指もさされる道理はないのだ。

誰しも然は思ひながら、一面には神出鬼没の限を盡し、宛がら風の如く去來する怪盗には、如何なる妖術があらうも知れぬ、さればこそ殿が極秘に右近に仰せ付け、右近が玄蕃を伴なつたので、怪賊の襲來不可能と信ずる中にも、萬一といふ心配が、萌の芽のやうに、腹の底に刺々立つて來る。

翌る日は夜叉王より豫告された二十五日で有る。今迄の例として、夜叉は前觸の日には必ず遣つて來るのだ、曾て其豫告を反古にした事は無い、恐らく凡ての成算が附き、掠奪の手段が組立てられ、萬々失敗は無いと見込んでから、始めて豫告を寄越すものと思はれる、然れば如何に嚴重の警護が有つても、怪盗は必ず乘込み來る者と思はなければならない。

『占たわい。』と、一人北叟笑むのは望月玄蕃で有る。嚮には夜叉王の騙詐に引懸つて、中納言を奪はれ、續いて秦姫君を掠められ、彼が豪勇自慢の鼻を挫折られた事が、氣狂ひになる程心外で堪らぬので有る。凡そ目に遮る程の者は、惡鬼羅刹たりとも摑み潰すに手間暇いらぬが、烟とも風とも附かぬ幻同様の敵では、天で手の下しやうが無いのだ、夫が圖らず今夜乘込むといふので有るから、玄蕃に取つては盲龜の浮木優曇華の花、十八年の天津風、日頃の鬱憤を晴すのは此時では無いか。

念の爲に二人は廣間の床や違ひ棚の飾り附けを拜見した時、目見た黄金作りの太刀も、古高麗の香爐も、龍王の置物も、依然として正面に飾られて有るし、其外今日の誕生日を祝ふ調度や什器の綺羅びやかなのが、燦として星の如くに輝く。御國の内祝ひと言ふに、後まで讃美を盡すを見ても、阿波の方の寵愛が思ひ合されると共に、大老とは言へ、將軍家の譜代の家臣に過ぎぬのだ、人も無氣なる此豪奢な振舞、畏れ多くも皇室式微の御有様に比べたら、天地月鼈の相違だと、玄蕃は苦い[illegible]を食ひ反らしながら、忌々しさうに八方を睨まへた。

彼の目に觸れるものは、四間四枚の金襖、檜作の格天井、入側の外の廊下から眺められる清らかな林泉の布置、何處を窺ねても怪賊の潜む處も、鑽入する隙もなかつた、況して御表と違ひ、奥の奥の御内證で有る、空飛ぶ鳥でさへ近寄る事は出來ない、宛がら鐵桶で圍まれた中へ、如何なる幻術を以てしても乘込めようとは思へないのだ。

『望月氏、拙者は此御飾り附の次の間に宿直致さうと存ずる。貴公は彼なる廊下の行當り、錠前の戸口に御見張下さらぬか、猶當家御家臣は、其外の口々を守ると申す事で御座る。』

右近は疾に手配の胸算當を附けて居た。虎視眈々たる夜叉王の覗ひ寄る處は、畢竟廣間の飾り附けの外は無いから、何處から忍び込むだにしても、此處に宿直を承はりさへすれば、彼は

の正體を摑む事が出來ると考へたので有る。

『いや、此場は拙者が承はらう、賊の目指すは、此廣間の外には御座るまい。』と、玄蕃は忽ち蚰蜒眉を寄せた。肝腎要の甲處を他人に取られては、鬼玄蕃の面目が立たぬのだ。

『いや、賊が忍び込む處は、彼なる戸尻より外には御座るまい。御庭に直接なのは、鉢前の高縁ばかり、然れば尊公が最初に夜叉と出會ふでは御座らぬか。』

『成程、然し忍術を以て忍び込むに於ては、何處から廣間へ顯はれようも知れぬと思ふが。』

『如何に忍術なりとも、人間の身體が忍び込む事故參るとならば鉢前の戸口の外御座るまい。……尤も尊公最初に敵に當るが心許ないと御座れば、拙者廊下へ參り、尊公之へ御詰め下されても宜しう御座る。』

右近は正直一圖の玄蕃を激發する舌刀を持つて居る、敵を恐れるかと言へば、一も二も無く踏む反りかへつて躍起となるは必定だ。

『怪しからむ事を、拙者眞先に夜叉奴を摑み潰さねば、此鬱憤がはれぬのぢや。』

『然らば廊下の詰めが其場所で御座る。』



『宜しい、拙者廊下を預らう。』

玄蕃

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

は巧みに右近の舌刀に欺かれて了つた。

『尤も御互に功を爭はぬやう、尊公夜叉に出會はれたら、聲を立てゝ合圖を致されい、萬々一拙者の方へ先に姿を顯はすやうな事も御座れば、直ぐ樣尊公を喚び申す。』

『何れにしても、夜叉を蹈潰せば、始めて堪能するのぢや。』

張込場の妥協は漸く成つて、亥刻近くに油斷無き配置は整のつた。天井の高い廣書院の次に、波多野右近は一刀を引附けて坐つて居る。有明の灯は仄かに灯の周圍を照して居るばかり、六尺と距れた先は、朦朧として、僅かに障子か襖かを識別するに過ぎない、美男で聞えた右近の颯爽たる英姿も、次第々々に疊の目へ滅入込むかと物寂しく更けて行く。

鉢前の戸袋の內側には、香餌に鼻蠢めかす野獸の如き玄蕃の眼が、闇中に爛々たる光を縱つ、左手に引附けた名譽の鍛は、利き事魔の如く、人觸るれば人を斬り、馬觸るれば馬を斬る、鐵石ともあれ、敵と見れば閃めいて眞二つ、鞘の中には哮ゆるが如き聲が有る。奧家老の澁川、用人の枝田は、御錠口や、御勝手口に手配を附け、奧役人の誰彼は、庭に散つて植込の中や高縁の下を警戒した。夜叉王如何に妖術を使へばとて、一度乘込み來るからは人目に懸らずに、館へ闖入すると言ふ事は、絕對にならぬのだ。

殿の巡察



沈々として萬籟死し、八音を遏密したやうに、廣い館に物の音といふものは無い、聞ゆるは出で入る三寸の呼吸のせゝらぎ、夫は黑闇々たる陷穽の中へ、有ん限りの世の中を引摺込む響きで有る。

亥刻の太鼓は幽かに鳴つた、隣屋敷の淺野家で夜を警しめるのであらう、地の底で音するのが、何處かへ反響するやうに陰に響く。館の中はいつまでも靜かで、怪賊などが窺ひ寄らうとも思はれない、凡そ忍術や妖術を用ゐる者があれば、宿直の人は眠りを催すといふが、右近の目は刻一刻鮮かに冴ゆるばかり、耳は明かにして、針の落ちた音さへ聞き分けられる。

亥刻半が亥刻七分に刻み込むで行くかと思ふ頃、遙かに疊を踏むで、此方へ近寄る人の氣配が體得された。

偖こそと、右近の全身は黃金の針線を張詰めた如くに緊張した、觸るれば錚々と鳴るばかりで有る。見よ〳〵一步此間に入つたが最後、驀地に飛掛つて、一氣に取つて押へ、天晴無双の

聲を顯はさんずと片唾を呑むだ。然し曲者が庭に近い廊下から來ずして、奥の間の方から忍び寄るとは奇怪至極、萬一にも局方の中に一味が有るのでは無いかと、咄嗟の疑念が電光と閃めく。

遠くの襖を開け閉てする音が、物靜かに聞える、曲者は殆んど躊躇したり、四邊を兼たりする事無く、スル〳〵と尋常に歩いて來るのだ、大膽とも不敵とも、言語に絶え筆紙に盡きた横道者で有る。右近は疾くも股立を抓み上げ、足の拇指を疊に嚙ませつゝ、スパと言はゞ飛び起たん姿勢の氣構へ、息を内へ引いて、吽と丹田に力を罩めた。途段に書院窓の障子に、ボウと燈火の影が映した。驚く可し、曲者は手燭を持つて居るのだ。

右近は思はず頭上から打のめされたやうにギクリとした、敵は此館に人無しと思つて居る、能くも此御殿へ堂々と灯を點けて來たものでは無いか。

右近は反撃の意氣込みは、今を限りに熾烈に燃え上つた。

『波多野右近之に在りと知らぬか。』

忿激の怒氣は匂やかな小鬢に爛と立昇り、色白の顔は薄紅に滲み來つた。

『己ッ。』

アワヤ右近は蹶起せんとした。途段に障子はスル〳〵と明いて、匂やかに媚めかしき女の姿が幻の如くに浮上つた。

『ヤツ、御部屋様。』

右近の張詰めた氣は、他愛もなくガックリと拔けて了つた。的確賊とのみ思ひ込むだのは、殿最愛の御休息阿浪の方で有つたのだ。然も其後には夜の頭巾を目深に冠つた大柄の男が居る、紛ふ方なき殿では無いか。右近は能も斬り附け無くて仕合せだつたと、徐ろに身ぶるひした。

『オウ右近大儀で有るな。』

鷹揚な殿の慰勞の言葉、夫は宿直の苦勞を犒ふ爲では有るが、實は警戒振を見巡りに越せられたので、豪氣に見ゆる大腹中にも、夜叉王ばかりは心懸に相違ないと、右近は疊へ兩手を支きながら、心窃かに首肯いた。

『御前に御在しますか、深夜に恐入りまする。然し御安堵下し置かれまするやう、手前は此處に扣へ居りまするし、望月は御廊下外れを固め居りまする、又澁川は御錠口近く、枝田は御局の廊下より、御勝手口を油斷無く見巡り居りまする、御庭には絶えず見張の者が、要所々々に詰め居りますれば、夜叉と申すに空翅る翼の無き限り、御館内へ一歩たりとも足跡を印す事はなりませぬ。』

人數は少なくとも、區域を狹めての警戒で有る。夜叉王來らば、是非とも張り圍らした網に懸らぬ事は無い。

『オウ能う手配を致した事で有る。然し當方に用心致し有ると

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

知る時は、不敵な賊とは言へ、近瀾に近寄らぬ事もあらう、小人數を伏せたは、賊を誑き寄する手段として、如何にも感服致した。』

殿は警戒の行屆いたのを見て、盡く滿足の態で有つた。

『恐入りまする。此度こそは必ず曲者を召捕、世の憂ひを除きまする所存。』

右近は膝に措いた拳を握り固め、必死の意氣込みは物凄いばかりで有る。萬一取逃しでもすれば、武士の意地でも割腹なし、惡鬼となつて稀代の曲者に祟らん權幕だつた。

『然しながら曲者は妖術を能し、樣々に姿を變ずると申す故欺むかれぬやう心致したがよい。……夫に就いて予は頓と失念致し居つたが、當家奥向きは、構へて人に知らさぬ隱れ間が有るのぢや、其事を浪がまだ其許に申し聞けなんだ由、從つて此隱れ間の方へは手配が屆いて居るまいと存ずるが、どうぢやな。』

『畏れながら其邊…向に心附きませぬ事で。』

『左樣であらう、浪の失念ぢやに由つて、只今予が案内して取らせる、一應隱れ間を見廻つて置いて吳い。尤も外よりは入れぬ處ぢやが、一應念を入れ置かねばなるまい。』

『左樣御座らば、手前暫時たりとも此處を立去りまする間、望月を代らせまする。』

其樣隱れ間が有つたなら、早く知らして吳れば、疾くに用心をしたものを、今になつて厄介とは思ふけれども、猶豫すべきで無いから、玄蕃の雁張る戸尻へ行つて事の次第を告げ、一時見張の受持を替へて貰ふ事にした。

時は刻々陰に籠つて、家の棟も沈み行くばかり、廣い大建物は魔の息吹に滅入込む程、カタリといふ音もない。

右近の不覺

『どうで此處は拙者が見張らねばならぬ處ぢや、右近如きへロへロ侍では、夜叉王が來た時に心許無い。拙者が控へて居れば、夜叉でも惡魔でも、必ず引捉へて吳るわい。』

玄蕃は火のやうな息を肩口に浪立たせながら、爛々たる目を闇中に光らして居た。

阿浪の方の左手に持つ雪洞の仄めきは、漸く樺廊下の彼方へと、遠く〳〵吸込まれて行く。殿に續く右近の後姿も見えずなつて、小さな有明の金行燈のみが幽かに點り、四邊は殆んど暗くなつた。玄蕃は阿浪の方のスンナリした後姿の絶なる仄めきが、怪しく目に殘つてならなかつた。夫は珠とも花とも譬へ難き美しさに魅されたのでは無く、能も泰姫君に似参らせたといふ寂しき思ひ出が、聞き分けも無く胸を衝き上げるからで有る。

兇賊の手に懸つて、無慚に花を散した姫君の淺ましき御最期、高貴の御身の御首さへ知れず、隅田川に泛ばれた御姿を思ふと、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

無念の血涙に五臓六腑を搾り、身體を捻ぢ切られるやうな鬱憤が、遣る瀬無く込み上げ、坐つた儘に地鞴踏む程、物狂はしく蕩ぶり立つて來る。

玄蕃の拳は爪の痕が食ひ入る程に握り固められ、忿激の膏がダラ〳〵と指の叉から滴たつて來た、八萬四千の毛根盡く恨氣を噴いて、生きながら魔王の眷屬となるかと思はれ、我身が見張の役に方つて居る事すら、危ふく忘れさうに茫となつた。

小半刻も過ぎたと思ふ頃、靜かな奥の方で、コトリと幽かな音がした。蟻の囁やきをも聞き逃さぬ程緊張する玄蕃は、偖こそ夜叉が忍び込むだなと、眦を決して身構へた。右近が居る時に來らずして、我身一人の處へ入つて來たのは、旻天未だ玄蕃を捨させたまはぬのだと、歡天喜地の胸を躍らした。

然し曲者と思ひ込むだ玄蕃の期待に反して、悠々として入つて來たのは、今の先殿に案内されて、隠れ間を見屆けに行つた波多野右近だつた。

『波多野氏か。』

玄蕃は直に龕燈を向けようとするのを、右近は手を擧げて制し止めた。

『其儘々々、成るべく灯の映さぬやうに。』

右近はグツと玄蕃の側に迫り寄つた。

『如何で御座つた、其隠れ間といふは。』

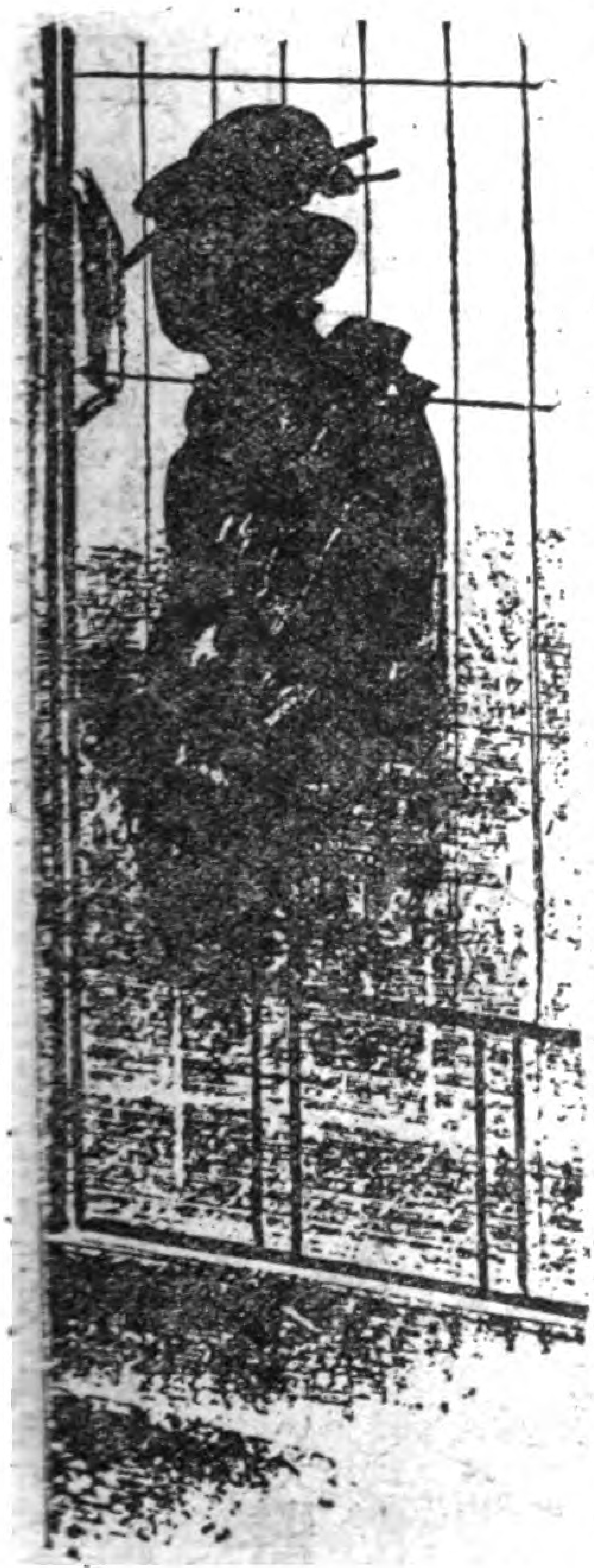
『いや他愛ないもので御座る。……大きな聲では申されぬが、殿も夜叉には餘程御心を傷められると見え、彼様な隠れ間まで御心痛あらせられる。……只ほんの四疊半程の落間で、何か雜物でも入れて置かれる納戸とも御座らうか、所詮外から入りやうは御座らぬから、用心も見張も要らぬ處、何の懸念も有り申さぬ。』

右近は殿が豪氣磊落を粧ひながら、夜叉襲來の豫告には、内實魘えて居るらしいのを笑止がつた。

『大方其様な事であらう、天下の老職も臆病風が吹いては、女子供同然ぢやわい。』

玄蕃は呟やくやうに嘲笑つた。關東公儀の重職を、成るたけ下らない人間にして了ひたいので有る。

『然し夜叉と申す奴、まだ參らぬとは何と致したか。拙者が宿直に參つたのを知つて、手出しはならぬと諦め居つたか、さ



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

りとては卑怯千萬な鼠輩ぢやわい。』

玄蕃の大言壯語は、街ふのでも飾るのでも無く、全く自分の力を信じ切つて居るので有る。右近は忌々しくなつて、何か異議を挾まうとした時、突然疊廊下に人の跫音、さやかな衣摺の媚めきさへ幽かに耳元に囁き來る、續いて障子越に雪洞の薄灯さへ仄めいた。

『又女共が來をつたか。』

蚰蜒が這つて來るかのやうに、玄蕃が眉を顰めると、

『此樣に御奥の女中衆が起きて居られては宜しくない。』

右近が顏を曇らせる處へ、靜かに障子を明けたのは、目覺るばかり美しく﨟たけ、闇も明るき阿浪の方で有つた。

『之は御部屋、又しても何ぞ御用で御座りまするか。』

魅するやうな妖冶の氣が、フウワリと二人の男を包むで、溫たかい靄の中へ抱いて行くばかりに、阿浪の方の美しい匂ひが漂よつた。

『アノ貴下方はお聞き遊ばしませぬか、只今何やら怪しい物音が致しましたが、どうやら御疊廊下の先のやうで、若しも曲者が參つたのでは御座いますまいか、上が貴下樣に早う御知らせ



申すやうにと仰せで御座います。』
上の仰せよりも、自分が先に薄氣味惡くなつたので有る。
『いや、此方へは何の音も聞えませぬ。殊にお畳廊下の奥と申せば、今の程貴女樣御案内で、御前の御供申して御檢めした隱れ間の方角では御座りませぬか。』
只た今檢めた落間の座敷、四方八方座敷や廊下で圍まれて居る處へ、突然賊が湧いて出る筈は無いのだ。
『アレ波多野樣、何と仰せ遊ばします。御上と貴下樣と妾と、何れへ御同道申しましたと。』
阿浪の方は鹿の子のやうな優しい目に、包みも敢へぬ不安の色を曇らせた。
『何で御座る、先刻御前樣と貴女樣とが、之へお運び下されたでは御座りませぬか、其折御前御言葉には、隱れ間を手前に知らせるを失念したるより、案内して取らせるとの仰せ、夫故御同道致して、お檢ため申したでは御座りませぬか。』
右近は怪しからぬものに思つて、焦るやうに阿浪の方の顏を見上げた、阿浪の方も意外の思ひで、呆れて右近の滑らかな美男の顏を見返した。
『思ひも寄らぬ仰せ、何と遊ばしたで御座いませう、御上は先程より安々とお寢り遊ばし、妾はお側にお附き申して居りました故、何で御上が之へお出で遊ばしませう、況して妾が貴下樣を御供申したなどと、夢にも存じませぬ。若しや御宿直の御氣惰みに、夢なと御覽じたでは御座いませぬか。』
『エツ、貴女樣は御存じないと。』
右近は耳の端で不意に大礟を射たれ、全身の血が赫と逆流するを感じた。
『怪有で御座るぞ波多野氏。』
側に遮二構へた鬼玄蕃の髭面にも、不安の漲ろきが有る。阿浪の方は蟲が知らすやうな魘えに襲はれて、蠟より青くなつた顏を見合せ、五官の働きは冷灰よりも死滅した。
『殿と御部屋が見えられたは、夜叉奴の妖術で御座つたらうか。』
『いや拙者も此眼で正しく見受て御座る、如何なる魔法たりとも、拙者の目は欺むけぬ筈。』と、玄蕃は如何なる場合にも豪氣の自惚を忘れないのだ。
『どう致したので御座いませう。妾は氣味が惡う御座います。』と、阿浪の方は急に怖氣立つて來た。現在來もせぬ自分が今の先此處へ來たと言はれたのが、一層身の毛も彌立つので有る。
『アレ〱、どうやら御奥で物音が致すでは御座いませぬか。』
臆病氣の叢立つた阿浪の方は、思はず知らず右近に寄り添つて身を顫はした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『成程仰せの如く、何やら物の氣配が致すやう、……望月氏御見屆け下さるまいか。』

『宜しい、拙者引受け申した、然し其隱れ間と申すは。』

愈ゝ功名手功の時節到來と躍り立つた。

『其奥廊下の行當から左へ切れて、又右へ曲つた處で御座る。』

『心得申した。恁樣な時は何時でも拙者に御任せあれ。』

右近如き柔弱武士が、常平生は大きな言を吐き散しながら、いざとなれば此通の逡巡、顏ばかりが生白くて、何で物の役に立つ、さればこそ美男は蟲が好かぬのだと、玄蕃の意氣俄かに昂り、猛然として駈け出す右手は龕燈、左手は鍔元無手と取り、パラ／＼と疊を蹴つて一飛と思つたが、勝手は知らず暗さは暗し、右に左に龕燈を振り照しながら、言はれる儘に辿つて來ると、廊下は右左に岐れて、列なる間每は襖で閉て切り、何處が夫とも判らぬのに、玄蕃は狐に抓まれた心地、迫き立つ足許を是非無く立駐つて、寸時佇ずんで居ると、何處とも知れぬ呻き聲、夫が地の底から哮るやうに陰に籠つて、正しく只ならぬ椿事が起りつゝ有るに紛れない。

スハこそと、玄蕃は目を瞋らし、息を嚙み殺して、聲する方を心當に、一步は一步と近づいて行くと、果して聲は次第に明らかになり、或ひは斷え或ひは續く、御咎めの女中が折檻を受けるでも無く、又男禁制の奧殿に、家中の侍が取籠められて居る道理もない。

玄蕃は引摺れる如く、其聲に魅せられて、幾間仕切を通り拔けると、小廊下の板戶の、二段ばかり落間になつた處に、正しく人の氣配がする。

『ウム、此處だわい。』

屹と身構へながら、ガラリと板戶を明けると同時に、龕燈を差附けると、パツと描き出されたは、六疊あまりの納戶めいた小室、局の雜物と覺しきが、いきれ臭く積重ねられた眞中に、河岸の鮪と投げ出されたるは、高手小手足まで嚴重に括し上げられ、着衣を剝がれて固く猿轡を嚙まされた一人の侍、無念に蜿蜒打つ唸り聲が、夜の靜寂を顫はせて、遙かに夜氣を脅かしたので有る。

『誰ぢや。』

玄蕃は飛込みさま龕燈を差附けると、不意の光に愬い一見上げる顏。

『ヤア御邊は波多野氏。』

さしもの鬼侍も虛空に彈ね返されて、天地が倒に轉がり廻つたかと、肚肝を拔かれた。只た今大廣間で別れ、後に殘して駈け附けたのに、其人が自分より先に廻つて、落間の中に轉がされて居る道理は無いのだ。剩さへ怪しい聲を聞いて、右近が見屆けて呉と言つたので有るから、右近は當然此不覺人の聲

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

を聞いた譯で、此處に居るのは別人で無ければ道理に合ぬが、夫が紛れもない同一人で有るのだ。

玄蕃は夢に夢見る心地がして、呆氣に取られて見入つたが、忽ち猿臂を延して右近を引寄せ、手早く猿轡を外したのは、明瞭本人か否かを見極める爲で有つた。

『オウ望月氏、無念で御座るわい。』と、ハラ〳〵と血の涙を搾るは正眞紛れもない波多野右近で有る。玄蕃は廣間と落間との二人の右近を、何としても辨別する事が出來ない。

『波多野氏、何とし召されたのぢや、奇怪千萬な事。』

玄蕃の息は荒らかにして、地獄の冥火を噴き上げるやうに、肩先から込み上げて來る。

『夜叉は何と致した。』

手足が自由になると、右近は血走る眼に八方を睨まへ、拳を握り固めて、碌々物も言はれぬ程、渦巻く恨氣が胸に衝き上げて來る。

『エー夜叉なぞは參りはせぬぞ。參れば拙者が一握りに握り潰して異るのぢや。』と、松の木のやうな腕を叩く。

『いや參つたのぢや。』と、右近は齒を嚙む。

『來はせぬ。』と、玄蕃は承服しない。

『先刻殿に化けて、拙者を之へ連れ込んだのが夜叉王で御座つたわい。』

『エツ、彼は殿では無つたのか。……然し拙者も紛れなく同じ人と存じた、尤も夜頭巾を被つては居たが。』と、玄蕃は呀と思ふと腰も拔けるばかりに驚き呆れた。

『早く手廻しをして、御庭廻りを檢ためたなら、まだ迂路附き居るかも知れぬぞ。』

右近は餘りの不覺に、力拔したやうに、よろ〳〵と立上つた。思ふ樣力を罩めて括された爲に、一時血行を止められたので有る。

『拙者には何が何やら頓と分別が附かぬわい。……殿と同道の御部屋も、本物ではなかつたか。』

『彼女も賊の同類、妖術を以て御部屋の姿容其儘に化けて參つたのぢや。』

『然らば今廣間に居た貴殿は。』

『夫も夜叉の妖術を以て、御邊の眼を眩ましたもので御座らう。……今の間に飾附の寶物も懸念で御座るぞ。』

『如何にも大事ぢや。』

一瞬の間ももどかしく、矢の如く廣間の方へ取つて返すと、右近も居ず、阿浪の力も見えず、剩さへ有ん限りの重寶は、塵一つ止めず奪ひ去られて影も無い。

二人はアツと言つた儘、其場へ立ちはだかつた切り、顔見合せて瞬きもしなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

怪盜と姫との契

剃刀の刃を渡り、槍の穂先に立つやうな際どき夜叉王の藝當、警戒嚴重の奥殿の奥で、殿と御部屋に化けて、右近と玄蕃を欺むき、有ん限りの寶物を奪ひ去り、風の如く消え失せたのは、殆んど人間業では無い。

最早二三の人々限り秘めべき事柄では無いので、館の中は上を下へと騒動した。奥役人は總出になつて、林泉の隈々から床下まで、凡そ物の陰になる處は、殘りなく捜索したが元より怪しき者の影も無く、出入去來の蹤跡も分らぬのだから、夜叉一味は烟の如く現はれ、烟の如く消え去つたと認めるより外なく、然も豫告の通り、太刀香爐置物を始め、數々の七珍萬寶は、潔よい迄に盜み去られ、廣間の飾り附は、藻拔の殼の伽藍洞と化し去つたのだ。



天下の大老の奥向に對して、斯までの榮威を揮ひ、子供を愚弄するが如き侮辱を加へるからは、彼が誇るが如く、何時殿の首を奪ひ去らぬとも知れぬと、人々は口にこそ言はね、生きた空もなく戰き恐れた。怪盗夜叉王は、前以て豫告した事は、必ず其通實行するといふ事が、此襲來に因つて證據立てられ、明かに裏書されたので有る。大老の權威を以ても、無人の境を行くが如き怪盗を如何ともすることが出來ぬので有る。

『波多野氏、夜叉といふ奴は、聞きしに勝る恐ろしき者で御座るな。』

負けじ魂の玄蕃が相手を指して恐ろしと言つたのは、よく〳〵敵の高手段に驚かされたので有る。

『拙者の面前に於いて、斯まで鮮かに振舞ふ者が、外にあらうとは存ぜぬ、此腕を以てしては、中納言樣を掠め去るなど、全く容易い事で御座らう、然し夫にしても、姫君は實に殘念千萬、彼樣な淺ましき事にお成り遊ばさうとは。』



玄蕃は胸毛を顫はせながら、取返しならぬ無念を嘯ぶき上げた。

『したが玄蕃殿、夜叉と申すは不思議な盜賊ながら、決して僞りを言はぬかと存ずる、然れば現に夜叉が生き存らへ居つて、斯樣に出沒致すからは、姫君の御命を絶たうとは思はぬが。』

『然らば大川端の御死骸、首こそなけれ、紛れもなき姫君の召物、彼は姫君では無いと言はれるか。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『其邊拙者は何とも判斷に迷ひ居るので御座る。……業に拙者が彼の落間で、無念の恥辱に遭ひたる節の事が、今考へると夢のやう、夫さへ判じ兼て御座る。』

右近は額口に浮く生膏を拭き〳〵、苦しさうに言つた。強がりの玄蕃に對して、失敗の始終を語るのは殘念ながら、雁字絡の醜態を見られた以上、其行立を隱しもならぬのだ。

『何として又貴殿が他愛も無く、括し上げられたので御座る。餘りに子供扱ひにされた事では御座らぬか。賊は多勢で御座つたか。』

玄蕃は右近の失態が、如何にも意氣地無く見えてならぬのだ。

『いや面目も御座らぬが、實は怪樣な次第で御座る、殿が夜頭巾で越せられたを、御同樣疑ふ由も無く、又阿浪の方さへ御附き下さるに由つて、拙者は何事も思はずに、彼なる御納戸迄參ると、之が隱れ間と有るので、仰せを受けて中へ入つた處、彼通りの狹い物入、怪樣な處を檢めずとも、仔細は御座るまいと、內心怪訝に存する折で御座る、突如後よりして柔かき綿のやうなものにて鼻口を押へられて御座る、其節殿と御部屋の外人は御座らぬにより、何か殿の御戲むれと存じたが、押へた力は大磐石、踠き拔けようと思ふ間に、不思議や夢のやうに茫となつて、夫ぎり何事も存ぜず、氣が附いて見れば上衣や袴を剝がれてグル〳〵卷、聲も立てられぬといふ不覺、察する處夜叉は切支丹の妖術を以て殿に化け、又一味の女を御部屋に仕立て、御同樣を誑らかした上、拙者の著衣を剝いで拙者と化け、貴殿を欺むいて、納戸の方へ遠避け置き、其間に御重寶を手早く掠め去つたものと存ずる。』



『成程、夫より外には分別の附けやうは御座らぬ、然し妖術とは言へ、能くも御邊に化け腐つたもので御座る、今にして思ひ合せると、拙者が灯を向けようと致したを押止めたも、化の皮

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

の現はれぬ用心で御座つたか、返す〴〵も忌々しき奴で御座る。』

さしもの豪傑も、敵の機敏と巧妙とに呆れるばかり、力を以て格するならば、金剛力士たりとも恐れる處では無いが、捕捉すべからざる電光石火の閃めきには、殆んど手の下しやうが無く、之から先、何處を指して突止めようと言ふ方角も無いのだ。

玄蕃は餘りの忌々しさに、再び起つて奧庭へ下り、念の爲彼方此方と植込みの間を歩き廻つた、夜明けに近い下弦の月魄は妖魔の一眼のやうに赤く輝やいて、然も光無く泉水の面を照して居る。人の心の裏を覘つて、意表に出づる事のみ巧みな夜叉王は、館の騷ぎの靜まつた頃を見計らひ、盜むだ寶を運び出すやうな事は有るまいかと、いみじく考へ及んだので有る。

枯山水の石庭を崩して、樹木をあしらつたかと思はれる程、奇巖怪石の縱横する庭は、舐めたやうな芝生の斷續、黐木斛の植込みの中を、ソロリ〳〵と辿つて來ると、忽ち後から慕ひ來る優しい跫音、玄蕃が驚いて振向くと、思ひもかけずニツコリ笑つて佇ずむのは、紛れもなく殿寵愛の御部屋阿浪の方で有つた。玄蕃は已又しても夜叉の妖術かと屹となつたが、夜目とは言へど、月明に疑ひもなく正眞の阿浪の方で有つたから、僅かに顏色を和らげて、覺束ない心地に立淀むだ。

『オウ御身は御當家御休息、此物騷な折柄、何御用わせられた。』と、玄蕃は遠慮會釋も無く咎めた。

『御身に申し上げたい事が有ります故。』

『何御用かは存ぜぬが、恁樣な處まで唯御一人にて、萬一夜叉の狼藉でも御座る時には。』

『其懸念は要らぬ事、夜叉は妾の配偶ぢやもの。』と、俄かに改たまる玲瓏たる聲音は、一時一時も忘れぬ耳に覺えの微妙の天樂。

『ヤツ、其御聲は。』

『玄蕃、其方は之を存じて居やるか。』

顏を背向けて自分の頸を指さすと、左の耳の根にマザ〳〵と鮮かに印された黑子の一點。

『ヤア御身樣は。』

玄蕃は驚きの餘りに、タジ〳〵とよろめいて、危ふく犬居に仆れようとした。

聲音は其人にして、顏容は大老寵愛の御休息、何れが眞、何れが僞、夢か、現か、醉へるか、醒めるか、大の男の神身綿の如く碎け、泥の如くに鞣めされ、精神此時に亂痲となつて、中有に漂よはされて行くのだ。

『其方に解らねば之を見や。』

颯と投げた一封の玉章、ヒラリと芝生に翻へつたのを、飛鳧

つて拾ひ取る間に、阿浪の力の魔丈けた姿は、烟と消え雲と散つて影も止めない。玄蕃は追ひ及ぶには能はず投げ附けられたやうに、撲と芝生に坐して、火のやうな息を天に吐きかけた。

奇々怪々、變幻百出、人間界を其儘魔界へ打ちまけた上、大きな足で蹈みこくつたので有る、奇と正と眞と僞とが一緒に泥つて、鹽と砂糖とが區別されなくなつた。玄蕃の頭腦は緩く生溫たかく、息は絶え〳〵に、あはや卒倒せんばかりになつた。夫でも必死に氣張ながら、受けた玉章を披いて見た。若しや惡い狐にでも誑らかされて、之も無文の白紙かと思ふと、まざ〳〵と走り書した水莖の痕は、目に灼き附くばかり見覺えの筆蹟。

『妾は夜叉王殿の爲に誘はれ、其棲家へ伴はれ侍るが、其時限り世に在る妾は死に侍りて、淫ましき亡き骸を大川の流に殘し、骸無き妾の魂は甦生りて、夜叉王殿と百歳の契を罩め、幾久しく皇御門の御爲に盡し侍るにこそ、されば御身は妾の敵に力を假して、夜叉王殿吟味に荷擔致すまじく、又妾の所在を尋ね求めるよりも、小梅の留守を致し、時來りて妾の出現するを待ちたまふべく、今の御代の樣は、女ながら安閑と內を守るの時にあらぬ儘、夜叉王殿に力を添へ、大君の御爲身を粉にも碎くにこそ、中納言殿とは妹脊の約束こそあれ、偕老の固めせぬなれば、女の操を破れりと言ふには侍らず、御身此後中納言の君に會ひ參らせなば、再び君の御爲に忠節を盡すべく諫め勵ますやう、一入賴み入る事に侍る。』

走り書の痕を辿ると共に、玄蕃は呀と言つて氣死せんとした。

『あゝ弓矢八幡……もう行かぬ、姫君は怪賊の爲に魅せられ、魔法に懸つて、淫ましい御身とならせられたのだ、雲の上の尊き御血脈を以て、盜賊づれに肌身を許されるとは何事、剩さへ西園中納言の北の方と定まれる御身が、約束のみで契を交さぬこそ幸ひ、女の操を汚したとは言はれまじとは、汚した怯れがあればこそだ、問ふに落ちず語るに落ちるのでは無いか。』

身を悶え、脾胃を破り、我と頭を掻きむしつたり、齒を噛み、目を見張つたり、悉皆狂氣の有樣になつた玄蕃は、躍り上り、飛上り、地團蹈むだ揚句が、水莖の痕を顏に押當て、思はず男泣きの血涙に咽んだ、鬼をも拉ぐ豪傑が泣いたと言ふのは、物心覺えて始めてゞ有る。

去るにても合點のならぬは、姫が生身を其儘、阿浪の力生寫しの顏容となり、髮も烏羽玉の長船に取上げ、物腰恰好の凡てが大名の休息に成り濟したこそ、面妖千萬、阿浪の力が姫か、姫が阿浪の力か、玄蕃は眼眩むでクラ〳〵と狂ひ廻つた。

（つゞく）

奇は奇を生んで變幻百出、息づまるやうな不思議のかず〳〵。
怪盜夜叉王とはそも何者ぞ、乞ふ、次號を待て!!

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

萬人熱狂 新案智慧くらべ

一、考へ物



(1) 刀が七本ありますが何に使ひますか？

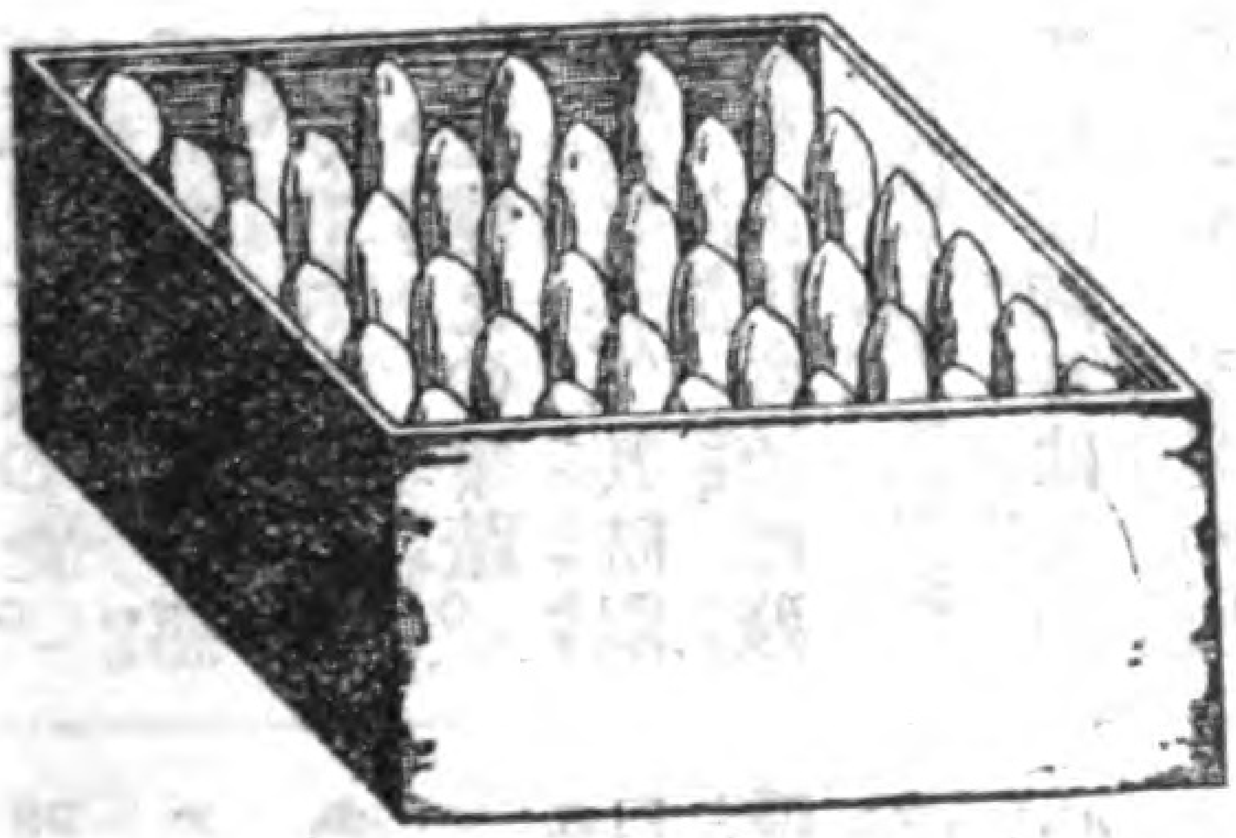
(2) 家根の下に犬が八匹ゐるが、どうしたら逃げるでせう？

(3) 泳いでゐた女がアッと言ふ間に波の下になりました。彼女はどうなるでせうか？

(4) 刄は遂に心臓の上に擬せられた。如何にすべきか？

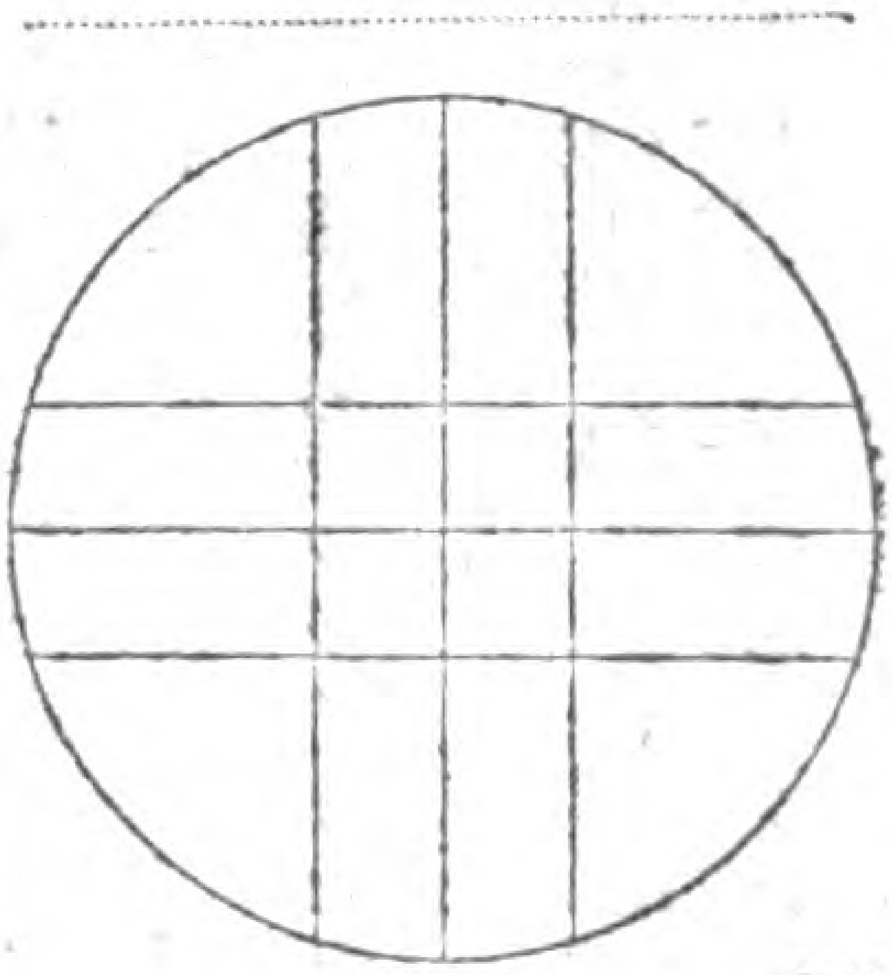
二、砲彈拔き

西暦千八百九十八年の米西戰爭中の一挿話です。スペインの砲兵士官が兵卒に、砲彈が幾個殘つてゐるかと尋ねました所、箱の中には縱横六個づつ卽ち三十六個あるとの答を得ました。士官は『では、その中から六個だけ拔き出して縱横どの列を數へても偶數が殘る樣にしろ』と命令しました。兵卒はどう云ふ風にならべかへたでせうか？



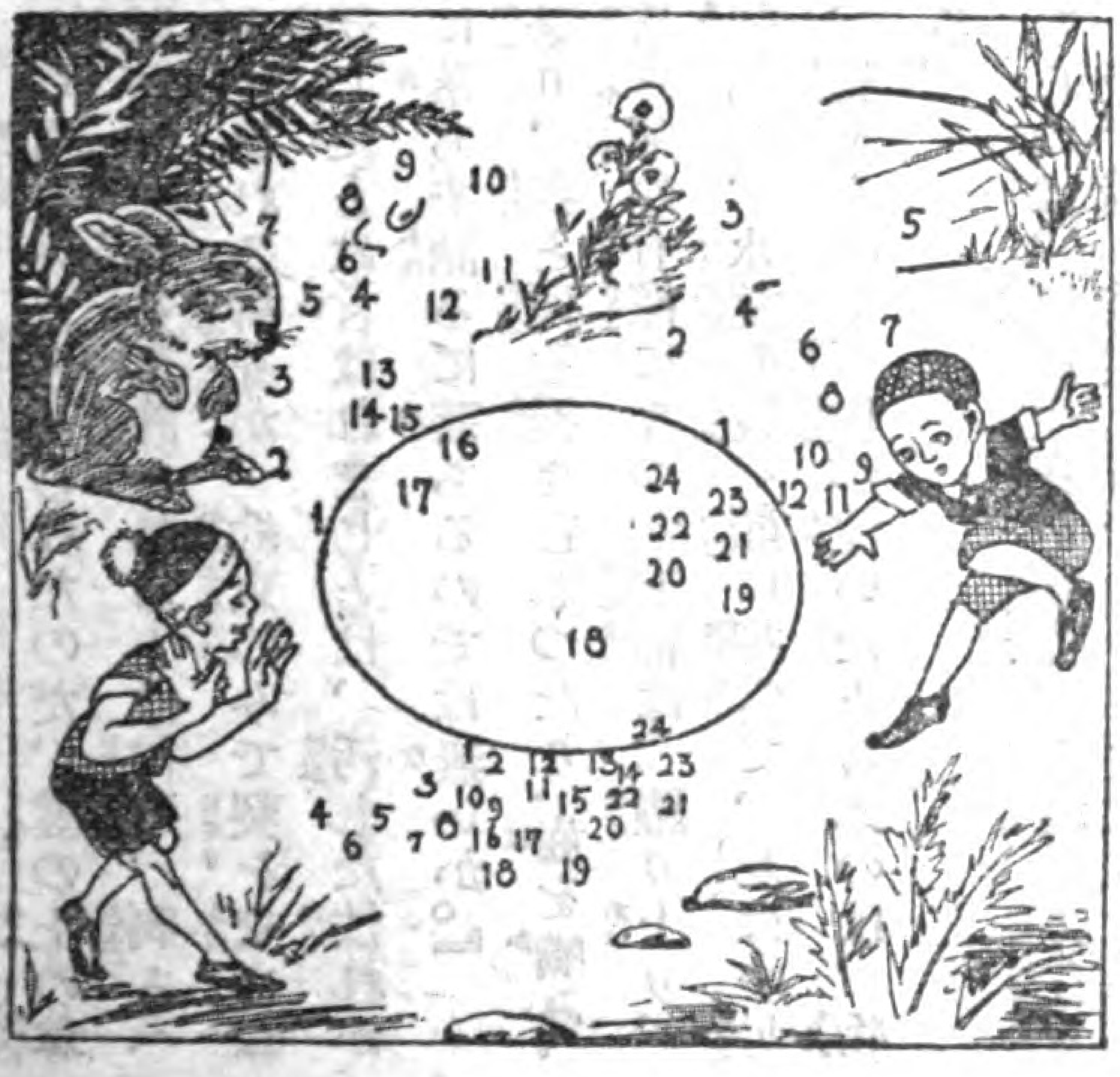
三、六本の直線

六本の直線で圓を十六個に仕切りました。ところが、これを見た或る人が、『二十二個迄は仕切れる筈だ』と申しました。



四、小人は何に驚いたか

お山の小人と兎が一緒に大きな卵のぐるりで遊んでゐましたが、突然眼を圓くして驚きました。一體何事が起つたのでせう。兎の足許の1から2へと順に24迄鉛筆で線をひき、右及び下の方の數字も同じやうに結びつけて見ると驚いた譯が判ります。



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

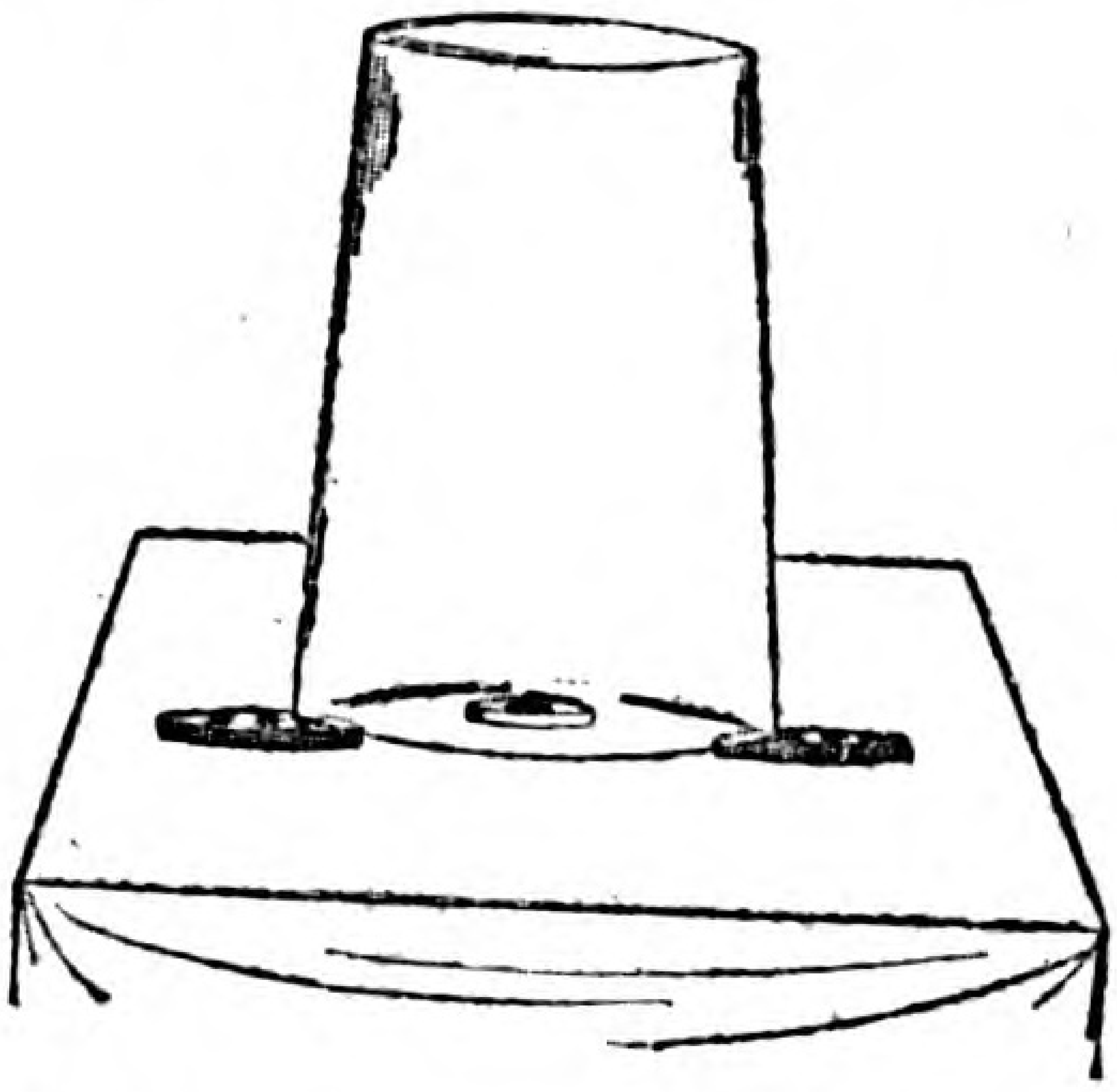
ハテナ？（出來上りの仕切りには大小不同があつてもよいさうです。）

五、揭示板

ある揭示板に左の樣な妙な文章が書いてありました。その文中餘計な文句をとりのけて讀むと、一つの正しい文章になります。その文章とは果して何でせうか。

私は（毎日電車／新聞や雜誌／上野の公園）で（常識／家か／借金）を（通ひ／返し／養ひ）ます

六、錢出し



圖の樣に机の布の上に白銅を一枚置き、その兩側へ一枚宛五十錢銀貨を置き、その二枚の銀貨の上に跨るやうにコツプを置きます。所で白銅にも觸れず、コツプにも觸れず又五十錢銀貨にも觸れずに白銅をコツプの下から外へ出したいのですが、何かよい方法はないでせうか。

七、氷を取り上げるには？



圖のやうに、手水鉢一杯に凍つた氷があります。いつかその周圍は一分ほどづつ溶けてゐましたが、まだ指を入れることは出來ません、今この氷を少しも傷つけないで取りあげる簡便法があつたら、大變助りますが何かないでせうか？

八、一升桝の使ひ方

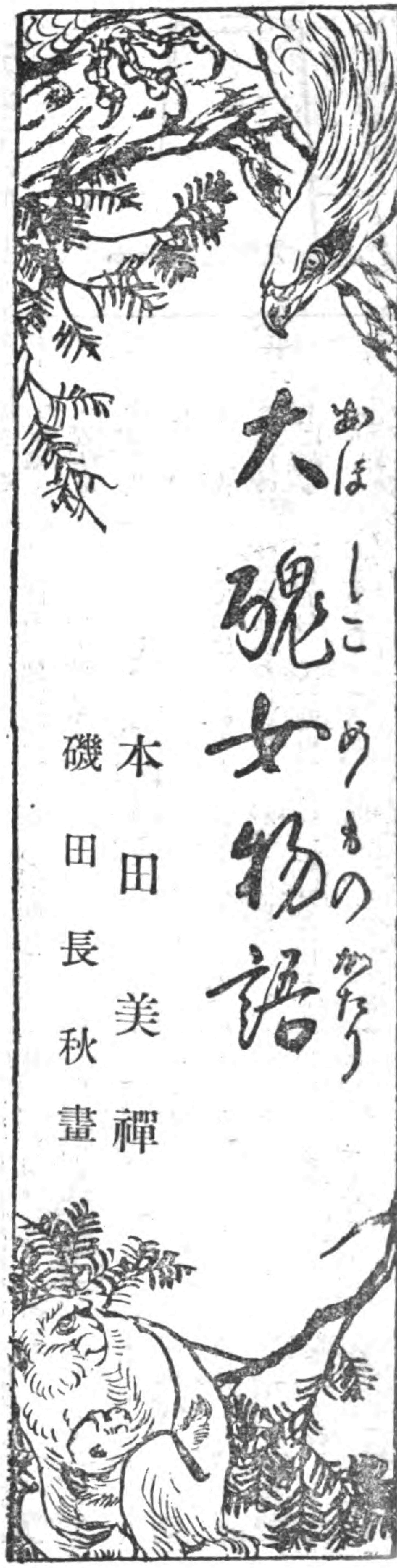
こゝには一升桝たゞ一個しかありません。今米をはかりたいのですが、この桝で、五合、二合五勺、又一升の六分の一を計るにはどうしたらよいでせうか。

（解答は二八八頁にあり）

九、順序通りに

左の圖は順序通りになつて居りません。若し之を順序通りに並べ換へると一つの繪物語が出來ます。一つ考へて見て下さい。





大醜女物語

本田美禪
磯田長秋畫

天から降つた珍客

敗殘の軍勢らしい一隊が、北方の矢部界、京の平の一部に現はれ、昨夕は其所でどん〳〵と篝を焚いて夜營してゐた。その光景を見出した仙境五家の人達は、長夜の夢を破られた遊子のやうに驚いた。

尤も五家は前記のごとくに（先月號參照）、椎原、久連子、葉木、仁田尾、樅木の五部落から成り、方五六里の間に聳ゆる山嶽中にちよぼ〳〵と豆を蒔いたやうに散ばつてゐる。各部落間の交通も勿論自由には通じてゐない、一部落の出來事が他の一部落に傳はるまでには、半日以上數日を要するやうな狀態にある。で、今、矢部界、京の平の一部に、天から降つたものゝやう、昨日突として現はれた一隊を見て仰天したのは、矢部界に近い葉木の部落の人等であつた。

この葉木及び仁田尾等には雜座氏の一族が三百四五十人住んでゐた。この一族は建長二年に筑前太宰府から逃げ込んだ菅家の裔を先祖とするので、みな何所となく殿上人氣風を帶びて生活してゐた。で、自然、久連子椎原にある平家の落人（內大臣重盛の三男、左中將淸經）の後裔たる緒方氏一族とはそりが合はない。が、然し武家とはいひでふ、壽永時代の平族は白馬金鞍の貴公子ぞろひで、詩歌管絃に耽溺してゐた。其れがために富士川の水禽となり、須磨大物の敗軍となり、終に壇の浦の最後となつて一族全滅の悲劇を演じた結果が爰に斯うしてあるので、威張つたことはいへないわけだが、兎も角も武家の末裔、武人の面影は何所かに保つて、兵器なども相應に立派なものを所有してゐた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

從つて日常の生活狀態にも懸隔がある。雜座氏の一族が、黑木丸柱のぽつ立て小屋に、あけびで編んだ玉簾をぶら下げ、野生の黍や唐もろこしをぱくつく口で齷齪といひかねまじき氣風をもつて呑閑に暦日を送つてゐるのに、緒方氏の一族は、猛獸などを擊取つて慓悍に且つ快活に原人的に生きてゐた。で、緒方氏は武强黨雜座氏は文弱派である。その文弱派の人々が、突として天來の——然も甲冑をつけた一隊の訪問客を發見したのだ。仰天しても無理はなかつた。

『大變な物が舞ひ込んで來た。どの方面にも落り込む道路も穴もなかつた筈だに』『あの樣子では戰爭に敗け、逃げ込んで來たものに相違はないが、一體何所の侍だらう』『あのまゝで放つて置いては、戰爭に勝つた側の武士から苦情をいつて來られた時に、申開きが六ケしい』『然うだ五家の浮沈ともなる』『それは好いが天下の樣子は今什うなつてゐるのであらう。數百年來外界と全く交通を斷つてゐたこの仙境の我等には見當さへもつきかねる。まさかまだ源右府の子孫が天下の棟梁として變つてゐるわけではあるまい』『何にしろ一大事、久連子椎原の平家の衆にも、些とも早く注進をして加勢の兵を賴まにゃならぬ』『然うだ、使の者を直に飛ばさう、平家の衆にや弓箭もある』『その間に防戰の用意をしよう』『合點だ！』といつた調子で、部落の人は未明から右往左往して顚動してゐた。

京の平は眼の前にある。だが其所へ行く道路は險惡、岩角を攀ぢ、藤葛に縋り、這ふやうにして進まねば一步も前へ踏み出せぬ。從つて眼前にある、天來不意の闖入者等が部落の方へ降りて來るのも尋常一樣の業でない。早くても半日以上要することは分つてゐるのだ。

そのとほり京の平にある阿蘇惟前の一隊は、容易に進みかねてゐる。日丸から爰まで來るのに、彼等は二晝夜を費した。烏獸さへ通はぬ峻險！其れは文字どほりに酷かつた。重輕傷に惱む體は、極度の飢に囚はれてゐた。什うして無事に前進されやう、悲痛な聲を口に啣んで仆れた者も四五名あつた。焦眉の急は兵糧だつた。幸ひに今季節は初秋、あけびや山葡萄の未熟な物を手當り次第に捥ぎ取つて、むしや〳〵嚙んで辛うじて爰までやつて來たのだが、もうこれ以上は續かない。眼の前にある部落を見ると、掠奪慾さへ擡頭して來る。が、實際には什うにもならない。其れに軍師猿渡丹波は殿として後方にある。部落の者に武器らしい武器のない事も分つてゐれば、人數も多寡の知れたもの、恐れるほどにないことは知れきつてゐる事實なのだが、敗殘の身はひよろ〳〵してゐる。是れではどんな小敵でも侮る氣にはなれぬのである。

『だが然ういつて何時までも躊躇つてゐるわけにはゆかぬ』憮然として考へてゐた盟主惟前は口を開いた。『其れに丹波も申

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

したごとくに、五家の者はみな落人の末、いはゞ今の我等同樣、身を置く許に苦しんで爰へ逃げ込んだ者等の子孫だ。思ひやりも深くあるわけ。事情を告げて賴んだら、味方につかぬものとも限らぬ』

『御意』

『然し殿！』一個は齒痒さうに叫んでいつた。『原來五家は大宮司家の配下になつて居りました土地。今世の中の形勢は一變しても殿の御旗に楯つくやうな氣遣はまづなからうかと存じます』

『いや』惟前は靜かに抑へて『其れは地圖上では阿蘇の配下に屬して居つた時代もあつたが、渠等は丸で存ぜぬ事だ。領民と見て横柄な挨拶したら失敗しようぞ』

『では矢はり無二無三に征伐をして五家一圓、我等の隱れ家といたしませう』

『待て』惟前はまた靜かに抑へて、『結局は然うするより外には策はないとは思ふが、爰へ落つることを慫慂したのはお知りやるとほり猿渡丹波じや。渠には名策があるも知れぬで、兎も角渠の來るのを待たう。もう暫くの辛抱じや』

『は』

『其れにしても斯やうな所に』いひながら惟前は、また改めて瞳を放つて、葉木の部落をじつと見下し、『住めば矢はり住まれるものかの。祖先の白馬金鞍の榮華の夢を追ひながらあの烏納屋にも劣りたる黑木の小屋に住んで居るのじや。他人事ではない我々もまたその轍を踐まうとしてゐる……』悵然として歎息してゐた。

その中にまた日は暮れた。

赤松の木が周圍にあるので、其れを伐り仆して篝火を焚く。その火は天を焦すほど高く焔々と昇るので、遠くから眺めると、後から續く軍勢が次第に加はつて來るかに見えた。

變を聞いて驅けつけた仁田尾、椎木の一族初め、久連子椎原の緒方氏の一族もまた其々に兵器を持つてゐるのであるから、勃々たる戰鬪氣分に驅られることは免かれぬ。部落でもまた篝火をどん／＼焚いて徹夜してゐた。

軍師猿渡丹波の胸に、奇策妙案のない以上、然う容易には豫期のごとくに五家を征服して渠等自身の巢とすることはいふまでもなく、其の同情に縋ることさへ困難らしい形勢である。

全軍五日間艱難を嘗む

追擊軍も山中の險路難道には全く憊つた。難道でも道らしい道が見出せると好いのだが、その難道さへ滅多にないのだ。豪雨の際に上手の山から海嘯のごとく落ちて來るその凄じい雨量のために、凹んだ許の岩や木が一氣にどつと流される。その跡

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

だけが道らしく森林中についてゐるので、道らしい許を辿つてゐると、山の裾や谷間の飛んでもない許へ出てしまふ。で、方角を計つては、横に山腹を縫ふやうに、岩角を這ひ、木の間を潜つて、藤や葛の蔓に取りつき、逡巡迂回、氣息奄々、大汗だくで辿るので、四五町進むのに少くも一刻以上時間を要する。露濕蒼苔鹿跡明―（日柳燕石氏、五家莊行詩の一節）――といふやうな所にも往々にして遭遇するので、毒蛇猛獸のゐる事も豫期して行かなければならぬのだつた。勿論馬に乘つては歩けぬ。小雪を初め部將等もみな徒歩だちになつてゐた。轡面を自ら執つて、面を拂ふ荊棘を手で押しのけてはそろ〱進む。源九郎の鵯越しも斯くやと思ふばかりの危險を次から次へ續けて行くのだ。

其んな事を五日も續けた。

一つ山中をぐる〱と廻つたことも何度もあつた。道に迷つたといふのではない、天から道はないのであるから、たゞ無茶苦茶に歩くより外には什うも仕樣がないのだ。軍師加々爪景治は磁石を持つてゐるのだが、元原五家といふ土地がどの方角に果してあるのか見當さへもつかぬので、役には毫も立たぬのである。

夜は岩陰や木立の間に露營を張つて休息をした。猿の聲を頭上に聞いたり、臥猪の床を驚かしたり、妻戀ふ鹿の哀音にわが愛人を偲んだり、羽翼を張ると八尺以上の偉大さとなる荒鷲の羽を搏つて行く豪快な姿を天に見仰げたりして、偶には全軍の將士等も興を催した事もあつたが、其んなことは一時の遣悶、足は擂子木のやうになる。汗は渾身を洗つて流れる。體は綿のごとくに疲れる。其れは什うにもならぬ日を其等は既に五日も續けて、今日もまた峽中で第一大險の聞えある大王山の山腹を大汗だくで進行してゐる。

小雪は愛馬斑月毛の轡面を執つてそろり〱とその先頭に立つて行く。小櫻縅しの鎧の袖や、草摺などが荊棘に引ツかゝつてはさら〱と鳴る。軍師加々爪景治と侍女お袖とはその後に從ふ。其等も矢張り轡を執つて、輙すると岩角に躓かうとする各自の愛馬をいたはりながら率いて行く。隊列はその後方にある。

『お〻、那れに神社らしいものがある』と小雪はいつた。崔嵬たる赤肌の一座の山が向ふに見える。その山腹に森がある。かつを木がその森の中から小さくちよつと見えてゐるのだ。

『成程、鳥居のやうなものも見えます』と軍師もじつと向ふを見てゐる。

『案内者が御さいませんので、什ういふ神樣か分りませんが、御神社のあるところを見ますと、人里近くなつたやうに思はれるでは御ざいませんか』といつたのはお袖であつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『彌宜か番人かゞ居るかも知れぬ。兎も角もあれへまゐつて、ゆる〳〵休息をいたすと爲よう。後の者共に然ういうてたも』

『畏まりました』とお袖は一個其所へ殘つた。

小雪は加々爪を從へてまた先頭に立つて行く。

暫くすると雜草の八重葎した盆地へ出て來た。神社を持つた禿山はその右側に立つてゐる。路も八重葎の裡にある。石段もまた一幅狭く木立の中に見えてゐる。敵に警戒する必要は全然ないやうに思はれるので、小雪は率いてゐる馬を放つた。



加々爪もまた馬を放つた。

放された馬は欣んで自由に草を食ひ出した。

後方にあつた隊列はその間に段々と近づいて來る。平地にあつて休息するのは渠等は今日が初めてなのだ。

小雪は石段を登り初めた。お袖、加々爪、物頭格の部將を初め、主將手廻りの士卒若干、その後について續々登る。

石段には木の葉に交つて兎の糞が散ばつてゐる、老鶯の聲が聞える。ちゝと鳴く小鳥の聲も頭上の木々の梢に聞かれる。

自然木の鳥居を潜ると佳なり廣い境内に小社が灰色に鎭座してゐる。周圍には少く〳〵四五百年は經たかに思へる杉の大木が密生してゐる。が、彌宜の居りさうな建物はない。從つて地上には人の足痕は一つも見えない。太古其のまゝの靜寂な空氣の中にしつとりと總ての物は苔淋びてゐる。

小雪は珍らしげに四邊を眺めた。



と、俄かに叫んだ。

『那れを見や』

『は』一同は主將の指さす杉の大木の梢を見仰げた。

一匹の親猿が、この春生んだらしい子猿を二匹、兩手で胸にしつかり抱へて、小さくなつて止まつてゐるのだ。

『まア可愛らしい、子猿を抱いてゐますのね』とお袖は見てゐる。好奇心と同情とに綺麗な顔は輝いてゐる。

『子を二匹抱いてるやうじやが、什うかして捕れないものかの』と愛惜しさうに小雪は見てゐる。

『捕るのは譯は御ざいませんが、然し、那んな物を何にあそばす』と軍師は苦い顔をした。

『連れ歸つて育てゝやるのじや』小雪はじつと仰ぎ見ながら、『親なればこそ我々が斯うして側へ來たのも恐れず、子を抱きしめて庇つて遣つとる。其れにあの此方の枝に、小さくなつて止まつてゐるのは、什うやら牡の親猿らしい。物の具をした大勢の人間を見たら驚いて慌てゝ逃げて行かねばならぬに、妻子の愛にひかされて那アして居るに相違ない。喃うお袖、親子夫婦の情愛は人間よりも深いやうじやの』

『仰せのとほりで……』

『むッ?』と小雪は叫んだ。彼方に立つた大木の梢を屹と睨ま

へてゐる。
『什うなすつたので御ざいます』
『鷲が居るのじや』お袖も氣がついて其れを見る。
『まア！』
一同もまた屹と見仰げる。
『鐵砲を持ちや』と小雪は命じて、『那れに狙はれてゐるために、猿は竦んで居つたのじや。憎い鷲めが――撃つてくれるに』
心得て持つて來た部下の鐵砲をかの女は取つた。
獵師の間に經驗のない鳥は悠々と梢にあつて、わが狙撃者を睥睨してゐる。偉大なる尖つた嘴、茶色に物凄く輝く兩眼、わざとじつと翼を收めて嘯いてゐる體形は四尺に近く見えてゐる。
火繩には火がつけられた。覆面の中の涼しい瞳は、照準線に据ゑられた。
この時である。
小雪の指が引金にかゝらぬ先に樹上の鳥は、奇聲を揚げながら苦しげに身踠きをして落ちて來た。轟然一發、鐵砲丸の飛ぶに先だち、何者かゞ征矢を飛ばして鳥の兩翼を縫うたのだつた。
『何者の所業であらう』
『何所にも人は居らぬやうだが』怪みながら一同は四方をきよろきよろと見廻はしてゐる。
と、拜殿の後から、弓を持つた一個の男が其所へ小走りに飛び出して來た。

殿への土産に猿と鷲

『言語道斷！』
『折角奥方が撃たうとなすつた、其れを横合から射るなどと無禮千萬な痴漢だ』
『何者だ汝や？』と一同は怒つて取卷く。
『椎原の者ですが……』弓を捨てゝ大地へ手を突き、男はおづおづと辯解をした。『この御社は手前等の祖先に當る内大臣重盛卿を祀つたもので、小松神社と申します』
『ふん、其れで？』
と、加々爪等は睨まへてゐる。
『で、當地では靈場で、この境内では不淨の血などを流さぬ事になつて居ります。勿論殺生は禁じてあるので』
『では何で汝は射たのじや』と小雪は詰つた。
『其れは貴下樣が鐵砲でお撃ちあそばさうとなすつたからで、手前はわざと羽がいを縫うて殺さぬやうに射て落しこの境内を汚さずに、貴下樣にもお望みどほりにお爲せ申さうと思つたか

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

らです』
『其れは好う氣づいてくりやつた。禮をいふ』と小雪は優しく、『見たところでは武藝など嗜みのある者とも見えぬが、今の弓ぜいでは武士も及ばぬ手並を持つてゐるやうじや。おゝ成程！』
とかの女は見返る。
士卒等が寄つて來つて、辛とのことで捕へ了せた偉大な體格の猛鳥を、主將の一覽に供すべくかの女の側へ運んで來たのだ。
『大きいわのう！』
『御意』
『強さうじやのう！』と小雪は嘆賞して鳥を見ながら、『獸中の獅子、禽中の鷲、共に王者の氣位を持つとるやうに聞いて居つたが、この有樣では然うらしい。人間もまた眼中に置いてゐぬやうに見えるでないか』
『是りや敵はん』と士卒は叫んだ。『抑へて居りますのにこの通り！…。うつかりすると片腕ぐらゐはすぐ喰ひ取られてしまひます』
『今羽搏きで二三人、打仆されまして御さいます』
『然うあらう』と小雪は笑つた。
『是れもまた猿と一緒に、このまゝ御城中へ携へてお歸りあそばしては如何です』
『然うしよう。殿のお土産には丁度好いでの』
『御意』
『御苦勞じやがお身達は、あの猿の親子夫婦を、そつくり巧く手捕りにしてたも』
『畏まりました』
『さて其所で汝の事じやが』と小雪は改めて男へ眼を向け、『今の話說の模樣で見ると、汝は最前から姿の樣子を何所かで窺つてゐたのじやな』
『はい、失禮とは存じましたが……』
『何所で何をして居つたのじや』
『今日は祭日に當りますので……』男は矢はりおづ／＼答へる。『村一統の名代として、手前が一個參詣にまゐつて居つたので御座います』
『椎原の者じやというたな』
『御意』
『矢はり五家の莊の中じやな』
『然やうで』
『では阿蘇の一族が逃げ込んだのを存じて居らう』
『その事で御さいます……』男は恐る／＼物の具をした武者を初め一同をまた改めて見廻はしてから、『最前から申し上げよ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

う、申し上げようと存じてゐながら、つい差控へてゐましたが、重傷を負うた軍勢が、四五十名と思ふほど、ついこの下の葉木へ來て、隱れて居りますので御ざいます』

『其れが阿蘇の一族じや』と說明してから、『葉木といふはこの下か』

『御意』

『矢はり平家の末葉か』

『否え』什ういたしましてといふやうに男は慌忙しく頭を振つて、『葉木その他三ケ所には、平家の末葉と稱する者のみ住まつて居りますので御ざいます』

『とすると汝等の栖んどる椎原といふは爰よりは逈か遠方にあると見ゆるな』

『御意、六七里先で御ざいます』

『其れに何で祖先の神社を斯樣な許に作つて置くのぢや』

『二百年ほど前までは、手前等一族も葉木邊に住まつて居つたので御ざいましたが、子孫が段々殖えまして……。其れに唯今の住所の方が、平地も多く、作物も出來、住みよいもので御さいますから、いつとはなしに段々と移轉いたしたので御ざいます

『成程』と小雪は頷き、『其れで祖先の神社だけ爰に置き去られてあるのじや』

『御意』

『では改めて申し聞けるが』小雪は嚴かに言葉を改め、『妾の殿吉良殿は、今度新しく太閤殿下のお取立てによつてこの邊の地頭となつて入部したのじや』

『然やうで……』

『五百年來地頭を存せず、この山中を自分等の領地同樣に心得て暮らして居つた汝等には、天下のことは分らんだらうが、今日本は太閤殿下の御差配の下に置かれてあるのじや』

『太閤殿下と申し上げると……』

『開闢以來お一個の大英雄でゐらつしやる。お名は豐臣秀吉公』

『其んな方がゐらつしやるので？』と男は呆れ顏をした。

『關白職にお就きになつたが』小雪は矢はり嚴かな、男性的な態度で續けた。『其れは御養子にお讓りになり、御隱居あそばして太閤殿下とお仰がれになつてゐらつしやるのじや』

『ではお公卿で御ざいますか』

『否やお武家じや』

『日本の世の中も、山中にゐて手前等が考へてゐたところと異り、何から何まで大變に變つてゐるやうで御ざいますなア！』

男の胸の歴史には、今も尙ほ源平時代の頁が其のまゝであるらしく、而うして其れを懷かしむやう、頭を垂れて考へてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『ほゝゝ』と小雪は笑つた。が、然しかの女の瞳は、男の一擧一動に注意をするやうに働いてゐる。『で、太閤殿下御隠居仕事に』とかの女は續けた。『今大軍を海外へ出し、朝鮮御征伐の最中なのじや』

『朝鮮征伐！』驚歎の眼を男は見張つた。が、其れは故とらしかつた。『朝鮮といふはヅッと昔に、神功皇后が御征伐なすつたところでは御ざいませんか』

『然うじや』と小雪は頷き『で、その隣國の明までも――いや、唐土までも御征伐あそばす思召でゐらつしやるので、日本の土地はいふまでもなく、隅から隅までお手を入れられ、四民に太平を謳はせて、御武威を輝かしてゐらつしやるのに、當肥後の國の土豪の中には、尙ほ矢はり戰國時代の舊夢に耽る者があり、力も計らず一揆など折々起しては騷ぎ立つのじや。阿蘇一族も矢はり其れでの、今度近國の鄕士の遺臣や、溢れ者共を驅りあつめ、濱町城――是れは殿の御居城で、ついこの山の向ふにあるのじや』と說明してから『濱町城へ小癪にも夜討をかけて來たゝめに、手段を設けて大半は其の夜討ち取つてしまうたのじやが、討ち漏らしたる四五十が當五家をさして逃走したので、殿の御名代として妾自から追擊の兵を率ゐて來たのじや。幸ひじやから汝は是れから、その葉木の莊へ案内してたも。どのみち歸る所であらう』

『は、其んなわけで御ざいましたら、手前御案内をいたします。御領主樣に楯突く曲者、そんな者は一人も當地に置くことは出來ません。さア斯うお出であそばしませ』といひながら體を起すと、男は弓を執つて先に立つ。

渠は五太夫と呼ぶさうである。二十七八の壯漢なのだが、その眼中には異光が閃めき、骨格にもまた山中で育つた唯の百姓とは思はれまじき節がある。

小雪等は石段を降り、また先の盆地へ戻ると、放つて置いた馬を引き寄せ、各自に鞍に跨つた。

馬は恐しく悍つて來てゐる。

生捕られた四匹の猿は、一匹ごとに綱をつけられ、軍卒の手で引きずられてゐる。鷲は細引でぐる〱と羽がひぐるみに縛り上げられ、棒で差荷ひに擔がれて行く。

小雪等はまた先頭に立つ。

猿廻し等を中間におき、隊列はその後から續いた。

目ざす敵が遠からぬ葉木にゐることが知れたので、全軍の士氣は緊張して來た。六日間の峻險跋涉、岩角登攀にすつかり憊つた渠等の足も自から前へ輕快に運ばれ初めた。丸に二ツ引の白旗や、部將の肩の差物も風に快よく搖れ出した。鎧の袖や兜の星の日に輝くのも勇ましい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

勇婦饒舌敵將を嘲る

少し行くと道は展けた。

だがまたやがて窄まつて、怪岩突兀、眉に迫る斷崖が屛風を立てたやうに對峙して兩側にある所へ出て來た。潺湲たる溪水の流れに沿うて行くにつれ、その斷崖は岩層となり、その岩層は左右とも見仰げるやうな絕壁となり、高く空中へ沖して行く。直立數十丈、然も絕壁の相對して立つ間はわづか一間ばかりだ。その底にある一筋の小逕の幅は五尺にすぎない。もし前方に敵あつて、この要害を守るとすれば、事實一夫萬卒を喰ひ止め得るに相違ない。

小雪は馬の手綱を控へた。小手をかざして絕壁の天邊にきと瞳を放つた。雕か鷲か鷹の類か、小さく碧空に舞つてゐる。

軍師加々爪景治は、かの女の側へ寄つて來ながら、『奥方、妾には伏兵が御さいます』と小聲でいつた。

『妾も其んな氣持がするので、今ふと馬を控へたのじやが、お身は何で然ういやる』

『那れへまゐる五太夫といふ』最先頭に立つて行く先の男を、軍師は眼をもつて主將に敎へて、『案內者にした男こそ、敵の間者で御さいます』

『お身も然う思うてゐたか』

『では矢張り貴女樣にも』と軍師は肚で敬服してゐる。

『最前の神社の額に、小松神社とあつたのを、渠奴讀み取つて誠しやかにあのやうな事を申したのじやが、實はみな出鱈目で、物いふ度に可異な節のあるのをちやんと見ぬいておいた。察するに猿渡丹波が、この難關へ誘り込むために、豫め渠奴を遣して、妾の軍勢の見えるのを待たしておいたのに相違ない』

『御慧眼、恐れ入りました！』

『で、軍師の見込は』

『然れば……』いひかけて眼を擧げて、兩側に立つ絕壁の天邊をまたじつと見ながら、『拙者の考へではあの邊に巨岩大石を積み上げて、味方の者の通過する際、一度に落しかけるやう、恐ろしい計畫がしてあるやうに存じられます』

『成ほど其んなことかも知れぬ』と小雪はほゝ笑み、『油斷のならぬ謀計じやが、然し其れを恐れて居つては、この難關は切りぬけられぬ』

『御意』

『其れに旣に敗殘の兇徒の眼の前にあることも凡そ見當のついた今、躊躇つてゐるわけには行かんで、妾は袖と馬を列ねて一氣に前面へ馳けぬけて見る。巨岩大石の落つる隙より、馬の飛ぶ方が早いゆゑ、怪我などいたす懸念はあるまい』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『然し其んな事で御さいましたら、拙者初め部將の中にもやつてのける者は幾らも居ります』

『其れは然うじやが、推量どほり猿渡が伏兵中に交つて居れば、妾自身にて生捕りたいのじや。お身は軍勢を一つに纏めて樣子を爰で見てをつてたも。多くても四五十の敵、其れに巨岩大石と申したところで、傷を負うてゐる者共や、微力な者の力ぐらゐで動かした物が落ちて來たとて、恐るゝ事は少しもないわよ。袖、來や』

『はい』と答へた時には、

小雪は既に疾驅してゐた。

その後から馬を飛ばしてお袖も街を馳けて行く。華やかな女武者！ 其れが前後して飛んで行くのだ。鎧の袖はざく／＼と鳴る。拍を入れる度毎に泥障の音はたた／＼と鳴る。石逕を蹴る鐵蹄の響きは高くかし／＼と四方の山の反響を呼ぶ。

と、案の定ぐわら／＼と巨岩大石が落ちて來た。其れは凄じい勢ひで、そゝり立つ絶壁の凹凸面を打ちながら――然も其れが兩側一時に急轉直下するのであるから、恰も山津波が起つたやうだ。見る／＼中に落下した巨岩大石は隘路の上に累々として堆積して行く。

だが小雪等は無事だつた。

側目も振らず眞一文字に隘路を突破して向ふへ脱けると、小雪は敵の間者と睨んだ男の首を馬上から、大薙刀をさし伸べてさつと一薙ぎに飛ばしてしまつた。

『血祭りじや袖！』とかの女は叫んだ。覆面中に見える面は紅潮をして顫いてゐる。

この時はもう見仰げるやうな左方の絶壁の天邊に、敵の參謀猿渡丹波が、黑絲縅しの姿を現はし、女將小雪の武者ぶりを忌忌しげに見下してゐた。

『おゝ那れは慥かに源内、今猿渡丹波と稱する阿蘇の軍師に相違ない』

『必と然うで御さいます』とお袖も彼を仰ぎ見ながら、『貴女樣に頭の髷を切られたためにあのやうな大入道になつたので、據ない法師武者、笑つてやらうでは御さいませんか』

『埒もない！』と小雪は叱つて、『其れよりは手捕りにするには什うしたならば好いじやらう』

『成ほど、お馬を那れへ乘り上げるのはちよつと御困難で御さいますわねえ』

『といつて放つて置いたら、向ふから逸早く逃走するに相違ないしの』

『鐵砲ならば造作なく擊ち取ることが出來ますが、其れでは殺さねばなりませんしね』

『何所かに道がありさうなもの』と馬上の小雪は焦だちながら

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

四方を見廻はす。

道はあるに相違ない。現在敵は登つてゐるのだ。が、その道は今かの女の見廻はす視野の中には見當らないのだ。

『いつそ徒歩で向かつて見ようか』

『でも其んな事をしてゐる間に、また逃げられては面倒ですから、うんと恥ぢしめて、腹を立たせて、耐りかねて向ふから降りて來るやうにしてやつては如何です』

『然う巧くゆけば好いがの』

『行きますとも、私にお任せ下さい――。

やい坊主！』

とお袖は初めた。

參謀だの軍師だの、阿蘇第一の猛者だのといはれる者の頭顱は什うだ。奧樣の薙刀で髷をちよん切られて、吠面かはいてその有樣となつてゐながら、面を包まずにぬく／＼とよくも戰場へ出られたものだ。尤も一揆の大將は、やがて磔刑に會はねばならぬので、坊主になつて今ツから命乞をする積りか知らぬが、其の手は喰ふまい。御領主樣の城内へ夜討をかけたのみならず、五家三界まで逃げ込んで、またあのやうな恐ろしい惡企みした大罪人、無事に生かして置く筈がない。どのみち死ぬる生命なら、潔よく降りて來て最後の一戰を試みよ。恥を知れ腰拔坊主め！といつた調子で朱唇を翻へして懸命に冷嘲熱罵



を浴せたのだが、然し手答へは少しもなかつた。緩々と納まり返つて、岩角に腰を掛け、風に戦ぐ鬼髯を手で扱いては微笑しながら、辨慶のやうな坊主頭を初秋の日光に輝かしてゐた。その背後には一團の士卒が立つてゐるのだが人數はちよつと分らない。

怪童駒市老雄を生捕る

その間に加々爪景治は、部下の將卒を四方に配つて徐々に攻め登る用意をさせたが、絶壁の天邊にある丹波は毫も動かなかつた。喬木の梢頭にある鷹が群雀を睥睨するやう、六百近い敵軍を平然として見下してゐた。渠ももう心の裡では最後の觀念を据ゑてゐるのだ。二日間晝夜不休で、仕掛けた最後の計略に失敗しては味方の武運ももう是れまでと思はにやならない。その上先刻受取つた葉木の莊にある惟前からの密書も面白くないものだつた。『五家の奴原も油斷はならぬ、躬は目丸にて潔よく自刄しなかつたのを悔いてゐる』然うした意味が書かれてあつた。で、もう什うしても討死と決心してはゐるのだが、閻魔の廳の土産には小雪の首なりと取つて行きたい。其れには降りていつては駄目だ。欺き寄せて隙を見て……と思ふので泰然自若、空嘯いてゐるのであつた。



と、見ると一騎の武者が、渠の背後の絶壁を一直線に乗り揚

けて行く。今吉良の軍勢が、通過に躊躇した方面の絶壁面は直立してゐて、羽翼でもない以上、攀ぢ登ることは不可能なのだが、其の背面は所によると、七八十の角度をもつて傾斜をなした岩壁もある。が。常人には騎馬では勿論、徒歩の攀登すら容易ではない。其所を今一騎の武者は、立木の幹をむく／＼と毛蟲が匍匐するやうな姿勢をもつて迅速に一氣に乘り揚げて行きつゝあるのだ。

『や、あの馬には見覺えがある』とまづ叫んだのは小雪であつた。『燃ゆるやうな毛並に見えるは鬼鹿毛に相違ない』

『騎手は馬場殿で御さいます』と次に叫んだのはお袖であつた。

『お〻駒市じや、駒市じや！』と鞍壺に突ッ立つて小雪は嬉しさうに叫び續ける。眼は奇蹟でも見るやうな驚嘆の氣に燃えながら、騎手の乘り上げる姿を見てゐる。『あの模樣では川尻を無事に斬りぬけて戻つたと見ゆ』、

『然うらしゆう御さいます』

『だが什うやつて何時の間にこの山中へ來てゐたのであらう。』

『御意！』と加々爪も驚嘆しながら、惟喬駒市の神技を見てゐる。

他の隊卒はいふまでもない。たゞ啞然として仰ぎ見てゐる。

『察するところ濱町へ歸つて留守居の者共から、妾が自身來を振り兇徒追擊の軍勢を進めたことを聞くと同時に、あの鬼鹿毛に鞭打つて驅けつけたのに相違ない。お〻！とう／＼見事乘り上げた。やア那れを見よあの有樣を！敵の士卒を蹴散にかけては縱橫無碍に蹴散らし初めた！何といふ心よい武者ぶりを見せる男であらうの！ほ〻〻猿渡ですら耐りかね、彼方へ此方へと逃げ廻つてをる。あの樣子ではあの邊は平地になつてゐるらしい。お〻行りをつたぞとう／＼！馬を捨て〻猿渡丹波とう／＼組討を初めをつたぞ。軍師々々！』

『はッは』

『聲でなりと加勢をしてやりや。全軍聲を揚げて加勢してやりや！』と小雪は狂喜して部下の將士を促しながら叫び續ける。薙刀の柄で鞍の前輪を碎けるほどに無茶苦茶に打ッ叩きながら叫んで止まない。『好うやつた駒市！敗れを取るな！だが猿渡の首は掻くなよ！その入道には用があるのじや。聞えたか駒市！』

『聞えたと見えてあの人は鎧通しを拔きません』とお袖はいつたが、主將の言を待たずして、既に時の聲にひとしい歡呼と、拍手と聲援とは全軍から彼れの身邊へ送られてゐた。その間にあつて豪勇無双の古强者と組討ちしてゐる駒市の耳に主將の言葉の受取れさうな筈がない。上になり下になり、必死の格鬪を續けて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ゐながら、澤がなほ鐙通しを手にしないのは胸中に何か考へで
もあるらしい。

『や、組んだまゝで落ちさうだ』と叫んだ小雪は馬を馳つてその下へと行つた。

案の定引ツ組んで一團となつた兩個の體は急角度の岩面を先斗打つて毬のごとくに回轉しつゝ落ちて來る。

『好う行つた駒市!』と稱揚しながら、馬から飛んで降りると共に、小雪は猿渡を取つて抑へた。黑絲縅しの大鎧に身を堅めたる老雄は、小櫻縅しに美しく冑うた華奢な女將の小腕で、背中を踏まへられたのだ。その小腕の十王頭の金の胸當が輝いてゐる。

この時はもうお袖を初め、加々爪以下の將卒は主將の側へ寄つて來てゐた。『畜生め、莫迦に背を折らせやがつた!』折角の自分の獲物を、主將に引きわたした駒市は、一息つきながら改めて平多張つてゐる丹波を眺めた。

『偉いぞ馬場殿!』

『組討ちは兎も角も、あの絕壁を一息に馬で乗り上げた離れ業には、まつたく我等兜を脫いだ』

『其れにしても好う無事で後から追うて來られたものだ』

『萬歲々々』

NORSHIN

ノーシン!
イーシンは
頭痛に
ノーシン!!!

ノーシン
をタツタ一ぷくのんでごらん

頭のボンヤリした時
頭のクシヤクした時
頭の重い時、頭痛の時

帽子印 荒川の
ノーシンは

◆醫學博士 森田資孝先生推奬の頭痛特效藥で のむと忽ち頭はハツキリし、思ふ存分、面白い お事務も出來れば、學課もすゝむ。◆論より證據スグのんでごらん。◆全國の藥店に有り。

毎朝 用務に掛る前に一ぷくのんでごらん。終日精神の爽快を覺え常に快活となる。

◆よくにた…類似品あり御注意

名古屋市東區京町二丁目
荒川長太郎合名會社
振替名古屋七五三番



『お手柄だつたの！』と將卒等は感嘆しながら讃辭を四方から浴びせて止まない。

お袖はその間に主將の抑へた老雌猿渡を縛つてしまつた。

と、見ると向ふから一團の人がやつて來る。五家の莊の人達が、小戰鬪を遂げた後。兇徒の盟主惟前を捕虜にして引いて來たのだ。

『やア妙な物が那れへ參るぞ』

『あれは阿蘇惟前だ』と知つてゐる一個が叫んだ。

『其れがあのやうに縛られて來る？　はゝア分つた。目出度い目出度い、全軍勝鬨！』と軍師加々爪は覺えず叫んだ。

四方の連山に山彦して凱歌は高く揚げられた。

薙刀を杖ついて、三尺もある刄わたりを日に輝かして突ッ立つた小雪は感謝するやうに、紺碧の天を徐かに仰いだ。が、その眼には涙があつた。夫雅樂之介が傍にゐぬ、かの女は其れが悲しいのである。（つゞく）

作者本田美禪氏曰く『次號に於てはガラリ局面一轉、本篇の眼目たる最も痛快な場面が開展されるであらう。云々』――さてどんな面白い場面が現はれるか、讀者諸君と共に切望に堪へない。（一記者）

面白い數字の話

神谷孫亮

◇

一昨年度汽車の乘客は十四億四千百六十八萬九千七百八十二人だつたといふ。此の三割が汽車辨當を食べるとして四億三千二百五十萬六千九百三十五人の人が辨當の蓋や底について御飯をその儘すてゝ居るが、今假りにその御飯粒を平均三百粒と見れば、一千二百九十七億五千二百八萬五百粒を無駄にしてゐることゝなる。



これを一升六萬八千粒で割つて見ると、驚く勿れ、一萬九千八十一石一斗八升八合三勺となり、試みに金に換算して見れば、一升三十五錢として六十六萬七千八百四十一圓五十九錢となる。この莫大な金を汽車の窓から平氣で捨てゝゐるわけだ。

◇

世界最深の海は三宅島の東方九十浬の地點に在るタスカロラ海壕の一部で、深さ九千九百五十米以上である。世界最高のエヴレスト山のガリカシサア峯は標高八千八百四十米だから、とつぷり沈んで尚千百十米水の底になつて了ふ。



◇

現在中等學校の男女學生の總數は五十九萬八千二百八十八人である。動員讀書日といふものを作つて休日の一日を之に充て、一人が一冊づつ讀むとすれば五十九萬八千二百八十八冊分だけの知識が全國的に增加するわけである。中等學校の授業日總數は二百二十日間で殘り百四十五日といふ多い休日があることだから、若し一年に十日間だけこの動員讀書をやつてくれたら、年々國民の總知識の分量が、五百九十八萬二千八百八十冊分づつ――實に日本最大の上野帝國圖書館の藏書數（四百五萬五千六百八十五冊）より、遙かに多いことになる。



◇

海外に雄飛してゐる我が同胞は、移民と在留民と併せて六十七萬四千五百二十三人である。若し平均一人一ヶ年に百圓だけ送金して呉れれば年々我が國に流入する金貨は六千七百四十五萬二千三百圓の巨額に上るが、併し之れを六十億圓に近い國債償還の費に當てるとすれば八十九年かゝるとは大きな借金である。



◇

日本最大の佛像五丈三尺五寸の奈良の大佛に對して最小は一寸八分の淺草の觀音で、二百九十二箇積まねば大佛の高さに達しない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

美談の華・逸話の泉

三發の銃丸位と違ふ

ルフエーブル元帥は、赫々たる武勳によつてフランスで最高の恩給を支給されつゝあつた。從つて宏壯な邸宅を有し、立派な生活を營んでゐた。偶〻元帥を訪問した者が羨望に堪へぬやうにいふので、元帥は破顏一笑して、

『何ならわしの財産をそつくり君に讓つても宜しい。』

『エッ。私に……』

『さうぢや。然し條件がある。わしと賭をして君が勝つたらそつくり進呈しよう。』



『何んな賭でムいます?』

『譯のない事さ。わしから十間離れた所に君が直立して、わしが狙ひを定めて拳銃を三發放して、若し君が無事で居られたら君の勝になるのだ。』

『め、滅相な――。いくら何でも生命は惜しうムいます。』

その男が、顏色を變へて震へ上ると、元帥は急に屹として、

『さうか喃。ぢやが乃公の財産は、たつた拳銃三發に生命をさらした所でない。何千回か死生の巷をくゞつて、やつと天から授けられたのだよ。』

厚顏しい男も、之を聞いて赤面して、ソコ〳〵に暇を告げたのであつた。

發明の奥義

つい此の間永眠された貴族院議員北條時敬先生は、金澤の生れで、四高、廣島高師などの校長を勤め、後、東北大學長から學習院長になられたが、之く所として可ならざるはなく、教育界の大人物であつた。

先生は頗る時間を超越した方であつた。教授會議などで、日が暮れようが、夜が深けようが、お中が空からが、眠氣がささうが、先生自身は平氣の平左であつた。



北條時敬氏

或日自宅で謠曲を唸つて居られた。女中が雨戸を繰るのに不圖氣がついて、

『もう日が暮れたかな?』

と獨り言を言はれた。女中が呆れて、

『旦那樣、もう夜が明けたのですよ!』

と頓狂な聲を發した。午後から夜、夜から夜半、夜半から朝、と一氣に謠曲を唸つて居られたのであつた。

『時計を見るな!』

發明王エヂソンは誰かに斯う教へたさ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

うだが、北條先生は夙くに發明の奧義を知つて居られたものと見える。專門の數學に沒頭されてゐたら、獨逸の世界的大學者アインシユタインにも劣らぬ偉績を擧げられたらう。

足音でわかる

伊豫の名刹、瑞應寺の高田道見和尚は、書の名人で、また、眞に精進不犯の淸僧であつた。

弟子の僧が外出先から歸つて方丈に挨拶にゆくと、すぐ、



『お前は今日何か悪いことをして來たな。』

と圖星をさすやうにいふ。弟子は恐れ入つてわけもなく泥を吐いてしまふ。或時、

『どうしてそれが分りますか。』と側らの者が尋ねると、和尚は、

『悪いことをした奴は、心が穩かでない、心の穩かでない時は、呼吸が亂れてゐる、それが一番よくあらはれるのは足音だ。どんなにそろ〳〵歩いてゐても一すぢでなくあつちよりこつちよりして不揃ひで曲りくねつて聞える。わしは顏を見なくても近づく足音をきゝさへすればよいことをしたか悪い事をしたかがすぐわかる、大概悪いことばかりして歸るよ。』

と云つて笑はれた。

知事の德行

郭級は支那幷州の知事であつた。

始めて幷州に赴任して、巡見のため西河の美稷といふ處へ來たところが、數百人の子供が各各竹馬にのつて



て歡迎した。そこで伋は、

小廣告案內

本欄を御利用下さい

▼一欄五號活字ルビなし十五字詰五行、六號活字ルビつき一行廿字詰四行です。

▼原稿に前金を添へ（一欄六十五圓）每月十五日迄に本社廣告部宛に御申込下さい。



月經

元赤十字病院 澤木先生鑑製

止り御困りの方安全無害に流經する私の滿足を得た最良藥をお知せ致ます

大阪東成區南生野町壹丁目七三

大石ハルヱ



やせる

妙藥太り過ぎ困る方へ

ヤセラレル說明書進呈



婦人消渇

全快確實お困りの方は三錢切手封入私方へ申越あれ詳報す

◎大阪南區新川橋東詰　泉原藥品部

產婦人科、小兒科

院長　吉岡彌生

副院長　吉岡房子

診察　每日　宅診午前　往診午後　隨時入院の需めに應ず

東京市牛込下宮比町四番地

東京至誠病院

省電飯田橋又ハツクド下車・電話牛込　三五五　三五六

『子供達よ、どうしてお前達は遠方から出て來たのか。』と問ふと、彼等は口を揃へて、『知事様の御巡見と聞いて、喜びに堪へないので奉迎に參りました。』と答へた。伋は感激して帽子をとつて、『皆さんありがたう。』と挨拶した。巡見が終つて歸らうとすると、子供達はまた城外に見送つて、『知事様はいつごろ又此處をお通りになりますか。』と尋ねたので、伋は日を計つてその日を告げた。しかし、その日よりも一日早く通らなければならぬ事になつた。併し伋は子供達との約束を破ることを恐れて、村のきたない宿にわざ〳〵一泊し、約束の日を待つて、それからそこを通つたのである。

調子づくな

話は切上げ時が六かしい。アメリカの文豪故マーク・トエーン翁は、ある時、教會で説教を聞いて、スッカリ感心して了つた。

お定まりの喜捨金集めの鉢廻しが來たら、五ドルを奮發しようと思つて居た。

牧師は調子づいて、盛んに聲を張上げて居た。マーク・トエーン翁の感服熱は少々冷めかけて來た。喜捨金の心積りは、五ドルから一ドルへ下落した。

己惚れ牧師は、留度を外して、益々説教を續けて居た。ウンザリした。翁は遂に一文も置かずに、教會を去つた。引上げの潮時を心得ぬ牧師は、折角の喜捨金を失つた。物は切上げ時が大切だ。留度を外しては取返しがつかぬ。

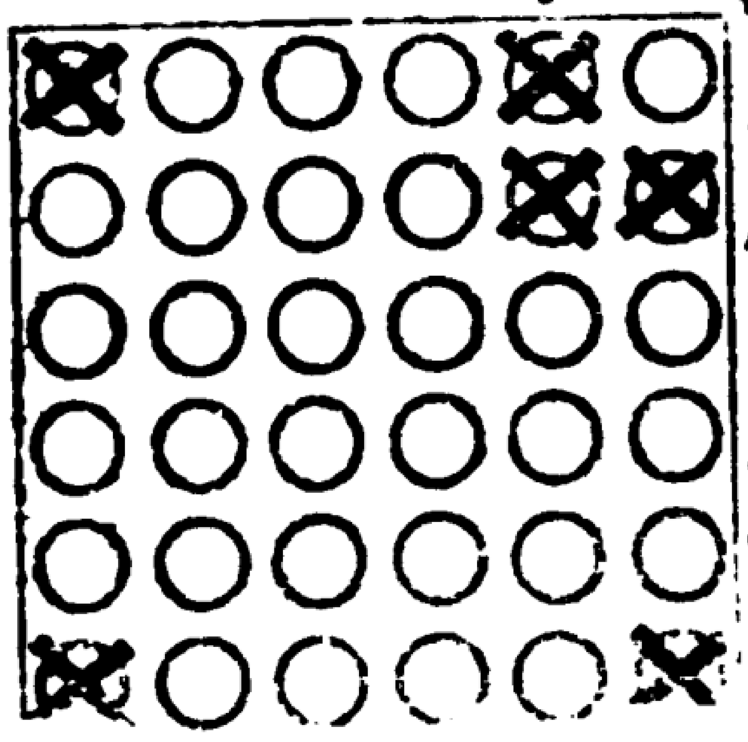
◎犯人探し大懸賞當選者芳名は四月號に發表

〆切十日前既に應募十四萬七百餘人！　正解者又大多數の見込！　當選は抽籤に據る。

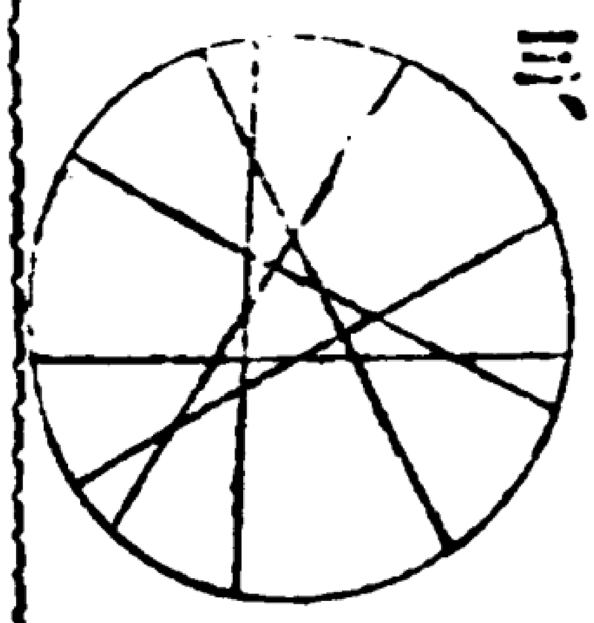
智慧くらべ解答（二六六頁參照）

一、(1)切ろより外なし。(2)突けばよい。(3)裂になる。(4)忍べ。

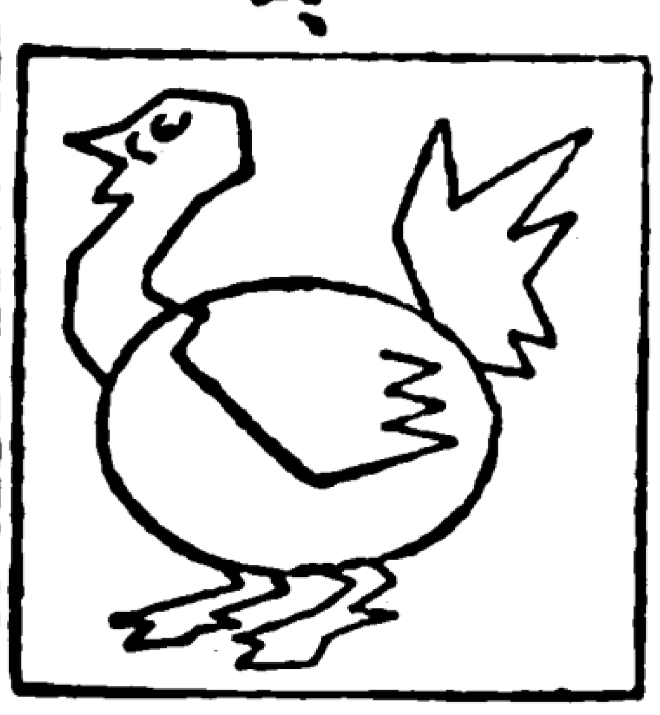
二、圖ノ×印をつけてあるの



三、



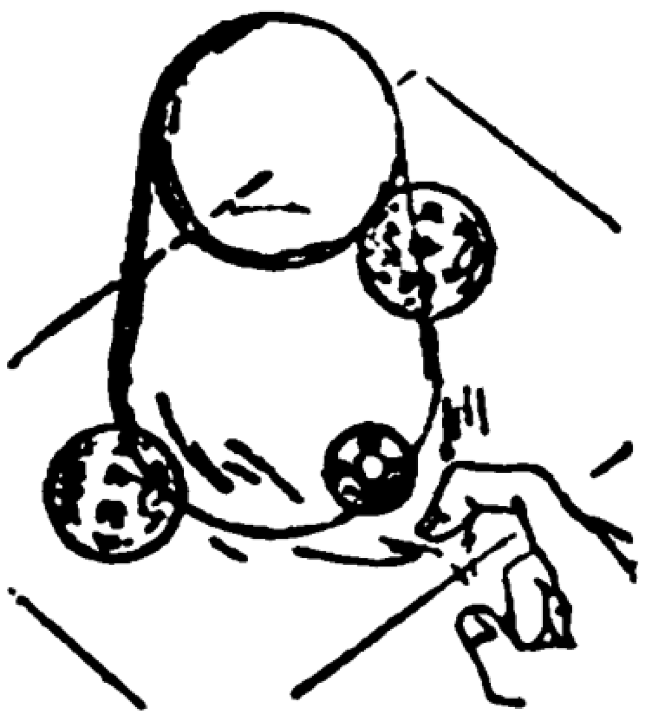
四、



を取去ればよい。

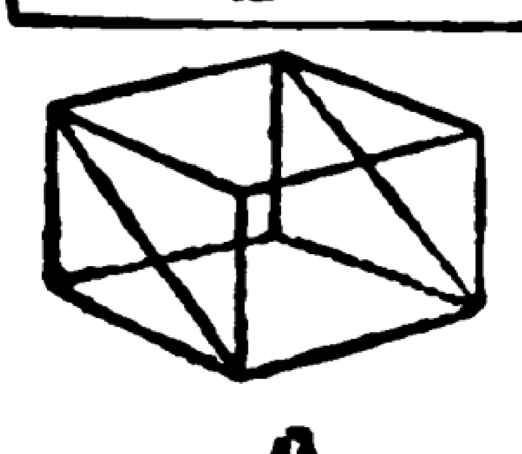
五、私は新聞や雜誌で常識を養ひます。

六、コップに近い所の布を人さし指の爪で前へ引くと布が動き白銅はコップの下から出て來ます。

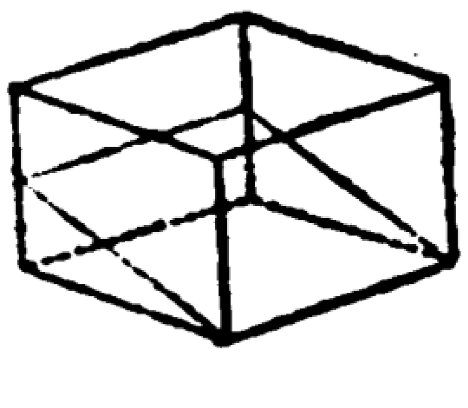


七、手水鉢の中へ水を入れ浮かせばよ。

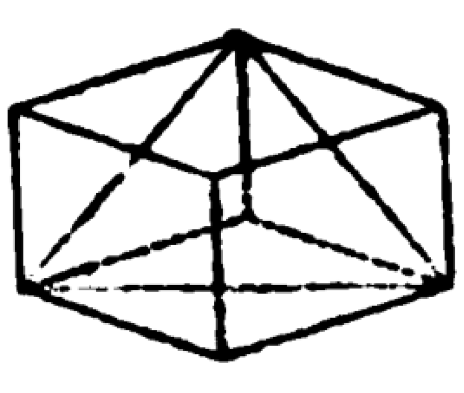
八、五合を量る法



二合五勺を量る法。



六分の一升を量る法。



九、GFEDBCA　主人が散歩に出かけるので犬が喜んで居ります。犬は主人と一諸に街を歩いて居ります。自動車が來たので避けようと走りましたが遲かつたので主人は自動車にはね飛ばされました犬が心配して居ります。警官が來て運轉手を訊問して居ります。頓て主人は擔架に載せられて行きます。主人が入院しましたので犬が後を慕つて居ります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

各國專賣特許品

顏面手足 無害漂白 美色變化

●ニキビそばかす迅速除法

色を白くし吹出物を除くといふ意味の藥品や化粧品類は實に數が多い。又博士學士の證明や或ひは專賣特許を有する發賣元は誠に多く今や新聞雜誌の紙上に殆ど廣告文の競技をなしてゐる。——諸君が何品を信用されようと何品を購入しようと自由勝手であるが、我は敢て他品の批判はしたくない。けれども本誌を披見さるゝ讀者中で幾分でも教養の程度の高い識別眼のすぐれた人達に對して、我は次の問題を考察して貰ひたい。曰く、今日何十種も前記の如く色白を標榜する化粧品はあるが、人間の皮膚の黑色を根本ある化學的操作で、ほんたうに漂白する方法に就て、帝大工科あたりの學生を眞に首肯せしめるだけの化學的漂白法を立證し得る品が一ッでもあるだらうか？

私は凡ての文句を全廢して、讀者の前に默つて次に特許條文の一部を公開する。本品は『レオン洗顏クリーム』と稱し各國の專賣特許を得てゐる。**レオン洗顏クリーム**を使用して短時日に皮膚を西洋人の如く美白色に變化すると雖も色素消失の場合に皮膚を絕對に損傷せざるの點は本品の誇りとする所にて**ニキビ**雀斑等の吹出物の除去は極めて迅速なり。

特許條文は賣藥の誇大效能等と異りて絕對に虛僞虛飾なき事を知られたし。

特許條文の拔萃

英國專賣特許。第一一七〇六〇號。
米國專賣特許。第一二七八五一八號。
日本專賣特許。第三一九〇八號。第三八一一九號。第四一六〇四號。

（前略）……右ヲ溫湯ニ於テ使用スル時ハ、極微細ノ狀態ニ混和セル硫黃ニ石鹼樣泡沫中ニ薄ク散布シ『**コロイド**』硫黃ニ近似セル働キヲナスト共ニ、石鹼樣ノ加水分解ニ伴ヒテ苛性曹達ト結ンデ解化曹達ヲ生ジ、普通ノ硫黃泉ニ於ケルト同樣ノ效能ヲ發揮スルニ至ル。此ニ成生セル硫化曹達ハ一部分分解ニ於テ生ズル有機酸又ハ酸性鹽ニ觸レテ、解化水素ヲ發生スル事アリト雖モ、石鹼樣乳中ニ散布セル『ワゼリン』膜ニヨリ水分ヲ遮斷セル過硼酸曹達ガ此石鹼樣溶解ニ從ヒテ水分ニ觸レ過酸化水素ヲ放チ、此分解ニヨリテ生ゼル強力ノ酸素ト樹脂石鹼ノ『レジネートドライヤー』ニ對スル一種ノ接觸作用ノタメ、新鮮ノ傾向ヲ帶ビタル附近ノ酸素ニ依リ概ネ直チニ酸化サレテ新鮮解黃ニ復シ、一層強力ニ作用スルニ至ルヲ以テ（中略）多量ノ微硫黃ヲ遊離シテ美白ノ效果ヲ一層有力ナラシム（下略）



●手と顏だけ白くなりし少女の寫眞●

△注文の方法▽

レオン洗顏クリームは東京市本鄉區駒込坂下町四八大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）へ送金あれば直ぐ嚴重小包で郵送する。價格は比較的に安價である。德用大瓶金三圓四十錢「送料內地十八錢海外五十五錢」は賣藥等より遙かに多量で凡そ二月以上の使用量となり石鹼まで節約し頗る經濟である。また小瓶金一圓四十錢送料內地十二錢海外四十五錢」を申込まれてもよい。但し代金引替郵便はハガキで申込めばよい。**レオン洗顏クリーム**は雜誌の口繪に塗れば忽ち漂白する確實の發明品なれば何人も躊躇なく直接註文を寄せられたい。

（肌荒）本品を常用すれば肌荒などの憂ひなき故冬季の必需品なり。

（注意）あまり早く色白くなりたる故に何等かの害なきかと照會書面に接するも却つて皮膚を艶々となす安心あれ。然し本品は永久保存が至難で全國卸賣は不可のため止むなく直接申込者のみ使用される。

シワ 本品を連續使用してシワを減少し且つ發生を豫防するは皮膚の新陳代謝を促進する結果なり。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

キング講座



内田博士

恐ろしい眼の病氣

醫學博士　内田孝藏

人生の幸福は、先づ眼から入る。眼ほど人の幸不幸を分つものはない。その大切な眼も、注意しないと失明の悲慘を見るに至るものだ。失明してから騷いでも嗟嘆しても、最う遲い。想像して見るがよい。暗黒な洞穴の中で四六時中を過ごすやうな失明者の生活、噫、その悲慘を憶ふなら、眼、殊に眼病には充分の注意をしなくてはならない。そこで、私はこゝに、最も一般的な眼病に就いて述べて見よう。

近視眼

眼鏡を掛けさへすれば、近視眼は大して不自由ではない、と一概に輕視しては不可ない。近視眼に伴ふ恐るべき病氣は、何うかすると眼底にある網膜が剝げることだ。

寫眞機でいふと、ピント・グラスの役目をする大切な網膜が、剝れては一大事だ。一部剝がれゝば、視界の一部が暗くなる。全部剝がれたら、全くの盲目となる外はない。大概は、最初一部、それから漸次全體に及ぼす。そして最初一眼、次いで兩眼に至る。事爰に至つては萬事休すだ。

この現象は、若い時には餘り起らない。大抵四十歳乃至五十歳の働き盛りの人に一番多い。人生の働きこれからといふ時、こんなことで失明しては、それこそ大變だ。前以ての注意が肝要。殊に、進行性の近視眼、即ち凹面鏡の度のぐんぐん進む人は、何とかして度の進まぬやうにせねばならぬ。その豫防としては、平凡のやうだが、細かい活字や不明瞭な文字を見ないこと、薄暗い場所や疲勞時に讀書しないこと、眼鏡は自分の眼に正確合つた度のものを用ひること等である。

ナポレオンの御土産

トラホームは、昔は埃及の專賣特許であつたらしい。ところが、奈破倫が埃及遠征をした時、歐洲に輸入し、佛蘭西で非常な流行をした。多數の失明者が續出したといふ。歐洲では、今でもこれを『埃及病』と稱んでゐる。

東洋方面には何ういふ經路を踏んで來たか、不明だが、恐らく埃及から、中央亞細亞を經て、印度や支那方面に擴がつたの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ではないかと想像される。

今日では、日本でも、トラホームは、結核や梅毒と共に傳染病として豫防法が出來たが、棄てゝ置いては傳染力も猛烈で、且決して癒らない病氣である。

トラホームの恐るべきは、黑目の表面を作つてゐる透明な膜（角膜）に、『パンヌス』といふ雲が懸かることだ。かうなると磨硝子を隔てゝ物を見る如く、曖昧模糊として、物象が判然と見えない。

また永くトラホームにかゝつてゐると、逆さ睫毛を生じ、角膜を突つくので、雲や星が出來、それが因で失明する。

併し、今日では如何に拗らせたものでも、決して不治の病氣ではない。唯、深部性のものは、治癒するに日數を要するのみだ。更に記憶すべきは、その治療宜しきを得ねば、何年經つても全治しないといふことである。

『風眼』といはれて恐れられた淋毒性結膜炎

誰も知る如く、子供が生れると、産婆は直ぐに點眼藥を注す。母體にある淋毒から來る結膜炎の豫防である。



この淋毒性結膜炎程恐ろしいものはない。所謂民間でいふ『風眼』醫者仲間でいふ『膿漏眼』だ。一度これに侵されると、見る〳〵中に白目が腫れ、眼瞼が腫れ、眼が痛んで開けて居られなくなる。その中に黄白色の膿が、涙と共に流れ出す。

更に黑目が侵されると、そこに潰瘍が出來、眼は白く濁つて、物は茫つとして見えなくなる。痛みは益〻激烈になる。一眼は更に他の一眼に傳染する。

その間早い時は一晝夜遲くも一週間、そして遂に悲しい失明者になつてしまふ。

淋毒患者が、自分の手や手巾に附着した黴菌を、直接眼につけたり、或は他人の所有菌を、汽車汽船、旅館浴場等で貰つて來ると、この膿漏眼に罹るのだ。だから、日本人の悪い癖だが、眼脂などを直接、手で擦つてはいけない。また旅館浴場等で、貸手拭などを使用してはいけない。

若し、本病に侵されたといふ疑ひがあつたら、直ぐ專門醫の所へ馳けつけ、隔離室へ入院するが良い。醫師は、夜晝の區別なくその眼を洗ひ流して、細菌を絶滅する手當をする。手遲れとならぬ限り、失明はせぬが、家庭などでは、こんな手當は到底出來ぬ。

不幸、手遲れして、遂に星や雲が出來ても、今日では、白い星は染める、或は星が眞中にあつて邪魔をすれば、星を外れて

隔孔を新設する等の手術によつて、視力の回復が出來るから、此病氣にかかつたからといつて一概に悲觀せぬが宜しい。

旅行病といはれる角膜實質炎

甚いおでこで悧巧な兒を、日本では福助、西洋では哲學者といつてゐる。こんな子は必ず遺傳梅毒の所有者だ。併し、遺傳梅毒所有者が、皆んな福助ではない。普通の容貌をした子でも、五六歳、遲いのは二十歳後に、その病毒が現れるのもある。

そして眼がこの毒に侵されると、先づ一眼續いて兩眼の角膜に、濁りが出來る。これが角膜實質炎で、甚いのになると牛乳色に渾濁する。その奥にある茶目即ち虹彩が腫れ出すと、痛みを覺える。

棄て〻置くと、半年乃至一年有半、この炎症が鎭まらない。漸く鎭まつたと思ふと、白色の大きな星が殘る。そして盲人同様に、物を見ることが出來ない。實質炎の兒は、一般に頭が良くて學問好きだから、視力を奪はれると煩悶懊惱して、その悲慘は一層甚だしい。



醫師は、これに對しては、先づ驅梅法を施し、消炎法を行ふ。だが困ることは、角膜の深部即ち實質に濁りが來るので、藥の効果が甚だ悪い。殊に、角膜は無色透明の硝子のやうなもので一本の血管もないから、新陳代謝が極めて鈍いことだ。故に、醫者が如何に努力しても、さう急には効驗が見えない。患者は自烈度がつて、醫者を變へる。それでも思はしくないので、轉々と醫者を變へて行く。醫者仲間では、旅行病と綽名してゐる。

が、この眼病の患者は決して急いではいけない。サルバルサン等の急治劑を用ひず、昔から用ひてゐる塗擦沃度擦法等で、根氣よく治癒を待つ。と同時に、家庭にも蒸氣罨法機などを備へ、一日數回の罨法で、角膜の新陳代謝をし、また虹彩の眞中の穴が、腫れ塞がらぬやうに點眼藥を注すことを忘れてはならない。

田舍の人に多い虹彩炎

寫眞機でいふと絞りの役をする虹彩即ち茶目が、第三期のやうな梅毒に侵されると、角膜の周圍の白目が、ぼうと赤くなる。結膜炎なら脂が出るが、この際は、脂が出ない。疲れ目か埃でも入つたと思つて、目藥を注し〻も、赤味は少しも取れな

い。却つて擴がつて行く。紫色に變つて來る。瞼を閉ぢて押して見ると眼球に痛みがある。トラホームや、急性結膜炎を併發した時は、その痛みが何方から來るのか區別し難い。

だが、醫師が診斷すると、これは虹彩炎だと直ぐ判る。虹彩が著しく腫れて、角膜が幾分どんよりしてゐる。

これを棄て丶置くと、虹彩から汁や膿が出て、瞳孔の緣に喰つ着き、瞳孔の端を、その後方にある水晶體に糊着けにしたり、又は瞳孔を塗り潰してしまふ。かうなると、もう何も見えなくなつて來る。

この病氣は、急激に來るのと、緩漫に來るのと二種あるが、何れも病原は梅毒であるから、梅毒の根本治療が必要だ。その間、醫師は唯瞳孔が腫れ塞がらぬやうに、瞳孔散大藥を注すのだ。

今日では、梅毒の病原菌も發見され、サルバルサンといふ妙藥も發明された。その結果、梅毒患者も初期に治療するので、この虹彩炎は少くなつたが、田舍へ行くとまだ隨分多い。治療も二三ケ月乃至三四ケ月か丶るが、充分根治して置かねが再發の恐れがある。

突眼

野良で仕事をしてゐる百姓が、何うかした彈みで、稻の穗で眼を突く。眼に見えない程の小さい疵が出來、そこに黴菌が入る。その黴菌中でも殊に、肺炎を起す肺炎菌が附着することがあると、さあ大變だ。殊にこの菌は外から來ないで、淚孔の塞がつた人の眼の中などには、常に澤山保存されてゐるのだ。遽ちの中に菌は傷口で繁殖する。眞白い星が出來る。夜も眠られぬ程痛む。二三日にして、星が眼一杯に擴がつたら、もう萬事休す。失明する外、手術の施しやうがない。

廣告は良品の反射鏡
良藥は健康の母

病者に急告！



神經痛リウマチ

定價
一週間分 金二圓五拾錢
二週間分 金四圓五拾錢
五週間分 金拾圓
送料不要

注射温泉又大廣告で、氣の毒な人をだます山師藥で治らず此病に藥はないと捨て置ては足腰立たぬ不自由な身となる。ステルミンは他に類のない決して再發せぬ百發百中キット治る不思議の妙藥なり。アレコレ迷はず今すぐ御試しあれ。（三錢切手送れ說明書送呈）一般の藥店にて取次販賣せず

リウマチ神經痛專門
大阪天王寺公園北門前
第一藥院
振替口座大阪七三三八六番

そして激烈なものになると、中から拳骨の様な虹彩の一部が露出して、所謂葡萄腫となる。その凄さ、その醜さ、全く化物宛らである。昔の化物の繪に、べろりと眼球の飛出した物凄い繪は、この眼病を畫いたもので、單なる繪空事ではないのだ。

併し、これとても早く手當をすれば、星も殘らず、失明もせずに濟む。醫師は、その傷を搔き取つて充分な消毒と罨法で、黴菌を撲滅する。既に星が、黒目の半分位まで掛ると、手術も容易でない。黒目を中央から切開し、中の膿を出さねばならない。

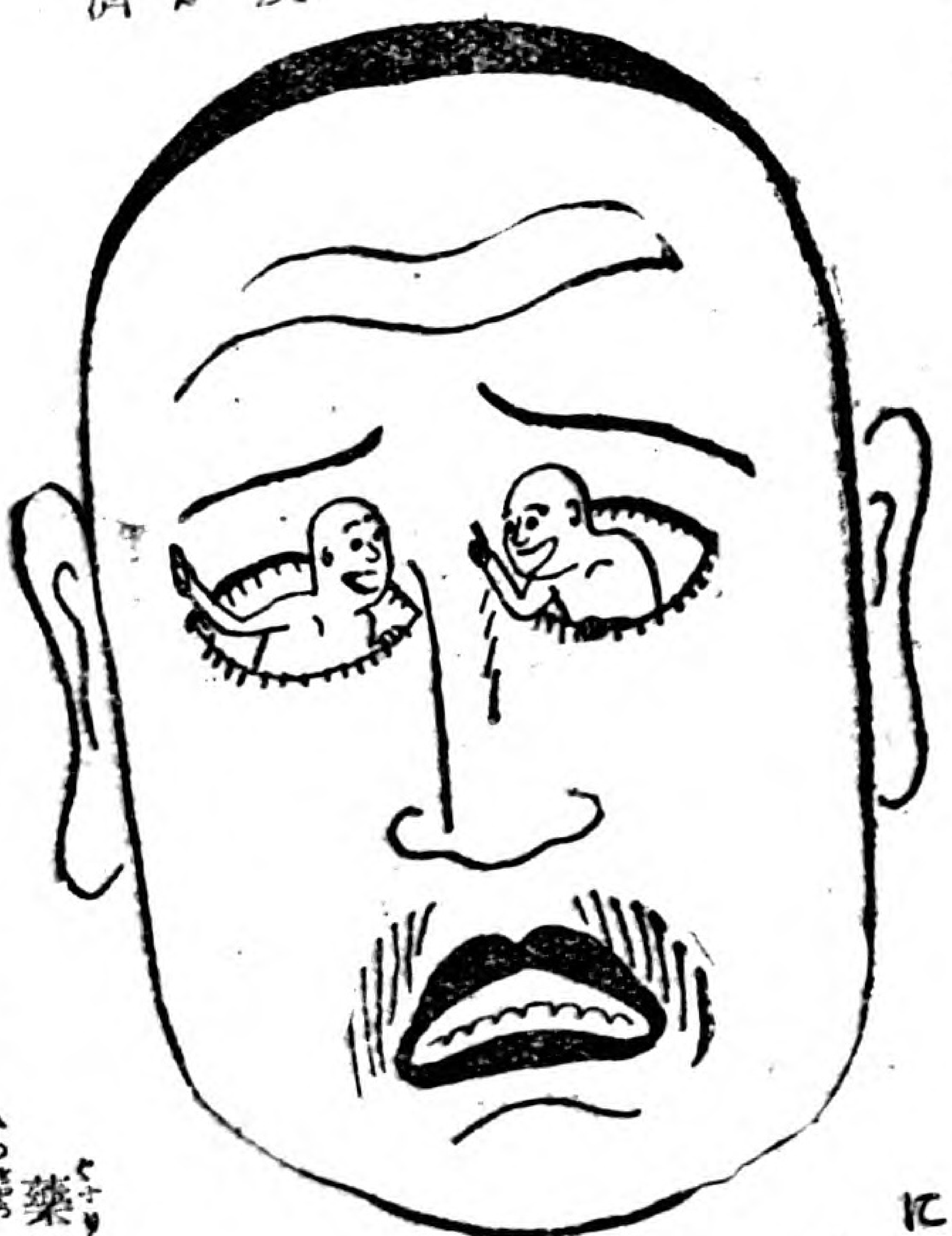
だから、稻穗に限らず、眼を突いて、その傷口が何時までも痛む時は、直ぐに專門醫の處へ馳けつけねばいけない。疾風迅雷の如く破壞作用を逞しうするから、早ければ早いだけ禍は小さくて濟む譯だ。

逆睫毛

即ち、日本人や支那人等の蒙古人種は、特有な眼の形をしてゐる。眼頭の所に皺狀の特殊な皮が被さり、眼頭にある赤い綺麗な隆肉と、耳搔き樣の可愛らしい小さな灣とを蔽ひ被せてゐる。時によると、その皮が、下眼瞼にも及んで來る。一言にしていふと、眼瞼の皮が内側へ捲れ込むやうな形になるのだ。

この皮を蒙古皺といふが、そのために、外側を向いて生えてゐるべき睫毛が、皆内側にまくれ込むやうに生えてゐる。所謂逆さ睫毛である。

この逆さ睫毛が眼球を擦る。一秒時間十回の瞬をするなら、一日には大變な數であらう。その度毎に逆さ睫毛が眼を突つく。如何に抵抗力のある角膜でも、遂に、この小さな反逆者にやられてしまふのだ。



初生兒や就學兒童位の子供によく見るが、常に涙を流して、眼をしよぼしよぼさせ、眼脂を出してゐる子供がある。よく見ると、大抵は蒙古皺による逆さ睫毛が、ざわ〳〵と眼球を擦つてゐるのだ。專門醫ならぬ醫者へ伴れて行くと、大きくなれば治るとばかり、眼藥位呉れる。だが、そんな姑息なことで治る筈はないのだ。畢竟、泣き叫び荒れ廻る子供の手術を厭ふ醫者の遁辭である。

決して棄て丶置いてはいけない。一本の局所麻醉の注射で、やんちや盛りの子供でも、容易に手術が出來る。そして手術の痕も殘さず、四五日で皺を取り除き、逆さ睫毛も治つてしまふのだ。棄て丶置いて角膜を侵され、盲目又は半盲になつて、不

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

幸な人生を嘆つことを考へれば、親たる者は大いに注意すべきである。

澤市の犯された白内障



一口に『ソコヒ』といふが、『ソコヒ』には澤山の種類がある。動脈硬化症、萎縮腎、妊娠腎、糖尿病、脚氣等等々から來る『ソコヒ』は、それぞれ種類が違つてゐる。

元來『ソコヒ』とは、外觀は何ともないのに、眼の底が干乾びて見えなくなるといふ處から、昔の人のつけた名稱らしい。だが、この白内障は、底ではない。極上層、皮一重で外に出る。

昔、印度の醫者が、この白内障のある場所に針を突込んで、水晶體を眼の底に突落して治癒せしめたといふことだ。處が、突落された水晶體は、ごろ／＼轉つて迚も具合が惡かつた。

今日では、水晶體を切り取つてしまふ。この手術で、白内障の患者は、完全に眼が明くから、餘り心配はない。しかも、その手術は、子供から八十以上のヨボ／＼の老人にも施されて、好成績が收め得られる。



こゝに面白いのは、義太夫でお馴染の壺坂靈驗記、座頭澤市さんの眼病だ。あの眼病は恐らくこの白内障であつたらうと、我々醫師仲間ではいふのだ。さればこそ、高い崖から飛んで、幸、更生するや眼病立處に平癒してゐた。詰り印度の醫者の如く、飛下りた彈みに、水晶體が眼の奥に轉げ落ちたに相違ないのだ。

頭痛の原因となる綠内障

白内障に對して、綠内障といふのがある。これは眼の球が堅くなつて、瞳孔が普通より大きくなる。そしてその方の眼や頭半分が、時々發作的に痛む。

これは、眼球内にある水の循環が惡くなつて、丁度腹が張るやうに、眼が張つて痛むといへばよく解るであらう。即ち、眼の球が、かち／＼になつて水の泄け口がないから、抵抗力の最も弱い部分を破つて出ようとする。檢眼鏡で窺いて見ると、その部分が凹んでゐる。

自然、視神經が弱つて、物が茫つ

◎耳鼻咽喉科（耳鼻咽喉の小册子送呈）
◎鼻整形科（鼻整形の說明書送呈）
◎耳鼻咽喉科講習會開催
手術・二月十日ヨリ二週間・詳細照會
院長　ドクトル　高橋研三
高橋病院
（入院隨時）東京下谷西黑門町二（市電上野廣小路下車 元の黑門町電停前）
電話下谷（83）四三三・〇五八・一七九〇

と見える。視界が狹くなる。棄て丶置くと盲人になるのだ。醫師は、瞳孔を小さくする藥を注す。大抵それで癒るが、癒らぬものは手術をする。

頭の痛み方では、一度は緑内障の疑ひをかけることも必要だらう。唯、頭が痛いからとて、内科醫から鎭痛藥や催眠劑を貰つて來て、これを服用してゐる間に、盲人になつてしまつたといふ悲慘事が、幾らもある。

殊にトラホーム患者が緑内障に罹つた時など、頭痛の原因を一概にトラホームからと、眼科醫が誤診することさへある。

併し、誰でもこの病に罹る譯ではない。不幸にも罹り易い體質の人のみ罹り、一旦起ると何日までも續く。唯困るのは、どう云ふ人が、罹り易いかを診斷することが出來ないことだ。

お神樂の『ひよつとこ』は兎眼症



お神樂に出て來る『ひよつとこ』を、眼科醫の方で診察させると、面白い。

あの妙な顔は、顔面神經の痲痺から來る場合が多く、痲痺した方の眼は、輪匝筋といふ眼を閉ぢる筋肉が疲れてゐるため、眼はだらりと大きく開く。そして口は、これと反對の眼の方へ吊り上がつてゐる。

また火傷や、腫物のために眼瞼の皮が引釣れて、眼が完全に塞がらないため、涙に霑ふことがないから、眼はかん〳〵に干乾らび、黑目は濁つて星が出來、遂に盲人となるのだ。

そこで、顔面神經痲痺症の人は、その痲痺が全治する迄、だらけた眼を縫合せて置けば失明しないで濟む。又、火傷や腫物で引釣れの出來た人は、整形外科の醫者に掛つて、腕の下邊の柔らかい皮をとつて、引釣れの部分へ植皮して貰ふがよい。外觀がよいのみならず、大切な目も保護して、盲人にならずに濟むのだ。『ひよつとこ』に至つては、他人を不快ならしめるから、公衆道德から見ても、國民の品位からいつても、芳しくない。早く全治するのが自他共に宜敷い。

長々と暗い眼病の話をして來た、讀者諸君も疲れたでせう。鳥渡疲れ休みに、近所の子供か玩具屋にある『ひよつとこ』の診察でもして御覽なさい。前述の通り、口は必ず小さい眼の方に曲つてゐる筈です。若し、それと反對のものがあつたら、此奴僞者のひよつとこですから面白いでせう。（終）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

一行博士

○日光浴や海水浴で日に曝した皮膚は蚤に有毒、蚤の撲滅は之に限ると獨逸大學教授レープ博士奨勵

○日本で一年間に製造する鮭の罐詰を並べると長さ八千餘哩、横濱から桑港までの約二倍に相當する

○アラビヤ沙漠は五六年來自動車が縦横に馳廻り、駱駝が失業、其自動車も八割五分は米國製とある

○維納大學病院フオン・ホッヘネッグ教授は解剖刀を用ひず電流を通じて痛も血も見ぬ切開手術に成功

○エチリーン瓦斯を其量五千倍の空氣に薄めた中に青蜜柑を入置くと一晝夜で成熟米國デニー博士發明

○米國シヤーテル博士は不燃性の新藥品を發明、之を塗ると木も紙も木造建築物も石の様に堅くなる

○獨逸クレムゼー博士發明の淨化劑は僅一瓦半の小量で二十五億ガロンの水を完全に殺菌淨化する

○セメントと砂に麹を混合すると輕石が出來、それで建てた百階の家は混凝土五十階の重さですむ

○大奈翁が愛子に與へた頸飾は金銀の臺に四十七箇の大ダイヤ入、價百萬圓。此頃紐育の富豪の手に入る

○加州のクロッカー・ハッフェン土地會社は飛行機で田植をやり六百四十エーカーを三日間で植付けた

○斷髪の先祖は第十世紀歐洲西海岸を荒した海賊ノースマンの婦人で、既に千年以前の事とわかる

○米國人が歐洲觀光に費す黄金は毎年八億弗餘、日本にだけでも三千萬圓以上とはさすが成金國

○拔山東北帝大教授發明の水中聽音機は敵艦の所在、潜水艦魚形水雷の襲撃が豫知され戰術上の大革命

○南極探檢のバード少將最近の報告では、南極は直徑數百哩に亙る大高原で海拔七千呎乃至一萬千呎

○我國郵便貯金の膨脹は大したものだが、受取人がなく國庫に沒收されるものも毎年約三十萬圓ある

○米國費府 探偵局では犯罪關係者の表情や語調などを發聲映畫にとり陪審員の證據物件とする

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

科學畫報

奇拔珍妙なる尾の働き

世間の諺にも「驥尾に附す」とか「尾大掉はず」などいふのがあつて、兎角尻尾といふ奴は馬鹿にされ勝ちである。ところが實際の動物に就て觀察すると、尻尾と雖も決して馬鹿にならぬ。實に驚くべき意外な働きをしてゐるのである。左に掲げるのはその內でも特に面白いもの。

◇尾で棒飛するカンガルー

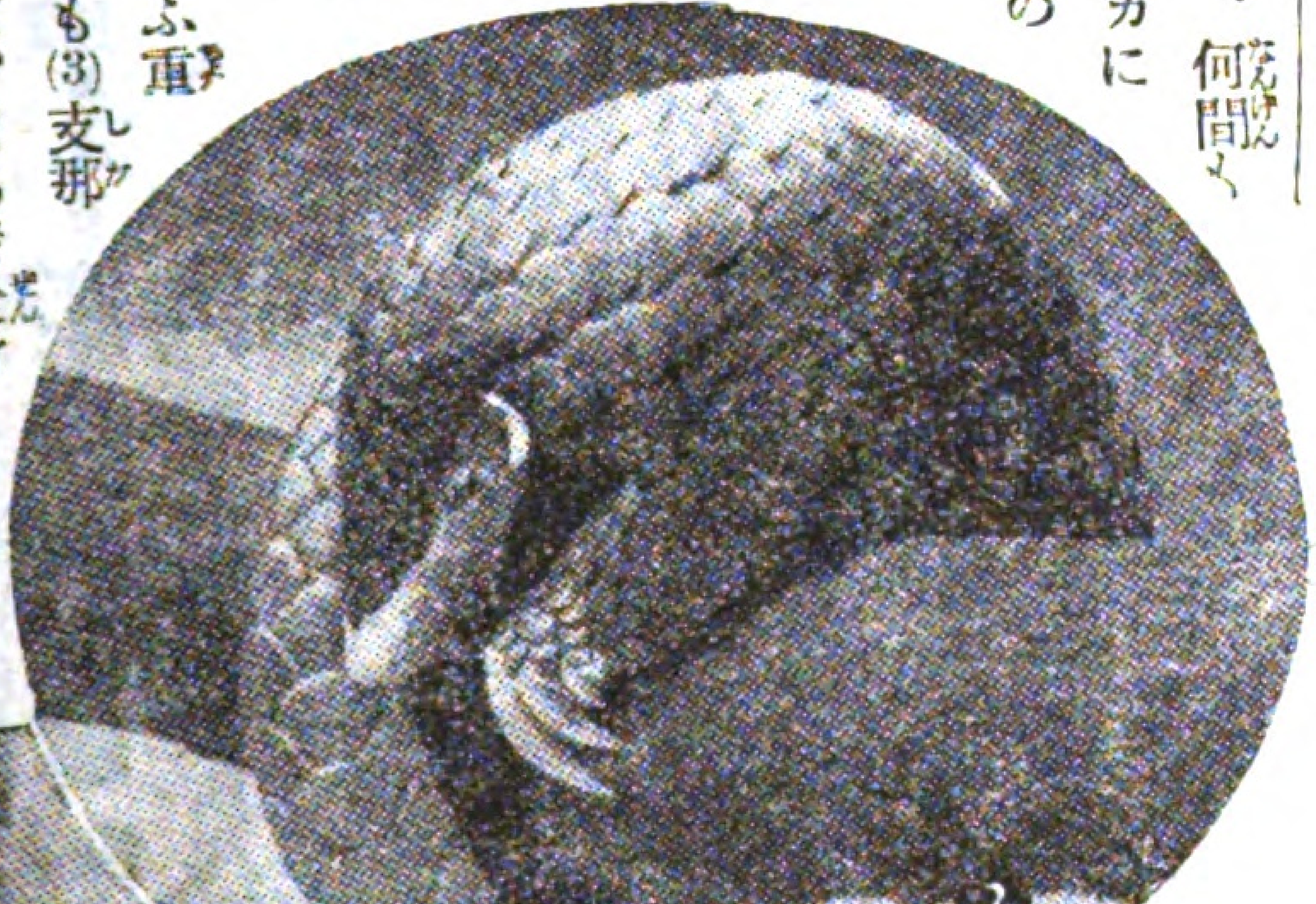
カンガルーの尾は素敵に大きい。これは(1)の如く後脚で立つ場合に、身體を支へる役目をするが、サテ得意の一足飛をやらうとする時にもなくてはならぬものだ。恰度、人間が棒高跳をするやうな工合に、地べたにつけた尻尾の



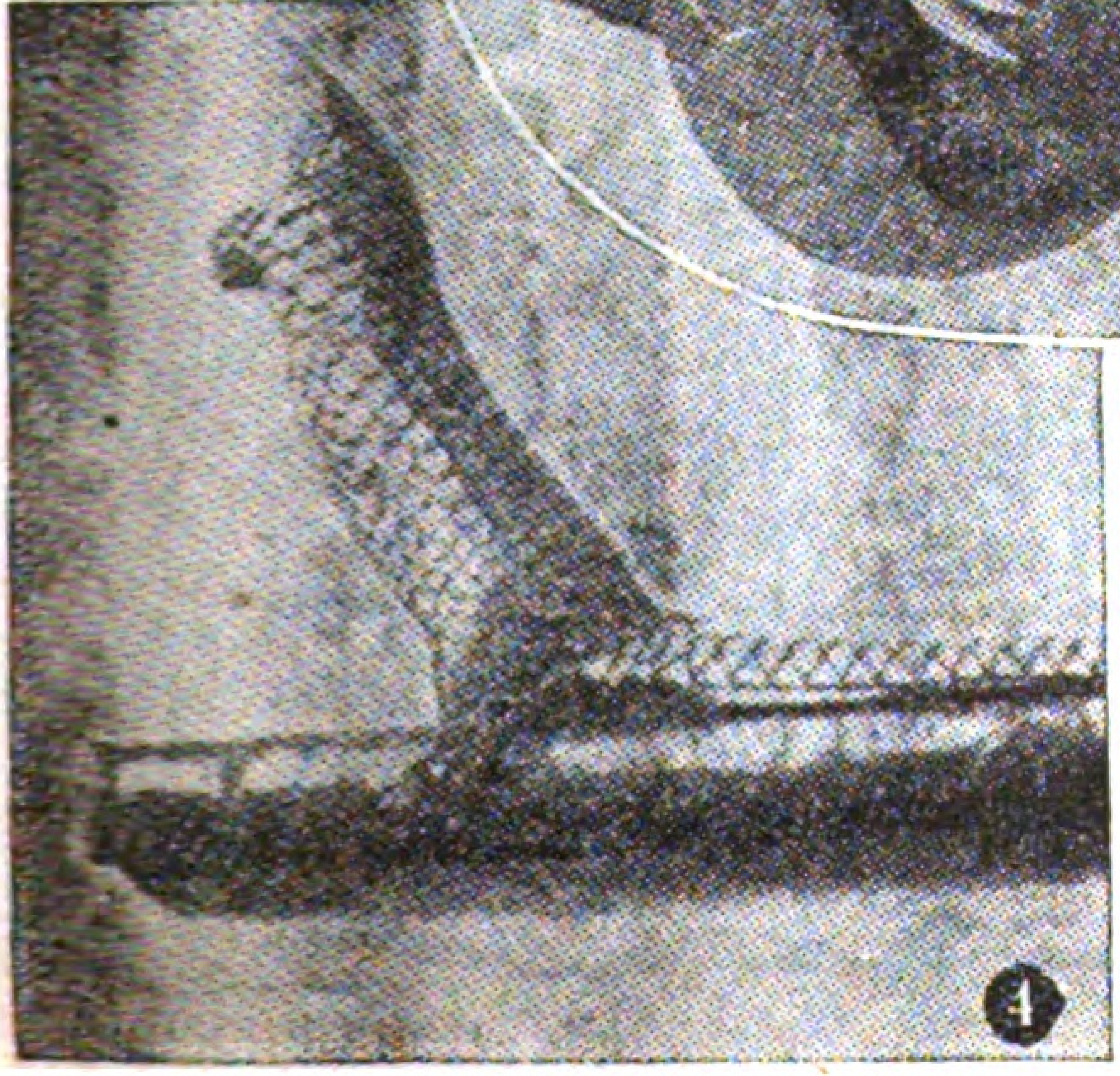
強い反撥力を利用して、何間〳〵躍ぶのである。アフリカにゐる「飛び兎」なども此の類である。

◇蟻喰の體操

(2)南洋の大蟻喰は、箒のやうにボサ〳〵毛の生えた大きな尻尾を持つてゐるが、これは寢る時蒲團の代用となつて、身體を暖めるといふ重寶なもの。同じ蟻喰でも(3)支那産の方は固い鱗があつて、まるで全身甲冑づくめだ。木の枝に止る時は、グルリと尾で一巻きして身體を支へる。人間なら差當り器械體操といふポーズである。(4)それから



木の上などに立つ時は、尾が支ひ棒となつて、見事に身體の





Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

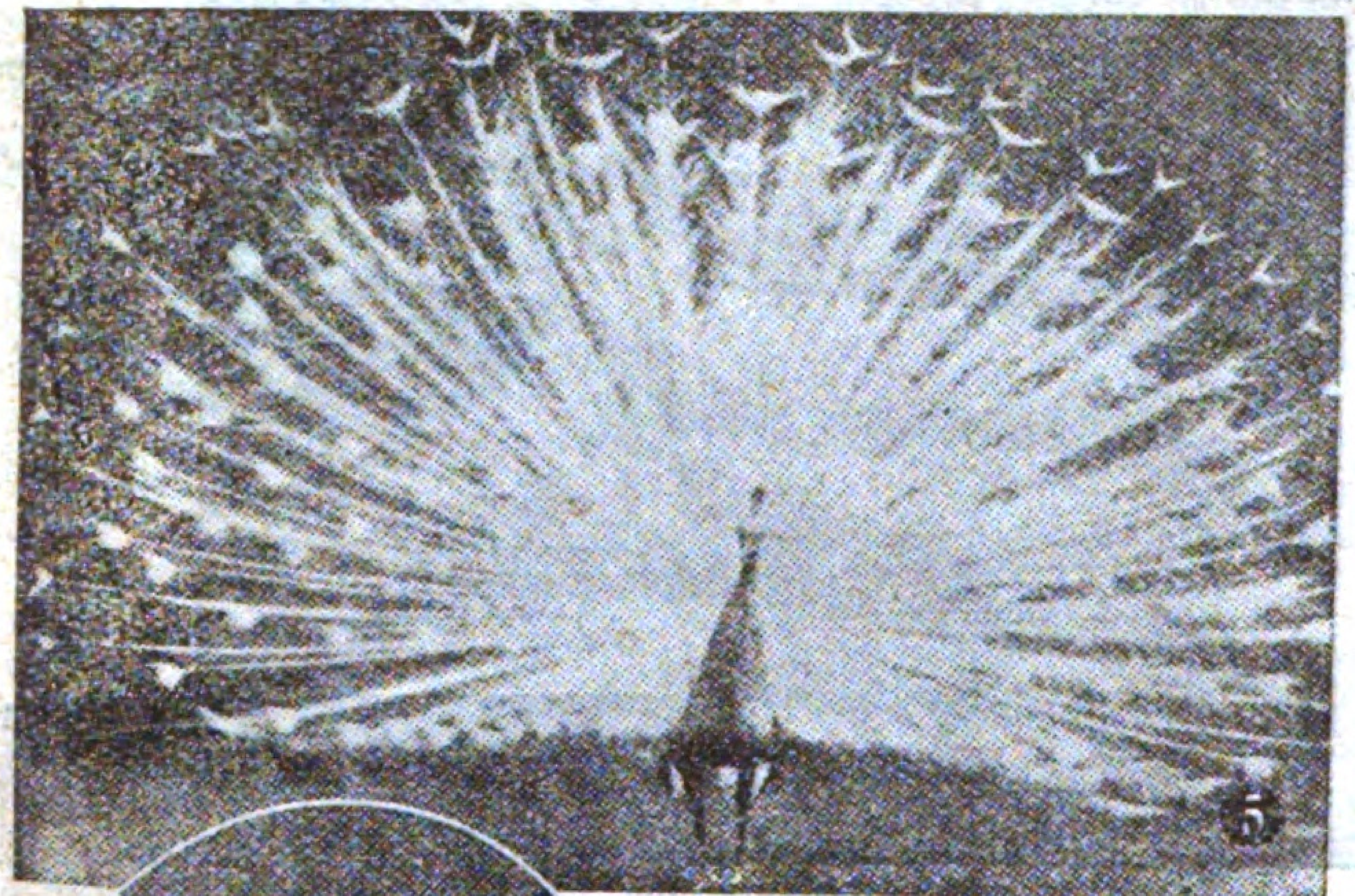
安定が保れる。

◇孔雀の尾の正體

(5)動物界で最も美しい尾と云へば、誰しもスグ孔雀を想像する。美しく擴げられた扇形、それに輝く圓い紋様、實に五彩の虹を躍らせた感がする。ところが正確に云へばこれは孔雀の尾でない。本當の尾はふだんかくされてゐて、ごくつまらない灰色の硬い羽である。

それは兎に角として尾の美しい方は孔雀の雄鳥で雌鳥の注意をひくためにこんなに發達したものである。

孔雀の外に美しい尾を持つてゐるものでは(6)の極樂鳥やモトモト鳥などがある。



5



6

◇物云ふ犬の尾

犬の尾はいろ〱の役目を持つてゐる。一生懸命に走つてゐる犬が、急に方向を換るときには尾からうまく舵をとつて身體の平均を保つやうにする。又非常に感情の激した場合は尾を盛んに振る。それから怒つて相手に肉迫するときは、頸の毛を逆立て、尾を高く上向けて進むのが常である。



7

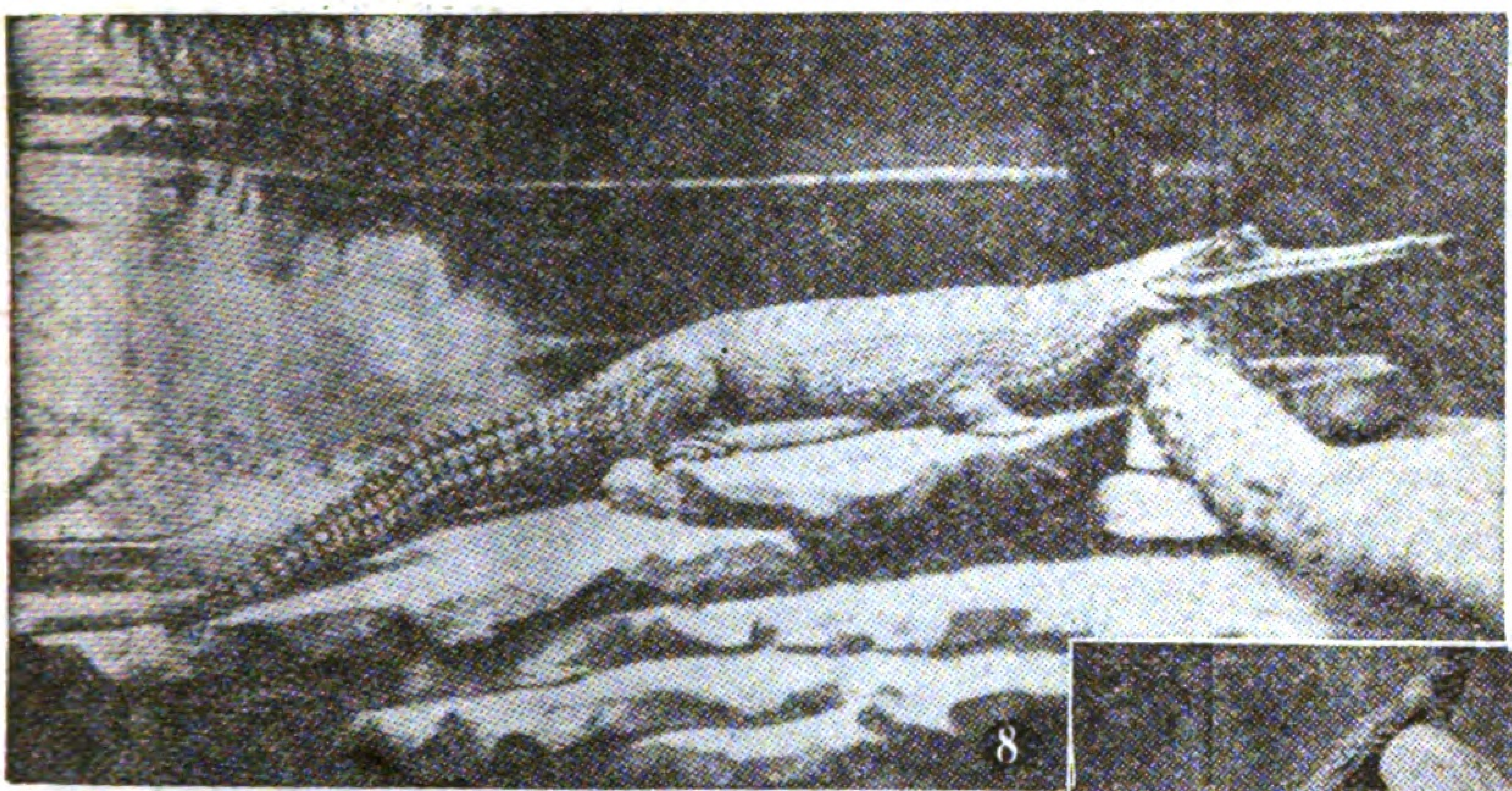
(7)の寫眞は犬と鰐の子が出會つた奇妙な場面で、双方とも恐怖のためにをのゝき、鰐の子は尾をピユツト立て、犬の方は反對に尾をダラリと下げてゐる。尾を下げるのは犬の恐怖又は降參の表情である。

◇尾で敵と戰ふ鰐

(8)尾の中で一番恐ろしいのは鰐の尾である。動作が敏速でない丈け、尾は有力な武器となつてゐる。敵に出會ふとその強大な尾を以て、一撃のもとに斃して了ふか、でなければ相手の脚を挪つて水の中にはたき込んで了ふ。鰐を襲ふ猛獸がよく此の手でやられる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

體は小さいが(9)アルマジロの尾も亦有力な防身具である。硬い



8

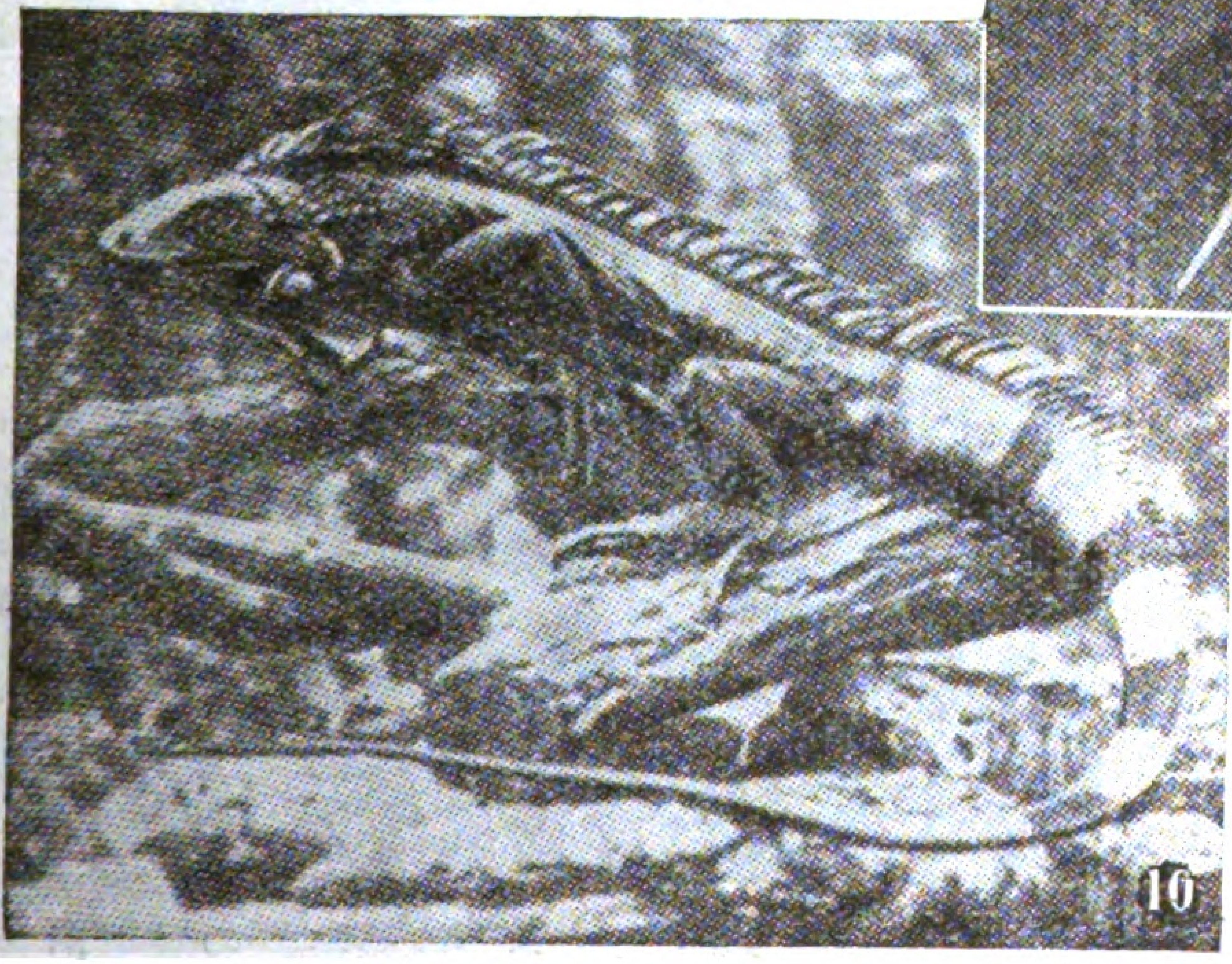


9

金屬的な鱗のついた尾で、ピシピシ相手を攻めたてる。

一體身體の動作の敏活でない動物や、特別に武器を持たない動物の尾は、大概攻撃、防禦兩方面に適するやうに出來てゐる。魚類の尾なども中々馬鹿にならない力があつて、漁師でもウツカリ油斷するとピシヤリやられる事がある。

牛や馬の尾は攻撃には使はれないけれど、身體にたかる虻や蠅を追拂ふになくてはならぬものである。人間で云へば手に負けない程實用的の役目をする。である



10

から牛や馬の尾を切つたりなどするのは尾の効用を考へない無情な仕打である。

◇尾を犧牲にするトカゲ

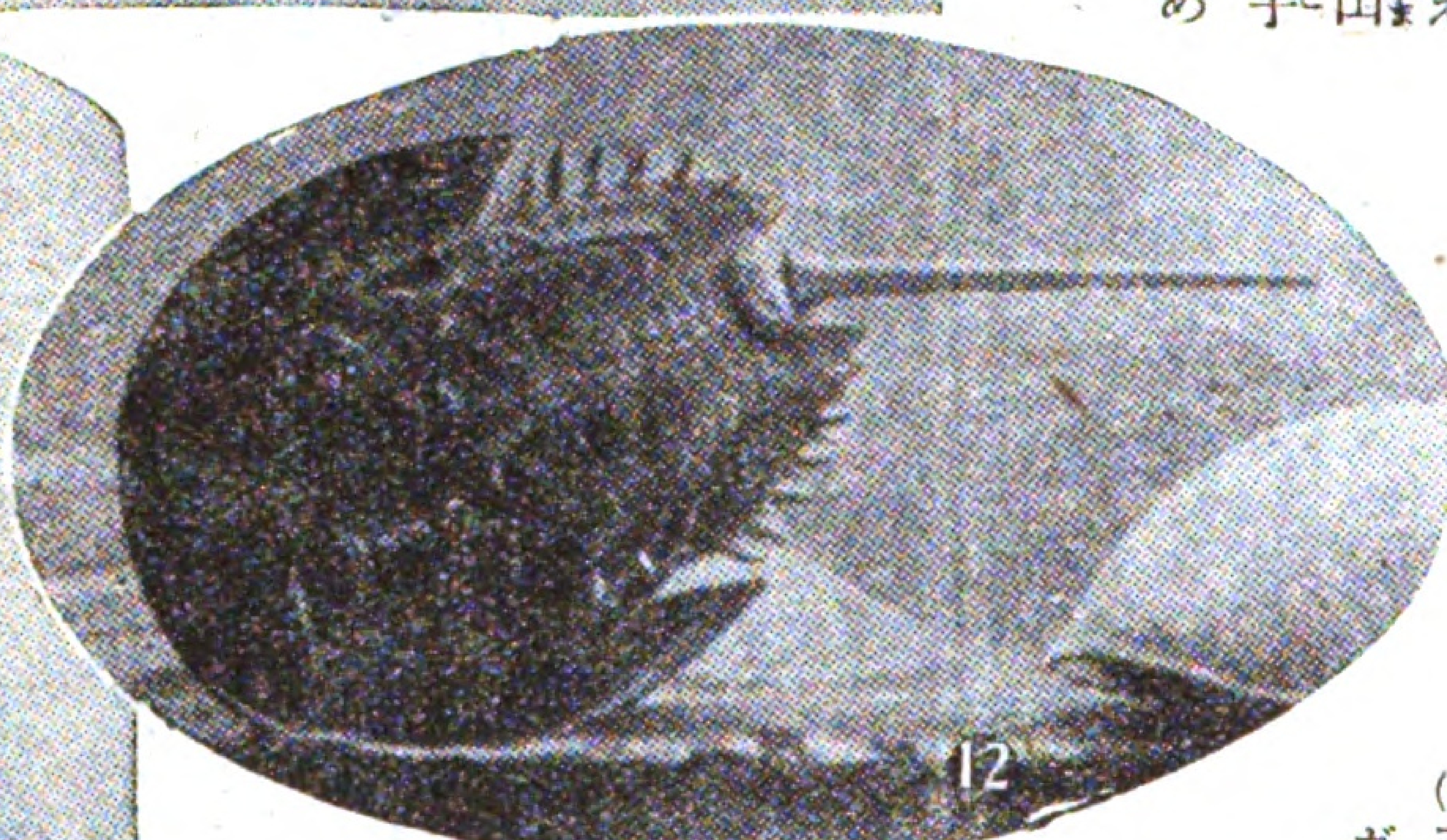
トカゲの尾程世にも不思議なものはない。少し觸るとスグに切れて了ふ。敵の襲撃に遇つて身に危險が迫ると、彼れはその尾を敵に挑ませておいて無難に切離したまま、一目散に安全地帶へのがれるのである。謂はゞトカゲの尾は、彼れを助けるために人身御供になるやうなもの。

同じトカゲでも(10)南洋に棲むタテガミトカゲの尾は中々切れるどころか却つて小動物に對して攻撃用の武器となる。

◇尾で音楽をやる蛇



(11) 全身鋭い針で埋つてゐるやうなのは山あらしである。就中下半身から尾にかけて生えてゐる猛烈な針で、巧みに敵を撃退する。山あらしはかういふ非常の際ばかりでなく、子供を伴れて歩くやうな時にも警戒保護のために毛を逆立てゝゐる。



(12) カブトガニは槍のやうな一本の尾を持つてゐる。これも敵を威嚇するもので、時には槓杆の役目にも用ゐる。



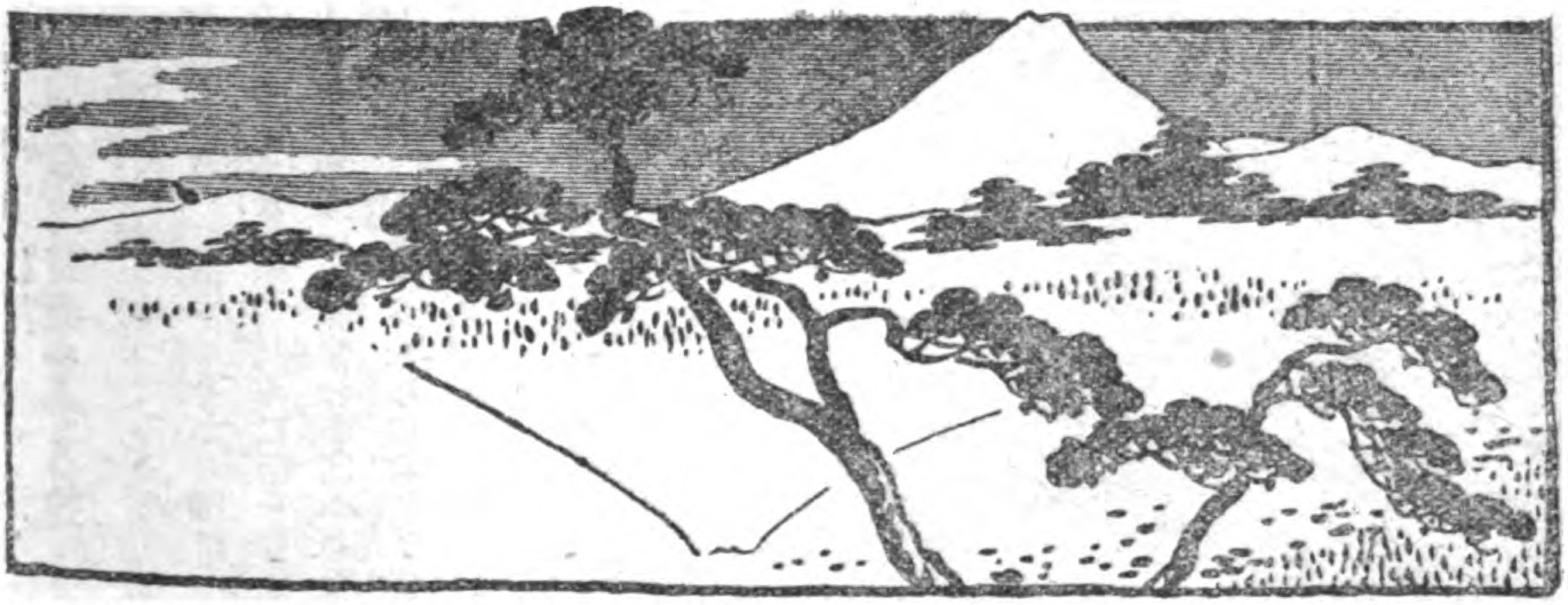
(13) 次に奇抜なのはガラ／＼蛇の尾である。尻尾は硬い角質で、中がうつろになつて居り、振る度にガラガラ音を立てる。これは勿論警戒用として有力な働きをするものである。

◇羊の尾が立派な倉庫



アフリカのある地方で、土人の飼つてゐる太尾羊の尾は、頗る珍らしい用途を持つてゐる。榮養を澤山とつた場合、身體が肥える事は勿論であるが、別に多量の脂肪分をその尾の中に貯へておく。即ち尾は一種の榮養の倉庫となつてゐるのであつて、食物の缺乏したやうな場合に、尾に貯へてある脂肪分で、身體の榮養を保つて行くのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



武勇講談

三家三勇士

大島伯鶴
井川洗厓畫

恩師の悲報

徳川將軍綱吉公御治世の頃ほひ、水戸家に於ては和田平助政直、尾州家に於ては星野勘左衞門繼忠、紀州家に於ては和佐大八郎正純、これを御三家三勇士と申して、大層武名を謳はれましたが、この三勇士は、圖らずも和田平助のお小屋に於て會合。こゝに肝膽相照らして、三勇士は平助が母の媒介によつて盃を酌み交し、年長の勘左衞門を長兄として、遂に義兄弟の約を結ぶことになりました。ところが、喜びあれば悲しみあり、この目出度き席上に三勇士を驚かせる事件が出來いたし、これより、三勇士が入り亂れて活躍をいたすといふお話。

三勇士、今しも胸襟をひらいて、歡をつくしてをりますると、ころへ、「御免！ 御免！」といふ案内の聲。老僕の久助が、

久『まア今日はよく人の訪ねて來る日だ』といひながら出て見ると、年頃四十二三の仲間體の男、甲掛脚半、草鞋がけ。

久『何方からお出でになりました』

○『手前は周防岩國からまゐつた要助と申す者でございます。此方は和田平助先生のお小屋と存じて、伺ひましてございます。どうか宜しくお取次を願ひます』

久『少々お待ち下さいまし』

と待たせておいて、奥へ來た久助。

久『旦那様………』

平『久助、何ぢや』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

久『只今、周防岩國から要助と申す者だといふのがまゐりました』

平『なに、周防岩國から要助がまゐつた。それは重ね〴〵の珍客……兄上、大八郎、手前が八重垣小太刀の秘法を學ばんと、仲間に姿を變へて入り込みし、周防岩國吉川家の劍道指南番國次惣左衛門殿お仲間要助と申する者が訪ねてまゐつた由、暫らく御免下さい』

平助自身が關へ出てまゐりましたが、その姿を見るより要助が、

要『オヽツ平助……ぢやアねえ、和田先生』といつたは、その昔お互ひに仲間勤めをしてゐた間柄だからでございます。

平『要助か。まア久し振りであつた。よく訪ねてまゐつた。さアあがれ。遠慮はないから早くあがれ』平助先生も、その昔を思うて、いかにも懐かしさうでございます。

要『はい、さう袖を引張つてはいけませぬ。この通り手甲脚半の旅支度、草鞋も脱がなければあがれませぬ』

平『あゝ左様であつたな。アハヽヽヽ、さア勝手へまはつて、足を洗つてまゐれ』

要『へえ……』

それから足を洗つて、案内につれて通された奥の座敷。

平『要助、これへまゐれ。遠慮することはない。これに居られるのは、尾州家の家臣星野勘左衛門殿と仰しやつて弓術の名人、此方のが紀州家の家臣前名和佐大八郎、今は主水正と任官されたお方だ。……御兩所、これが只今お話を申した國次惣左衛門方の仲間要助と申して、手前が國次方に下郎奉公をいたしてをつた時は、オイ平助、何だ要助と、いやもう兄弟同樣にいたした者。ちと人間は甘うござるが、志は正しき者……』

要助が驚いた。お客の前で人間が甘いまでいはれゝば世話はないと思ひましたが、お歴々の手前、それへ兩手をついて、

要『私は國次惣左衛門の仲間要助と申す者でございます。御大身方の前では恐れ入りますでございます……』

平『いや〳〵要助、心配をいたすな。この方々とは今日兄弟の義を結び、生れた時は別々でも、死する時は一緒にと確く約束いたした仲、この平助も同じことぢや。其方も國次方に拙者がをる時、教へておいた槍術、それが役に立つて武士にでもなれば、又お引立を願はんければならぬ。よくお願ひをいたしておいたが宜しい』

要『はい、何分ともにお願ひ申上げまする』

平『して要助、何の用があつてまゐつたか。御主人惣左衛門殿には御無事か』と云はれた時に、要助ハラ〳〵と涙を流して下俯向く樣子。

平『要助、其方は涙を流したな。何で泣く』

要『はい、旦那樣が御無事なら、私などがわざ〳〵旅支度で此方樣へ訪ねてまゐりはいたしませぬ。旦那樣は人手にかゝつてお果てなさいましてございます』云ふも涙のおろ〳〵聲。

平『な、なんと、國次殿には人手にかゝつてお果てなされたと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

――ウーム』しばしは暗然と致してをりましたが、やがて言葉もせはしく『これ要助、それはどうしたわけ。何者の所業であるか。仔細を語れ』

要『はい、隣り屋敷の陶兄弟のために討たれました』

平『ウーム』

要『お話し申上げるも涙の種、何れも樣お聽きなされて下さりませ』芝居なら合方キツパリとなつて物語りになるところでムいます。

要『貴下樣が江戸へお立ちになりましてから、日頃不仲の隣り屋敷の陶大之進、大次郎の兄弟、自分の心善からぬを棚にあげ、貴下に懲らされたのを遺恨に思ひ、何かあつたらと狙つてゐたさうでございますが、御城内でお月見の御酒宴、旦那樣惣左衛門樣も御酒下されで、御酩酊になつておさがりの途中、陶兄弟のために鐵砲で暗殺になり、敢ない御最期をお遂げになりました』



陶兄弟と國次とは同じ藩中で指南役をしてをりましたが、技術勝れた國次の評判のよいのが兎角癪に障つてゐた陶兄弟、ある日國次の倅の惣之助が、隣屋敷の花を折つたといふので理不盡の難題、それを一身に引受けて、常時仲間に住込んでゐた平助

が兄弟を手玉にとつて懲らしめたことがございます。それを根にもつて遂にこの悪計をめぐらしたものでございます。

平『ウーム、返す〴〵も憎くき陶兄弟、己れの未熟を省みず、飛道具を以て暗殺とは……して、其後は如何いたした』

要『陶兄弟はそのまゝ何れへか逐電いたして行方知れず。奥様は御嬢様、惣之助様、それに下女のおたけの三人をお連れになつて、茂助が萬事の宰領、主君に願つて、旦那様の仇討にお出掛けになりましてございます』

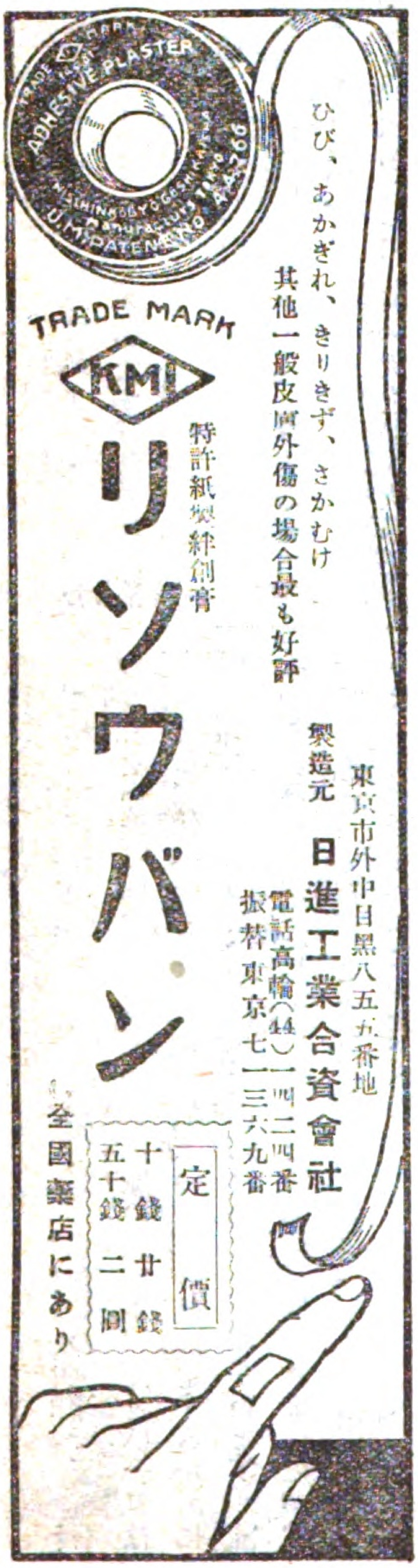
平『ウーム、さすがは武藝者の妻だけあつて、お見上げ申した健氣のお志』

要『奥様の仰せになるのには、百ケ日を済ませてから、敵の行方を探ねながら、東海道を眞直に江戸表へまゐり、平助殿にお目にかゝるつもりであるが、まづ取敢へず其方が此事を平助殿に御注進申上げてくれるやうにとのことゆゑ、かうして私が一足お先に御注進にまゐつたのでございます』

平『ウーム、それは一大事。よく知らせにまゐつた……母上、只今お聴きの通りの次第、たとひ我が主君の内命によつて、武術の奥義を究める爲めとはいへ、一旦は主人と仰ぎし國次惣左衛門、殊には當時陶兄弟の悪を憎んで拙者が懲らしめしが原因となつて、かく暗殺に相成つたとあつては、平助政直、このまま安閑としてはをられませぬ。これより主君に御目通りを願ひ、お許しを受けし上、國次殿の仇討に出立いたしたいと存じます。母上にも何卒拙者本懐遂げて立歸るまで、御暇を頂戴いたしたく、この儀御許し願はしう存じまする』

母『あゝ平助、よく言ひなすつた。それでこそ武士の義と申すもの。この母に何の異存がありませう。少しも早く仇討出立いた

ばい菌は一寸した傷口より入る
常にリソウバンの御用意を！



しますやう』
平『早速の御聽濟み有難う存じます……さて兄上、大八郎、お聽きの通りの次第、手前はすぐさま出立をいたす。後の所は然るべく御願ひ申す』
勘左衞門並びに大八郎、これを聽いて、
勘『平助殿、意外の出來事。御心中お察し申す。後々の事は御心配なく、御出立なさるが宜しい』
大『われ〳〵も兄弟の緣を結ぶからは、敵陶大之進大次郎兄弟とやらの行方を探ね、共々御助力いたす考へ』共々言葉をそへましたから、平助も勇み立ち、
平『何分共にお願ひ申す』と、こゝで平助は直ぐに御殿へ出仕、御目通りを願ひまする。
そこで光圀公には早速平助を御前へ喚出し、
光『平助、突然の目通り、何事ぢや』
平『ハ、ツ、御耳を驚かし奉り恐入りましてございます。實はかやう〳〵かく〳〵の次第、何卒御暇賜はりたく、偏へに願はしう存じまする』
光圀公暫らくお考へになつてをりましたが、
光『平助、それはなるまい』と、意外の言葉。
平『ハ、ツ……』
光『其方はこの光圀の家來であらう』
平『ハ、ツ…』
光『水戸の家來が他家の家來の仇討はならぬぞ』
平『ハ、ツ恐れ入りましてございます』
これは水戸樣の仰しやることが當然。水戸樣の家來で三百石の食祿をいたゞいてゐる者が、吉川家の指南番、たとひ一旦は主人として仕へた者とはいへ、他家の家來の仇討をするために暇を願ふといふのは、道に於て出來ないことでございます。國に次の娘おみつと內祝言、妻にするといふ約束はありましたが、それは私事、公然のことではございませぬ。ところが光圀公、うまい事をお考へになつた。
光『併し其方も國次惣左衞門より八重垣小太刀を會得いたした者である。尚この上の修行をいたしたいといふことであらう。さうであらうな、平助』
平『ハ、ツ……』
光『武術は一生の修行ぢや。今日より三年の間暇を取らせる。十分八重垣小太刀の修行をいたして立歸るやういたせ』
平『ハ、ツ、恐れ入り奉りまする。君の厚き御情、決して忘却は仕りませぬ。必らず三年の間に修行の功を遂げ、立歸るやう仕りまする』
光『オ、堅固で暮せ』
修行といふことでお許しになりました。實に光圀といふ方は御名君。和田平助、涙を流して退出、此事を母、妹並に星野勘左衞門、和佐主水正に告げましたから、何れも君の御仁心に涙を流して喜びました。こゝで早速に旅の支度に及び、母に妹、並びに勘左衞門主水正の二人にも後事を托して別れを告

げ、これより要助を連れて、和田平助政直、再び武術修行旁く諸國遍歴の人と相成りました。これで平助が眞直に東海道を上つて、途中國次の遺族の者に出會へば仔細はないのでございますが、世の中のことは儘ならぬもので、それが行違つたばかりに、こゝに一つの騒動が起るのでございます。

碓氷峠の險

こちらは國次惣左衛門の遺族達、未亡人のおとよ、娘のみつ、伜の惣之助、下女のおたけ、それに附添ふ保護役ともいふべきは下郎の茂助、この五人が周防岩國を立つて、振分けの荷物を肩に東海道を下つてまゐりましたが、ふと途中で氣が變つて、未亡人のおとよが、

とよ「茂助や、私の考へでは、東海道筋は人通りが激しいから、敵の立廻ることもなからうと思ふ。事によつたら中仙道の方に敵がゐはせぬかと思ふから、これから一つ中仙道を行つてみようではないか」と云ふのを、首を傾げて考へてゐた茂助が、

茂「奥樣の仰せではございますが、要助を江戸の和田樣の所へお遣はしになりましたが、その口上にも、御主人の百ヶ日を濟ませてから岩國を立つて、東海道を眞直に下つて行くからと、かう云つてやつたのでございますから、これから中仙道をまゐりましては、和田先生に御目にかゝることも出來ぬやうなことになりはせぬかと存じます。兎に角、東海道を眞直にお出でにな

聖地に傳はる
稀代の名藥



神經痛 レウマチス
難病が續々救はる

ほね・すぢ・節々がう、づき痛み引つり
甚だしきは不具者となり生命をも奪はれる

神經痛リウマチスは、其症狀が種々と異り一樣には申されませぬが、其苦しさは並大抵でなく、眞に同情すべき病氣であり乍ら、唯今の處其適藥が無く、患者は徒に病苦に惱まさるゝのみであります。

尤も藥は澤山あるが滿足すべき根治藥は一つもありませぬ。

これ等の多くは皆西洋藥本位であります中に、獨り我が靈方「野之久」に於きましては、最も古く傳はる我國獨自の方劑で、然も西洋藥の有せぬ偉大な靈妙作用を發現し、續々難症激治の實を擧げて居ります。

これは日本で唯一つの秘方靈劑として古くから知られて居りましたが、何分にも特殊の原料と獨特の調製法によらねばならぬ關係上大量の製造が出來ぬため弘く世上に發表することを致さず、殊に當家は元々藥を賣つて渡世いたすものでは御座りませぬので、唯秘傳へて申越さるゝ希望者にのみお頒け致して居りましたが、全治なされし人々から「ぜひ人助けに廣告せよ」と勸められた次第であります。詳しいことは茲には申されませぬから、キングで見た旨ハガキで御申越次第靈方「野之久」の由來其他を記した詳細說明文を折返し御送附申上げます。それにより皆さまが少しも早くお治り下さることを祈つて居ります。

大和宇陀郡
榛原在山邊
藥野莊
電話榛原三番

つた方がよからうと、私は存じます』と『それはね、和田先生をお力にするは固よりなれど、何も敵のをると思ふ方をよけて行くこともありますまい。なるべく私達で敵を討つやうにしなければ、亡き旦那樣にも申譯がない。たしかに敵は中仙道と思ふゆゑ、まづその方へ……』いくら家來が反對をしても、結局は何事も主人の主張が通るわけ。そこで茂助の言ふことは容れないで、一行は道を左に切つて、いよいよ中仙道を下ることになりましたが、これが大變な間違ひのもと。

時しも九月の中旬過ぎ、差しかゝつてまゐりましたのが、中仙道名代の碓氷峠。もとより足弱ばかりを連れてゐることですから、まづ輕井澤で晝御飯をしたゝめて腹をこしらへ、晝過ぎからぼつ〳〵峠を越して、泊りは橫川といふことにいたした。現今は二十六の隧道が出來まして、電氣の力でこの隧道を越してしまひますが、昔はさうはまゐりませぬ。演者なども旅興行をして歩く時分に、峠だけは三里、どうしても歩かなければならなかつたもので。越後路へまゐりますには、橫川まで汽車で來て、あれから峠を越し、輕井澤へ下りて、それから又汽車に乘つて直江津まで汽車のある時分、よく越後へまゐつたことがございますが、なか〳〵難儀な道でございます。併し紅葉は日本一といつてもいいくらゐ、連山さながら錦をつらねたやう。併し、輕井澤に追分の支店で油屋といふ旅宿



がございまして、汽車に乘るまではどうしても二時間ぐらゐは彼所で待合せたければなりませぬでしたが、渡者は其所で酒を飲んだところが水のやうな酒で、おまけに量りが惡い。駄作ではございますが、『徳利を持上げて見れば輕井澤、酒は水でも家號油屋』こんな惡口を書いて汽車辨當を二つたゞ貰つたことがありましたが、近頃では東京市中の苦熱を避けるために、紳士方が別莊などを造つて、避暑にお見えになりますので、立派な建物が澤山軒を列べてをりますが、昔は山また山の物凄い所。國次主從五人、その輕井澤も越えまして、いよ〳〵碓氷峠へかゝる。左に山と山との間に烟を吐いてゐるのは淺間山の噴火。

茂『坊ちやんえ、御覧なさいまし。あれが淺間山といつて信州で名代の山、恐ろしい黒烟を吐いてゐるぢやアございませぬか。年に幾度となく、あれが恐ろしい音を立てゝ噴火するのださうで……奥様、お孃様、御覧遊ばせ……おいおたけ、見な。あれが淺間山だ』

たけ『あれ、まア茂助さん、あれが話に聞いてゐた淺間山といふのですかねえ』

茂『ウム……奥様、いゝ景色ぢやアございませぬか。それは岩國にも紅葉を見られないわけではございませぬが、この山又山が恐く眞赤になつてをりますが、これが楓の木ばかりぢやございませぬ。紅葉をするものは、蔦も漆の木も、御覧なさい、まるで、紅のやうで……あゝ幽かに鹿の啼く聲が聞えます。獵師のために妻を撃たれて、良人がその妻を慕ふ鹿の啼聲。何となく哀れに聞えるぢやアございませぬか、……



……坊ちやん、どうなすつたのでございます。歩行しなくつちや

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

アいけませぬよ』

惣「爺や、足が痛いの』

茂『エツ、足が痛い。今日までも無事に旅をつゞけて來たのに、今になつて足が痛いたんて、坊ちやんにも似合はないことを仰しやいます。ドレ〳〵……あゝこれは痛からう。畜生、やつぱり買つた草鞋はいかねえなア。旅から旅をつゞけて來るために草鞋をつくつてお穿かせすることが出來ないから買草鞋。足を食はれないやうに爺やがすつかりこなしてお履かせ申したのだが、大體の出來が悪いから、それで足へ喰込んだのでございませう。これは痛からう。まア〳〵草鞋をお脱ぎなさいまし』

紅葉のやうな手を肩へ掛けさせ、茂助は草鞋を脱がせて、懐中紙を揉み、これをすつかり紐へ巻付けて履き直させ、顔を見ながら思はずホロリと流す一雫。

茂『世にある時は、二百石の大禄をいたゞいて、中國九州で鬼神といはれた國次様のお坊様、履きも馴れざる草鞋に喰はれ、七歳や八歳のお小さいこの足を。まア草鞋め、憎い奴だ。併し坊ちやん、江戸には和田先生や要助爺やが、もう坊ちやんがお出でになるだらうと、貴下のお好きな鎧だの兜だのお馬などを買つてあるさうでございます。早く江戸へ行きませうね。少し負つて上げませう。ここは登りですから、爺やだつて、それは長くは負へませぬよ。さア負ぶなさい……あゝ重くなんなすつたな。この茂助が御本公に上つた時は、貴下が生れて二月か三月だつたが、月日の経つのは早いもの。もう私も御奉公に上つて八年になります。ねえ坊ちやん、今に大きくなつて、えらいお武士になつて、お父様の後繼者におなんなさらなくつちやアいけませぬよ……ホラ〳〵ホラ〳〵、爺やがお馬だ。ホラ〳〵ホラ〳〵……さア〳〵奥様、貴女が一番この中の大將でございます。思ひ切つてこの峠を越えて下さらないと困ります。併し奥様、もうこの峠を越してしまへば、あとは江戸まで平な道。たゞ難儀なのはこの碓氷峠ばかり……さアお嬢様、さう茂助に氣を揉ましちやア困ります』

みつ『だつて茂助や、もう疲れて歩けないよ』

茂『歩けないなどと仰しやつて、困りますなア……おたけ〳〵、お前までしかめッ面をしてゐちやアいけねえ。お嬢様のあとについて、お嬢様のお尻を押して上げろ……さア坊ちやん〳〵。あゝ爺やの肩がめり込みさうだ。ホラ〳〵ホラ〳〵』

時も時、持病の癪

忠義に凝つた下郎の茂助が、國次の遺族を勵まし〳〵やうやう登り詰めた碓氷峠の頂上、權現の社前。

茂『あゝやつと着いた。もういゝ。これでもうあとは下りるんで。それ、御覧なさい。あの山の此方の木の際につゝ〳〵諸のやうな形をした山が見えませう』

とよ『あゝあれは何といふ山だえ』

茂『あれが上州で名代の妙義山といふのでございますよ』

とよ『なるほど、あれが妙義山といふのかえ』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

茂『へえ、横川から見た景色が一番いゝさうですが、この前旦那様が中仙道をお下りの時に、私はお供をいたしましたが、その時旦那様が、矢立の筆を出してお書きになつたのを、私は側で拝見をして覺えてをります。「縦からもまた横川も手を打つてこれは妙義とほめる靈山」うまく出來てるぢやアございませぬか』

とよ『まアそれは旦那様がおつくりになつたのかえ』

茂『へえ、奥様、お聞きにはなりませぬでしたか。たしか旅のお手帳に書いてある筈でございましたが。不思議な山でございますね』

頻りに四方の景色を眺めてをりまするうち、權現堂の社の縁端に腰打掛けてゐた奥様が、急に何やら色も蒼ざめ、胸先を押さへて身體をもがいてゐられる様子。

茂『おやッ、どうかなさいましたか、奥様。エ、ツ、胸が痛い？ あゝ又持病が起つたのぢやアございませぬか。私が今思はず旦那様のことなんぞを言出したので、詰らねえことを思ひ出して、それが癪の種となつたのぢやアございませぬか。こいつは困つたな。あゝいけねえ、奥様。さう反つちやアいけませぬ。こいつはいけねえ。おたけ／＼、しつかり押さへろ。お嬢様、ウロ／＼してゐちやア駄目でございます。水々、さう手ばかり動かしてゐては……エ、ツ、手洗鉢には水がなくつて、木の葉が一ぱい？ それは困つたな。奥様よーツ、奥様ーツ。かうどうも強く差込んぢやア困るな……さア坊ちやん、親不孝にはなりませぬから、首ツ玉へ馬乘に重なつて押附けていらつしやいまし。おたけ、お前その大道臼のやうな尻をのッけてしまへ。決して不忠にはならねえんだ。お嬢様、しつかり押さへて……あゝ合薬は持つてゐても、生憎粉薬で水がなければ服めねえんだが……あゝさう／＼、お嬢さん、こゝまで來る途中、清水がチョロ／＼流れてゐるのを見ておきました。爺が一走り行つて水を汲んでまゐりますから、奥様がお反りにならないやう

良薬は千里又千年世界の果まで中將湯！



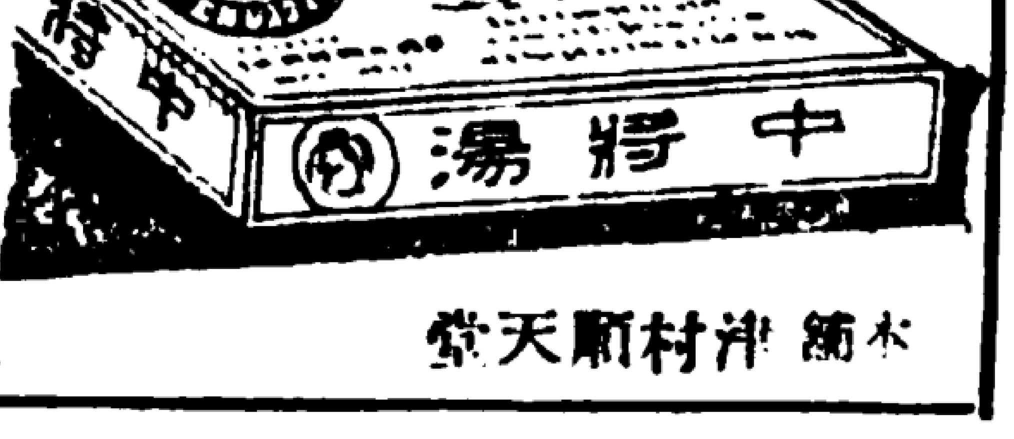
愛用の賜！
朝夕怠らぬ中將湯の一杯から心も體も健かに今日は樂しい雛祭

産科婦人科諸博士推奨
中將湯

主効
子宮病、血の道、ヒステリー、産前産後、月經不順、頭痛眩暈、逆上、神經衰弱、下腹腰足冷え込、下腹腰足引つり痛み、こしけ、肩胛氣、[illegible]。

定價

試用分	二十錢
三日分	三十錢
七日分	一円
十五日分	二円
二十三日分	三円
四十日分	五円
八十五日分	十円



本舗 津村順天堂

に、しつかり抑さへてゐて下さいまし。坊ちゃん〳〵、おたけ、頼むぜ。いゝか」

手拭を鷲攫みにして、茂助はそのまゝ元來し峠を下りて行く。

物『阿母様よ――ウ』

みつ『母上様――ア』

たけ『奥様――ア』

三人が呼び立てる聲は木の間谷間に谺して、物悲しくも聞えてまゐります。それをうしろに下郎の茂助、たしかに峠の登り口に岩清水が流れてゐるのを見ておいたと思ふから、それをたよりに一生懸命只走りに走つてまゐりましたが、何所で見失つたか、行けども〳〵水のある所へ出合ひませぬ。たゞ驀直に峠を驅下りてまゐりますると、遙かなか



にあたつてヒューツといふ七節籠つた尺八の音、そんなものは耳にも掛けず、ドン〳〵やつてまゐりましたが、ふと、曲り角の所を夢中で驅下りて行かうとする出合頭に、はたと出會つた二人の虚無僧、この一人にドウと突當つてしまひました。

虚『無禮者めッ』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

茂『あゝ痛え〳〵。御免なせえまし』

虚『御免なさいとは何だ。普化宗門は武門の隠れ家とて、深く天蓋を頭にいたゞく。それを覗くといふことは、宗門の法として許さぬのだ。無禮者め、何故あつて天蓋の中を覗いた』

茂『痛え〳〵。冗談いつちやアいけませぬ。決して貴下方の天蓋なんぞを覗いた覺えはございませぬ。私の主人が峠の上で持病の癪に苦しんでをります。藥はあつても水はなし、たしかにこの峠の登り口の所に水の落口があつたと思つたが、そいつを見失ひ、夢中になつて驅下りようとした曲り角、出合頭、思はず貴下方に突當つたので、決して天蓋などを覗いたのではございませぬ。どうか勘辨しておくんなさいまし』

　かういふ茂助の樣子を、ぢッと天蓋の中から視つめてをりました虚無僧の一人。

虚『ウム、さうか。それでは決して覗いたといふのではないな。それなら許してやるが、この後ともに高が虚無僧と侮ると、飛んだ間違ひがあるぞ。許してやるから行け』



茂『へえ、有難うございます。どうも相濟みませぬでございました』

　これが平常なら利かぬ氣の茂助、何をいひやアがるんだと、隨分喧嘩もしかねない元氣者なのですが、今山の頂上で持病の癪に苦しむ主人を助けたい一心ですから、平謝りに謝つて、そのまゝ峠を下りて行く。

　天蓋に手を掛けたかの梵論字、茂助の後姿を見送つてをりましたが、

○『大次郎、大次郎』と、一人の力へ呼びかけました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大次『はい』
○『今の下郎を誰だと思ふ』
大次『へえ……存じませぬが』
○『馬鹿、呆れた奴だな、貴樣は。われ〳〵兄弟の首を狙ふ國次の下郎の、あれは茂助だ』
大次『エヽッ、あれが茂助と聞いては、捨置けませぬ。これから參つて彼れめを一刀兩斷……』
○『馬鹿をいふな。平助奴に仕込まれて、下郎に似合はぬ達者な腕前。もとよりわれ〳〵二人でかゝれば、討果すことの出來ぬことはあるまいが、手間取つては却つて此方の身の破滅。聞けば主人は持病の癪で惱んでゐるといふ。さてこそ國次一族が峠の上にゐるに違ひない。幸ひ茂助の留守中に、國次一族を殺してしまへば、われ〳〵兄弟はこれから先き、枕を高く寢られるといふものだ。さすれば餘人の彼等が、いかに義のためとはいひながら、そこは元を糺せば赤の他人、主人が鏖殺しになつてしまへば、まさかに敵を狙ふこともあるまい。根を斷つて葉を枯らすとはこのことだ。それッ早く行け』
大次『心得ました』
　これぞ言はずと知れた陶大之進宗連、弟大次郎宗冬の兄弟。國次の遺族は、果してどうなりませうやら。

虚無僧殺し

どうしてこの陶兄弟が虚無僧姿になつて中仙道へかゝつて來たかといふと、これには仔細がございます。國次惣左衞門を討ち果し、夜にまぎれて岩國を出奔した陶兄弟、これより諸所方方と流浪の末、やうやう東海道を下つてまゐりましたが、ふと何か思ひ付いたか、大之進、
大『なア弟、どうも東海道を眞直に下るといふことは、われわれにとつてはちと危ないぞ』
大次『何故でございます』
大『江戸表には和田平助政直といふ毒蛇が、口を開いて待つてゐる。それこそ飛んで火に入る夏の蟲だ』
大次『では道でも變へますか。』
大『うむ、この御殿場から左へ切れて三坂を越え、あれより甲州へはいつて、人の噂も七十五日、しばらく甲州で餘燼を冷まし、それから江戸へはいることにしようではないか』
大次『成程、それは兄上上分別。然らば左樣いたしませう』
　そこで道を左へとつて、湖水の邊を廻り、三坂の峠へと掛つて參りましたが、皆樣方も御承知でいらつしやいませう、ここは富士の景色のことにいゝ所。たゞ富士を直接に見たのでは、さまで好い景色といふわけにはまゐりませぬが、この湖水に富士が逆さまに映ります。近頃はカメラといふ結構な器械がありまして、技術も進歩いたしましたので、この逆さ富士なども誠にうまく撮れるやうになりましたし、又油繪などにしても見事のものが出來上がりますが、逆さに富士が映つた逆、日本畫ではどうも其の興味が薄いやうで、これはカメラか油繪

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

などが繪模樣のやうに映じます。この三坂はその逆さ富士の好い所。それゆゑ誰言ふとなく三坂富士、三坂の逆さ富士などと稱へます。甲州は地口の非常に流行る所で、『三坂から見える富士』といふ洒で『御坂から來る文』などといふ地口がございます。今日では地口などは大分廢れたやうですが、この地口では『きのふ揚にて酢蛸で飲んだ』『相撲取にて白藤源太』或は『使はだしで二里登る』『使ひ果して二分殘る』などといふのが、まづ地口の主なるものださうで……。さて陶兄弟、この三坂峠へかかつて來ると、『ヒユーッ』といふ尺八の音。ひよいと向ふを見ると、岩の角に一人の虚無僧が腰を掛けて、唄口を濕して頻りに尺八を吹奏してをりまする。その傍らに今一人の虚無僧がをつて、これは煙草の烟を吹かしてゐる。陶大之進ぢッとこれを見てをりましたが、

大『大次郎、虚無僧が二人ゐるな。なかなか服裝がいゝ。黒羽二重の五所紋付で、深編笠の姿。誰の目にも留まる。虚無僧といふものは、武門の隱家といつて、天蓋を以て面を面深に包めば、人に面體を見られることもなく、世を忍ぶには屈竟だな』

大次『左樣ですな、兄上』

大『耳を貸せ』

大次『はい……エ、ッ、ではあの浪人を……』

大『シーッ、靜かにしろ。必らずぬかるな』

陶兄弟何を諜し合せましたか、耳打をしたかと思ふと、その儘道を急いで峠へ登つてまゐりました。

大『あいや、それなる梵論字』

虚『オ、これはこれは御兩人の御武家、甲州路へお越しかな』

大『左樣でござる。ところで、甚だ失禮ぢやが、火を一つ拜借が願ひたい。この麓の茶店へ火道具を忘れてまゐつた。今、御身が煙草を吹かしてゐるのを見ると、咽喉がピクピクするやうで。いや煙草喫みはうるさいものでござる。甚だ失禮ぢやが火を一つ……』

虚『オ、それはいと易いこと。さアお點けなされ』

大『然らば御免』

大之進は鉈豆の眞鍮の煙管をズイと出した。相手の虚無僧も何氣なく雁首の火を差出したが、隙を窺つた大之進、煙管の雁首相手の眼と鼻の間を『エイッ』と突いた。一藩の指南番として立つてゐたほどの大之進の手練。物の見事に打たれて『ウーム』と虚空を掴んで、虚無僧はそれへ氣絶いたしてしまひました。岩の上で尺八を吹いてゐた虚無僧、これを見るとびつくりして、『何をなさる』と、立上がらうとするのを、背後へ廻つた弟の大次郎、いきなり下緒を首へ卷付けると、力一ぱいギユッと絞め付けた。これも『ウーム』と、のけぞつたまゝ。

大次『兄上脆いものでございますな』

大『うまく行つたか』

ダラリと涎を垂らして、そのまゝ虚空を掴んで悶絶してゐる二人の虚無僧。これを見ると『それッ』とばかり、兄弟は天蓋

を取り、衣類を脱がせ、今度は着てゐた自分等の衣服を脱いでしまふと、鼠木綿の衣類、鼠木綿の手甲脚半をすつかり身に着け黑の衣服を彼等二人の死骸に掛けて、倘虛無僧の胴卷を見ると、何方も大金といふではございませぬが、十兩づつ肌付の金を持つてをりました。思はず兄弟顏を見合せてニヤリと笑ひ、

大『これは天の助けだ』といつたが、こんな奴に天が助けませうか。大小を差して行く譯にまゐりませぬ。惜しいと思ふが、大刀だけは彼等二人の死骸の側に投出し、小刀は鍔を取り、大劍の切羽を外して、切羽を殖し、鍔無しにしたのを錦の袋に入れたのはまさかの時の用意。ちよつと見ると替笛のやうに見えます。よく虛無僧が錦の袋を持つてをりますが、あれは替笛でございます。

大次『兄上、服裝は出來ましたが、私は尺八を知りませぬ』

大『いや、拙者も尺八といふほどのことは知らぬが、十七、八の時分に劍術の師匠が大層尺八が上手で、二三度敎へられた事がある。一つやつてみようか』と



唄口を濕したが、昔習つたことのある大之進、ヒユーツ、ヒユーツと吹き出した尺八。

大次『やア兄上、鳴る〳〵』

大『鳴らいでどうするか。アハヽヽヽ、さア貴樣に手解にひと、、、、つとやから敎へてやる』

心細い虛無僧が出來上りました。兄弟そのままに甲州路へはいり、彼方うろ〳〵此方うろ〳〵した末にこの碓氷峠へかかつて來たのでございます。實に氣の毒なの

は國次の一族。

×　×　×

大『弟、あれあの聲が聞えぬか』
大次『左樣でございます』
耳を欹てると、『阿母樣よーッ』『母上樣よーッ』『奥樣よーッ』といふ聲が、遠く谺して聞えてまゐります。陶兄弟は悦に入り頂上さして登つて參りました。

こちらは國次の姉弟に下女のおたけ、苦しむおとよを介抱してをりますると、その前へのつそりと立つた陶大之進。

大『あいや、旅のお女中。お見受け申せば、母御が持病の癪に苦しんでござる樣子。合藥を御所持か』
みつ『有難う存じます。藥は持つてをりましても、何分水がなくては服めぬ藥。只今召使の者がこの麓へ水を汲みにまゐりましたが、何分母がこの通り苦しんでをりまするので……』
大『それは定めし御難儀な事でござらう。同病相憐むとか申す。幸ひにして服みよき藥がござる。失禮ながらそれを進ぜよう』

ヅカ／＼ツと病人の側へ寄り、耳元に口を當てゝ、
大『國次の御内儀、いやさおとよ殿、御身の病に即効の藥はそれがしの面體だ。御覧あれ』と、聲を掛けられて、今まで先胸を押さへて苦しんでゐたおとよ、聞き覺えのある聲と、苦しき中に顔を上げる。見上げる顔に、見下ろす顔！
とよ『ヤ、ッ、汝は陶大之進、良人の敵、覺悟しや』と、今は病苦も何所へやら、腰に差してをりました短刀で只一突にと突いてかゝつた。國次一族の身は如何相成りませうか。（つゞく）



新作落語 看板敵

森曉紅
水島爾保布畫

一

敵にもいろ／＼あります、お主の敵、親の敵、お主の敵の方では、赤穂義士がひとりで株を占めてしまひ、また親の敵の方では曾我兄弟が本家本元はこちらでございと賣ひろめて居ります、或はまた言葉敵、碁敵、戀敵、食ひ物の敵などとございますが、戀敵などはチョイとおだやかならんわけのもので、亦喰ひ物の敵と來ますと、これはなか／＼恐しいものだそうでございます。

さて玆に申上げますのは、稼業の慾から出た所謂商賣敵、看板の爭ひから起つた珍なる一席、實際から得ましたお笑ひなのでございます。

時は明治の中頃のこと、開けたといつてもまだ／＼現今のモダーンなんて風の吹き具合とは比べものになりません、まだ江戸のなごりといふものが市井に流れて居りましたわけで、街の商人さんなどでもどこかに暢平した所がありました、その看板などを見ましても洒落ツ氣のあつたものがそちこちにありましたものでございます。

その時分、下町の或る賑やかな通り筋へ開業をした餅菓子屋がありましたが、恰度其の筋向ふに古くからある同商賣の老舗が、屋根看板に大なお供餅の造り物を上げて、なか／＼繁昌をして居りますので、新店として此れに競ふのは容易なものではありません、先づ看板からして衆目をひくものを出さなければいけないと、亭主は頻りと考へましたが、なかなか巧い思ひ附きがありません、そこで知り合の博識の許へ出かけまして、

『ねえ先生、一ツ貴方に一生の智恵を絞つて頂きたいことがありましてお願ひに



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

出たのでございますが……。』

と天窓を掻きながら申出ますと、其の博識の先生、落語へ出て來る先生ですから甚だあやしい先生ですが、然し納まつたもので、

『何だツて、我輩に一生の智惠を絞つてくれつて……我輩が一生の智惠を絞るなどは天下國家の問題でゝもなけれぱしないことだよ、時節柄大仰な事を云つちやアいかんよ。』

『へえ——なる程、左樣でございますかな……だが何です先生、それがその手前の家の天下の一大事なんで……。』

『ハヽヽヽ手前の家の天下の一大事ツてやつがあるかいハヽヽヽ。』



『實はねえ先生、外の事でもないんですが、せつかくお蔭樣で開業した手前共の店が、どうも景氣が出ないんでございます。』

『ウム左樣ださうだな、町内の評判でも聞いてゐるが、毎晩遅くなるまで店先の箱にある饅頭が少しも減らないので、一體あれは仕舞に誰れが喰べるのだらう……なんて心配してゐたものがあつたよ。』

『イヤどうも恐れ入ります、何しても開業早々愚痴は云ひたくありませんが、まつたく不景氣で驚きました、そこで考へましたがねえ先生、やつぱり老舗の力といふものはなかなか根强いものでございます、筋向ふの店の彼のお供餅の看板がガツシリと喰込んでゐる爲に、殘念ながら新店では取附き惡いのでございます。』

『イヤそりや尤もだ、やつぱりどうしても老舗の饅頭の方が旨い樣だからな。』

『オヤ〳〵先生まで向ふへ買ひに行くんですかい、それぢや少し義理が惡いでせう。』

『義理が惡くツても旨い方がいゝからなハヽヽヽ。』

『そんな薄情な事を云はないで引立つて下さいよ先生……ねえ、實は手前の店でも何か素晴しい看板でも出して、向ふの老舗の繁昌を此方へ引寄せようと思ふんですが、そこで一ツ先生のお智惠を拜借したいと思ふんで……何か一度に人氣の立つ樣な看板を考へて下さいまし、ねえ先生……。』

『何だ看板の趣向を考へてくれといふのか、そんな事なら何でもない、ホンの頭腦の小抽斗から出る智惠で濟むことだ。』

『へえ頭腦に小抽斗がありますんで、人間もエラクなると簞笥の樣な頭腦になる

んでございますな。』

『ウム左樣だよ、我輩の頭腦などは先づ智惠の重ね簞笥といふものさ、くだらん奴の頭腦はホンの前桐のごまかし、三方は板目で穴だらけといふやつだハヽヽ。』

『なる程恐入りましたな……そこで先生の其の智惠の重ね簞笥の小抽斗から一ツ素晴しい所を出して頂きたいもので……。』

『ア、出してやらうとも、わけはないよ、お前の家の繁昌する樣な看板はと……ウムウムアル〳〵、斯うすりやアいゝ。』

『へえ〳〵何うすりやアいゝんで……。』

『向ふの老舖の菓子屋の看板はお供餅即ち鏡餅を出してゐるのだらう。』

『左樣で……。』

『そこで向ふの繁昌を引寄せようといふにはだ、白鼠の圖を造り物なりペンキ繪なりの看板にして屋根上に上げれば、必ずうまくゆく事請合だよ。』

『へゝえ白鼠の看板……そりや一體どういふわけなんで……。』

『說明をする迄もないぢやないか、彼の鏡餅は鼠がひくか噛るかにきまつてゐるものだ、つまり向ふの看板を此方へひいて來て噛つてしまへば、お前の店は忽ち繁昌しさうな筈ぢやないか、第一白鼠は大黒樣の家來だから緣喜のいゝ事も此上なしだ、どうだ申分のない趣向だらう。』



『イヤどうも恐入りました、なる程向ふがお供餅で此方が鼠なら繁昌を引寄せるわけだ、こりや有難い〳〵、ぢや先生の仰せに從つて早速其の看板をこしらへさせる事に致します。』

『ウム左樣するがよからう、もし亦其れでいけなければ、その位ゐの智惠は頭腦の小抽斗から幾つでも出て來るのだからなハヽヽヽ。』

二

喜んだ新店の菓子屋の亭主は、取敢ずペンキ塗の白鼠の看板を大急ぎで描せて、これを屋根上へ上げ、さらに智惠を絞つて、白鼠に因んだ大黒饅頭といふものを景氣をつけて賣出しました。

すると妙なもので其の看板が當つたのか、急に繁昌して來ましたので、自然向ふの老舖の方が不景氣になつて來るわけ、首尾よく新店の白鼠の看板が彼のお供餅の看板を喰つてしまつたといふ次第、さア左樣なると其の儘にして居られる筈のないのが老舖の方でございます。

『忰や、彼の駈出しの新店のやつが、一家

のお供餅の看板の面當に白鼠の看板を出して、不思議に繁昌しだしたが實に忌忌しいなア、イヤたゞ忌々しがつてばかり居たツて始まらないが……何とか景氣を取返す工風はないかなア。』

　と老舖の親父さんは躍氣となつて息子さんに相談をいたします、息子さんはチョイと頭腦の働く利口者で、

『其の事ですよ阿父さん、私も此の間から頻に際つて居るんです、それで何とか工風はないかといろ／＼考へてゐるんですが、ねえ阿父さん斯うしたらどうでせう。』

『ウムどうするんだ／＼。』

『家のお供餅の看板は隨分古く賣込んだものではありますが、彼の新店の鼠の爲にひかれる樣ではもういけませんから、今度は一ッ向ふを負かす樣な新規の看板にして景氣を取戻さうぢやありませんか。』

『そッそりやア結構だが、何からまい看板の趣向があるか。』

『えゝありますとも、向ふが鼠ですから猫の看板を出したら忽ち喰ひ殺してしまふわけでせう、それに向ふでは白鼠から思付いて大黒饅頭といふのを賣出して當た樣ですから、此方では猫の看板を出すと同時に、猫に小判といふ所で、小判型の饅頭を賣出して、向ふに一泡吹かせようぢやありませんか。』



『ウム／＼なる程、それは素敵な思附きだ、イヤなか／＼おまへは智惠者だな。』

　と親父さんすつかり喜んでしまひ、息子さん共々早速其の趣向に取懸り、お供餅の看板を招ぎ猫の看板に取替へて、小判型の饅頭を黄金饅頭として賣出しました。

　すると此れが亦思ひ通りに當りまして、鼠の看板を喰ひ倒してしまふ勢ひ、みごとに老舖の方へ景氣が戻つたのでございました。

　そこで新店の亭主は元の默阿彌の不景氣な顏をして、彼の智惠者の先生の許へやつて參りますと、

『先生々々。』

『何だい元氣のない聲を出して…………。』

『せつかくお智惠を拜借して、白鼠の看板で一時は景氣が附きましたが、やつぱり向ふにも荒神樣が附いてゐると見えて、お供餅の看板を猫に取替へられたので、とう／＼鼠はやられてしまツたかたちです。』

『ハ、、、、、。』

『笑ひごツちやアありませんよ、何とか

第二のお智惠を貸して下さいまし、その頭腦の小抽斗からもう一ツ出して頂きたいもので……。』

『やれ〳〵一々智惠を借りに來るとは抽斗の無さ過ぎる男だな、何も其の位ゐの事に我輩の所へ來るまでもないぢやないか、向ふが猫の看板を出したら、此方は虎の看板を出したらよからう。』

『なる程、猫に對して虎なら大丈夫だ、なアる程……。』

『其の位ゐのことで感心してゐりやア世話アない、第一虎の看板なら、客をとらまへるといふ縁喜にもなるだらう。』

『大きに左樣で……早速看板を直しませう、客をとらまへるは氣に入つたな、イヤ面白い〳〵。』

と新店の亭主はまた嬉しがつて、早速に看板を改めて虎の繪に描きかへました、と亦、氣分が變つて繁昌しかけて來ます、左樣なると老舗の方がまた落着いてはゐられないといふわけで、



『伜や、新店のやつ此方が猫の看板を上げたら今度は虎に直しやアがつた、どこまで喧嘩腰に出るんだらう、實に癪に障るなア。』

『ほんとうですね阿父さん、斯うなつたら意地です、此方でも亦看板を直して戰つてやらうぢやありませんか。』

『ウム戰ふのもいゝが、對手が虎ぢやアなか〳〵趣向が難かしからう。』

『なアにわけはありません、鬼の看板を出せばいゝでせう、第一鬼は虎の皮を引裂いて褌に締めてゐるくらゐですから……。』

『左樣だな、鬼の看板ならたしかに勝つな、よからう少しも早く直すことにしよう。』

と、そこで老舗の方では、又又鬼の看板に描きかへまして、さア來いといふ樣に屋上に鐵棒を突いて鬼が睨んでゐるといふ騷ぎ、これを見た新店の亭主は、

『オヤアまたやりやアがツたな。』

と、顏をしかめ、例の智惠者の許へ駈込んで、

『先生〳〵、小抽斗〳〵。』

三

『先生、今度は虎の皮を褌にした鬼の看板を出したんですよ。』

『なる程、虎褌の鬼を出したのは敵ながら天晴れだな。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『感心してゐちやいけませんよ先生、今度は何にしたらいゝか考へて下さいよ。』

『左樣さな、向ふが鬼を出したら桃太郎を出したらよからう。』

『オヽ左樣でしたな、桃太郎の鬼退治かうまい〳〵。』

と新店の亭主は、又々看板を描き直して日本一の桃太郎に改め、忽ち鬼を降參させようといふ息込みを見せました。

斯うなると買ひに行くお客の方でも、浮氣な群衆根生で、看板の變るたんびに興を以て其の方へ買ひに行きます、さアさア老舖の方では亦躍起とせざるを得ません。

『阿父さん實に殘念ですな。』

『ウームン實に、彼如すれば斯如するといふ、憎むべきやり方だな。』

『イヤ阿父さん、そりやお互ひの事ですが、たゞ負けるのは如何にも殘念です。』

『だが、日本一の桃太郎を出されては、鳥渡爭ひ樣がないな、桃太郎を負かすといふ事はあるまじき事だからな。』

『左樣ですな、桃太郎ぢや全く困りましたな。』

『と云つて此の儘に鬼をのつけては置かれない、何とか智惠を出さうウームン。』

『さア何にしたらいゝでせうな、日本一の桃太郎ぢやアどうもチヨイと片附け樣がないなア、ウームン。』

と老舖の親子は共に唸つて考へ込みましたが、やがて親父さんが漸つと思附いた樣に、

『どうだい悴、桃太郎を退治るといふ事はどう考へても無理だから、たゞ桃太郎より強さうに感じられる所で、鍾馗を看板にしたらどんなものだらう。』

『左樣ですな、強いことはたしかに桃太郎よりは強いでせうな、何しろ唐土で威張つてゐる上に亦日本の男兒の節句に來一劍を振廻して恐しい顏をして睨んでゐるんですから、日本限りの桃太郎よりたしかにいゝでせう。』

『第一其の節句の時に柏餅を賣出すにもいゝ看板だ、鍾馗にきめよう〳〵。』

『それに何ですよ阿父さん、鍾馗を出し



たらモウ向ふでも其れに上越す看板は出せますまいから、當分は桃太郎と鍾馗の睨み合で其の儘濟むことでせう。』

と、玆に今度は老舗の方は鍾馗の看板に直す事になりましたが、これを見た新店の桃太郎の方も、もう根が盡きたのか、それともいゝ智惠が出ないのか暫くは其の儘にして、賣物の方で勉強をして張合つて居ります、老舗の方ももちろん商賣には一生懸命ですから、賣物で張合ふ段になれば、これ亦なかく〳〵負ける筈がありません、双方しのぎをけづつて、どうやら負けず劣らず繁昌をして居ります。

時に折柄二月の暦の節分に相成ましたので、老舗も新店もこれ亦爭つて例の豆撒きをやります、老舗の方は其の息子さんが年男、新店の方では亭主自ら、時刻を計つて互ひに店口から向ひ合ふ樣にして、

『鬼はア外ツ。』

『鬼はア外ツ。』

と兩方で升の豆をパラ〳〵と打ながら呼びますと、兩方の店の緣の下から鬼が恐る〳〵顏を出して、同じ樣に曰く、

『向ふ前の屋根の上で、桃太郎と鍾馗が睨んでゐちやア、とても外へは出られない。』

＝完＝



北國便り

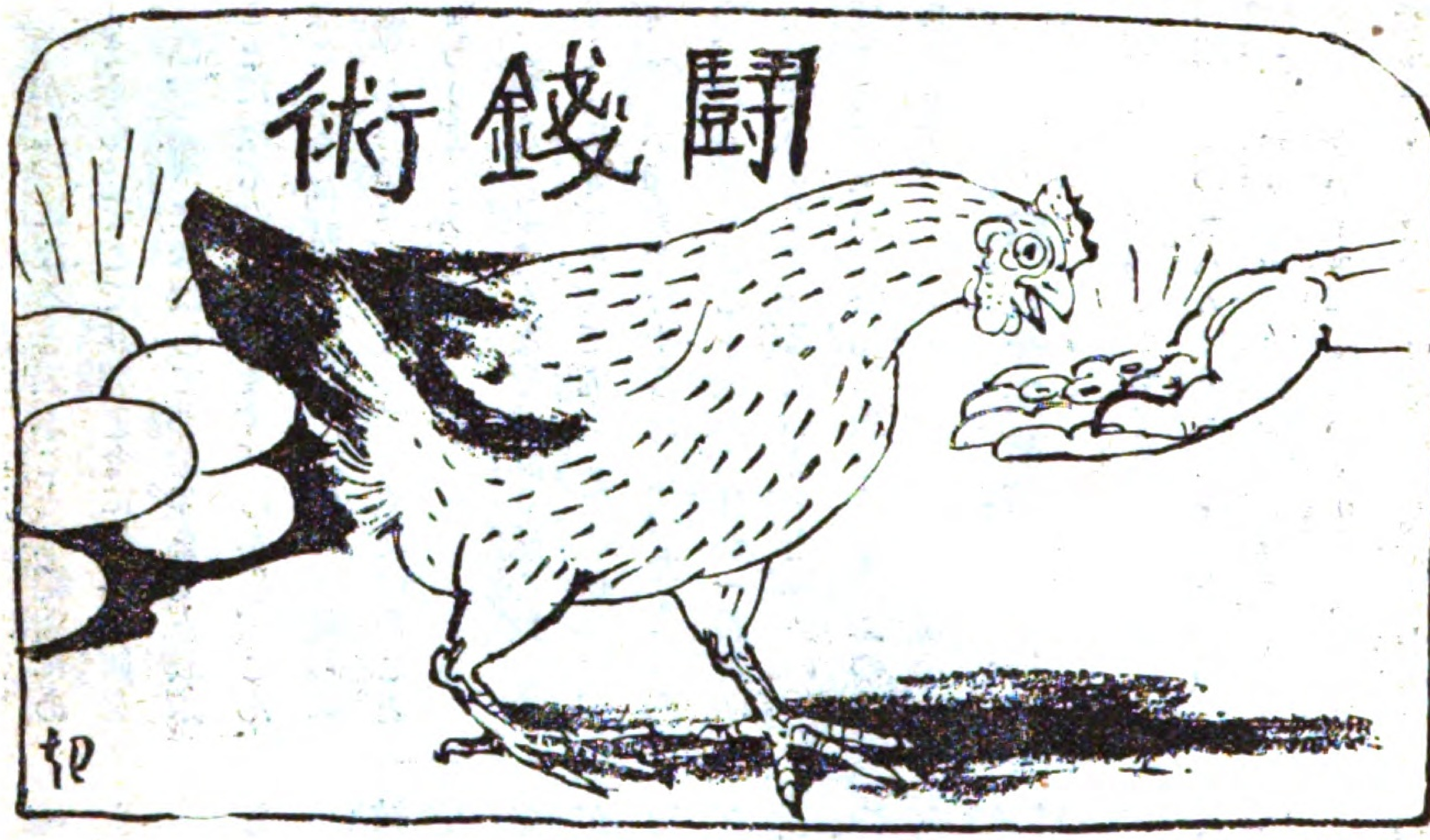
青森 伊藤生

雪深い北國の片田舍にもキングの行き渉らざるなく私の村にも多數の愛讀者が居ります。私もその一人で熱心なキング黨であります。

しかし、最近、この邊鄙な村にも雄辯熱の勃興して來たことは驚く程で、昨秋遂に雄辯研究會まで設立された有樣です。『雄辯なくして成功なし』と永井柳太郎先生が叫ばれてゐますが全くその通りであります。恁うした機運に刺戟されてキング黨も御社發行の雄辯を併讀するやうになりました。

私も新年號から雄辯の愛讀者になりましたが潑剌躍るやうな演說や論文、修養、傳記等の活記事が豐富に盛られてゐるので知らず識らず知識が得られ演說が上手になれるのを嬉しく思つてゐます。

記者附言 雄辯最近の發展は素晴しいもので新年號も二月號も發賣旬日を出でずして賣切れといふ盛況で三月號は又々大飛躍、目下大評判です。是非キングと御併讀を望みます。



身代を作る秘訣

谷孫六

△雛と卵の話

急霰の如き拍手が會場に起つた。モーニングの講演が了つたのである。昂奮に稍ゝほてる頬を押へながら、辯士室へ降りて來たモーニングは、

『やあ、すつかり脱線しちやつたよ、學生時代に五六回演つただけだから、妙に胸がドキ〳〵して、足が顫へて仕方がなかつた』

と、テレくささうに云つた。

『でも、却々熱辯だつたぜ』

と一人が云つた。

『どうだか、聽衆は面喰つたらうと思ふ』

『大分喝采されて居たぢやないか』

『駄目々々、腹案と喋舌ることとが、みんな違つてしまつたんだもの……』

『いま登壇つて居るのは誰だい』

『さあ……？　誰だらう、Sさんかな』

控へて居る五六人の辯士は、顔を見合して一齊に演壇の方へ耳を傾けた。底力のある錆びた聲が流れて來る。

——諸君、雛は卵を産みます。卵は雛となります。極めて平凡なことではありますが、雛が卵となり卵が雛となるところにデリケートな技巧が伏在して居るのであります。金が物に代り、物が金に代ると云ふ理法と同樣であります。試みに考へて下さい、雛は餌を食べます。そして卵を生みます。卵は餌を食

べぬ代りに、其儘にして置いたのでは、一つが二つになると云ふことは絶對にありません。そこで其卵を金に代へて餌を買ひ、雞に食はして卵を生ますと云ふことになるのであります。しかし、こんなことを何時迄繰返して居ると徒らに雞がお婆さんになつて行くだけのことでありませう。

雞のお婆さんなぞは餘り感心致しません（笑聲）そこで卵を雞に孵へし、其雞が卵を生むやうになつたところで、親雞を賣ると云ふ方法が一番賢明なのであります。私はいま金と物との増殖作用に就いてお話し致さうと思ふのであります。

△…夥しき失業者

『うまく話を持つて行くものだな』

辯士室の五六人は感心した。ところへ給仕が一枚の名刺を持つて來た。

『この方が一寸御目にかゝりたいさうです』

名ざしで來た名刺を受取つた先刻のモーニングは、何か考へて居たが、

『はゝあ、先刻の質問だな、應接室へ……』

と命じて、冷えた番茶を一ぱい飲み乾したまゝ出て行つた。

應接室には紋付の羽織を着た、學校の先生らしい男が待つて居た。モーニングの姿を見ると突然立上つて、

『あなたは先程御講演下さいましたO先生でございますか、甚だ不躾でございますが、一寸氣になることがございますので、お伺ひ致します』

と慇懃に腰を折つた。

『はあ、私がOです、どうも馴れませんもので、話が徹底しなかつたらうと思ひます、さあ、どうぞお掛け下さい』

何を指されるのか、少し不氣味だつた。紋付は鷹揚に腰を下ろして、悠然とゴールデンバットへ火を點けた。



『いや、結構でございました。私共にもよく判るやうなお話を頂きまして、大へん啓發された點が少くありません。只、御講演の中で…』

と、火皿へバットをなすりつけた。モーニングは卓子の上へ兩手を合掌さして、從容迫まらざるやうなもの丶、心臟はかなり狼狽して居た。紋付は判事のやうな落付きを示して居る。

『何か間違つたことでも申上げましたかしら』

『いや〳〵、決してさう云ふことではございません。只、失業者々々と云ふことを仰有たやうに思ひますが、あれはどう云ふ御論旨でございませう、御演題は

「身代を作るには」と云ふやうに拜聽しましたが、失業者の場合と、我々のやうに些やかながら俸給生活をして居るものとは、其出發點が違ふやうに考へられます。例へば其日の生活に差支へるものと、其日は安全であつて、後日の財産を建設しようとするものとでは、其方法に格段の相違がありはしないかと思ふのであります』

皮肉に取れば皮肉のやうでもある。しかし彼れの考へるところは、如何にして食ふべきか、と、如何にして貯めるかとの相違であることだけが問題であるらしい。モーニングは稍ゝ安心したやうに少し反り味になつた。

『失禮ですが、あなたには身代がおありですか』

『はい、些やかではございますが、妻と今年から小學校へ入る子と三人、嘗てどなたにも御迷惑をかけたことはございません』



『はゝあ、月給と生活とが巧みに平均されて居ると仰有るのですな』

『はい、家は借家でありますが、有難いことには、家賃一ヶ月滯つたことがございません、それで一ヶ月に一度や二度、活動寫眞位は見に行くだけの餘裕を持つて居ります』

『なるほど、立派な失業者ですな』

『えツ、失業者ではありません、簿記學校に奉職して居るものです』

『ふむ……？簿記學校と云ふと數學は詳しい譯ですな、ときに貯金は……？』

『さあ、それなんでございます。如何にして貯金すべきかと云ふことを伺ふ爲めに、この講演會へ參つたものでございます』

『ふむ……？立派な失業者ですな』

紋付は少し奮然とした。

『どうしてゞございますか』

『いや、お話し致しませう、それは成程あなたは失職者ではありません、けれども失業者です、私の申上げた失業者と云ふ意味は、其日の生活に足りるか足りぬかの收入で勞働して居るものは悉く失業者だと云ふのです。勞働は生活の手續きでありまして、生活ではありません。少なくも社會組織に迷惑をかける素質を有する人達は、生きて居ると云ふだけで、身代の所有者とは云はれません、其身代を作る道が、乃ち私の失業救濟と云ふ話になるのであります』

『はゝあ、さうですかな、しかし私は今

『二人行脚』（日下部四郎太氏著）
丹折五九郎、大馬鹿三太郎の二博士の彌次喜多日本見物記、滑稽諧謔の中に人情風俗を知り學理と趣味の無盡藏！
（定價三圓五十錢送料十四錢本社發行）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

日迄鐚一文でも他人様に御迷惑をかけた覺えはありません』

『そこです、私の云ふことを一通りお聞き下さい』

モーニングはハンケチをつまみ出して鼻の廻りを器用に拭いた。

△・・ダイヤの指環

『私はあなただけを立派な失業者だと云ふのではありません。世間にはあなたと同じやうな境遇で、大威張りをなさつて居られる人が多いやうに思ひます。それはみんな他人に迷惑をかける爲めに威張つて居るのと同様です、假りにあなたの場合を考へて見ませう、今こそ立派な生活人として、推しも推されもせぬ立場でありませうが、萬一あなたが死んだらどうします。如何にあなただからと云つて死なない譯には行きますまい。さうしたら、あなたは妻君と未完成の子供とを此世の中へ遺して行かれます。失業と失職を兼ねた二人のものはどうなるでせう。親類へ引取られゝば、親類の財産を減す蟲になります。引取り手がなければ、養老院なり養育院なりの御厄介です。さうすると私達が支拂つて居る税金の中からあなたの妻君や子供を扶養して行かねばなりません。此場合にもあなたは誰一人に迷惑をかけないと仰有れますか、恐らくはどんな恐縮をしても追つかぬことでせう』



『うむ……？　なるほど』

『そこで私は各人共に身代を作る必要を解くのであります。世の中にはかうした迷惑ばかりでなく、中には自動車をぶうぶう乗り廻して、他人に迷惑をかけて居る失業者が澤山あります。何とか會社の重役さんだと大きな顔をして居ても、拂込ました株金の値が下つてしまつたにも拘らず、配當なんかしなくとも一向平氣で、自分だけ贅澤にして居る失業者もある位ですから、あなたの場合はまだ宜い方です』

『いや、判りました。つまり生業を失つたものと云ふ譯でございますな』

『さうです、生業は國家的でなければなりません、國家に迷惑をかける生業は反則です』

『すると、其生業は如何にせばよろしきやと云ふことになりますな』

『それは身代を作ることです、そして後世に安心を與へると云ふことです』

『その身代は如何にせば作り得るやと云ふことになりますな』

『お金を儲けることとです』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『如何にせばお金が儲かるやと云ふことになりますな』
『先づ第一に働くことです』
『如何にして働くべきやと云ふことになりますな』
『それには一つの信念が必要でありります』
『如何にして信念を求むべきやと云ふことにはなりませんか』
紋付は禪問答のやうに詰め寄せて來る。會場の方では盛んに拍手の音が聞えて、例の錆びたSの聲が流れて來る。
――茲に一つの面白い例がございます、これは有名なモウパッサンの作品でありますから、御存知の方があるかも知れません、しかし私は此名作に依つて教へられる尊いものがあることを見逃す譯には參りません。
ある所に睦しい若夫婦がありました。ある日友人から夜會の招待狀を受けまして、主人は喜んで參加する返事を出しました。ところが妻君は何となく鬱ぎ込んでしまつたのです。どうしたことかと訊ねますと、私にはダイヤの指環がないと云ふのです。何もダイヤの指環で歩いて行く譯ではありませんから、差閊なささうなものでありますが、御婦人などと云ふものは、誠に不自由なものでありますす。(笑聲)主人公も尤もだと思ひました。今がいま三越へ行けばあるんでありますが、それを引換へる金を持合はして居りません。しばらくの間二人は考へた結果、お隣りの奥さんの指環を借りて行くことになりました。妻君の機嫌はすつかり直つてしまひ、いそいそとして二人は夜會へ招ばれて行きました――

△…千圓出來たら

『面白さうな話ですな』と紋付は聽き耳を引立てた。モーニングも首を曲げた。
――ところが茲に飛んだことが出來上りました。と云ふのは其晩、その妻君は借りて來た指環を何處かへ失くしてしまつたのです。さあ大變です。二人は眼を皿のやうにして探しましたが、どうして

廣告は最良のニュース!
萬の富より健康第一

恐る可き
蛔蟲を極めて簡單に
適確に驅除して極めて美
味の藥にして少しの
副作用無き價底廉の
蛔蟲驅除劑であります

世界一の蛔蟲驅除藥（專賣特許）
マクニン錠　・四〇　一・〇〇　一・八〇　九・三〇
蟲下し菓子　マクニンゼリ　・二〇　一・〇〇　・五〇　二・〇〇
大阪道修町二
藤澤友吉商店

も判りません。と云つてお隣りの奥さんへは失くなりましたと云つては行かれず、とう／＼二人協議の結果借金をして原型と同じやうな指環を買求め、お隣へは返しました。それからの二人と云ふものは大へんです、妻君は女中を廢めて眞つ黑になつて働きました。主人は呑みたい酒も呑まずに働きました。さうして漸く借金を拂つてしまひ、やつと一ト安心したのです。

さうなると人間と云ふものは、隱し事は出來ないもの、ある日お隣の家へ參りまして、

『ほんたうに今だから申上げますが、先達奥樣の指環を拜借して、夜會へ參りましたもの々、あの指環をどうしたはずみか失くしてしまつたのです。お詫びをするにも金目なもの、とう／＼新らしいのを買つてお返ししたんでございますよ』

と、一切を告白いたしました。するとお隣の奥さんはニコ／＼笑ひながら、金庫の所へ立つて行きました。そして小抽斗の中から例の指環を持つて來まして



『これでございましたわね、それではあなたに差上げませう』

と云ふのです、驚いたのは妻君です、何と云ふ氣前の宜い奥さんだらうと思つたのです。

『飛んでもない話、そんな金目のものを頂戴することは出來ません』

○永井柳太郎氏大演說集　第一集、第二集、定價各册一圓五十錢、送料第一集八錢、第二集十二錢（東京本鄕大日本雄辯會講談社發行振替東京三九三〇番）

と云ひますと、奥さんは尙も笑ひながら、

『ようございますよ、取つて置きなさい、これでも千圓位したでせう、お持ちなさいよ』

『だつて頂く譯がないんですもの』

『いや、あるんです、先達あなたに貸して上げた指環は硝子のダイヤだつたんです、三十錢も出せば買へるんですもの、こんな千圓もするダイヤを頂く理由がありません』

と云ふのです、どうです諸君、此若夫婦は千圓のダイヤを一つ何時の間にか稼ぎ出して了つたのです――拍手起る――

『うまい話ですな』と紋付はモーニングの顏へ笑ひかけた。モーニングは膝を乘り出して輕い咳を一つした。

『あれが信念であります。借りたダイヤを返へす心掛けさへ常に持たれたら、必ず金は出來て來るに相違ありません、つ

まり我々はどんな場合でも借金があると云ふ考へを持つことです。借金を返へせば、返しただけのものは身代となつて殘る理窟です。其身代は永久不滅のものとしなければなりません、妻も子も其身代に依つて他人樣へ迷惑をかけないやうにしなければなりません』

『いや、よく判りました。ところで働く信念だけは只今の指環で納得しましたが、お金を儲けると云ふ點が未だ判りませんが……？』

『なるほど、乃ち千圓貯つたらそれをどうするかと云ふことですな』

『さうです、それも先刻雛の話を聞きましたので、金と物とが代はると云ふ理法だけは會得して居ります。千圓の金を雛に例へて、これに幾つの卵を生ませるかと云ふうまい方法は無いものでせうか』

紋付はだん／＼慾が出て來た。尤もそれは紋付ばかりではない、誰でも聞きたがることである、けれどもそれを云ひ現はすには他種多樣で、說明に苦しむところである。モーニングは暫く考へて居たが、輕くうなづいて、

『あります、それは何でもありません』

と答へた。紋付はこの無雜作な返事に目を丸くした。モーニングは椅子から立つて、

『あのSさんの話を聞かうではありませんか、あの人が屹度話す筈です』

と紋付を促した。紋付はあとからすごすご従いて行つた。

△…金儲けの知識

二人は聽衆の中に交つて腰を下ろした。

――諸君、私が切に希望するものは、諸君が自己の財産を作り上げることに依つて、より幸福な生活を築き上げられんことであります。人間は日々、もしくは月々に得る金で生活を支へるだけでは心細いものです、それ以外に産を殖やさねばならぬ、それに依つて初めて意義ある生業を營むことになるのであります。

『愈ゝ本論に入つて來ましたな』とモーニングは紋付へ云つた。紋付は膝に手を置いて謹聽した。

――諸君、それには孰れの道を選ぶか、それは云ふ迄もなく投資であります。投資と云へば、株券や債券を聯想されますが、先づ一番早い方法は何と云つても有價證券の知識を得ることであります。私は最初に雛の話を致しました。吾人の職業は一つの天職として忠實であらねばなりません、しかして雛に卵と云ふ福運を開拓するのは、身代を作るものゝ爲さねばならぬ仕事の一つであるとも云ひ得るのであります。

さて有價證券に關する充分の知識を具へたものが、必ずしも利殖に成功すると

やせる
元陸軍一等軍醫米國醫學博士吉尾先生 發見創製
男女兼用 悲觀無用
からだにさわらずほどよくやせる

ハガキで申込ひみつ新療法無代進呈
東京市大久保四百六十四番地 東京仁愛藥院
振替東京五五八五八番

は限りません。古い諺にもある通り「靴屋の子供が裸足で歩く」世の中であります。いくら上手な醫者でも、やはり平均年齢、もしくはそれ以下で死ぬ事があります。醫者の知識は無くとも、特別に強健な軀を受繼ぎ、不知不識の中に養生法に叶ふ生活を送れるやうな職業をもつか、或は又養生法をよく辨へて實行したものは、却つて養生法を教へた醫者よりも永生きするものであります。

各人の生命の長い短いは、養生法の知識のある無しで定まるものではありません。それは寧ろ其人の生活が、攝生法に依つて存する自然法則に合致するか、しないかに依つて定まるのである。勿論攝生活を知つて居れば、それに從ふに越したことはありません。

有價證券への投資も其通り、それに關する準備知識の有無だけで、成功不成功が定まるものではありませんが、知識のあることは無いよりも成功の可能性があると云ひ得ます。



多くの投資者を見る時、可なり投資に關する造詣の深い人が、普通の收入だけしか得られないのに、然らざるものが却つて遙かに贅澤な生活を送り、莫大な遺産を残すことがあります。でありますから、有價證券の研究を多く積むことが、必ずしも蓄財に益するものとは斷言出來ないのであります。

或る人は莫大な有價證券を有して居て、外から見ると如何にも卓越した投資家の如く見えるが、その實親譲りの財産を受け繼いだに過ぎないものもあります。

また或る人は有價證券の賣買で相當の損失を蒙つても、一方に事業の經營その他のことから澤山の儲けがあり、一向其損失に影響のないものもあります。斯樣な人は、一見金儲けがうまい人のやうに思はれるものであります。

更に或る人は偶然に賣買の方針と、市場の形勢とが一致して、思ひがけなく多額の利益を收めた際に、それが恰度其人の頭のよさによつて儲けられた當然の結果と信じられ易い場合があります。

△…投資の四大要素

――私の學校時代の友人が近頃四十三歳で死にましたが、其後には小額の生命保險證券と、六千圓ばかりの有價證券と、その他少しばかりの財産がありました。遺産と云ふ點から見れば甚だ少ないものですが、しかし此男の生涯は金錢上の成功を目的としたものでは有りません

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

でした。彼は死ぬ十六年前に學校を出て、ある師範學校の教員となり臺灣へ行つたのです。最初の二年間は零細な貯金をして學資の負債を返へしました、その後十四年間に於て、一年に平均二百圓を貯金してそれを投資しました。そして配當や利札も更に投資しました。もし彼が此金を貯蓄銀行へ預金して置いたならば、彼が實際に得た五千九百圓の代りに、三千六百圓程を貯めたに過ぎません。

彼の殘した財産は、その金額に於いて甚だ輕少なものでありますが、年年の收入の割合から見ると、四歩足らずの利子に對して一割一歩に達して居ると云ふ點で大成功と云はねばなりません。

しかして彼は自分の經濟や、理想から、成功せんとするのは「四つの要素」を忘れてはならないと、其財産に書き添へて置きました。



一、吾等は金が働く程に貯まるまで働く。貯つた金は猶豫なく働かせよ、鼠等は鼠の子を數へるだけではない。

一、利子とは金の使用に對して拂はれる金である。他人が吾々の金を使つて利子を拂ひ、そして儲けて行くのなら、吾々も又之れを使つて彼等の樣な利益が得られると云ふことを知らなければならない。

一、將來に對する最善の準備は現在をよく見る事だ。利廻りだけを勘定して株を買ふ人は、將來元金に傷がつくと云ふことに氣がつかない、薄い利廻りの株は事業的に元金を殖して行くものと知れ。

一、千圓の金があれば先づ二百圓だけを與へよ、海にはもつと大きな魚が居る筈だ、あとの八百圓は其機會が來た時に、勇氣と膽力で釣り上げる餌にせよ。

――諸君、此人は投資家として卓越せる才能の持主ではありません、しかし乍ら、斯くの如き信念を其經驗の上から打算したのであります。勿論多くの人達について考へるならば、餘りに有り觸れた條件であるかも知れません、之れ等の方法や細目や、實例は別の機會に讓りますが、彼の有名なモルガンの鐵則として、貯金が出來たら、先づ其半分で經驗を買ふ事だ、それが身代を作る唯一の秘訣であると云ふのに思ひ合して、彼の學校教員の殘された四つの要件を含味する必要があると思ひます。――

『うまいッ』

と思はず紋付は膝を叩いた。（終）

諧謔小説『次男坊』――は、おなじみの佐々木邦氏近來の傑作。誰でも熱狂せずに居られぬ面白い小說。
（定價貳圓　送料十二錢　大日本雄辯會講談社發行）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

奇人變人名物男

博士號十三の萬年學生

米國コロムビア大學の名物男で『萬年學生』又は『ナンデモ博士』の綽名で通つた、ウイリアム・ケンプ君は昨年の秋、みんなに惜しまれ乍ら死んだ。七十八歳で。

彼が抑ゝ大學生活を始めたのは十八歳のときであつた。それから六十年間、ズーツと大學生で通して來たといふ變り者。その間に授けられた博士の肩書が實に十三。コロムビア大學ではもうこれ以上彼に與へる博士號も肩書もなくなつてしまつたが、彼れは依然として孫のやうな若い學生連中の間にまじつて白髪頭をふり乍ら、倅みたいな教授の講義を、熱心に傾聽してゐた。

どうして一生大學生で暮らしたか。その動機も亦振つてゐる。

彼はその當初、そんなに篤學の士ではなかつたが、金持の親戚が彼に勉學を奨勵し、彼が大學にある間は幾年でも年額五千圓づつ學費を支給する事を約束した。そこでケンプ君大いに發奮したといふわけ。

それにしても死ぬ迄學生で押通すなどといふ事は普通人では出來ない話である。



三寸釘を食ふ不思議な男

コサツク生れのペトリといふ男はソヴエットロシヤの名物男である。それは彼が好んでウオツカを飲み且つ釘をくらふからである。

ウオツカを飲むことに不思議はないが、釘を食ふに到つては正に人間離れのした惡趣味、途方もないことといはねばならない。しかも彼は必ずウオツカと釘とを同時に食するのである。彼の見解に從ふとアルコール分の強い飲料は、金屬を消化するといふ。ところがここに政府にとつて困つた事が起つた。それはつい二年前ペトリ君腹痛を訴へてモスクヴの國立病院にやつて來たことである。

エツキス光線で檢べて見ると、彼の胃腸の中に恐しい隆起物があつた。そこでロシヤ切つての名醫四人がかりで腹部を立わつて見ると驚くべし、呑みも呑んだり一寸から三四寸位までの釘が百十五本、その目方が九十匁。無論彼は一錢の手術料をも仕拂はずに立ち去つたのである。

するとこれに味を仕込んだペトリは一年ばかり經つてまたもや病院にやつて來た。手術の結果今度は百二十匁の釘が現れた。流石にあきれた病院長は大いに將來を戒しめて歸宅せしめたところ最近また〳〵病院に來て手術を哀願する始末。

そこでやむを得ず三度目の手術をして今度は國立精神病院に送つたが、その折の釘は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

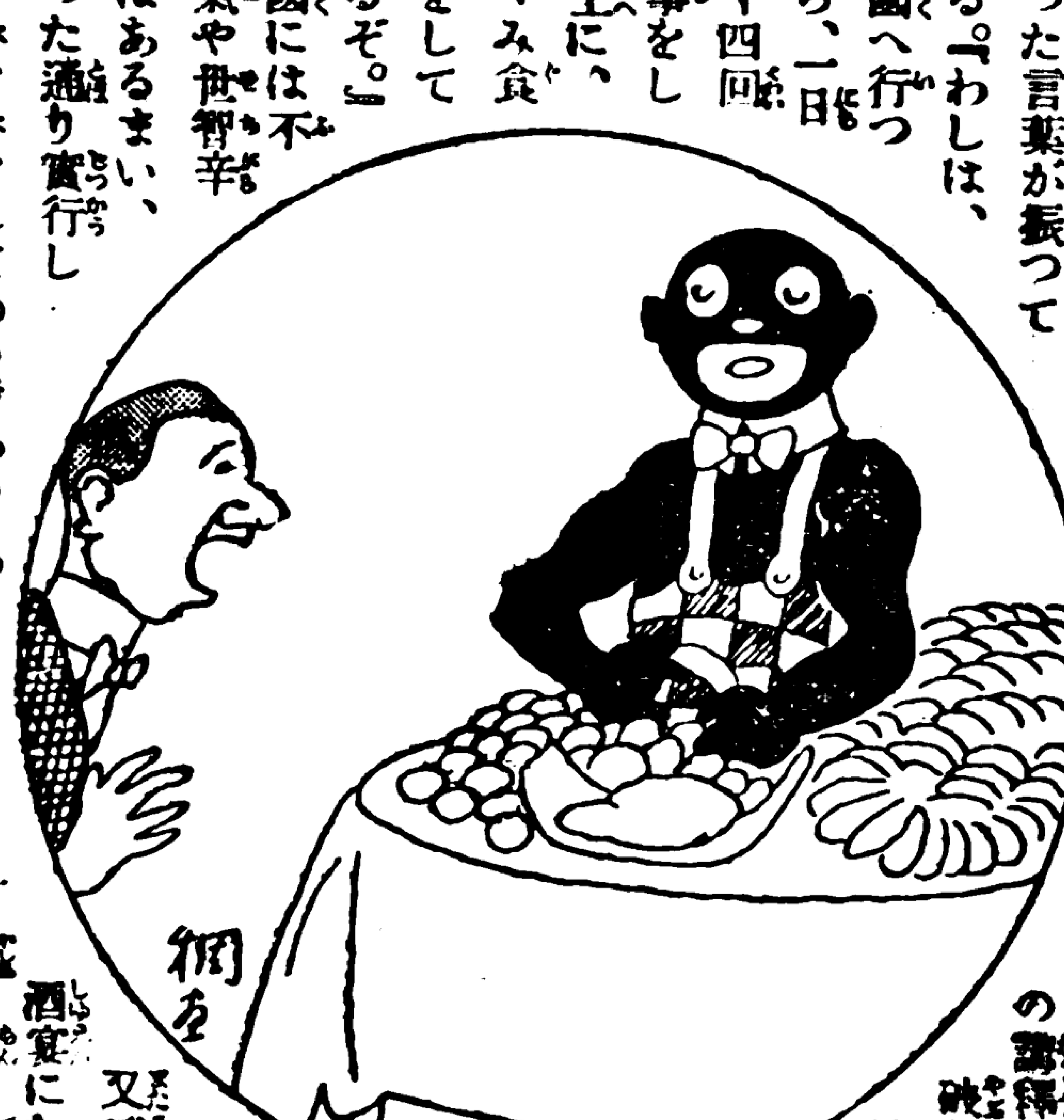
出たも出たり百八十匁。これは一九二九年三月六日のことであるからまだ生新しい事實である。

世界一の大喰ひレコード

米國アーカンサス・シチーのジョン・ホルトンといふ黒人、大喰ひなら世界一だと自任してゐるだけあつて大したもの。まづ、大好きなのはバナナで、三百本を皮ごとペロリと喰つたのを始め、雞卵は一度に百二十から百五十は平氣の平左。

或る時『十二本の玉蜀黍を芯ぐるみ喰つたら懸賞金をやる』とからかはれたら『よし』と即座にその倍の二十四本平げて見せた。しかもこの男の大喰は、呑む方も大したもので、食事中四十八罐の曹達水を空にしたレコードもある。

これ程の豪傑ホルトンもたつた一度へタ張つた事があるといふのは、何でも食ふと威張つたばつかりに、『ではセメントを喰へるか』『喰ふとも』の賭になり、結局セメントをしこたま喰つた上に水をどつさり呑んだら、流石に一週間ばかり寝込んださうだ。この程、惜い事にあの世界一大喰のレコード・ホルダーは、何が病氣ともなく死んだが、その前に云つた言葉が振つて居る。『わしは、天國へ行つたら、一日二十四回食事をした上に、ツマみ食ひをしてやるぞ。』天國には不景氣や世智辛さはあるまい、云つた通り實行して、ホクホクしてゐるであらう。



小笠原侯を煙にまいた儒仙

寛政から文政にかけて江戸の大儒として鳴つた亀田鵬斎は一種變つた人であつたが、其變態的行が一つも故意とするので無く、自然の發露に外ならなかつたので、その不羈放縱無頓着不識風を別に悪く言ふ者も無かつた。

一日肥後の大守細川侯の邸へ出向いて講釈をした時、鵬斎の衣服がボロ〳〵に破れて見苦しいにも程があつたので、侯から新しい衣服一着と金子千疋を下された。鵬斎有難く頂戴し、歸りしなに今迄の古着をよれよれの帯で結んで宜しき處へ棄てて下さいと云ひ、棄賃に金百疋出し、それから歸路に幾軒もある馴染の酒屋（鵬斎は酒好であつた）へ寄つては百疋づつ置いて歸宅した。頂戴の千疋は是で大方亡くなつた。

又或時佐竹侯に喚ばれ、講釈が済んで酒宴になり、お辭儀無しに飲いて泥酔し、邸の門を出ると直に名代の大溝に墜ちて翌朝迄眠つて居た。早起の門番が引揚げようにも手が着けられぬ騒ぎである。

又或日懇意の客が鵬斎を尋ねると、今日は宅で詩經の講義をするから聴いて行くがよいとある。其うちに本所の小笠原侯や榊本が五六人見えて講釈が始つた。

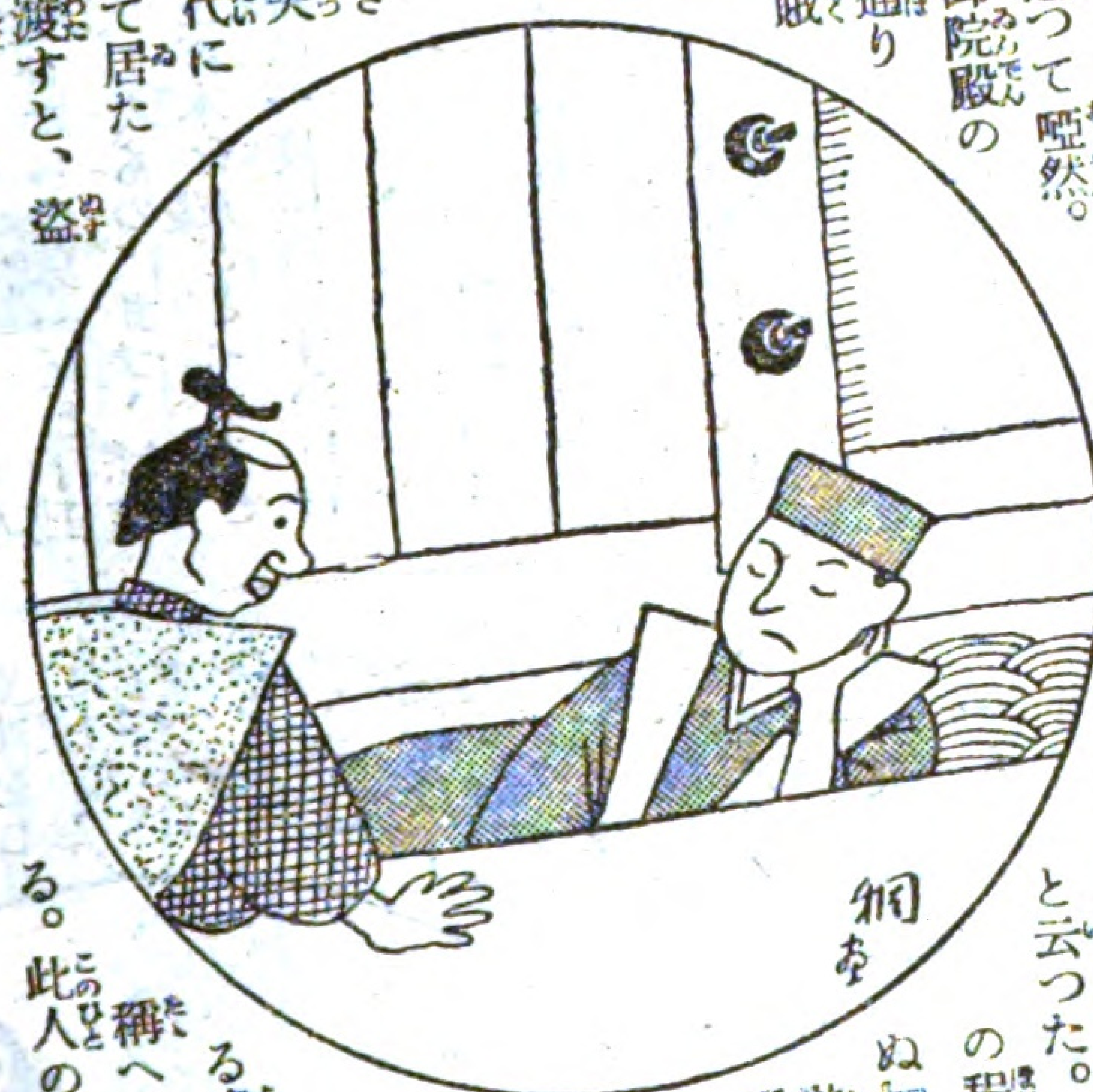
少時すると變な男が來て女筆の手紙を差出した。それは新吉原からの使で遊女の呼出し

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

狀であつた。鵬齋は手に取つて懷中に押込み、急に講釋を止めて歷々の聽衆に向ひ『拙者は是から吉原へ參ります。皆樣それにて寬りと休息なされ』と云つて出て行く。小笠原侯等は鵬齋の後影を見送つて啞然。

一夜の事鵬齋が上野御院殿の邊を通りかかると、人通りの無いのを見澄した盜賊が木蔭から現れて酒代を强要つた。『俺は一文も持つて居ない。貴樣ば人を見損つた』と答へて半町程行過ぎてから立戾り、『俺は失念した。此羽織を酒代に遣らう』と云つて着て居た羅紗の羽織を脫いで渡すと、盜人は恐縮して逃げて了つた。

或年の暮に書畫屋らしい男が歲暮金二千疋を持つて來た。鵬齋『忝い』と云つた許りで手にも取らず、何か外の話をし始めた。其處へ、さる處に奉公してゐた男が來て弱り切つた調子で云ふには、『私三兩の金が無いと此歲の瀨が越せませぬ。それで江戶を出て上方へ行かうと思ひますので、わざとお暇乞に上りました』と云ふ。其時『幸ひ爰に金が在る』と答へて前の男の持つて來た金包を始めて手に取揚げて中を算へ、『五兩ある。之を其方に遣らう。すれば江戶に居られるであらう。餘りの二兩は正月の酒代にするさ』と云つた。男は低頭平身『御恩の程は決して忘れませぬ』と繰返し〳〵言つて辭し去つた。初に二千疋を贈つた町人がまだ居る前での事である。其者はさぞ鵬齋の大腹中に驚いたであらう。



此う云ふ變な人である處から、時の人は鵬齋を稱へて儒仙と呼んださうである。此人の書も畫も頗る風變りである。

アメリカの物臭太郎

西曆一千八百四十九年、アメリカの北部に大饑饉があつた。ここにスフインクといはれる橫着者があつたが、徹底した物臭太郎で、働くことは絕對に嫌ひ、日頃は乞食とも浮浪者ともつかず、州の公費や施し物で生きてゐたが、饑饉になると州でもこんな物臭太郎を養つてはおけないので、いろ〳〵協議の末生きながら埋葬することにした。本人は大喜びで承知したので、棺桶へ入れて、墓地へかつぎ込んだ。途中、老人があつて、『もし〳〵誰の葬です？』ときいた。

『例のスフインクです。』

『おや、あの男は死にましたか？』

『いや、死んだのではありません。本人と州會の相談の上生き埋めにするのです。』

『なるほどね、この饑饉では、働いてゐるものさへ食へないですからそれもいいでせうが、それでも文明國の體面といふこともありますから、私が米を五升ばかり寄附しませう。』

すると棺の中からスフインクの聲がした。

『ぢいさん、舂いた米かい？』

『いや玄米だ、舂くくらゐ舂いてもらはう。』

すると、棺中のスフインクがうるささうにこたへた。『玄米ならごめんだ。さあ、早く墓地へやつてくれ——愚にもつかぬ暇をとらせやがる。』

眞言宗豐山派管長大僧正加藤精神猊下推奬

弘法大師

渡邊默禪
本田穆堂畫


弘法大師御畫像

玄海灘の大暴風

『やれ、はや、恐ろしいことぢや。おうおう、あの浪の勢ひは！』

『水主ども大事ないか。大丈夫かッ。』

遣唐正使の藤原葛野麿と副使の石川道益とは、互ひに苦しげな聲を懸け合ひました。二人とも顏色は眞蒼。船床の柱に左右からひしとしがみついてゐるのでした。

が、答へる者もありません。

まだ午の刻だといふのに、視界はまつたく幽冥の色にぬりつぶされて、凄じい雷鳴電光、おそらく秒速二十五米突もあつたらうと想像される颶に、錢よりも大きい白雹をまじへた暴風。それが海の鳴動ともつれ合つて、百門の砲をつるべ發つやうな混沌たる怪響を、天上地下に震はせてゐるのは、恐ろしい地獄の行進曲でした。

船は激しい上下動を邪慳にくりかへしてゐます。船員をのぞいた五十人からの乘客は、一人として船暈を感ぜぬものはな

く、肚にあるだけの物を嘔きつくして、へと〳〵に萎えはてた體を、地震時の西瓜のやうに顚がして、そつちへごろ〳〵、こつちにひよろ〳〵。偃打廻つて呻いてゐる者も少くはありません。醉はない舟長や水夫だちも、歩きだせば忽ちに足をすくはれ、板の上に卒倒するため、帆綱に腰を縛りつけて閼伽(水の梵語)を汲出し、篷を張り、必死の活動をつゞけるのであるが、怒れる自然の暴威と鬪ふには、あまりに慘めな抵抗力でありました。

時は桓武天皇の御宇、延暦二十三年——西暦八百四年——の五月。場所は東經百三十度、北緯三十四度間の洋上、玄海灘の烏帽子島附近。

神代の埴土舟や葦舟から諸手舟に進歩した日本の造船術は、新羅から舟大工を貢ぐやうになつて、はじめて朝鮮式の造船法が應用され、支那にゆく調法な交通機關になりました。遣唐使といふのは支那の文化を輸入する大切な役目で、推古天皇の世に小野妹子が渡唐したのを口切に、二百年間十數回も往復をかさねてゐます。藤原葛野麿等もやはりそれで、一行百餘人、肥前の松浦を出帆して玄海灘に入ると間もなく、暴風をくつて遭難したのであります。由來遣唐使の船は、日本でも一番堅牢なもの、長さ四十尺以上の巨體ではあるが、何分船底が扁つたく、展帆法も幼稚だつたので、是までとてもしば〳〵沈沒したり漂流したりする、無事に支那に着いたら不思議とされるほどの、危險なシロモノだつたのです。

『おう、空海が居る。僧都、僧都！』

葛野麿はばたりと前にのめつた身を起した時に、ひよいと目を擧げて、大きな聲で呼びかけました。ちやうど二間程離れた板子の上に圓座を敷き、それに結跏の姿勢できちんと坐り込んだ一人の僧があつたのでした。

『これ〳〵、空海。そ、そちは多年の修念によつて、一切經法の大義を成就した行者ぢや。法力は廣大なものであらう。我等を、この舟を、そ、そ、その法力で救ふことはできぬのか、これ空海。』

葛野麿は腸を絞るやうな聲をはずませました。が、僧は振向いても見ませんと、副使の道益は風に冠の纓を

推奬の辭

大僧正 加藤精神

國、宗教なければ道興らず、人、信仰なければ心全からず、まことに宗教は國の生命、信仰は人の靈魂である。

方今、世上を觀るに、生活、苦多くして人に安心の相なく、文化、光亂れて國に重厚の風を闕ぐ。末法濁惡の歎、聲漸く高く、悍人聖者を待つ、大旱に雲霓を望むより急なるものあるを覺える。

時なるかな、雜誌キングその滔天の勢力を傾けて、我が宗祖弘法大師の偉績を傳へ、先づ以て國民覺醒の運動を開く、正に病に應じて藥を與ふるものと謂つてよい。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ばた〳〵と吹きあふられながら、物狂はしい姿で叫びました。

『空海どの。佛力の奇異をあらはすのは、か、か、箇樣の時でござるぞ。何とかいたして一船百餘人の命を救ひくれられい。これッ、空海どの。』

が、僧は寂然として瞬き一つくれません。

『御坊さまッ。お願ひッ！お助けくだされませッ！』

途端に僧の目の前に、ひよろ〳〵ッと顛がつて來た三人の船子が悲痛な聲。

『お慈悲でござります。この船が覆らぬやう、さ、早く。八大龍王への祈を願ひまする。』

が、僧は無感覺です。人々の叫喚も、風雨の怒號も、雷と濤のはためきも、さつぱり耳に入らぬまでに、魂はもううつろになつてゐるかのやうに見えました。目からほのかな光が洩れてはゐるが、何を見詰めるのか焦點もない視線が、夢みるやうにうつとりと漂つてゐます。双の手を胸の上に合せて、無名指と中指とを内に叉き、小指は屈めて大指の尖につけ、笑顔といふ形に結んだのが、これぞ眞言金剛手の根本印であります。

惟ふに、弘法大師は不世出の英才、詩文に、書道に、彫刻に、往くとして佳ならざるなく、かの「以呂波」歌の我が國字の源を作し、かの綜藝種智院の庶民教育の基を啓けるが如き、總べて後世の規範となるもの多きは、既に天下周知の處、その金剛不壊の大信念は、眞言の、一宗の開祖となり、上は宮闕の高きより、下は庶民の賤きに至るまで、皆之を佛陀の慈悲に誘引教導し、更に殖産興業の道を奬むるなど、一生を救世護國の誓願に貫きたまふ。定に鑽仰の佛子である。

渡邊默禪師子、寫す處の大師傳を閲するに、平易にして興味深く、明快にして理會し易く、淡中滋味あり、而も卑俗に墮せず大衆教化の讀本としてよくその體を得たるを喜ぶ。希くはこれによつて醇風良俗、立處に到らんことを。敢へて推奬する所以である。

噴霧のやうに斜めにさアさツとそゝぎかける雨は、剃りたてた天窓の頂から、巾廣の耳を傳はつて、隆い鼻の左右に二行の雫を流し、滾々として胸を浸し、腕を奔り、銃彈のやうな白泡は、ぴつし〳〵と顔を打ち、頬をたゝき、膝の上に跳ねかへり、ずぶ濡れになつた褐色の法衣の袖は、烈風にあふられてはた〳〵と鳴るのであるが、ぴくとも動きません。

妙なことに、小肥りに引緊つた五體は、さながら千貫の銅像を船底に釘附けにしたやうに、板へぴたと吸ひついて、船が左右にはげしく傾斜すれば、彼もそのまゝ同じ角度に傾き、大渦卷のなかに呑まれて急轉すれば、彼も同じ速さで、木端のやうにくる〳〵と旋回運動をしてゐるのでした。

白刃、電火、怪濤

葛野麿は勃然として眼を釣上げました。

『やおれ、空海。そちは三論の奧義を究め一切經法の文義を會得し、不可思議の神通力ありといはれながら、この浪風には

施すべき法力も持たぬのか。聞及ぶ伊豆桂谷山寺の奇瑞、大般若魔事品を虚空に書きとゞめ、魔縁の者を化導したといふ噂は、ありや人を欺く空言であつたのか。僞りでなくば、今まのあたりに修法の奇特を見せい。さ、如何ぢや。』

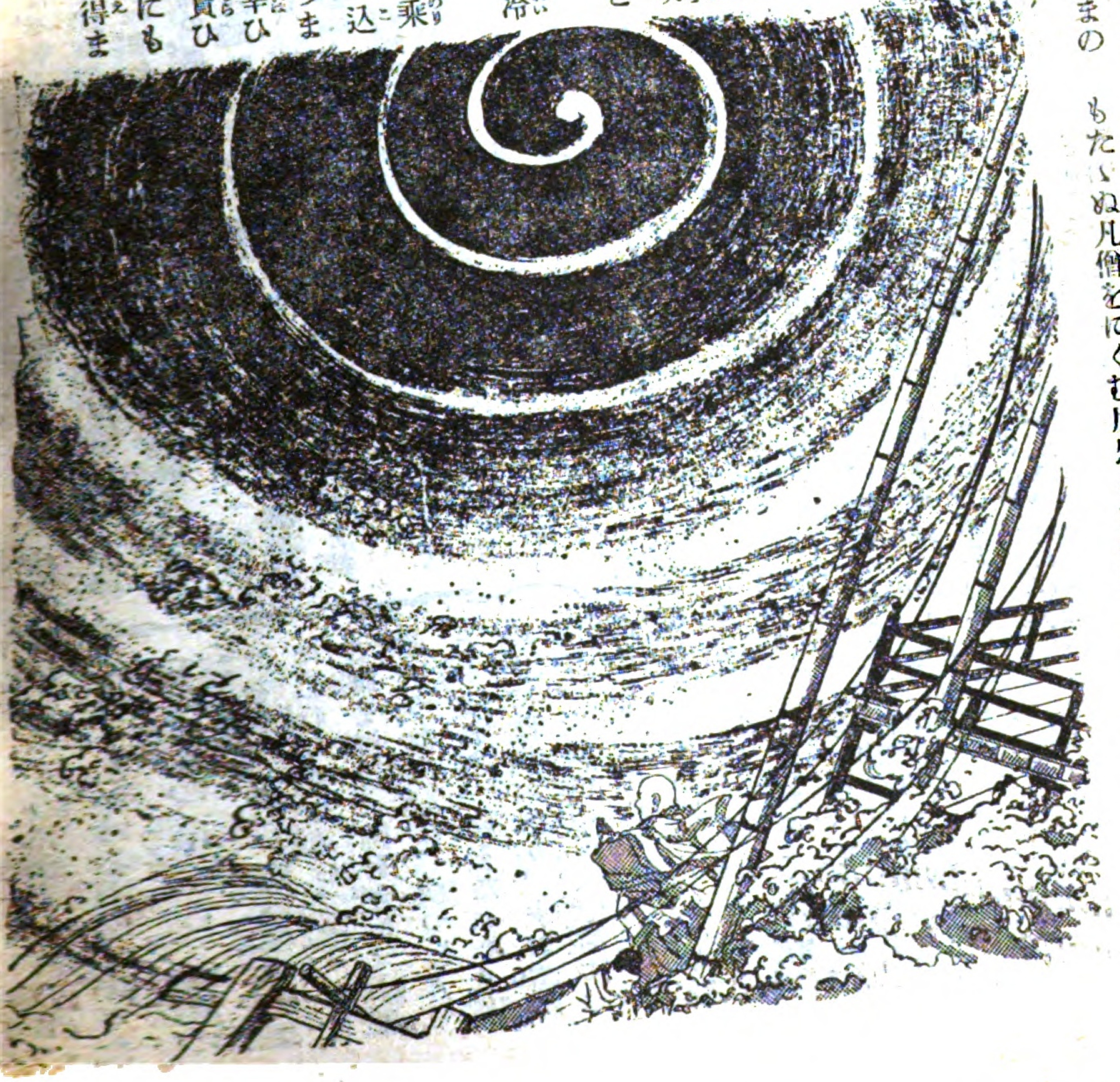
絶望から湧く怒の聲は激しい。と、その尾について舟人だちは罵り立てました。

『何の。この僞行者にそれほどの法驗がござりませう。こりや賣僧でござりまする。』

『賣僧。む。よく申した。いかさま賣僧に紛れあるまい。嘗ては阿波大瀧の峰に上つて修行の時、虚空藏菩薩の大劍飛び來つたとやら、また土佐室戸の崎に於て、明星口に入つたとやらは、皆是れ夢。狂人の夢であつたと見えるわ。ハツハツハツ。』

副使の道益は蒼ざめた顏をゆるがして、にくさげな冷笑を浴びせかけました。

『お二方さまに申上げまする。總じて難船の時には、乘合のうちから誰ぞひとり、人身御供となつて海に飛込み、八大龍王樣にお願ひ申しまするると、立所に浪しづまり風も凪ぎ、難儀をのがれるものにござりまする。幸ひのこと、誰彼と申さうより此の御坊。生贄に立つて貰ひましたなら、得道淨身の御出家のこと、凡夫の十人にもまして龍王の神慮にも叶ひ、必ず感應あること、心得まする。是非におゆるし下さりませ。』



舟長はじめ水主だちが口をそろへて言ひました。切端つまつた困惑に、舟乘社會の心理を支配する大きな迷信と、何の役にもたゝぬ凡僧をにくむ反感とが結びついて、生きながら海に葬

らうとしたのであります。

『む。それは。』

葛野麿はためらひました。事は頗る重大です。と、道益が憤然として、

『この期に及んで何の御猶豫。一人の命を棄てゝ百餘人の命を救ふなら、かほど洪大な功徳はござるまい。道のためには不惜身命、報佛の一念、大智の海に往生することそ、空海自身の本願でがなござらう。おゆるしめされ。』

と呼はりました。葛野麿は是非なげにうなづいて、

『さらば、心まかせにいたせ。』

といふ聲の口を離れたか離れぬに、ついと躍りかゝつた三人の水主。ぐちや／＼になつた僧の肩へむんずと臂をかけた時、同船した留學生の橘逸勢、劍にすがつてやつと重心をさゝへ、舟床によろばひ出でながら大音に、

『やア無禮者、其處退けッ。苟くも帝の聖旨を奉じ、佛法の奥義を究めんため唐土に渡る聖者を、水主の分際として何とするのぢや。愚人輩の言にそゝのかされて、叨りに命を斷たうとする使節の計ひも僣上の沙汰、上に對して恐れ多いとは思し召さぬかッ。舟覆へらば共に溺れて死ぬまでの分。何の恐るゝことやあらう。死ね、死ね、一船こぞつて死を倶にせい！』

眼も髮も逆立てゝ大手をひろげ、僧を庇つて夜叉のやうに突立つたが、忽ち足をすくはれてどつと轉がりました。

この逸勢は、清友の子、唐人から橘秀才といはれた學者、後に從五位の下に叙せられ、政變に際して罪を得、伊豆に流された人です。



『逸勢何を申す。たとへ勅命をうけたる空海にもせよ、有るに甲斐なき下根の凡僧、佛法の奥義などとは片腹痛い。船中のことは凡て舟長の心まかせ、百餘人の命を助くるために、もつともなる願を差許したのが何の僣上ぢや。そちなどの喙をさし入るゝ所でない。默り居らう。それッ、水主ども早く空海をッ。』

道益は怒鳴りました。得たりと一齊に立揚つた水主ども、ささへる逸勢をつきのけて、蝗のやうに僧の身邊に飛びつき、力まかせに曳立てようとしたが動かばこそ、さながら大岩石。

『斬れ、斬れッ。坊主首を打てッ！』

苛立つた道益の大喝。屈強な水主の一人は、いきなり逸勢の手から劍を奪ひとつて、すらりと鞘をはらひました。

『無念！』

切齒しつゝ帆綱にすがつて起きあがらうとした逸勢は、水主だちに突き飛ばされて仰向さまに倒れました。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



搖、叫喚のまつたゞなかへどんと降る。意外の人礫にころ／＼／＼、將棋倒しになつた人々の頭上から、さつぶと瀑のやうな飛沫。その潮のなかを毬のやうに顚がつて、あはや海へ墜ちさうになつた舟長が、辛くも欄干につかまつて身をさゝへた途端、劍をかざした一人は、執念くもゐざり寄つて、僧の背後から發矢と斬下しました。

その瞬間、周圍をプラチナの世界にした目もくらむ大電光、ばり／＼ぴツ。突然火藥庫の爆破したやうなすさまじい音響と共に、金蛇の閃きを曳いて眞上から釣瓶落しに撃ちおろした一線の雷火は、一抱へにあまる帆柱をぽつきと折り、劍をふりあげた水主を鳴焼のやうに眞黒焦。全船、あつとへたばつたまゝ、顏を擧げ得るものもありません。

が、僧は依然として無我無心。

『あれ、あれ、あれ／＼／＼。』

纔かに起きかへつた舟長は、思はず金切聲をあげました。長さ十町に亙る雪の峰、氷の城の乘しかぶさるやうな、朧銀色の絶壁を聳てた一大怪濤が、驚くべき速力でまつしぐらに押迫つて來つゝあるのです。

信は宇宙も覆さん

船を絶頂にのしあげた怒濤が、さつと雪崩れて奈落の底へ突落すと、船は急角度に傾いて、艫にとりついた數人一度に跳ね飛ばされ、[illegible]

もう絶望です。誰も彼も一時に心臟が凍りついて、呼吸も停

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

つてしまひました。刹那に迫る死、あはや船は微塵。と、僧は突如として立揚り、足を八文字に開いてすつくと踏みはだかりました。眠れる獅子が目を醒したのです。見よ、その威容を。爛々たる明星の眼は、頭上に渦巻く雷雲を睨みあげ、百萬の大魔軍が殺到するやうな怪濤をはつたと睨みおろし、魂を掴んで叩きつけるやうな金屬性の聲を天地も裂けよとふりたてるではありませんか。

『留牟、留牟、留牟、留摩々々〱、晞梨々々〱、唏梨々々〱、仇那々々〱、仇蒐々々〱〱。仇留々々〱、休婁々々々〱、唏梨々々〱、莽休々々〱、莽晞梨々々々々〱、休牟々々々々〱、休畔提、摩畔思摩阿提迦羅畔兜、莎訶！』

これぞ惡魔降伏、諸怖畏消滅、一切天龍阿修羅諸惡鬼、ことごとく來つて擁護するといふ不可思議の神呪。結界の契印を結んだ僧の手は、渾身の力を籠めて、筋も折れるばかりに、飛鳥の如く、鐵丸の如く、空中に躍りあがり、躍り下る。

直下に驚くべき奇蹟！　今にも乘りかぶさりさうに肉薄して來た大怪濤は、見る間にどんと崩れてさつと引き、數町の距離をどゝツと横にながれてゆく。つゞいて第二の浪、前よりも恐ろしい勢ひで押寄せて來たが、僧の大喝がひゞき渡ると、忽ち後退してどツと崩れる。

『おう、おう。』

一船驚きの目を睜つて只茫然。

帆席をばた〱と吹きまくり、苫をめくりとる狂風も、次第に速力衰へ、雷鳴も遠のきますと、わづかに疎らな雨を殘して、暗灰色の雲は絮の如くに千切れ、その絶縁から金箭のやうな太陽の光を斜めにふらせて、海面は俄かに明るくなりました。

まだ動搖のやまぬ船の舳ちかくに立つて、僧は念珠をさら〱と押揉み、眞言を唱へて、五處三部の印を結び、大乘經を讀誦して、しづかに席にもどつた時は、もうすつかりと風波が鎭まつて、はるかに對馬の碧螺を水平線上に見ることができました。

『やれ〱、有難い〱。これで助つた。もう大丈夫ぢや大丈夫ぢや。』

みんな、ほつと息。完全に死線から遁れ出でた百餘人の顔には、一齊に復活のよろこびが輝いて、わッといふ狂喜の閧をさへあげました。が、その救主は誰であるか、役にも立たぬ凡僧と毒罵し、海に沈めよ、首を斬れよと噪ぎたて、一船こぞつて迫害した青年僧空海（三十一歳）であることを省みた時に、誰の心も激しい耻と怖れと懺悔とにふるひわなゝかずにはゐませんでした。疑ひたくとも疑ふことのできない目前の事實――何かは知らず、戰慄せずにはゐられぬ恐るべき超人間の神秘の力であつたのであります。

『僧都、僧都。慮外千萬。あるまじき無禮の振舞をいたし、今更ながら赤面至極、申し入るべき詫言もない。平に〱。』

眞先に冠を正し、首をさげたのが葛野麿。つゞいて道益も

ぴたと手を突いて、

『我、眼ありながら盲にひとしく、碩德大智の聖を見あやまつて、口善惡なきことを申募り、死しても猶つぐのひ難き墮獄の罪を犯し申した。何卒洪海の雅量をもつて御勘辨なし置き下さるやう。これ／＼者共、早うお詫をいたせ。』

と後をさしまねぐと、百餘人の乘組員、目白押に板の上に居ならんで、ぴた／＼と平伏してしまひました。

『あゝ勿體なや、有らうことか。活菩薩に對して恐れ多くも惡口雜言、犬猫にも劣つた我身の愚かさが、しみ／＼悔いられて、それ、こ、この通り涙がこぼれまする。』

『佛の御罰をうけて生きながら地獄に落ち、牛裂にされようともさら／＼お怨みはいたしませぬ。さ、如何樣にもなされて下さりませ。』

舟長をはじめ、みんなの口から懺悔の一齊射擊。と、空海はにこりとして、

『皆さまは何を言つしやるのやら、一向に私の腑に落ちませぬ。心三摩耶の境にある時は、耳も眼も枯木にひとしく、何事があつたのか、自分自身には分りませぬものぢやでの。アツハツハ。』

と呵々大笑したかと思ふと、忽ち儼然と形を正して、

『併し聞かれい。大法の光は無邊にして雲の天に充つるが如く、遍く四維上下、百千世界を照す。この大光明の中央に大日如來おはしまし、胎藏金剛兩界の主として、十方法界・無盡無餘の一切、諸尊を攝聚ましますのぢや。然らばその兩界はいづこ、諸尊は何れに坐し玉ふかといへば、遠く尋ねるまでもない、現在の我々一切衆生の心のうちにおはします。これを歸命本覺心法身、常住妙法心蓮臺、本來具足三身德、三十七尊住心城とこそ申す。所が衆生の心は、さま／＼の惑と障とに碍へられてその光を見ることができない。それゆゑに少しの災にうろたへさわぎ、泣き、叫び、喚き、狂ひもがく。只だ今のあさましい有樣こそ歴然たるその證據。方々の心に住し玉ふ諸尊が御覽じたなら、さこそ憐み笑ひたまうたであらう。いや／＼これは他人事ではない、かく申す空海とてもその如く、凡夫の惑未だに肉を離れず、さてこのまゝに打捨置いたなら、船は必然波に沈み、一百餘人の兄弟だちは悉く魚龍の腹に葬られるであらう。かしこくも帝の敕旨を奉じ、佛法の奧義を究むるために、遠く唐土に渡る空海自身といへども同じ命運、悲しや年來の志しは空しくうたかたと消えはつるか、と思へば腸も碎くるばかりでござつたぞや。空海一人の死は惜むに足らねど、いたはしきは兄弟百餘人の命。何卒してこれを救ひ得さす術はないものか。それよりも我が日本のために諸教の最頂たる眞言の奧義、大日如來自受法樂內證の秘法を傳へ、庶民に平等の利益を授くる道のこゝに絶えはつるこそ、嘆いても猶餘りある憾なれ、口惜しいことぢやと心に泣くばかり。その刹那の悲愴の心中お察しあれよ。』

と說き來る時に、彼の兩眼に泛べた眞珠のやうな雫が、迸る

聲と倶にほろ〳〵と落ちるのでした。一船悉く感激、粛然として傾聴、身じろぎ一つする者もなく、そちこちに歔欷の音がさわ立ちます

『辱けなきことには、年月頃いさゝか三密の觀行を修し、本有の佛性を知れる空海。かゝる時にこそ我が身に坐し玉ふ佛の功德にすがり、直入直修直滿、現世に歡喜地を證得せばやと一心不亂の加持、一百八十七箇所の天神地祇を召請し、金剛般若の眞文を寫して諷誦開講し、諸尊ごとに法施し奉るべきにより、あはれこの危難を救ひたまへと祈りたて、祈りつゞけたその赤誠が諸天に感應し、立どころに顯現ありて只今の奇瑞ぢや。』

『オー。』兩使節は身ぶるひして呻き合ひました。

『それは愚僧の力ではない。法の力ぢや。いや、法の力でもない。信の力ぢや。若有衆生遇此教、晝夜四時精進修、現世證得歡喜地、後十六生成正覺。信は山も移し、海もうづめ、星を隕し、日を回し、宇宙をも覆す。三十七尊の定住したまふ人間の心の力ほど大きなものはない。豈一人空海のみならんや、其處にござる兄弟だちの胸にも三身の功德を具へた同じ心がある。精進修行すれば利益示現を如實にあらはし得ることに何の疑ひがござらう。只信！ 信ぢや。さ、御一所に聲をそろへて諸天諸尊の功德を頌へまつらう。』

直立して念珠をさら〳〵と揉みながら、

『我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋癡、從身語意之所生、一切我今皆懺悔。オンハラチ、シツタボダハダヤミ、オンサンマヤサトバン、アビラウンケンソワカ。』

と發菩提心、三昧耶戒、大日如來の眞言を唱へると、衆皆同音に和しました。その聲遠く大洋のあなたに反響し、なかには感極まつて、いつまでもいつまでも咽び泣いてゐる者もありました。

かくして海も空も歡喜そのものゝやうな明淨の光を反映させて、瑠璃色に霽れ渡れるなかを、一帆千里、雁の如く西に向つて飛んだのであります。

眞理のために死を賭して

空海の誕生は今を去る一一五六年前、光仁天皇の寶龜五年六月十五日。

俗姓は佐伯氏、讃岐多度郡の人、父は田公、母は阿刀氏、梵僧ふところに入ると夢みて孕み、胎にあること一年、今の善通寺が呱々の聲をあげた舊跡だといひます。眞名と呼ばれた幼年時代から普通人に異つた天性の發露、ちよつとした遊戯にも泥土をこねて佛像をつくり、庭のうちに御堂をたてゝ朝夕禮拜しました。讀書は非常の熱心であつて、外祖阿刀大足大夫のすゝめにより、和漢の經書を學び、京に入つて石淵の贈僧正勤操につき、大虚空藏菩薩求聞持法を研究したのが、十歳の時だつたといひますから、非凡の天才兒であつたことが知られます。

その後大學に入り、當時の學者、直講味酒淨成について毛詩、尙書の講義を聞き、岡田博士に左氏傳春秋を問ひ、ひろく經史

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

を渉獵するうちにも、いはゆる東洋哲學の佛典に深い趣味を感じ、あらゆる經卷を讀み耽つてその蘊奧を究めようとし、或る時は大山に上り、幽谷に赴き、草に坐し、岩に寢ね、星と語り、霧にさゝやき、難行苦行の冥想默思をかさねて天籟の妙音に觸れようとしました。その苦學、精進は一とほりのことではありません。

剃髪して沙彌の十戒、七十二威儀をその師の勤操僧正から授かつたのは、彼が二十歳の時でありました。名は教海、後にあらためて如空と稱し一心不亂に三論宗の經典を研究し、二十二歳の春、東大寺において具足戒をうけ、諱を空海とあらためました。

『さて〳〵廣大無邊なものぢや。ゆけばゆくほど奥が知れず、叩けば叩くほど心の響に迷が出る。怪體魔性とはこのことであらう。あら、不甲斐のない我が智慧や。數年の苦學も只大海の水を一杓汲み得たに過ぎない。悲しいことぢやのう。』





空海は泣き出したいほどの思ひで自分の[illegible]ましさを省み、頭をかゝへて悶えました。三乘（聲聞、緣覺、菩薩）五乘（三乘に人天の二乘を加へて五乘といひます）十二部經（一切經）を究むれば究むるほど、茫洋として星の世界のやうな無限のひろがりをもち、いろ〳〵な疑問が次から次へと起つて來て、その解決をつかむことができないのでありました。が、日本の佛教者ではもう駄目です、問うて見ても、はつきりと答へてくれるやうな最高の知識をもつ者は一人もございません。

彼は惱みに惱んだあげく、大誓願を發して佛に祈りました。

『願はくは三世十方の諸佛。我を憐みてこの疑ひをはらさせたまへ。南無歸命頂禮。』

と、結願の夜。氣高い神人が夢にあらはれて、

『汝の惑を解くべき經文が久米寺の塔の下にある。大毘盧遮那經と

な申す。』

と諭げました。いはゆる夢枕に立つたのであります。空海は果して、大和高市郡の久米道場の東の塔の下から發見したが、讀んで見ると難解の句多く、疑は依然としてやぶれません。

『これは西の國、唐に赴いて一代に傑出した沙門の碩學につき、教を乞ふよりほかに道はない。さうぢや、唐に行かう！』

奮然として支那に出かけてゆく決心をしました。が、今とは違つて日本から海一つを超ゆるといふことは、非常の冒險、命懸の事業でした。彼は眞理を究めるために死を賭したのであります。歐洲見物がてら、バッチエラやメヂチーネの學位欲しさに、出世したさに、のこ〱渡歐するのにくらべますと、まるでダイヤと玻璨。

渡唐の後、密教の第六祖と仰がるゝ不空三藏の高弟、宗教界の偉人だつた青龍寺東塔院の慧果阿闍梨に師事し、僅かに一年の修行によつて金剛胎藏兩部の壇儀、秘密の印契、眞言漢梵の承傳をうけ、最高學位ともいふべき傳燈大阿闍梨位の號を授けられ、第八代祖師の榮位をついだことによつて、空海の大事業は完全に成功しました。豫備知識が十分だつたにもせよ、普通の學徒が一生涯かゝつてもたやすく獲られさうもない學殖を、この短かい時間に、しかも優等の成績をもつて美事にパスしたのは、まつたく彼が卓絶した人格をもつて、非常の努力勉強を



かさねた結果だと見なければなりません。

支那留學中に彼の地にのこしたさま〲の奇蹟は、今も傳説となつて殘つてゐます。そのうちでも面白いのは、彼の出世を妬んで受法を妨ぐべく、青龍寺に入込んだ大和奈良山階寺守敏のスパイ護法の目の先に、火炎結界の法を行つて烈々たる火焔を噴き出させ、驚いて腰を拔かさせたことや、唐の天子代宗の御前揮毫で、一本の筆を口に啣へ、二本の筆を左右の足に挾み、更に二本の筆を双の手で働かせて、同時に別々の字——五言絶句を電光的に大書した魔術以上の離れ業に、天子をはじめ並居る諸司百官をアッと驚倒させ、倭人の五筆和尚といふ名を支那全國に轟かした話などは、一千年後の今日、猶胸の透くやうな痛快味を感じさせずには置きません。

清涼殿上に光明を放つ

支那に在ること約三年にして、平城天皇の大同元年十月、無事歸朝した空海は、佛教界の新知識として、さながら一夜のうちに湧き出でた富士の秀峯のやうに、驚異の目をもつて日本の各階級から見られました。

『我こゝに眞言宗を樹立す。これ一切如來の秘奥の教、自覺聖智の法門なり。』

と堂々たる宣言を放つて、新たなる大法の幟をおし立て、教相事相の二つによつて一切衆生を利益することが、出世間の菩提を得るの捷逕であると、壇上から獅子吼したことが、嵐のやうに人の耳をおどろかして、一大センセーションを捲き起したのであります。

『空海こそ心得ぬ。密教は事相の上における密義のみであつて、字義を説くべきものではない。然るに彼は上平去入の四聲の一つ一つにつき、その實相を說き、三密成佛の一法となし、即身成佛義などと怪しき說法をたすとのこと。これぞ我が佛教の異端外道でなくて何ぢや。』

『いかにも。聞けば眞言宗に諸宗にすぐれたること十種ありと吹聽し、灌頂、梵文、相承、寶珠、道具、法則、外護などを十殊勝としてかぞへ居るとか。いふまでもなく外道の儀相、それを密義などと唱へ居るこそ奇怪の沙汰。打捨て置かば、諸宗に人なしといはれよう。今のうちに叩きくじいて、禍の根を絶やさうではないか。』

『む。さやうな外道奴は、速かに我が法界より追ひはらつたがよい。』

由來宗教の改革者には必ず勁敵があらはれて迫害します。呪はれます。空海をにくむ各宗の大德たちは、このやうによりより協議をして、猛烈なる反對運動を起し、恐れながら帝の御前に於て法論を蹶はし、御審判を仰ぎたいから、御許しくださるやうに熱心に訴へて出ましたから、時の天子嵯峨天皇は御嘉納あらせられ、日を期して空海をお召しになり、こゝに各宗の長老と『舌の大試合』を行はせらるゝことになりました。

まことに前代未聞、曠の勝負です。敗をとつては一宗門の恥と各派は粒えりの選手を送りました。唯識宗からは護命、華嚴宗からは普機、天台宗からは圓澄そのほか四宗、いづれも一代の碩學にして、富婁那をあざむく雄辯家。華やかなる法衣と袈裟をよそほひ、輿に乘つて參内、渾身皆力かと思ふばかりの緊張振でした。

こなたの眞言宗では新たに門弟となつた十大弟子のうちの實慧、眞濟、眞雅など、我が師空海が萬一敗北するやうなことがあつたら、やつと芽を出したばかりの眞言宗は、忽ちにして崩壞の運命を見るのである、何卒して勝たせたいものだと、心を一にして晝夜を分たぬ熱禱、諸天善神の冥護にすがらうとする。まことに涙ぐましい情景。

『いや。それは重疊。風烈しい峯、雪深い谷でこそ大樹は思のまゝに根を張り枝をのばすもの。その風と雪どになつて、我が空海をたすけられる各宗の親切ごころ、やれ〳〵、忝けなくて涙がこぼれる。ハツハツハ。』

弟子たちの悲壯な意氣も知らぬげに、師の空海は平然として嘯いてゐます。

やがて試練の日は來ました。畏い玉座ちかくに伺候する身は、いふまでもなく沐浴齋戒、白綾の相に紫平絹の指貫、素絹精好の空袍に赤地錦金襴の九條袈裟、緋帽子木沓といふか

がやかしい扮装で、一番跡からしづ〳〵と参内すると、間題の人だけに、舎人牛飼の童子までが目ひき袖ひき、さゝやき合つて見送ります。

内裏のうちの清涼殿には、攝籙をはじめ藤原一門。象牙の笏をもち、魚袋をまとひ、玉佩を垂れた束帶の文官。背に胡籙を負ひ、弓をわきばさんだ武弁。堂上堂下に星の如く居列んで形をたゞしてゐます。玉座には寶玉かゞやく御冠に袞龍の御衣、神神しい天皇の龍顏も拜せられました。その狀森嚴。一延水を打つたやうな靜けさ。

『先づお尋ね申す。眞言といふ名の出所は如何。』

『されば。大毘盧遮那成佛神變加持經、即ち大日經の初品に入眞言門住心品あり、分別聖位經の序にも相見え申して候。』

これが護命と空海との間に發せられた第一の問答。つゞいて七宗の代表者、交る〴〵にまくしたて詰寄つての論難攻擊。十四の眼は呪の蛇をもつれ合したやうに恐ろしい光を放つて、どの顏も赤く、または青く、額には冷たい汗が玉のやうに滲んでゐます。餘程昂奮した樣子でした。と、空海はにくいほど沈着な態度で、噛んでふくめるやうに一々懇切に答へてゆく。即ち眞言密教の深義を說いて、速證菩提、ならびに三密の妙行、五相の秘觀、これにかゝはる金剛界の月輪、胎藏界の阿字の意味から、父母所生の凡身にも智慧の光を得る時は、大覺位を證つて即身成佛することができると斷言したのであります。朗々たる音吐、殿上にひゞき渡る懸河の雄辯、しかも事理明快、すこしも隙なところはありません。大臣をはじめ百官たちは、すつかり魅せられてしまつて、咳一つするものなく皆うつとりと耳をたてゝゐます。

『さらばその即身成佛は、何人にも成し得る業ぢやと仰せあるか。』

ぷり〳〵と身ぶるひしてゐた天台宗の圓澄が叫びました。

『いかにも。誰にもあれ。煩惱業障を消滅し、淨菩提心門に入れば、諸佛菩薩と同等の位を得、正しく五神通の力を具へ、無量の言音陀羅尼を得て生死を出離すること、敢て難事にはござりませぬ。』

『然らば御身は如何。』

『申すまでもおさらぬ儀。』

空海は聲に應じて答へました。その時上座に玉音高く、

『空海の說くところ、旨はきはめて深しといへど、まのあたりその證を見ざれば信ずることはかなはぬであらう。證を見せい。』

と勅がありました。空海はハッと平伏して、

『畏み奉る。』

と奏し、徐かに起き直つて一禮し、一段ばかりする〳〵とゐざり出して、南廊の方に向ひ、双手に智拳印(金剛大日如來の契印、金剛拳を等引にして二つに分け、右の羽金剛拳をもつて左手の大指の端を握る)を結んで眞言をとなへますと、忽ちにして其身は五佛の三摩地に入り、見る〳〵頭上に五智の寶冠を現じ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

じ、全身金色の毘盧遮那となつて、眉間から白毫の一大光明を發射し、端麗なる妙相にかはりました。

『や！　や！　や！』

見るもの愕然。身の毛も竪つほどの一種の强い衝動をうけて、思はず驚嘆の聲を放ち、嵯峨天皇はかしこくも玉座をたゝれて禮拜あらせられましたから、諸司百官も同じやうに一樣に首を下げ、七宗の諸德は皆肝をひしがれて地に飛び下り、平伏したと傳へられてゐます。

これが空海生涯中一大奇蹟にかぞへられるもの。興教大師の『五輪九字秘釋』などには、その事實をあげて『大師は諸宗の迷を開かんために、この秘密行を目の前にあらはしたまでゝ、大師の日常生活がすでに即身成佛であつた。何の不思議もない』と說いてあります。

守敏僧都との法競べ

面白いのは、空海と守敏僧都が法力競をした話であります。

『何の。あの空海奴。口に廣言を吐けども何程のことやあらう。世間凡俗の盲目ども、彼に欺かれて金剛智圓滿の法身、大日如來の化生などと崇め居るこそ片腹痛い。



佛界行者多しといへども、現身に五大神通力を獲たるもの、今の世にこの守敏のほかにある筈はない。よし／＼今に一鼻あかせ一嬲り物、盲目どもを驚かしてくれう。』

奈良山階寺の守敏僧都は、かう思つてひそかに瞋恚の炎を燃やしてゐました。彼と空海とは犬と猿、唐へ渡るときに腹心の徒弟護法をスパイとして尾行させ、秘法の傳授を橫奪させようとしたほどですから、空海が歸朝してから名聲雷の如く、弘仁元年から七年にかけて灌頂を授け、または一佛一尊一界の秘法を傳へたもの、約六萬人といふ驚くべき多數。師弟のちなみを結んだ公卿は四十一人、童子四十五人。一天萬乘の君にあらせらるゝ平城、嵯峨の兩帝まで兩部の灌頂をうけさせられ、宮廷の信用きはめてあつく、隆々たる勢力を、社會の各階級に植ゑつけて、眞言宗の基礎を巖の如く据ゑたのですから、同じく宮廷に出入する身になつたら、妬ましくも腹立しく感ずる譯であります。

或年の秋、守敏が宮中に參內して、嵯峨天皇に拜謁した時に、侍臣は美しく熟した栗を献上してまゐりました。それを內膳司にお下げにならうとしたのを、守敏はしばらくと留めて、

『この栗を直ちにお台上り遊ばさるゝやう即座に調味しまゐらせまする。』

水を盛つた壺をとりよせて栗を入れ、印を結び、呪を唱へると、壺の水は忽ち

にぶつぶつと湧返つて湯氣をたてました。程を見はからつて、銀の箸に栗をつかみ、盤にうつして帝に侑め奉つたので、叡感あらせられました

帝は興あることに思し召し、數日の後、空海と守敏とを別々にお召しになつて、空海を御簾のうちに隱し置き、守敏だけを御前に召されて、鷄の卵を入れた水壺を與へられ、前の如くに茹でて見よと詔あらせられたから、守敏は畏まつて加持をしたが、水は何處までも水。禱れども祈れども驗あらばこそ、微溫湯ほどにもなりません。熱するものは只守敏の全身、ぼたりぽたりと珠なす汗が滴るばかりです。さすがの守敏、つひに力つきて、



『これは何物か障碍があると覺えまする。無調法の罪、ひとへにおゆるし下されませ。』

悄氣切つて御前をすべり、逃げるやうに宮門を出でました。が、考へてもどうした原因だか分りません。不審の眉をひそめてゐるうちに、歸信する宮仕への更衣がおとづれて來て、これこれであると簾中の秘密をさゝやきましたから、蟀谷に青筋をたてゝ、

『さては空海奴の邪魔か。よし〳〵左樣な儀ならば、思ひ知らせてやらう。』

空海に對する憎惡が天下を呪ふ恐ろしいものに化りました。で、法壇に籠つて娑婆世界にありとあらゆる龍王を、金剛光焔止風雨陀羅尼經によつて呪伏し、これを一つの水瓶に封じ込んでしまひました。すると春から夏にかけて、關西一體の旱つゞき、田も畑も黃色く立枯れて、蔬菜のたぐひさへ容易に口に入らず、米の價は天井拔けに騰ります。

叡慮安からず、鳳詔を空海に降したまうて、法驗により甘雨をふらし、萬民の疾苦を救へよと勅あらせられました。空海

は畏つて宮廷の眞言院に入り、請雨經の法を修すること二日に及びましたが、雨どころか、皮肉にも空はいよ〳〵晴れ渡つて、烈々たる太陽の光線、爛れるやうな暑さです。師は不審して定に入り、しづかに智波羅密の眼をひらいて十方世界を見渡しますと、あらゆる龍王の影はなく、只天竺無熱地の善女龍王のみが殘つてゐます。さては守敏が大威德明王の法をもつて一切龍王を封じたのであらうとうなづき、直ちに善女龍王を召請しますと、九尺ばかりの大蛇に駕つて金色の光を放ち、禁廷の神泉苑に下つて來ました。

朝廷では空海の奏上により、和氣眞綱を勅使として、神泉苑のほとりに壇を築き、幣帛をさゝげて供養をいたしますと、忽ち西北の愛宕山脈からむら〳〵と湧き出でた入道雲、見る間に東南の空にのびて、雷電すさまじく、瀧なす救の雨が數時間の長きに亙つてふりつゞけたから、近畿地方の野も山も、田も畑も、人も畜も、皆一夜のうちにいきいきと蘇つて、風爽かに澄みかへる夏空を吹き流れました。

『口惜しや、またも彼奴にしてやられたか。生かして置けばこそかゝる憂目をも見る。此上は一思ひに息の根斷つて。然うぢや。』

切齒をした守敏僧都。おそろしい最後の復讐を試むべく空海調伏の法を行ひました。と知つた空海は、佯つて狂ひ死をした狀をよそほひ、そのことを公に披露したから、守敏は踊りあがつて、

『嬉しや。惡魔は退散しはてたるぞ。やうやくの思ひで我が世となつた。最早怨はつきた。弔うて得させよう。』

すつかり安心して懺悔の法を行ひました。調伏の後では必ずこの懺悔の法を修するのが恒例であります。と、間もなく大惡瘡を發し、全身紫に腫れあがつて高熱、醫藥の効もなく悶死をとげました。

これは空海が調伏したものだと傳へられてゐます。

平城、嵯峨、淳和、仁明の四天皇に歷仕し、御信任を蒙ること頗る厚く、法を修して玉體の安穩、國家の鎭護を祈り、驚くべき靈驗をあらはしたことが前後五十一回。皇城の鎭として東寺を賜はれる時、國寶たる經卷諸什を大經藏にをさめて永遠に保存し、また兩部神道を創立して神道の寶典とさるゝ著述を遺し、高野山を拓いて金剛峯寺を建て、佛法住持の一大靈場たる礎を据ゑたことなどは、大師の功績の一部分のあらはれに過ぎません。

最も大きい全日本への貢獻は、印度の佛教、支那の文化を自身の肚一杯に吸收して來て、巧みに咀嚼し、まつたく日本化させてから、蠶の絲のやうにそれを徐々に吐き出して、日本人全體の社會をくる〳〵と包んでしまつて、思想界、藝術界、政治經濟界、あらゆる日常生活の指導者となつてくれた其點です。

綜藝種智院をたてゝ民衆的の教育を創始し、又諸國を巡錫布教するにあたり、いたるところの大衆に地文學、氣象學の知識を吹込み、灌漑の法を教へ、道路を開き、橋梁を架し、點

灸の術を授け、山野の草木を採集して醫藥に利用する福音を傳へしことなどは、どのくらゐ世を利し、人を益したか分りません。

千年以來今日に到るまで、我が日本人日常の文書に應用せらるゝ假名文字は、何人の御作にかゝるかについては、昔から學者の所説區々にして一定してゐません。

されど伊呂波は新井君美が『同文通考』のなかに、『釋日本紀』を引いて考證した通り、空海が古來吾邦に行はれた字體をくづして異朝の草法を用ゐ、四十七の字母を造つたものであることは、疑ふべくもありません。

それから五十音の片假名は、孝謙天皇の御代に吉備大臣が渡唐して、王化觀といふ學者の説を聞き、始めて造つたやうに『群書一覽』などに傳へられてゐますが、これは年代から考へても、全然有り得べき事實でないことは、『反切義解』の著者が説破した通りです。

元來この片假名の起原となれる五十字門は、儒家の書から出たものではなくして、佛敎の悉曇家に傳へられた梵字であり、悉曇は空海が渡唐して研究し、歸朝後はじめて吾邦に唱道したのであるから、やはり空海の造つたものだとするのが、最も確實性を有する説だと見てよいやうに思はれます。

この假名文字がどのくらゐ吾々の祖先を益したか、また現在どれほど吾々を利してゐるかを省みる時に、大師が日本の文化――學術に貢献した功績を、心から感謝せずにはゐられません。

『即身成佛』は衆生を濟ふ最大究竟の目的であつて、金剛頂部の根本經も諸尊の最上法も、詮ずるところ、成佛の所以と眞理と方法とを説けるもの、人、道を修して此處に至れば、もはや體、相、用の決勝點に到着し、初地の落陸位、歡喜地を得たものであります。

ところが空海以前の佛敎はたゞ『即心成佛』と説き、心觀によつて成佛するとのみ解して來たのであるから、專門家の僧侶、貴族など少數者の知識階級にのみ研究せらるゝ一種の學術になつてしまつて、一般平民を濟度する宗敎としての活る働きを缺いてゐたのであります。

それを空海は『即心』から『即身』に轉じ、何人にもあれ、信を起し行を修し、行住坐臥、法身無相の三密を得る時は、その身そのまゝに成佛することができる、と喝破して、死せる佛敎に潑剌たる魂を吹き込み、專門家の僧侶、貴族の手から解放して、一切平等の活ける宗敎となし、平民社會の精神の糧として、弘く世を濟ひ人を益した點は、吾邦の宗敎史上に、大きなエポック・メーキングの朱線を引いた革命的成功者であると謂はなければなりません。

佛敎界偉人多しといへども、大師ほどの實際的平民主義者はありませんでした。千百年後の今日、優に八百二十六萬五百九十三人の信者（文部省宗敎局昭和三年調）を抱擁し、日本における各宗派第一の地位を占めてゐるのも、洵に故あるかなといはなければなりません。（をはり）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

肺炎、喘息、百日咳、結核性諸病等、難治の呼吸器病を藥草で治癒す

◇四大醫學博士、五醫學士の專門的研究を發表◇



ダウンチリメン藥草



ジヤワ島のダウンチリメン栽培の
狀況と發見者佐々木啓市氏及土人

私は現在農園に五種の珍しい藥用植物を栽培して居りますが、このダウンチリメン丈は最も珍しくその效驗の著しいのには實驗した醫者が皆驚かれます。喘息、百日咳の根治藥は未だ歐米にも御座いません。此の藥草は喉一切に無類の妙藥で今回特に和蘭政府の許可を得てジヤワ島第一の沃地たる、モジヨカルト市外に農場を移轉擴張し專ら栽培に努力して居ります。（發見者佐々木氏談）

大正十五年七月雜誌キング誌上に世界唯一の呼吸器病根治藥ダウンチリメン藥草の發見と題しその發見より人工栽培までの苦心談と藥草の偉力に就いて詳細發表されました處、愛讀者皆様より該草の取次申込殺到した爲め弊社代理部では直にジヤワ島の發見者に交涉し、一ケ月僅かに貳圓の實費で御頒ちして居りましたが、喘息、百日咳、肺炎、肋膜、氣管支カタール等に驚くべき好成績を擧げ俄然藥業界の大評判となり、

更に今回日本醫學界の大問題となりました即ちそれは、岡部、佐野、合屋、三木の四大醫學博士と小野醫學士他五醫學士により實に三ケ年に亙る專門的研究が完成された結果治療全く困難とされて居る、百日咳や肺炎が僅か四五日で治り、流感、氣管支炎等は一夜で又喘息が短時日で根治し肋膜や結核にも驚くべき偉效を奏したからであります。

左に實驗大家の御批評を發表し御參考に供します。

……記者……

▼數十年來の喘息も治る

醫學博士　岡部庸三郎先生談

私は氣管支喘息と百日咳に本草の浸出液で吸入と内服を併用すれば著明な効果のある事を確信する、本草の喘息に對する効果は慢性氣管支加答兒を治して發作を止めるもの〻様であるから麻醉性のアルカロイド又はアドリナリン注射の如き一時的の奏効とは違ふ。本劑服用に由て幼年より數十年持續せる頑固な

る喘息が二ケ年來全く發作を見ない例もある

▼肺炎に顯著なる效果

醫學博士　合屋友五郎先生談

余は本藥草を兩三年來治療上に應用し鎭咳祛痰劑として有効なる事を確信せり、特に吸入料として効果顯著、余は氣管支炎、肺炎、百日咳等に應用せり。胃腸を害する事なき爲め在來の鎭咳、祛痰劑に比し遙に優れるものなり。

▼重症の百日咳が吸入丈で

九州大學病院　加藤隆信先生談

僕は二歳と四歳になる子供の百日咳に種々と治療を試みたが一向効果を見なかつた際本草の浸出液を造り專ら吸入として一日三四回づつ應用した處が三日後に至つて急に發作が減少し驚くべき良い結果を得た。現今百日咳に確實に奏効する藥劑のない時に本劑の如き副作用の無い有効なる治療藥の出現は誠に喜ばしい事で、余は各臨床家に向つて試用するに足るものとして推奬する。

▼肺結核、喉頭結核、肺壞疽にも有效なり

醫學博士　三木利一先生談

余は岡部博士より本草を貰ひ受け過去一ケ年に亙り各種呼吸病患者に使用し顯著の効果を擧げ得た。余の使用したる患者は肺結核、肺壞疽、喉頭結核、肺炎、咽頭カタル、氣管支炎の慢性と急性なり。余は何等副作用なく確効あるので引續き使用しつゝあり。

▼慢性氣管支カタールも治る

醫學士　中山弘道先生談

余は三ケ年に亙り入院患者、外來患者、友人家族其の他一般患者の各種呼吸器疾患に相當多數應用せり、今其の結果を綜括すれば、

一、本草浸劑は一種の芳香を有し微に澁酸味あれ共何等不快なく小兒も能く服用す。

二、胃腸障礙、其他不快なる副作用も全く認めず、却つて食慾亢進を見る場合がある。

三、余は從來「セネガ根」を使用する場合本草を應用したるが何れの場合に於ても本劑は其の効果に於て「セネガ」に優るを認めたり。一般に急性、慢性氣管支カタル、氣管支喘息、百日咳には偉効を見たる例多し。

▼ダウンチリメンの特長

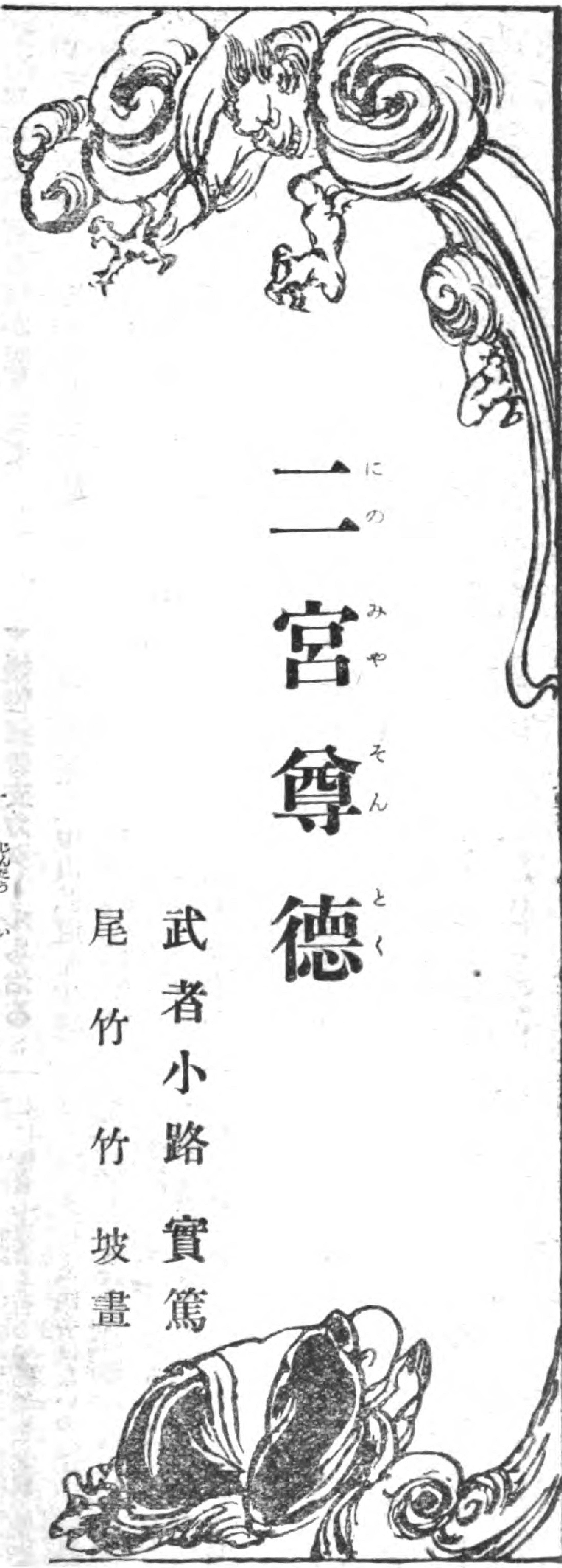
ダウンチリメン草の偉効に就ては、前記實驗大家の御批評で充分御分りと存じますが、簡單に特長を述ぶれば(1)副作用がない(2)鎭咳の力が強い(3)強力な祛痰作用がある(4)强力な解熱作用がある(5)健胃作用がある、と云ふのですから百日咳、肺炎、喘息、氣管支炎が治る外に醫者も患者も苦心の肺結核、肋膜、肺尖カタル等に之以上の藥劑はないのです、結核性諸病の最も恐るべき胃腸障礙の副作用なく好く解熱鎭咳の目的を達するからであります。

▲本劑は原藥草のまゝと、煎じる手數の不用な錠劑の二種類があります。いづれも使用法は現品に添付けてあります。

▼ダウンチリメン藥草約十五日分壹圓、三十日分金貳圓也送料内地共貳錢、領土五拾錢煎じる世話のない。

▼同錠劑小瓶十五日分金貳圓八拾錢也、大瓶一ケ月分金五圓也、送料同前、御申込は東京本郷區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



二宮尊徳

武者小路實篤
尾竹竹坡畫

金次郎は怒つた

小川はいつのまにか大きな川になつた、金次郎はもう昔の金次郎ではなかつた。彼の働く方面は廣くなり、彼の關係した事業の範圍はます〱擴大されていつた。

一々それをかくのは大へんである。

彼は個人的にもいろ〱の人を救つてゐる。彼の救ひ方は一つである。裸一貫になつて、人道をつくすことである。彼の人道と云ふのは米をつくつたり、粟や稗をつくつたりすることも入つてゐる。人間が生るためにしなければならないことを皆彼は人道と云つてゐる。

しかしこの人道を本當に行ふには大決心がいる。この大決心を起させる術を彼は實によく知つてゐる。彼は決して、やす受けあひはしない。そして相手がたのんで來ても、一遍で聞いたことはない。本當に求めるものにだけ彼は自分の道を知らせる。その道は容易に行へないものだけ、彼は自分の道を行へない者にはとかない。

個人の力には限りがある。いくら金次郎でも力に限りがあるし、時間に限りがある。始終自分の方から働きかけないと働き出さないやうなものは始めに突放すことにしてゐる。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

本當に求めるもの、そして大決心するものだけに自分の道を教へる、それは徹底してゐる。それだけ實行するのはたいていなことではない。

それにもう一つ彼は革命家ではない。時代の時勢に反抗するものではない。彼は百姓一揆の賛成者ではない。彼は當時の時勢の內で人々がすくへる道を見出さうとしてゐる。しかし彼は權力者の味方でもない。彼は税を多くとらうとするものには賛成しない。又民の餓ゑるのを知らん顏してゐるやうな藩主を人間らしい藩主だとは思つてゐない。彼は藩主を尊敬してゐるが、しかしそれは社會の秩序を尊敬し、人々が自分の範圍を守ることが必要だと思つてゐるからだ。

自分はこゝで彼を批評しようとは思はない。たゞ彼がどんな人間か、どんな考へをもち、どんな仕事をしたか、又どんなことをしようとした人間かを見たく思ふ。之から彼は大河になり、見渡せない程いろ〳〵の仕事をしてゐる。



許された紙かずではそれをかくことは出來ない又自分の許された時間ではこのことは出來ない。自分は完全なものをかかうとは思はない。それは自分には不可能だ。たゞこの大人物の片鱗がいかに大きいものかを示したい。年代の順序が時々少しちがふかも知れない。同時に行はれたことを、同時にかいてはごつたになりすぎる場合、時の前後をするのはやむを得ないと思つてゐる。

烏山侯の菩提寺に天性寺と云ふお寺がある。この烏山の人々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

も同じく怠もので、博奕を好み、村々が衰へてゐることは櫻町、青木村と大差がなかつた。天性寺の和尚の圓應と云ふ坊主が心配したのである。そして自分で出來るだけ骨折つて、皆が働くやうにしたり、自分の金で他國の流民をよんで開墾さしたりした。處が天保七年の饑饉の時、村民が餓ゑかけて來たが、圓應の力だけではどうすることも出來なかつた。それで折角やりかけてゐた仕事も駄目になり、集めて來た人も離散しさうになつた。それで自分でもどうしていゝのかわからなくなり困りぬいてゐた。その時彼に櫻町にかう云ふ人がゐると云つて、二宮金次郎の話をしてきかせたものがあつた。

彼はそれを聞くとすつかり感心した。この人こそ、我等を救つてくれる人だと思つた。そんな人がさう遠くない處にゐたのか、それなら早く知ればよかつたと思つた。

そして是非その人に逢ひたいと思つた、それで大夫の菅谷と云ふ人に逢つてその話をしたら、それは是非逢つて見たらいゝだらうと云ふことになつた。

それで圓應は一人で櫻町に出かけることになつた。

出かけて村の有樣を見るとます／＼金次郎に感心しないわけにはゆかなかつた。萬事が實によく、ぬけ目なくいつてゐる。人々は饑饉だと云ふのに少しの心配もせず、皆に十分に食物が與へられてあり、なほ多くの貯穀がたくはへられて居、こゝだけは饑饉のない國のやうに見えた。

聞いて見ると、その用意のいゝことは話で聞いたのに優つてゐた。饑饉が來てもおどろかない用意が數年前から出來てゐた。そして今迄隨分荒れてゐたと聞いた所が、實に立派に開墾されて居、人々は實によく働いてゐる。天候におどろかずに、人力を盡してゐる。

圓應は見るもの聞くもの感心しないわけにはゆかなかつた。それで逢ふのをたのしみにして陣屋へ金次郎に逢ひに出かけた。

しかし金次郎は斷つた。

『私は困つてゐる百姓を助け、すたれてゐる村をおこすために働いてゐるものだ、僧侶には用はない。逢つたつて何にもならないからお斷りをしてくれ』

金次郎はいつもすぐは逢はなかつた。彼は逢つても役に立たないものには逢ふ必要がなかつた。

しかし圓應はそれですぐ歸る程呑氣な用で來たのではなかつた。

『私は烏山の人々が饑饉で困つてゐるので、先生に教をうけて、その人達を助けたいと思つて來たのです。どうぞまげてお逢ひ下さるやうおつしやつて下さい』

取次はそのことを金次郎につげた。金次郎は怒つたやうに云

つた。

『私には私のやることがある。坊主が何と云はうと私は逢はうとは思はない。烏山のことは烏山侯のつとめで、私の知つたことではない。それを坊主の身でさしでがましくやつて來て私の仕事の邪魔をするとは以ての他だ。斷つて返せ』

金次郎の聲は圓應にも聞える程大きかつた。取次が出て、

『どうしてもお逢ひしないとおつしやいますから』

と云つた時、圓應は死んでも歸らない決心をしてゐた。

『私がこのまゝ歸りましては烏山の人々が餓ゑ死にしなければなりません、もしどうしてもお逢ひ出來ませんければ、私はここで餓ゑ死にして他の人が死ぬ先だちをしませう』

さう云つて圓應は門前の芝原に袈裟衣のまゝ坐つて、夜もそのまゝねて去らうとしなかつた。

或人がおどろいてそのことを金次郎に知らせた。金次郎はますます怒つて、

『かの坊主、無理にも私に逢はうと思つて、陣屋の前で餓死しようと云ふのか。それなら逢つて一つ小言を云つて、おひかへしてやらう。すぐよんで來てほしい』

或人が圓應に先生がお逢ひになるさうですと云つたので、圓應はよろこんで起きあがり、金次郎の前に出た。



金次郎は怒鳴りつけた。

『貴樣は俺の仕事の邪魔をして、俺を困らせようと思つて、門の前で死なうと云ふのか』

『そんなことは御ざいません。たゞ先生

の教をきいて烏山の人人を救ひたいと思ふだけで御ざいます』
『貴様は坊主のくせに坊主の道を知らないのか』
『私はおろかですが、僧侶になりましてもう隨分ながくなりますから、佛教のことは一通り知つてゐるつもりです』
『佛の道は荒地をたがやしたり、民の飢を救ふ道を教へるものか』
『佛教の教へは衆生濟度にあるのですから、民を憐み、飢をまぬかれさすのは佛の道と思はれます』
『貴樣には本當のことはわかつてゐないのだ、人には各〻職分と云ふものがある。藩主には藩主の職分があり、臣下には臣下の職分があり、僧侶には僧侶の職分がある。藩主で臣下の職を行つたら、國はたもたれはしない。臣下で藩主の仕事をしたら僭上暴賊の罪になり、國は亂れる、僧侶には又僧侶のつとめがある、藩主の仕事をうばひとるのは面白くない、民をさめたり、荒地をたがやしたり、饑饉を救つたりするのは藩主のつとめだ、僧侶の役目ではない。自分の役目でもないのに、よその國まで來て、私に相談しようなぞとは、僧侶の道ではない。天地に祈り、佛に誓つて國土の平安を祈るのこそ僧侶のつとめだ、それなのに自分の小さい力でさし出がましく、餓死する人を救はうなぞとは身程を知らないにも程がある。もし烏山の人民を救ひたいと云ふなら、先づ藩主におたのみして、救つていたゞくがいゝのだ。もし藩主が愚で救ふことが出來なかつたらそれは仕方がない。私の門前で死ぬかはりに、自分の寺で出來るだけのことをして餓え死にすれば貴樣のつとめは果したことになるのだ。こんなことを知らずに佛の道を知るなぞとはよく云へたものだ。私の云つたことにまちがひがあるなら、いくらでも云ふがいゝ』
その聲は室になりひゞいた。
金次郎は一たいに怒ると、實に大きな聲を出し、頭から湯氣



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

を出し、髪をさかだてるのがくせだつた。

圓應はだまつてきいてゐた。彼は口ごたへすれば出來たであらう。だが大久保侯でさへ威壓した彼の人格の力には手向へなかつた。

彼は始めて眞人に逢つた氣がした。

『おつしやることは一々膽に銘じました』

『それならすぐ歸るがいゝ。私には用があるから之で失禮します』

圓應は斷られて歸るのではあつたが、彼は希望を失なひはしなかつた。彼は歸つてありのまゝを菅谷に話した。菅谷も感心した。

其處で菅谷は自分で出かける氣になり、先づ使ひを出して、その内おたづねする由を金次郎につげさした。

しかし金次郎は又使ひの人にすぐは逢はなかつた。だが使ひの人も逢はずに歸るわけにゆかなかつたので、無理にたのんで逢つてもらつた。金次郎は例の調子で云つた。

『私は他藩の方にお逢ひする暇はありません。菅谷氏がお目にかゝつても仕方がないと思ひます。菅谷氏は大夫の役目にゐらつしやる方ださうだが、それなら君を輔佐して仁君の道をふませなければならない位置の方だ、「禮」に「國三年の蓄へなきは國其國に非ず」と三年の蓄へのないのをさへ戒めてあります。それなのに一年の饑饉ですぐ民に餓死するものが出來るやうでは何處に仁政があります。諸侯の任は天民を賴つてそれを平和に生活させることです。天民を餓ゑさすやうでは諸侯とは云へない。また諸侯をたすけなければならない大夫の身で民が餓ゑてからあわて出すやうな人間は、私が逢つたつて無駄なことはわかつてゐる。菅谷氏が來てもお逢ひ出來ないからさう云つて下さい』

使ひに來たものはびつくりした。そして腹を立てた。



『何と云ふ無禮な奴だらう』
使者は歸つてありのまゝを話し、二宮の無禮なことを憤りをもつて報告した。しかし萱谷は使者の報告をきくと、腹はたたなかつた。尤だと思つた、自分がわるかつたと思つた。
實際一年の饑饉で天民を殺しかねない無用心さのいかに恥べきことかと云ふことを本當に知らされた。自分の責任のどんなものかと云ふことも始めて知つた。本當に目がさめるやうな氣がした。そしてこんなにまで本當のことを恐れることなく云ひはなす、金次郎を益ゝ信頼するやうになつた。
彼は今の世にこの人より他に民を救ひうる人はないと思つた。それで彼はすぐ着物を着かへ烏山侯の處へ行つて、そして、
『今のありさまではもうどうすることも出來ません。普通の時でも商人に金をかりてすましてゐたやうなありさまで、今では何處からも融通がつかず、民の餓ゑは旦夕にせまつてをります』
なぞと樣子をくはしくのべ、そして二宮金次郎の話をして、
『この人より他に救ひを求めるに足る人はない』ことを話した。
そして烏山侯自身から金次郎に助力を求めるやう手紙をかいて戴きたいことを話した。
烏山侯はよろこんで承諾をした。そして自分で手紙をかいて萱谷にわたした。萱谷は大いによろこんだ。

政治の大道

萱谷は其處で正々堂々と、金次郎を訪ねることが出來た。
金次郎も萱谷の口上、烏山侯の手紙で、感動した。彼はとうとう立つことに決心した。
そして萱谷に逢ふことにした。
金次郎は萱谷に逢ふと、云つた。
『本當は斷りすべきですが、烏山侯と云ひ、貴殿と云ひ、前失を悔いられ、至誠をつくして民を救はうと思はれるやうになられたので、私は少し無理ですが、おたすけすることにしました。しかし小田原侯へ、あなたの方からおたのみ下されるのが、順序と思ひます。幸ひ烏山侯と小田原侯とは緣者でゐられるから烏山侯から小田原侯へこのことをおつたへ下さい。小田原侯からの御命令がないと私は働くことが出來ませんから。しかし小田原侯から御下命があるまでには數日かゝるでせうから、それま



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

できつては餓ゑてる人々はさぞ困るでせうから、先づ之で急場の費用におあて下さい』と云つて二百兩の金を出して菅谷にわたした。

菅谷はます／＼感心しないわけにはゆかなかつた。

その内に小田原侯から金次郎に、出來るだけ骨折つて上げてくれと云ふ命令があつた。其處で金次郎は救民の調査に出かけた。彼が烏山に入つた時烏山の狀態はどうだつたか。

烏山の方では領地の人々が餓ゑて方々に小さい一揆のやうなものを起し、金持の家をおそつたりして、人心が動搖してゐた。どうしていゝか見當もつかず、城內には大砲をそなへて餓ゑた人々が入つて來たらうち殺す用意さへ出來てゐた。

さう云ふ處へ金次郎は來た。そして本當に救助を要するもの千餘人を集めて、圓應のゐる寺、天性寺にそれを收容することにし、寺だけではせまいので、十一棟の小屋をたてた。そして一人一日一合づつと粥をつくり、又雜炊をつくり、三四十人を一組にし、世話人一二名をおいた。

そして食ひなれない草根木實を禁じて流行病がはやらないやうに用心し、そして其處で每日藩士をよんで武術の試合をやつてもらつたり、空砲をうつてもらつたりして元氣をつけ、退屈しないやうにした。

そして藩中一人の餓死するものもなく、翌年五月までその仕事をつゞけた。



そして解散する時は一人あてに白米三升錢五百文を與へた。用意のいゝことは例の通りであつて、かくて大鹽平八郎がやりたかつた事を金次郎は貧乏村に居てやりとげた。

平常の心がけがちがふ。三年饑がつゞいてもびくともしない用意をしないでは金次郎は安心の出來ない男だつた。感心しないわけにはゆかない。又大いに教はるべきことがあると思ふ。

烏山侯始め菅谷等、大いに感心し、饑饉のあとでも、どうしたらいゝかを相談する、金次郎は矢張り始めは斷る。だが本當に領地の人々の生活のことを心配してゐる眞心が見えると彼は立ち上らないわけにはゆかない。

彼は又政治の大道について自分の意見を堂々とのべる。

『國をおこすのは大へんなことです。天命に安じ、不作の時のことを考へ、天理自然の分度を守り、決して虫のいゝことは考へず、自然をあまく見ず、苦しみに耐へ、人々が安心するのを見て最後に安心し、一人の人でも困苦をまぬがれない時は君主始め家臣すべて安心せず、民の憂ひに先て憂ひ、民の樂しみにおくれてたのしみ、民を我が子のやうに思はなければ駄目です。しかし實際は中々さうはゆきません。烏山藩主の御入費さへ不足がちで、家臣の祿も十分の三よりもらへないありさまで、その不足をおぎなふため、借金をしなければならず、その結果、ます／＼税を多くとりたてゝ、民の苦しみは問題外になつてゐます。それではどうして饑饉の時の用意が出來ませうか。普段の用意さへ出來てゐないのです。そんなことではうまくゆかないのが本當です。烏山侯は自分の入費をうんとおへらしになることが出來ますか、家臣は又自分の祿を三分の一に減じる覺悟がありますか。それさへ出來なければ、私が何と云つたつて、それは役に立ちません。烏山藩はます／＼つぶれるより仕方がありません。もし、烏山藩をつぶさず、民に生氣を與へようと思ふならば、不作の年の收入を標準として、出る方をきめ、そして自分の收入に應じて支出をはかり、それをこさないやうにされゝばうまくゆくにきまつてゐるのです。だがそれが實行出來ますか』

菅谷は、『出來ます。必ず責任をもつてやります』と云つた。

『それなら先づ今迄の收入や支出をよくしらべませう。それをしらべて方針をたてませう』

それで烏山から大勢の人が櫻町に出かけ、金次郎が指圖して、正確な計算をした。そしてその結果、方針がきめられた。その方針通りやつてゆけば、烏山は必にまちがひなく、立派な藩になれるのだつた。

そして、圓應が金次郎の教に從ひ開墾に從事し、二三年の内に二百二十四町荒地が開墾された。烏山藩は希望が見え出した。（つゞく）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

彗星的大發展の『富士』三月號の大讀物

萬人が萬人、深き感激に打たれ、然も面白くて堪らぬ最新物語式編輯法の偉容!! 名士の讃辭、滿天下の反響、果然! 雜誌界に熱叫的大評判!!

特輯　陸軍記念日廿五週年記念

右門捕物帖……佐々木味津三
命脈太功記(幸運事實物語)…谷　孫六
彦山權現誓助劍(芝居講演)鈴木彦次郎
吉岡鬼大佐……大音　龍太
　肉彈! 肉彈! 天地に哭する忠魂物語
父呼ぶえにし……大倉　桃郎
　往年の一兵卒、今は社長の報恩物語

天下大評判の長篇讀物

關東男くらべ……若林陶羅雄
炎を踏む女……三上於菟吉
戀車……吉川　英治
若者よなぜ泣くか……佐藤　紅綠
判官の鬼の手……小泉　長三

面白くて爲めになる粒選りの讀切もの

絶海の孤島を開拓して三百萬圓
　今紀文、今桃太郎とも稱すべき玉置翁の立志奮闘事實成功物語
秘劍鍔切り仇討
　望みは何? 念願は? 一劍を磨く大仇討
鸚鵡の籠
　自殺? 他殺? 問題のモデル大探偵小說
サロン・ドートンヌの娘
　姉と妹 日本婦人貞操保守の悲戀物語
大賢か大愚か
　めき〳〵賣出した教育講演家三浦樂堂氏の最近得難き材料による涙の事實談

富士獨特の讀切長篇

富士を讀みて



樞密顧問官　鎌田　榮吉

雜誌『富士』は何處迄も人間の美點を賞め、邪惡を責めて善惡の境を明かにしてゐることは、理窟よりは寧ろ『富士』を子女教育に讀ませたい位に思ふ。



前大審院長 明大學長　横田　秀雄

『富士』は面白い中に何か爲めになることを、物語でやつてゐる處に、編輯者の苦心が察せられる。難しいものを物語にして多くの人に讀ませる、堅苦しくなく何人にまで讀ませても爲めになる處が獨特の處である。家庭雜誌として最適のもの。



警視總監　丸山　鶴吉

『富士』は世の中を明るくする樣にと、何處迄も道德を基調にして誰にも分るやうに編輯したのは、最も現代に適應したやり方だ。云々。

上品で面白い、家庭にはなくてはならぬ雜誌だと、天下の名士が齊しく推奬してゐる『富士』は、本誌の姉妹雜誌として、素晴しい大發展です。是非御覽下さい。(定價五十錢)

家庭セクション

煮物の呼吸

○味噌汁類は、味噌を加へてからあまり長時間煮ると味がわるくなる。

○煮物に酢を調味する時は、おろし際に酢を入れて、あまり長く煮てはいけない。

○肉類、豆類に醬油を加へて長く煮ると固くなる。

○肉類を煮てその儘鍋に置くと、折角の紅色を失つてどす黑くなる。料理が出來上つたらすぐに他の器に移すとよい。

○長時間を要する煮物に、途中で汁や水を注ぎたすと味が惡くなる。又、途中で火をやすめることも同樣にいけない。

おでこをかくすには

おでこは、髪を洋髪にしてコテをあてゝ、額を恰好よく被ふか、或は日本髪でも、前髪や鬢の毛を前に出して恰好をつけるのが最もよろしいのですが、白粉でかくさうとする時は、頰の方だけ白粉を塗り、次にその上を牡丹刷毛でならし、それについた白粉だけで、あまり白さのつかぬ樣に額を撫でて置きます。から しますと、飛出たおでこも幾らか目立たなくなります。

聞きわけたい小兒の泣聲

まだ物を言ひ得ぬ小兒の泣聲は、能く聞きわけてそれ〳〵手當するがよろしい。或る子守學校では次の泣聲の種類を敎へました。

一、空腹又は渇を訴へる時は、眼を開き涙を出し聲に節つけて泣く。

一、眠い時は眼を細め眼中に少し濕みを帶びて泣く。

一、身體の痛む時は、眼を開き涙を多く出し中聲に泣く。

一、退屈した時は、眼を開き、涙を出さず、頭を左右に動かして泣く。

一、驚怖した時は、急に高聲を出し身震して泣く。

筆跡でその人の性質がわかる

一、ひどく右上りに書く人は、片意地で氣短かで、槪して狭量である。

二、ひどく右下りに書く人は、心の平衡を缺易く、何か特殊の偏癖がある。

三、字が不揃で、クシャクシャして誤字や假名遣の誤りを平氣で書く人は、頭腦が粗雜で不注意である。



四、ペンの當りが強く、トゲ〳〵して、懷の狹い字を書く人は嚴格で意志も強い。

五、ペンの當りが柔かで、丸味があつて、懷の廣い字を書く人は、寛容で優しい。

返禮の仕方

返し物は、普通いたゞいた品の價格の半分若しくは七分位の物を返せばよいと昔から云ひ傳へられて居るが、自分より目上の人からの贈物に對しては、半分か場合によつてはもつと少なくともよい。これに反し目下の者に對しては、同等若しくはそれ以上の物を返禮するのが普通の禮儀である。

○贈物を持參した客が辭去する時その場で返禮の品を差出すのは、相手が目下の場合のみに限る。同輩以上の場合には、日を改めて答禮に行くのが禮儀である。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

毛絲編物の洗濯

毛絲編物を洗ふには、先づなま溫いシャボン湯をつくつてそれに浸し、輕く手でまるめるやうにして洗ひ、おしまひに溫湯で二三度すゝぎます。さうして洗ひ終へたものはしぼらずに雫の滴るまゝで陰干にいたします。くれぐ\も熱湯や冷水を用ひぬ事、又普通の洗ひ物の樣にごし〳〵こすつてはいけません。

牛乳を飲み易くするには

牛乳の香と味を好かぬ病人の營養には時折困らされるものです。飲みにくい方は、先づ麥湯を濃く出してそれに混ぜて御覽なさい、牛乳の臭は全くなくなります。又、果物の汁を牛乳に加へ、少しゼラチンを入れておくと、牛乳と氣附かずに戴けます。

膳と盃はかう受けたい

お客に行つた場合、膳を据ゑる人が、先輩なれば兩手をついて禮を爲し、同輩なれば兩手を膝の上まで下げて挨拶し、給仕人なれば輕く頭だけの禮で結構です。

○盃を受けるには、酌人が前に來たら、下座の者に會釋して、右の手にて盃を取り、左手を添へて酒を受けて飲み、盃は吸物の傍に置きます。

なほしたい癖

かういふ人に會つた、あゝいふ人と語つたと自慢氣に貰つた名刺の陳列、品評を初める癖。



話をしながら、他人の話は上の空、マツチの軸でパイプ掃除、煙管の脂取りに忙しい癖。



六、インクの色が不愉快で、紙面が汚く、一見陰欝な感じを與へるのは、品性が劣等で先づ幸運には緣遠い人である。

七、適度の右上りで、字並びがよく、キチンとして、ハツキリと、然かも何となく味はひのあるのは、几帳面で圓滿で順正である。

寸鐵ノート

○電燈は、六疊の居間三十二燭、八疊十疊の座敷五十燭、臺所二十四燭が標準燈としてある。

○旅館に滯在の時、金庫のある宿ならば、重要品は明かに主人に告げて預けるのが安全。

○老牛の肉は脂が黄色、若牛のは白色。腰肉、鞍下肉、背肉が上等。外腿、胸肉は中等。肢肉は下等。

○師に宛てる手紙には、「何々先生」と姓だけ記して先方の名は書かぬ。差出す方でも名だけ書くのが禮である。

重寶な思ひつき

庖丁や小刀の柄が拔けた時は、差込んで柄をコン〳〵と叩き、鋼と柄の附け根の間にお醤油をポッチリ滴らします。すると鋼が錆ついて再びゆるむことがありません。

三月の園藝

播種 胡瓜、南瓜、茄子、蕃茄、馬鈴薯、甘藍、葱、甘藷、夏大根等。鳳仙花、天人菊、雁來紅、矢車草、天竺牡丹、向日葵等。

移植 甘藍(本植)、秋蒔草花、梅、桃、櫻桃、枇杷、梨、苹果、柿、菊(假植)等。

接木 苹果、梨、枇杷、石榴、櫻桃、桃、梅、躑躅、椿等。

挿木 葡萄、無果花、石榴等。

尚この他霜除を取りのぞき、垣根の破れを繕ふのもこの月の仕事の一つである。



不思議な人・奇蹟的事實

質藏に泣く女の子

吉井蘭芳



私の住んでゐる相州逗子町について一年程前迄山下と云ふ質屋があつた。其家の主人は、念佛源兵衞と綽名されるだけあつて、斯樣な商賣をする者には似合はぬ極く慈悲深い男、謂はゞ親代々の質屋だから仕方がなくしてると云つた風な商賣振であつた。

ところが、昨年の一月廿七日の夜の事、用事があつたので源兵衞が番頭の淸吉と共に、金網提燈を持つて質藏へ行くと、人氣のあらう筈のない、一番奧の眞ッ暗な所に何やら白い物が動いてゐる。

『淸吉！ あの大きな白い物はなンだ？』

吃驚した源兵衞が、小聲で番頭に囁くと、淸吉もそれを氣付いたらしく齒をガタ〳〵させて慄へてゐた。

『ハ、ハイ、どうやら動いてゐる所を見ますと、人間の樣にも見えますが……』

『どうも合點が行かぬ、兎に角提燈を貸せ』

と、源兵衞が、淸吉の手から提燈をとり、怖さを堪へてジッと白い物の方へ光を突出すと、意外！ 其處には三ッか四ッになる女の子が此寒中に一枚の白い襦子を着た切りで、積重ねてある人質物へしッかとしがみついて、ブル〳〵慄へながら泣いてゐるではないか！

あつ！ と、主從の者は再度吃驚。

『お、お前は、ど、どこの兒だ？』と言葉をかけようとすると、不思議や、今の今まで二人の前でブル〳〵慄へながら泣いてゐた女の子の姿が、ふつと消えてもう見えなかつた。

總身水をあびせかけられた樣に感じた源兵衞は、もう口がきけなかつた。突然其場に提燈を投げ出すや否や、轉げる樣に質藏を飛出した。と、『キヤッ』と悲鳴を上げて番頭も續いて藏から飛出した。二人の顏は宛ら死人の樣に眞蒼であつた。

『一體、如何したんです？』

騷ぎをきゝつけた家の者が頻く訊ねたけれど、事柄が事柄だけに、二人は堅く口をつぐ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



んで、其場では話さなかつた。

その夜の明方、トン／＼と表戸を叩く者がある。

『オヤ、馬鹿に早い御客様だなア』と、小僧が呟きながら戸を開いて見ると、時折品物を預けにくる松岡と云ふ人が、此寒空に夏シャツ一枚へ印半纏を引ッ掛け、眼を泣きはらして立つてゐた。

『朝つぱらから濟みませんが、御面倒でも子供の綿入を出して下さい』

と僅かばかりの金を差出した。源兵衛は昨夜の事があるので薄氣味惡くは思つたが、客であつて見れば藏へ行かぬ譯にも行かない、そこで其質物を出しに行くと、こは如何に！　昨夜不思議な女の子が、泣きながらしがみ付いてゐた物こそ、今出しに來た質物ではないか！　源兵衛は腰を拔かさんばかりに驚いて急いで藏を飛出して來て其人に尋ねた。

『つかぬ事を伺ふ樣ですが、お宅では昨夜、何か變つた事がお有りでしたらう？』

すると客も聊か吃驚した樣子であつたが、

『えゝ、實は昨夜、私の一人娘の三ッになりますのが病死致しました。お恥かしい次第ですが不如意續きで、御覽の通り可愛い子供の着物までもお預け致した樣な始末です。ところが昨夜、かねて病氣の子供がこの寒さで一層惡くなり、布子一枚の身體を私共夫婦が代る／＼抱き合つて温めてやりましたけれど、遂に——寒いよ寒いよ——と云つて苦しみながら死んでしまひました。せめてお宅に預けてあつた綿入一枚でもあつたらと思ふと、もう涙も出ません、今朝私と女房の着てゐた着物を賣拂ひ、せめて死體の上へなりとあの着物を掛けてやりたいと存じまして、お早くからお邪魔に上つた次第です』

と、涙ながらに物語る。

『あゝ——さては昨夜のはその娘の一念であつたか』と、源兵衛は昨夜の恐ろしさも打忘れて哀れを催し、その子供の着物はもとより松岡の入質品全部を無條件で返してやつた上心ばかりの供養料だと云つて金百圓を送つたのであつた。

『それにしても、罪なのは質屋といふ商賣』

と斯うした事があつてから十五日目に、彼は念佛源兵衛の名に背かず、質入主全部を呼び、在庫質物を殘りなく無條件で返してやり、親代々からの質屋をふッつりと止めて了つた。



恐怖すべき報知

岡本麻須夫

『さあ、これで野鴨が一番揃ひさへすれば、萬事、準備が整うたといふもの』

岸和田地方には、明治初年頃まで、結婚式には生きた野鴨を一番用ゐる風習があつた。それで富豪のS家でも、數日後に迫る若主人の結婚式に用ゐるため、持ち山の泉州孝子の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

山に番頭を遣つて、日頃目をかけてゐた獵師にとらせることにした。

『お安い御用ですとも、少し此處でお待ち下さい、直ぐ生捕つて來ますから……』

折よく家にゐた獵師は、二つ返事で引受けて、直ぐに霞網を手にして山へ出掛けた。

あとに殘つた番頭はかつ〳〵と燃えさかる囲爐裏のそばで、熱い澁茶を啜りつゝ、傍で嬰兒に添乳してゐる獵師の女房と四方山の話をしながら、獵師の歸るのを待つてゐた。

やがて嬰兒はスヤスヤと眠つた。——

一刻、また一刻と經つ裡に、いつか話の種も盡きるし、飽きてもくる。欠伸、また欠伸、番頭はすつかり退屈してしまつた。

『獲れるでせうかなあ』

『大丈夫獲れませう。でも、相手も生物だから』

斯うなると餘計な心配さへ湧いてくる。



が、それもしばし、ほか〳〵と暖かい榾火と退屈に誘はれて、番頭はいつかうつら〳〵と居眠りをはじめた。

『あつ！ 今、一羽獲れた』

突然さういふ女房の聲に、ハッと眼を醒ました番頭は、不機嫌さうに顔をしかめた。

『どうしたといふンです』

『たつた今、一羽網にかゝりましたから、思はず大きな聲を立てたのです』

『冗談ぢやない、此處にゐて山の様子が判つてたまるもんですか、はつはつは』

番頭は女房が夢でも見たのだらうと、吹き出してしまつた。

『いゝえ、解ります、永年試してみて一度だつて外れたことがないのですから……實は私も偶然氣がついたのですが、夫が獵に出た留守に、スヤ〳〵眠つてゐる嬰兒が、時々、びくりと怯えるやうに身を慄はせるので、その時刻をよく〳〵調べてみると、丁度山の中で獲物のあつた時にあたつてゐます。それから幾度試してみても間違ひがないので、今では嬰兒の怯えるのが、獲物のあつた知らせと決めてゐます』

獵師の女房は至極眞面目だつた。

然し番頭は、（嬰兒の怯えるのは有り勝のこと）だ、それにそんな作り話のやうなこと、と腹の中では笑つてゐた。

その裡に、嬰兒はまたびくりと怯えた。

『あつ、二羽になりました』

獵師の女房は、得意氣に笑つていふ。

こんどは番頭も、明かに嬰兒の怯えるのを認めた。が、それを大眞面目で獲物の報知といふ獵師の女房は、氣でもふれてゐるのではないかと、薄氣味惡かつた。

そんなことが五度續いた。

『今日はよい按配に五羽も獲れました。きつと五羽持つて歸りますよ』

さう女房が話してからいく程もなく、表戸をガラリと明けて、獵師が威勢よく歸つて來た。

しかも彼の手には、女房の豫言通り、丸丸と太つた野鶫を五羽ブラ下げてゐた。

これを見た番頭は、頭から水をかけられたやうにゾッとした。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

この話を聞いて、和歌山の某實業家も、好きな狩獵を斷然止めたといふ。



六感で生きる男

廣瀬はじめ

村中總出で搜しても判らなかつた變死體を啞のくせに、三人迄も意外な處から目付け出したので疑はれ、藤澤部落で無口の松で通つてゐる啞の松藏が、警察に引かれた。と意外にも松藏は、立派に耳が聞け、覺束ないながらも、言葉も話せることが判つた。

『お前は口が利けるのか』

てつきり喰はせ者と睨んだ司法主任は、雀躍してなほも嚴重に取調べると、松藏は巧みな身振りと筆談で、言葉の足らぬところを補ひながら、數奇な身の上を打明けた。

松藏が物心地ついた時には、父と唯二人で全く人里と交渉のない山の中に住んでゐた。松藏の父が隱遁生活を營むやうになつたのは餘程深刻な事情があるらしく、松藏に對しても一切口を利かず、唯顏色でお互ひの心持を讀みあふばかりだつた。それで松藏も自分の體驗から、人間といふ者は物が言へるものだと知つたのは十歳位の時だつた。が、慘しい父の様子に子供心にも同情して、松藏も亦一切物を言ふまいと心で誓つた。父の死後、三十歳の時に人里に出てかれこれ二十年、今ではどうやら言葉が解るやうになつたものの、顏色だけで心を讀むことは昔も今も同じことであつた。

『今迄誰にも話さぬ身の秘密を打明けたのも、實はどんな事があらうとも調べずには置かぬといふ、貴君の決心が顏色で解るからです。

——私が此處に留められてから十日餘りになりますから、外部の出來事は一切判らぬ筈ですが、然し私には判る道があります。

そら、あの裏の木に椋鳥が澤山止つてゐるでせう、あの中で上から三番目の鳥は俊風山の麓から來たのですが、今囀つたのは、

「山火事で俺達の巢が燒けたから、みんな揃つたら新しい方面へ搜しに出かけよう」

と言ふ意味です、お調べ下さい、きつと此頃山火事があつたでせうから…私の言葉通りだつたら、幾度私が屍體を見付けようとも不思議がない筈です。私の特に仲のよい鳥が、三里も四里も先きの死臭を嗅ぎつけて啼きたてるのですから…』



松藏の言によつて果して俊風山麓を調べたら、五六日先きに山火事があつたと解つた。それで不思議な人間として釋放せられた。

それから二三ヶ月經つた昭和三年の秋、漂然として何れへか去つた。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



寫眞に撮つた幽靈

宮崎一義

『おい、二の組の者に逢はなかつたか？』

『否、逢はない。實は俺達も先刻から不思議に思つてゐたんだ』

明治三十一年の春、北海道旭川附近の中別川に鐵橋を架設することになつたが、その時の工事に使用するコンクリートは、一哩も放れたところから運搬車で運んで來なければならなかつた。運搬車は三臺、一臺を六人宛で手押しするのだが、その日も朝からせつせと押して、一哩もある處を往いては還り、往いては還りしてゐる裡に、如何したことやら二の組の運搬車が見えなくなつた。

『をかしいなあ』と呟してゐる裡に、三の組の者に出逢つたので尋ねると、向ふでも矢張り、不思議に思つてゐたといふ返事。

『ちや、何か異變が起つたぞ』と早速事務所に報告して取調べると、二の組の者達が共謀して、運搬車をコンクリートの枠の中へ投込んで、逃走した事が判つた。

その秋。無事に工事も落成して、二三ヶ月後には開通式をあげるといふ十月の中旬、一人の寫眞屋が此鐵橋をカメラに納めた。そして歸宅していざ現像しようとすると、いやに鐵橋が薄ボンヤリと映つてゐる。

『チェッ、光線も充分にあつたのに』

舌打しながら、その乾板をハイボート水に入れ、やがて取出して赤いガラスで透して一目見ろ、のけぞらんばかりに驚いた。

薄ボンヤリと撮つた鐵橋の手前に、これも薄ボンヤリと撮つてゐるのは、確かに人の姿、しかも土工風の六人の男だ。

その寫眞屋は眞蒼になつて警察に驅け込んだ。と、洩れ聞いた新聞は、よい種とばかりに、尾鰭をつけて報道する。結局、半年前に起つた土工の逃走事件は、實は逃走したのでなく、誤つて枠の中に墜落したのを、鬼のやうな監督が知つてゐながらその儘工事を進め、逃走したやうに繕ろつたのだといふことになつた。



早速警察で、當時請負つた小野組の監督を取調べると、

『どうせ引上げても助からぬと思ひましたから、その儘にしました』

と口が落ちたので、事件は札幌の裁判所に廻はされたが、公判になつてから監督が前言を翻したので、結局一枚の乾板ではど、もならず、證據不充分で無罪になつた。

私はこの話を、當時一の組の杣山といふ老土工から聞いたのであるが、當時その噂を傳へ聞いた寫眞屋共が、吾も吾もと中別川の鐵橋を撮しに出掛けたが、それ以外には幽靈らしいものが撮れなかつたといふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

少女の方々に
よい雜誌をお與へ下さい



少女倶樂部をすゝめる

第五高等學校教授　八波則吉

『少女倶樂部のために執筆する時は、ちやうど教科書用讀本の編輯員になつたやうな嚴肅な氣持で書く』と西條八十氏が云はれてゐますが、これは西條氏だけではありますまい。私も折々同誌に書きますが、實際國定讀本を書いてゐた時と同じ緊張した敬虔な氣持で筆を執ります。何度も〱讀み返して、これなら分り易く面白くさうして爲になると、十分な自信が出なければ寄稿しません。それでも時に沒書となることがあります。それだけ記事が精選されてゐる譯です。道理で粒が揃つてゐます。どの頁を讀んでも、明るく、希望と元氣に充ち滿ちて、健全な讀物ばかりです。少女諸子が喜ばれる筈です。課外讀本として推奬の價値があります。



少女讀物に就いて

奈良女子高等師範學校校長　槇山榮次

極めて面白く讀まれ而かもそれが大なる教訓となると云ふことであつたたらば、少年少女に對する好讀物であることは固より云ふまでもないことであるが、少女倶樂部は此條件に適した教育的讀物であると信じてゐる。表紙の繪も又口繪も皆上品に出來てゐることは殊に結構である。



よき指導者

貴族院議員　三島章道

明るく、優しく、のび〱と……興味と教訓を巧みに鹽梅して、日本の乙女のよき心の友であり得る雜誌と『少女倶樂部』の編輯にはいつも敬意を表してゐます。少女の生活のよき指導者であり、又よき伴奏である雜誌、それは『少女倶樂部』です。

本社發行の『少女倶樂部』は幸に大方の旺なる推稱を頂き、毎號發賣毎に至る處大歡迎を受けてゐます。三月號は又々實に立派な大附錄『優美雛様合せ』つき、少女方大喜びのものです。是非おすゝめ下さい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



ルーズヴェルトの雄辯
火の如き魂の叫び

外務政務次官 永井柳太郎

私は米國在住の日、偶然にもルーズヴェルトの此世に於ける最後の演説を聽いた。時は大正七年の秋、ニユー・ヨーク市のカーネギー・ホールには、聽衆が雲霞の如く押寄せて、私は漸く屋根裏のやうな所へ入り得たのであつた。やがて壇上に現はれたルーズヴェルトは、自分の愛する息子を戰場で失うた悲しみを、その胸に押し包みつゝ、雄々しくも叫んだ。

『アメリカはドイツが無條件で降伏する迄は、斷じて戰はねばならない。我が建國の精神たる自由、平等、友愛の大義の爲には、國を擧げて戰はねばならない。私も亦老軀を捧げて、アメリカのため雄雄しくも戰ひ斃れた我が愛子の後を追はんと欲する』といふや、萬餘の聽衆は總立ちとなり、婦人は聲を擧げて泣き、男子は帽子ハンカチ等を振つて、百雷の如き歡喜の聲は、さしものカーネギー・ホールを搖り動かしたのであつた。彼は此演説を終つて間もなく、病床に就き、竟に再び起つ能はずして、その愛子の後を追うたのであつた。

想ふに戰場に於て同じく二子を失うた我が乃木將軍が、若し凱旋後壇上に立つたとしたならば、其時數語を發したに過ぎなかつたとしても、そは恐らく滿場の聽衆を慟哭せしめ、永く後世の人心を感激せしむるに足る大雄辯であつたであらう。

要するに、演説は魂と魂との接觸である。

私は思ふ。雄辯は火である。直ちに聽衆の肺腑に徹する火の如き魂こそ眞の雄辯である。

雄辯は決して言語ではない、魂それ自身である。雄辯は決して技術ではない。人格それ自身である。雄辯は決して演劇ではない、生命それ自身である。

大日本雄辯會は、曩に私の大正時代に於ける演説集を出版して呉れたが、最近その第二集を要求するものが多いと云ふので、今回更に昭和時代の演説集を出版することになつた。私の演説が、多少なりとも讀者を動かすものがあるとすれば、それは私が日本國民に訴へたいと思ふことを率直に熱烈に述べた私の魂の叫びである。

× ×

永井柳太郎先生の雄辯は餘りにも有名であり、今こゝに呶々説明するを要しない。先生が日本を良く強く、世界人類の幸福を圖り人物を練り、社會を改善するの理を、熱誠熱涙を以て叫ぶ時、滿堂の聽衆は心から醉ひ熱狂し、震天の大喝采

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

をなすのである。暗憺たる現代生活者に一大光明を齎らし、社會、生活、思想の重大問題に明確なる解決を與ふるものである。茲に全國民大渇望の演説集第二集は出づ！時代に活躍せんとするものはこゝに來つて熱讀あれ。永井柳太郎氏大演説集第二集（新刊定價一圓五十錢送料十錢）



山中峯太郎氏の著「九條武子夫人」

大谷紝子

武子夫人の、さして永くなかつた寧ろ短きに過ぎた御一生。然し又其內容に於ては、極めて豐富であり、讃へるべきもの、多い御一生が、此書に依つて描き出されたのを讀んだ自分は、再び新たなる悲しみと、果しなき讃嘆の交錯せる感じに打たれる。

出來ない事であるが、夫人があゝまで短命でなくて、或る時期に夫人の筆になる自叙傳が顯はれたならば、自分はどの位感激を以て讀み得たであらう。この感じを持つ人は、恐らく自分一人ではないと思ふ。然しそれがあり得ないとすると極めて近き所まで夫人の面影を寫し出し夫人の輪廓が幾分なりとも讀む人の頭に畫き出されてる、本書の如きは夫人の知己である人に取つてよき物と言ひ得られる。

大なるものゝ力に引かれながら、社會の一路を進んで行かれた夫人は、最も幸福な方であり、現代的な妙好人である。こゝに於て眞宗教義の力强さを覺えると共に、この佛の慈光の內に無爲に幕さず進んで報恩謝德の 營 に精進せられた事

良書陳列棚

政界側面史 林田龜太郎先生著

政界通の第一人者たる著者が政界の變轉、大人物の活躍、閥族の葛藤、明治元勳の秘話逸話を如實に描寫せる快著（定價三圓送料十四錢 本社發行）

日本政黨史 林田龜太郎先生著

明治維新以後、自由民權の叫び澎湃として起り、幾多熱血の志士が貴き犧牲の血を流して確立せる政黨の搖籃時代に筆を起



し、議會開設、政黨の消長等またその間に活躍奔走せる大人物先覺者の行動を詳細に興味深く描ける政黨史中の至寶。本書を讀まずして政治を談ずる能はずと稱讃されてゐる名著。（定價上卷定價二圓八十錢下卷定價二圓五十錢送

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

は又眞宗教義に生育せられたる、教養ある婦人の最上の典型である。

先きに光顏院籌子夫人を亡つたが、其あとには遺志に依る、女子教養機關が日に月に發達して行く。近く武子夫人を亡つたが、其遺業の社會事業は芽生えんとしてゐる。三河島や本所深川の診療所では、幾百の人が暖い情に喜んでゐる。奉仕される博士達の御顏には愉快さうな喜びが流れてる。夫人の光り輝いた精神が何かの形に於て殘つて行く事は、夫人の如き人のあとに當然あるべき事で、それはこの書を通讀すれば卷なかばならずして其の感じが湧いて來る。

× ×

一代の麗人、愛と感激の一生物語、山中峯太郎先生畢生の名著『九條武子夫人』は、麗玉の如き容貌と比ひ稀なる才藻と氣高き信仰の人九條武子夫人の尊くも悲しく美しき四十二年の生涯を叙したるもの。一讀宛ら生ける夫人に對する如く、襟を正し熱涙に咽ばずに讀み得ぬ萬代の名著。悩める人には救ひの光り、迷へる人には導きの手、淋しき人には慰めの泉──男子も婦人も是非お讀み下さい。（定價二圓送料十二錢　本社發行）

愉快だ、痛快だ、無類だ
ムッソリニの演說

前伯國公使　堀口九萬一



二十世紀のナポレオン伊太利の黑シャツ大宰相の演說集『ムツソリニの獅子吼』が伊太利語の權威家下位春吉氏の飜筆に依つて大日本雄辯會講談社から最近出版されたので、僕は早速一讀した。そしてその

料各十四錢　本社發行）

政界縱橫記　久木獨石馬先生著

維新の三傑、明治の元勳、官僚政治家、政黨政治家、或は藩閥、軍閥、貴衆兩院の內幕、その人物と功罪とを論ずるに當つては何等の假借する所なく痛快無比（定價二圓廿錢送料十二錢　本社發行）

現代日本論　鶴見祐輔先生著

日本の國際上の位置を論じ、或は文學、思想、勞働、婦人等の諸問題を說き東洋文明の神聖と日本文化の眞相、世界の大勢を明らかにし、新興日本の將來を教示す。日本人たる者必讀の名著である。（定價一圓六十錢送料十錢、本社發行）

新日本への道　佐藤鐵太郎閣下著

熱血護忠の著者が、祖國愛のため國民の覺醒を明らかにし、國民の現代に處すべき道を示す。

……た等と云ふ有り來りの言葉では僕の感情を言ひ現はすには不足だ。僕は全く魅了されてしまつた。最初の一頁から僕はまるで夢中になつて讀んでは驚嘆し、驚嘆しては讀み續けて行つて、四百頁の大冊を一氣に卒讀してしまつたのである。

ムッソリニの演説が何に依つて斯く迄に僕をして熱狂的に愛讀せしめたか？その理由はかうだ。

ムッソリニの演説はその内容が極めて豐富で、その表現が常時簡單明瞭であるからである。彼はその思ふ處を大膽に赤裸々にさらけ出して少しも飾り氣がないからである。その用語は簡易で明確で、大膽で奇警で、率直無遠慮で痛烈で峻酷であるからである。その齒切れのよい、てきぱきした單刀直入の一言一句は人の肺腑を突き通さずには措かぬからである。況んや之に加ふるに、赤化し衰弱し披憊し腐敗し墮落し果てたイタリヤを元氣潑剌たるイタリヤに改造し復興し復活せしめんとする彼の雄大なる氣魄と、外……は伊國内に於ける反對黨の非議や反抗やなどを屁とも思はぬ大膽と勇氣と、天をも焦がし地をも燒かん許りの愛國の熱情とはこの演説集の讀者をして我れ知らずその雄大莊嚴に驚嘆駭心せしめ、終には之に敬服せずには居られなくするからである。

況んやその經綸の雄大豪宕、同時に緻密確的なるに至つては、眞に曠世の雄略が、その中に醞釀磅礴されてあるからである。故にこの演説集は啻に近代的演説の好模範たるのみならず、苟くも政治に興味を有する者の爲には必ず一讀せざるべからざる好書として推賞することを憚からぬ次第である。

特に此の書が下位氏の妙譯のお陰で恰かもムッソリニの大獅子吼を直接に聽くが如き感あらしむに就て僕は深く譯者に感謝せんと欲するものである。

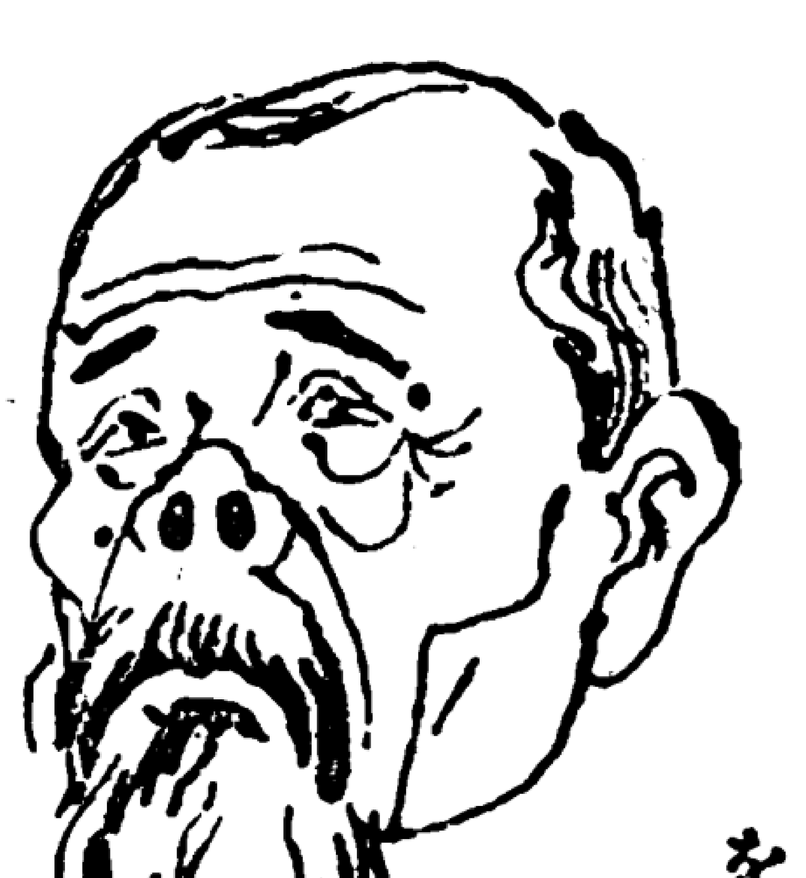
× ×

下位春吉先生の名譯著『ムッソリニの獅子吼』は定價一圓八十錢送料十二錢本社發行。發賣數日にして初版賣切、忽ち十四版の大評判、青年男女の必讀を請ふ。

……を喚起せんとする大文豪。（定價二圓送料十二錢、本社發行）

俗戰國策 杉山茂丸先生著

伊藤、山縣、桂等の智囊として活躍せる著者が、自ら參畫せる驚倒の大事件を赤裸々に描寫せる得難き政界裏面史、昭和の『戰國策』。思はず血湧き肉躍る大快著（定價二圓五十錢送料十六錢、本社發行）



中道を歩む心 鶴見祐輔先生著

我等は如何に生くべきか何を爲すべきか赤心を披瀝して理想の境地を叙す（定價二圓五十錢送料十四錢本社發行）



春遠からず

加藤武雄
伊東深水畫

謎の指輪

しげ子は、その日も平常通りに出勤して、仕事の卓に向つたが、何だかそは〱と氣が落着かず、ともすると、ペンの手をお留守をしてぼんやりと眼を瞬つて空に幻影を追ふのであつた。

昨日の歸途に會つたあの藤代の言葉――あれは本當なのであらうか？　探してゐる人がある、その人に會はしてあげ度いから、住所を敎へて呉れ。さう云はれて、住所をあの人に敎へて了つたのは、あとで考へると、どうも輕率過ぎた氣がする。あの人が自分に住所を訊いたのは、果してその人の爲めにであらうか？　あの人は、あんな風に云つてうまく自分を欺して、あの榎本欣助の爲に自分の住所を訊いたのでは無からうか？　若し、自分が斯うしてゐることが、自分の所在が、あの男に知られてしまつたなら――。

さう思ふと、しげ子は、うつかり、藤代に住所を告げてしまつた自分の輕率を悔いずにはゐられ無かつた。

だが、しげ子は、然う深く人を疑ふ事の出來無い性質だつた。いゝえ、そんな事は無い――と彼女は直ぐに打消した。

明日になつたら、どんなかの方法でその人に會はせてあげる。勤め先に電話を掛けるか、おうちの方へ迎へに行くか、どちらかにするからそのつもりで待つてゐて貰ひ度いと藤代は云つたが、では、今日は愈ゝその人に會へるのだらうか？

その人！

だが、何といふ不思議な事だ。たゞ、その人とだけで、未だその名さへ知らないのだ。それは、夢の人、幻影の人なのだ。その夢の人、幻影の人を、夢ならぬ幻影ならぬ一個の實在的人物として證明するものは唯一つ――その細い藥指の上に、沈んだ銀の色を燻らしてゐる指環だつた。

その人の亡き愛人が、形見として、その人を通じて妹のみち子に贈つた指環――。贈り手はその人では無い、贈られた者も自分ではない。が、何だかその人から自分が贈られたものゝやうな氣がしてならない。そして、その贈り物に、一つの運命的な意義が含まれてゐるやうな氣がしてならない。

それにしても、その人が自分を探してゐると云ふ、自分を求めてゐるといふ。それは本當であらうか？　而して、それは何故であらうか？

しげ子にとつては總てが謎である。解き難き謎である。同時に、胸を躍らせる謎である。その謎が一つの形象に凝つたもの――――それがこの指環である。しげ子は、長い睫毛を垂れた眼で、じつとその指環に見入るのであつた。

『鏑木さん。』

ふと、しげ子は隣席の同僚から呼びかけられた。

『はア？』

不意だつたので、吃驚してその方を振向くと、老嬢の井川は、

『何か考へ込んでいらツしやるのね。』

と、皮肉な眼で笑つた。しげ子が赤くなつてどぎまぎしてゐると、

『失禮ですけど、そこの發送簿の（甲）をとつて頂戴。』

さう云はれて、やゝ慌て氣味で、しげ子は前の棚から厚い帳簿を抜き出したが、抜き出した拍子に、帳簿の小口が、インクスタンドに當つて、あツと思ふ間に、それがひつくりかへつた。

『あら！』

帳簿を手渡したがらも、しげ子は、すつかりその失策に狼狽してしまつた。赤いインクはどく／＼と卓の上に流れてゐる。

しげ子は手早く卓の上のものを取除けると、袂から手巾をとり出して、流れるインクをそれに浸した。

『まあ、大變！　どうなすつたの？』

井川は一寸冷たい微笑を浮べながら、

『インクを覆してしまつたのね？』

『ぼんやりして居たものですから、つい――』

『鏑木さん。今日はどうかなすつてるわ。』
しげ子はその粗相を恥ぢながら、卓の上の始末をした。手巾も、手も、インクで眞赤になつてしまつた。
しげ子は洗面室の方へ小走りに走つて行つた。
しげ子はそこで手を洗つた。インクは指と指環との間に滲み込んでゐたので、指環をとつて前の棚に載せた。インクは洗つても洗つても落ちなかつた。
『どうしたのです？』
背後に聲がしたので振返つて見ると、それは編輯部の横井だつた。うるさい人！　と思ひながらも、しげ子は、
『手をよごしたものですから――。』
と、口の中で云つた。
『手を――あゝ、インクをつけたんですね。』
『えゝ。つい、粗相してしまつて――。』
『きれいな手ですね。そんなきれいな手をインクでよごしたりして全く勿體無い話だ。』
横井は、洗はれてゐるしげ子の手を見ながら云つた。
しげ子は、こんなところで、此の男につかまつちや堪ら無いと思ひながら、手早く洗つてしまつたが、手巾は捨てゝしまつたので、濡れた手の始末に困つた。
『これ、貸したげませう。お拭きなさい。』
横井は、それを見ると、透かさず自分の手巾を差出した。しげ子はことわるわけにも行かないので、それを借りて濡手を拭いた。
『どうも、ありがたう御座いました。』
手巾を返してから、前の棚の上に載せて置いた指環をとらうとした時、
『一寸拜見。』
素早く横井の手がさしのばされた。横井はそれを手にすると、少し近眼なので、眼のすぐ傍に持つてゆくやうにして、
『白金ですね。こりやあ、なか〳〵上等です。――約婚指輪ツてえわけですか？』
『あら、そんな――。』
『然うぢやあ無いんですか？　それで安心――とつ。』
そんな事を云ひながら、横井はしきりにそれをいぢくり廻して、
『少し型は古いですね。――だが、何だか由緒のありさうな指環ですね。何か、斯うロオマンスの籠つてゐさうな――。』
『あの、どうぞ――。』
と、しげ子は、返して呉れるやうにと手をさし出した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『まあ、もう少しお見せなさい。』

と、横井はその手を拒んで、

『だが、これは一體どういふ指環なんですか？』

『どうツて、別に何でもございませんの。』

『戀人から贈られた——といふんでも無いんですか？』

『まあ、そんな——。』

『ぢや、死んだお母樣の形見とでもいふんですか？』

『あの、どうぞ、お返し下さいませ。』

『返して上げない——。』

と、横井は、眞面目とも冗談ともつかない妙な笑ひ顏をしながら、指環を持つた手を背後に隱して、

『ねえ、鏑木さん明日日曜でせう。明日H——座へ行きませんか？　僕だけぢや無い、



僕の宿の娘も一緒に誘ひますよ。だから、いゝでせう?』
『……………。』
『宿の娘を是非あなたに紹介し度いのですよ。』
『ありがたう御座います。――あの、どうぞその指環を――。』
『指環は、その時返してあげますよ。明日、あなたのお家へお誘ひに寄つた時――。』
『あら、困りますわ。そんなこと――。』
『いゝでせう? ね、お約束のしるしにそれまで預つておくだけの事ですよ。』
　しげ子はすつかり困惑してしまつた。相手の圖々しさが腹立たしくもあつたが、力づくで奪ひ返すといふわけにも行かなかつた。
『大丈夫、屹度お返しします。いゝですか、明日、午後二時頃ですよ。僕、あなたのおうちをお尋ねしますから、待つてゐて下さい。その時、これは返してあげます。』
『困りますわ。どうぞ、御冗談なさらないで――。』
『は、は！』
　と、笑ひながら二三歩あとじさりして、
『まあ、いゝでせう。どんな大事な指環か知らないですが、半日ぐらゐ僕に預けてお置きになつたつて――。』
『あの、どうぞ、後生でございますから――。』
　えへら、えへらと笑ひながら、しかし、その眼眸にはへんに熱ツぽいものを籠めて、
『いゝでせう? ね、僕はゆつくりとあなたに聞いて頂き度い事があるんですよ。明日おうかゞひしますよ。その時、お返ししますよ。』
　横井は、指環を持つた手を背後へ廻してしまつて、どうしても渡さうとはしないのだつた。
『あの、本當にもう、御冗談なさらないで――。』
　と、しげ子が横井の方へ進み寄らうとした時だつた。出版部の主任をしてゐるやかましやの老人がそこへ通りかゝつて、迂散臭さうな眼でじろりと二人の方を見た。しげ子ははツとしたが、横井も、ひどく狼狽したらしく、くるりと背を向けると、逃げるやうに廊下を彼方へ、編輯室を目ざして歩み去つた。
『鏑木さん！　鏑木さん！』
　と、事務室の方からは、同僚の菊子の呼び立てる甲高い聲が聞えて來た。しげ子は、その指環が氣になりながらも、そのまゝ事務室へ戻つて行かねばならなかつた。

隣の卓（テエブル）

　嫩子！
　禮吉は、その墓標の前に立つと、さう、その名を呼んで見た。
　今日は嫩子が死んだ日である。嫩子が、お茶の水の病院で、去年ほろりと落ちた露のやうに果敢なくなつてしまつたのは、去年の今日であつた。あれからもう一年經つのだ。その一年を、何

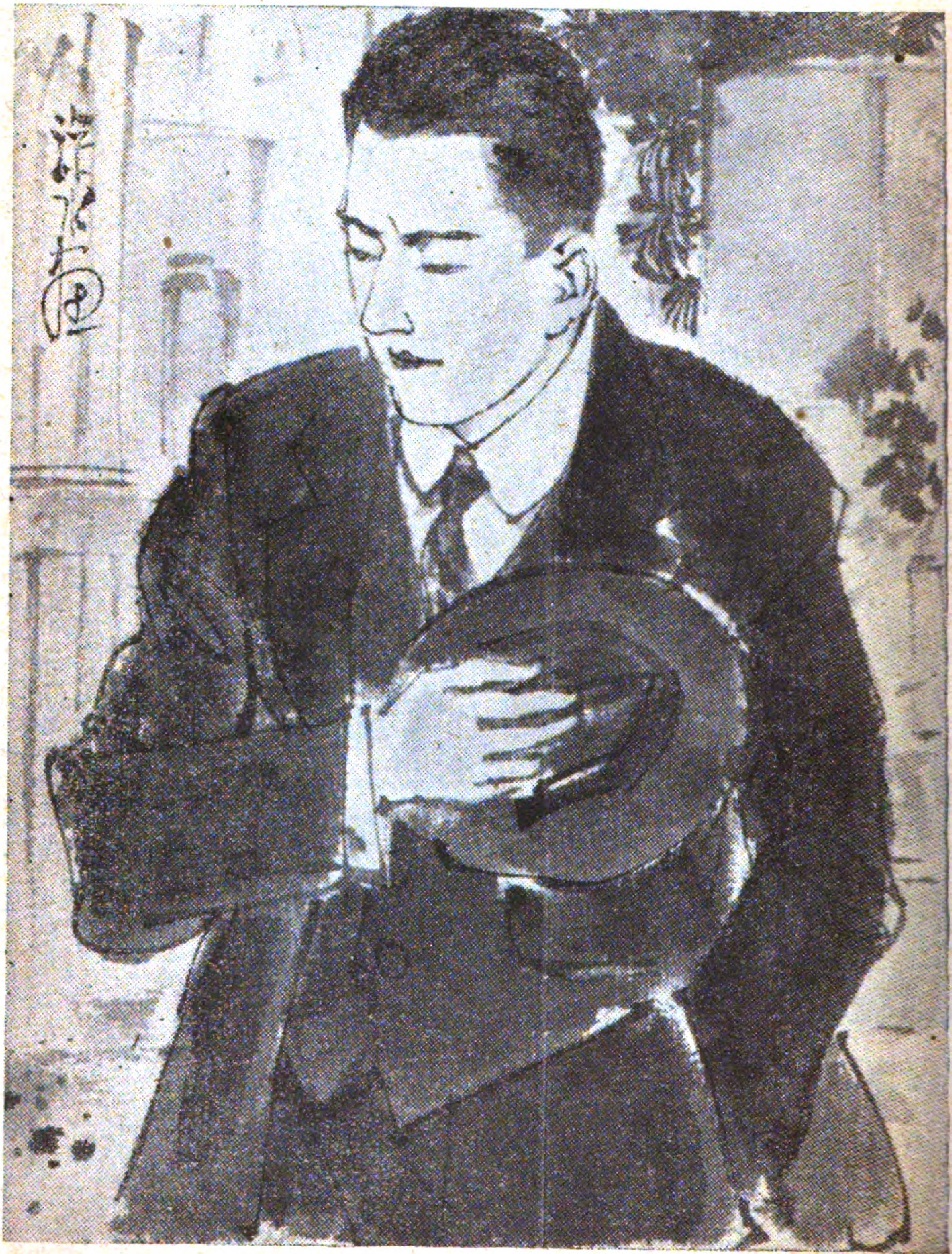
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

といふ不思議な夢と惱みとの裡に過した事であらう？

嫩子が死んだ時、彼は、あらゆるものがその死と共に失はれた事を感じた。そのおもかげを胸に抱いて、生涯を彼女の喪に籠るつもりでゐた。——その氣持を、今、墓標の前で思ひ返した時、禮吉はひどく嫩子に對して濟まない氣がした。

おゝ！　いかに久しい間此の墓を、墓の主を忘れてゐたことか！

だが——彼女は、今日の斷うし



た自分を、賢くも豫言してゐたのだ。死の前に彼女の言つた言葉――それが今禮吉の胸によみがへつて來た。

『あなたには、長い未來があるわ。新しい幸福が澤山待つてゐるわ。私の事など忘れておしまひにならなければ――そして、新しい幸福に向つてお進みにならなければ――。』

そして、その嫩子の言葉を裏書したのは、あの岡本氏の言葉だつた。

『君は、その娘さんの事を忘れることは出來ないだらう？ ところで忘れねばこそだよ。忘れねばこそ、その娘さんは、多分もう一度君の前にあらはれて來るだらう？』

さうだ。あの岡本氏の言葉は決して自分を欺かなかつた。嫩子の死――それと同時に、自分に生れたもう一つの新しい夢！ さうだ、それは、死んだ嫩子がもう一度自分の前にあらはれたので無くて何だ！

禮吉はじつと眼を閉ぢて想ひ描くのだつた。死んだ嫩子のおもかげを――そして、それと分ちがたく融け合つてゐるあの未だ見ぬ女のおもかげを――。



嫩子よ！

と、禮吉は、その墓標に向つて呼びかけるのだつた。お前は死んだ。だが、お前は生きてゐる。もう一人のお前が、生きてゐるのだ。それをおれは知つてゐる。お前も、知つてゐるであらう？

さうだ。おれは探すのだ！ 幾度失敗しよう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

と、おれは決して失望しはしない。おれは乾度、探し當て丶見せる。もう一人のお前を、お前が、その冥冥の意志に依つてお前の形身の指環を贈つてある筈のその人を——。



禮吉はかう心の中に繰返して、その墓の前を離れた。

もう夕暮だつた。墓域をとり圍む欅の梢は夕風に鳴つて大海の濤のやうな響を立て丶ゐた。——禮吉は外套の襟を立て丶、うつむき勝の歩みで、雜司ケ谷の墓地を出た。

歩きながら、彼は、今朝受取つた岡本氏の手紙のことなどを思ひ出してゐた。

岡本氏には、一切の經過を、その都度々々詳しく報告してやつて居た。それに對して、岡本氏はいつも長い返事を書いてよこしたが、あのあはれな狂女の死の噂を傳へてやつた手紙には——長い間返事が無かつた。それは、その報知が、どんなに、ひどく彼の胸を噛み裂いたかの證據だつた。

（お丶、哀れな女！——私は心から泣いた。私のやうに老い干乾びた身にも、未だこんなに多くの涙が殘つてゐたかと思ふほど。そしてあの手紙を讀んだ晩から私は意氣地無くも寢ついて了つたのだ。）

二十日も間を置いて來た返事にはそんな風に書かれてゐた。

（だが、何といふ愚かな悲しみであらう？ 彼の女の生涯は、やうやく、死によつて救はれたのだ。苦み抜いたあの女は、やうやく安息をゆるされたのだ。私は、むしろ、あの女の死をよ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ろこび且つ祝福しなければならぬ筈なのに。）

さうも書かれてゐた。

岡本氏は、此頃ひどく健康を惡くしてゐるらしい。今朝受取つた手紙にも、積雪に埋れた田舍町に、ひとり病んでゐる淋しさが語られてゐた。そして、

（もう少し身體工合が宜かつたら、せめてその小さい娘をだけでも見る爲めに私はもう一度東京へ出て行つて見度いのだが――。）

などとも書いてゐた。小さい娘といふのはみち子を指すのである。そんな言葉にも、やうやくその胸を噛みはじめたらしい焦燥が、はつきりと語られてゐた。

焦燥――それは勿論禮吉にこそ激しかつた。屹度探し出して見せる！　さう思ひながらも、あまりにも屢ゝ繰返される意地の惡い行きちがひが、ともすれば彼を暗い絶望に導かうとする。彼は、天を仰いで溜息をつくのだつた。運命よ、神よ、どこまで殘酷に、此身を飜弄しようとするのであるか？

彼は、次第に、暗く思ひ屈しながら雜司ケ谷の通りを早稻田の方へと歩き續けて行つた。

いつの間にか夜になつてゐた。灯のちらめき出した街々には、青白い靄がしつとりと降りはじめた。此の都會の熱鬧と狂燥とを何となく神秘的な夢見がましい雰圍氣で押しつゝむところの、あの季節特有の胡粉色の靄が――。

神樂坂の中ほどの、此頃新しく出來た珈琲店の二階の卓で、女給仕を相手に何かしきりに冗談口を利き合つてゐるのは、K――社の記者の横井だつた。

『お見せなさいッたら――。』

『いやだよ。』

と、横井は、とられた手を振りほどいて、その、指環のきらめく指の上にそつと接吻を與へて見せた。

『厭な方！』

と、白粉まるけの、お盆のやうに丸い顏をした女給は、つんと横目で睨むやうにして、

『何よ。そんなもの――。どうせ、夜店か何かで買つた安物だわ！』

『馬鹿を云つちや困る。これは白金だぜ。小さいけれど金剛石がはまつて居るのだ。』

『うそよ。ニツケルよ。金剛石だなんて、硝子玉のごまかしものだわ。』

『馬鹿な！　ニツケルがこんな色をしてゐるも





のか？』

『ぢや、お見せなさい。』

『見給へ。君なんか、こんな上等な指環、拜んだ事も無いだろ。』

『あら、本當ね。本當に白金だわね。』

と、女給は男の手を、胸元に引よせるやうにして、

『まあ、一寸、見せて頂戴。』

さう云ふや、その指環を手早く指から抜き取つてしまつた。

『いけない。いけない。』

櫻井は、慌て

それを取返さうとしたが、女給はそれを拒みながら、熱心にその指環に見入つて、

『だけど、こんな指環、本當にどうなすつたの？』

『ある女から貰つたのだよ。』

『うそ！』

『うそぢや無いさ。渝らぬ愛の誓ひといふ奴だよ。――しかも、それがどんな女性だと思ふ？』

横井は少し醉つた顏に、誇らしげな微笑を浮べ、舌なめづりをするやうにして云つた。

『出鱈目仰有い。』

『出鱈目だつて？』

『さうよ。あんたなんかに、そんな人があつて堪るもんですか？』

『あつて堪るもんかたつて、あるから仕方が無いぢや無いか。その指環が證據だ。』

『だけど、これ、眞物だわねえ。石だつて、本當の金剛石よ。』

と、女給は、さも好ましげに、それを掌に愛撫してゐたが、やがて、自分の指にはめて見て、

『あら、私に丁度いゝわ！』

『勿體無いよ。指輪が泣くよ。』

その上品に光つた白銀色が、尖の圓い短い指を、不調和な、重々しさで裝飾した。

『いゝわねえ。私、こんなの欲しいわ。』

『君なんかにや、その一圓五十錢のまがひ紅玉で澤山だよ。さあ、返して呉れ給へ。』

『ねえ、あんた、これを私に呉れない？』

女給は手を引込めながら云つた。

『馬鹿な事云つちやあ困る。』

横井は色を易へて云つた。

『いゝでせう？ ね、これ、私が貰つてあげるわ。』

『いけない！ いけない！ さあ、返して呉れ給へ。』

『いやよ。これはもう私が貰つたんだから。』

女給はうしろへ飛び退いて、からかふやうに笑つた。

『いけないッたら――それは、一寸君に呉れてやれるやうな女ツぽい品物ぢや無いんだ。』

『たまにはこのくらゐの物下すつたつていゝわ。』

『困る。困る――。それは僕んぢや無いんだ。』

『あら、あなたのぢや無いの？』

『預りものなんだよ。だから、さあ！ 返して呉れ給へ。』

『ほ、ほ！ とう〳〵本音を吹いちやつたわね。そんな事だらうと思つてゐたわ。』

と、女給は嘲るやうに笑つて、

『冗談よ。まさか、これを私が貰はうなんて思やしなくてよ。』

云ひながら、指環を指から拔き取ると、

『そら、返してあげてよ。』

ぽいと、横井の膝のあたりに拋りつけるやうにした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

指環は、受けようとした横井の手から外れて、床の上に轉びおちると、ころ〳〵と板敷の上をころがつて行つた。

『あ！』

慌てゝ拾はうとして、横井がそこに屈んだ時は、指環は、衝立の下をくゞつて、後隣の卓の下にころげて行つてしまつた。

その卓には、先刻から一人の客が、珈琲の碗を前にして頰杖を突き、何かじつと考へ込みながら、しんと音も無く坐つて居た。

彼は、足もとに何かころげて來たのに氣がつくと、怪げに身を屈めてそれを拾ひあげた。

『や！』

と、指環を追つかけてその卓に歩み寄つて來た横井は、自分の代りに、それを拾ひあげて呉れた人の顔を見ると、びつくりして叫んだ。

『や！ 萩原さん。』

それは見知越の萩原禮吉だつたので。

だが、禮吉は、その時、指先に拾ひあげた指環に、すべての注意を吸ひ寄せられてゐた。

おゝ、此の指環！

『……………？』

禮吉が、やがて、自分の前に立つて、手をさしのばしてゐる横井の顔に眼を向けた。その眼は、爆ぜるほど强く、疑問の爲めに緊張してゐた。

『失禮しました。どうぞ――。』

横井は、妙な禮吉の態度に、少し面喰ひながら、から云つた。

『これは――この指環は――。』

と、禮吉は唖者がはじめて物を云ふ時のやうな口調で、やうやく切り出した。

『これは――これは君のですか？』

『僕のです？――いや、僕が他から――。』

横井は、慌てゝ云つた。

『他から？――君のぢや無いのですか？』

『さうです。ある人から預かつてゐるのです。』

『それは何人です？ 君は此の指環の所有主を知つてゐるのですか？ その人は何處にゐるのです。教へて下さい！ その人は何處にゐるのです！』

禮吉は思はず椅子から立ちあがり、性急に斯う問ひ掛けた。

（つゞく）



オゾンとは實に…
家でも外でも手離せぬ重寶で經濟的な
簡易療法藥です
OZO
怪我に…オゾン
火傷に…オゾン
化粧に…オゾン
部南荘



○滑稽にくまれ口

『姉さん!』
『……』
『姉さんてば返事がない。お婿さんでも取つたのか』

○

『兄さん!』
『何ぢや』
『何ぢやは山から坊主は寺から』

○

『太郎君!』
『ハイ』
『ハイ蛤長之助、朝から晩まで駕籠かつぎ』

○

『次郎さん!』
『ナーニ』
『何は鐵砲、酢で煮た蒟蒻』

○珍問答

○定めしの炊き方を問ふ
●水量(推量)を多くせよ
○命の親の年齢を問ふ
●八十八(米)
○夫婦相和すれば幾許か?
●百九十九.
○無鐵砲は何に使ふか?
●無頓着を打つにつかふ
○ところ天の高さを問ふ
●かん天の高さに同じ

使へぬ物番附

○捨て鉢●	年寄	○口車●
○腰巾着●	肱鐵砲●	○堪忍袋●
○皮肉の針●	鼻提灯●	○催促の矢●
○かけた鐵●		○投げた匙●
○仕事の夜鍋●	行司	○議員の陣笠●
○頭の薬罐●	思ふ壺●	○白河夜船●
○側口の横槍●	はに紙●	○酒で巻く管●
○法螺の風呂敷●		○歯に着せる衣●

一偶田散人作

○文字の緊縮

遅5=遅遅遅遅遅=遅きを遅てば遅てども遅てども遅し
重5=重重重重重=重きを重ぬれば重ね重ね重し
益5=益益益益益=益を益せば益益益あり

○滑稽遊戯

二本の紙撚を作つてその一本で丸形の環をこしらへ、他の一本を鈎にする。



そして一人はその環を持ち、一人は掌で片目を蔽して圓のやうに其の鈎の曲つた先を環にうまく嵌るのです。これは一寸考へるとなんでもないやうですが、實際やつて見ると案外出來ないで焦つたいものです。

○阿呆陀羅經

えゝ今度この度阿呆陀羅お經は新規モダンのバンくづくしだ。夜番に火の番番頭十呂盤、襦袢は肌着でバンドは締帯、碁盤将棋盤、四角四面で



小判はピカピカ大盤振舞、訴訟は裁判、喧嘩は野蛮、儒者で蕃山詩人で晩翠、三井の晩鐘近江八景、火の見の半鐘纏が飛出す、活動寫眞に人氣の阪妻、忠臣藏では伴内、滑稽、鞄の看板、石版活版、晩餐會では紳士淑女が、ピヤノの伴奏獨唱終れば、拍手喝采バンザイバンザイ(チヤカポコチヤカポコ)

○顔色の變る印度人

うす氣味の悪いのを一寸辛棒し



て、約二分間まばたきせずにこの眞黒い印度人の顏をぢつと見つめて呉れたまへ、そして直ちに眼を移して、白い紙か布を見て呉れたまへ。はて不思議、今迄薄氣味惡く笑つてゐた印度人は、今度はガラリと顏色が眞白になつて、頗る好々爺の白人の顏となる。活動寫眞が動いて見えるのも、此の理から出てゐる。

○海外珍聞

歐洲大戰後の墺太利の困りやうといつたらお話にならないが、最近、立派に高等教育を卒へた紳士が『親子六人餓死する外はないが妻子の死は見るに忍びぬ』とて、ある映畫會社へ出かけ『世界の誰もが、生きた人間の五體が粉碎する實寫を見た事はあるまい。で、自分は、彈丸やダイナマイトを使つて命取りの機械を組み立て、すべて外部から見えるやうにして爆發させ、我が身を粉碎して見せる。だから、この映畫を撮る代りに、一定の金を家族に遣つて貰ひたい』と申込んだ。それが官憲の耳に入り、差止められる事になり、この男の命は幸にとりとめたが、さて〳〵凄い世の中にはなつたもの。



○微苦笑問答

女『貴下は、私のためなら、死に面しても好いと言つたぢやありませんか。あの犬が恐いのですか』
男『ところがね。あの犬は死んではゐないのだから』

○

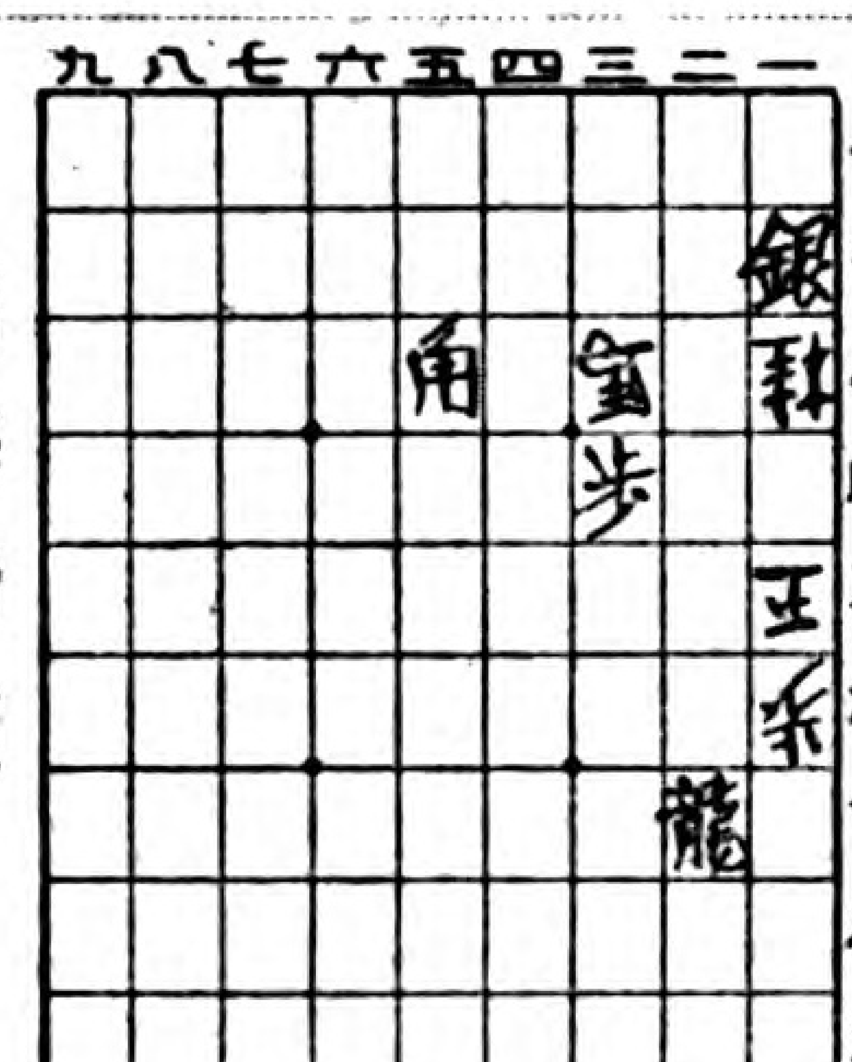
弟『電燈と稻妻とどう違ふの』
小さな姉『金を拂ふのと、拂はないだけのことよ』

○

醫者『御大事になさらないといけません。インフルエンザといふやつは、大したことはないのだが、あとが良くないのです』
患者『この間の勘定書をいたゞいて、僕もさうおもひました』

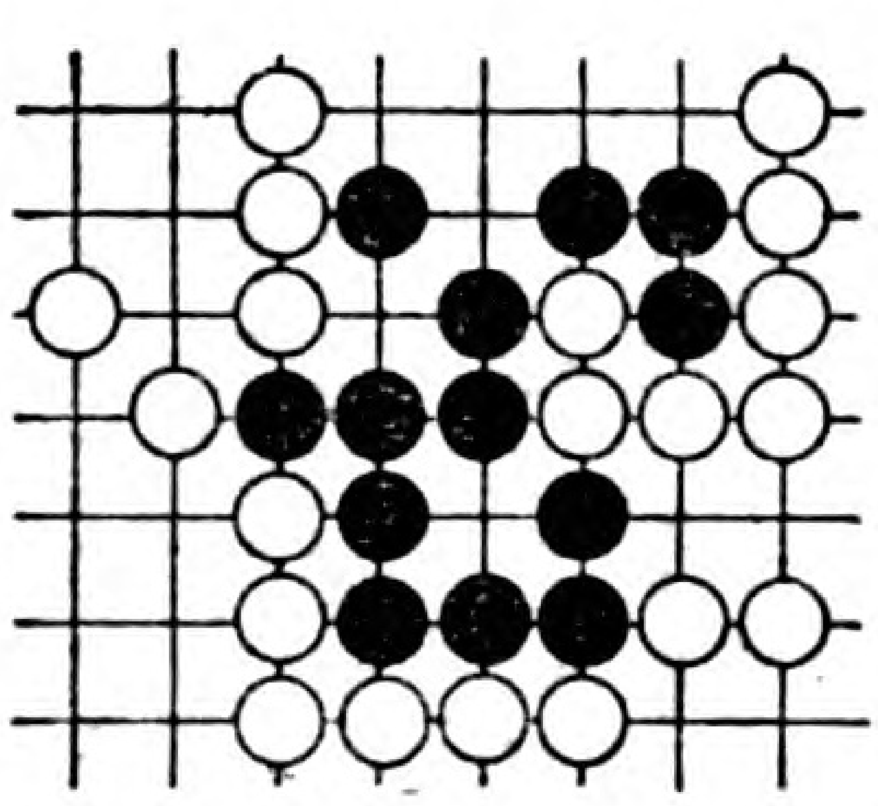
詰將棋新題

八段　金易二郎出題



詰碁新題

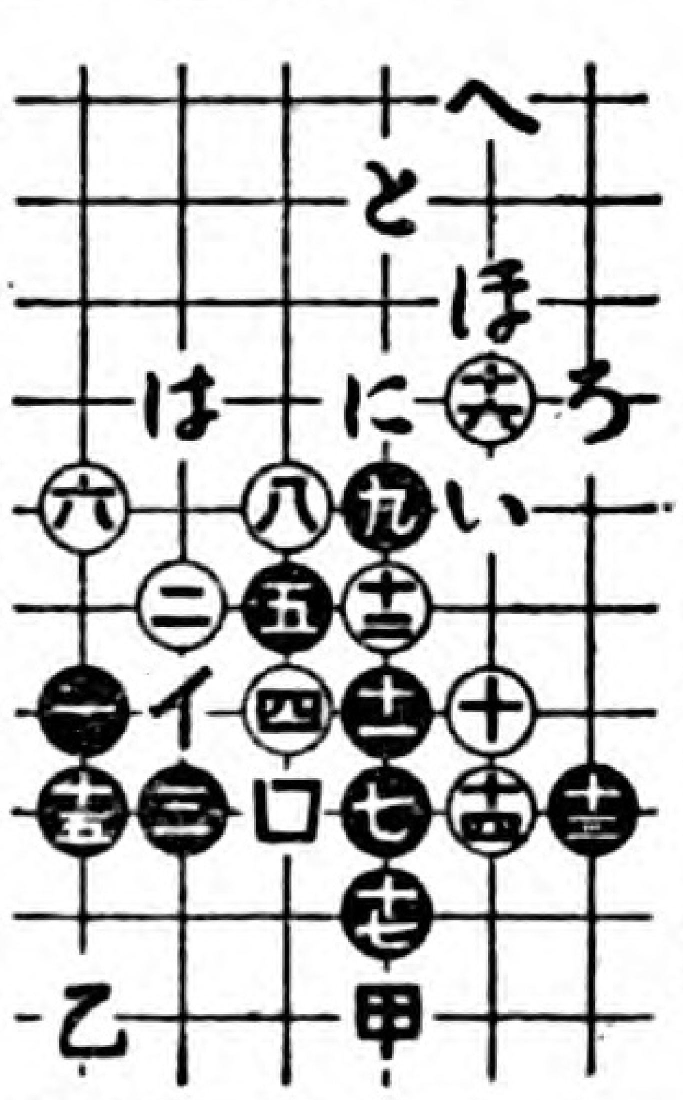
七段　瀬越憲作出題



黒先結果如何

聯珠新題

珠叟　清水吾石出題



本題は實戰：：黒は（十一）を打つ時に充分考へた。（十一）と飛三に引けば白は（十二）と三乘りで止めるは必然、そこで（十三）と止めれば次に（十四）の所が四三になるから白が（十四）と止めた時に（十五）と飛三を引いて白が（イ）と止めれば（乙）に飛んで『ロ』で勝、又（イ）の手で（十六）に止めれば（十七）に打つて次『甲』、四三と『イロ』の四追勝があるから大丈夫と見て其通り打進んだ：：すると白は、黒の兩勝に見向きもせず（十八）から『いろはにほへと』の順に四追を打つて勝つた△けれども黒は此（十七）を打替へれば最も簡單に勝てる。それは如何。

（本欄解答は四三五頁にあり）



奇怪な犯人は遂に判明した！
雪中の美人殺しは果して誰？

探偵小說 宙に浮く首

大下宇陀兒
齋藤五百枝畫

地下の密室

（一）

荻原青年の戀人中坪美代子を初めとして、十九歳の娘ばかりが或は殺され或は不思議に姿を消した飯沼村の奇怪な事件に關し、遙々東京から出張して來た名探偵菰田老人の正體が、嘗ては樋口妙子殺しの犯人として目された浩順和尙であるといふ、この驚くべき峯島警部補の言葉には、その場に居合せた一同、呀ツとばかりに眼を瞠つた。

荻原青年にして見れば、これがまた、腑に落ちたやうな落ちぬやうな、頗る奇妙な感じでもある。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

何故かといふに、あの樋口妙子殺しのあつたのが四年前で、その時浩順和尚は三十二歳であつた。だから今では和尚が三十六歳になつてゐるとして、しかし菰田探偵は六十歳以上の老人だつた。皺苦茶な醜怪な容貌に胡麻鹽の斑髯を生やしたところは、探偵小説にはよくある手の、變裝したものなどでは決してなく、とすれば、菰田老人と浩順和尚とは明かに別人といふことになるのであるが、そこで一方思ひ出して見ると、荻原青年が嘗て四月十二日に菰田老人の事務所を訪れた時、老人は青年の顔を見るや否や『ウム、あんたは飯沼村出身の方ぢやね』といつたのだつた。――あれこそは、老人が最初からして青年の顔を見識つてゐた證據ではあるまいか。言葉を換へて、それこそは老人の正體が矢張り浩順和尚そのものであつて、それがために同じ村出身の青年の顔を四年後の今日まで、ちやんと見覺えてゐたのではあるまいか。

その他にも、老人の擧動には數多の不思議なところがある。

『美代子の行衛を探索させる心算りで連れて來た老人が、その實は恐ろしい浩順和尚であつたとすれば――』

荻原青年は、それを考へて思はず蒼い顔をした。そして何かいはうとした。

と、恰度その途端である。駐在所の表口からはアタフタと驅け込んで來た男があつた。

『…………？』

警部補を初めとして、一同がドキリとしたやうに振り向いて見ると、それは菰田老人が泊つてゐる宿の番頭である。

『モシ、モシ――』番頭は受附の窓口へ顔を突き出し、四邊を憚かるやうにして呼びかけた。

『なんだ、何かあつたのか？』

『御知らせに來ました。――實はあの、山木老人が歸りましたので――』

『ナニ、あの老人が――いつ歸つた？』

『先刻、あんた方がうちを引揚げて行つたあとへ、それと入れ違ひに歸つて來ました。――何かお調べの筋があるやうでしたから、今、そつと拔け出して來たんです』

番頭は、山木老人が菰田探偵の變裝したものであることをさへ知つてはゐない。が、そこは流石に商賣柄、警部補達がわざわざその宿まで出向いて行つた氣色から察して、山木老人を怪しいと睨み、早速その旨を知らせに來たのである。

『ウム。』思はず警部補が身を乘り出した。『するとその菰田老人――いや、山木老人はどんな樣子だつた。何か變つたところは見えなかつたか？』

『へえ、何かかう、妙に落着かない樣子でございました。歸つて來ると、私達には殆んど言葉も掛けずに、自分の部屋へ上つて行き、それから、私共の方でも何か氣になつて堪りませんので、女中をその部屋へやつてそつと樣子を探らせました。』

『するとどうした？』

『すると、女中は老人に叱り飛ばされたといつて戻つて來まし

た。火鉢の火を持たせてやつたのですが、火なんか要らないから誰も來るな、といつたさうです。――仕方がございません、今度は私が二階へ參りました。

『隣りの室からでも覗いて見たか？』

『その通りでございます。覗いて見ると、老人は一緒に持つて來た旅行鞄から一組の背廣服を出して、いつも着てゐるあの古臭いフロックコオトや山高帽などは一纏めにして部屋の片隅へ放り出し、それから、大急ぎで背廣服に着更へ始めました。』

皆まで聞かず、警部補の顏には、サツと緊張の氣が漲つて來る。

『君！』

と、彼は鋭い口調で傍の巡査に呼びかけた。

『君はね、すぐに本署の方へ應援を依頼する旨を通じ給へ。そして出來るだけ早く、停車場やその他の方面へ張込みの手配をつけ給へ。――彼奴、姿を變へて高飛びをしようとしてゐるんだ！』

吩附けられた巡査は、それですぐに壁にかけてあつた電話の受話器を外し、伊那町警察署を呼び出した。

殘る一人の巡査は、番頭と共に勢ひ込んで駐在所を走り出さうとする。警部補はそれを突嗟の間に呼び止めていつた。

『君、いかん／＼、その姿で行つてはすぐに感付かれて了ふぢやないか。――君は何か適當な姿に變裝するのだ。僕も無論變裝するから――』

警部補と巡査とは、一旦奧へ引込んだ。そして間もなく姿を變へてそこへ出て來た。

巡査の方は、薄汚い勞働者になり、警部補はこの地方に有り勝ちな、製絲工場の工女募集員のやうな扮裝になつた。

それで、愈よ警部補と巡査と宿の番頭とが三人揃つて出掛けようとする。その時荻原青年は警部補にいつた。

『どうでせう、僕も一緒に連れて行つて與れませんか。』

『さうですね。』警部補は思案して答へた。『一緒に行つて貰つても惡くはないが、しかし、あなたは老人に顏を見識られてゐますね。――私があなたと一緒に向ふへ行くと、折角變裝などをして行つても、向ふではすぐに私を怪しむでせうし。』

一緒には行かない方がよいといふ至極無理のない言葉である。

『ぢア、僕は自宅へ歸つてゐます。』

『さうして下さい。必要な場合には、すぐと迎ひを差し上げますから。』

警部補は、巡査に向つて眼配せをした。そして番頭と巡査と三人別々になつて出て行つた。

『うまく行くかな？』

荻原青年は、ふとそんな風に呟いた。さうして、駐在所の前にたゝずんだまゝ、その三人の後姿をぢつと見えなくなるまで見送つてゐた。

何かの考へを振り捨てるやうにして首を振り／＼、くるりと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

身體の向きを變へて、駐在所から宿とは反對の側、自宅の方へ歸りかける。ものゝ二三町も歩いたかと思ふと、そこが恰度あの藤の湯へ曲がる路地の口で、するとこの時、青年は背後からポンと肩を叩かれた。

さうして、振り向いて見て、呀ツと叫んだ。

『荻原君、あんたに見せたいものがある。一寸一緒に來て見給へ。』

振り向いて鼻先へチョコナンと突立ち、いきなりかういつたのが、辨慶縞のハンチングに青味がかつた背廣服を着た、あの孤田老人であつたのだつた。

（二）

それが餘りにも唐突であつたせゐか、この時荻原青年は、一寸の間身動きすらも出來なかつたといふ。

老人の有つ奇怪な魔力に氣壓されたとでもいふか、或は又、蛇に見込まれた蛙のやうな氣持とでもいふか、兎に角不思議な氣持に壓倒されて、どう返事をしてよいのかも分らない。今、この老人を捕らへるべく立向つた警部補の一行に、早くこのことを知らせてやらねばならぬと思ひながら、それさへ、どうしていゝのか分らなくなつた。

『荻原君、何も心配することはありやせん。』

いつたのは孤田老人である。その聲音には、どこか人を魅了するやうな力強さがある。

『僕はね、宿の方へ警察の人達が僕を逮捕しに出掛けたことも知つてをるのだ。僕は、宿の番頭が隣りの部屋から隙見をしてゐるのに氣付いて、實は番頭の後を跟けて駐在所まで來てゐたわけだが、はつははは、驚くことはありやしない。警部補が變裝して出て行くのを見屆けて置いて、早速君のあとを追ひかけたんだ。ま、ま、今度は僕と一緒に行つて吳れ給へ。』

『ど、どこへ行くんです。』

『どこでもよろしい。隨いて來れば分る。』

否應なしに、青年は孤田老人の後に從つた。老人は、すぐとその路地に入つたのであるが、藤の湯へ寄るかと思ふとさうではなく、足早にそこを通り過ぎ、間もなく、村の家並を離れた田圃道へ出た。さうして猶もぐんぐんと進んで行つた。

やがて玄雲寺の横も行き過ぎて了ひ、到頭大龍川の岸へ出た時である。

『ウム、こゝまで來れば大丈夫だ。警察では、宿に僕のゐたいことに氣が付いて、多分停車場の方へでも張込みをし始めたらうて――』

老人は獨言のやうにさういつて、そこの土手の蔭へ腰を下ろした。

そこへ來るまでに、青年の方では幾度か口を利きかけては止めてゐる。無論、老人の正體が浩順和尚であるか否かを確かめたいと思つたのであるが、それを知つてか知らずにか、老人はその時、ポケットへ手を突込んで、何か小さなものを取出

した。

『見せたいといつたのはこれなんぢや。』

いひながら、右手の人差指と拇指との間へ挟んで、ひよいとから、手品師のやうにして差し出して見せる。

『荻原君、あんたはあの時にこつそりと儂の後を跟けとつたから知つとるぢやらう。――こいつはね、いつか瘤七の子供の馬鹿仙が天龍川の中から拾つた奴だよ。』

青年は、何がなしにギクリとした。

さうして、老人の指先につまんだものを、顔を近づけてぢつと眺めた。

馬鹿仙の仙太は、それを『穴の明いたゼニ。』だといつた。青年はそれで、それが五錢か十錢の白銅であらうとばかり思つてゐた。が、見ると白銅貨では決してない。折からの眞晝の陽射しを受けて、キラ／＼と輝く黄金である。一錢銅貨程の扁平な形で、しかし、中央には確かに穴が明いてゐる。

『何ですそれは？』

『分らないかナ？』

『分りません。』

『ヂア、手に取つてゆつくりと見て呉れ給へ。君には、きつと見覺えのある品物なんだ。』

そこで青年は、いはれた通りに手へ取つて、と見かう見調べ始めた。

『どうです？』と老人が一度いつた。

『…………』

青年は一寸答へなかつた。

が、忽ちハツとばかりに驚いたのは、その黄金の小片に、形は妙に間伸びをして、横に流れたやうな恰好になつてゐたけれど、『M・O』といふローマ字の刻印を認めたからである。

青年の異常な驚きに衝たれた顔を見て、老人はふいに氣の毒さうな口調でいつた。

『荻原君、どうぢや分つたか。――それは君、荻原昌之といふ君の頭文字を刻つたものぢや。さうして、云ふまでもなく婚約指環ぢや。君とは婚約の間柄にあつたといふ、美代子孃の指に嵌められてゐたものに違ひないのぢや。』

青年は、ゴクリと唾を嚥み下していつた。

『さ、さうです。いはれて見れば、僕にもその覺えが十分にあります。僕等は、その婚約の出來た時に、指環だけ取交しました。』

斷つて置くのを忘れたが、青年も又、自分の指には、同じやうに婚約指環を嵌めてゐたのである。老人は痛ましさうに、その青年の指を見やつた。

『で、これはいつたい、どういふことになるんです？』

『氣の毒ぢやが、美代子孃は亡くなられてをる。』

『えツ！』

『その指環を仙太が拾つて來た時に、儂はふつとその頭文字に氣付いたのぢや。さうして、それからは、毎日のやうに天龍川へ通つて、いろ／＼と調査を續けたのぢや。その指環が元の形を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

を失つて、すつかりと押しひしやがれてゐることについては、また、あとで事情が判明するぢやらうけれど、兎に角儂は、その指環を端緒にして、天龍川の中には、まだ何か有りはしないかと思つて探して歩いた。』

『するとあの、奇妙な釣りや網打ちは――？』

『さうぢや。指環が天龍川から拾ひ上げられたことから思ひ付いて、こつそりと河の底を探して見たのぢや。ま、これを見給へ。』

老人が、そこで再びポケツトへ手を突込み、靜かにそこへ取出したのは、平べつたい一つの箱である。

蓋を取ると、上には綿が被せてあつて、その下からは乾からびた菓子のやうな、或は瀬戸物の破片のやうなものが幾つも出て來た。

豆粒程のものもあれば、稀には又、胡桃大のものもある。

『何ですこれは？』と青年が訊いた。

『骨ぢや。』と老人が答へた。『儂はな、この骨を鑑定して貰ふために、一週間前に東京の醫科大學まで行つて來たのぢや。鑑定の結果によると、明かに人間の骨だといふことで、それで儂は引返して來たのだ。』

青年は、ブルツと身を顫はした。

初めて、老人のいつてゐる言葉の意味が、どうにか分りかけて來たのである。

『ぢア、あの美代子さんは――？』

『多分、さうぢやらうと思ふ。』老人は益々氣の毒さうな顏色になつて、『無論、この骨が全部美代子娘のものだとは斷言出來ない。が、兎に角、村の失踪した娘達は、皆な非業な最期を遂げてをる。』

(三)

その裏には、どんなに戰慄すべき事件の眞相を秘めてゐるかも分らぬやうな、恐ろしい老人の言葉なのである。

青年は、恐怖に顫えながらも、老人の説明を猶も求めようとしてゐると、その時老人は、突然手を伸ばして、骨の箱と指環とをポケツトに藏ひ込み。さうしてスツクとそこへ立上つた。

『狹原君、見給へ。向ふから警官の一隊がやつて來る！』

見ると、成程村の家並の方からは、正服私服取り混ぜて、數名の警官が頻りにこちらへ急いでゐる樣子。

『我々のこちらへ來たのを誰か村の人が見てゐたんだ。さうしてそれを警官達に告げたんだ。』老人は口早にいつて、青年の手を引立てた。『捕縛されてやつても惡くはないが、折角こゝまで漕ぎ付けたのだ。さア狹原君、一緒に行つて最後まで我々の手でやらうぢやないか。』

警官隊との距離は、この時まだ七八町あまりあつた。孤田老人が青年の先きに立つて、土手の上をスル／＼と走る。その足の速さが、到底六十代の老人とは思へない。二人は間もなく例の貉七の水車小屋の前へ達した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『この小屋が問題だ！』

老人は呟くやうにさういつて、小屋の軒下から、ちつと中を覗き込む。

『荻原君、この瘤七といふ男は、別にまた阿呆の與七ともいふのだつたね。』

『さうですよ。子供の仙太程ではありませんが、幾分か低能な男です。――低能は低能なりに、仙太を非常に可愛がつてゐるんですが、與七がどうかしたのですか。』

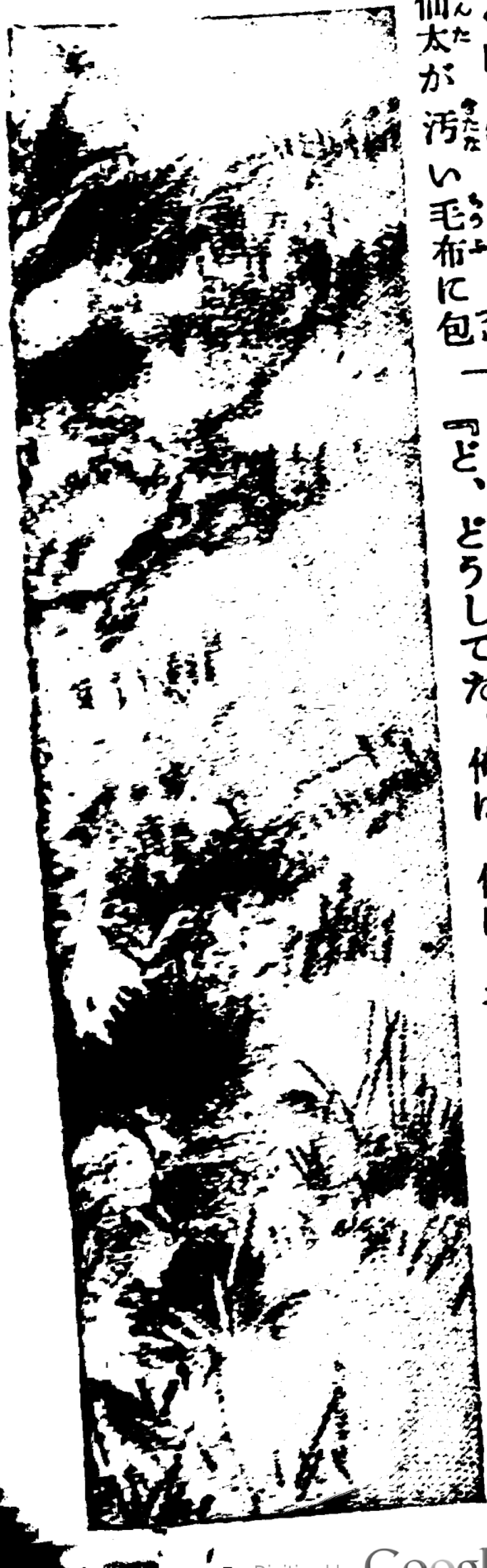
『さアね――』

老人は何故か言葉を濁らした。そして、そのまゝ中へ這入つて行つた。

貧しい水車小屋とはいひながら、流石伸んびりとした田舍だけに、小屋の間口は相當に廣く、天龍川に臨んだ破風の下では、水車がギー〳〵といふ音を立て、重たい臼の音も響いて來る。這入つて見ると、入口の上り框には型の如く自在鍵の吊る下がつた火爐が切つてあり、火爐の横には、仙太が汚い毛布に包まつてゴロリと寢てゐた。菰田老人が、案内も乞はずに這入つて行つた時、水車場の方から、のつそりと出て來たのが與七であつた。

『オイ、與七！』

老人は、無雜作にかういつて呼びかける。



『へい。』

といつて、與七は思はず頭を下げたものゝ、見る〳〵不審さうな顏になつた。

『や、荻原の坊つちやまも御一緒だね。――いつたいこれア、どこの人でござんすい？』

『あゝ、これはね――』

思はず答へようとする荻原青年を眼で制して、菰田老人はすいと上り框へ腰を下ろした。

『儂か。儂はな、今日は服が變つてゐるので分らないのぢやらう。此間までは藥を賣つて歩いてゐた行商人、今日は警察から頼まれた探偵ぢやよ。』

『…………？』與七の顏には、瞬間不思議な表情が浮いて來た。何かいはうとして、容易に口を開くことが出來ない。

『探偵だといつてをるのが分るかな？』老人は妙に低く押へ付けた聲でいつた。『お前、探偵が來ても怖くはないか。』

『ど、どうしてだ。俺は、俺は、探偵なんかに用はねえ。』

『確かに用がないといふのだナ。』

『ねえ、ちつとも用なんかありやしねえ。』

答へながらも與七は、明かに何か狼狽てた風である。老人は何喰はぬ顔でにじり寄つた。

『與七、では、お前の方に用がないなら、こつちからの用事だけいはう。』

『な、なんだ、なんの用だ？』

『他でもない。儂はナ、この天龍川で澤山に人の骨を拾つたのだ。――然も、その骨は、こゝの水車小屋の下に、一番澤山あつたのだ。水車小屋から上流には、魚の骨一つだつてありはしないが、小屋の下には澤山あつた。お前、その骨を欲しくはないか。』

與七は答へなかつた。急に、譯の分らないことをいはれたやうに、いかにも低能らしい顔附である。が、その不可解な表情のうちにも、何處か濃い恐怖の色が浮んでもゐる。

『なるほど。』と老人は一人呑込で頷いた。『お前には、かうした言ひ方では不



向きと見える。その他にも、あの指環も矢張り水車小屋の下にあつたといふわけだが、よし、ぢア、もう一つ別のことを訊いてやらう。――與七、お前のところへ、昨夜泥棒が一人這入つた筈だ。お前はそれを知らないか。』

『し、知らねえ。』

『さうか、知らなけりやいつてやる。昨夜はな、お前の家へ確かに一人泥棒が這入つた。さうして、お前と仙太とがぐつすりと眠つてゐる隙を見て、妙なものを盗み出した。――別に大切さうなものでもないから、それでお前は氣付かずにゐたのだ。待て、今それを見せてやるぞ。』

老人は又しても自分のポケットへ手を突込み、何か黒い頭巾のやうなものと、新聞紙に包んだ一册の本とを取出した。老人のポケットには、魔術師の服のやうに、樣々のものが藏ひ込んであるらしい。

『見ろ！』

と老人はいつた。さうしてその新聞紙に包んだ本を開いて見せた。

『呀ツ！』

と思はず叫んだのは青年である。その本といふのが、極彩色で獅子や象や飛行船などを一杯に描いた、然も英文入りの繪本なのだつた。

『それはあの、美代子さんが――』

『さうですよ。』老人は青年に向つて先づ答へた。『御覧の通り、この繪本には表紙だけが付いてゐない。――つまり、美代子孃の失踪した晩に、加瀬木といふ小學校の女教員から借りて來たといふのがこの本ですよ。』

與七はこの時、愚かにも同じやうに眼を圓くして、その繪本を火爐越しに覗き込んでゐる。老人は、突然與七の肩へ手をかけた。

『こら、與七。昨夜お前の家へ這入つた泥棒といふのは、ハッキリいつて置くがこの儂ぢや。儂は、何か證據が欲しいと思つてお前の家へ這入つたのぢや。さうして、この本を捜し出すことが出來たのぢや。――お前はこの本をどこから手に入れた？　さア、それを正直にいつてしまへ！』

與七は漸くこの時に氣付いたらしい。ハッとしたやうに老人の肩へ置かれた手を振り離し、齒を剝き出して荒々しく答へた。

『ウ、ウ、俺は知らねえ。俺は、そ、そんな本は見たこともねえ。』

『嘘を吐け！　儂は何もかも知つてをるぞ。お前は、さうだ、多分そこに寢てゐる仙太がこの本を欲しがつたので、それで捨てることが出來ずにゐたのだ。仙太を起して訊いて見てもよいか。』

（四）

この時仙太は、まだぐう／＼と鼾を立てゝ眠つてゐる。老

人がそれを右の手で揺り起さうとするより早く、與七は、ぐいと毛布を跳ね退けて、確乎りと自分の小脇に抱き取つてしまつた。

『仙太を何するつちゆんだこいつめが。俺アの仙太は、風を引いて寢てゐるだに!』

思ひ懸ず、與七の劍幕は凄じかつた。仙太は突然の騷ぎに眼を覺まし、ワッと聲を上げて泣かうとする。

『仙太、泣くでねえ、泣くでねえ。』

與七は、狼狽てゝ仙太の口を押へ、頻りにそれを宥めようとした。

『與七、お前は仙太に口を利かせない心算りだナ。よし、待つてをれ、今、驚くやうなものを見せてやるぞ。』

一語一語に力を籠めてからいつた菰田老人、何と思つてかこの時、仙太が今まで着てゐた毛布を手元に引き寄せ、自分の首から下をくる〱と捲き、續いて、手にしてゐた黑い頭巾をひよいと冠つた。左の袖を胸元に寄せて、顎に垂れた胡麻鬚の髯を押し隱し、稍ゝ伏目になつて與七を眺める。

頭巾は、黑の土耳古帽であつた。そして毛布は、奇體な僧衣の形になつた。

『おお!』

青年が聲高く叫ばうとするのを、菰田老人は素早く制した。

『どうだ與七、お前には、この儂の姿が分らぬか。』

與七は、非常に當惑した顏である。何か、途方もなく無理なことをいはれたやうに、鼻の穴を擴げ、眉をしかめて老人の姿をぢつと見上げた。

と、その與七の瞳のうちに、やがて不思議な光がキラリと閃めく。忽ち、恐怖の叫びが突つ走つた。

『和尚だ、和尚だ、浩順さんだ!』

見事、米島警部補の睨んだ通り、それこそは浩順和尚であつたのである。

『さうだ、その通りだ!』

氣のせゐか、言葉の調子までがらりと變つて、菰田老人、卽ち浩順和尚はかう答へる。忽ち毛布をかなぐり捨てて、それから、キッとなつて與七を睨んだ。

『ウム、分つたぞ與七。──今まではハッキリと分らなかつたが、よオし、よく分つた。お前だつたナ。』

『な、なにがお前だ?』

『四年前の雪の降る日だ、儂は玄雲寺の庫裏で酒に醉つて寢てゐると、いきなり、儂を殺さうとして忍び込んだ奴がある。儂は、頭にひどい怪我をした。さうして、寺から擔ぎ出された。お前のやつたことに違ひはあるまい。』

『嘘だ、嘘だ、大嘘だ!』

『嘘ではない、お前なのだ。お前以外に誰がそんなことをする奴がある!』

與七は、じり〱と肩を竦めた。

そして、野獸のやうに低く呻つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

忽ち、ぐいと足を伸ばして火爐の上の鐵瓶を蹴る。
パツと起る灰神樂の隙を盜んで、仙太を抱いたまゝ、どつと奥へ逃げ込んで行く。



『待て、待て!』
浩順和尚は鋭く叫んだ。が、灰が眼に入つたと見えて、兩手でサツと顏を押へたまゝ、少時は身動きも出來ぬ樣子。

『荻原君、荻原君!』
と和尚は叫んだ。
そしてその荻原青年は、今や、いはれるまでもなく、和尚に代つて、靴のまゝ、ヒラリとそこへ躍り上がつた。火爐の背後には粗末な鼠入らずが置いてあつて、その横に煤で汚れた紙の襖が二尺ばかり開きかけてある。
青年は、何か我武者等にど鳴りながら、その襖の向ふへ飛び込んで行つた。
途端にしかし、水車小屋の表口からは、一人の刑事がニユツと半身を突き出して、そこに顏を伏せたまゝ彳んでゐる浩順和尚を見付けたのである。
刑事は、無論浩順和尚逮捕のために立向つた警官隊の一人で、今の先き、この水車小屋ではどんなことが起つたとも知る由がない。
彼は、和尚の姿を眼に止めると、ピタリとそこへ腹ん這ひになつた。そして、跫音も立てずに近づいて來た。
『ヤツ!』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

といふ氣勢と一緒に、和尚の腰が横から突かれて、同時に、その手頸へは唸りを發して一條の捕繩が絡み付いて來る。

『き、來たナ！』和尚は眼を閉ぢたまゝで叫んだ。『駄目だ、駄



目だ、儂を縛つては駄目になる。――與七だ、與七を縛れ！』

だが刑事は耳をも藉さない。そしてその代りに、一聲高く呼笛を鳴らした。

土手から河原から田圃から、警官達はバラバラと走つて來たのであつた。

（五）

刑事が來るよりも一足先きに、荻原青年が奥の間へ踏み込んだことは、既に述べた通りである。

が彼は、實のところ、浩順和尚と刑事との組打ちに氣を取られてゐる暇はなかつた。襖の向ふへ行つて見ると、そこには不思議にも與七の姿が無かつた。室の眞中に立つて見ると、入口の襖が西に當り、北と東とは壁になり、南だけが外へ出られるやうになつてゐるが、その南には雨戸がピッタリと閉めてあつて、然も内側から錠が下りてゐる。して見れば、確かにこゝへ逃げ込んだ與七は、最初に這入つた襖の方からでも逃げ出さぬ限り、どこへも逃げた筈はないのであるが、それが、掻き消すやうにゐなくなつてゐたのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

狹原青年は、『オヤ？』と思つた。
さうして、くる〳〵ツとその部屋を見廻した。
するとこの時、ふと眼に止まつたのが、北の壁に嵌め込みのやうになつた佛壇である。いや、實はその佛壇の下の疊である。疊には少しばかりの壁土が、ザラ〳〵と溢れ落ちてゐる。
『ハアテ？』
青年はすぐにそこへ歩み寄つた。そして何氣なく、壁に手を支へて、その落ちてゐる壁土を調べようとした。
と、その時ギイツといふ音がして、佛壇の下の壁が、柱の横から黒々と口を開いたのである。壁と見たのが、そこだけ秘密の出入口になつてゐて、青年は偶然にその出入口の押釦に手を觸れたのだつた。
『よし！』
青年は大膽にも、その壁の裂け目へ身を入れた。入れると同時に、壁は自然に元々通り閉ぢられて了ふ。
この時、表の方ではドタンバタンといふ激しい物音、浩順和尚が刑事のかけた繩を振り解かうとする。その物音なのであるが、青年はそれを顧てゐられない程の好奇心に驅られた。與七が仙太を連れて逃げ込んだのは、明かにこの壁の中である。一寸先きも見えないけれど、青年は息を殺ろして、一歩一歩進んで見た。
すると、身を入れた踏臺からは、すぐに石段らしいものが下へ續いて、次第に地下へ行くらしい。
漸くにしてそれを降り切つたと思ふと、案外に廣い地下道がある。壁に手を觸れながら進んで行くと、恰度八歩ばかり行つたところで、彼はギヨツとして足を停めた。
地下道の突當りから、ぼんやりとした光が洩れて來たのである。そして、同時に何かボソ〳〵と呟く聲がしたのである。
『ウム、あそこにゐる。』
青年は、非常な注意を拂ひながら、その光のある方へ近づいて行つた。好都合にもそこには扉など取付けてはなく、それで室内の樣子がぢきに見えるやうになつた。床へ、小さな蠟燭を一本立てゝ、與七がこちらへ脊を見せて蹲んでゐる。その與七の膝と右脇下の間から、子供の足が二本突き出してゐるのは、相變らず仙太を横抱きにしてゐるらしい。
壁へぴつたりと身體を寄せて、ぢつと耳を澄ましてゐると、漸く與七の喋るのが聞えて來た。
『仙太、聲立てるでねえぞ。動くでねえぞ。大事なとこだに。』
與七はそんな風にいふのである。『なア仙太、かうやつてお前の口を押へてゐると、そのうちには奴等も歸つちまふだ。苦しいづらが、ちつと我慢をしてゐて呉れろ。お父つ樣がかうやつてゐるだで、暗いところだつて怖くはねえ。辛棒しろよ。泣くなよ、今に、何でも欲しいものは買つてやるぞ。』
仙太は、白痴ながらに、父親の言葉を聽き辨けてか、泣聲はおろか、身動きすらもせずにゐる。與七は半ば仙太に向つて話すやうに、又、半ば獨言のやうにしていふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

仙太、お前は何も知らないだらうが、お父つ樣はナ、今、お前に飲ませてやつた、あのにがい藥のことで、和尚さまに追ひかけられてゐるのだぞ。無理はねえ和尚さまも、飛んだ災難を被てござる。お父つ樣には、そこんところがどうも譯が分らねえけれど、兎に角、和尚樣のいつてゐることはほんとうなんだ。なア仙太、あれはお父つ樣が、藤の湯の妙子さを殺した時だ。』

頭上では、微かながら、まだバタバタと騷いでゐるらしい。青年は一心になつて聽耳を立てた。與七は、同じくその頭上の物音を耳にしながら、猶も仙太との會話を續けて行く。

『さうだ、あの時はお父つ樣はナ、常々から狙つてゐた妙子さが一人つきりで番臺にゐるのを見て、雪が降つてゐて人通りはなし、到頭殺つてしまつたんだ。藤の湯の裏口から呼んで見たら、妙子さは、何も氣が付かずに顔を出す。そいつを俺は、ぐ



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

つと容地へ引出しながら、ガバリと出刃を突き刺したのだ。生膽を取つて來てやらすと思つて、聞いてゐた通り、左の脇腹も剖つて見たが、何が何だか分らねえ。仕方なしにそのまゝ俺は歸つて來たが、なア仙太、あの時にやア、全くお父つ樣も危なかつたぞ。村松の旦那樣がゐなかつたら、お父つ樣は、とつくの昔に警察へ連れられて行つてゐるのだ。』

解けぬ謎の緒が、チラリと青年の腦裏に映つて來る。彼は一語も聞き漏らすまじと耳を澄ました。

『仙太、お前もよく聞いて置け。村松の旦那樣といへば、あんな親切な方もねえものだ。――お父つ樣がナ、お前の頭が白痴なことや、それから身體がひ弱いことで愚痴を滾すと、それには十九になる娘の生血を飲ませるがいゝといつて敎へて下すつたのがあの旦那樣だ。あれだけの學者で、何でも知らねえといふことは一つだつてねえ。さういへば、この地下室も後にあの旦那樣が考へついて、俺と二人つきりで作つたものだが、何にしてもあの旦那樣が、いつでも俺達を庇つてゐて下すつたのだ。お父つ樣はナ、又、いつもお前のことばかり不憫に思つて、どうにでもして一人前の人間にしてえと思つてゐただが、それもお前のおつ母樣が死んでからは猶更のことだ。村松の旦那樣は、そいつをまた、ちやんと知つて御座つてナ、一度妙子さの血を取り損なつてからは、今度は、いろ〱と指圖をして、この地下室も作つたし、こゝへ美代子さにしろ他の娘達にしろ、皆んな連れて來て始末をつけることにして下すつたのだ。』

（六）

これが、頭上では浩順和尚が、次第に駆けつけて來た警官達に向つて、頻りに事情を說明してゐた時なのである。

が、青年は身動きをすることも出來なかつた。我と我が耳を幾度か疑はずにはゐられなかつた。恐るべき低能の恐るべき告白、それは明かに迷信であり、同時に、恐らくは村松氏の何か爲にするところあつての教唆なのである。村松氏は、いつたい何故そんな企らみをしたのであるか。

仙太は相變らず靜かにしてゐる。

與七は猶も言葉を續けるのだつた。

『なア仙太、それ程の豪い旦那樣が、俺にあの浩順和尚をその晩のうちに殺してしまへといつたんだ。さうして、土を深く掘つて埋めて來いといつたんだ。そいつを俺は、いゝ加減にして雪の降つてゐる中へすてゝ來たのがいけなかつたのだ。俺が藤の湯の妙子さを殺した晩に、旦那樣はすぐに俺の家へ來て下すつた。さうして、人殺しの罪を浩順和尚に被せてやるから、儂のいふ通りにして來いといはれた。それを俺は、何故いはれた通りにしなかつたんだ。死んだと思つた和尚樣が、今頃になつて、ひよつくりこんなところへ出て來るとは、俺はもとつから思つてはゐねえし、旦那樣だつて、きつと吃驚なさるに違えねえのだ。――考へても見ればなア仙太、あの時にア旦那樣が、警察へ俺が呼ばれたら、かう〱、かう答へて置けと迄敎

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

へて下すつたのだ。藤の湯の横の小路で、壁の中へ首が浮いてゐたと答へればいゝ。かういふ風に教へて下すつたのだ。あの旦那様は、その時にもう、何から何まで見透してゐて、肝腎和尚にちやんと罪を被せてしまふ手筈をしてゐたのだ。それを俺は、吩咐通りにしなかつたばかりで、飛んでもねえことにしてしまつた。旦那様は、あれから後、急に病氣になつてしまつて、滅多には人にも顏を見せられねえやうになつたのだが、さうだ、ついこの間も俺が行つて見ると、どうだ與七、ボツボツ又やつて見るかなどといはれたものだ。あゝあ、俺ア、旦那樣に全く申譯がねえ。』

　與七はこゝで、一寸の間口を噤んでしまつた。

　頭上の物音を、ふつと氣にし始めたらしい。

が、そのうちに又喋り出す。

『仙太、いゝ子だ、ぢつとそのまゝにしてゐて呉れろよ。聲さへ立てねば、なアに、お父つ樣の隱れてゐるところが、奴等には知れるもんでねえ。いゝ子だ、いゝ子だ、お父つ樣の子だ。』

　仙太は、先刻の通り、父親の腋の下から二本の脚をつーんと伸したまゝである。

『よし、よし。』與七はそれをあやすやうに搖ぶつた。『何にしてもなア仙太、俺だつて人を殺したら惡いことぐらゐは知つてゐる。だが、可愛いお前を一人前にするためにア、心を鬼にしなくちアならなくなるのだ。それに第一、あゝして始めて妙子さを殺した時に、いろ〳〵骨を折つてこの俺を庇つて下すつた村松の旦那が、あの通りの業病に罹つてしまつて、それにも出來るだけのことをしてあげなければいけないし、仙太、お父つ樣の氣持も分つて呉れろよ。俺はナ、あの和尚のことだけ、何にしても失敗つた。旦那樣は、和尚がほんとうは死んでしまつたのを、世間の奴等がどこかへ逃げたと思つてゐる間は、幾人の女を殺しても、その罪は皆んな和尚に被せることが出來るのだといつてゐたが、ほんにさういへば、和尚さへ出て來なければアよかつたんだ。――憎いのはあの和尚だ。和尚は、天龍川で骨を拾つたといつてゐたが、水車場で小さく碎いてやつた奴を、よくもよくも見付けたものだ。いつたい、どこから氣が付いて拾つたのか――』

　その端緒こそは、與七のかうして可愛がつてゐる仙太が、嘗ての日、無心に天龍川から拾つて來た、あの『穴の明いたゼニ。』だつたのである。

　與七は、可哀相にもそれを知らない。

　彼はそこで、稍長いこと默り込んでゐた。夢ともなく、現ともなく、頭上の人聲やドシン〳〵といふ水車場の物音を聞いてゐるらしい。

　と、そのうちに彼は、突然嗄れた聲で叫び始めた。

『仙太、どうした、これ、仙太！』

　靑年の眼には、その狼狽した與七のさまが、搖らぐ蠟燭の灯影に、奇怪な幽鬼のやうに見える。與七は、急にキヨト〳〵とし始めて、仙太の手を握り顏を撫で、それから半分泣き聲で喚



を立てた。

『仙太、仙太よオ、仙太よオ――』

ハッとしたやうに立上つて、その狭い部屋の中をうろ〳〵と、そして、仙太を片腕にブラリとぶら下げ、物狂ほしく、自分の頭を掻き毟つた。

仙太に聲を立てさせまいとして、その口を確乎と押さへてゐた與七の手は、あまりに長く、あまりに力が強かつたらしい。

ぢつと動かずにゐた仙太は、父親の腕に抱かれたまゝ、すつかりと縡切れてゐたのである。

悲惨にも哀れな仙太の最期――。

その時青年は、ふいに胸の奥底から、何か知ら熱い涙のやうなものがこみ上げるのを感じた。さうして、堪まらなくなつて地下道をもと來た方へ引返して行つた。

漸くにして以前の部屋へ這ひ出して見ると、浩順和尚はこの時辛くも一同を納得させることが出來たと見え、手頸の繩を解き放され。そこへドヤ〳〵と這入つて來た。

青年は眞蒼な顔をしてすぐにいつた。

『地下室です、與七は地下室にゐます。』

『地下室といふのは何處にある？』

『佛壇の下の壁を押すのです。さう　さう、そこです。』

答へて置いて、だが青年は浩順和尚の袖を捉まへ、ぐつと後へ引き戻した。

『浩順さん、あなただけは行つてはいけない。――あの男は、あなたの顔を見たら、何をするか知れやアしない。』

いふのを引き切つて浩順和尚が行からとする。それを青年は力の限り抱き止めた。

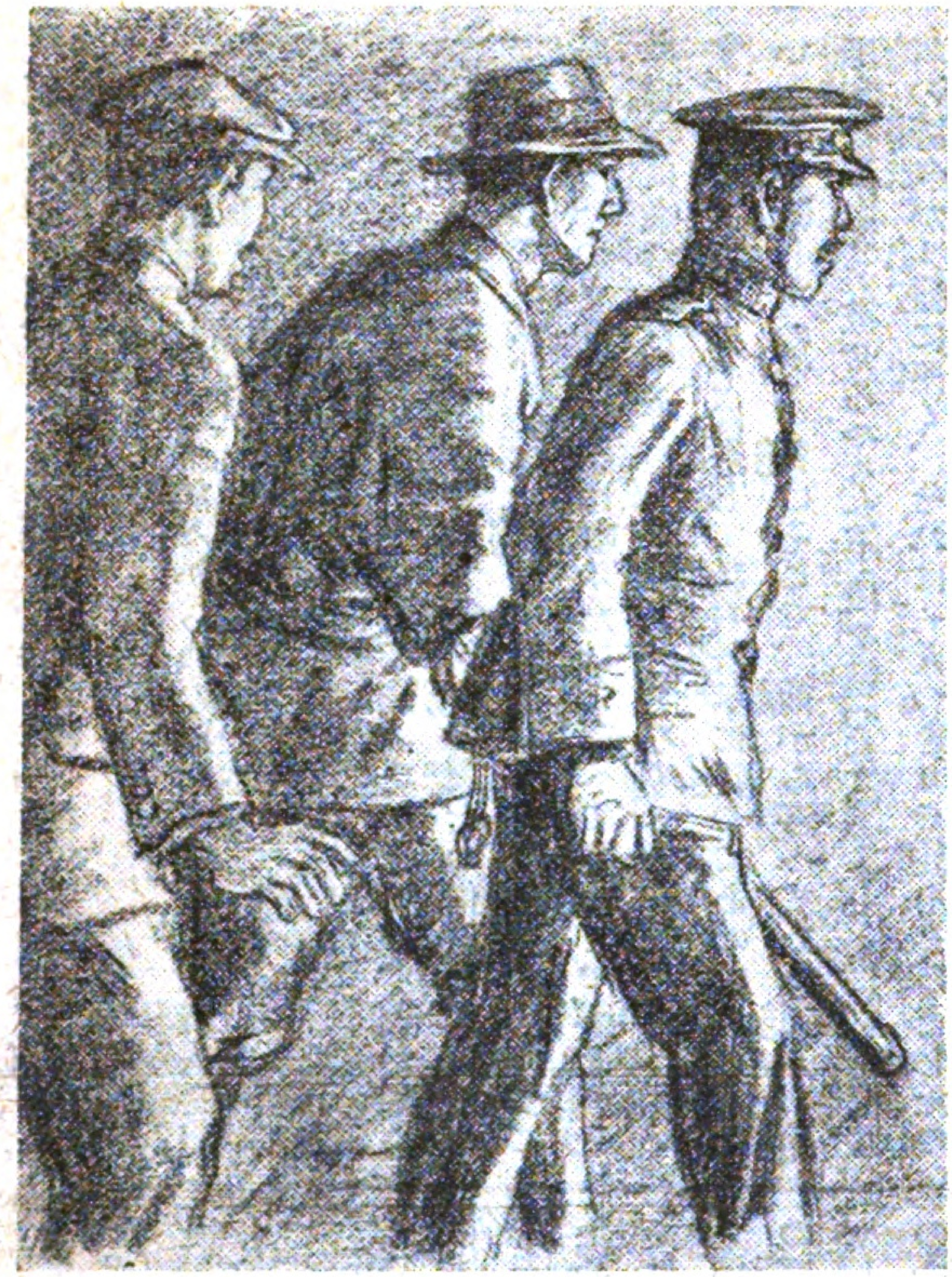
『いけない、いけない。――あの男はね、今、自分の子供を殺したんです。さうして、第一可哀相です。鬼のやうな奴だけれど、それよりも、もつと憎むべき奴が他にある！』

浩順和尚は、この時漸く青年の力を振り向いた。そして、ぎゆつと青年の腕を掴んだ。

『ナニ、憎い奴が他にあるつて？　そいつは君、あの村松といふ男ぢやないか？』

『さうです。――が、どうしてそれをあなたが知つてる？』

『知らなくつてどうするものか！』浩順和尚は、眼をギラギラと輝かした。『いつたいが、最初からして、あの男が怪しかつたのだ。それに儂は、ついこの間もどうもあの男を怪しいと思つて、そつと村松邸へ忍び込んで見たのだ。さうして、見るとあの男は癩病なんだ。今までにも、例しのないことぢアない。身の毛もよ立つやうな恐ろしい療法、それをあいつはやらかしたんだ！』



村松氏が癩病であつたとすれば、そこに漸く與七を教唆した理由が判つて來る。

この時しかし、地下室へ這入つて行つた刑事の一人は、佛壇の下からぬつと顔を出して二人を呼んだ。

『與七がね、仙太を抱きしめたまゝ、ゲラゲラと笑つてゐます。さうして、仙太をこつちへ取らうとすると、齒を剝き出して暴れるんです。』

青年と和尚とは、思はず顔を見合した。さうして、暗然として佇んだまゝであつた。

（七）

遂に發狂してしまつた唐澤與七が漸くにして取押へられ、續いてその地下室からは、鋸や出刃や金鎚や、血に黷んだ恐ろしい種々の道具の發見されたのが、やがてその日の夕方である。この時、別の一隊が直ちに村松邸を包圍し、病床にあつた村松俊太郎を、難なく拘引してしまつたことも、最早、管々しく述べる必要はあるまい。

やがて、彼等は峻嚴なる法廷に於てその罪を斷ぜらるることとなつたのであるが、事件は餘りにも腥慘であつたため、村松俊太郎の陳述に對しては、聞くもの誰も顔を背向けたといふ。ここには、彼のなした陳述の中、其一部分だけを掲げて置く。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

殺人教唆の動機について訊ねられた時、彼は次のやうに答へてゐるのであつた。

「私は、實際のところ、前々からあの與七にさうした殺人を犯させた後、それを一度だけは與七の罪を庇つてやり、それからだん／＼に私の期望してゐるものを手に入れるやうにしようと思つてゐました。無論、十九歳の女云々といふのは、何か知ら意味の有りさうなことをいつて、低能の與七の信用を獲るためであつたのですが、それで私は、絶えず與七の行動を見張つてゐました。つまり、最初は暗示だけを與へて置いて、與七がその暗示に乘つたら、その上で細工をする考へであつたわけです。が、すると與七は果して私の暗示に從つてあの樋口妙子といふ女を殺したので、私はそこで、前から考へてゐた通り、浩順和尚に罪を被せるやうな手段を執つたのです。あの和尚は、村の評判が大變に惡く、それに一人つきりで住んでゐましたので、何かにつけて都合がよいと思ひました。和尚をこつそりと殺してしまひ、一方ではその和尚が逃亡したやうに見せかけて置けば、幾人の女を殺しても、その罪は皆、和尚に被せられると思つたのです。意外にもその和尚が生きてゐようとは、夢にも思はなかつたところです。天罰とでも申しませうか、和尚が私の邸内を探りに來た時も、私はそれを、只普通の小泥棒だと考へたのです。

兎に角、私は恐ろしい罪を犯したものです。今考へると、魔が射したやうにしか思へませんけれど、私は何しろ、どうしても癒らない病氣なだけに、いろ／＼と悶えたり苦しんだりしました。そんなことをしても、とても駄目なやうには思ひながら、それでも溺れるものが藁を摑むやうにして、その療法をやつて見度くなりました。殆んど、善惡の見辨ひも出來なかつたのです。私は九州の方の生れですが、郷里では自分の血統がさういふ忌まはしい病氣だといふことを知られてゐて、それで數年前にこちらへ移住して參りました。その移住した當時から、實はもう、昇汞水の注射をして、辛くも病氣が外へ出るのを防いでゐたやうな有樣で、それがあの妙子殺しのぢきあとで、もう注射では用を爲さないやうになりました。轉地療養をしてゐたなどといふのは凡て嘘です。與七を利用して、恐ろしい療法を、あの邸内で度々試みてをつたのです。無論、そんなことをしても少しも効目はありませんでしたが、凡て心の迷ひなのです。私のやうなものは、きつと無間地獄の底へ墮ちて、どんなにか苦しめられることでせう。』

これに對し、浩順和尚のいつてゐることも、又甚だ興味の深いものである。彼は證人として法廷に出頭した時、次のやうに述べてゐるのであつた。

『いや、私はあの妙子殺しのあつた時には、實際何も譯が分らなかつたのでよ。先きにも申しました通り、私はその晩、眩暈寺で酒を飲んでゐたところを與七のために半殺しにされ、しかし、それが與七だといふことは知りませんでした。氣を失つてから暫くして奇蹟的に息を吹き返して見ると、寺からは大分離

れた山の中に捨てられてゐました。漸くのことで、その附近にあつた乞食の小屋を見付け出し、そこでその翌一日を寢てゐたのですが、夜になつてから辛くも玄雲寺まで辿りついて見ると、その時はもう、あゝして峯島警部補と村松とが寺へ踏み込んでゐた時です。床の下から二人の會話を偷み聽きしますと、何か知らぬが、私には大變な嫌疑がかゝつてゐる樣子で、今考へると、その時に私は、いつそ自分から名乘つて出て警部補の判斷を仰いだ方がよかつたかも知れません。

その私が、幸か不幸か、大の探偵小說狂であつたといふわけです。そのために私は、自分自身、その事件を解決したいやうにも思ひましたし、又、私に對する嫌疑が非常に念入りにかけられてゐて、生易しいことでは言ひ拔けの出來さうもないのに氣が付きました。それで、兎に角當時は、再び乞食小屋へ取つて返し、それから東京へ逃げたのです。この間に、私がどんなにひどい肉體上の苦痛を味はつたか、それはかうして身體だけは元通りになつても、怪我が癒つた時、髮の毛や鬚などが急に眞白になり、容貌までもこのやうな老人染みたものになつたことでお分りでせう。

私はしかし、それでだん〳〵と日が經つうちに、今迂濶に村へ歸つては、ひよつとして私の正體を知られ、自分で證據を握らないうちに、妙子殺しの犯人として捕へられることを恐れました。捕へられてしまつてからでは、一寸も辯明の餘地がない筈、私を陷れた罪はよく出來てゐますし、それで私は、到頭孤田剛介などといふ變名を使つて、私立探偵を始めたのです。

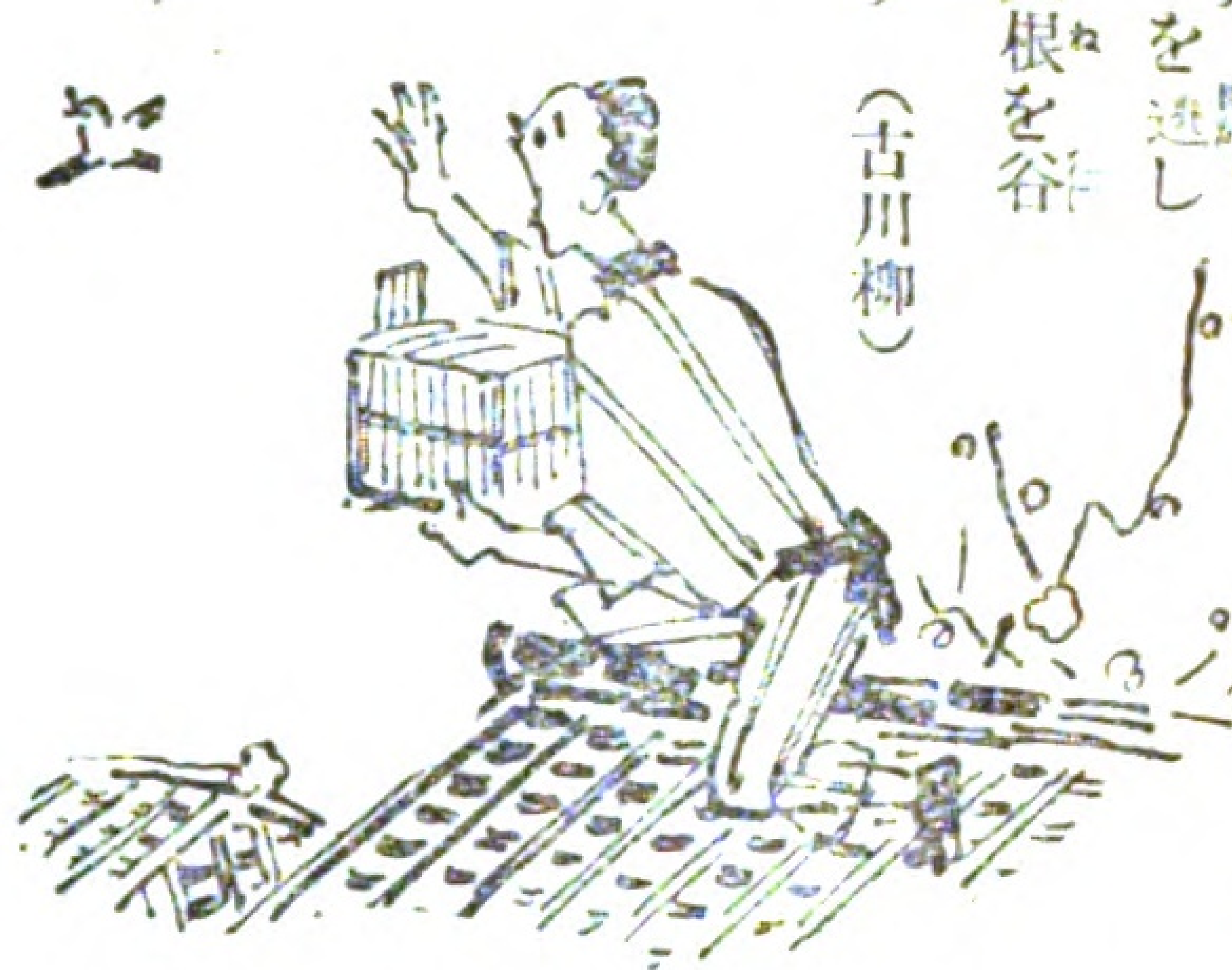
その私の探偵事務所へ、狹原青年が訪ねて來て、村の娘があの後も二人まで行方不明になつたことを話して吳れた時、實は私は、非常に吃驚致しました。村の方で、それを大事件と考へずにゐて、あまり騷ぎ立てなかつたせゐもありませうけれど、迂濶にも私は、それを少しも知らずにをりました。あのことを初めて聞いた時には、思はず胸がドキ〳〵として來たものです。さうして、愈よ自分の乘り込むべき時期が來たと思つて、決死の覺悟で村へ乘り込んだものです。――最初には、村松が世間へ絕對に顏を出さなくなつたといふことから疑ひ始め、しかし確實な證據を摑むまではと思つて、苦心をしてゐるうちに、あの臼で搗かれて平たくなつた指環を發見し、それから、次第に手懸りがついたのです――が、兎に角考へて見れば、私がさうして行方も晦ましてしまつたために、村松は猶も三人の娘を手にかけたことになります。その點、私は村の人々に對して、實に申譯ないと思つてをります。」

事件の詳細は、かうして兎も角判明したのである。

最後に少々附け加へれば、發狂した與七は、その後獄中で狂ひ死に死んでしまつた。死ぬ時まで、伸太の名前ばかり呼んでゐたといふ。

淸順和尙は、再び私立探偵を開業し、例の狹原青年は、二年の後外遊の途に上つた。青年からは、和尙のもとへ、時々外國の珍らしい犯罪の話などが報道されてゐるのである。（終）

鶯を逃して屋根を谷渡り　（古川柳）



吸付て煙を戴く野がけ道　（古川柳）



名を好むやから大方實がなく　（竹次郎）



紙雛に角力取らせる男の子　（古川柳）



ウヰンドの手摺を借りる大荷物　（愛璋）



飛んだ囃覚えて職は留守になり　（竹次郎）



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



教室を總立ちにして蜂は逃げ（伴内）



天盃を下女も戴く宵節句（古川柳）



怒るから笑ひ笑ふから怒り（ぼん突）

一品屋隣同士の肱と肱（非水）



一本のマッチで心易くなり（春草）



我妻の美しいだけ氣を痛め（喜坊）

川柳漫畫　素文

血ろくろ傳奇

土師清二
岩田専太郎畫



浪藉者闖入――のあとの一騒ぎ。

間もなく鎭まつて、余田伊豫守廣武は風呂上りの、打寛いだ褞袍姿で、脇息に凭りながら酒杯をとるのでした。

幕府で溜之間詰といへば、將軍家の諮問機關といふ顯官ですが、かうして妾宅にやつて來ると市井の旦那と同じこと、頗る氣易にしてゐるのです。

お萬の方が酌をするのを、上機嫌でうけながら、

『生田さん、まだ顔色がよくない、はゝゝゝ』

『左樣で――あまり大膽不敵……』

と生田辨左衞門、先刻曲者に蹴倒され、唾液を吐きかけられた時の恐しさを、まだ押へかねてゐるらしい。が、さすがに表面は苦笑ひで、取繕つてゐます。

『鼠賊。空巣狙ひだ、ナニをするものか。先づ一獻』と伊豫守は酒杯をさします。

それを辨左衞門が恭しくうけると、お萬の方のお酌です。

『生田樣』

『はい？』

『慶了院樣は、お變りはございませんか？』

『お變りなくゐられますやうで……』

『結構でございますわ。御佛に仕へて、朝夕御看經、お靜かなお暮しをなすつてゐらッしやる慶了院樣が、お羨ましい……わたくしも、あの方のやうになりたいと思ふことがございます』

と、意味あり氣にお萬の方は云つて辨左衞門を見るのです。その眼は、

お前樣と慶了院お伊勢の方の仲は、相變らずなのであらう、私は何もかも知つてゐる――と囁いてゐるのです。

辨左衞門も悪怯れず、笑つて見せて、

『世の諺に、負はうといへば抱かれようといふ――といふのがございますな』

『それは、わたくしのことでございますか』



『いや！ 決して……はゝゝ』
『まア、憎いお口……』
と、お萬の方は辨左衞門を、睨みつけました。
『コレ、酌だ』と伊豫守。
『御免遊ばせ。生田樣が、お弄りになります』
『まアいゝ。密談があるさうだから、お前は、少時あちらへ行つてくれ』
『はい。では、生田樣御悠り遊ばせ』
とお萬の方は、座を外します。すると、そのあとで、辨左衞門は、一膝乘出し、
『近頃、得體の知れぬ邪魔者が出て來たやうでござります』
『ほゝウ、邪魔者――』
『はい。先刻、此所に忍込んだ曲者も、邪魔者の一味かと存じます』
『なるほど。それから？』
『油斷なく手配をいたして居りまするが、萬一貴方樣の御身邊に――』
『いや。その心配は無用だ。俺は、俺の身を護るに充分な手立がしてある』
と伊豫守は、如何にも自信に充ちた口吻で、笑つてしまひました。お前なんぞの世話にはならぬと云ひたさうです。
『それよりも、慶了院の方は、どうだ？』
『はい、漸くお古女一人、手馴付たやうでござります』と辨左衞門。
『それが第一だな。常々云ふとほり、將軍家を動かし申すには大奧に手を入れる――これが第一の近道だ。遠廻りをするやうで、實は近道になる』
『はい。重々心得まして……』
『手馴付けたお古女といふのは、御先代のお古かな？』
『前將軍家惇信院家重公の御中﨟お米の方でござります』
『お米の方は、前將軍家の御愛妾だ。あれならば大丈夫――よい手蔓が握られるだらうて。慶了院によく云ひつけて、お米の方をまるめ込むがよい。萬事はソレからだ』
『はい。御差圖どほりに事を運びたいと存じまする』
と左衞門は、恐入つたやうに云ふのでした。
『しかし、辨左衞門』
『はッ……？』
『俺は、貴公に差圖はせんぞ』
『はッ』
『阿波藩の御家騷動に、俺が絲を引くことはできんでな。わかッたか』
『その儀は重々――心得て居りまする！』
『それならいゝ。念を押すにも及ばぬことだが……はゝゝ』
と伊豫守は、大きく笑つてしまひました。
辨左衞門は、たゞ恐入つてゐる體でした。しかし腹の底では、ナニを考へ、計畫してゐるか、知れたものではありませ

ん。悪事にかけては、悪魔の使徒のごとき生田辨左衛門です。

二

此處は、前將軍の愛妾達が閑かに月日を送つてゐる新し橋御門外の御用屋敷です。

『御門鑑をおねがひ申します』

と門脇の門番役詰所に立つたのは、白髪を小髷に結ひあげた老婆でした。

『誰方樣――誰方樣でございます？』

役人が、定めの二聲掛で、札窓から訊ねます。

『桔梗院樣、三緣山增上寺へ御參詣遊ばします』

『お前は、桔梗院樣お附添か、粗忽過怠のなきやうお心附申上げい』

『はい。畏りました』

『これを持て』

札窓から長さ三寸、幅一寸の白木に御紋三葉葵の烙印を入れた門鑑を差出すのを受取つて老婆は、詰所の横裏に引返しました。

『頂いて參りました』

そこに立つてゐた桔梗院お米の方は、

『あゝ、さう』

と輕く、うなづいて門の方へ步き出しました。老婆も隨ひます。

やがて門外に出ると四邊に大名屋敷の門、高塀が增上寺の近くまで西側にズラリと並んでゐます。

箒目の立つてゐる道を、淑やかに步きながら、お米の方は云ひました。

『お濱や、御門限はよいのかえ？』

『はい、暮れ六ツまで頂いて參りました』

『それは結構』

お米の方は、それツきり默つて增上寺の方丈裏までやつて來ました。その途々擦れ違ふ仲間、小者、武士など皆云ひ合はしたやうに振返つてはお米の方を見るのでした。

それはその筈で、お米の方の裝束は、前將軍のお手附の女といふ看板同樣の――鐵色無地染羅紗の長合羽（一名晴天合羽）白足袋、白木木履に白緒の履物、剃り落した頭に水色縮緬の頭巾といふ裝束なのです。これは御用屋敷に住んでゐる前將軍のお妾であつたといふ身分證明の風俗であつたのです。

旦那の將軍家が在世の頃は、綾羅錦繡の榮耀榮華。しかるに一朝、將軍他界となると御位牌一箇を頂戴して尼になる。出入の監視嚴重な御用屋敷に押籠められる――といふのが大奧お中﨟の最期所であつたのです。

いふまでもなく、お米の方もその一人で、桔梗院といふ院名付の身分でした。年齡は二十三、いよ〳〵これから女としての美しさを滲み出さゞる年齡頃、のみならず健康で、美貌でありました。

『お濱や』

『はい』

『世間の者は、どうしてかうなのであらう。端ないではないか。わたしを……』

『左樣でござりまする！　ジロ〳〵と振向いて參りまする……しかし、お方樣がお美しい故でございませう、ほゝほゝゝ』

『お前まで、わたしを』

『御免遊ばせ。つい、心にございますことで……はい』

『あの……町駕を拾つておくれぬか』

『畏りました。此處へ呼びますのでございますか』

『お前のと二挺』

『では、直ぐに……』

といふので、お濱はそゝくさと常念佛外の茶店の方へ行つたかと見ると、間もなく二挺の町駕を伴れて此方へやつて來ます。

行く先は上野下の車坂、眞言寺の惠心寺・堅了院お伊勢の方の住む清淨



庵のある所。

駕屋は稼業柄お客は御用屋敷のお古女のおしのび歩きと知つて、酒料は充分、勢よく屋敷街を突つ切つて、エイホイ〳〵。

芝から上野までの長道中。

やがて駕は、恵心寺の山門に着く。

駕から降りたお滝は、お米の方に何やら恐縮の樣子で云つてゐる樣子でしたが、お米の方を清浄庵の玄關まで送つて置いて、山門から出て行くのです。

こちらは客間に招じられたお米の方、晴天合羽を脱げば、鼠染の小袖に紫の被布、青々とした頭、如何にも、行ひ澄ました尼樣でした。

お相手は、これまた紫被布、切髪、現世の煩悩を斷切つた有樣のお伊勢の方です。

が、一方は將軍家の寵愛を享けたお米の方、こちらは大々名とはいへ、阿波侯の寵愛を專らにしたお伊勢の方。經歴、品位の點では、どうやらお米の方が一段上に見えるやうであります。

そこへ、荒磯の菊の振袖、白縮の袴、匂ひやかな前髪の若衆一人、緋の袱紗に茶椀をささげて疊の上を辷るやうに、徐々と現はれて來ました。

さうして、お米の方の前に進み、茶をすゝめると、また徐かに立つて襖の外へ消えて行くのでした。

あまりの美しさ、若衆の華やかさ、お米の方は、何やら香に咽せた心地で、茶椀を取上げるのでありました。

二十一

『あれは……當寺の小姓初之丞と申しまする、茶道の手ほどきに、毎日わたくしの手許に參つて居りまする』とお伊勢の方。

『は……左樣で』

と何氣なく答へても、何やら心の奥にときめくものがあるのを、お米の方は匿し終はせることができない樣子でした。

それから、あれこれと話が進むに伴れてお米の方も打寛いだ體になつて來ます。

話と云つても、いづれは茶の話、花の話、風雅の道の話でありませう。やがて圍碁の話になつて、お米の方は前將軍家重公お徒然のまゝに圍碁のお相手をしたことがあるといふことまで話が進んで來ると、お伊勢の方も阿波侯のお相手をしたことがあるといふので、お伊勢の方は、初之丞を呼んで碁盤を運ぶやうに命じました。

閉切つた黒骨の障子に、近頃めづらしい暖い陽ざし、パチリ、パチリ暫くは烏鷺の勝負に餘念もないお米の方とお伊勢の方。

どうやらお米の方が二三目上手のやうで、最初の一番はお伊勢の方が四五目負けになりました。で、一ぷくといふところへ、先刻の初之丞が淑やかに現はれて、お伊勢の方の身近く寄つて、何やら囁くやうにいふのです。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『でも、お客様故……』とお伊勢の方。
『はい、お斷り申上げませうか』と初之丞。
それと聞いて、お米の方は、
『わたくしには、お構ひなく……』
といふのでした。で、お伊勢の方は、
『當寺のお住職樣が、わたくしをお呼びなのでございますが……
……』といひます。
『お出で遊ばせ。わたくしは待たせて頂きます』
お米の方は、さう云ひます。お伊勢の方は直ぐ歸つて來るから、その間碁のお相手でもしてゐるやうにと、初之丞に云ひつけて客間を出て行きました。
その後で、初之丞は、恐る〳〵お米の方と差向ひに坐つて、黒石の碁器を引寄せました。
『あら……』
と思はず口の中で云つて、
『お強いのでは……？』
と云ひつゝ、お米の方は初之丞を、凝ッと……稍ゝ眩しさうに、見るのです。
眩い陽ざしと、炭火の香と、上氣するやうな部屋の温氣でありました。

三

手早く猿轡を嚙ませ、兩手を掴んだかと見ると、くるりと脊を向けて、掴んだ兩手をぐいと引く。引かれて倒れるやうにお鶴は藤吉の脊に負はれる。と、
『どッこい！』
藤吉は、腰をあげて一揺、揺りあげ、
『行きますぜ』
と三十郎に聲をかけました。
『よしッ、俺も行く！』
と三十郎が答へた途端、隙があつたか、踏込んだ介五郎、
『エイッ』
右の籠手へ、サッと打込んだ一刀！ 三十郎引ッ外して跳び退つたか——と見る間もなく、
『汝！』
横に拂つた亂車刀一閃！ 切先深く介五郎の右の頸骨へ、ガッ……と斬込んだから堪らない。
『わッ……』
と退るところへ、跳りかゝつた第二刀、左腕をスッパと斬つて落す。
『うッ……』
呻り聲をあげて、介五郎はドタリと疊の上に打倒れました。
『餘計な骨を折らしやアがつた。おい、藤吉』
『シーッ！ 藤吉はいけませんよ』
『ア、さうか。聞えたところで構ふものか。世間に澤山ある名前だ。行かう、先へ出ろよ』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『頼みますぜ。重荷を脊負ッてるンだから……』
と、お鶴を脊負つて藤吉は、緣から庭へ、植込をぬけて裏木戸へ――。
裏木戸を出ると、戸澤能登守下屋敷の高板塀。闇の中から聲があつて、
『こッちで、よろしうございますか』
『いゝよ。其所へ行く、垂を上げときねえ』と藤吉。
『へい。合點……』
答へたのは、どうやら駕屋らしい。
『どッこい……しよ。おい』
『へい？』
『こッちから行きやア金杉橋の右の袂、あすこに地藏様が立ッてら、あすこンところで待つてゐてくれ。わかッたかい』
藤吉は、どうやらお鶴を駕の中に轉し込んだらしく、さういふのでした。
間もなく板塀下の闇から一挺の駕が出て來たかと思ふと、跫音を殺してスウ……と、本芝町の表筋へ去つて行くのです。
『急ぎませうよ。いくらなンでも、人斬り、誘拐をやつて來たンですぜ』
『あゝ、急がう』
と云つたが三十郎、急ぐ樣子もありません。
『困つたなア』
藤吉は、もどかしがつて呟きながら、それでも三十郎の後に跟いて本芝町の表筋へ、やがて金杉橋までやつて來る。
見れば四邊は夜氣沈々、灯影一ツなく人ッ子一人通つてもゐません。
と、水死人供養の地藏尊像のかげから、
『親方、親方ですかい？』
『おゝ留か、お前そこにゐたのか』
『えイ、待つてゐたンでさ。アレは船へ下しました』
『さうか。ぢやア俺達も乘らうか』
藤吉は、三十郎を振返りました。
と――三十郎は、闇を透すやうに凝ッと金杉橋の上を見てゐるのです。
『ナ、……なンです？』
と藤吉、思はず橋の方を見ると、深い闇の中に人影一ツ。うごいてゐる。
『アレですかい。道岡さん……』
『うム。どうやら彼奴……食はせもの〻勇肌らしい』
『えッ……アノ……彼奴、みゝ……見てやアがつたのか。乘りませう！』
『いや、俺は彼奴！』
『いけません！　彼奴を殺るのは今夜に限つたことはないンだ。乘りませう、船へ、乘つておくンなさい』
藤吉は、三十郎の袖を摑んで放さないのです。さうして、
『人違ひかも知れませんぜ。ナニしろこんなところで、掛り合

つてちや……相手が何者にしろ面倒でさ』

と宥めるやうに云つて、漸く三十郎を川岸の雁木まで連れ下し、留藏が押へてゐる歩板から小舟に乗移りました。

『留、漕ぎ出してくれ』

『合點だ！』

折柄の引潮に黒々と流れる水の上を矢のごとく舟は漕ぎ下つて、間もなく海に出て來ました。

『左京崎を廻つたかい？』と藤吉。

『へい。廻りました』と留藏。

『ぢやア、灯をつけてくれ。鼻を摘まれてもわからねえや』

と藤吉は漸く落着いたらしい聲です。かうして海の上なら如何に恐しい勇肌だつて、現はれまいと思つてゐるのでせう。やがて、

『へい、親方』と留藏が、苫の間から差出したブラ提灯を、藤吉は受取つて苫屋根の裏に吊下げました。途端に、

『ヤッ、これア驚いた！ ナ、、ッなアんだ』



巫山戯た聲をあげて藤吉は、灯の中に浮び出た三十郎とお鶴の有樣をジロリ〳〵見るのです。

　三十郎は膝の上に、お鶴の上半身を抱き寄せて胡坐になつてゐるのでした。

『モガ〳〵してる癖に、馬鹿に靜かだと思つたら、なアんだ』

『なア、藤吉』と三十郎。

『へい？』

『此奴を殺すのが、惜しくなつた』

『えッ……じよ……戯談でせう。レコの註文だ。殺さずに置けますかい』

『俺は、惜しくなつたよ』

『だッて――そいつア氣狂ですぜ。それに、なんだ……生かして置きや呼吸の通つてる中は、ヤレ生田樣、甚之助樣と泣いたり笑つたりするに違げえねえといふ譯で……』

『さうだ――辨左衛門から、この娘を殺してくれと頼まれたが、俺とお前だ』

『さうでござンせう。貴方樣は、お請合ひなすツたンだ。しかも海へ斬込めツてことまで――請合つたのですぜ』

『わかツてゐる。しかし藤吉。お前も存外わからぬ奴だな』

『だッて、それア……』

『え〻、諄い！』

『いくらなンでも……それアいけません！』

『ナニッ！』

と三十郎が云つたのと、ギラリと光つたのと、胸板へ隻手突の一刀を刳り込んだのと同時で、

『うわッ……』

　兩手で、刀身を摑んだから堪らない刃元を握つた指からサッと血を噴き出す、見る〳〵胸のあたりの着物にジワ〳〵血が滲み出て來るのです。



　左腕でお鶴を膝に抱き竦め、右に摑んだ大刀は藤吉の胸板に刺込んだま〻、手元へ引かうともせぬ道岡三十郎の

『ヒイ……ヒイ……人殺し……ヒト……ヒイツ……ヒイ……』

見る〳〵口から血糊を垂らせながら、藤吉は叫ばうとするのですが、聲らしい聲は出ぬと見えて、血泡を口、鼻から呼吸の

たびに夥しく吹き出すのでした。

『なア藤吉、どうせお前は、アノ勇肌に斬られるのだ。少々遅いか、早いか……』

さう云ひかけて、三十郎は胸のところにあるお鶴の顔を見ました。

猿轡をされたまゝお鶴は、空虚な二ツの眼で三十郎の顔を見つめてゐたらしいのですが、三十郎の眼と合ふと何を思つたか、ニツと微笑むのでした。世にも美しく可憐な狂へる娘！

三十郎はその眼へ、ニヤリと笑つて見せるのです。

狂へるお鶴の眼には、三十郎が戀しい甚之助に見えたのかも知れません。

四

夜明に間のない刻限。

本銀町阿波屋徳右衛門本宅の表戸を、ドン／＼叩く者があります。

『開けい。開けぬか』

『ハイ……誰方様でございます？』

『開けいと申すに！』

『唯今ちと、家内に取込み事がございますので、御用事ならば明日お越しなさつて下さいまし』

『北町奉行所與力大川主馬ぢや。主人徳右衛門に不審あつて參つたのだ。開けいと申すに！』

と聞いて、手代の榮助は驚いて大戸の掛金を外し、恐る／＼頭をさげました。

『徳右衛門に取次いでくれ』

『へツ、少時お待ち下されませ』

榮助は、そゝくさ奥へ行きます。五六人の店の者は片隅に寄り固まつて唯だオド／＼してゐます。

主馬はと見れば、供をも伴れず唯一人、宗十郎頭巾、打裂羽織、白足袋、雪駄、鮫鞘の兩刀といふ風體、羽織の下から少々覗いてゐるのは朱總で、十手らしい。

間もなく阿波屋徳右衛門、恐る／＼店先に出て、出迎へます。

『許せ』と主馬は大刀を取つてズツと店から上る。徳右衛門は案内して奥座敷に招じ、挨拶を述べるのでした。

『本芝町裏、浪人田淵介五郎宅に、夜盗が押入つたと申すが、左樣か？』

と主馬は、さういふのです。訊ねられる徳右衛門は介五郎浪宅に附けてあつた下男平六の注進で、先刻聞知つたばかりのところなので、お公儀の早さに喫驚しながら答へるのでした。

『はい。左樣でござります』

『お前の娘お鶴を介五郎宅に預けてあつたのぢやな？』と主馬。

『はい。半月……いや、十日ばかり前方かと覺えまする』

『何用あつて預けた？』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『は……はい』

『仔細があらう。其方は江戸諸問屋中でも屈指の大町人ぢや。たしか柳島にも寮があつたな』

『はい。ホンの茅屋でござりまするが……
……』

『娘お鶴が、病氣保養のためならば、あのやうな浪人の宅に預置かずとも、結構な寮があるではないか』

『はい……』

『それとも介五郎に申しつけて、お鶴の武藝指南でも頼んであつたのか、どうぢや？』

與力大川主馬は、嘲るがごとく煽てるが如く、しかも鋭い訊問を浴せかけます。

『は……それは……』と德右衞門、答へることができないのです。

娘お鶴を田淵介五郎に預けた理由を云へば、自然生田辨左衞門のこと、甚之助のこと、お鶴が橋場の寮で甚之助と共に誘拐された顚末を云はなければ話の筋道が通じない――が、それを迂濶に此所で云つてしまつては、どんな結果になるかも知れない――と德右衞門は思ふのでした。

『その儀の返答、できぬといふなら、他の事を訊ねるが、德右



衛門』

『はッ……』

『其方は江戸廻り阿波産藍玉の獨占、つまり一人占を致し居るな』

『はい、藩のお鑑識に依りまして藍玉御用を勤め居りまする』

『利益の多い商賣だ。どうぢや、阿波藩の重役共の金庫もいたして居るであらう』

『決して……左樣な儀は』

『ない、と申すか。收賄、贈賄、瀆職時代だと申すが――江戸詰家老生田辨左衛門殿などは、どうだな?』

『さゝ……左樣な御不審は、恐れながら徳右衛門。心外に存じます』

『左樣か』

と主馬は、相變らず頭巾のまゝ、嘲るやうに徳右衛門を見詰めてゐるのです。

『もう一言訊ねるが、嘘僞は通さぬぞ』

『はい。お上に對しまして……』

『よし。では訊くが、車坂惠心寺内の清淨庵、あれに住んでゐらるゝは阿波侯元の御愛妾お伊勢の方と聞いてゐるが、左樣か』

『はい。左樣に承つて居りまする』

『見たところ庵の結構、數寄を盡してゐるが、あの建物は其方の寄進、其方の財布から出たと申すことだな?』

『は……はい。御恩を蒙つて居りまする徳右衛門奴でございます。御恩報じの一つと存じまして……』

『もうよい。わかつた。ところで一言云ひ置くが、俺どもの取調べたところでは、昨夜、介五郎を斬つて其方の娘お鶴を攫つて立去つた曲者は、生田辨左衛門の厄介になつてゐる浪人道岡三十郎、相棒は岡ツ引山ノ宿の藤吉。この兩人が今杉橋の下手よりお鶴を小舟に乘せて、海へ、漕出したまでは、わかつてゐる』

『はッ……そゝ……そのやうな事が……眞實でございませうか?』

『身共は嘘は云はん! 徳右衛門、篤くと考へて見るがよからう。お鶴は甚之助の情を忘れず、氣が狂つても、夜となく晝となく甚之助樣々だ。辨左衛門にして見れば、大望があつて阿波藩主の落胤に仕立てゝゐる甚之助――その甚之助と町人の娘の色戀沙汰が、世間に擴がることは好ましくなからうではないか。そこでぢや、お鶴を邪魔だと思つたらしいのだな、生田辨左衛門が――』

一本、一本――止め釘を打込む調子で、主馬は徳右衛門に納得のいくやう、云つて聞かせてやるのでした。

聞いてゐる阿波屋徳右衛門は、信ずべきか、信ずべからざるか、迷はざるを得ないのでした。

徳右衛門が斯うして江戸廻し藍玉獨占で、大身代を作つたのも、藩の家老生田辨左衛門と結托したからできたことでした。そのために徳右衛門から辨左衛門の懷へ持込んだ賄金。今日ま

辨左衛門の請求に應じて持込みつゝある莫大な金品。從つて內內は親類同然な交際をして居り、しかも一人娘のお鶴まで、辨左衛門の次男坊甚之助に捧げ物にして歡んでゐる德右衛門なのです。

主馬の言葉が、容易に信じられぬのは無理もないことでした。が、大川主馬は北町奉行所配下の與力です。それに介五郎宅の出來事を手に取るごとく知つてゐるのみか、辨左衛門や慶了院お伊勢の方のこと、それらと德右衛門の關係、お鶴のこと、甚之助のこと一切を手に取るごとく知つてゐる點から見ると、主馬の云ふことが出鱈目だと思へない……？

德右衛門は、首垂れたきり、顏をあげることができないのでした。

『夜も明け切つたらしい。ドレ、身拵へにかゝらうか。德右衛門、少時此所を借りるぞ』

『はい……』

德右衛門は、俯向いたきりです。

と、主馬は、スツと立上つたやうでしたが、俯向いてゐる德右衛門の眼に見えたのは、先づ脫ぎ捨てた打裂羽織。それから投げ出すやうに置いた兩刀。踏み脫いだ袴……？

德右衛門は、思はず顏をあげて主馬を見ました。すると、宗十郎頭巾は何時の間にか、豆絞の頰冠と變り、スルリと着衣が肩から辷つたと見ると紺看板、腹掛、紺股引。立つたまゝで片足づつ白足袋を紺足袋に、穿替へ、

『德右衛門。俺が云つたことを、よツく覺えて置け！』

ぐツと睨みつけたまゝ、

『この鮫鞘の大小は、甚之助の持物だ、お前から返えして置いてくれ。わかツたかい。俺は歸えるよ』

と云つたかと見ると、そのまゝ店の間へ、ズツと出て行つて腹掛の丼から取出したのが麻裏草履一足！

かくて勇肌は、大戸の潜をガラツと引開け、仄明るい朝の外光の中へ、通魔の如く消えて行くのでした。

五

『風が出たやうでございますね』

『うム。さうらしい』

『秋葉樣の杜の音だ……』と德右衛門、凝ツと風音を聽いてゐる體で、

『わツしや、餓鬼のころから飛道具が好きで、吹矢をね。よツく吹矢を持つて杜の中へ這入つたものでごさンすよ。山鳩、かけす、鶫、椋鳥、いろんな小鳥を吹き落しました』

『さうか』

と三十郎は、そんな話には興味もないらしく、懷手の頰杖で、膳に眼をやつてゐるのでした。

深川靈乘院裏の長屋にゐる久世森藏の宅に預けて置いたお鶴のことが、何故だか、氣になつてならないのでした。

あの夜、金杉橋で出會つた人影は、怪しい勇肌に違げえねえ

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN


……だから彼奴は阿波屋德右衛門を脅しに行きアがつた。與力に化けて
行きアがつたンだ……。彼奴は一體……何を狙つて

ゐやがるンだらう？

まるで甲賀伊賀の忍術を體得してゐるとしきや思はれねえ。その彼奴が、殺る氣なら生田辨左を殺るくらゐは、お茶ノ子サイ〳〵の筈だ。

況んや余田伊豫守だつて、彼奴が殺る氣なら譯はねえ。だのに、彼奴は誰をも殺しやアしねえ……何所彼所となくヒヨコ〳〵現はれやアがつて、此方の邪魔をしたり、脅したりするが、なんのために、やつてやがるンだ？

三十郎は、そんな風に考へて見るのでした。

『ねえ、旦那』

『おい？』

『ナニを考込んでいらツしやるンで。お燗ができました。一ツ』と吹矢ノ淺右衛門、鐵瓶から德利を引上げます。

『こんなことは、わツしの領分ぢやアないと仰有れば、それまでの話でございますがね。このお家は、隨分古い屋敷だが、此所のお客様といふのは、先刻チラリと見た美しい女の方と前髪の若衆、アノお二人でございますかね？』

『うム。さうだ』

と三十郎は、まだ別の事を考へてゐるらしい返答です。

『で、云つて見れば、旦那とわツしは用心棒でごさンすね。この屋敷内に怪しい奴が現はれる……現はれた時は、旦那は一刀流、わツしは手馴れた鐵砲でドンとやるンですね』

『うム。さうだ』

『やツと分りました。ナニネ、久世の旦那が、貴方樣にお供をして行けばわかる——とだけ仰有つたものですから、はゝゝ』

と追從笑ひで、淺右衛門は湯呑茶碗に手酌で、なみ〳〵と注いでは呷るのでした。

戸外は日暮近いか、こゝ洲崎村秋葉權現社の杜に風の音にまじつて、夕鳥の啼き聲が寒む〳〵と聞えはじめました。



『お灯を差上げます』

襖がスウツと開いて、腰元風の若い女が燭臺を捧げて現はれます。

それを淺右衛門は、ニタ〳〵薄笑ひで見るのでした。左眼が潰れて右眼一ツがギロ〳〵光つてゐる怪老爺……年齢は六十七八か。

『濟みませんが、お酌を一ツ、へゝゝゝ』

と淺右衛門。女に要求するのです。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『はい』女は、素直に徳利を取上げました。

『ありがたい！ト、、……』と酌をうけながら

『あちらのお座敷の、お客様は御機嫌でございますかね？』

『え、……』と女は、意味あり氣に笑つて見せるのです。

そのあちらのお座敷は——四疊半の小間で、置炬燵を眞ん中に、前髪姿の初之丞と美しい丸髷の女と差向ひで、何かと語合つてゐるのでありました。

『お寺の勤めは、嫌でございます』

『あゝ、さう……さうね』と丸髷の女は、滴るやうな、食ひつくやうな眼で凝ツと初之丞を見るのでした。

『御佛が、怖しうて……けれども……私には父、母がございます。私が貢いであげねばならぬ親達がございます……』

『さうなの——』

と女は同情に滿ちた聲で云ひ、炬燵の上に、むつちりと白い手をのばした途端——不意に、丸窓の障子が音も無く開いて、

『聲を立てるな！　靜かにして居れ』

と云つたかと見ると窓からヒラリ！　部屋の中に突立つた怪しの男！

見るより男女は、氣も顚倒、聲も得立てずガタ〳〵震へ出しました。

『おい！　動くな！　二人とも生命を取らうとは云はねえ。しかし、聲を立てると、コレだぞ』

腹掛の丼から拔き上げて見せたは、ドギリと光る匕首です。そいつを口に啣へたかと見ると、縮上つてゐる初之丞の襟首を掴んでズル〳〵炬燵から引擦り出し、そこに落ちてゐた紅い扱帶で縛り上げ、女をも縛りあげて男女背中合はせに括付けてしまひました。

『おい、お米の方。お前に云つて置くぜ。生田辨左衞門やお伊勢の方の口車に乘つて變な眞似をすると承知せんぞ！』

怪しい勇肌は、さういふのです。

女は、コツクリうなづきました。

『よし。わかつたな。第一身分を忘れちやいけねえ』

と云ふなり勇肌は丸髷を引ツ掴んでグイと引くとスポリ！　脫げたは大丸髷の鬘——お米の方は忽ち元の青々とした坊主頭になる。

『ハ、、……笑はせるぜ。これが正氣の沙汰と云へるか。馬鹿奴！』

と、さすがの勇肌も馬鹿臭くなつたか、思はず笑ひ聲を立てました。その鼻へ、クーン……と臭つてきた火繩の匂ひ！

六

『やツ、飛道具かツ』

跳躍一番！　勇肌は窓から庭へヒラリ！　途端に追擊ちの一發！　ズドン！

『わツ……』悲鳴と同時にドタリ……と地響でした。勇肌は打ツ倒ふれたか……？

『手應へ、あつたか』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『傷負うたらしい』

と云ひながら煙硝の煙の中から現はれたのは三十郎と淺右衛門です。

『どれ、見てやらう。オヤツ二人とも目を廻してるぜ。淺右衛門、介抱してやれ』と落着拂つた三十郎、燭臺を取つて窓から庭を見下しました。さうして滿足さうに、

『横ツ腹をやつたか……バタ／＼のたうつてるぜ。のびたまンまクル／＼廻つてゐやアがる』

『へゝ、やツぱり俺の腕は狂ツてはゐねえのか』

と淺右衛門は得意で、お米の方と初之丞を引起すのでした。

三十郎は、大刀をギラリ鞘走らせたかと見ると窓から庭に飛降り、倒れてゐる勇肌の頭の方から近付いて行くのです。

さうして、脊骨へ一刀刺下さうと切先をズツと下げたが、さうはせず、『久振の牛胴——面白い！』

と云ふかと見ると半歩横に開いて振冠つた大上段。据物斬牛胴試しの呼吸……吐く息と引く息と、息神無我の境に入る一瞬！

『エイツ』一閃、鐵桶を斷つ太刀風に、勇肌の胴體は二ツ——となつたかと見ゆる瞬間です。毬の如く跳ね上つて、

『タツ！』

勇肌は、手練の匕首を雙手上段に振冠つたのです。

と見て三十郎、大口開いて、『わツはゝゝゝゝ、驚いたか。今のは空氣合だぞ。はゝゝゝ……死んだ眞似をして數討をやらうとしたな。そんな古手を食ふものか。さア來い！』

『汝ツ……』と呻る勇肌。

『ソレ、此方へ來い』と云ひつゝ、上目青眼にピツタリ付けた大刀の切先をジリツジリ、ツと左へ附廻しながら三十郎。一寸三寸五寸左へ／＼開くのです。

誘はれると知つてか、知らずにか、勇肌は一足前へ出る。途端に三十郎、

『ヒヨツクリ！ ア、ヒヨツクリ跛ツこか。はゝゝ。おい、太腿に一發喰つてるンだらう。ソレもう一足此方へ來い。跛ツこを曳いて來い！』

憎々しい嘲罵です。勇肌は如何に無念でせう！ だが、三十郎のいふごとく太腿を撃たれて、進退思ふに委せぬ有様です。

『汝に指二本斬落された恨みがある。その返報がコレから始まるンだ』と三十郎、いよ／＼得意で、鼠を弄ぶ猫の優越か——凱歌を擧げるごとく嘲り嗤ふのです。

しかも斯うして時間をのばしてゐれば淺右衛門の第二彈が手傳つてくれる——三十郎は、それも勘定に入れて强ひて踏込まうともしないのです。

こちらは、お米の方と初之丞を漸く呼び生かした吹矢ノ淺右衛門。庭を見ると三十郎と勇肌とまだやつてゐる。

『よし。モウ一發！』

手早く彈丸填をして、窓枠を射臺に、勇肌の胸板へ——ピツタリ狙ひを付けました。

（つゞく）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大日本雄辯會講談社ニュース

本社の事業に皇天皇土の御加護を祈り奉るべく
伊勢大廟、明治神宮に參拜

小社自ら揣らず、おほけなくも雜誌報國の大願をたて、出版界に船出してよりこゝに二十年、幸に大方の識者先覺愛讀者各位の、御高庇御援助を辱う致し、漸次目的の緒に就くを得ましたことは、一同の衷心感謝に堪へぬ處であります。本年は更にいよ〳〵熱心にいよ〳〵眞劍に、努力邁進、以て報國の誠を效したい覺悟でありますが、我等菲才微力及ばざる事をおそれ、誠に畏れ多きこと乍ら仰ぎ希はくばこの大願に神明の御加護を、垂れ給はらんことを祈り奉るべく、本年元旦を期し、同人一同を代表して、伊勢大廟に赤石營業宣傳局長、並に加藤少年倶樂部編輯長、明治神宮に長谷川會計主任をして參拜せしめ神の大御心を奉體していよ〳〵精進せんことを誓ひ、太々御神樂の奏行を乞ひ神靈を慰め奉りました。

斯くして明るい昭和五年を迎へる事を得た本社に愈々御期待あらんことを御願ひ申上げます。

盛會を極めた本社新年大會
一月五日帝國ホテルにて開催

吉例によつて今年の新年大會は去る一月五日の午後二時、昨年と同じく帝國ホテル大廣間に於て開催されました。斯の種の會合には何よりも社員の演説が盛に行はるゝが自慢とも特徴ともされてゐる本社の事とて、此の日も淵田編輯局長の開會の辭についで、社員數十氏が交ゝ起つて數時間に亙る雄辯熱辯あり、最後に赤石營業宣傳局長は前項、伊勢大廟に參拜の次第を報告旁ゝ眞に神の大御心を奉體して愈々精進邁往すべく鼓舞激勵の言葉あり、一同大感銘の裡に演説會を閉ぢました。續いて餘興に移り、一流の大家得意の浪曲、薩摩琵琶等の演奏は何れも大喝采、終つて別室に於て宴會に移り大いに祝盃を擧げ、興酣に至るや、之亦本會の例として大いに歌ひ、愉快愉快、七時二十分本社の萬歳を三唱目出度く散會致しました。



同人の演説と宴會場の一部

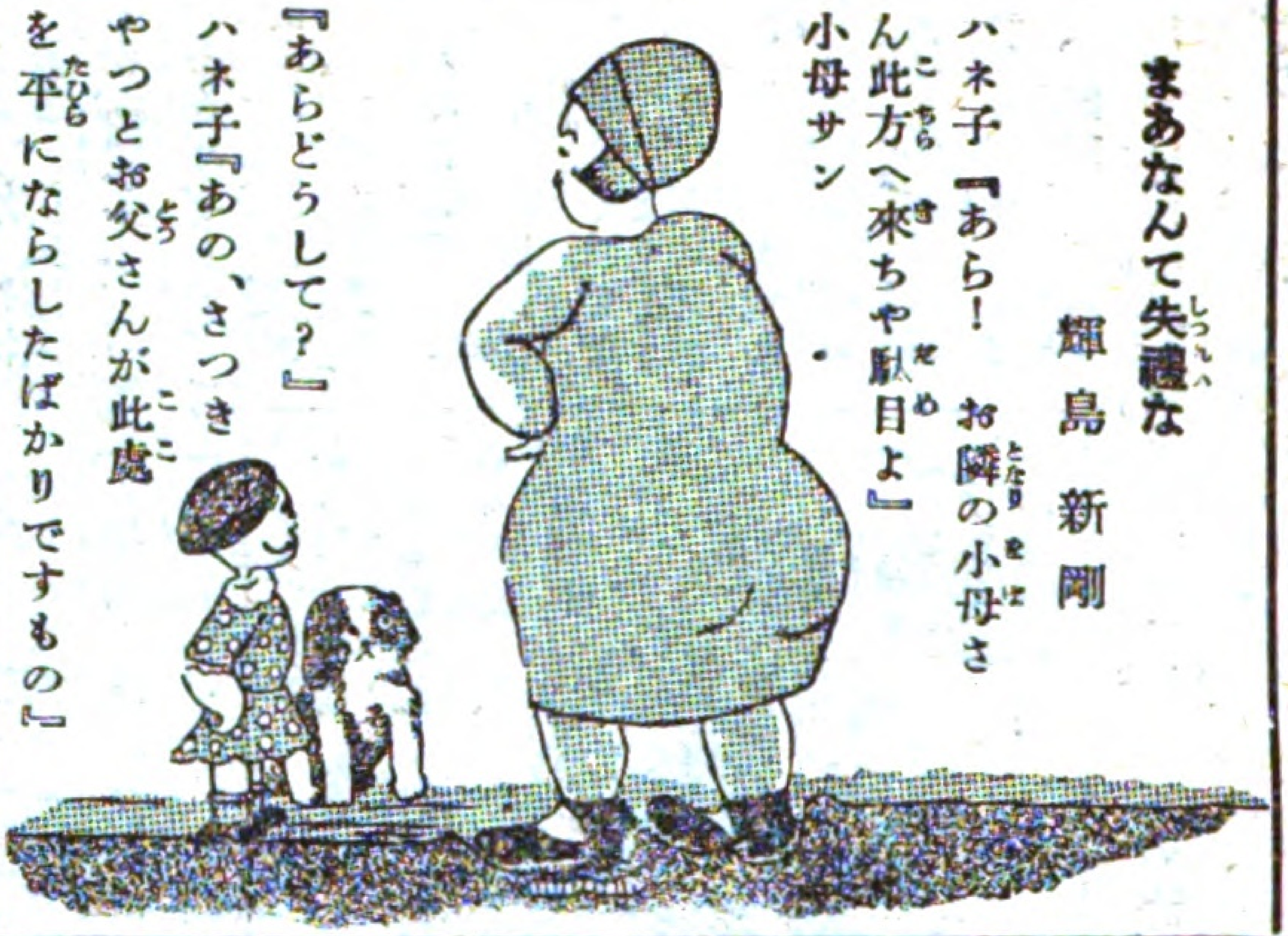
羅馬法王の激賞
——本社九雜誌の獻納——

□最近の伊太利通信。曾つて平和會議に西園寺公の秘書として活躍した松岡新一郎氏、兼ねて本社の派遣にて伊太利、佛蘭西、白耳義地方に出張中今度、世界最大の宗教王國として有名な羅馬法王廳を訪問、親しく法王に接見して、本社の九雜誌を獻納した所、法王は殊の外の御喜びにて御閲覽の上、非常に賞讃され、特に幼年倶樂部の如きは歐洲でも稀に見る良雜誌であると彼地最高のお褒めに逢ひ、松岡氏も大面目を施したる由。

漫畫ルーム

まあなんて失禮な

輝島新剛



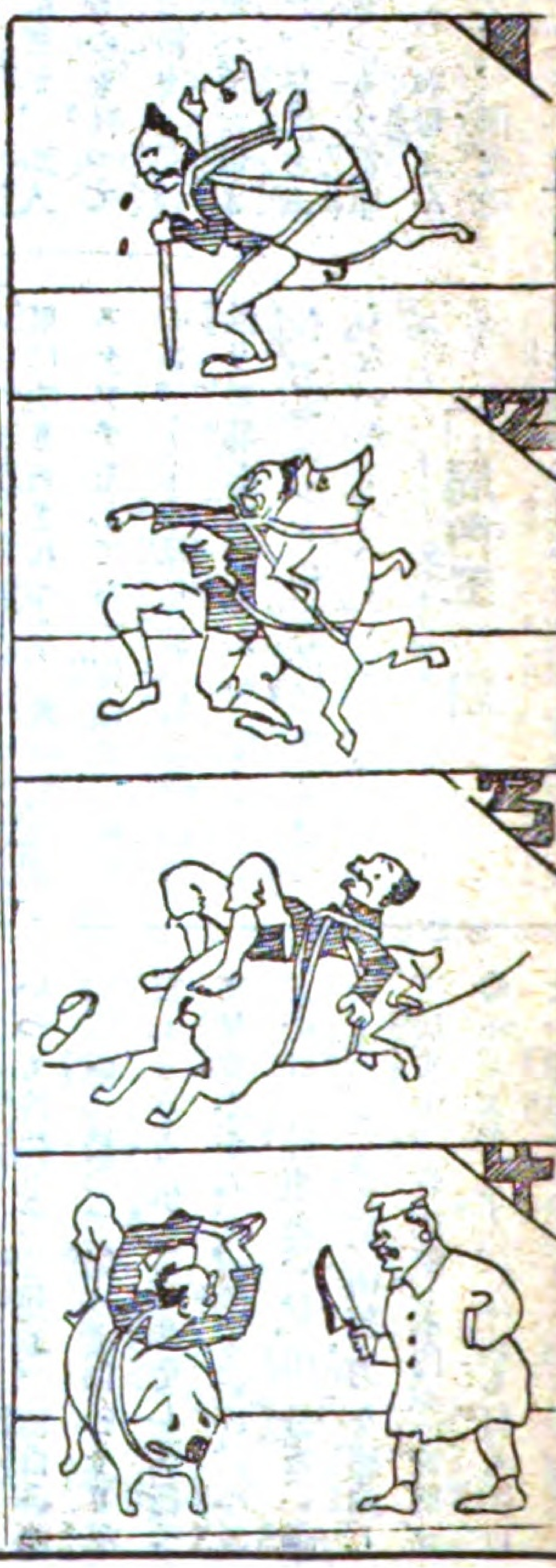
ハネ子『あら！ お隣の小母さん此方へ來ちや駄目よ』

小母サン『あらどうして？』

ハネ子『あの、さつきやつとお父さんが此處を平にならしたばかりですもの』

一體どつちの肉を切るんだね！

隅田彰人



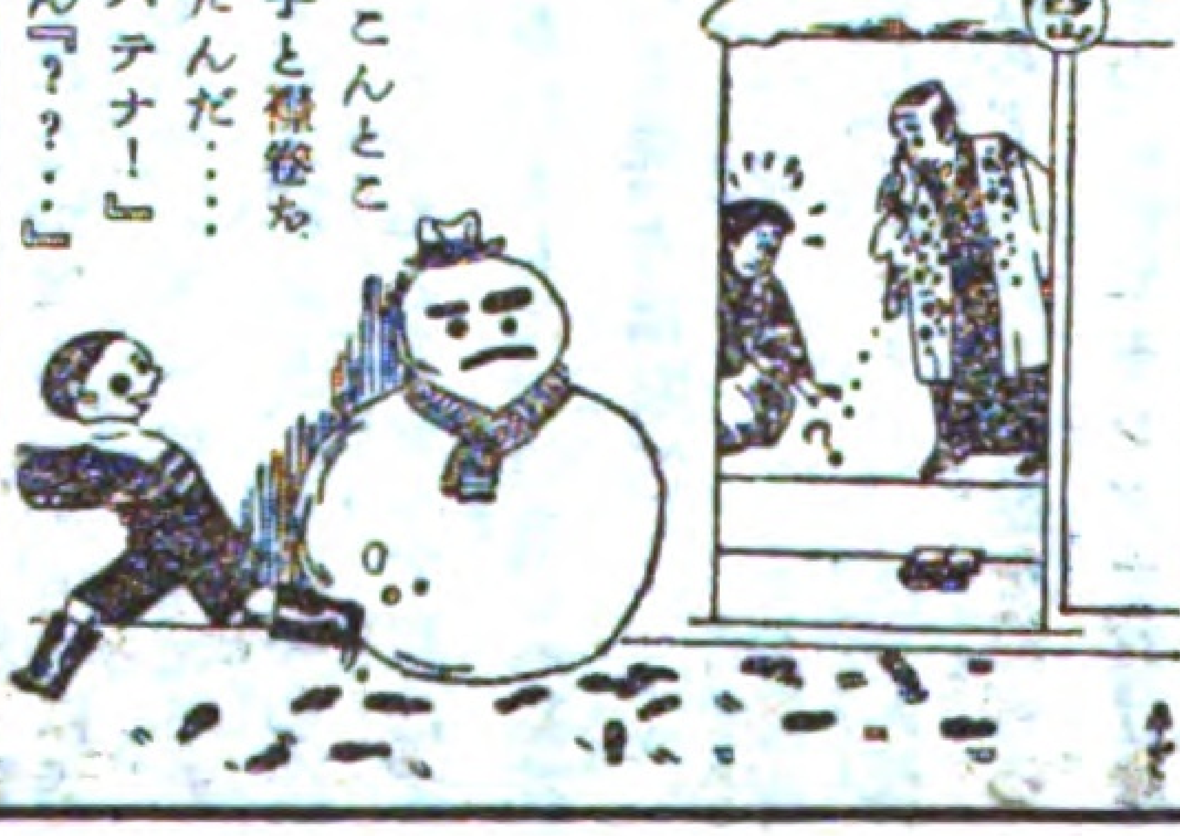
近藤勇

藤野直美



玄關先き

路尾定二



客『こゝんとこへ帽子と襟卷を置いたんだ……が…ハテナ！』

奥さん『？…？…』

ネズミトリ

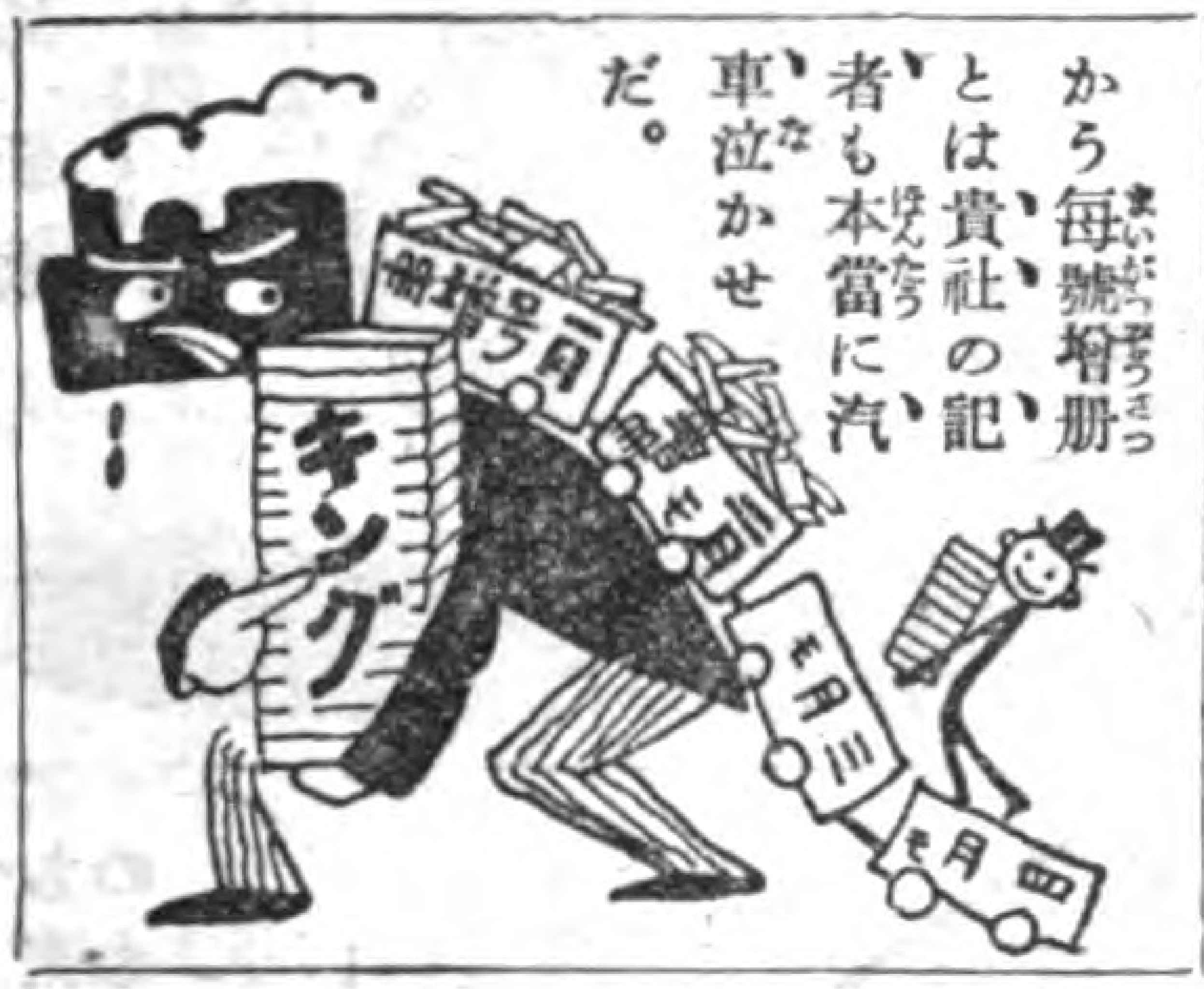
田中悟



キングポスト

□本誌の大増頁

感謝、眞に感謝！　新年號も大増刷、續いて二月號も大増刷と逐號増刷騒ぎを演じてゐる素晴しい盛況は、寔に滿天下キング黨諸賢の絶大なる御聲援に據るものであることは申すまでもないこと、只々感激の他はありません　この御恩顧に報ゆる爲、私共は日曜もなく、休日もなく、熱誠以て獅子奮迅、日夜大活動をつゞけて居りますが、愈々機熟し近く更に大増頁を敢行して彌が上にも大活躍を試みることになりました。如何なる大計畫が樹てられつゝあるか？　申上ぐる迄もなく大キングがやる事、屹度滿天下の熱狂的大歡迎をうけることうけあひ——具體的な内容はこゝには態と差控へて置きます。ぜひ刮目して御期待下さい。



□展望臺

小寺健吉畫伯の許へ知人が美事な柿を土産に持つて來られた。喜ばれたのは畫伯、知人の歸るのを待つてゐたと許り、早速柿を抱へてお母さんの許へ出掛けられた。早速と云つても夜の十二時過ぎ、もう電車が無い。大久保の宅から、お母さんの中野の宅までテクツて、深夜の門を叩いてお母さんを起された。柿が大の好物のお母さんは、併し柿の味より、堂々たる天下の畫伯になつても、相も變らぬこの孝心が喜しく、『有難う〳〵』とホロりとされたさうだ。

○

『先生、風邪を引いたんですつて？』
『君のお蔭でネ、有難い次第さ』
『君のお蔭つて？　私がどうしたんです』
『正に君のお蔭さ……燃ゆる花（三月號）に鎌倉の場面が出て來たんだ。ところが最近の鎌倉を知らんので困つた。と云つて出鱈目の繪が描けるものではない。此の寒いのに遙々出掛けて行つて、汐風に吹き晒され乍ら、數時間海岸スケッチをしてゐて到頭やられたのさ。——小早川清、繪に熱心の餘り風邪を引き込んで唸る——位ぢやキングの美談記事にはならないかネハヽヽヽ』

□局内五色譜

正月の休みを利用して伊勢神

禮讃の聲

◇拜啓　本日八日市飛行聯隊に一族の能登中尉を訪ね空中分列式を參觀しました。其の節同中隊では書籍を讀むには中隊長の許可を得ることになつてゐるが、特に許可なくして讀んでよいと指定されてゐるもの二種あり、その一つは我がキングであると知つて思はず快哉を叫びました。敬具（京都にて岡田東魚（寄稿家））

◇編輯局諸兄「キング」を毎號面白く拜見して居ります。日本人倶樂部には色々の日本雜誌を備へつけてあるのだが「キング」だけはいつも紛失して仕舞ふ。面白いので、家へ持つて歸つてゆつくり堪能しようと爭つて失敬して行つて仕舞ふからだ。繪といひ、小說といひ、記事といひ、申分ない雜誌、遙かに諸兄の御努力を感謝して居ます。（在巴里　木内克（畫伯））

◇キングでなくては夜も日も明けない理由は、——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

宮へ初詣かた〳〵關西へ旅行に出掛けたS記者、旅へ出ても本を讀みながら眠る平素の習癖から、矢張り眠る前に何か讀む本が欲しい。そこで宿屋の本を借りようとすると、どこの宿でも〳〵持つてくるものは、自分の作つたキングばかりなのに、ダアー――。

『チェッ！　何うしてからキング許りが幅を利かしてゐやがるんだい』

○

前號所載の壯烈なる拳鬪試合は近來珍らしい痛快な讀物であつたと大好評をうけたのは幸ひでした。

さて、――あの試合の日、編輯から大勢で見學に出掛けたのであつたが、皆その餘りにも悲壯凄慘なる、文字通りの血戰となるや、生命の縮む思ひに身ぶるひし乍ら怖々見てゐたやうだつたが、試合終つて會場を出ると、申合せた樣頭痛がすると頭を抱へてゐた恰好は、日頃の口八丁手八丁に似もやらぬ弱蟲揃ひ……は內密々々。

その翌朝颯爽と出社したF主任、『拳鬪は實に壯烈だネ。今朝、昨夕のあの勇ましい試合を思ひ出したものだから、糞ツ！　とばかり勇氣を奮ひ、生れて始めて冷水浴といふものをやつて見たよ、ハハ、、、、、諸君にもぜひ奬めたいネ、淸々とよい氣持になるヨ』と大氣焰。

――たゞし、それつきり冷水浴の冷の字も口に出しません。精々二日位はやつたものでせうか。

池田藤四郎氏の逝去を悼む



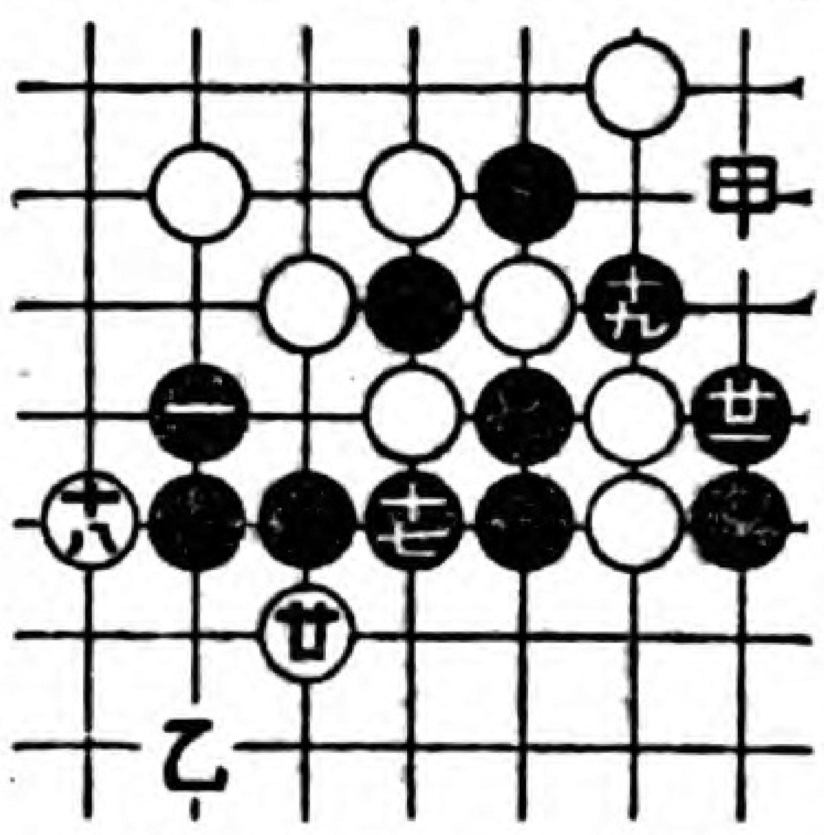
能率增進、處世成功要訣、其他各般の最新知識に關し、殆ど每號の如く本誌に寄稿せられ、讀者諸君にお馴染深かりし池田藤四郎氏は、去る十二月二十一日忽焉として逝かれました。眞に痛悼哀惜に堪へません。茲に皆樣と共に謹んで弔意を捧げ御冥福を禱りたいと存じます。隨つて本號に揭載豫定の「不景氣を追ひ拂ふ工夫」は中止の止むなきに立ち至りましたことを遺憾といたします。

□娯樂室解答（本文三九一頁）

◇詰將棋解答

二六龍、一四玉、二三銀、同馬、一五龍、同玉、二七桂、二五玉、三五角ナル、一四玉、二六桂迄

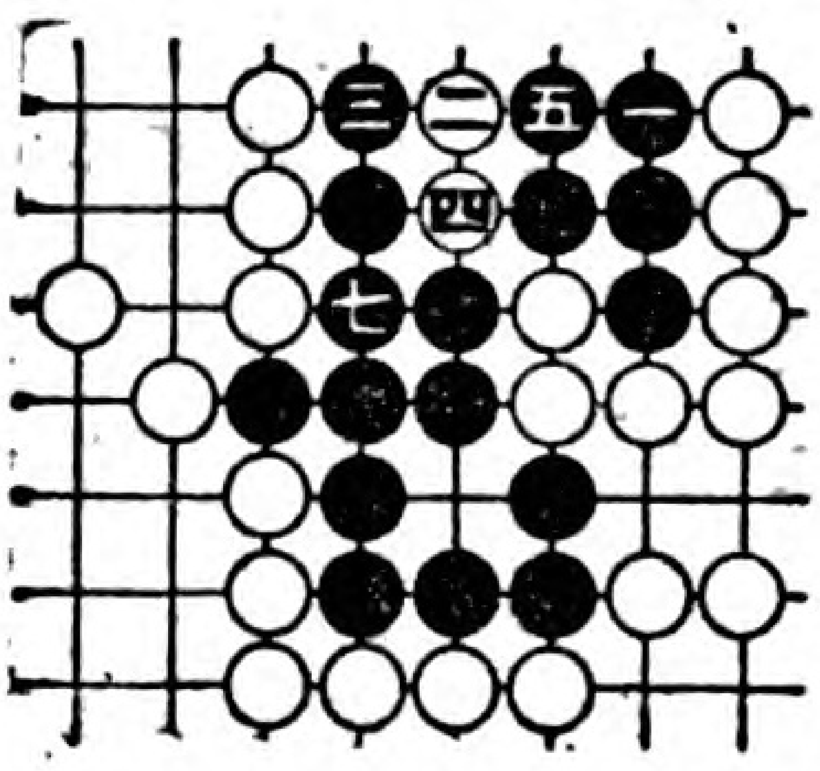
◇聯珠解答



◎黑（廿一）と引いた三聯を白がどちらを止めても次『甲』で四三勝

△變化白（廿）を（甲）に止めれば黑（廿二）を『乙』で四三勝

◇詰碁解答



黑先活

（白六）は四ノ點

（白八）は二ノ點

（黑九）は四ノ右隣ノ點ヲ切ル

一、キングは隅から隅まで面白くて爲になるものづくめだから。

一、キング一册あれば一家中大喜び大滿足する樣編輯してあるから

一、キング一册で他誌數册分に相當する程內容が豐富だから。

一、キングは損得を省ず勞費を惜まず熱誠を以て編輯してあるから。――である。（秋田市 大木爲吉）

◇東京、銀座、カフエー、ビルデング、デパート、モボ、モガ、ダンサー……とこれまでの小說は餘りにも頹廢した都會文化や、上流社會を背景としたものばかりでした。山村の自然美と純朴なる農村を背景にした堅實なる小說を書いて欲しいとの我等の願は久しいものであつた。此の時に當り野村愛正先生の「霧の中の曙」の揭載されたことは感謝せずにはゐられない而も素晴しい傑作である。我々農村青年の胸を躍動させる堪らなく面白い快作である。之を揭載したキング誌と筆者に滿腔の感謝を表するものである。（京都 樫田村 保條治一）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



生え際のムダ毛を除き襟足を美しく

女優 水谷八重子



毛髪は丁度草が生えるのと同じ様に次々に生長して來ますから剃れば剃るほど速に然も密になつて參ります。そして剃る度毎に肌を傷めたり手足、首筋等場所によつて剃る事も出來ませんから本當に困りました。でも私は日ごろ脫毛整美料として評判の「ハール」を使つて居りますが、之を用ひた後の襟足の美しさは格別で、何時でも思ふままにすぐムダ毛が取れ、その後の滑かで爽やかな氣分はほんとうに例へ様もない程です。又剃つた後の様に荒れたり毛穴の太くなる心配もなく剃刀などの及びもつかない妙味があります。御婦人の方によく見受けますのは手首や腕や襟などに澤山毛の生えてゐる方が白粉などで隱さうとなさいますがあれは反つて穢らしく見えます。

さういふ方には「ハール」は忘れてならないその惱みを救ふ唯一のものとして御勸め申上げたいと存じます。（完）

「ハール」は灰色の細い粉末で瓶入になつて居りますから御使用の際に小皿かお茶碗のカケラにでも小出しして水で煉りますと柔かいクリーム様なものが出來ますからそのまゝ脫毛したいと思ふ部分に薄く塗つて二三分後布片で拭ひ落し水で洗ひますとクッキリと麗しい地肌が現れて參ります。

それにこの「ハール」は從來の脫毛料の様に粗惡なものと異り、惡臭もなく皮膚には全然無害で少しの刺戟もなく毛の根もとから取れますからトテモさつぱりして何んとも言へない爽快さを感じます。

見るからに美しい日頃の身だしなみを思はせ心よく感ずるものは第一に御顔や襟足のスッキリと際立つて美しい事で、然も如何にも自然的で麗しさを添へるものはこの整美脫毛料ハールの役目であります、どうぞ皆樣此「ハール」に依りてより以上美しく御なり下さい。



安全無害 脫毛整美 ハール

▲ハールは塗つて三分後＝そのつけた所の無駄毛はスッカリ綺麗にとれて失ひます、ハールを御使用になれば剃る手數もなく何時もスッキリと浮き出た様な自然美が保たれます。

▲絶對無害、危險がない＝見るからに美しくお顔や襟足の無駄毛を除かれるばかりでなく剃刀の様に危險がなく皮膚も荒れず從つて丹毒の様な細菌に侵される恐れもなく、無害安心の脫毛料と大評判です。

試用分 一圓七十五錢 經濟用 參圓二十錢 送料内地十五錢 外 五十錢

發賣所 大日本雄辯會講談社代理部 東京市本鄕駒込上下町四八（振替東京六六二九）

肺結核は斷して治る!!

片野山北兩博士も根本的治療法と推奬

一記者

◇死亡者の大多數は肺病

あの恐ろしい肺病は近來愈〻猛威を振ひ最近一ヶ年の肺疾患に依る死亡總數は、實に十一萬一千餘人と言ふ驚くべき數字を示して居ります。然も之等死亡者の大多數が男女廿歳を中心としたあたら前途有望な若人が無慘にもこの病魔のために倒れて行く事を思へば、人としてこれ以上の不幸はありません。

◇世界唯一ツの肺病療法

飯田病院長ドクトル飯田左三先生はかつて獨逸及英國に留學中、當時英米專門諸大家に依つて、硫化アルリールが肺疾患に卓越した効力あるを證明せられ、世界の治療界は等しく之に注目させられたのであります。即ち吾が飯田先生は深く之に期する處があり大正三年獨逸より歸朝以來實に十數年更に專門に苦心研究の結果遂に獨特の操作により治肺に確効ある内服榮養劑たる**アールス**の創見に成功いたしました。然も硫化アルリール製劑としてアールスの完成は實に之を以て世界嚆矢とし等しく各國大醫家も驚嘆激賞する處でありました。而して氏は漸くにして完成し得たる右新劑を更に自家病院に於て、

◇二百八十餘名に臨床實驗

の結果實に驚くべき、治効率を得愈〻大確信を以て廣く滿天下の病患者にすゝむる事になりました。

日本醫學士大口眞純氏の臨床實驗によりますと、「本劑を一期間連續服用せしめたる患者の喀痰を採り之を檢鏡すれば結核菌は悉く斷裂狀となりて死滅せるを見る」と、斯様に菌膜に直接作用して偉大なる透過力は見事に細胞組織を破壞しその目的を十分に達し得るものは實に**アールス**の獨特の作用であり又結核菌死滅の強力な證左であります。

◇アールスの有効なる理由

アールスは服用して胃腸より吸收せられ血液中に混入して全身を運行中徐々肺細胞より排出せらるゝ際に特異の殺菌力を發揮し菌膜を滲透して菌體に直接作用して發育を制止し死滅せしむる大効があります。

即ち全身の榮養を十分補足すると同時にこの特質的強力作用ある**アールス**を内服すれば如上の經過にて二期三期と言へども容易に治癒する事も決して至難ではなくなりました。

世に多く最良藥の如く廣告しあるものも少なからざるを、それ等が果してどれ丈けの効力あるかは、今更彼之言ふまでもなく皆に於てよく御承知の事と存じます。全く廣告文句よりもその質に於て初めて信頼も出來御喜びも頂ける事でありませう。

今日まで醫者よ藥よ自然療法よとあらゆる事に手を盡して寸効もない方も、是非一度お試み下さる事は決して無意味ではありますまい切に御試用を御奬め申上げます。

アールス御希望の方は本社代理部で御取次します。價は三〇〇粒入六圓、六〇〇粒入十一圓、千粒入十五圓、送料、内地三十錢、領土五十錢尙御申込次第實驗報告說明書も差上げます。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



喘息病の征服に

既に定評ある 喘息エキス

五年十年の慢性痼疾も夢の樣にケロリと鎭り、發作の前兆ある時用ふれば奇妙に豫防出來る。

◇效力注射以上と實驗者悉く驚嘆感謝!!

最早大衆的合格品

「喘息エキス」が本社の雜誌に發表されてから早くも六ケ年の時日を經過しました。その間絶えず實驗成績を報道し絶對確信をもつて御推奬して參りました。事實『喘息エキス』は他の一時的の頓挫藥や一時は押へる事は出來ても習慣性になる類のものとは、全然その性質を異にし頗に效力の著しい事から喘息藥中随一の名聲を博し、其の愛用者は全國津々浦々にまで及び最早社會的試驗の合格品であります。

熊九州日日新聞記者古賀誠一氏は十數年來難治の猛烈な喘息持ちで醫者も藥もないと諦めて居た程でしたが、本社の喘息エキスを試みられてから全く絶縁して、今では喘息のぜの字もなくなり煙草も酒も平氣で飲めるしマラソン選手そつちのけの健康になつたと心から感謝を寄せられて居ります。又澁澤子爵堀内中將閣下を始め、その他知名の士にこの『喘息エキス』を愛用されて居る方も少くありません。

百餘本の注射も今は夢

千葉縣の渡邊某氏は書を寄せてアドリナリン注射を百五本も要せしものが本劑を用ひ始めて以來忘れた樣に治つたと御通知がありました。又殆ど横に臥して寢る事を得なかつた愛知縣小坂井町市川氏はわざ〳〵來社され本劑により今や全く喘息の征服が出來たと禮を述べられました。

面白い程よくとれる

捕鳥用具

―我が國特有のカスミ網―

△一擧に數十羽以上樂々とれる

△用法が頗る簡單で取扱ひ輕便



圖の樣に張つて置くだけで、雀、アフジ、頰白、目白、鶯、ノジコ、其の他同類の小鳥が、面白い程よく捕れる、手數がかゝらず取扱ひが簡單で鉄砲の樣に面倒がないから、都市の庭園内でも自由に使用することが出來ます。細い絹絲で編んだもの故、疊めば六間の網でもポケットへ入る位の輕量になりますから携帶にも誠に輕便であります。獵期が來ました、早速お試し下さい。

定價	
長さ三間(高さ六尺)	四圓五十錢
長さ六間(高さ六尺)	八圓八十錢

送料	
內地	拾五錢
領土	五拾錢

東京市本郷區駒込坂下町 講談社代理部 振替口座東京六六二九番

申込次第說明書進呈

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

死を覺悟した患者が

茨城縣片根氏は從來如何なる方法も奏効せず絕望の餘り、本劑を試みる最後のものとし若しそれで効果のない時には死を覺悟せる旨深刻な書に接しましたが幸ひ本社の送藥が著効を奏し、今では酒を吞んでも發病せず全快同樣との感謝狀に接しました。

廣島市の安宅某氏は三十餘年間の慢性喘息で廣島市中の殆ど名醫及び大學醫科で治療を受けたが終熄せず、閉口してをりました處本劑により昨冬より全然發作を見ないとの御手紙を頂きました。

報告者總數百三十一名中

尚最近(本年八月中)本劑製造元に寄せられた愛用者からの御報告は、次の如く異常の成績を擧げてをります。

▽喘息エキスにより著しき輕快者……二四
▽使用以來發作せずと云ふ者……一五
▽全治と報告ありし者……七
▽相當効果あり愛用すといふ者……七八
▽不變若しくは無効といふ者……七

合計百三十一人でありますが、喘息エキス數萬の愛用者を思へば更に〳〵、どれだけの全快輕快者を出してゐるか分りませぬ。

喘息エキスの効く理由

前記のやうな好成績は、從來の喘息藥に徵すれば實に異數と云はねばなりませぬ。これは本劑が最も喘息の病理に適合してゐる實證に他なりませぬ。

由來喘息(氣管支喘息)は氣管支筋に於ける發作性の痙攣でありまして、素人が考へてゐるやうに決して咳嗽の病ではないのであります。故に舊式の所謂たんせき喘息の藥の類では、浴びる程服んでも激烈な發作を鎭靜せしめる効力はないのであります。然るにこのエキスは直接喘息の本體たる氣管支筋の痙攣を鎭靜消失せしむる新製劑でありますから猛烈な發作が起つて息苦しくなつた場合この喘息エキスを一匙か二匙服みますと不思議や大抵は大風が凪いだ樣にケロリと治り、又發作の前兆ある時に服用すれば奇妙にその苦しみを避けて了ひます。

その効果は實に覿面服用後直に顯著的に現れ同時に喘息原因である處の氣管支攣縮に直接作用して之を鎭靜せしめますから所謂根本的治療を促進させる事になります。

喘息治療の秘訣

要するに喘息根治の秘訣は輕い中に治療することであつて少しでも發作の氣味があつたら一刻も早く猶豫せずこの喘息エキスを御用ひになり發作を押へ〳〵して行く內に何時か忘れる樣になり根治させることが出來ます。

『喘息エキス』試用分一圓卅錢 三十回分貳圓五拾錢 六十回分四圓八拾錢 百回分七圓 送料內地拾五錢鮮臺拾五錢 東京市本鄕區駒込坂下町四八講談社代理部(振替東京六六二九番)で發賣。各地有名藥店にもあります。

ニキビ、ハタケに
ピヨニーを推奬

醫學士 櫻田十次郎

ピヨニーはニキビとハタケに中々よく效きます。從來ニキビ治療藥として使用されてゐたクンメルフエルトの如き黄硫そのものでなく、額のあれなど絕對にないばかりか、白粉をつけて居る人でも普通の黄硫劑の樣に、黒くならない點はピヨニーの最も誇りとすべきところで非常に結構に思ひます。

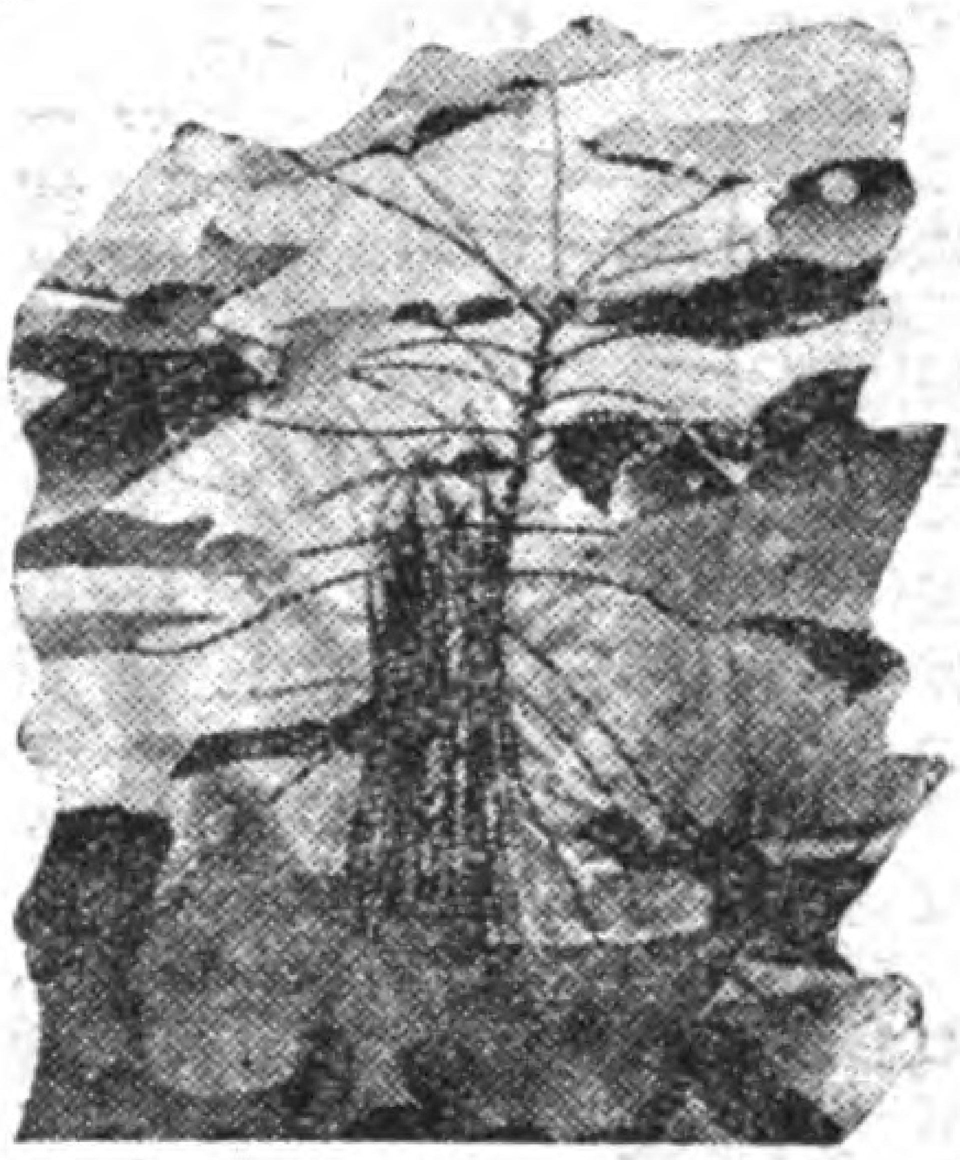
◇近頃子供に流行してゐるハタケには實によく效くので驚きました。と申されて居ります。

つまりニキビハタケを始め顔面の吹出物の治療の理想的な療法としては先づ第一に絕對に刺戟性のないもので然も吸收し易く殺菌力を有するものでなければあの難治なニキビハタケを癒すことは出來ないのであります。

◇處が今回醫學士青柳光遠先生が永年專門的に御研究の結果遂ひに創製された藥用ピヨニー(實費八十錢、送料十五錢)は無色無臭の透明な水液で幾らつけても決して皮膚に刺戟などないばかりか、何時に白粉下に用ひましても全く理想的で、從來の如何なる藥品にも見られない驚くべき治效は今日まで多數の實驗の賞讚辭によつても立證されて。

◇醫家も皆一應に感嘆激賞されて居ります。實にこのピヨニーを僅かに數回使用した丈であの苦しかつたニキビハタケも拭つた樣に全治した報告はザラにある事で、東京市內各小學校など見ても兒童のハタケ治療のために盛に使用され東京市囑託の醫學博士岡田道一先生も非常に御賞めになられて居ります。ニキビハタケは勿論その他顔面皮膚病で御困りの方は是非御試み下さい。特に御希望者には本社代理部(振替東京六六二九)で御取次も致します。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



支那産の木さゝげ

腎臟病、尿毒症に 素晴しくよく効く 支那天然産「木さゝげ」に就いて

皇漢藥堂　栗原廣三

◇知らぬ間に犯される

醫學が進歩しない頃は全身の浮腫や血色の惡い樣な、俗にじり／＼と衰弱する病氣は總體的にただ水氣黄疸など謂うて何等適確なる治療法を講ぜず、往々にして治療の機を逸し遂にどうすることも出來ない重體に陥つたものが多かつたのであります。

元來腎臟炎の徴候としては全身の浮腫と尿中の蛋白を見る位の極めて自覺症狀の緩慢なる爲めに、現在自分がこの病氣に罹つて居りながら一寸氣付かぬと言ふのが此の腎臟病の特徴で、それと知らず保險などに加入しようとして、保險醫から發見される例も澤山あると言つた程度で、既に自分に氣が付いた頃は心臟も血管も犯されて、頭痛や眩暈がしてくる、それ故若し身體に浮腫が來たとか、殊に顔面にむくみがあるときは、體内の鹽分の排泄が妨げられてゐる證據で、之を放任しておきますとあの恐るべき尿毒症に罹る事になります。

斯樣なわけで腎臟病は初期に於て最も完全なる處理方法を講ずる事を第一といたしますがその治療手段として腎臟の排泄機能を高めること血壓をなるべく低くすることで尚心臟を強壯にし、腎臟に迷惑をかける樣な肉類や鹽辛きものを喰べないことが大本でありまして、つまり腎臟に刺戟を與へないで而も腎臟の働きを完全にする適當な藥劑を求むると言ふことが治療の大眼目であります。

◇天然藥きさゝげの特效

然るに從來の腎臟藥の多くは所謂利尿作用をのみ專門として且つそれが化學藥であるため、時に依つては却つて腎臟機能に障害を起す事さへもあり、その他西瓜や商陸などいろいろ民間藥草も用ひられましたが、それもかの萎縮腎の如き腎臟機能の變化に際しては有害とならぬとも限らぬので、あらゆる臨床醫家がこの無刺戟性利尿劑の搜索發見に腐心しつつあつたのでありましたが、先頃計らずも支那湖北の山中に自生する「きさゝげ」が偉大なる效果のあることが判明し、已に今日まで多數醫家の實驗に據りますと、

『きさゝげは單味で顯著しい腎臟機能促進劑なり且ついろ／＼腎臟内の尿毒を一掃し而して何等の副作用がないから久しく連用しても差支へない』と言ふ結論に達し只今

では唯一優良な腎臟藥として安心して皆様に御紹介出來る樣になりました。

かつてこの「きさゝげ」が腎臟炎に特效ある事に就いては、三宅花園夫人、三宅やす子夫人によつて雜誌「女性日本人」誌上にその詳細が發表された事もありますが、其後今日まで多數實驗者の報告を綜合しますと、

◇『きさゝげ』は尿毒を起す虞れある患者に對して極めて快適なる利尿作用を爲すが爲めに大いに良好である。

◇『きさゝげ』は蛋白尿を排除するのみならず其の分解産物を一掃するから心臟の故障を未然に防止する。

◇『きさゝげ』は身體組織内に滯溜する水腫をとるから血管壁の硬化を豫防する等。

斯樣な藥理的作用が實驗の結果一々適確に證明されて參りました。

『きさゝげ』は漢名を梓と言ひ支那湖北省に產する落葉喬木で七月頃淡黃色唇形の花を開き九月頃に長さ約三十センチメートル位の頗るさゝげによく似た莢に實を結びます。この實を凡そ二匁乃至三匁位水三合に煎じて約半分迄に煮つめこれを一日の服量となすのでありますが、これを用ひると大熱を發して百分の幾何と言ふ程尿中に蛋白が增加した樣な腎臟でも直ちに熱が下り、千分の幾つといふ位に蛋白も減じ、やがて徐々に恢復といふ事になるのであります。然しこの場合一種の苦味があつて服用し難い時はもろこしの實又黑豆を炒つて混じて煎じると苦味もとれ珈琲の樣な味になります。即ちこの「きさゝげ」が腎臟炎に卓效あることが一度世上に傳りました處、各階級を通じて實用され、然も無刺戟性でどなたにも用ひられ、その效驗は次から次へと偉い評判となりました。

『きさゝげ』に就て　記者

『きさゝげ』の效果が單に評判のみでなく實際に顯著であらゆる他の藥劑より遙に優れた效力を認められ近來續々要求される向が御座いますが、これは年中限りなく有ると言ふものではないのでこの時機を外すと又遺憾ながら御斷りする事が出來なくなりますが漸く採取期に入り精選したるものを幾分手に入れることが出來る樣になりましたから御入用の方は賣り切れぬ内至急御申込み下さいませ、價は一包(約一ヶ月分)一圓二十錢で、送料内地十二錢領土四十五錢です。
御申込みは東京市本郷區駒込坂下町大日本雄辯會代理部(振替東京六六二九番)へ

本社特選化粧品案内

レモンの精からとつた　レモン水クリーム
レモンの精ですから單純な化學的化粧水等と異り眞から色を白く肌を軟かにキメを細かにそしてどんな人にもシツクリ合ふ氣持よい化粧水男の髯剃後にも結構です　一瓶壹圓　送料十二錢

常に美しく永遠に若い　ベラミーAとB
Aは藥や化粧品で一向効果ない頑固なソバカスシミや汚れに用ひて不思議にキレイに美しくなります Bは大ジワ小ジワチリメンジワなど何時かキレイに消へてヒフを若々しく美しくするに特効します　各一瓶一圓送料内地十二錢　領土五十錢

日本人の肌に最もよい　古代あづき洗粉
日本人の肌に最もよい純小豆洗粉に硼砂過酸化水素それに十三種の香料や美顏料を加へた理想的アヅキ洗粉です御愛用下さい　德用袋卅五錢　送料四錢　德用罐五十錢　送料十五錢

眉毛 毛 新激發藥　アイビュー
新輸入のアイビューは眉毛睫毛を[illegible]にしてその伸長を促進し薄い眉毛も實によく濃くなつて參ります　美と愛に輝く憧れの女性の愛好品一瓶一圓五十錢　送料十二錢　領土五十錢

本社特選 富士美　ニキビ取り美粧水
これはクンメンフエルト液を主劑に更に二三種特殊高級劑を配合して精製されたもので之ならどんなヒドイニキビでもあとかたもなく取れて失ひます　一瓶七十錢　送料十二錢
右は本社代理部で取扱ひます　振替東京六六二九番

醫師も驚いた温灸の効め

靜岡縣熱海町　農學士　駒井德三

三月廿日突然發熱し二週間の間三十九度より四十度の間を前後し醫師は腸チフスならんと言ふ、下痢と發熱の爲め衰弱甚しく忽ちの中に體量は十六貫五百から十三貫餘に激減して失つた。

偶々東京日々新聞記者鈴木茂三郎君來訪せられ、温灸の効力偉大なる事を自己の體驗より詳述して切りと勸められた。余も講談社の雜誌等にて承知せるに依り直ちに注文温灸治療を試むるや兩三日にして不思議にも空腹を感じ食慾を生じたるまゝに今までの粥食を廢して、思切つて平常食とせるに、三食は勿論食間も空腹を覺える樣になり、寢前の食餌も翌朝は完全に消化され、朝食を攝るに何等の支障なく誠に不思議の感あり、しかも一方體量は温灸治療前十三貫五百目のものが僅か三週間にして十五貫二百目となり醫師も其の効力の偉大なるに驚き居れり。

余は最初温灸を初めんとする頃其の効力に大分疑ひを持ち居りし醫師も今日にては其の偉大なる効果を確信し最近にて自ら余の温灸器を借り行きて使用するに至りたるなど愉快に堪へざる處なり。

名士とラヂウム温灸

近來政界財界の名士間にラヂウム温灸の流行は素晴しいもので東都中心丸ノ內邊の官廳大會社などでは一社數十名の温灸黨がある程で、試用者が悉く驚喜感謝して居ります。

◇村山氏談　前商相中橋閣下曰く『永年不治の胃腸病がラヂウム温灸で全快、諸名士達にも勸めた處皆よく効くのに驚いて居る、まあ僞されたと思つて君使つて見給へ』と。

◇谷村大佐談　島村閣下邸で推奬のラヂウム温灸の効、瀨中將閣下も用ひた處身動きも出來ぬ程衰弱した胃腸病が恢復元氣となり外出も出來る樣になつたので僕も實行中だ。

醫學者の證明と推奬

名古屋博士曰く＝ラヂウム温灸器を實驗して見たが婦人病や神經痛等にも卓効がある實によいものを發明した。

岸本博士曰く＝唯一回にて容態に著明の變化を來し腹痛も輕減して夜間の苦惱を減じたるは確かに顯著なる効驗と存候（體驗）

藤卷博士曰く＝多數の患者に使用實驗の効力顯著なる事を認め敢て一般に推奬に價するを信ず。

西田博士曰く＝使用實驗の結果諸種の內科的疾患に有効にして殊に胃腸病に効力顯著なり。

佐藤醫學士曰く＝親しく小生自身の胃アトニー症に使用せしに偉効あるを確認せしを以つて多數の患者に使用し胃腸疾患に卓効を認む。

尚この外阿部博士外三十餘名の醫學大家又諸先生達が證明又は推奬しその實證効力は今や日本全國は勿論遠く海外に居らるゝ多數の醫家が直接患者に使用しその驚くべき効能を立證されて居られます。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

記者附記

ラヂウム溫灸治療器の胃腸病征服の偉力は全く驚くべきもので、玆に發表の五十日に五貫肥つた中央大學の與村氏の外にも、白山自動車會社の佐伯氏の三十五日目に三貫五百匁肥り、帝大の三木三郎氏の七日間に一貫匁以上肥り、其他驚嘆すべき例は實に枚擧に遑ない程であります、しかも之等の方々が悉く永年の慢性胃腸病に苦しめられ粥も消化出來ぬ人々であるから更に驚かざるを得ません。尚最近の實例を列記するならば、

皆川幸三郎氏	（宮城）	六十日間に	七貫匁	増加
柏木千代子様	（盤谷）	九十日間に	六貫匁	〃
赤羽文緒様	（大連）	百五十日間	四貫五百匁	
田原直見氏	（山口）	六十日間に	四貫匁	増加
及川伊佐吉氏	（臺灣）	九十八日間	四貫匁	〃
小笠原原鶴氏	（島根）	百二十日間	四貫匁	〃
平沼謙吉氏	（千葉）	百五十日間	三貫五百匁	
杉山可勝氏	（千葉）	百五十日間	三貫二百匁	
野瀬常次氏	（東京）	六十日間に	三貫匁	増加
飯井酒造藏氏	（横濱）	五十日間に	二貫九百匁	
猪又八重吉氏	（福島）	七十日間に	二貫四百匁	

右の外數百名の驚く可き體重增加例あり省略

ラヂウム溫灸器とはどんなものか！

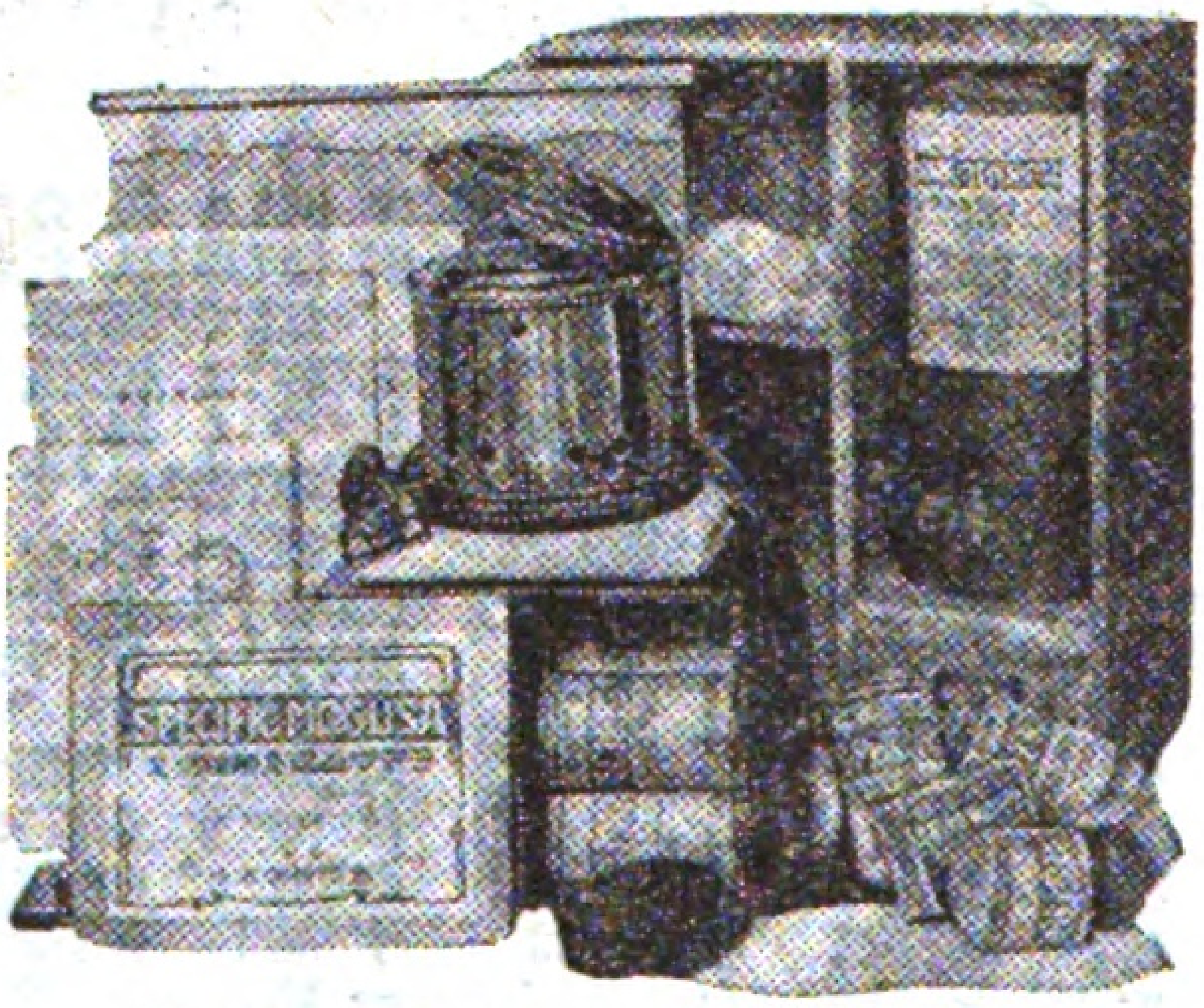
近來愈よ驚異的卓効を示して現代醫學界の注目の焦點となり胃腸病者の渇仰救世主の如きラヂウム溫灸器とはどんなものか！

古來我國に於て腹痛と下痢止の秘法として不思議の靈効を傳へられて居る臍部の灸療法に就いて、東京理學療院長河野先生が苦心永年御研究の結果遂ひにその原理を極め胃腸機能の眞理に結合し更に最近化學を應用して完成し得た専賣特許治療器であります。

手經て便利で即座に効く

この溫灸器は極めて完全な治療器で家庭に居ながら容易く使用する事が出來、この恩惠に浴する事が出來ます、尚溫灸が胃腸病に奏効する事前述の通りでありますが、その治療範圍も極めて廣く特に今日まで目立つて好成績なのは冷え症、婦人病、不眠症、消化不良神經痛、痔疾、肩のこり、腰痛等で中でも婦人病、冷え症等は殆んど百人が百人折紙付即効と申して過言ではありませぬ。

元來溫灸はその主効精分か艾の神秘的な奏効力ですから、昨今ありふれた科學的配台藥などとは全然その根據を異にし一度御使用になれば速く解る事で絶對に有効無害、然も御家庭で毎日僅かに一時間乃至二時間の治療で十分ですから頗る經濟で至極重寶、又使用上には少しの面倒があるわけでもありませんから誰様も今速くこの場所でその絶大な効果に浴する事が出來ます。



特製ラヂウム溫灸器一揃

尚本溫灸器に就いてのお尋ねは返信料添へ本社代理部氣附河野義宛に御願ひ申上げます

胃腸病及虚弱者の體質改造に折紙付

醫學博士　藤卷先生實驗推奬
醫學博士　西田先生實驗證明
醫學博士　重田先生責任推奬
醫學大家　三十餘名推奬證明

ラヂウム溫灸治療器

専賣特許
英米既願
新案特許
意匠登錄
商標登錄

特長

熱くなく・痕つかず
家庭的で・危險なし
無煙式で・便利經濟
優美堅牢・價格低廉
卓効試驗・世界第一

ハガキで申込次第百卅頁の
說明書實驗錄進呈

定價表

藥及特效艾五週間付
上製桐箱人一揃　十三圓
荷造送料　内地八十錢　領土一圓
補給用藥及艾五週間分　三圓五十錢
荷造送料　内地三十錢　領土六十錢

尚神經痛痔肩のこり其他慢性諸病の局所用としては至極簡便な特製藥中用があります
藥及艾五週間付桐箱入一揃定價十圓
荷造送料　内地八十錢　領土一圓
補給用藥及艾五週間分　二圓七十錢
送料　内地三十錢　海外六十錢

發賣元
東京本鄕區駒込坂下町四八
大日本雄辯會代理部
（振替口座東京六六二九番）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大發展の四月號

△讀者諸君‖午歳に入つてキングの大飛躍は、實に天馬空を往くの槪があります。新年號のあの大部數も忽ちにして賣切れ、重版又重版の大盛況でありましたが、二月號も亦々注文殺到、大增刷を餘儀なくされました。實に素晴らしい賣行です。此の分では恐らく三月號も忽ち賣切となる事と信じます。

△讀者諸君‖斯くの如く、滿天下の支持を受けてゐる吾々は、非常の心强さを感じてゐます。編輯局一同は諸君の御熱援に報ゆるため、來る四月號に於て頁數の大增加を斷行する事に致しました。

△讀者諸君‖四月號は別項豫告の通り、編輯局總動員にて新時代の立身出世繁榮に關する大特輯をいたします。金玉の如く優れた內容？　これこそ男も女も大人も子供も萬人必讀の大文字です。

△讀者諸君‖更に此の外連載小說の益々佳境に入る事は勿論、親鸞上人、探偵實話、天覽試合、笑ひの寶庫面白天國、偉人と偉人の會見記、奇拔な東西文化珍風景等々、どれもこれも面白い粒選りの傑作揃ひ。どうぞ刮目してお待ち下さい。

四月號は三月五日發賣！

御注文の仕方

○本社發行の書籍雜誌は、お近くの書店でお求め下さい。若し品切で御手に入らぬ時、又は近くに書店のない方は、直接本社へ御注文下さい。

○本社への御注文は前金に限ります。

○御送金は振替貯金が一番安全で且送金代が安くすみます。振替貯金の用紙は郵便局にあります。その使ひ方も局でよく敎へてくれます。

○郵便爲替や郵便切手代用でも結構ですが、郵便切手代用の時は必ず一割增に願ひます。

○爲替や切手を封入した郵便物は、ぜひ書留郵便に願ひます。

○代金引替と集金郵便は一切扱ひません。

○御注文書には必ず書籍名なり雜誌なら雜誌名と何月號からといふ事をハッキリお書き下さい。

○御住所と御名前とは、ぜひ楷書で願ひます。

○御注文は大日本雄辯會講談社營業部宛に願ひます。振替口座は東京三九三〇番です。

○代理部への御注文は大日本雄辯會講談社代理部宛に願ひます。代理部の振替口座は東京六六二九番です。

○本誌へ廣告掲載御希望の方は大日本雄辯會講談社廣告部宛御照會下されば、詳細御報知御相談に應じます。

定價表

冊數	國內及滿洲支那（送料共）	諸外國（送料共）
一冊	金五拾參錢五厘	金六拾八錢
三冊	金壹圓五拾錢	金壹圓九拾五錢
六冊	金貳圓九拾四錢	金參圓八拾四錢
十二冊	金五圓六拾四錢	金七圓四拾四錢

◎特大號で定價を上げた場合は、その增した分だけ右表の外に頂くことになります。但し前金にて數ケ月分お拂込の方は、そのお預り金の中より差引計算致しますから、其の都度御送金には及びません。

昭和五年二月三日印刷納本
昭和五年三月一日發行　第六卷第三號

毎月一回　一日發行

編輯兼發行人　淵田忠良
印刷人　中田福造
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍

東京市本鄕區駒込坂下町四十八番地
發行所　大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇
電話小石川 [illegible]

元取次店　東京堂・東海堂・北隆館・大東館

禁複製

本誌に掲載せるものは、一切これを無斷にて轉載し、又は單行本に上梓し、或は脚色・上演・映畫撮影その他の複製行爲をなす事を禁ず。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

整腸 健胃 驅蟲 淨血

にんにく丸

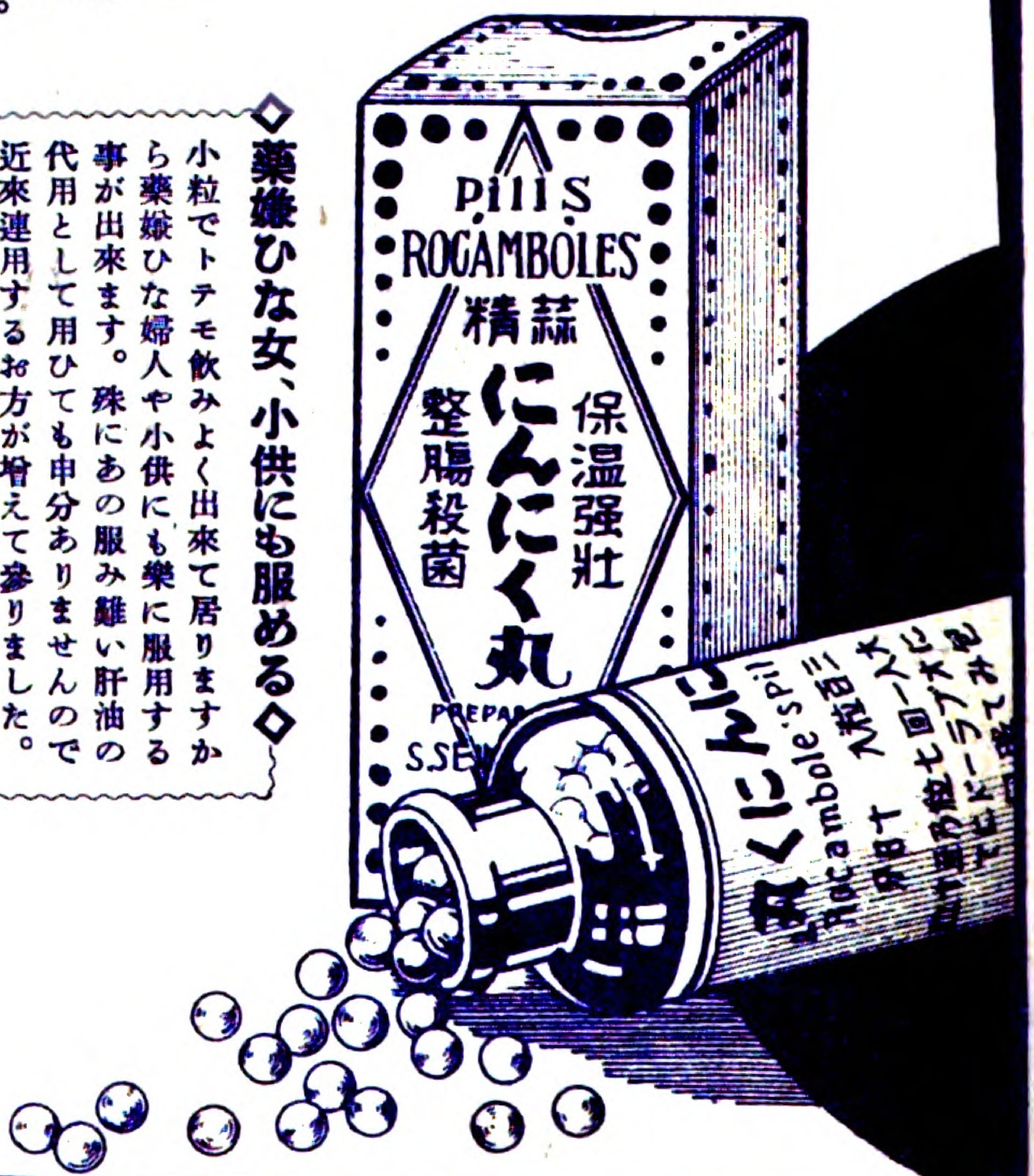
◇…にんにく藥草から生れたにんにく丸
◇…惡臭もなく誰にも容易に飲める丸藥

平常の健康は健胃から！

急慢性の胃腸病、肺病患者への福音

にんにく藥草が非常な殺菌力を持ち、**肺・肋膜慢急性の胃腸病、その他一般の虚弱體質、殊に胃弱・下痢・貧血性・流行病**等に驚くべき効驗がある事は古來から言ひ傳へられて居ます。左程諸病に卓効ある藥草が、どうして萬人に常用されなかつたか？ それは一口に、**にんにく**臭いといふ異臭の爲めで、假りに生の儘嚥下しますと何時までも强烈なあの惡臭を口中から發しますので、社交上にも對談の際にも或は家庭生活の上にも相手に忌み嫌はれるものでした。

然し喜しい事には『**にんにく丸**』は今までの**にんにく**臭いといふ言葉を打ち消し惡感を去つて然も胃腸を整へ、精力を增進し呼吸器病には無類の効果を得て居ります。



◇藥嫌ひな女、小供にも服める◇

小粒でトテモ飲みよく出來て居りますから藥嫌ひな婦人や小供にも樂に服用する事が出來ます。殊にあの服み難い肝油の代用として用ひても申分ありませんので近來連用するお方が增えて參りました。どなたも必ず御試し下さい。

價 三百粒入 一圓七十錢 九百粒入 四圓五十錢
送料 内地 十五錢 領土 五十錢

發賣元 大日本雄辯會講談社代理部
代理店 大木・玉置・福井・中田

＝全國有名藥店にて販賣して居ます＝

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

KING.
Published monthly by the Dai Nippon Yubenkai Kodansha, Tokio, Japan.
Entered as second class mail matter at the P. O. at Los Angeles, Cal., U. S. A.
大正十三年十一月二十日第三種郵便物認可　昭和五年二月三日印刷納本　昭和五年三月一日發行（毎月一回一日發行）
キング　第六卷　第三號

v.6, no.3 Mar. 1930
152
273
8853



肌色美顔水

▲微妙な作用ある…最も進歩した水白粉

色の白くない方
アブラ性の方に
特に適する白粉

不思議にキヂから白い様な美しいお化粧が出來ます。

ニキビ、吹出物に…
にきびとり美顔水

色の白くない方 アブラ性の方の お化粧の秘訣！

色の白くない方は普通の眞白な白粉では地肌が浮き出たり鼠色になつたりしてお化粧がワザとらしくなりやすく、またアブラ性の方は脂肪がわる光りするためにお化粧が不自然になつてお困りになるものですが、かういふ方々は今評判の肌色美顔水をお用ひになれば右の様な心配が少しもなく、この水白粉獨特の微妙な作用で不思議にキヂから白い様な美しいお化粧が出來ますので大へん喜ばれてゐます。まだの方はぜひ一度お試し下さい、これ迄にない美しいお化粧がきつとお出來になります。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN